
魔法使い時々錬金術師のち鍛冶師（仮）

セイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使い時々錬金術師のち鍛冶師（仮）

【Nコード】

N5316W

【作者名】

セイ

【あらすじ】

乗っていたフェリーから転落により死亡。

元々リアルラックが著しく欠如していたため、

死亡の原因が手違いらしかったのでテンプレよろしくなりゆきで転生

ロリ神様に主人公が依頼したのは以前使っていたVRMMOの…キヤラだけを利用した別のファンタジー世界。

剣あり、魔法あり、魔王もいるよ?!

元々の世界の知識と手に入れたチート能力で目指すは…お気楽

店員？

やる気のなさげな主人公とその周りの人間の適当な物語。…になる
予定

バトル要素は薄めです。今後入るかもしれませんが。

チート主人公が苦手な場合はご注意ください。

よくあるプロローグ。または第0話

よくあるプロローグ。または第0話

いつだって俺はついていない。

昔からそうだった。

一番最初に思い出せるのは、幼稚園の頃。

人並みに初恋だった幼稚園の先生がある日突然寿退職した。

それくらいならほろ苦い初恋の思い出程度ですんだらう。

けど、それが自分のだいつ嫌いな近所の変なおっさんで、1年後には離婚した。

まあ、それはいい。幼稚園の頃の思い出なんてろくなものはないわけだし。

小学生になり、頻度は上がった。毎日の如く怪我はするし、物はなくす。

好きな女の子が出来たと思えば、ダチと出来てるのは日常茶飯事。行事ごとは面倒な事前の準備はさせられるもの、当日は体調を崩したり怪我で参加できず。

卒業式に至っては、参加は出来たものの途中でぶっ倒れる始末。

中学高校に至っては。止めておこう、多すぎて思い出すのもたらい。

とにかく、俺はついていない。

今、海風に1人で吹かれているのもその証拠だらう。

別に家族や友達がいらないわけじゃない。ただついていなかっただけだ。

「お前、今年はまだ予定入れてると思ったから誘ってなかったんだ

けど。悪い、もうチケット取っちゃった」とは悪友の話。その後すぐに行き先を確認すると、向こう1カ月空きはないらしい。

「兄さん今年こそ友達と遊びに行くって言ってたでしょ。だから気を利かせて兄さん除いて組んだのに」と、中二の弟が言う時点で終わった。一応、確認はしたがこっちは3ヶ月待ち。どうやら人気の旅行パックを随分前に予約していたらしい。普段なら旅行なんて家族の車でしか行かないくせに。

高校最後の夏休みだって言うのに1人で家でゲーム三昧なんて残念すぎる！

だから、最安値で遠くまで行ける旅行をムシヤクシヤして探した。普段ならどこに行くのも細心の注意を払い、時間を掛けてゆつくと検討する俺が、自分の体質すら忘れて、ノリだけで決めてしまった。

その結果が、これだ。

「……ほんと、ついてねーな」

これだったら、家で1人寂しくゲームでもしておくだった。

「いや、船が陸を離れた時点で気づいてはいたんだけどさ」

とはいえ、ここまで天候が荒れるなんて、聞いてねえよ！ 普通こんな荒れる海に客船なんて出さないだろ！

そう叫びたい気分だ。甲板には誰も居ないから言っても仕方ないが。というか、いつまで俺はここに居るつもりなんだろう。

大しけ、とでも言えばいいのだろうか？ 風は小さな子供くらいなら平気で飛ばせそうなほど強い。波も台風がやってきた時にしか見ないような荒れっぷりだ。

流石に、海に落ちたらやばい。

さて、そろそろ部屋に戻るか。入ってきた鋼鉄製のドアのノブを回す。……おいおい、いつからドアは一方通行になったんだ？ 普通、ドアのノブは外れないだろ？

むりやりくつつけてガチャガチャ回しても、意味がない。むしろ、ゴリゴリとドアが削れる音がする始末。

……こりゃ、詰んだな。何だよ、たまに1人で遊びに行っただけでどうしてこうなりやがる。

いや、1人で遊びに行くっていうのがまず死亡フラグだったんだな。なら、あえてここで死亡フラグを増やしてやる。

「俺、この旅行から帰ったらあの娘に告白するんだ……」

瞬間、船が大きく傾いた。おお、やっぱり死亡フラグか、これ?! 時代がある程度進んだからといって今までの科学が無駄になるわけじゃないよな。よって、万有引力の法則に従い、俺はごろごろと全身をぶつけながら下、つまり海面へと身を投げ出される。

こんなこと考えてるなんて余裕があるんだな　というよりも、きつと本能的にわかってるからだ。

もう、持たないって事くらい。夏でも、こんな荒れた海に投げ出された後どうなるか、ぐらい。

どぼん、という音とともに身体が海に叩きつけられる。その衝撃で肺から一気に空気が抜け、その代わりに水が大量に浸入してくる。苦しい、息が出来ない、何でこんな目に。

最後に思うのはそんな単純なことだけ。それと、家族や友達に、ごめん、と。言葉にならない言葉を出すと、意識が遠く、暗くなっ
ていくのだけは分かった。

「おー?　俺まだ生きてんのか?　案外ついてん……じゃねー!？」

意識があるのはまだ生きてるのかと思ったが、どうやらそうじゃないらしい。

明らかに今まで見たことのない何やら光ってる海らしきものや砂

浜らしきもの。

砂浜らしきものに打ち上げられていれば良かったんだが、あいにくと今は海らしきものの中。

いや、触ってすらないからもしかしたら砂浜ではなく、別のものかもしれないが。

そもそも、海はこんなにべとついて身体に張り付いたりしない。まだ何らかの生物の粘液だと言われたほうが納得はいく。

「いや、それならここはどこだ？ 普通に考えるとあの状況で生き残れるとも思えん。なら、死んじまったのか？ なら、ここは死後の世界。つまり、天国やら地獄ってことになる。

で、俺の今までのついてなさを考えると、何も悪いことをしてなくても必然的に地獄になる。かつ、悪いことを何もしていないかといえはそんなこともないから、どうやっても地獄行きか。……地獄も案外良いところなのかもしれないな」

「考えているところ申し訳ないけど、違うよ？」

うおっ！？ 何時の間に現れたかしらんが、俺の隣には金髪の、ちんちくりんな口りなガキがいた。今、周りを見渡したときにはそんなの居なかったが、背景にでも紛れてたか？

「失礼だよ、キミ。神様に向かってちんちくりんなんて」

「いや、何で俺の考えてること分かったよ？ はっ、俺は何時の間にサトラレ体質になったんだ？！」

「残念だけど、それも違うんだよ。神様は人の心くらい簡単に読めるのだよ。特に魂だけとなった今はね。どうーゆーあんだーすたん

「？」
「すんげえ片言発言された。つーか、神様？　こんなちんちくりんが？」

「だからちんちくりん言うなといっているのが分からないかな、キミは。」

「というかこんなくだらない押し問答をするために来たわけじゃないんだよ。時間がないからね、こう見えても」

「確かに、そりゃそうかもしれないが。まあいいや。まず、どうして俺はここに居るんだ？　やっぱ死んだのか」

何か微妙に上から目線がむかつくが、相手が神様なら仕方ない。見た目はロリだが。というか、それを疑っても仕方ないだろう。

「ようやく本題に入れそうだね。そう、キミはフェリーから落ちて死んだ。原因は溺死、よかったね。自分の死体見なくて」

水死体はずいぶんとグロいらしいからな。まあ、どんな綺麗な死に方でも自分の亡骸なんて見たくもない。

「それで、わざわざ神様っていうのは1人1人死んだらそのことを説明してくれるのか？　それよりも、これから俺はどうなるんだ？」

「まあ、落ち着きたまえ。どちらも同じ結論といえば結論なんだが、まず、キミの言うとおり神様がいちいち死んだ人間に説明などするはずがない。1日にどれくらいの人間が死んでるのかなんてキミは想像もつかないだろう？　膨大な人間が生まれ、死んでいく中で私がいちいち声をかけてしんだことの話なんてする時間なんてないさ。では、何故キミにこんな話をしているかといえば。ずばり、キミ

「はあの時死ぬ予定はなかったんだ」

「ロリにずばりといわれても、全く威厳も何もあったもんじゃねえ。つーか、死ぬ予定ねえ。」

「……なあ、つまりそれは俺が間違っただけで死んだって事か？」

「ああ。そもそも、キミは思ったことがないか？ 自分は不幸すぎるとか、ついてなすぎるとか」

「そんなの生まれつきだからな。最初は少しは思ったが、今はついてないと思っただけだよ」

「だが、それが仕組まれたことだとしたらどうだ？ それも、人の手ではなく、もっと上の何かからだとしたら」

「それならざけんなってぶん殴ってやる。つーか、そんなこと知ってるって事は、あんたがそう仕向けたのか？」

「ならガキであろうとロリであろうと関係ない。一発ぶん殴って、今までの憂さを晴らしてやるつか。」

「落ち着け。早合点するな、気持ちには分からなくはないが。世界にはいくつも神様がいてな。その中の1つが、面白半分で不幸をキミに植えたんだよ。知ったのはついさっきで、そいつはもう神様じゃなくなったが」

「おいおい。俺がぶん殴る前にか？ 何勝手なことしてくれてんだよ。どうすりゃいいんだよ、この気持ちは！」

「すまないとは思うが、それ以上は知らないよ。さて、ここでキミに選択肢がある。2つだけだけどね。」

1つは他の死んだものと同じく、輪廻の橋を渡り魂を浄化した上で転生を行うこと。もう1つが、別の世界への転生だ。すまないが、この世界の理上、一度死んだ人間を生き返らせることは出来ない。だから、今の記憶を持ったままなら他の世界に移って貰うことになる。まあ、その時はある程度の希望をかなえることは出来るけどね」

「希望……ってあれか？ 能力付与だとか、不老不死だとか、チートだとか、そういうやつが貰えるって事か？」

時たま読んでいたノベライズにもそういうのあったよな。

「能力の付与はそうむやみやたらにでなければね。不老不死は流石に無理だけど、死にづらくなるとか老い難くなるとかなら可能かな」

まじか。にやにやと笑ってるその顔が若干怪しいが、そうであるなら話は早い。

「なら、『レジェンド』で作ったキャラみたくなるのも可能か？」

レジェンドってのは去年終了したVRMMOの1つで、RPGでありながらFPSやアクションゲーム要素を取り込んだRPGで、3年前までは一代を築いたタイトルだった。俺はクローズドから終了するまでずっとやっていた『レジェンド』廃人だ。1キャラだけだが、転生もしたしカンストまで育て上げた。2度転生しなきゃカンストまでレベルを上げられない仕様で、何度心が折れかけたことか。

しかも物欲センサーが働き続けたのか、あるいはリアルラックのなさが影響したのか最後の最後になるまでレアアイテムには恵まれ

なかったし。ドロップには期待しなかった分露天を毎日あさってたけどな！

ただそれ以上に、プレイ中何度思ったことか。　こんな世界で冒険がしたい、と。

「キミの記憶の中にある、この……変な名前だね。このキャラになりたいつてことかな？　うん、確かにこの世界に似た世界であれば

」

「いや、キャラだけでいい。つか、名前は変えてくれ。流石にあの名前で生活は出来ん。だから、せめて能力だけでいいからそれを維持したままでもっと平和っぽい世界に送ってくれ」

『レジェンド』は設定上、ゴブリンからドラゴンまで出てくる王道のファンタジーだったが、幾つか異なる点があった。

まず、各国の状況だ。常に各国は小競り合いを続け、戦争に近いものも度々公式イベントとしてあった。その時は悲惨だ。通常のイベントはほとんど凍結されるし、町に襲撃されることも何度もあった。それだけならまだいい。その時町は普段と違いPK可能になるし、NPK(Non Player Character Kill)も可能になる。

つまり、高レベルのプレイヤーが集団で攻めてくると戦争が終わるまで町はNPCが誰もいなくなり、町の機能が麻痺する。そんなときに新人が入って来ようものなら何も出来ずに死んでいくのがセオリーだった。そんな自由すぎる世界には行きたくない。

「つまり、キミは強いままだけど世界は穏やかなほうが良いんだね。ただ、均衡をとるためにある程度キミが暮らしていたところよりは物騒になるけど、それは構わないね」

何故か苦笑するロリの問いに頷く。荒っぽすぎるのは勘弁して欲しいが、平和すぎるのもいただけない。それだと何をしにそんな力を得たのかが分からないからな。

「後、性別も変えないでくれ。女にされても、意識がこのままじゃやりづらいからな。とはいっても、キャラのままの設定なら問題ないだろうけどな」

「ああ。ではあまり人間以外になるのも困るだろう。そこは調整してあげるよ。で、キミの結論は異世界への移住で構わないだね」

「……俺はこの世界でこのまま生きていけないだろ？ たとえそれがあんたらのせいでも、記憶を失わず生きていけるならそれでも構わないさ」

やっぱり死んだことに抵抗はある。それも面白半分で、死ぬべきじゃなかったなら余計だ。出来れば、家族に別れの挨拶くらいしたかったが、仕方がない。変に話をしてこれ以上苦しめたくもない。今までも何度も負担を掛けてきたんだ。これからはそれが無いんだから、後は弟に任せれば良い。

「ずいぶんと潔いんだね。てっきりもう少し抵抗するものだと思うけど」

どこか、本能で分かっていた。俺は長生きは出来ないんだろう、と。その理由自体は随分とむかつく。だが、転生出来るなら儲け物だ。正直、現在進行形でわくわくしているしな。

「そろそろここにいる時間もおしまいだ。キミの次の生が実り良きモノになることを、期待しているよ」

殺したやつがなにを言いやがる、と言いたいところだがまあいい話
が本当ならこいつが俺を殺したわけじゃないんだし。

今までが誰かのせいであつてないものだったならその分楽しんで
やる。それが、この世界で、あいつらとじゃないことが惜しいが、
一度起こったものはもう戻せない。なら、前を向くしかないだろう。

「またね。向日^{ヒユウカ} 穹^{ソラ}」

俺の名前を呼んだロリ神様の笑顔を最後に、景色はぼやけ、俺は
意識を失った。

よくあるブログ。または第0話（後書き）

2011/9/11

誤字等を修正しました。 h a k i様、ありがとうございます。

2011/9/13

誤字の修正をしました。 b o g u s m o n s t e r 様、ありがとうございます。

2011/9/28

誤字等修正しました。 暁闇さまご指摘ありがとうございます。

2011/10/4

誤字等修正しました。 くらんさまありがとうございます。

第1話 導入 (前書き)

ストック分をまず投下。タイトルは適当なので次回以降はない可能性も

後は地道に。。。

第1話 導入。

転生して、第2の生を受けて既に5年経っていた。

それはいい。

今まで多少運の悪いこともあったが今までほどじゃない。

両親は優しいし、周りの大人もよくしてくれる。

子供だからか、必要以上の害意や悪意に晒されることもなかったしな。

だが、何でこうなった……。

「ソラ、ご飯できたわよー！」

「今行くー！！！」

俺を呼ぶ母親の声に従い、部屋を出る前に部屋においてある姿見の自分の姿を見る。

当然子供だからちんまい身体なのは分かる。だが、何故金髪碧眼の両親から生まれたはずの俺なのに俺の髪は黒くて目も黒いんだ。むしろ、何でソラなんだよ。名前はまだ譲れても、何であの美男美女カップルの両親をしてこの俺がああ容貌を受け継げなかったのかあ。ロリ神、俺を貶めたいのか？

そんな不満を今言っても仕方がない。

両親は遠い先祖に黒髪がいたらしいから、隔世遺伝ってことで納得しているらしいし、問題はないだろう。

「……………うまい」

「美味しい、でしょう。この子は、どこでそんな言葉覚えたのかしら」

ため息をつく母親を他所に、俺は食事を続ける。

母は村でも料理好きに入るらしく、作るものはうまい。うまいんだが、あくまでもこの世界でのレベルであり、現代社会を生きてきた俺としてはそこそこかな？ という程度でしかない。

素材の味を活かした、といえば聞こえは良いが調味料がほとんど手に入らない状況では、どうしても味が薄かったり素材のデメリットを完全には消しきれていない。

パンは所謂無酵母パンだから固いし味はない。それを薄味のスープに浸し食べるんだが、それでも酵母パンに比べ柔らかさは足りない。

果物の糖分があれば天然酵母が出来るかと昔聞いたことがあるからそのうちチャレンジするのも良いかもしれない。足りないものがあるればその時だ。

運良くこの村では酪農も行われているし海も近い。おねだりすれば何とかなるだろう。

それに、肉も加工技術が発展していないのかそれともこの肉自体が悪いのか。

きっと色々工夫はしているのだろうが、臭みがあり固い。

前はそれほど食事に拘りもしていなかったし、食べれること自体この世界では幸せなことも分かっているからありがたくいただくが、どうしても比較はしてしまう。

スープを飲み干した後、グラスの水を飲み干し、一息つく。

「今日も美味しかったよ、母さん」

「ありがとう。今日はどうするの?」

そこで俺は考える。村は狭いが、人が全くいないわけでもない。とはいえ、あまり大人の邪魔は出来ないし。

「広場にも行ってみるよ。何もなかったらそのまま帰ってくるから」

「気をつけて行ってくるのよ。お昼も、誰かのお宅にお邪魔するなら早く教えてね」

「分かってるよ。いつてきまーす!」

そんな声に見送られ走って家を飛び出す。と言って出たは良いものの。

「この村に俺と同世代の子供はいない。

いや、正しくは子供がいない。何せ俺の次に若いのはうちの両親だ。

5歳の俺に20歳の母親、そして22歳の父親。結婚したのが母さんが14の時って聞いたからどれだけ早婚なんだ、とも思ったがこの世界ではそれくらいに結婚するのが一般的らしい。

10代後半にはほとんどの人間が所帯を持ち、一生を生まれた村か近くの町で過ごすそうだ。例外は城に仕えたり、商人で行商を行ったり、あるいは冒険者として世界を歩き回るような、そんな多くはない人間だそうだ。

そう、冒険者がこの世界には居るのだ。

とはいえ、一攫千金を狙う荒くれ者としてのイメージが強い冒険者は絶対数が少ない。

なら、世界を闊歩するモンスターはどうするのか、そういう疑問もでてくるが、それは町や村ごとにある自衛団や配属される騎士団によって村や町の外部からの脅威からはある程度守られている。

特に、こんな世界でも端ののどかな村には、滅多なことじゃ村の近くにすらモンスターは現れない。

俺のステータスを見れば宝の持ち腐れともいえなくはないが、それでいい。

少なくとも今は両親の庇護にあるわけだし、端から見ると単なる子供にしか過ぎない。

精神年齢としては両親を超えているが、それでも守られている子供には変わりがないからな。

で、俺のステータスだが、この時点で無双できるほどだ。

LV	1
HP	5000
SP	28000
STR	1
VIT	1
INT	1500
SPD	800
DEX	1000
LUC	50
CHA	90

と、魔術職だったからこそその非力さ、紙装甲だが、攻撃すればまず外さない器用さと雑魚程度ならどれだけ大群であろうと燃やし尽くす火力がある以上、先制を取ればまず勝てる。

『レジェンド』では上限値が1000だったが、魔法職カンスト後

の転生ボーナスとやらでINTが+500されているのもありがたい。

単純値でも、1.5倍だ。ただ通常であればLv.1の転生を行う場合はある程度のステータスボーナスはつくものの、基本はもっとステータスは低いはずだ。

ボーナス値が+20程度しかつかなかったはず。

『レジェンド』終了時はカンストのLv.999だったが、そもそも装備の補正值を抜かせば今のステータスよりも低かったはずだ。何故こんなことが分かるのか、といえば。

世界でどうやら俺だけがこの恩恵に与れているらしい。

『レジェンド』はベースはあくまでVRMMORPG。ステータスウィンドウやアイテムボックス、フレンドにギルドなど各種情報がデータとして閲覧できるようになっていた。

その仕様がこの世界でも有効になっている。チート、ばねえっす。

ただ、あくまで見れるのは自分のもののみ。

人のステータスは見れないのが自分が今どういった立ち位置にあるのかが分からないのが辛いところ。

実際はステータス上限が10000で、普通に2000〜3000とかだったら泣いても良いだろうか。

いや、死に辛いとかなんとかあのロリ神が言っていた以上、そこに強いんだろう。そうであって欲しい。

ちなみに、他の人で見れるのはレベルと名前だけだ。

これは役に立つのか立たないのか、正直よく分からない。

「おう、ソラ坊。今日も暇してんな！」

「おはようございます、村長」

広場に着いた瞬間声をかけてきたこの筋肉……………もとい、身体のがつしりした男性は村長の口二だ。

初めて彼を村長だと知ったとき、がっかりしたものだ。

村の長といえば、老齡の杖をついた爺さんに相場は決まっているのに！と。

後で話を聞くと、元々はそういった人が村長をしており、高齡で亡くなったため村の自衛団の団長をしていた村長の息子がそのまま繰り上げて村長の座に収まったらしい。

だからこんなに無駄な筋肉……………もとい、がっちりした身体なんでしょう、と頷きはしたが。

「トニーは今日戻ってくるんだってな！ 寂しくなかったか」

「あ……………ええ、父さんも仕事ですから」

すっかり忘れていた。トニーこと、俺の父さんは狩りを行う集団に属していて、たまに数日掛けて狩を行い少し離れた森へ出かける。

普段口にしている肉やらはその時に売れ残ったものがほとんどだ。それをまず村ではなく町に売りにいくものだから、長くて十日以上村を離れることがある。

元の世界の親父も出張が多く、月の半分いないということはざらだったためあまり気にしていなかった。

むしろ村の一割近くの大人がいなくなるため、寂しがるのはその家族のほうだ。

「まあ、予定では今日の夕方ごろには戻るって話だし、それまでは良い子にしてるんだぞ」

ぐりぐりと大きな掌で撫でられる。やめて欲しい、あんたはもつと自分の腕力だのを知ってくれ。そのうち首がもげそうだ。

「や、やめてください」

「お、おう。悪いな、つい俺のガキみたいに扱っちゃまう」

がはは、と豪快に笑う村長だが、あんたの息子もう成人してるだろう。その意味も含め睨んでみるが、悲しくも所詮はガキの睨み。村長には不貞腐れてる程度にしか見えないだろう。

「じゃ、俺は仕事があるから戻るな。ソラ坊も、早く家に帰れよな」

急に仕事があるというのも何だか胡散臭いが、恐らくは事実だろう。

村長の家に何かしら届ける時いつも机に向かってうんうん唸ってたしな。

まあ、小さな村でも長ともなると色々としなきゃいけないことがあるんだろう。

と、なると他に広場にいるのは昼寝をしている爺さんとなにやら井戸端会議を開いている奥様方。

爺さんを起こすのは持つての他だし、あの会議に参加したいとも思わないし参加権限があるとも思えない。

つまり、家に帰るか他の場所に寄るか、だ。

なら、やることは決まっている。行動を頭の中で整理すると、見づからないようにそつと特殊スキル『隠密』まで使つて広場を抜け出し、村の壊れかけている柵を抜け、外へと足を運んだ。

『レジェンド』では、実用的なものを始めとして多くのベーススキルとアドバンススキルがあつた。

ベーススキルは例を挙げると『魔術の威力向上』や『片手剣修練』それに、各種属性の魔術の基礎レベルを上げるものだ。それはアドバンススキルを使えば使うほど向上していくもので、別のゲームではパッシブスキルと呼ばれることもあつた。

アドバンススキルは、アクティブスキルとも呼ばれ、『ファイヤーボール』や『ダッシュ』などSPやHPを消費して効果を発揮するスキルだが、これは同じスキルでもベーススキルとステータス、あとそのスキルのレベルに依存して効果が変わってくる。

そもそも、アドバンススキルは特定のイベントクリアか中ボス以上のモブからのドロップでそれを使用して取得するという面倒なものだったが、一部のスキルを除き取得可能だったため、俺も多くのアドバンススキルを持っている。

特殊スキル『隠密』もその1つだ。姿を認識されないようにし、本来モブから見つからないようにするそれは、『レジェンド』の戦争中ももちろん、こうやって見つかりたくないときは重宝している。なお、アドバンススキルは大きく分けて、攻撃、支援、回復、特殊と4つに分かれており、どれをどのくらいとっているかで職業が変わるというシステムを取っていた。

何故、こうやってこつそりと村を抜け出すかというと、当然怒られるからだ。

危険なモンスターはいないといえど、獣はいる。

普通の村人ですら怪我をすることもあるのに、小さい子供がこんなところをうろついているのは良い餌にしかすぎないだろう。普通であれば。

だからこそ、村には一帯を覆う魔よけの結界が張られているし、それには獣も近寄れない。

「にしても、アイテムボックスまで空なんて聞いてねえんですけど。あー、小石発見。……お、これ鉄鉱石か」

特典二つ目。アイテムボックスが利用可能だったことがすぐに分かった。

俺にしか見えないメニュー画面を操作すると（最初は指で押していたがそのうち目線だけで操作可能なが分かってからそうしている。子供のすることとはいえ、空中に指を投げ出しているのは流石に怪しかったからな！）ステータス、装備、アイテム、フレンド、ギルド、クエストという項目が浮かび上がった。

この国は文字も言葉も日本のそれとは違ったが、このメニュー画面やそれぞれのウィンドウに関しては日本語だ。

昔の言葉を忘れないので構わないが、その分、こちらの言葉を覚えるのが大変だった。

今でこそ読み書きも出来るが、それまではずっと知らない言葉で話しかけられ大変な思いをした。

どうせならそこら辺の知識もつけておいて欲しかったが、そこまで贅沢を言うのは違うんだろう。

苦労したが英語のような文法であることは何となく分かったし、音は何となくで分かっていった。

今は問題なく使えているし、バイリンガルになったと思えば儲けものだった。

まあ、そんな言葉の問題はともかくとして。

始めアイテムウィンドウを開いた瞬間、バグか何かだと思った。

リアルラックはなかったにせよ、『レジェンド』をしていた時間はそう短いものじゃない。レアアイテムこそ終盤になって漸く手にはしたが、それまで溜めていたものは結構なものだ。

それこそ、売ってしまえば一生遊んで暮らせるくらいにはなっただろう。それが、何もなかった。

装備こそ、今身につけているものはそのまま表示されたがそれ以外は何もないのだ。

確かに単なる村民が持つにしては過ぎたものだが、だからといって何も無いのは困る。

そんなわけで、村を出ては探索し、こつこつと落ちている石などを拾っては有効なものはアイテムボックスに収納している。

石の中には鉱石や宝石も含まれていて、それは特殊スキル『鑑定』によって見定めをして、普通の石以外を集めている。

アイテムボックスは俺から見える分にはそれこそゲームとしては一般的なものだが、その効果は異常ともいえる。保存可能アイテムは2000×999。

所持可能な重さは今でこそLV×STR×4000の4000しか持てないが、石なんて大きなものでも1か2、木一本でも20ほどしかないんだから、破格のものだといえる。

しかも、所持可能な重さいっぱいにまでつめたところでその重量を感じることはない。

だから集めた木材や鉱石、あるいはほんのわずかな宝石を誰かに見咎められる心配もないし、奪われる危険性もない。だが、今のままでは単なる木と石だ。

木や石は加工しなければならぬし、宝石は研磨しなければ本来の性能を発揮できない。

個人用の携帯炉もなければ、金床も、愛用していたハンマーもない。

『レジエンド』時代は、魔法職でありながら生産職として錬金術師と鍛冶師を行っていた身としてはこれは痛い。

どちらかがまともに出来ればもつとましな装備が出来るのに。

と嘆いていても仕方がない。暫くは森に落ちていた単なるナイフで凌ぐしかない。

鑑定した結果、『錆びたナイフ：ATK+1』とある分、砥げばそれなりに効力を発揮してくれるだろうが砥石すら見当たらないのでそれは諦めた。

今はもっぱら倒れた木の枝を切り落とすのに使っている程度だ。恐らく獣を狩ることも出来るだろうが、皮の剥ぎ方が分からない以上まだしないのが無難だろう。

ふと、空腹に気づきアイテムボックスからパンを取り出す。

固いし、味はしないが空腹を凌ぐには仕方がない。

アイテムボックスの中に入れたものは腐らないし変化しない。生き物をいれたことはないので生き物が生きたままなのか死んでしまうのかは分からないが、これは便利なので余ったパンを貰い、こういった空腹を満たすために少しだけ齧るようにしている。

そもそも、そろそろ帰らなければ母さんに怒られそうだ。

今日はあまり収穫もないし、早めに帰ったほうが良いかもしれな

い。

「ただいまー！」

「お帰り。今日はどこで遊んだの？」

「広場じゃ誰も相手してくれなさそうだったから、適当に散歩してたよ」

満足そうに笑う母さんは手を洗ってらっしゃい、と俺を中庭へ追いやる。

そこで井戸から汲まれていた水を小さな桶で汲み、手を洗い、捨てる。

こうやって日々を送るのは退屈だが、悪いものじゃない。

いずれは村を出て独立するか冒険者にもなるうとは思ってはいるが、残されるであろう両親は心配だ。

せめて、弟か妹がいれば家をそっちに譲り町へ出たいと思っっているが。

まあ、未だに良好な関係の両親だから、きっとそのうち2人目も出来るだろうけど。

とにかく、今は今の生活を享受しよう。

それが両親のためでもあるし、何より俺自身のためでもあるんだから。

「ただいま、クリス、ソラ」

昼食を済ませ、暇を本を読んだり外を眺めたりしてどうにか潰し

ていたその矢先。

暢気な声が玄関から聞こえた。

まあ、ただいまという人物はこの家では3人しかいないから、帰ってきたのは父親だろう。

声も変わるわけがないし、特殊スキル『気配察知』でも誰かを認識している。

ちなみに、便利ということで幾つかの特殊スキルは使っているが、攻撃や回復など目立つ魔法はまだ使っていない。

目立つし、すぐにただの子供じゃないとばれるからだ。

成人した大人ならともかく、まだ5年程度しか生きていない子供が魔法を使うなんて分かったらその先はろくでもないだろう。

よくて国で死ぬまで騎士団か魔術団へ放り込まれる。

最悪、様々な貴族や組織に身を追われる羽目にもなりかねない。

そんなことにはなりたくないので力をむやみに見せないのは正解だろう。

そもそも、こんな辺境の村にそうそうトラブルなんて起きはしない。

この村、『ユグドラシルの葉先』は若い人間がほとんどおらず、地場産業も質のあまり高くない織物だけということもあり、ほとんど村の外から人が来ることがない。

周囲の村からも距離が離れており、強力なモンスターも出没しないため冒険者もほとんど立ち寄らない。

定期的に行商が村に物資を売ったり、この村の織物を買いに来る程度だ。

そのため村唯一の酒場の2階が宿屋を兼ねて数部屋用意されているが、年に数回しか使われないし一応の体制を整えているに過ぎない。

「ソラ、お父さんが帰ってきたのよ。挨拶は？」

「お帰り、お父さん！」

サービスだと言わんばかりに帰宅したばかりの父に飛び掛る。

なにやら随分と長い割には脱線したことを考えていたような気もするが、気にはしないでおう。

「うおっ！？ ソラ、お父さん疲れてるんだけどなー」

「お父さん、お土産は？」

そんなことは知らないとはかりに無邪気な子供を演じる俺。正直時々加減が分からなくなつてへんな敬語を使つたりもするが、それでどうにかやりくりしていくしかない。

騙しているという罪悪感はあるが、それでもこの2人の子供であるという事実は変わらない。

なら、今のうちに甘えられるだけ甘えて、後で恩返しをしよう。

結局、出来なかった前の両親の分も含めて。

あれからさらに4年の月日が流れ、幾つか変化があった。

俺は9歳になった。まあ、これは当然だが。

1つは、一番大きな変化だが、妹が出来たこと。

2歳になる妹は正直、可愛くて仕方がない。

シスコン？ ああ、分かっているさ。そんなこと。だが、可愛いものは可愛い！

もう1つは、世界の方だ。

この世界は『ムーンディア』と呼ばれ、神様が創造した世界らしい。

容貌を聞く限りではあのロリ神ではなさそうだ。それはともかく。

世界には大きく分けて2つの大陸、そして幾つかの島国で構成されているらしい。

2つの大陸の名前が『シートレイア』『ボルガミア』

シートレイアの中の国が『ギストリア』『ボリディア』『ゼットア』

そして、ボルガミアの中の国が『ユースリンティア』『リンジョア』『ミニネフィスア』となっている。

また、この『ユグドラシルの葉先』は『リンジョア』の中でも海に近い田舎だ。

大陸の由来だの何だのにこれまた大層な逸話があるらしいが、詳しくは知らない。というか興味がない。

それで、世界で起きた変化というのがモンスターの活性化だ。今のところ、この村にそれが襲い掛かることはないが、世界的に見ると異常なんだそうだ。

普段は群れをほとんどなさない種類のモンスターが大量にグループを作っていたり、人を襲わないはずの温厚なモンスターが人を襲うようになったり、と。

……あのロリ神、また何かしでかしたのか？

いつも村へ行商に来る商人が言っていた話なので全てを鵜呑みには出来ないが、それを否定する要素も見当たらない。
そんなものでしかないが、ある意味ではそれらしくなってきた、とも言える。

他にも細かい変化なんて幾らでもあるが、そこは目を瞑ろう。
生きている以上、変化は常に起こっているのだから。
文字の書き取りや通貨の確認なんて些細なことだ。少なくとも今はそれほど重要じゃない。

ただ、この4年の間に未だに錬金も調合も出来ないのが正直不安だ。
魔法は何度か試したものの、そっちに関しては素材こそ集めているものの、まだ実践をしたことがない。

『レジエンド』の頃は実践的な知識が活かせることもあり、色々知識を揃えてはいたものの、ここまでしていなければ出来るかどうか、出来なかった場合の手段の開拓もしなければならぬ。
それは出来る限り避けたい事態ではあるのだが。

「おにいちゃん、れにとあそんで？」

考え事をしていくと服の裾を引っ張られる。

そこには、想像していた通りの金髪碧眼の美少女様が……！！

つまるどころ、俺の最愛の妹たるレニがいじらしく俺に遊んで欲しいとせがんでいる。

「よし！今日はどんなことをして遊びたい？ お兄ちゃんはレニ

が満足するまで付き合っただろう！」

この言葉に嘘偽りはない。レニが疲れて眠ってしまうまで俺は倒れてでも付き合う所存である！

前にそれをやって母さんにめっちゃ怒られたから程ほどにする予定ではあるが。

だが、レニの『もういつかい』は反則だ。きらきらしたあの瞳で見つめられて、誰がやめられるか！

だから、俺が倒れるのも回避不能な予定されたものでしかなかった。

「……おり？ もう夜か……にしちゃ、やけにうるせえな……」

オオーン……遠くから聞こえる獣の鳴き声で目が覚めた。

疲れきって、両親のどちらかがベッドに運んでくれたのか？ 窓から見える空は暗いわりには、やけに騒がしい。

祭りも暫くあとのはずだし、何よりもこんなに近くで獣が鳴くわけがない。

やな予感しかしないな。……さて、どうするか。

「ソラ！ 起きたのね？」

「……母さん、どうしたの？」

今起きたとポーズをとるために目をこすってみる。

そんな俺の仕草にほっとしたのか、母さんはレニを抱いたまま息

をついた。

「いい。家から絶対に出ちゃ駄目よ。あなたは、レニと一緒にいなさい」

「何かあったの？」

「……………いいえ、何もないのよ。大丈夫だから、寝てなさい」

一瞬の葛藤の後に見せた言葉に俺は特殊スキル『気配察知』を使う。

村長にアドルフのおっさん、それにアンナのおばさん、それに父さん。

広場にはそれだけの人間が集まっている。

自衛団と狩りのメンバーでもそこそこの腕がある人間が集まっているらしい。

ただ、主要メンバーがいないって事は、外に出ているってことか？ 母さんの姿も、普段は見ない格好をしている。

普段はいかにも田舎娘って格好だけど、その上から皮の鎧に皮の手甲、腰から下げているのはあれは短弓だろう。

考えられることは一つ。

モンスターが町の近くに現れたということだ。

それも村の結界を抜けられるであろうモンスターが、だ。

そんなものが近くにいてだけで危ないのに、もし村の中にまで入られたらアウトだ。

俺だけならどうとでもなる。けど、村の人は違う。

俺が今まで見た中で、一番の高レベルは今の自衛団のリーダーのアントニオさんのLv・25だ。

それが高いのか低いのかはやはり不明だ。『レジェンド』の世界で当てはめるならそれはまだ駆け出しで、初心者でも1週間そこらで鍛えられる程度のレベルでしかない。

だが、この世界の平均も上限も分からない以上、それに当てはめられないだろう。

恐らくアントニオさんは村の外まで出て、村に侵入させないようにしているんだろう。

だが、モンスターの種類によってはそれも難しいだろう。

俺はそう判断すると、特殊スキル『気配探索』を使用することにした。

それは『気配察知』をカンスト 熟練度を100まであげたときに派生するスキルで、気配察知がこの村いっぱい知っている気配を調べることに見えるもので、気配探索になると知らないものも含め、半径10kmまで調べられるスキルだ。

これを使えば、どこに誰がいて、敵のレベルまで分かる。普段は使わなかったが、こんなときこそ役に立つ。

見つけた。が、これ無理じゃね？

思わず詰みゲーだと叫びたくなかったが、それは今は自重しろ、自分。

アントニオさんならば自衛団、騎士までが一体の前に佇んでいる。とはいったものの、佇んでいるのか倒れているのか、死んではないだろうけどどうなっているかは分からない。

いや、それはともかくだ。

その一体が問題だ。Lv.30 ワーウルフ。

『レジェンド』では中ボスで、レベル20〜30台のパーティーの絶好の敵だったが、現状はどうだ。

少なくとも、今いる自衛団はレベルが20に満たないし、駐留している騎士も20しかない。ワーウルフの特徴は銀色の体毛でも銀色に暗く輝く目でもない。

強力な爪と牙、そして今日のような満月の夜に凶暴化することだ。もし、そのルールが適応されているのであれば、あのクラスのパルティーターでは持たない。

「ソラ！ ソラ！ 聞いているの!?!」

「……ごめん、行かないと」

余裕がないのか、絶叫する母さんに謝罪をし、窓を開け放つ。

「ソ、ソラ？ あなた一体何を」

「吹く風は翼を成す。我が背にその翼を宿せ。空を舞う自由を。
『フライ
飛空!』」

俺の背中に透明な翼が出来たことを確認すると、窓のサッシに足をかけ、そのまま飛ぶ。

そのまま上空5m程度まで飛べたことを確認すると、一路アントニアさんの下へ。間に合っしてくれよ!

正直、吐きそうです。

まだ死人は出ていないものの、ワーウルフにやられたであろう人の血だの何だの臭いが充満して、もうやばいです。

ワーウルフ自体も派手にやられたらしく、右腕はぶらぶらとなってるわ、わき腹からなにやら腸らしきものは食み出てるわで、暫く肉はいっすわ、本気で。

「白き光は我が友を癒す！ 輝きは彼の命の灯火！ 再生たるその癒しを！ 『癒しの光』^{ホーリライト}」

白光に輝く光が周囲を満たす。敵を倒すのも必要だけど、その前にこのままじゃ全滅フラグも立ちそうですよ！

光に包まれたみなさまはどうやら治癒が可能な程度の傷だったらしく、服が破けてたり防具が裂けてたりはするもの目立った傷はふさがったようだ。一応光の中級回復魔法だ。

内臓の破裂程度なら回復は出来る、はず。

「ソラ！！ お前、どうしてこんなところに！」

アントニアさん、そんなことよりもっと気にすることがあるんじゃないですか？ というか、幾ら血の臭いがきつなくても俺混乱しすぎですから！

「話は後でします！ 今はモンスターを！」

「おうつ！ 動けねえやつは後ろに下がってる！ 後衛、狙いを定めてやつを止める！」

前衛は後衛が攻撃した後に突っ込むぞ！」

って、まだ突っ込むのかよ！ 回復したから今のままだと死なないとしても、攻撃ばっかされても困るってか線上にいるな！ 攻撃範囲を潰すなー！！

「縛るは強き力！ 地よ！ 草よ！ 木よ！ 我らを害するもの
自由を奪い去れ！ 『束縛！』^{バインド}」

もつこうなつたらやけだ！ 必要もないほどに叫び続けてやる！
レベルの差はあれど、所詮は通常のLv.30の人狼、INTを
判定基準にもつ拘束は破られるわけがない。

事実、土だの蔓だのに巻きつかれた人狼は暴れるだけ暴れはする
ものの、全くそれから逃れられる気配すら見せない。

さて。ここまでくれば後は自衛団だけでどうにかできるかな、と。

「うおおおおおおお！ 突っ撃いいいい！！！」

アントニオさんの叫びに呼応して突撃していく自衛団の皆さん。
あとはやつが肉塊に行くのを待つだけっす。正直、見てられねえっ
す。家畜のと殺すら見たことのない高校生舐めんなよ！

それはともかくとしてだ。魔法の効果も切れそうだし、いい加減
地上に降りますか。

ぐちゃ、だのドス、だの妙に生々しい何かを突き刺す音なんて聞
こえません。獣の絶叫の声も聞こえません。聞こえないっしたら聞こ
えやしねえ！

「しよーじきあんなやりとり出来ねえ。まじ無理ゲーっすよ」

「坊主。お前平気なのか？」

「いや、血の臭いでやばいっす。正直吐きそうっす」

心配してくれるのはありがたいっす。けど、やっぱ無理っす。

「そうじゃなくてだな。そもそも、何でお前がここに」

グランさんの言葉の最中、ドダドダと騒がしい音が村のほうから

聞こえる。

おかしい。村のほうにはモンスターは侵入していないはずだが。

「ソーーーーラーラー！！！！」

……必死の形相でこちらに走ってくる父上でした。

「お父さん……お土産は？ げふっ……！！」

とりあえずぼけてみました。抱きしめられ、その勢いで肺の中の息が全て出て行きます。

いえ、余裕なんてないですよ。つーか痛え！

「ソラ！ 何でこんなところに居るんだ！ 危ないじゃないか！」

とうかが良い具合に決まって声が出ないのですが、むしろ意識が……どんどん……ん……とお、く…………がくり。

気づけばそこはまた黄金に輝くよく分からないところだった。って何でだよ！？ あれか、あれでまた俺は死んだのか！ 二度目の死亡早かったな、おい！

「落ち着きたまえ。キミはまだ死んでないよ」

またお前か！ このロリ神！

「落ち着けと言っているのが聞こえないのかね。少し手違いがあっ

てね、その説明に来たんだよ。タイミングよくキミも気絶してくれたからね」

「手違いって何だよ！ あれか、この俺の姿か！ 名前か！ モンスターのことか！」

「というか神が度々手違いなんて起こすなよな！」

「いや、姿に関しては要望がなかったからね。」

そのままの姿にさせてもらった。あまり変化が大きいと世界にも負担が掛かる。

そうになると、キミが前以上に不幸に見舞われる可能性がある。

だから力だけに限定して変更をさせてもらったんだが、すまない。説明していなかったね。

それと、こちらが本題なんだが。こちらの神が暇つぶしに、魔王とやらを復活させたらしいんだ。

こちらとしても約束が違つと抗議はしたんだが、あいにくとそこに関してはいくらばつくられてしまつてね」

何故嬉しそうに笑いやがる。ロリ神様よ。

「つつか、魔王？ 最近のモンスターの活発はそれが原因だったのかよ？」

「だったらそのうち勇者とかが現れたりしてな。俺は今ももう異世界の人間じゃないからそれに巻き込まれるつもりはないけどな！」

「そうらしいよ。まあ、そこはキミが頑張らなくてもどうにかなるからいいとして、何か質問はあるかな」

「今は特に思いつかねえよ。聞きたいことがあるときはいつでも聞けるように出来ねえのか？」

「そんなに暇じゃないと言いたい所だけれどね。キミが困ったときには手を貸せるようにはしよう。」

いくらこの世界の神の仕業とはいえ、無関心というわけにもいかないだろう？

過ぎたことは出来ないけど、助言くらいならすることは出来るだろうからね」

ロリとは思えないくらいしっかりとした態度はあれか？ やっぱロリば……

「それ以上何か考えるようだったら、こちらもそれなりの対応をさせてもらつよ？」

やべえ、空気が死んだ。

「……おーけえ。俺は何も考えない。何も言つてない。何かあったらその時は助言を求める、それでいいな」

「偉そうなのが気になるが、まあいい。そろそろ起きたほうが良いよ、キミのご両親も心配しているだろうからね」

顔は笑ってるが、こめかみあたりに異常な筋が立ってるロリ神様は触れないでおこう。まさに触らぬ神に祟りなしってことか！

つまらないことを考えている間に、また意識が遠のく。……にしても、あれでも年齢を……

異常に冷たい気配を察して、飛び起きる。……ふう、気のせいだったか。

目覚めたのはいつもの俺の部屋。既に外が明るいつて事は、少なくともそれなりの時間を寝たということに違いないか。

『気配探索』を使って、念のため周囲を探る。

外にモンスターはいないっぽい。

自衛団の詰め所に人が若干多いくらいで他にはおかしなところはなさそうだな。

ほっとため息をつく、部屋を出てリビングへ向かう。

二人とも、そこに居るのは分かったからな。……今回のことは話さないとな。

最悪、ここを出る覚悟もしたほうが良いかな。

自嘲気味に笑つと、リビングに繋がるドアを開いた。

第1話 導入 (後書き)

評価やつっこみ所があればよろしくお願いします

2011/9/11 誤字等を修正しました。h a k i様ありがとうございます。
つっこみます。

2011/9/16 改行とか追加とか。内容は変わってないです。

2011/10/4 誤字の修正をしました。くらんさまありがとうございます。
つっこみます。

第2話。戸惑う気持ち。本当の気持ち。(前書き)

説明多いです。

第2話 戸惑う気持ち。本当の気持ち。

「というわけなんだけど。……どう？」

まずは上目遣いで攻めてみよう！ 子供の身体って偉大！！

「そうは言われても……」

「というわけで、だけじゃ何も分からないよ。ソラ」

……ちっ。テンプレ的構成できっといけると思ったんだが、やはり無理か。

「……では、改めて説明させてもらいます。俺、向日 穹のことを俺がどんな存在なのかを」

両親の困惑した様子が分かる。けど、あそこまでして黙ってるわけにはいかないだろう？

それよりも、家族に秘密にしていたくない。いずれ分かってしまうことであるなら、早いほうがいいはずだ。

説明をした。俺が元々この世界とは違う世界で生きていたことを。18歳で事故によって死んだこと。

その死因が神が俺の人生をむちゃくちゃにしていたこと。そして、死んだ後にロリ神に出会ったこと。

元の世界で輪廻するか、こっちの世界で記憶を持ったまま転生するか選択させられたこと。

そして、こちらの世界で生を受けたこと。何より、両親と妹を家

族だと思っていること。

「だから、俺はソラであり、向日 穹なんです。信じてもらえないかもしれないですが、ずっと騙していました。ごめんなさい」

深く、深く腰を曲げ頭を下げる。きつと、これは赦されることじゃない。成り行きとはいえ、ずっと騙してきたことには変わらないから。

「……成る程。確かに昔から手が掛からないはずだ。クリスマス、僕たちの子供はやっぱり神様に祝福されているんだよ」

はい？

「そうね、だから言ったでしょう。この子は天才じゃない、単なる私たちの子供なんだって」

えっ？ いや、お二人さん、一体何を言ってるんですか？俺はここ2日混乱しすぎな気はするが、理解が追いついていない。正直あまり覚悟はしてなかったが、話を聞く限りではあっけなさ過ぎる。

いや、少なくともあのロリ神様に祝福されてるような気は全くしないんだが。

「や、や。な、何かこう、こういった場合はもっと嘘をつけ！ とか子供の狂言が！ とかじゃないんです……か？」

俺、もっと落ち着け。これでも現状9歳だし、精神年齢に至って

は両親を超える27歳だぞ?!

父親であるトニーは26、母親であるクリスは24だ。ほぼ父親と同世代なわけだし、それに匹敵する思考くらいは持つておこうぜ、なあ?

「ソラが私に嘘をつく理由があるのかしら?」

……なんつーか、もう。完敗です。

「いえ、理由がないというよりもあまり黙っていたくもないので話をしたので……嘘をつく理由は確かにないといえませんが」

どうして良いか分からず、頬を軽く引つかきながら答える。正直、この展開はあまり予想していなかった。

いや、話したかったただだから何も考えていなかったに過ぎない。

「なら、ソラが気にすることは何もないだろう? ソラは、クリスがお腹を痛めて産んだ子なんだ。ただ少し他の人と違う、それだけだろう?」

このイケメンが。何を言っても偉く格好良いな、ちくしょう。

……それが自分でも照れ隠しだって分かってるのがまたむかつく!

「……それはそうなんですけど。いえ、自分でもそう分かってるか言ってるのは分かっているんですけどね。ただ、自分でも納得行かないといえますか」

ああ、もうgggdだな、おい! 一度深呼吸して。ふー、はー、

ふー、はー。よし！

「痛めた私が言うならともかく、トニーが言うのは違うんじゃないかしら？ ソラ、あなたは私の子供よ。それだけで十分じゃないかしら？」

「……その通りですね。はい」

何故こちらが持ち直した瞬間にまた落とそうとするか！ ええい、こうなれば徹底抗戦の構えでいかせて貰う！

「そういえば、昨日は一体どうしたんだい？ 団長さんに聞いても、ソラが空から降ってきて白い光がどうとやら、何てよく分からないことを言っていたけれど」

流石突撃なんちゃらの異名を持つアントニオさん。確かに言ってしまうばそれだけでもさっ。

「俺の使う魔法を行使して空を飛んでいったに過ぎません。これも魔術師としてはそれなりの腕を持っていましたので」

ゲームの中で、とはあえて言うつもりはない。言っても理解は得られないんだろうから。

それなら敢えて元々使っていた、と誤認させたほうが早い。VR MMOである以上、架空であれ実際の身体を操っていたことに違いはないし、詠唱までしてみせたんだ。その方が納得しやすいだろう。

『レジェンド』では技を放つ際は技名を唱える必要があったし、詠唱は決められたワードを口にし、言葉を持って魔術を使うことになっていた。

その詠唱スベルを知ることこそ、各種魔術のクエスト報酬もしくは敵レアドロップで得られる、魔術書を使用した際の特典だった。

それを使用した際に、本に書かれている詠唱が個人のシステムにインストールされ、目的に応じた魔術を行使しようとした際に詠唱ウィンドウが表示され、それを読み上げることによって魔術が行使される。

そのため、戦闘中のノックバックでは詠唱が破棄され魔術が途絶えることがある。

だからこそ魔法職は攻撃の手が及ばない後衛職として攻撃の要であるアタッカーとして役割を果たす、のが一般的なのだが。

俺の場合はちょっと違った。クローズド から続けていた古参プレイヤーの中でも、特に酷い悪名をつけられていたのが理由の一端だ。

『歩く物欲センサー』だの『リアルラック欠乏症』だの、本当のことだが身も蓋もない渾名をつけられて以来、臨時ですらパーティーを組む人間は減り、知らずに組んでくれた人ともそのドロップ率の悪さから俺から臨時を組むのは止めていったほどだ。

機会があり、途中から克蘭に加入することが出来たが、そうでなければ最後までソロで狩り続けていただろう。

ソロでサーバー内最高峰のダンジョン踏破したのは俺だけに違いない。

なんてマゾゲーだ！ と思ったのは一度ではなかったが、そうしていたのは自分だと認識したら随分と空しくなったのは忘れよう。

ああ、元克蘭のメンバーは今は何をしているんだろうか。

ギヤングのダンディに弱虫のライオン、雲隠れのダンプ、ネタで

知られた俺たちのクランひよっこ……いや、これ以上言うのはまずい。

ちなみに、俺のキャラは大統領のドン・バチヨ。
随分と古い人形劇のキャラを名前にしたネタクランだった。
今もきつとリアルで何かしらのネタに走っているのは間違いない
だろう。

思考がずれていくのはきつとまだ混乱しているからだ。

少なくとも説明が長くなっているだけなのは気のせいだろう。きつと。

「ただね……今までに空を飛ぶ魔法なんて聞いたことないんだよね。
魔法学園であれば何か知っているかもしれないけど、どうやったの
かな」

何ですと？ 飛空魔法はどちらかといえば初級に近い魔法だ。

移動不可な地形を飛び越えるために前衛職でも持っているプレイ
ヤーは多く存在した。

消費する魔力量も多くなかったし、空でなければ戦えないモン
スターも幾つかいたからほぼ必須の魔法だった。『レジェンド』で
は。

「吹く風は翼を成す。我が背にその翼を宿せ。空を舞う自由を。」
飛空フライング」

これだけで発動する風属性の初級魔法なんですけど……」

ぶかぶかと浮かぶ俺を見て引く両親。……地味に傷つくな、これ。

「詠唱だけで発動する魔法なんて見たことがないわ。触媒は何を使
っているの？」

そんな一部の特殊スキルでない限り『レジェンド』では触媒なんて一切使わなかったんだが。

「魔力を消費するだけじゃないんですか？ 魔法って……」

「そんなの聞いたことないわよ！ ……ソラにはこの世界の常識を知って貰わないといけないみたいね」

「……お、お手柔らかにお願いします」

何故か暗い笑いを浮かべる母に、ただ目線を合わせないように頭を下げるので精一杯だった。

結論。どう考えても『レジェンド』の常識は通用しませんでした
いや、全く関係ない世界を選んだ以上、当然といえば当然の結果
ではあるものの。

魔法は使える人間は100人に1人程度で、ちよつとしたステータスになるらしい。

ただ、家系によって使える人間が生まれやすいため貴族が多い、らしい。

で、扱える属性は火、水、土、風、光、闇の六種類。

ほとんどの人間は扱えるのが単属性か2種の属性だけで相反する属性（たとえば火と水は相反するらしい）は使えないため、最大でも3種類までしか使えないらしいが、歴史上英雄だの勇者だのそういう人の皮を被ったバケモノレベルじゃないとそこまでは出来ず、

2種類でもどこからも引く手数多の存在らしい。

……俺は当然全属性使えるし、属性を持たない魔法すら使えるんだが。

そして、使える魔法の種類は詠唱術、魔法陣、符の三種類。

ただ、詠唱術は詠唱と魔法を使うための属性を付与された触媒が必要で、魔法陣もそれを書くための専用の魔具がなければ使えないらしい。

符に関しては、魔法とは言っているものの、錬金術師が作る、魔力があれば誰でも使える初心者用、あるいは緊急時用のサポート品のようなもので、それをメインにしている魔法使いは才能がないか、素人だそうだ。

つまり、何の触媒も用いらず魔法を使う俺はこの世界では異物であり、異常らしい。

俺から言わせれば、魔法を使える時点でおかしいとは思うが、それは異世界。物理法則だの何だのが違うんだろう。

ちなみに、魔法を使うには精霊だの神様だのに働きかけてとか何とか言ってたが面倒そうだったので話は聞いていない。

そんなことをしなくても使えるのなら余計な知識は溜め込む必要はなさそうだ。

「つまり、俺がこのまま魔法を使うのは非常にまずいということですね。やっぱり武器を作る必要があるか」

「ええ。ものすごくまずいわ。ソラはもう魔法を使ってるところを見られているし、どうにかしないとね」

「ええっと……触媒って魔力が籠ったものなら何でも良いんですか

「？」

「というか、俺が使った魔術は、何だ。風属性の飛空、光属性の癒しの光、そして土属性の束縛。」

「あれ？ 風と土使ってる時点で終わってね？ 始まる前から詰んでるのかよ！」

「前、町で出会った魔法使いに聞いたところ、強く力の籠ったものなら何でも良いそうだよ。腕輪にペンダント、杖なんかも一般的だそうだ」

「なら……俺のスキル次第では何とでもなりそうだな。あとは持っている宝石を加工して、か。」

「器具こそないが、数量はそこそこ宝石加工のスキルもカンストしている。どうにかなりそうだ。」

「……まだ、俺のことを信じられていないでしょうから。その証拠をお見せします」

「アイテムボックスから未加工の原石を2つほど取り出す。1つはサファイア、1つはトパーズ。」

「元の世界で青玉と黄玉とも呼ばれていた宝石だ。加工して属性を付与すれば風と土の触媒にでもなってくれるだろう。」

「何故こんなものが単なる地面に落ちているかは知らない。」

「冒険者や何か落としたならともかく、原石のまま持ち歩く人間なんて居ないだろうし、どこかに採掘ポイントでもあるのだろうか。そうであれば宝石業はかなり儲かりそうだ。それで値崩れもしかねないが。」

そんなことはともかく。生産スキル『宝石加工』を使い、それぞ
れの石を加工する。

とはいっても、実際に研磨機があるわけじゃないのでスキルのみ
を使って加工する。

出来るかどうかはいまいち不明だが、スキルが発動するのは他の
スキルで確認済みだ。

難しい加工をするわけでもないし、どうにかなるだろう。きっと。

そんな願いが届いたのか、原石が浮き上がると、一瞬光ったかと
思うと加工済みのサファイアとトパーズが手元に残る。よし、上手
く行ったな。

「ちょ、ちょっと！ 何をしたのよ！ そもそも、そんなものどこ
から取り出したの!？」

「お、落ち着いてください！ 今説明しますから!」

さつきから呆然としたり叫んだりする母を宥める。

俺も初めて『レジェンド』で見たとき驚いたものだ。

気持ちは分かる。というか、母よ。そんなに叫んで喉は痛くなら
ないのだろうか？

「これは俺の保有してるスキルの内宝石を加工するスキルです。

道具があればもっと成功確率は上がりますが、この程度の加工で
あればなくてもそうそう失敗はしません。

そして、これを収納していたのは俺のアイテムボックスの中、異
空間にでも収納していると思ってください」

証拠を見せるため、一度アイテムボックスに格納し、また取り出
す。

端から見ると消えたと思った宝石が現れたように見えたはずだ。

「……ソラはずいぶんと規格外だなあ」

それで治められる父も同じく規格外と思われるますが、如何でしょうか。

「そういう問題、でもないんだけどそうね。……それで、ソラはいつまで私たちに敬語を使ってるのかしら？」

「今は説明の途中ですから。そのためには、ソラであるよりも向日穹であることのほうが説明に向いていると判断したままでです」

「もうそんなことしなくても大丈夫よ。こんなに丁寧な言葉使える9歳児なんて私は知らないし、魔法だってきつとこの世界にはないものばかりだし。

これまで通り、私たちの子供で居てくれればそれでいいの。それ以上望まないし、誰にだって望ませはしない」

俺はこの2人の子供として生まれてきて、本当に幸せなんだろう。俺を本当に心配し、理解しようとしてくれるのが分かる。

同時に、やはり心配させて申し訳ないという罪悪感がある。子供としての嬉しい感情と大人としての申し訳なさ。

どちらも俺の本当の気持ちだ。なら、出す気持ちは決まっている。

「ありがとう、父さん。母さん。とっても、嬉しいよ」

謝罪ではなく、感謝。これを伝えることが俺に出来る精一杯。…

…正直、恥ずかしすぎて死ぬるけどな。

「……おにいちゃん、おかあさん、おとうさん、おはよう……」
「います」

「どこことなく生温い雰囲気壊してくれたのは、最愛のまいしすたーだ。」

俺が一番最初で父さんが一番最後だったのは、まいしすたーから近い順で他意はないだろう。だから、泣きそうな顔はやめてくれ。流石に居た堪れない。

「レニも起きてきたことだし、朝のご飯にしましょう。ソラ、レニ。顔を洗っていらっしやい」

話も終わりだ、と言わんばかりに中庭に追い出される俺とレニ。レニの世話はレニが生まれた当時からしているから問題ない。

中庭に追い出される前には既にタオルも持ってきているし、水を汲む桶も歯を磨く楊枝も用意している。

マイシスターが虫歯になったりしたら大変だ。しっかりと磨かなくっては。

「……母さん。ずっと、黙ってた。いや、騙してたことがあるんだ」

「な、何かしら。随分と急に重々しくなったけど」

「俺さ。ずっと母さんの料理がうまいって言って食べてたんだけどさ。どうしても1つだけうまくないものがあるんだ」

「だから、美味しいって言いなさい！ それで、どれよ。好き嫌い

は駄目よ？」

「好き嫌いって言うか……パンがき。パンが、ぱさぱさで固くて、もう耐え切れないんだっ！」

ちなみに言えばほとんど味もない。恐らくは粉と水だけなんだろう。それを釜で焼いて終わり。

そんなパンを薄味のスープに入れたところで、美味しいはずがない。

これに関して言ってしまうえば、まだパスタやらミルク粥のほうが食べれる。

「……そんなこと言われても。これが限界よ？」

「いや、手はあるんだ！ 後は許可さえしてくれればうまいパンを食べれるんだよっ……！」

心からの叫び。いや、むしろこっちで生まれて初めての我俣かも知れない。我俣だというのは分かっているが、これは切実な悩みだ。

日々食べるものがこれなのは辛い。しかも、黒っぽく固いのはこれが全粒粉に近いものだからだろう。

真っ白でふわふわなパンは難しいかもしれないが、せめてモチモチとした柔らかいパンに有り付きたい。

「い、いいけど……どうしたいの？ あと、ちゃんと美味しいって言いなさい」

「……おにいちゃん、へん」

こんな時でも教育を忘れない母に感謝の念でいっぱいです。あと、妹の一言に結構傷つくのはむしろデフォなのでしょうか……。

「あまり量はなくてもいいから、手に入れたいものがあるんだ。それに協力して欲しいんだけど」

思い出した中で村で簡単に手に入りそうなものとそうでないもの。簡単に手に入るものはお願いすればもらえそうなもの。そうでないものは買っしかないものだ。

小遣いでも貰っていればそれを崩して買っつもりだが、今のところそれを貰った覚えはない。

父さんが猟師をやっているおかげか、ある程度収入と物資があることは分かっている。

それを利用するのも随分嫌だが、背に腹は変えられない。

いざとなったら宝石を加工して、それを行商にきた商人に売ってもらおう。

買い叩かれる可能性はあるが、属性付与もすればおつきくらいは来るだろう。

「まずは、ご飯が済んでからね。レニ、あなたもよ」

「はい」

元気な妹の返事に若干癒されながらも食事を再開する。……ああ、パンが喉につつかえる。

至急食事の改善を要望する！

「……お母様、要望を申してもよろしいでしょうか？」

とりあえず、食後落ち着いたので恐る恐る希望を述べることにしてみた俺。下手に出ているのは昔からの癖だ。

「変な敬語はいらないって言ったばかりでしょう？ 遠慮はせず、言ってみなさいよ」

さばさばとした口調はまるで親子というよりも友達のようなようだ。いや、俺がその口調で母に話しかけることはないだろうが。

「ええと。塩と蜂蜜、それと絞りとての生乳に香りの良い果物。それに、加工してない麦も。あと密閉できるガラスのビンが2つあれば助かるんだけど」

砂糖は恐らくこの世界ではまだ高級品だろう。

テンサイやサトウキビは少なくともこの村では栽培されていないし、食卓にそれらしいものがあがったことはない。

それに酵母もパン酵母を作るには技術的に難しくはないだろうが、その後の加工が問題になりそうだ。

なら、まだ作ったことのある天然酵母を使ったほうが確実そうだな。全粒粉があるのなら交渉次第では白い粉、白いパンを焼けるほどの粉が手に入るかもしれない。

いや、むしろ石臼あたりなら作ってしまえばこちらのものだ。

どうせならこの村の特産物にしてもいい。

パンだけならまだしも、こういった製粉技術も発達していないだろう。

村を出るにしても、その技術が発達し国内に広まれば好きなきに柔らかいパンが食べられるだろう。

目立つつもりはないが、美味しいものが広まることに否はない。なら、広めるかどうかは別としても作ってみる価値はあるだろう。

「それだけで良いの？ 他に必要なものは？」

「……それだけあれば十分だけど、いい？」

何だかあつさりと決まったな。いや、日本であればそれくらい、麦は別としても対した金額にならないから別に怖じ気ずく必要はないんだが、こっちの物価はまるで分からない。

「平気よ。変に気を使ってる息子のお願いなんだから、それくらい気にしないの」

その言葉にありがたく頷き、素直に甘えよう。

それが俺の正体を秘密にすることも、今の生活を出来るようにでもなく、食のお願いだということに気づき苦笑いを浮かべるしかなかった。

母さんに留守番とレニの世話を任されて早数時間。ま っ て
ま した ！

キッチンに置かれているのは母に頼んだ品物。若干多い気はするが、多いことに越したことはない。

さて、まずは酵母を作ることから始めよう。

と。作る工程は正直ありきたりなのでパス。

切った果物と水を入れたガラス瓶を特別スキル『促進』という取ったはいいものの全く使わなかったスキルを使い醗酵を進め、以前森で見つけた倒木をアイテムボックスから取り出し、小型の脱穀機を作り、家の裏庭にあった大き目の石を錬金術で石臼に変化させ、脱穀した麦とそうでない麦を粉にし、ふるいにかけて、生乳をガラス瓶にいれ、振ってかくはんし、練って水分を飛ばした上でバターにし、全ての材料を混ぜ、1次醗酵も2次醗酵も全て『促進』を使い時間を短縮し、出来上がった生地を母に頼み焼いてもらう。所要時間焼くのを入れても2時間というハイペースで作り上げたが、まあたいしたことではないだろう。

ちなみに、我が妹君は途中で飽きてお昼寝中だ。寝る子は育つというし、良いことだ。

「これである程度冷ませば出来上がり……って母上、如何されましたでしょうか？」

やっぱり無駄遣いで怒っていらっしやる?! ああ、調子に乗ってすみませんでした!

「本当に我が息子は別の生き方をしていたんだな、って。……そう思っただけ」

土下座をしようか迷っていた身体を抱きしめられる。……何だか色々当たって恥ずかしいのですが。

「怒ってらっしやらないのでしょうか……?」

「何に怒るっていうのよ。少し寂しいだけ」

ぎゅ、っと強めに抱き締められる。

そういえば、母に最後に抱き締められたのは何時だっただろうか。物心をついた頃には既に自分より若い女性に抱き締められる羞恥心でさりげなくその抱擁から抜け出していた気がする。

それは子供として異常で、母親から見ても寂しいものだったのではないだろうか。

俺にとっては女性であり、母親でもあれど。母から見るとただの息子。

途端に身体を襲う申し訳なさに、おずおずと、そっと壊れそうなものを包み込むように抱き締める。

ですが、その途端に力いっぱい抱き締めるのは出来れば勘弁して欲しいです。母上殿……………。

「……………ごめんね？ 私もわざとやったわけじゃないんだけど」

「ええ。分かっています。分かっていますので……………そろそろお昼にしましょうか」

軽くイきかけました。というか今度こそ2度目の死を覚悟しました。

死に辛いつていうのむしろ嘘なんじゃねえか、あのロリ神様。

「うう。ソラが冷たい……………」

「いや、正体というか事情を明かした後はどうしても子供のソラのままじゃ居づらくてですね？ 今まで結構演技してた分、どうして

いいのが正直よく分からなくて」

困ったものだと思う。流石に前のままの口調で居るわけにも行かないし、とはいえ自然な9歳児の口調なんて覚えてるわけがねえ。恐らく、今の俺、ソラの口調だのを知ってる大人から見たら随分と変なものに見えるだろう。

それはずっと肉体にある程度引っ張られるものだと思っていたが、そつでもないようだ。

睡眠時間や身体能力こそある程度は子供の身体のせいであらうが、それ以外は少なくとも18歳だった向日 穹のままだ。

なら、俺は俺として生きる。それだけだ。

「分かったわよ。ソラはソラの好きなようにしてみなさい。もし間違ってるようだったら、私が怒るから」

「そつして貰えると助かる。暫くしたらなれると思うから、それまでは言葉の無作法に関しては許してくれ」

前からお前は口が悪いと言われ続けた。だから自分の悪い癖だといふのは分かっているが、どうしても治らないものは治らない。

「ソラちゃんったらワイルド……。けど、顔に似合わないから止めて欲しいな」

「いいから早く昼飯にしよう。レニもそろそろ起きる頃だろうし」

「はい……。ソラの意地悪」

頼りがいのある母はどこに行ったんだろっか。今の母もかわ……
げふんげふん。

いじらしいところはあるが、それはそれ。それよりも今は飯だ。
ようやく、待ちに待ったふわふわのパンが俺を待っている！

「ふわふわ〜。おいし〜」

寝ていたレニを回収し、漸く有り付けたパンは我ながら中々の出来だ。

これなら若干乾きは覚えるものの、我慢できないほどじゃない。
むしろ、これから離れられそうにない。

本当なら食パンを作りたかったが、それが出来なかったからスコーンとハンバーガーで使うような丸型のパンズだ。

軽く炙ったスコーンに蜂蜜をかけるとさらにうまい。

これで和食が食べられるようになれば最高だが、あいにくと醤油や味噌の作り方がなんとなくわからない。

むしろ、麴はどうやって作れば良いんだ。下手な作り方をすると変なカビまで出来そうで中々チャレンジできない。機会があればそつちも試してみよう。

とにかく、これで主食の問題はまず解決した。あとは、他の人が食べてどう思うか、だ。

「ねえ、これもソラの……知ってることから作ったものなのかしら？」

「あ、ええと。そ、そうだよ。お母さん、美味しい？」

レニに要らない心配をかける必要はないだろう。母もどうやら同じ意見のようで、妙な問いかけをしてくる。

「ええ。今まで食べてたパンが何だつて話よ。うん、これならソラが美味しくないっていうのも頷けるわね」

よし。母さんの評価はよさそうだ。なら、次は酒場のおやつさんにも売り込んでみるか。

酒単体とはあまり合わないが、組み合わせ次第では売り込みは出来る。そして大量に作れるような技術も売り込めば……ってその手段がないな。

売る技術はある。売る機材もある。だが、それを隠す手段がない。父は単なる猟師だし、母も……母は

「……母は、っと。レニ、ここで寝たら風邪を引いてしまうよ」

よっぽど気に入ってくれたのか、それとも疲れたのか。パンを握り締めたまま寝こけるまいしすたーの姿に笑うと、パンを手から外し揺らしてみる。

「レニは寝かせてあげなさい。私が部屋に運ぶから、話はまた後ね」

「それで、さっきは何を言いかけたの？」

ぐっすりと寝ているレニを部屋まで抱き上げていった母はすぐに戻って来て、開口一番そう聞いてくる。

「……母に、お願いがあります」

「むむ。ついに家族の自覚が出来たのかな？」

そんなものは最初から標準搭載ですが、何か。

「……それはさておいて。このパンを酒場と雑貨屋に売り込みたいんですが、母にお願いしても？」

「って凄い面倒事押し付けられそうになってないかな！？ ソラ、私ソラのお母さんだよ！ 決してソラの良いように使われる使用人じゃないんだよ！」

「……母、幼くなつてどうするんですか」

やはり無理を言うのは悪かったか。なら独自に販売ルートを構築するしかないが、あいにくと商売は『レジエント』の中でしかないしかも、露天とクランのメンバー相手のものくらいで値切り交渉もまともに相手にしなかった以上、皆無といって良い。さて、どうすべきか。

「幼いつて、確かにまだ若いつもりだけど私ソラのお母さんだよ！？」

「……俺が悪かったから。もう言わない、俺がどうにかして製造と販売ルートは確保するから」

製造は水車なり風車なりを作つて自動の製粉機を作れば良いし脱穀機は唐箕でも作るべきか？ あとはバターと酵母の作り方、それとパンのレシピだな。塩や蜂蜜に関してはパンの製法が広まれば交

易で動きやすくなるだろうから値段もある程度は安くなるか。

それにあわせて砂糖の作り方と塩の精製方法を広めればそれも安価になるからそれでどうにかなるか？ いや、そもそも塩漬の製品があるかどうかで広め方もだいぶ変わってくるな。となるとやはり世界の相場と食文化を鑑みるところから始めないとまずいな。変に独占市場になっているところを荒らすと後が面倒そうだ。そのアイデアを売るにしても、それで食ってる人間の職を奪いかねん。というわけで、簡単でそのまま移行できそうな料理程度が無難、だな。砂糖に関してはあまりに生産量が少ないようであれば、何か手を打つ必要があるが。

そうなるか？ いくつかのレシピを世に出すだけで十分か。あとは自分の生きる分の金銭を稼げれば良いから、ポーション売りにでもなれば良いわけだ。

正直、この身に秘めた力がどれくらいのものかは未だに分からないが、バカ正直にスキルをフルに使うのは避けたほうが良いだろう。

「ソーラー？ ソラー？ お母さんを無視しないで〜」

「すみません。どの技術の放出までなら耐えれそうか考えていました。売却方法はパン屋でも作ったほうが無難でしょうか。それとも水車小屋でも建ててそこで実演販売でしょうか」

「……少し冗談言っただけなのに。ソーラ私のこと嫌いなのか？」

まずい、泣きそうだ。俺も別の意味で泣けそうだが。

「昔からついてなかったから、そういうのに慣れていないんだ。人に頼むと高確率で迷惑をかけるから、基本自分で出来るように物事を収めてき。だから、断られたらすぐに自分で動くようにしてたから」

それが俺の処世術だ。だから一応の形になるまでは練習もしたし知識を溜め込んだ。

便利な社会において、原材料まで作る必要はなかったからここの知識は完全に蛇足だったんだが。

「息子が優秀なのも考え物だねえ……。前から思っていたことだけど、私より頭良すぎだし」

疲れたようなため息を吐く母を横目に考える。

一応世界でもトップレベルの教養を受けられる環境に居たし、そもそも技術や思想レベルでもこの世界とはだいぶ差がある。

頭の良し悪しはともあれ、下地ではそこそのものはあるつもりだ。

「けど、何の権力もないしコネもないからね。村の資産として売るにも子供じゃ怪しまれる。もうちょい大人だったら発明家とでも名乗って売り込みにいけるんだろうけど」

親切な商人にでも恩を売ればなおさらなんだが。まあ、人が良いただけじゃ商人なんてやってられないだろうからそこは見極めるとしても。

「それで私に頼ろうとしたの？ でも、お母さんそういった商売よく分からないんだけど」

「安定確保さえ出来ればそれでいいよ。作ったものなんて天然酵母と石臼に脱穀機位だし。どれも簡単に作れるから加工技術さえしっかりすれば問題ないし」

酵母なんて本来なら数日かけて時々混ぜるだけ、脱穀機は基本的な部分は木で幾つかの機構は石だ。石臼は消耗度は高いが全て石で作った。というか単なる大き目の石で作っただけだから当然だが。

「うーん……鍛冶師のゴーンさんなら作れるかな？ 分かったよ、お母さんソラのために頑張っちゃう！」

「裏庭においておくから、必要な分だけ作ったら後は貸してあげた方がいいだろうね。あとは酵母とパン自体の注意は……」

一月後、『ユグドラシルの葉先』では俺が作ったパンが各家庭で出されるようになり、脱穀機と石臼も飛ぶように売れるようになったらしい。

やはりみんな今までのパンよりもこっちの方が気に入ってくれたようだ。

それに、見込んだ通り行商に来た商隊の目に留まり、酵母と脱穀機、石臼が少しずつだが広まり始めた。

この調子なら1年位すれば少なくとも大きな都市くらいには普及するだろう。

商人が珍しがってる以上、機器や材料はともかくこういったパンの作り方は少なくとも大体的には広まっていないんだろう。

ゴーンさんも売れた代金の一部をうちに入れてくれていているらしいし、悪いことはないだろう。

俺のことが露見してる様子もないし、現状はほぼ最良に近い形で動いている、といいなあ。

他の料理でも色々試してみたいが、また別の機会がいい。俺はあくまで鍛冶師であり錬金術師であり料理人ではないはずだ。

「……母上、これは一体どういうことでしょうか？」

この世界では珍しい、わら半紙だ。この世界にはパルプを作る製法が確立しているのだろうか。

符を使う以上、ある程度は製紙技術はあると思われるが、こういう場合は羊皮紙が一般的なのではないだろうか。ゲーム的な意味で。

まあ、いい。紙がどうであれあるものはあるんだ。問題は、この内容だ。

「お母さん、文字読めないから何て書いてるか分からないよ」

言葉は話せても識字率はだいぶ低いようです。貴族はともかく、平民では2割から3割程度だそう。これは行商に来ていた商人のうちの1人に聞いたもので、文字を読める俺に驚き、教えてくれた。

最初はミミズが這いずり回ったというか、よく言えば達筆な文字らしきものを文字の読み書きが出来る村長の家に押しかけ、押し入り、引つ掻き回して漸く教えてもらったものだ。

「……母も内容は知らないんですね。簡単に言うと、魔法学校の入学試験の案内ですね」

誰經由で漏れたんだ？ これは。自衛団か？ それともあの場に居た騎士^{ケラン}か？

ただ、まだ安心できるのはこれが誰にでも配られていそうな案内

状であり、差出人も特に明記されていないことだ。

単にDMの如く、入学可能な年齢の子供がいる家庭に届けられているだけかもしれないし。

何が悲しくて高い学費を払ってまで5年も学校に閉じ込められなければならない。

しかも、うまく立ち回ってもそうでなくてもきつとロクな目にあわないのは既に見えている。

「魔法学校って、あの魔法学校？」

「魔法学校がいくつあるかは知りませんが、あの魔法学校です。入学試験合格後、入学金が20金貨、一年に掛かる学費が10金貨、寮に入るならさらに5金貨追加という貴族御用達の魔法学校です」

ざつと基本的に掛かるらしい学費を説明したところで固まる母君。この世界の通貨は共通でRルドと呼ばれている。

銅貨、銀貨、金貨、白銀貨、神貨とそれぞれあり、1R＝1銅貨。それぞれが順に100枚で次の貨幣価値になる。

一食が大体50～70Rで、この世界の一世帯あたりの平均食費は一ヶ月で1金貨。

ここら辺は自給自足がある程度できているからもう少し下がるが、その分所得も少ない。

最近、飛ぶように売れている石臼や脱穀機でさえもそれぞれこの村で売るには5銀貨程度で収まるが高級品の部類に当てはまる。

俺は1R＝10円程度で計算しているが、町でも一ヶ月の給与が

金貨4枚だそうだからもしかしたら倍がけくらいでもいいかもしれない。

つまり、入学から卒業まで5年かかるため単純計算でも金貨70枚。日本円に直すと約700万。大学を出るのにおよそ公立でも500万はかかるらしいので、それ以上の金額が出て行くという計算になる。

倍がけするのであれば有名な私立の医学部にも匹敵する額になるということだ。

うちにそんな金があるとは思えない。

ちなみに、試験を主席で合格すれば学費免除、トップ10であれば一部学費軽減と補助が出るらしいがそこまでして通うメリットは俺にはないと思っている。

「心配しなくても、行きたいなんて言わないから安心して欲しい」「で、でもソラ魔法使えるんでしょ？ なら行った方がいいんじゃないかな……」

確かに、魔法を使える子供だから魔法学校に行ったほうが良い。それは一理ある。

その方が多少強力な魔法を使っても違和感は少ないからだ。少なくとも、魔法学校の生徒という肩書きは単なる平民よりはステータスになるだろう。

「俺の魔法はこの世界と体系が違うみたいだから、教わるだけ無駄なんだよ」

実際は無駄どころかマイナスだ。『レジェンド』をやっているうちに、『レジェンド』の世界の法則というか裏技に気づいた。

あの世界は確かにシステムで管理されたデータの存在だった。だが、普通に歩ける、走れる、ようにシステムにない動きをすることも可能だった。いや、むしろあえてシステム化されていない部分が多いといえた。

『レジェンド』はRPGをメインとしたゲームだったが、FPSの要素もアクションの要素も、格闘ゲームの要素すら取り込んだ無茶なゲームシステムを売りとしていた。

つまり、スキルツリーにない技をかけることも可能。実際の身体が動ける範囲でならアクロバティックな動作も可能だった。

中には本職のプロレスラーなのか、DDTを人形モンスターにぶちかます騎士も居たし、某蛇よろしくCCCを繰り返すつわものまで居た。

そんな俺も、大統領として魔法職でありながら前線で詠唱ながら回避しまるくるる魔法師として有名だった。

そんな俺が制限のある魔法使いに教えを請うのは正直勘弁して欲しい。

思いのほかあっさりを受け入れられた俺ではあるが、いずれは前考えていたように大きな町で1人でやっていきたいという思いは変わらない。

それは前の世界での影響も多分にあるだろう。お金さえ払えばどこまでもいける世界。

VR空間であれば擬似的でも色々な場所に出かけられ、疑似体験が出来た。

……正直な話、遊び相手もないこの村に飽き掛けている。他を知らなければこんなものなんだと、きつと納得できていたんだろう。

だが、俺は便利すぎる世界で生まれ、育ち、死んだ。その経験が、この小さな村で生涯を過ごすという選択肢を奪っていた。結局、それが一番の俺の我俣なんだろう。

「でも、ソラはこの村にはずっとは居たくないんだよね」

今考えていたことが口に出ていたんだろうか？ いや、心が読まれた？

そんなはずはない。母にそういった能力はないはずだ。なら何で？ どうして俺の気持ちがあつたんだ？

「そんな……こと、ない」

「無理しなくていいよ。ソラがパンを広めたいのもそのためでしょ？ どこでだってあの柔らかいパンが食べたいから広めさせた。

私はこれでもソラのお母さんなんだよ。息子の視線が、いつも遠くを見てることくらいすぐ分かったよ」

確かに、その通りだ。俺はこの村以外でもあれを食べたいし、この村以外で過ごしたい。

ずっとこの村にいたのであれば、もの作りはすれどそれを広める必要なんてなかった。

そんなに俺は分かり易いのか？ それとも、家族を見る俺の目はそう映っているんだろうか。

「……俺は、俺の我俣でここではずっと生活は出来ない。これは俺のEGOで、きつと受け入れられないものだと思う。だから、俺はここを出て1人でどこかで暮らそうと」

思ったよりも音は出ないものだ、と他人事のように思った。

熱と後からじわじわと来る痛み。ただ、そんな痛みより。
目の前の女性を泣かせてしまったことの方がどうしようもなく、
痛い。

「馬鹿にしないでよっ！ 何が受け入れられないよ！ 1人になん
てしない！ ソラが出て行くならどんなことをしても止めるんだか
らっ……！」

ぼろぼろと零れる涙をどうにかしたくて、とっさに抱き締める。
崩れ落ちた身体を支えるように、身体の震えを止めるように。

「……ごめん。ごめん、母さん」

「ソラのバカ！ ソラのばか！ ソラのバカ……！」

きつく抱き締められるのも今は為されるままに受け入れよう。

……俺って最低だな。

「……御母上、そろそろ放していただけたら至極幸いなのですが」

「……ソラが出てくの止めるまで放さない」

「出て行くといってもすぐではないので、暫くの猶予はあると思わ
れるのですが」

時間としては2時間ほどか。泣き止んでくれたのは幸いだ、ず
っと解放される気配はない。

いい加減身体が痺れて来たので解放を要求するが、どうにも呑まれる気配すらない。

「ソラと離れて暮らすなんて嫌！」

どうも母の精神年齢が下がっている気もするが、これはどうしてだろうか。

俺の精神年齢が年上だからそう見えるだけだろうか。いや、そうは見えない。

「そうは言われても……俺としては子供は親から独立するものだって言う認識だし」

事実、畑や家（この場合の家は土地や貴族などの立場だ。単なる持ち家はそれには当てはまらない）を相続する権利がある場合以外は子供は結婚したら新たな住居を構える。

それがこの村が若い人間がうちを除けばいない理由だ。畑を継ぐほど広い畑はなく、この村の工芸品である織物もあまり価値がないため後継者は他の町に出稼ぎに出ている。

うちは当然平民で守るべき家もなければ継ぐ畑もない。父さんはあくまで獵師だからな。そうになると、結婚するかどうかは別としても家を出ることに問題はないだろう。

夫婦2人きりになるのは問題かもしれないが、今は妹もいる。だから成人次第町に出ようと思っっている。いるのだが、まずは母を説得しなければこの体勢で今日一日を過ごさなければならぬかもしれない。

レニが寝ていることが唯一の救いか。もしくは、父が帰って来次第相談するのもありかもしれない。

「それでも！ まだソラは子供でしょ。私がソラを育てるの！」

「なら、町に引つ越したら良い」

「うおっ！？ 背後から急に聞こえた声に振り返ると、そこには我が父の姿が。」

「お、おかえり。父さん、随分今日は早いんだね」

「今日は狩りはせずに周囲の見回りだけだったからね。それで、話は聞いていたけどソラは町に出たい。クリスはソラと一緒にいたい。それなら、引つ越すのが一番だよ」

「いつから居たんだ、父よ。というか、俺慌てすぎでスキルすら使う余裕なかったのか……。」

「で、でもトニーは大丈夫なの？ 獵師団、抜けて困らない？」

若干沈んでいた俺を離さない！ とばかりに掴んでいた母上は何か焦った声を上げている。

そんなに俺が町に行くのが嫌なのか、あるいはこの村を離れたくないのか。

「うん。団長には話をしたし、この村も名産品が出来たからね。ジナさんの長男家族も帰ってくるって話だし、問題はないよ」

名産品はパンのことだろうか？ 作り方自体は単純だから、それこそ誰でも作れるものだと思うんだが。

ちなみに。父には酵母パンを作ったのが俺だということは話してある。

最初は驚かれはしたものの、うちの息子は賢いなあ、と暢気な一言で終わってしまった。

それでいいのか、父上よ……。

「住むところも、町には幾つか当てがあつてね。それで何とかなるよ。ここも出来れば手放さないようにするよ」

どうやら、母上の執着はこの村というよりもこの家を誰かに手放したくないらしい。

そういえば、ここは元々母の父、俺はあつたことのない祖父が建てた家だと前に聞いたことがある。

少なくとも、それを手放したくないのだろう。母は。

「今の家を売らないままで新しい家を買うお金はうちにはないわ。パンの道具で貰ったお金はあるけど……それでも足りないわよ」

「そこは……僕が狩りを頑張るよ。クリスマスもソラも、そしてレニも悲しまない方法があるならそれを選ばないと」

そうやって笑う父。……強い人だ。

「……父、それには及ばない。金策なら、いくらか俺にもあるからこの一月、俺が何もしていなかったわけじゃない。

村を抜け出し森に入ること数回、遠出してモンスターが出る森にまで足を運んだこともある。

それで集めに集めた素材の数々はちょっとした財産位にはなるだろう。

運が良いことに鉱石の露頭を何箇所も見つけ、只管に採掘しまくったのも貢献している。

それを生産スキル『加工』で幾つか塊にしてアイテムボックスに突っ込んである。

今回はそれをさらに加工して売る予定だ。

「子供がそんな気を使わなくて良いの！」

母のその言葉はありがたいが、そういうわけにも行かないだろう。

「俺がどこまで出来るのか、それも兼ねているから、そのついでだと思っただけだ」

ごとごとと音を立てて俺のそばに銀塊と金塊が落ちる。ミルリル銀やオリハルコンがあればもっと稼げるんだが、そんなものが道端に落ちていたらちよつとしたホラーだ。

それと、研磨済み、属性付与済みの宝石を幾つか出す。

「……何度見ても呆れるね、これは」

そこは驚くの間違いだと思うんだが、まあこの両親だ。どちらでも多分そう大差はないんだろう。

流石に加工する際に近くにいるのは危ないので、どうにかこうにか母を宥めて離れてもらう。

父が居るのも説得できた理由の1つだろう。

まずは銀塊を生産スキル『加工：プレスレット：ネックレス』と2つのベースを作る。

すると、塊が光り、二つに分かれ輝きを失うと落ちる。

プレスレットは成功で、ネックレスは失敗か。

『レジエンド』での生産は成功確率によって変動する。

判定は対象の生産の難易度を示した

$(DEX \div 100) \times (生産スキル \div 10) - 生産対象Lv$
%で計算される。

今回の場合、プレスレットが20のネックレスが50の生産対象Lvのため、

プレスレットの成功確率は80%、ネックレスの成功確率は50%だ。DEXをあげる支援スキルを使ったり、そういう装備品を身につければさらにあがったが、あくまでも今回はどこまで『レジエンド』の仕様が生きているかが問題のため、あくまでそういったものは使っていない。

なお、今回の鍛冶であればハンマーや金床があれば補正值が上がるため、いつもは愛用していた。

あとは、生産スキル『溶接』で宝石をくっつければ魔具が完成する。

溶接も専用の施設で行えばその分補正值がつき、成功確率が上がる。

溶接で本当にくっつくのかという疑問はあるが、くっつくのだから仕方がない。気にしたらきつと負けた。

「銀のプレスレット【風の守護】+2か。まあ、こんなものかな」

アイテムの鑑定結果はこうだ。

銀のブレスレット【風の守護】+2

銀で出来た腕輪。重さ3。耐久【100/100】

DEF+2【+1】 MDEF+5

備考：風の魔法を使用することが可能

これがこの世界では普通に使われる詠唱術を使う際に触媒とされる魔具になるらしい。

アイテムの後につくのは装備を作成した際に付くボーナスのことだ。

多少のランダム性はあるが、鍛冶師によって作られた装備に多くはこのような特典が付く。

まあ、+2程度なのでDEF+1しか付かなかったが。

ただ、見慣れない数値がある。耐久、だ。『レジェンド』の時点ではアクセサリに耐久はなかったはずだ。有ったのは武器や防具で、攻撃するたび、受けるたびに減り、それが0になると壊れる。

その数値を回復するのも鍛冶師のスキルの1つである『耐久度回復』だ。

それが現状付いているということは、魔法を使うたびに耐久が減るということだろうか？

「……そういえば、魔具って相場幾ら位？」

この村では魔具なんて売っていないから相場は分からない。魔法使いもこの村には居らず、きいたこともなかったし、商人の扱う商品にも魔具は今までなかった。

「安くても白銀貨2枚はするって聞いたけど……」

父よ。何故そんなに顔が引きつっている。そんな高額なものが簡単に作れたからか？

それにしても、白銀貨2枚か。白銀貨1枚が100万Rだから、……2000万もしくは4000万もするのかよ！？

「……よし。これを売ろう。といっても、そんな大金持ち歩けないだろうし、どうすればいいんだ？ 父上殿」

それだけあれば家も買えるだろう。物価や相場は分からないが、まあ問題ない。いざとなったら金で作ってしまえば良い。

いや、それよりも金は純金なんだしそれを直接売っても良い。変動資産かどうかは分からないが、そこそこの値段で売れるはずだ。

「町に行けばギルドの銀行システムが利用できるから、それを使う。魔術ギルドに持っていけば買い取ってくれるはずだから」

ギルドか。そういえば父は狩人ギルドに所属しているとか聞いたことがある。

「自分が所属していないギルドに持ち込みは可能？」

普通、ギルドといえば職業ごとの組合だ。プレイヤー同士の集団をギルドと呼称することもあるが、『レジェンド』では同じ目的意識を持った集団としてクランと呼ばれていた。

それはともかくとして、通常であれば排他的なギルドが他のギルドのメンバーからの持込を受け入れるだろうか？

「ギルド加入者でなくても、若干は安くなるけど買い取っては貰えるよ。特に魔具は品不足らしくてさ、良い値段を付けて貰えるらしい」

まあ、自分の所属するギルドでは不要でも他のギルドでは欲しいような品は決して少なくないはずだ。そう考えると、決して他を排除するのは正しくもないか。

「なら、次回の商隊が来るときか、狩りの時に俺も同行して町に行きたいのだが、父よ」

父1人では少々不安なところもある。護衛くらいは今の俺でも出来るだろう。

第2話 戸惑う気持ち。本当の気持ち。（後書き）

おそらくあともう一回ほど説明回が続きます。

…ボケが、ボケ成分が足りない

… R 計算を普通に間違っていたので訂正。
ボケは自分なのか。。。

2011/9/11 瑞樹様からのご指摘を受けまして生産の難易度の計算式を変更しました。

誤字等を修正しました。haki様ありがとうございます。

2011/9/13

誤字の修正を行いました。bogusmonster様ありがとうございます。
ごぞいます。

2011/9/29

誤字等の修正を行いました。ごるば様ありがとうございます。

第3話 学術都市と探検。(前書き)

お気に入り登録が50件突破!

PV10,000、ユニークも1,500を突破しました。

まだ導入すらほとんど終わっていないのにも関わらず読んでくださって感謝です

第3話 学術都市と探検。

……俺は案外弱いのかも知れない。

そうまず思ったのが前回のモンスター騒動の時だ。

あの時は血の臭いで吐きそうになったし、今回も馬車の揺れに内臓ごとシェイクされている感じしかない。

よく考えてみると前もレバーは生臭くて食べれなかったし、車に乗るたび気持ち悪くてずっと無理やり寝ていた。

車の免許は怖くて取れなかったしな。俺が運転なんてしようものなら絶対に事故に遭う。

今だからこそ確信して言えるが、前はどうなるか不安で不安で仕方なかった。

どこのどいつの仕業かは知らんが、本当にえらい目に遭わされた。

ただ、今もこうなってるってことは……単なる体質か、あるいは他の何かで絶望的に合わないのか。

事故には遭いそうにないから、暫く我慢するしかないか。

「ソラ、大丈夫かい？」

「……ええ、それはもう大丈夫ですとも」

心配して背中を擦ってくれる父上に礼を言う。

馬車に乗ること6時間ほど。とはいっても時計なんてないから体感的なものだが。

漸く着いた町の門の前で馬車から降りる。

同乗したとはいえ、こちらは帰りに便乗させてもらったに過ぎない。

そのため町の中に入る手続きは別々に行く必要があった。

「よう、トニー。この前来たばかりだけど、今日はどうしたんだ？」

「ああ。ジール、今日は買い物と知り合いに会いに来たんだよ。こっちは息子のソラ。ソラ、こちらはこの町の警備兵のジールだ。挨拶なさい」

「はじめまして、ソラです」

ややオーバー気味にぺこりと頭を下げてみる。その後若干上目遣い気味に目を見るのがポイントだ！

「おう。お前がソラか、俺はジール。この町の警備を担当している。よろしくなっ」

きらりと光る歯がまぶしいです。……西洋風の彫りの深い銀髪赤眼様が！ 俺の父の知り合いは全てイケメン様か！

いや、落ち着け。父の所属している猟師団は別に普通のおっさんやお、姉さまばかりで特に優れているわけじゃない。

それは偶然だろう。そもそも、町の顔みたいなものだ。

多少見てくれるは良いほうが良いに決まっている。そうに決まっていると信じたいです……。

イケメン警備兵と握手を交わし、問題なく町の中に。父の審査だ

けで俺は特になし。

まあ、見てくれは子供だからな。

アイテムボックスの中に色々としまいこんでると思っまい。

いや、まだ危険物は入ってないよ？ ホントだよ？ そのうち入れるつもりなだけだから。

「それで、父。まずは何処へ？」

要塞じみた壁面がすげーとか、亜人キターー！ とか人多っ！
とかは後で一通りするから良いとして。今は今後の動きを知るのが先だ。

ボケてもいいが、余裕をなくすのは知らない町では危険すぎる。

「とりあえずは魔術ギルドが先かな。その後お昼を食べて、知り合いのところに向かおう。だから、ギルドには僕1人で行くからソラは……よく行く食堂があるからそこで待ってなさい」

「父1人で行かせるのも不安だからね。少し、待っていてくれ」

行く先がもう決まっているなら早い。念のためだが、俺もついていったほうが良いだろう。

近くの路地裏に入り、特殊スキル：『変化』を使用する。

目線の高さが変わり、服装が変わり、髪の色が変わったことを確認すると、通りへ戻る。

「すまない、待たせたな。トニー」

「……ここまで来ると、どうしたら良いかもう分からなくなるね」

「すまんが、慣れてくれ。あと、そうだな。名前を呼ぶときは向日で頼む。あっちの名前だと何かあったとき拙い」

特殊スキル『変化』はそのまま見た目を変えるスキルだ。

熟練度ごとに効果の時間こそ変わるが性能は変わらない。

つまり、今の俺の姿は170cmほどの銀髪碧眼様になっているはずだ。

このスキルの面白いところは、パレットに作成した姿を保存、共有できるところにあった。

『レジェンド』の自キャラの外見データをコピー、クランメンバーに配り、また俺も貰う。

それで戦争時度々姿を変えては敵を混乱させたものだ。

同盟クランも混乱することになってひんしゆくを買ったこともあったが。

とにかく、今の俺は自キャラのデータをドロ、『レジェンド』時のキャラ、ドン・バチョの姿になっているはずだ。

他のメンバーは黒服の怪しいギャングだったり、子供だったり、着ぐるみだったりとまともなデータがなかった以上、これに落ち着くのは当然だ。

魔術師の格好をしているし、魔術ギルドに行くのであればこちらのほうが良いだろう。

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

町のメインストリートらしき大通りを歩くこと5分、いかにも怪しいですといわんばかりの黒い3階建ての建物の中に入った。

中は思ったよりは清潔にしてあるが、どこか薄暗く湿った空気が流れている。

俺たち以外客は今居ないらしく、静かな分さらに薄気味が悪い。

「魔具を買い取って欲しいんだけど」

父はそう言って俺が預けていた銀のブレスレット【風の守護】+2を取り出し、カウンターへおいた。

「魔具の買取……ですか。鑑定しますので、少々お待ちいただけますか？」

受付に座っていたおっさんが慣れた手つきで腕輪を弄る。さて、いくらになることやら。

おっさんといっても魔術職というよりも気弱な研究肌の中年にしか見えないが。

「……ちなみに、こちらは何処で手に入れられたのでしょうか？」

弄りながらこちらをちらりと、観察するようなおっさんの目。

「俺の家にあったものだよ。爺さんがそういうもんを集める趣味があったんだが、この前逝っちまってな。」

で、遺品を整理してたらそれが魔具だって事を書いた手紙と一緒に発見してな。

俺は別にそんなものに興味はねえから売っちまおうって思ったんだが、何かあったか？」

今即興で作った話にしてはそれなりに信憑性はあるだろう。

どういったものかはともかく、どうやった扱いを魔具がこの世界でなされているのか。

それを知らない以上、そういうしかないというのものもあるんだが。

「いえ……そうでしたか。ですが、こちらはどうやら魔具ではないようです。

ただ……それなりに価値はありそうなのでうちで引き取らせてもらうことは可能ですか……」

「ふーん。で、幾ら？」

明らかに嘘をつくおっさんに噛み付こうとする父を片手で制す。

こういうのは今突付くべきじゃない。

「そう、ですね。……能力も特についていないようですし、金貨2枚でどうでしょうか？」

足元を見るにしても程があるな。魔術ギルド全体がこうなのか？
なら、こっちは参加するべきじゃなさそうだな。

「ならいいや。鍛冶師ギルドにでも持って行って一度壊した上で再加工してもらうか。」

この宝石はここで外しちまったほうが良いな」

おっさんから腕輪を取り戻すと、腕輪についている宝石に手をかける。

魔具である以上、これが損傷すれば宝石の付加能力もなくなりかねない。

「ちよつ!?! い、いえ。そうであるなら、こちらで買い取らせていただきますよ?」

使う予定がないのでしたら、わざわざ他のギルドにまで足を運ぶ必要はないでしょう?」

「で、ではそうですね。金貨3枚で買い取らせてもらえればと思うんですが」

それでもまだ言うか。さて、どうしたものか。

「ヒュウガ、魔具じゃないならそれで魔術を使ってみたらどうだい? 君も簡単な初級魔法なら使えただろう?」

「いや、ここで使うのもおかしいだろ。まあ、知り合いの魔法使いに先に聞いておくべきだったか。けど、おっさん。あんたにはこの能力はどう見えるんだ?」

父の魔法が使えるアピールは確かにいい。それを否定しないまま、おっさんへバトンを投げつける。

「え、ええ。そうですね……これは……単なる銀のブレスレットですが」

「おっさん。上のもの呼べよ、な?」

にやりと笑って話す。単にこのおっさんに見る目がないのか、そう指示されているのか、あるいはこのおっさんの独断なのか。

「い、いえ。そうは言われなくても、これは単なるブレスレットですし……相場よりは良い値段を出させて貰っているのですよ……?」

「ふうん。俺が、”魔法を使って”みた時はちゃんと発動したんだが、それはどうしてだ？」

「……そ、そんなことはないでしょう？ これはちゃんと耐久性も減っていないですから……魔法を使ったことがあるはずがないんですが」

「ほお。何で魔具じゃないただ単なるブレスレットに耐久性なんてもんがあるんだ？」

後であればほど黒い笑いを見たのは初めてだと父に言われたが、そんなものは知らん。

「え……い、いえ。それは……その……」

面白いくらいにうるたえるおっさんの顔は笑えるが、もういい加減見飽きたな。

「ギルマス相手じゃねえと話にならなさそうだよな？ おっさん」

暑くもないはずの部屋の中で、滝のような汗を流すおっさんに連れられ向かったのは3階のやけに分厚い扉の奥。
ギルドマスターの部屋だ。

「うちのものが失礼したようだね」

「ああ。おかげで金は損しそうになるわ時間は盗られるわ、まあ良

い経験をさせてもらった」

いかにも典型的な魔法使いウイザードっぽい黒いローブをまとった爺さんも正直怪しい。

だが、ギルマスまでそうならこの町では魔術ギルドに世話にならないようにするだけだ。

「それで、改めて売ってくれるという魔具を見せてもらってもよいかの？」

「ああ。これだよ、爺さん」

手に持っていた腕輪を渡すと、爺さんは早速鑑定を始める。

「……ふむ、風の守護が付いた銀製の腕輪か……作り手が良いのか、能力の底上げも為されておるの。で、これを何処で手に入れたんじや？」

「爺さんの遺品だよ。爺さんが何処で何時手に入れたかは知らん」

この爺さんは少しは信用出来そうか？ 説明自体は今まで通りで問題ないだろう。

「いや、それはおかしいの。これが作られたのは最近……ここ数日のことじゃな。」

まだ守護の魔力が固定しきっておらん。それは作られたばかりの魔具の特徴なんじゃよ」

まじか？ とはいっても、『レジェンド』の時はそんなことはなかったし、こっちだとこれが始めての魔具だ。本当か嘘か分からん。

「……僕の知人の錬金術師が造ったものですよ。その人は人前に出ることを避けていました。」

「ちょうど僕が物入りだということわざわざ造ってくださいですよ。」

「父も案外演技が上手い。決して褒められたものではないんだろうけども。」

「ふむ。おぬしらには迷惑をかけたからの。迷惑料も含めて白銀貨3枚と金貨50枚でどうじゃ?」

「さっきの100倍以上かよ。いや、いいんだけど。あのおっさんどれだけぼろつとしてたんだよ。」

「ああ。次から無い様にしてくれよ?」

「分かって居るわ。あのものは度々同じようなことを仕出かしおつての。」

「次やったら除名処分ということも伝えておつたんじゃが。」

「そんなことをおぬしに言っても仕方なかったな。料金は現金での支払いで良いのか?」

「白銀貨は銀行への振込みでお願いします。金貨は現金で。」

「うむ。ならばギルドカードを出しなさい。」

「父は懐からカードを一枚取り出すと、爺さんに差し出す。」

「そのカードは爺さんの隣にある水晶らしきものに差し込まれ、すぐに取り出される。」

「これで振込みは終わった。現金は今持ってこさせるから暫く待ちなさい」

爺さんはそういうと父にカードを返し、部屋を出て行く。

よく分からないが、今ので銀行の口座に入金されたんだろう。となると、ギルドカードは結構便利なものなのかもしれない。

「これで残りの金貨50枚じゃ。間違いないの？」

「ええ、……後は受け取りのサインをすればいいんですね？」

上質な黒い布の小袋に入れられた金貨を数えた父は、取引締結の紙にサインをし、爺さんに渡す。

「うむ。これでよい。……で、ちと相談なんじゃが、よいか？」

「爺さん。先に言うておくが、魔具を作った人間の詮索と作成の依頼なら断るからな？」

魔具が不足していると言っていたし、まあ今のタイミングで言うならそんな所だろう。

「そうか……なら仕方ないの。じゃが、また機会があればこちらで買い取らせてもらえれば有り難いの」

「それくらいなら伝えておいてやる」

とはいっても、暫く売るほどのことはするつもりはないが。家の予算にはよるが、普通の家程度であれば何の問題もないだろう。

「それで、何処で飯にするんだ？ トニー」

「……ヒュウガ、いつ戻るんだい？」

父の言葉はどこか疲れている。きっと俺の豹変振りに嘆いているんだろう。

「まあ、いつでもこつできるからな。……ま、すぐ戻るよ」

慰めるように肩を叩くと、先ほどと同じように適当な路地裏に入る。

本来なら丸1日は持つこれを解く方法は時間経過以外でも結構ある。

ただ、あまり光ったりなんだったりをするのは目立つから止めることにして。

特殊スキル『なかつたことに』自分に掛かっている全てのステータスをなかつたことにする地味に便利だが、あまりに地味すぎて人気のなかつたスキルの1つだ。

というか、取得クエストがマゾすぎて挑戦する人間がほとんど居なかつたに過ぎない。

俺もドン・バチヨでなければ見向きもしなかつたスキルだ。

「父、ただいま」

「あ、ああ。ご飯にしようか」

歯切れの悪い父には後で聞こう。道中であまり話すようなことでもない。

父がよく行くと言う食堂へ。美味しいものがあれば嬉しいんだが。

とはいえ、町の中に何があるか分かりません。というか、ようやく町の見物が出来そうですよ。

ペティトアルテにドワーフにエルフに獣人。見る限りでは様々な人種が暮らしているのかどうかまでは分からないが、居るらしい。

獣人もほとんど獣のような犬の兄さんやら思わず抱き締めたくない猫のお姉さん。

俺のような人とあまり変わりなく、耳や尻尾など一部特徴を残したウサギらしいお姉様など種類は様々だ。

思わずバニーとしか思えないお姉様の後をふらふらと付いていきそうになったのは秘密だ。

ちなみにペティトアルテとは小さな職人という名を持つ小人族だ。

「思ったよりも高値で取引できたから、好きなものを頼んで良いよ」との父上の言葉に甘えようとここぞと言わんばかりに注文をしようとした、のだが。

「……名前は分かるが調理法がよく分からん。何だ、トテのギュリンドローって。グラッダのオースタートは一体何処の邪神だ？」

文字が読めて、ある程度の教養とこの世界の常識は身につけたものの。

肝心の調理法の名称が分からない。母さんの料理も色々名前はあるんだろうけど、それが伝わっていないのか俺が聞かなかったから材料がどんなものは分かっても、どんな味付けの料理なのかすら分からない。

「……父よ。ここに魚のムニエルやリゾット、もしくはマルゲリータでもいい。とにかく今言ったものに近い料理はありますか？」

「……その料理がなにか分からないけど、僕に任せてもらえるって事かな？」

とりあえずいえずと返事をするも首を傾げるも、気にしないことにしたのか近くに居たお姉さんをつまみ食い注文する父。

まるで聞いたことのない呪文のような言葉を口にする父は少し怖かったです。

「それで、さっき言っていたのはどんな料理なんだい？」

「……料理が来る前だからいいけど。ムニエルは魚を香草やら塩で味付けした後、両面を粉でまぶした後バターを引いた鍋で両面をこんがりやいたもの。酸味のある果物の絞り汁をかけるとなお美味。リゾットは米、ライスっていう穀物をブイヨンで煮込んだもの。野菜だの肉だのを一緒に入れて芯が残る程度に煮た料理だよ。で、マルゲリータは醗酵させた小麦粉の生地を薄く丸く延ばした上にトマトソース、チーズ、バジルをのせて窯でやいた料理。……そういや、そこら辺なら作ろうと思えば作れるな。いや、米が今まで見た

「ことないからな……なかつたらそれだけはどうしようも出来んぞ」

それはまずい。確かに醤油や味噌も捨てがたいが、あれは大豆があることは分かっているから作れる。

しかし、米がなければ日本人としての俺のアイデンティティが許さない！

「……これはまずい。……っと、何故ムニエルが？ 父よ、頼んだものの中に実はムニエルはあったのか？」

「いや……初めて見る料理だけど。ドミニクさん、どうしたんだい？ これは」

「こつちの坊やが言ってる料理が面白そうで旦那が勝手に作っちゃまったんだよ。」

それが一番簡単に作れそうだったからね。坊や、味見お願いするよ」

「そういつことなら、戴くことにする。ふむ、見た目は問題なさそうだけど。」

味は？ ……思ったよりも酸っぱい。もう少し酸味は弱めるか、かける量は調節したほうがいいかもしれんですよ……」

だが、確かにこれはムニエルだ！ パンしかないのが辛いところだが、全粒粉のパンにはむしろあうのか？

「そうかい。これくらいのほうが臭みは抜けて良さそうだったんだけどね。じゃあ、それでまた作ってみるよ」

「あー……それも好き好きなので、カットした果物を添えて、それ

を好みに応じた量だけ絞ってもらったほうが風味も飛びづらいいいかもしれませんよ？ そっちの方が見栄えもいいでしょうし」

「それは面白いね。じゃあ、うちのメニューに入れさせてもらおうかね」

「今日の料理代をまけてもらえるなら構わないですよ？ あと、次回来たときにもっと美味しいムニエルを食べさせてもらえるなら」

美味しいものが食べられればそれでいいが、あまり勝手にアイデアを盗まれても困る。

という建前は一応必要だろう。

「旦那も久しぶりに張り切ってるみたいだし、今日の分はただでいいよ。後はもっと料理のアイデアをもらえたら良いんだけどさ」

「そこまでしなくても、ここの店であれば問題ないでしょう？ ソラ、あまり無理を言わないようにね」

やんわりと止める父はやはり絶妙だ。こうやって口を出すタイミングを計れるのは猟師としての勘なんだろうか。

「そうだね。つつい調子に乗っちゃったよ。悪かったね」

苦笑するおばさまも嫌悪や怒りの表情は見せない。本当に自分も悪いと思っているんだろう。

「……ごめんなさい」

俺も自重しなければ。美味しいものは幾らあっても構わないが、

あまりそれを増長させるのもよくはない。

あまり異物は混入しすぎないほうがいい。多過ぎる差異は、いつかわが身に降りかかるだろうから。

結局、ギユリンダーは葉っぱに包んで蒸し焼きにしたもの。オースタートは解し身を丸めあげたものだと言っのが分かった。

それはともかく。

父のお勧めの料理を堪能し（それでも味が薄いのは変わらなかったが。これは素材が新鮮なものが多くからあまり香辛料などを使わないのが一般的だそうだ。あと残念なことにパンはまだ固いままだった。広まっていないのか？）向かうは家を仲介してくれるギルド。と考えている間に、建築ギルドへと辿り着いた。……食堂のすぐそばだったから辿り着くも何もないんだが。

「父上。母の意向もなしに家を決めてしまっって問題ないのですか？」

また話を聞かないとって泣かれるのは勘弁して欲しいのだが。レニは良い子だからほとんど泣かないが、それでもレニにも母にも泣いて欲しくない。

家族というのもあるし、基本的に女性の涙はどうにも苦手だ。

「大丈夫。クリスの希望も聞いて来たらからね」

自信ありげに頷くのであれば信じるしかない。あとは、俺の希望次第と言ったところか。

「分かりました……では父に母の要望に関しては任せます」

さっきの魔術ギルドとは全く違う。これも当然と言えば当然だが、2階建ての広い建物だ。

広く作られたフロアに、日の光が入って開放感が半端じゃない。客が多く入っているのも活き活きとした風情を出していて尚良い。

「やあ、シエッタ。久しぶりだね！」

「お義兄さん、ご無沙汰しています。お元気そうで何よりです」

義兄？ そう父を呼ぶ女性はどこかで見たような金髪碧眼だ。

どこかおっとりとした表情は母を重ねる……となると、俺の叔母なのか？

「今日は休みだったんだろう？ トーマスにも悪いことをしたな」

「旦那は今日も仕事ですから。ソラよね、小さい頃に一度会ってるんだけど覚えてるかな？」

「ええっと……いえ、ごめんなさい。覚えてないです」

わざわざしゃがんで俺の視線に合わせる彼女はきつと良い人なんだろう。俺の母の妹ならそれは保障できそうだ。

「そっか。まだ赤ちゃんだったもの。覚えてなくても仕方ないわね。改めて、あなたのお母さんの妹で、シエッタよ。よろしくね、ソラ」

「初めまして……じゃおかしいか。ご無沙汰してます、でいいのかな？」

「シエッタ。こんなところで立ち話もなんだ。案内してくれないか？」

「そうね、じゃあ案内するから付いてきて」

俺の手を繋ぎ、シエッタはカウンターの奥へ。何でわざわざこんなところにまで？

「義兄さん。ご無沙汰してます」

「フランク！ 仕事中にすまないな」

この世界では珍しい、メガネをかけた男は入ってきた父を見つけると小走りに駆け寄ってくる。

それなりにしっかりはしているものの体格的にあまり筋肉が付いていないところを見ると、建築士なんだろうか？

明るい茶色に近い赤毛と薄いグレーの瞳は細い体躯と相まって見るものを魅了するだろう。

……つまり、やはり父の周りにはイケメン様しかいないのかっ！

いや、だからとりあえず落ち着け俺。イケメン様許すまじっ！

とまではまだ至っては居ないはずだ。

「今日は家を購入すると言うことで来たと思っただんですが。違ったんですか？」

それなら確かにこの叔父にとっては仕事だろう。父はやはりどこか抜けているんだろうか？

「いや、そうなんだけれどね。久しぶりにフランクにも会えて嬉しいよ」

満面の笑みを浮かべる父に隙はない。父は猟師よりも他に適職があるような気がします。

「そう言ってもらえると俺も嬉しいですよ。シエッタ、お茶を頼むよ」

叔母夫婦は一瞬見つめあうと微笑みあい、離れる。……いちやつきやがって。

「それで……君がソラだね。義兄さんから話は聞いてるよ。随分とお利口なんだってね」

お利口。若干馬鹿にされてる気がするが、まあいい。まだ若いからだろう。

「初めまして、ソラと言います」

軽く頭を下げる。挨拶は先手必勝、それくらいの礼儀は流石に弁えている。

「ああ、初めまして。俺はフランク、ここで建築士をやっている。よろしくな」

流石イケメン様。笑みもやばいくらい決まってやがる。

こういう場合は俺は薄く笑うだけで十分だ。変に目立たないため

にも愛想笑いにならない程度の表情を作ったほうが敵を作りづらいからな。

「じゃあ、早速で悪いんだけど今住める家を教えて欲しい」

この町『学術都市バーレル』の平均的な家は賃貸で一月金貨1枚、購入で白銀貨1枚と金貨50枚だそうだ。

つまり、購入しても今回の魔具を売ったお金だけでも白銀貨2枚が丸々残る計算になる。

まあ、新築でないらしいからリフォーム代だの何だのにそれなりに費用は掛かりそうだが。

5〜6人暮らせる家が庭も付いて1500万。妥当といえば妥当なラインだな。日本だって高いのは土地代で箱はそこまでしないらしい。家なんて買ったこともないから分かりようもないが。

だが、そう考えると、家を2件買えるような魔具はどれだけ需要があるのやら。

今回こそ必要だったから行動したものの、やはり派手に動くのは危険だな。

魔術ギルドのギルドマスター^{じじい}だってやはり信用は置けそうにない。いずれはなんらかしらの交渉はする機会はあるかもしれないが。

「ソラは何か希望はあるかい？」

「お風呂と地下室が欲しいです」

風呂は切実だ。『ユグドラシルの葉先』では上下水道が整備されていない。いなかったからトイレはもちろん水洗ではなかったし、風呂もない。

水浴びが一般的だったのは結構しんどい。

こっちは上下水道が整っているらしいからそこに関しては問題ないだろう。

問題は何処までそれが町のシステムとして浸透しているか、だ。

あとはあまり人目に付かないところで研究や錬金を行いたい。

鍛冶は炉の問題や音の問題も有るし家に工房を持つのはほぼ不可能だろう。

それを両方満たし、父と母の要望も叶えられる。そんな家があるのだろうか？

「その条件だと、あるにはあるんだけど。ちょっとお奨めできないな」

渋い顔のフランク。そんなに好条件なものを売りにたくない、というわけでもなさそうだ。

「何か曰くでも？」

俺の問いに顔を引き攣らせる。当たり前だな。

「見た目は広くて安いから何度か契約にまで結びつこうとするんだが、建物まで行くとどうしてか気持ちが悪くなる、帰りたくなる、原因不明の病にかかる、夜悪夢を見るとかで決まらないんだ。

で、そんな家をずっと保有するのも金が掛かるからって壊そうとすると道具が壊れたり、作業員が怪我をしたりですつと放置したままなんだよ。そこ」

崇りか、それは？ それにしては随分と甘いと言うか、下手したら子供の悪戯レベルじゃないか？

確かに不気味だし、そんなのがずっと続くのであれば住みたくはないだろうが。

「ソラ、どうしたい？」

「……見てみたいです」

「いやいや、義兄さんもソラも話は聞いたろ？」

今はまだ誰も大怪我をしたりはしてないけどな、不気味だぞ？

住もうとした客の全てがあそこは関わりたくない時まで言い出すんだからな」

そこまで素直に言えるのは好感が持てる。

自分が不都合になりそうな情報は意図的に隠される場合が多い。

それでもちゃんと情報を出せると言うのは素晴らしいと思う。

「大丈夫だよ。場所、案内してくれるかい？」

「どうなっても俺は責任取れないですからね」

……紹介したのは叔父さんだと俺は思うんだが。

というか、父よ。俺に解決させる気満々だよな、これ。

歩きながら紹介された『学術都市バーレル』のことをここで少し纏めよう。

この町は前に手紙が届いた魔法学校があることで栄えている町だ。円形に広がる町は町を4分割する通りで大きく区切られている。1つが、魔法学校を始めとするその関連施設が立ち並ぶ学術区。1つが交易などで入ってきた商品を売る商業区。1つが町民が暮らす住宅区。そしてもう1つが大商人や下級貴族が暮らす高級住宅区だ。

ちなみにギルドや食堂は商業区にあり、今案内されている建物は住宅区にあるとのことだ。

案内されてやってきたのは想像以上に広い、これはむしろもう家と言うよりも館と呼んだ方がいいんじゃないか？

まるで貴族が住むかのような馬鹿でかい3階建てのそれは、別に外見からいかにも何か不吉です！ と言うような不気味の悪さは感じない。それならまだ魔法ギルドの方が不気味だ。

周りの家とも不思議と調和が取れているし、どちらかと言えば一瞬眼に止まってもそのままスルーしてしまいそうな、そんな不思議な家だ。

いや、正しくは正しく認識できないように、スルーされてしまう。そんな認識のズレを起こさせられている。

俺も父も、きっとここを目当てで来なければ認識すらしなかっただろう。

「……父、恐らく魔術が何かで守られている。俺が行くから、父はここで。それと鍵を」

「駄目だ、と言っても勝手に行ってしまいそうだしね。フランクに

は上手く言っておくから、無理はしないようにね。

フランク。家の中を見たいから鍵を借りたいんだけどいいかな。

ああ、ありがとう。

ああ、そういえばこの周りの家のことなんだけどね」

そういつて父はフランクに鍵を貰い、こっそりと鍵を俺に渡してくれる。

了解、と短く返事をする。特殊スキル『気配探知』『鑑定』を起動させる。

単なる建物ならどちらも反応はしないはずだが、さてどうなるだろうな。

待ち人の家

DEF ???? MDEF ???? 耐久度【5874 / 100

00】

主人の帰りを待つ家。

招かれざるものは無事に入ることには出来ない。

備考：自動警備用の魔法陣展開中

これ、『クランハウス』かよ。

『レジエンド』ではクラン用の建物が幾つかあり、規模によってその形式や維持費、機能が異なっていたが購入すれば家を持つことが出来た。

さらに費用と素材を使えば強化と増築も出来たな。

そこではクランメンバー用の倉庫や専属NPCからサービスが受けられたし、回復率増加なんてのもあってボス狩りの後は祝賀会をしながらまつたりと過ごすことも多かった。

通常の建物ではこういつた鑑定は出来ないが、『レジェンド』では戦争時、町の建物の破壊は出来ないが『クランハウス』を襲撃して破壊することは出来た。

戦争後、呆然とクランハウスの残骸の前で立ち尽くすクランがいくつあったことか。

そのため、クランメンバー以外にはその家の防御力を知ることが出来ないが、鑑定スキルをカスタムしたら耐久度を知ることが出来た。

そんな経緯もあり、俺はここをクランハウスだと睨んでいるが、NPC……もとい、ハウスキーパーなどが中に居る様子もないし、主が不在のときに発動する自動警備といえは聞こえは良いが、要は悪戯防止の防衛が何らかの形で残っていてずっと動作しているんだろう。

クランハウスは何もしない状態でも1日耐久度が1下がる。一ヶ月がこの世界は固定で30日だから、10年は誰も住んでいないのだろうか。

とはいえ、入るためには邪魔なだけだ。魔法陣を壊そうにも当然魔法陣は家の中にあるだろうし、外部からは干渉できないようになってるはず。

そうなるとうつ入ったものかとは思うが、まずは正攻法だな。

鉄で出来た門扉を鍵で開け、中に入る。

1歩踏み出すと頭の奥がずきつと痛んだ。1歩進むとさらに頭の痛みが増す。思い切つてジャンプしてみると気持ちが悪くなってきた。それに懲りず進んでみると帰りたくなつた。まだ諦めずに進むと何でこんなところに居るんだ、と強く思うようになった。

色々順番がおかしい気はするが、これがフランクが言っていた客が契約しない理由か。

恐らく館の主人が不在の時に近づくものを追い返すように精神に働きかける魔法陣なんだろう。悪趣味な。

特殊スキル『なかつたことに』を使用して、今までの嫌悪感をリセットすると、一気に駆け出す。

このスキルの最大のメリットは、名前の通りなかつたことになるため、蓄積型の呪いでも呪いが発動する前にまで戻す。

その場合は最初から溜め直しになるから、敵が使ってきた場合それまでのSPが無駄になるという結構暴虐なスキルだ。

まあ、今回は館の中までの距離かもしれないからあまり関係はなさそうだが。

館の扉にまで辿り着いた俺は、鍵を鍵穴にぶっさし勢いよくまわす。

普通の家なら鍵穴か鍵が壊れそうだがクランハウスであるなら多少荒っぽく扱つても問題ないだろう。

どうせ後で扉は交換する予定だし。

鍵が開いた音を確認すると、中に入り扉を閉める。

この状態で身体の異常はないから、あくまで入るまでの嫌がらせ程度の効果しかないだろう。

あまり強い効果であれば壊されてるだろうし。

館の中は、10年掃除をしていなかったこともあり、埃が層にな

って積もっていた。

一切足跡がない以上、埃が積もるようになり始めて以来、誰かが中に入ったことはなかったんだろう。

怪しい気配も今のところは感じないし、人の気配もない。とりあえず、魔法陣のあるところまで進むか。

中を探索して分かったことが幾つかある。

まずは意外なことに罠がないこと。まだ全ての部屋を探索していったわけではないが、クランハウスにはクランメンバー以外の重要な施設への出入りを防ぐため要所要所に守護者を配置したり、罠を張り巡らせたりする。

その代わりなのか、重要施設へ入れる方法が面倒くさい。鍵が基本どこかに隠されていて、ドアを開けるために鍵の掛かっている引き出しの鍵を探したり、火のともっていない燭台を引いて隠し扉を見つけそこから見つけたボールで封じられていた扉を開いたり、と。ここは何処の脱出ゲームだ！ と言いたくなるほどの手の込みよ。うだ。

この館の主人は相当に悪戯好きか、性根が曲がっていたんだろう。俺が脱出ゲー好きでなければドアを全て吹っ飛ばしているところだった。

そして、そんな中見つけたのが1冊の手帳。羊皮紙で作られたそれは随分と昔のものらしく、結構ぼろぼろだ。

読むのにはインクが掠れていたりして困る部分も多かったが、何とか解読は出来た。

この家の主はオーデッサリア。どっかの貴族の三男坊で、結構な

家柄の出だったそうさ。

だが、道楽人のオーデはまだあまり栄えていなかったこの町に家を立て暮らすことにしたそうさ。

その経緯や理由はインクが滲み読み取れなかった。まあ道楽にまともな理由はないだろうし気にするほどのことじゃない。

そして、この館に仕掛けられている魔法陣のことが書かれていた。

家柄の良い貴族が越してきた、ということでも町の柄の悪い連中に目をつけられたそうさ。

普段はお抱えの警備員を雇ってそれに対応していたらしいが、深夜や自分がいないときはどうしても警備が手薄になる。

盗られて困るようなものも少なくなかったし、そういった連中が自分の足元をうるちよろされるのも腹立たしい。それで知り合いの魔法使いに頼んで家に許可なく近づくものには追い返すような魔法陣を組んでもらい、道楽仲間の大工に協力してもらい家をからくり屋敷に改造してもらったそうさ。

俺からみたらどう考えても単なる嫌がらせでしかない脱出ゲーだが。

つまり、これは道楽ついでの防犯で中に入ってしまえば害はないというわけだ。

入ったら入ったで扉を開くための労力をかけさせられるのもしんどいんだが。

まあいい。途中で見つけたマスターキーがある。後はさくさくと進めるだろう。

能力チートであれば何でもできると思っている時代が僕にもありました……。

マスターキーだと信じてたのに。鑑定もして間違いなかったのに！

……何故かマスターキーだけ脆くて折れました。幸運にも鍵穴から折れた鍵は回収できたので問題ない、というか。他の扉内開きなのに対して、この扉だけ何故か外開きってどうよ。

むしろ能力チートに頼らずここまできて、最後の最後で裏切られた気分だ。

あれか？ 鍵にも実は隠しステータスとして耐久度がありオーデが使いまくってたから脆くなったのか？

ええい、考えても仕方がない。アイテムボックスからナイフを取り出し、上下に取り付けられていた蝶番をさっくりと壊す。

……邪道なのは分かってる。あえてここで鍵を探すのが正しい脱出ゲームの作法だって言うのも分かってる。言われなくたって分かっているんだよ、ちくしょう。

蝶番が壊れ使い物にならなくなった扉を逆側に開け、とりあえず壁に立てかける。

床には弱弱しい光を放つ魔法陣。これはあと数年もしたら何もしなくても消えそうだな。

そうはいつても、家が欲しいのは今。地下室自体何部屋かあるみたいだし、俺としても都合がいい。

魔法陣の効果は人を退けるもの。魔除けに近いし、消しても構わ

ないだろう。

これが町の外であれば魔除けを張りなおさなきゃならないところだが、学術都市の異名を取るこの町の魔法陣や外壁はそうそうモンスターの進入を許しはしないだろう。

必要であればもっと効率の良い人払いの結界を張ってしまえば良いだけのことだ。

「そうはいつでも、魔法陣を消すのもこっちの世界じゃ初めてなんだけどな。

この場に在りし力よ。我はそれを否定するもの。強き力よ、沈まれ。過ぎ行く力に、永遠の沈黙を。魔法解除デイスベル」

若干の不安はあったものの、魔法陣は最後の足掻きかのように一瞬強く光ると、その光を宙に投げ出し、消滅する。

さて、これで家の問題はひとまず片付けられそうだな。掃除したり、補修したりとやることは多そうだが、建築ギルドでそういった依頼もかけられるだろう。

ギルドの人間も入れなかったのか、部屋には家具も残ったままだし、捨てることになるものもあるだろうけどそのまま使えるものもあるだろうからその辺も安心できるだろう。

「父、ただいま戻りました」

「お帰り、もうすんだのかい？」

館を出て、待っていたのは父と叔父。1時間は少なくとも掛かっ

ているとは思うのだが（体感時間的に）2人ともずっと待っていたのだろうか？

「はい。もう平気です。父、契約をお願いしたいのですが」

叔父が居る以上、どう話せばいいか加減が難しい。そのせいで変な敬語になりっぱなだが、緊張していると受け取ってもらえるだろうか？

「実はもうすんでいるよ。ソラが行っている最中にね」

父は豪快なのか、先をあまり見ていないのか。俺がもし失敗したらどうしたんだろうか。

「義兄さんの慌しさには少し参りましたよ。家の中すら見ていないのに契約したいって。」

中を見るのは契約した後でいいから、って俺でも始めて聞きましたよ
「たよ」

苦笑する叔父はどこか諦めが入っている。父はどうやらこうやって人を困らせる趣味があるらしい。

「それにしても、ソラは何処に行っていたんだ？ 義兄さんとギルドに戻ったときには既に居なかったよな？」

「ええと……館の探検、してました」

てへ、ととりあえず誤魔化してみる。子供ならまだこれですむかなっ！？

「おいおい。この何年もギルドの人間も立ち入り出来てなかったんだぞ？　もし床板が腐ってたらどうしたんだよ」

呆れた叔父に心配の色は見えても怒りは見えない。……このイケメンイイヒトがっ！

いや、きっとこれくらいでないかと母や叔母の旦那としては不良品だということなんだろう。きつと。

館の改装案に関しては父に丸投げして、（嫌そうな表情で見られたが見て見ぬ振りをした）町に出かけることにした。

そのことを伝えると、お土産でも買っておいでと魔術ギルドで買った小袋の中にくらかお金を入れてもらって送り出された。

父上、幾ら俺が今回のお金を作ったとはいえ、銀貨50枚は子供のお小遣いにしては多すぎると思うのですが。

前でもバイトした分と小遣い合わせてももう少し少なかったと言うのに。親ばかなのでしょうか？

まあ、貰えるものはありがたいといたたくとして。子供が持つにしたらやはり多すぎるのですよ。

そんなわけで変化して町を廻ることにしました。これならちょっと柄の悪いお兄さんに囲まれてもばれることはないでしょう。

流石に大きい町だけあって活気もあり、ただ歩いているだけでもわくわくしてくる。

人ごみの多さには少し辟易するものはあるが、あの村では一年に一回の祭りのときですらここまで人が集まることはなかった。

まあ、100人ちよいがひっそりと暮らす村だから比較の対象にすらならないんだが。

そんな中を苦勞して進むと、暫くして中央の広場に出た。

正規のやり方かどうかはわからないが、地面に布を広げ、商品を並べ声を張り上げ売込みをする。

それを見てまわる客はそれぞれだ。この景色は『レジェンド』のそれにて、思わず笑みが零れた。

「お姉さん、これ幾ら？」

「この首飾り？ 銀貨1枚と銅貨30枚だけど、お兄さん素敵だから特別に銀貨1枚と銅貨10枚でいいわ」

「お姉さん気前いいねえ。じゃ、これも一緒に買っよ」

母と妹へのお土産でも早速調達しようとおれこれ見てまわった中で、細工を取り扱う店で俺は立ち止まった。

「ホントっ？ じゃあ、あわせて銀貨2枚と銅貨50枚。サービスで包んであげるわ」

「ああ。じゃ、銀貨3枚からでいいか？」

その中でも首飾りとイヤリングを選び、小袋の中から銀貨3枚を取り出し、渡す。

これでまずはご機嫌取りは上手く行くだろう。鑑定はしていないが、この細工は中々凝っている。

「じゃあ……おつりの銅貨50枚と品物ね。また寄ってね」

おつりとそれぞれ包まれたものを受け取る。

さらに出ていた屋台でパニーニのような、固いパンを薄く切り開いたものに肉と野菜をはさんだものを2つ買っと、また館へ。気配探索により父がそちらへ移動していたのがわかったからだ。

「父上、早めの夕飯として食べると良い」

「ああ。そうだね、ありがとう」

当然戻ってくる前に、変化はなかったことになっているのであしからず。

まあ、叔父が大工らとともに修理・補修箇所を見回っているらしいので今はここに誰も居ないのだが。

埃だらけの家の中で物を食べることに若干抵抗感はあるものの、さっさと食べてしまえば問題はない。駄目だったときはお腹を壊すだけだ。死ぬことはないだろう。問題はない。

「……おええ、ふおうきふあった？ ふいふい」

「きちんと食べ終わってから話すように。行儀が悪いよ」

おっと、失礼。とはいってもこれはやはり水分がないと辛いものがあるな。

とはいっても完全に失念していたから飲み物は買っていないし、アイテムボックスには……試作のポーションしかない。

まあ、流し込めば良いだけだ。2つほど出しておこう。

喉に流し込んだポーションは思いのほか滑らかだ。舌に残る味が微妙なものだ。

これでも無理やり果物を詰め込んだおかげかそのままのポーションに比べたら随分と飲みやすい。

「それでは改めて。どう決めましたか？ 父」

父にもポーションの瓶を渡す。そういえば、この瓶は何処で精製されるんだろうか。

俺が使った材料はリーンの草という干して煎じると薬草になるという草と同じく薬草になる薬花だ。

それと臭み消しのために林檎をその草の3倍ほど。両方薬になるのだからと思って調べてみたのだが、上手く成功したようだ。ただ、ガラスの瓶を用意した覚えは俺はない。

だが、そんなことも知らない父は嫌そうな顔でそれを喉に流し込む。

「……ソラ、このポーションやけに苦くないんだけど」

「それはそうでしょう。これでも俺の渾身の一作です。味を優先したためHPもSPも回復量はたいしたことがないですが」

飲みながら説明を聞いていた父がぶはっ、とむせ液体の一部を床

に零す。

「父、飲み物を粗末にするのは如何かと」

「……ソラ、ちなみにこれの効用はどうなってるのかな？」

「鑑定したところ、名前は『特製ポーション』HP+500 SP+250 それと3分間継続で20秒ごとに最大HPとSPの回復+5%ですね。まあ、チャージがあるのでまだいいものの、回復量としてはいまいちなのですね」

せめてHPだけであれば1000、SPであれば2000は回復してくれないと困る。滅多に当たらないとはいえ、それが上位級ボス並みの敵に遭遇したら危うい。せめて10個ずつは保有しておきたいところだ。

3分丸まる自動回復を抜きとしても最大45%。低くはないが瞬発力としては足りない。

「ソラ、これ売りに出さないようにね」

「分かっています。この程度では売値もたいした物にはならないでしょうし、材料が集まりやすいとはいえ小遣い稼ぎならもったいなくありませんか？」

「ソラ……これ売りに出せばきつと、1つ銀貨20枚は取れると思っよ」

「村の中にも生えているような簡単な雑草と果物だけで作ったものがそんなにするはずがないでしょう。父、からかうにしても程がありますよ？」

幾ら俺がこの世界の物価を知らなくても単なる草と果物がそんな価値を持つわけがない。

「……やっぱりこの子にはもっとこの世界についての教育が必要そうだね」

失礼な。

「それは今後の課題として……今日中に村には戻れそうですか？」

「高速馬車を使えば可能だろうけど、後はフランクに任せてあるけど、きつと今日帰ろうとしても帰り着くのは明日になりそうだね」

そうだった。馬車に乗らなければならないんだった。辛い思いすぎてすっかり忘れてましたよ。

その時、俺の脳裏にはあるスキルとそれに基づく騒動が思い出されていたのだった。

何故昔話の語り部口調なのかは分からないが、改善できる方法は見つかった。

「父よっ！ 馬車を買いますよっ！」

第3話 学術都市と探検 (後書き)

今回も説明回となりました。

次回こそあらすじに沿うような骨組みは出来るように頑張りたいです。。。

館と町でそれぞれ1回ずつ立った戦闘フラグは発動されませんでした。

…戦闘はやはり行わせた方が良いでしょうか？

評価や突っ込みお待ちしております。

2011/9/11

誤字等を修正しました。haki様ありがとうございます

2011/9/13

種族名を事情により変更。。。海松房千尋様、ご指摘ありがとうございます。

2011/9/29

誤字等を修正しました。ごるば様ありがとうございます。

2011/10/4

誤字等の修正を行いました。まーやさまありがとうございます。

第4話。ちーとというもの。(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

いつの間にかPV49000オーバー、ユニークも60000オーバー
お気に入りも450件以上になってるんですけど。。。
日間ランキングも6位に！

順調すぎて少し怖い今日この頃です。。。。

第4話。ちーとというもの。

「父よっ！ 馬車を買いましたよー！」

「ソ、ソラ？ 急にどうしたんだい？」

まあ、途中の言葉をすっぱかした分、少し突拍子がなかったかもしれない。

「早く村に帰れる方法を思い出したんです。

もし今日既に宿を取っていて、明日も叔父に会われるようでしたら明日で構わないんですが」

そもそも、任せたというものの、それが何処をどう任せたのかも聞いていない。

下手に弄ると危ないものなどは流石にないものの、歴史的価値の高いものは整理して売るなり何なりしないといけないだろう。

いきなり粗大ごみに出される心配はないが、二束三文で買い叩かれる可能性は十分にある。

それに、オーデ氏が何故この館を離れることになったか分からないうが、装飾品や衣服、武器の類も幾つか残されたままだ。

魔法陣をちゃんと解いていかなかったこともあり、価値のある品物が残っている可能性は非常に高い。

万が一呪いの類のものが紛れていた場合、非常に面倒なことになりそうだということは今は黙ってしよう。

「僕としては明日の昼ごろにでて、夜には到着する予定なんだけど

それでいいよね」

「はい。俺は付いてきただけですから、構わないです」

「うん。ソラが付いてきてくれたのは正解だったね。」

僕じゃきつとあそこまでの値段は引き出せなかっただろうから

「とはいっても、今回は運が良かったとしかいいようがないんだけれどね。」

あ、そうそう。一度館の中にあるものをこちらで調べるから触らないように言ってもらえれば幸いなんだけど」

考えながら話すと言葉がさらにおかしくなる。

どつちかに固定するようにしたほうがいいな、やっぱし。

「僕も詳しくは分からなかったけど、一度専門家を入れたそうだったよ。」

10年以上、ここには人が入れなかったそうだから、魔術ギルドも関心があるらしい」

あの爺さんならそうだろうな。と、なると入れなかった原因の究明とそれにかこつけての技術の盗み取りをやつらならしかねない。

「魔法陣を解除したから入れないほうがいいと思う。」

俺がした、ということまでは分からないだろうけど怪しまれるのは確実だし。

何より、知識財産の共有とか、そういうものを理解しようと思し
ないだろうし」

あくまで、知識の財産であり、知的な財産ではない。

魔術とは昔から秘匿されるものらしい。

昔の魔術師と交友関係のあったオーデ氏の館からそういつた品物が見つからない可能性は低いだろう。

ああいう輩はそれが他の人間のものでも自分たちの占有財産にでっち上げかねない。

別に権力を有したいわけじゃないが、そういう一部の人間の勝手でつまらない独占市場を作られるのは正直面白くない。

それは俺が日本の学生だったから思うだけかもしれないが、魔具のことを考えるとおそらくは正しいだろう。

父や母には一度確認をする必要があるが、高々500程度の回復しかしないポジションだけであんなに動揺することはない。

高レベルキャラであればあの程度飲んだうちに入らないし、中級でもがぶ飲み、あれをメインとするのが難しいのはそれこそレベルが100〜200程度の初心者だ。

特製ポジションと言う名前こそ聞き覚えはないが、それは俺が普段ポジションでは使わない果物を使い、バランスを調整したために独自の名前になっただけで、それこそ『レジエンド』で一番最初のクエストでナイフと一緒に渡される初心者用のポジションとさほど効果は変わらない。

料金の高さにも引っかけりは感じるが、あれは大げさに言っているだけで実際はもっと安いだろう。材料もただ同然だし。

俺が『レジエンド』最高峰の生産職プレイヤーの1人だったという自信はあるが、それがこの世界で通用するとも思っていない。

村の人間のレベルはそんなに高くはなかったが、あんなに平和な村だ。ゲームで言えば始まりの村と言った所で、高レベルの人間は居ないだけだろう。

そうであるのなら、これはギルドもしくは特定の個人（この場合の個人というのは商人が貴族のことだ）の起こしているものである可能性が高い。

正直、魔王が復活することに対しての不安からの備えというよりも信憑性は高いと思っている。

出来れば冒険者なり各生産ギルドからの情報を集めたいが、それは手段を用意しなければならぬだろう。

「うーん……。安全の調査のためってことも言ってたし、ソラも見落としている部分もあるかもしれない。

僕としては協力しても良いかなと思ってるんだけど」

つと、確かにそれは一理ある。あくまで俺は最後の魔法陣が設置されている部屋以外は正規の手段で入った。

それ以外の方法で入ろうとしたらどうなるかは試していないし、全ての部屋に入ったわけでもない。

家族がちよつとした間違いで傷ついてしまうような家にはおちおち暮らしてられない。

「試してみたいことがある。それが成功したら、ということだ」

諸悪の根源は魔法陣にあるんだ。なら、それを利用してやれば良い。

父上がまた何故か引いているが、その原因は分からない。

「フランク。見積もりは出来たかい？」

「ああ。損傷箇所は思ったよりも少ないし、補強もほとんどいらない。」

「このまま使うなら5日もあれば暮らせる位にはなりそうですよ。義兄さんの要望通りに手を加えても10日ばかりと言ったところですね。」

「思ったよりも早いね。なら、それでお願いしたい。今日はまだ工事はしないんだろう?」

「もうこんな時間ですからね。義兄さんは宿はもう取っているんですか?」

「もしよければ、うちに泊まっていきませんか?」

「シエツタも義兄さんに料理を振舞いたいと言っていますから。」

「残念だけれど、宿は既に取っているからね。夕飯だけお呼ばれしようかな。」

「僕たちは荷物を宿においていくから、フランクは先に行っていてくれないか?」

「残念そうに話す父。何時の間に宿の手配までしていたんだ、とか疑問は残るが、そこはそこ。」

「俺としても否はないし、父が俺に都合の良いようにしてくれているんだろうと当たりを付け感謝する。」

「久しぶりに夜通し義兄さんと飲めると思ったんですけどね。またの機会ということだ。」

「明日も仕事があるって言うのに夜通し酒盛りか。」

「それは酒に強いと言うことだろうか、もしくはサボタージュ公言だろうか?」

まあ、仕事さえしてくれれば俺はどっちでも構わないんだが。

どこか拗ねたような叔父の後姿を眺めた後、俺は元々魔法陣があった場所とは違う、鍵の掛かったままの部屋に向かうことにした。

父は、悪いが留守番だ。

魔法陣が発動している以上、害がないのは分かっているが、誰かがもし来たときにお引取り願ってもらわなければ困る。

元の部屋にしない理由はただ1つ。

あの部屋にはもう魔法陣が残っていないことを見られている可能性が高いからだ。

もし、叔父がそれを見た場合は不審に思うだろう。

魔法の発動は、この世界の魔術の体系上、ある程度認識できるようになっていているものが多い。

そうである以上、10年以上この館を守り抜いてきた魔法陣が消えて、また復活しているのはあまりに不自然だろう。

そのため、若干手間は掛かるが新たな魔法陣というアリバイを用意することにした。

既に鍵は入手済み。内開きということもあるが、これ以上壊したりスキルを使うのはあまり好ましくないだろう。

決して、俺の趣味で探し回ったわけではない。

ガゴン！ と重い音とともに鍵が開き、ギギギ……と随分重い音と、実際に重い扉を何とかして押し開く。

「吹く風は翼を成す。我が背にその翼を宿せ。空を舞う自由を。」

開いた後は身体を浮かせる。重厚に積もった埃の上に足跡を残さない配慮だ。

10年の埃がこの部屋にないというのはどう考えてもおかしいし、真新しい足跡が残っているのはさらにおかしいだろう。

幸いにもこの部屋においてるものは簡素で崩れかけた平台と申し訳程度に置かれた椅子のみ。

貴族の家にしては不釣合いだが、元々おいてあったものを出るときか何かで処分してしまったんだろうか？

どちらにせよ、都合の良いことには変わりない。宙に浮いたまま、俺はメニューを呼び出し、スキルウィンドを立ち上げる。

『レジェンド』でスキルを使うときは3種類手段があった。

1つは、この世界で詠唱術と呼ばれるもので、希望のスキルを思い浮かべるとシステムが起動、そのスペルをウィンドに表示、後はそれを唱えるとSPかHPあるいは両方を消費してスキルを発動する。

前衛である騎士や侍などに代表される剣や鈍器、或いは格闘技を使うスキルは威力が薄い、或いは1対1で詠唱は短いもの。対して俺のような大量の敵を狩るのに向いた後衛用のスキルは長く、複雑なものが多かった。

それと、もう1つ。変化などもそうだが、スキルパレットと呼ばれる専用のツールで造形し、それをストックして任意に発動させる。魔法陣は『レジェンド』ではそういった役割を持つものだった。

あともう一つ、必要条件を満たせばスキルが発動するものもあるが、それは今は関係ないから良いだろう。

ともかく。魔法陣はスキルパレットに書き出されたものをここの床に転写すればいい。

幸いにも攻略情報として有効な魔法陣は出回っていたし、克蘭メンバーにもそういつたことが好きで戦争時に役立てるように、と開発したものを幾つか共有されているものもあった。

その中で中々使えそうな魔法陣を見つけたので、それを組み合わせせて一度魔法陣を張ることにする。

効果としては、この陣を張られた建物が傷つけられそうになった場合、それを無効化するもの。

そして、建物に入ること許可されたもの以外が許可された人間以外と近づこうとする場合、行動範囲の制限と移動速度のマイナス補正が入るものだ。

どちらも戦争中に克蘭ハウスが攻撃されるのを防ぐため克蘭メンバーが作り出した防犯魔法だ。

それも、魔法陣に込められた魔力に基づく防御力を上回った時点でダメージは通るんだが。

そして、さらに特殊スキル『促進』を使う。

これは魔術ギルドのギルマス爺さんに言われたことへの対応だ。

このスキルは物を成長させる。させると同時に、劣化させるものでもある。

それを『レジェンド』で有名にさせたのが、やっていたプレイヤーの中では有名な召喚術騒動だ。

ある日の戦争中、召喚獣を呼び出していたあるプレイヤーがあまりの時間の掛かり具合にイライラし、何の気はなしにその召喚陣に

促進のスキルを使った。

通常であれば、下手したら戦争が終わっても召喚は途中で召喚陣を打ち消されるか、ほぼ最後になってようやく現れるような使い勝手の悪いものだ。その分、運用次第では状況を逆転できるのだが。

その結果、どこかの赤いやつの如く、通常の3倍のスピードで召喚された召喚獣の存在を良いことに、事もあるう事か、敵味方それぞれ行使できる最大の召喚をしゃがった。

その結果が、ぶっ飛ばされる前衛、逃げ惑う後衛、そして世界の終わりを体験したかのような呆然とした初心者たち。最後は5m級のドラゴンが入り乱れる、怪獣大決戦のような地獄絵図を見る羽目になった。

戦争終結後、当然町は壊滅。外にいたNPCは全て姿を消し、克蘭ハウスは全て消滅。

そんな惨事を目の当たりにした運営側により急遽緊急メンテ、当たったパッチにより召喚陣が促進の効果を得ることは出来ず、事態は収束した。

爺さんは言った。出来上がったばかりの魔具は魔力が固定し切れていない、と。ならば促進してやればどうなるか。

結果は……正直分からない。全力でかけたから若干魔法陣から出る光が淡くなった気がするが、10年にも渡って効果を発揮したらどうなるか試したことはないからな。

それに、ギミックを仕掛けているからまず間違いなく安全だろう。

あとは改めて盗難防止と人払いの魔法陣を組めば良い。

今はあくまで、この家に仕掛けられていた魔法陣があるということを確認させれば良いだけの話だ。

魔法陣が発動されていることを確認すると、重い扉を閉め、鍵をかけ玄関ホールへ戻る。

「思ったよりも時間が掛かったね。さあ、急ごう」

玄関ホールで迎えられた父に急かされ、一路中央通りへ。

昼散策したときと違い、薄暗いが屋台が立っている。

簡易で組まれているであろう屋台からはランプの光と物を焼く炎が光源となっており、喧騒とももの焼ける匂いで独特な雰囲気をもし出している。

酒に酔ってるおっさんもいるし、仕事帰りなのか食事をしながら楽しそうに話している集団も居る。

そんな屋台を横目に進む先は、外へ光と人があふれ出すほど混雑している3階建ての建物だ。

2階、3階は窓が多く、ほとんどの部屋がカーテンで閉じられているところを見ると、宿屋兼酒場なのだろうか。朝や昼はさらに食堂を兼ねているのかもしれない。

「やあ、トニーさん！ 遅かったじゃないか！」

「すまない。部屋はまだ開いてるかい？」

父に気づくと、男が近寄ってくる。男はペティトアルトらしく、小さな身体に少しだけ尖った耳をしている。……顔は、うん。仲良

くなれそうだ。

「ああ。今日は……そうだったな、連れがいると聞いていたが、ツインの部屋でいいんだな？　1泊朝飯つきで銀貨2枚と銅貨50枚だよ！」

そんな失礼なことを考えているといつの間にか泊まることで決着しており、案内してくれる男に慌てて付いていく。

部屋に荷物をおいた父は（俺の荷物は元々全てアイテムボックスの中だ。子供が荷物を持っていなくて不審には思われないが、大人がそういうわけにもいかないたため父は普通に荷物を持っている）そのまま俺を引き連れまた外に出る。また中央通りを抜け、今度はあまり明るくない通りをランタンを持って歩く。

ランタンの中には小さな蠟燭が入っており、これが光源で家から漏れる明かりもあまり明るくない。家の中に入ればまだ多少はましだが、ガス灯すらないこの世界では仕方ないだろう。

ただ、夜暗い森の中などを歩く場合はどうするんだろうか。獣は光や炎を忌避するが、モンスターはそうではないだろう。そんなのと対峙した場合、そういったものは邪魔な気がするんだが。

そんなこんなで付いた先は2階建ての家だ。

大きすぎず、かといって小さいわけではない3、4人で暮らすならちょうど良い大きさの家だ。

特に表札などは見えないが、ここがフランクとシエッタの家なの

だろう。

少し背は低いが堀に囲まれた家に入るために門扉を開き、扉をノックする。

それを見て、チャイム押さないのかと思ったが、同時にこの世界にチャイムなどあるはずもない事を思い出す。

家ではチャイムを鳴らさないし、村でよく行くのは村長の家くらいだ。チャイムどころかノックをすることもなかった。

「ようこそ我が家へ、義兄さん、ソラ。今日はゆっくりして行って下さい」

「うん。お邪魔するよ、リーゼ。元気だったかい？」

父の目線の先にはおどおどとフランクの腰にぶら下がってる、何かしら？

「リーゼ、ちゃんとお客様に挨拶なさい」

叔父は苦笑し、抱きつき人形に話しかけるが、それは何がいやなのかふるふると首を振るだけ。

「……リーゼです」

やっとそれだけ言うのとたとたと奥へ逃げていく。

俺、嫌われてる？

「すまない。少し人見知りなところがあってね。ソラを怖がっているわけじゃないからあまり怒らないでやってくれないか？」

叔父の苦笑の色が強まる。顔に出ていたのだろうか？

「あの子は、いどこ？」

「ああ。俺の娘でソラの2つ上でリーゼというんだ。仲良くしてや
つて欲しい」

そうか、フランクとシエッタの娘なら俺とは4親等、つまりいと
こに当たる。

しかも2歳年上なら11か12と言うことだろう。

その割には随分とおずおずとしていたが、人見知りならそれは仕
方ないのかもしれない。

「分かりました」

とりあえず首肯はする。こっちで生まれて、ずっと同年代との付
き合いはない。

妹こそ出来て溺愛はしているが、家族であり同年代とはいえない。
ここまで大きな町ならそのうちそれなりに人間関係も構築できる
だろう。

「ソラの口に合わなかったかしら？」

挨拶も程ほどに振舞われた料理を食べている最中、雑談に耳を傾
けているとふとシエッタの言葉が耳に入る。

「……そんなことないです。村で食べたことないものたくさん、美
味しいです」

それは事実だ。おぼろげにしか調理法が思いつかない料理が多く、最初はおっかなびつくりだったがかねがね料理は美味しい。

やはり薄味だったりするが、あまり大味だったり濃いやりはまじらう。

ただ……もう少し早く製法が出回らないものか、そう考えているだけだ。

「そう？ 何だかパンを食べてるときだけやけに苦い顔してるけど、失敗しちゃったかな」

「ああ、それは仕方ないよ。ちょっと前に村で新しいパンが作られるようになってね。」

「固いパンはこれはこれで美味しいんだけど、子供の口には少し合わないようだから」

そうフォローにまわってくれるのはやはり父だ。いや、固いパンが嫌なんじゃない。固い上に、味がぼぼなくて、ぼそぼそしているのが嫌なんだが。

「新しいパン？ お義兄さん、そんなの私初めて聞いたわ」

となると、商人が仕入れたであろうレシピは何処に流れているんだ？

ここに来るまで町を歩いたときに幾つかパン屋らしい店は見つけた。

ただ、昼の食堂でも、出店でもパンは固いまま。俺が作った……とまでは言わないが、あのパンには届かない。

そうになると、あえてどこかで止まっている可能性がある。

一月程度で爆発的に広まるとは思っていないが、噂にもなっ

いのは平民の口にする機会がない状態になっていると言つことだろうか。

「酵母？ だつたかな、そんなもので生地を膨らませて焼いたパンなんだ。柔らかくて美味しいんだよ」

「食べてみたい……」

そうもらしたのはリーゼだ。やはり固いパンは嫌なんだろう。きらきらした瞳でそれを考えているであろう表情は可愛らしい。

「伯父さんたちは暫くしたらこっちに越す予定だから、その時に振舞つてあげるよ」

父の言葉で自分が喋つたことに気づいたんだろう。真っ赤に頬を染め、少し涙目になり俯いた。

「……父、女の子を泣かせてはいけません。……これはお近づきの印としてどうぞ」

アイテムボックスから飴を2粒取り出し、渡す。

ポケットに手をつ突っ込んだのでポケットから取り出したように見えるだろう。

紙で包んだそれは蜜で作ったものだ。

固形化するのが少々面倒だったが、魔法を使い無理やり作ったもので練成ではない。一応料理だ。微妙なラインだが、分類をあえてするならそれになるだろう。

水あめがあれば簡単に作れたのだが、砂糖は高級品。

手軽に手に入れられるものではなかったので仕方がない。

「……………これは？」

「飴です。甘くて美味しい。でも飲み込むと喉に詰まるので、舐めるのがお奨め」

もしかしたら飴はある程度流通しているかもしれないが、見る限りではそうだったこともないようだ。

「ありがとう、ソラ。リーゼ、ソラにお礼を言って。それと、ご飯が終わった後に食べるんだぞ？」

今すぐ食べたそうなりーゼを止めるフランクは教育に厳しいのかもしれない。

それは良いことだ。

「……………ありがとう、……………ソラ、ちゃん」

空気が止まった。……………今、なんと言った？ いや、ありがとうはいい。

別に言われなくなっただってそれは構わない。だが、問題はそっちじゃない。

「…………………………ソラちゃんとは一体何のことを指すのでしょうか？」

何とか言葉に出せたのはそれだけだ。

「……………名前、ソラ……………じゃ、なかった？」

「……ええ。確かに名前はソラですが」

「なら……ソラ……ちゃん……」

「……叔父上。貴殿のお嬢様は誰にでもちゃん付けなのでしょうが？」

子供は色々敬称を間違ったりするしな！

「あー、そつか。俺も事前に義兄さんに話を聞かなきゃ間違えてたな。リーゼ、それは男だ」

それって言うな。

「……こんなに、可愛い……の、に？」

これは呪いだ。俺が前世から引き継いだ呪いに違いない。

黒髪や黒い目はいい。前も染めずに通したし、こっちは気に入っている。

親の先祖に黒い髪や黒い目の人間が居たと言う話から違和感をもたれなかったし、別に構わない。

だが、何故この顔がそのまま取り残された？ 前世、何度生まれる性別を間違えたとか、口調さえ良くなれば付き合っただものを、と同性に言われたことか。

それが嫌だったから俺は只管に荒っぽい口調にしたし、服とかもリアルではあまり人が選ばないようなものもあえて選んだ。いや、普通に選んでも例の件の関係上まともなものにならなかったんだろうけど。

とにかく、これは呪いだ。鏡を見るのも嫌になるし、男らしいイケメンが嫌いに思うほど俺の顔は嫌になる。

「気にしてるみたいだから、あまり言わないであげて欲しい。伯父さんからのお願いだよ」

フォローはありがたい。ありがたいが、今はあまり聞いていたくないものな気がしない。

小さく頷くりーゼの姿は見たが、今は食事をして口を動かそう。

アレ……？　こんなにこの肉しょっぱかったっけ。

食事は途中から喉を通らなかった。きっとパニーニらしきものがまだ消化し切れなかっただろう。

決して、思わぬダメージのせいじゃない。そうじゃないはずだ。

ちらちらと俺をりーゼは気にしているようだったが、先に軽く食事をしたからだといっておいた。

嘘ではないし、別にりーゼが気を病むようなことはない。

まあ、久しぶりに言われたから若干動揺しただけだ。最後に言われたのは、悪友がノリで告白してきた時だ。まあ、ぼこって沈めたんだが。

この世界は服装がシンボルとして強く出ている。制服はもちろんだが、男はシャツにズボン、女はブラウスにスカート。

その上にローブを羽織れば魔法使いだし、皮の鎧でもつけければ戦士としてみなされる。

女性でスカート以外を身に着けるのは冒険者が特殊な職の人間だ。子供なら制服でもその特徴は現れている。

だから俺はそれを破るつもりはないし、むしろそれを押し通している。

外の空気を吸つてくると伝えて家の外に出ると、見上げる空は満点の星が広がっている。

前世と違って空気の汚染がほとんどないのか、空ははっきりとした光の点を数々と作り、まるで空が近くなったように思える。

前の世界では、いくつもの開発により古来の化石燃料、核、バイオマスから次世代エネルギーと呼ばれるものに転換した。とはいえ、そのダメージは酷く空はこんなに澄み渡っていなかったし、デブリが幾つも飛来し、流れ星ならぬ流れデブリが毎日星に向かって流れていた。

光害も町の中では酷かったから、むしろ流れデブリくらいしか見えなかった。

「便利さを求め、追求した。それゆえのVR、それゆえの技術。

そんなものがなくてもこの世界では生きていける。

そう認識できたのは良いことだったんだろう。」

「ソラ、そろそろ帰るよ」

空をぼんやりと眺めていると後ろから父の声が掛かる。

振り向くと、父にフランク、シエットとリーゼもいる。

父の頬が赤いが、飲みすぎだろう。食前酒も飲んでいたし、食べながらも飲んでいた。

「……ええ。そうしましょう」

「ソラ、また今度会いましょう。次は姉さんも一緒にね」

見送ってくれる一家に軽く頭を下げる。

暫くしたらまた会えるようになるだろう。

無礼なのはもつてのほかだが、たまに会う親戚ほど面倒な対応はしなくても平気だろう。

「ん？」

宿へ戻ろうと歩き出そうとしたとたん、裾を引っ張られる感触に、再び振り返る。

振り返る先に見えたのは銀。光沢のあるそれは、夜のあまり多くない光源も跳ね返すほどのきらめきを持っている。

とはいえ、夜、急にそんなものに袖を引っ張られたくない。

この前失敗したネツクレスの恨みか？ と思ったがすぐ下に視線を動かすと赤くなった顔がある。

「……あめ、ありがとう……」

どうやら銀の正体はリーゼらしい。目を見て礼を言うのが恥ずかしいから俯いてたのか？

それにしても随分と距離が近い気がする。

「いえいえ、美味しく召し上がってもらえるなら何よりです」

料理は美味しければ美味しいほどいい。

まあ、今回のものは料理というものですらないのだけど。

「……でも、あんな甘いもの初めて……」

「喜んでいただければ幸いです。……またお会いしたときは何か用意しますね」

次はシフォンケーキでも焼いてみようか。型は……適当に銅板でも作って変形させれば良いか。

「……楽しみにして、る」

嬉しそうに笑うリーゼの手をとりそつと裾から外す。

「では、その時を楽しみにしていますよ」

何故か顔の赤みがました気がするが、気のせいか？ 夜は寒いし、あまり長居をするのはまずそうだ。

戻った宿屋で（名前は『旅人の止まり木』というらしい）改めて落ち着けた。

今日は色々あったし、親戚とはいえ初めて会った人々と食を共にする。

俺はそこそこに友人もいたし、その家に招かれることもあったがそれでも緊張はする。

荷物もないのでそのままベッドに倒れこむ。

「ソラ、疲れたかい？」

「……ええ。慣れないことをすると中々に。……風呂入りたい」

この宿に風呂はないらしい。

冒険者を対象としているため、部屋の広さはそこそこだがそのためか風呂に入ると言う習慣はなく、汗を拭いたり水浴びをしたりというのがこの宿では精々だそうだ。

いや、上下水道が発達しているこの町でも全ての家で風呂に入れるわけではないそうだ。

フランクのところにもなかったし、一部の貴族や大商人に病院、あとは学園の寮にもあるそうだが。

それは俺が風呂に入りたいと要望したことが先ほどの食事時に話に上がり、得た知識だ。

基本は汗を落したり、垢すりで垢をこすり落としたりする程度で、後は貴族が香水を使って体臭を誤魔化す。この分ではサウナもなさそうだ。とも思ったがそうでもないらしい。

隣国の『ミニネフィスア』ではサウナが一般的だし、風呂と言えばサウナらしい。ただ、こちら毎日入ると言うことはせず、2〜3日に一度程度らしい。

ちなみに、村では上下水道の整備などされていなかったからあるはずもないと元々諦めていた。

奇抜な発想を持つ俺が面白いらしく、あれこれ質問が来たが適当に誤魔化したのは反省しなければと思っっている。

「それは暫く我慢してもらえるかな。……さて、それと馬車が欲しいと言っていたけどどうするんだい？」

「帰るには必要だけど、個人で買えるようなものは揺れるよ？」

まあ、そつちも話しておかないと駄目か。

「馬さえしつかりしておけば車本体は俺が作るのでどうでもいいんですが、買ったという証拠が必要なので。」

後は、馬と車に軽量化の魔法を使えば済む話……ちなみに馬と馬車の相場は？」

「本当に乗るだけなら、そうだね……確か、金貨20枚くらいで買えるらしいけど。」

「どうやって車を作るんだい？」

「木材は加工済みの丸太20本程度はありますので、それを利用して、車輪とサスペンションは鉄鋳、あとは皮と布があれば内装と防水素材に加工できるのでそれを購入すれば、それなりのものは出来ると思うんですが」

車輪を鉄鋳だけで作ると強度は心配だが、『レジェンド』でも使われていたし、乗れていた。

最悪布がなくとも問題はないだろう。乗ってきた馬車にも屋根は付いていたが防水対策はほとんどしてなかったようだ。皮はなめたものがどこかで売っているだろう。

「ソラ、うん。そのままでも良いからよく聞きなさい」

父曰く、俺はおかしらしい。

それだけにまとめると俺は異常者の扱いだが、まあそう大きく変わらならしい。いや、酷くね？

普通は馬車なんて木を乾燥させるところから始まり、一部には金属は使うが、ほとんどが木製。

しかも幌馬車が一般的でそれさえ行商へ行く商隊用に大商人が何台か買うのがやっとだとか。

それを布だの金属だの使おうとするわ、丸太を加工済みだというわ、この世界の職人にそんなことは出来ない。

まあ、商隊用のなら貨物車だしそれなりに耐久度と大きさが要になるからそんなものかなと思ったら、それだけじゃないそう。

作れる職人がそもそも少なく、年間に製作される絶対量自体少ないとのこと。

そのため乗合馬車や辻馬車も高い料金で運行されているらしい。

ちなみに乗合馬車はバスのようなもので、辻馬車はタクシーのようなものらしい。

そんなものを前の練成のように作れる人間はこの世界にはいない、と言うのが父の主張らしいが。

確かに馬車を作る必要生産スキルレベルはそこそこ高いが、高々30程度。

他の職人との兼ね合いもあるから一般的には作ることは出来ないだろうが、王族や貴族のお抱え鍛冶師の中にはそれくらいいるだろ

う。

つまり、父が言いたかったのは大事になるからあまり多用するなと言っことだろう。

だが、この程度は石臼を作るよりは成功確率高いしレベルも低いんだよな。

ちなみに石臼の要求生産スキルレベルは50。石の素材自体は何でも良いが、成功確率がだいぶ低くなるんだよな。

ついでに、『レジェンド』の錬金や鍛冶はどんなに高ランクのもでも最低5%は成功となる。

でなければ最高のステータスでも成功確率0%以下のものは多かつたからだ。

物によつてはこの前行った生産とは違う生産確率を持ったものも少なくない。

そして一番難易度が低い馬車は要求生産スキルレベル15の軽装馬車だ。

これくらいであれば、大量生産は鍛冶師が少ないというならできないだろうが、素材さえあれば1日1台は出来ると思うんだが。

と、父に言ったらまた呆れられた。

錬金術や鍛冶は、魔法のある世界にも関わらずそれはスキルではなく物理的な工程をもって作るらしい。

村の工房でも魔法を使うことはなく、炉を使って金属を溶かし、鑄型で固めたものを加工する。

それにだつて原料を使つても不純物が多く、物によつては材料そのものを無駄にしてしまう可能性すらあるらしい。

せつかくの魔法のある世界なのに、何で便利な方法をとらないのか。

魔術ギルドや王族の横行か？

だが、まあ今回は仕方ないと諦めて欲しい。

これが遊びに來ただけならともかく、住まいを探し、引越しもしなければならぬ。

住まいは見つかった以上、引越しは確定だ。

母の想いがどれだけあの家に籠もってるかは未知数だが、全ての荷物を運ぶわけではないだろう。

ただ、かといって何の荷物も運ばず引越すわけにも行くまい。

なら、辻馬車を利用するわけにも行かないし、何よりもレニをあの揺れる馬車などに乗せられるわけがない。

そんなわけで、ワゴンあたりを作ったうえで魔術による支援をしなければいぶ揺れも収まってくれるだろう。

ちなみに、ワゴンは車ではなく4輪の大型荷馬車のことだ。

そう必要性を説いていると父もようやく納得してくれたのか、明日に響くと悪いからという理由で今日はもう休むように言われた。

父はずいぶんと疲れている様子だったが、父も慣れない交渉で疲れているのだろう。

知らない天井だ、とおきまりの言葉を吐いて目覚めたのは……何時かは不明だが、明るいから朝だろう。

家と同じような木の天井のため、正直あまり知らないという感覚はないんだが、そこは言わなければならぬ言葉だと思っている。

隣のベッドでまだ父は寝ているが、この世界の朝は早い。普段は空が白み始めるころには活動が始まっている。

なら、顔を洗って歯を磨くことくらいは先にやっつけてしまおう。

出来れば身体も洗いたい。風呂に入れない以上、そのくらいはしておきたい。

一応書置きだけしておけばいいか。顔を洗ってきます、と。

アイテムボックスからタオル代わりの擦り切れた布、口を濯ぐ木で出来たコップ、それと楊枝を取り出す。

「お兄さん、顔を洗いたいですけど井戸は何処ですか？」

一階にまで降り、目のあった従業員らしき男に話しかける。

従業員だと思ったのは昨日のペティトアルトの男と同じエプロンをしていたからだ。

間違えても多少の恥をかくだけ。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だ。

「それならあそこのドアを開けてすぐのところだよ。井戸は危ないから気をつけるんだよ」

ありがとう、と軽く頭を下げ、教えられたドアを開く。

そこには、まあ言われたとおり井戸と、それと小さな物置がある。

まあ、物置に用はない。これが1人用オフラインRPGであれば好きなだけ物色しアイテムを探すところだが、今それをすると盗賊

になつてしまふ。

盗賊には人権がないらしいし、そんなことをするつもりはない。

桶には水が汲まれていなかったから、井戸に桶を投げ入れ、水を汲んで引き上げる。……引き、上げ、……れない。

流石子供の身体。流石STR1は伊達じゃない！

以前の俺なら容易く出来たことが今は出来そうにない。

これだと『レジエンド』での主力装備だった銃も使えないんじゃないか？

苦勞して何とか水を汲むと、近くにあつた小さな桶に移し変える。

これはあくまで顔を洗つて歯を磨くだけの水だ。水浴びをしたり身体を洗うのはまた後になる。

まずは冷たい水で顔を洗い、眠気を飛ばす。井戸の水は異常に冷たく、目を覚ますには最適だ。

飲むには硬くてあまり好きになれないが、お茶にして飲む分には大丈夫そうだ。

顔を洗い、歯を磨き部屋に戻ると、父が起きていた。

「おはよう、父」

「おはようソラ。今日は早いんだね」

父が今日は遅いだけだと思ふんだが。疲れていたんだろうから仕方ないだろう。

「父も顔を洗つてくると良い。その後は……昼食？」

太陽（そう呼んでいるだけで別の読み方があるらしい。神に祝福された何たらがどうたらしたとかという長ったらしい名前があるが覚えていない）の高さは既に頂点に差し迫っている。

どうやら昼近くまで寝ていたようだ。

空腹具合も程よい感じになっているし。……そういえば、朝ごはんだけ宿代に含まれているはずだ。食べ損なってしまった……。

朝の分を取り戻すかのように注文をしようと意気込んだはいいが、やはり出てくるのは調理法の壁。

前半の食材名が分かる分、食べられないものや苦手なものを引く可能性は低そうだが、どういった料理があるか分からないのが非常に困る。

父もいつも同じものしか注文しない分、調理法にまで目は向かないそうだ。

何故父が同じものしか注文しないか、というのには理由がある。父は簡単な単語の読みと自分の名前の書き取りしか出来ないからだ。

それでも母は自分の名前の読み書きも出来ないため教養がある部類に入るらしいが。

結局、目に付いたものがどんなものか聞いた上で料理を注文することになったのだが。

リーバ草のコトレットとグラーンのポエミグラそしてパンがテーブルに並べられた。

日本人としては悪夢のような意味不明な名前だが、日本語に直すと

リーバ草のサラダ、グラーンの卵とじ、とそれならそういえよ！
と思わず全力で突っ込みたくなりそうだ。

リーバ草はほうれん草のような草で、ゆでたリーバ草をメインに
幾つかの野菜をカットしてドレッシングであえてあり、グラーンは
川で取れる魚で、それを内臓を取り骨も抜いたものを辛く煮て卵で
とじたものだ。パンは相変わらず固いものだが、それも今日までだ。
何とか我慢は出来る。

案外食感が軽かった魚も俺の頭の大きさ以上もあるサラダボール
に入ったサラダも2人ではペロリと食べ上げ、食後のお茶を楽しい
んでいた。

「父、この後は馬車を買いに？」

「その予定だよ。その前にもう一度家を見に行きたいんだけど、い
いかな」

頷き、それを持って答えとする。

長ければ10数日こっちは来ないんだ。母の都合次第ではもっ
と伸びるだろう。

それまでもう一度見て母に相談するつもりなのかもしれない。
俺もあの館は気に入るそうさ。ただ住むだけではなく色々と改造
できそうさ。

建築基準法があるのかどうかは分からないが、こっそりと部屋を
色々と弄ってみるのも楽しいかもしれない。

だが、その前に魔術ギルドがどういったやつらかは見極める必要
がありそうだが。

今日の朝の時点でフランクから許可の話は伝わっているだろう。

それでやつらが単なるハイエナなのか、あるいは多少は信頼できるかどうかは分かるだろう。

第4話。ちーとというもの。(後書き)

実は『男の娘?』だった主人公!

この設定が後に生きていくのかは未定です。

……もっとふらぐを有効活用できるよう頑張ります。

突っ込み、評価等ありましたらお願いします。

2011/9/12

脱字の修正を行いました。あさるとかん様ご指摘ありがとうございます。

2011/9/13

誤字の修正を行いました。bogus monster様ありがとうございます。

事情により種族名を変更しました。海松房千尋様ご指摘ありがとうございます。

2011/9/16

加筆修正しました。

2011/9/28

加筆修正しました。暁闇さまご指摘ありがとうございます。

2011/9/29

誤字等の修正をしました。ごるば様ありがとうございます。

2011/10/4 修正しました。まーやさまありがとうございます。

ます。

第5話。引越しと新しい生活。(前書き)

お気に入りなんと1000件突破！
嬉しい反面何があったのか不安も。。

面白いと思ってもらえるようなものが書けるように精進していきます。

第5話 引越しと新しい生活。

父と向かった家で見つけたものは……！

まあ、一見して何も変わらない館なんだけど。

というよりも。変わっているのはこっちだ。

父と俺、そこはいい。そして同行者、それも俺。

大丈夫。俺はおかしくなっていない。

子供としてのソラと、銀髪碧眼のヒュウガ、その両方が居るだけだ。

その正体は、支援スキル『多重化』と特殊スキル『変化』のおかげだ。

多重化、は名のとおり対象者の存在のある複写を作るもの。早い話劣化コピーを作り出すものだ。

単純な思考ルーチンしか持ち合わせていないから使用者の命令通りにしか動けない。

普段はそれで固定砲台にするか、短時間でも攻撃の倍化を狙って作るものだが、今回は父親に付き従う内気な息子を演じてもらっている。

話が出来ればよかったが、出てくる語尾がおかしかったから黙らせた。

流石に、こんな所で変な語尾をつけて話す頭の可哀相な子供とは思われたくない。

と、今回俺がヒュウガとして付いてきた理由はやはり一つ。

この館の価値をどうやら判断しているのか、ということと牽

制のためだ。

恐らく完全に排除するのは無理だし、それを考えるつもりもない。

むしろ、1つの町だけとはいえ組織を潰せるような個人を生かしておくバカは居ないだろう。

有害であるだけなら関わらなければ良い。だが、少量の毒であれば薬にもなる。

なら、その線を見極め、薬とすれば良いだけだ。

まだ全く実感はわいていないが、今の俺はついていない、状況にないようだ。

まあ、確かに歩いていてもこけないし、上から植木鉢も落ちてこない。

町を歩いていてケータイを落とすこともなければ財布をすられることもない。

見ず知らずの場所で初めてあった人間に因縁を吹っかけられることもなければ、変な勧誘を受けることもない。

たまに行く店が休業していることも、リニューアルオープンのため一時休業しますということの後日改めて行ったら新しい店になっているということも今のところない。

だが、そんな何時あってもおかしくないことが今後ないとは限らないのだ！

だからこそ予防線は張っておく。現状俺や俺の家族に一番危害を加えそうなのは魔術ギルドだ。

庭先で倒れている人間が居ない以上、庭からの侵入をしようとするバカは居なかっただろうが中を見なければどうなっているかわからない。

バカがいた。俺の仕掛けた、物盗り用の防犯魔法に引っ掛かったバカがいる。

「……トニー。こいつ自衛団にでもしよつ引くか？」

「いやいや、ヒュウガ。先に説明をして欲しいんだけど」

盗品を抱えたまま立ち尽くす、いや気絶したバカが玄関ホールの時点で居たことに息を吐く。

「あー。これな、置かれているもので、鍵だのそれを開くもの以外を持ったまま別の場所に移動しようとする的一步歩くことに呪いが発動するんだわ。

普通なら、そんなの鍵に関するものでない限り黙って人の家のものを持ってくバカいないだろ？」

これは元々館侵入防止の魔法陣の効果を思い出し、ドロボウ防止に俺が設置した2重罫の1つだ。

まあ、今回は無制限に仕掛けているから俺も父もそうすると同じ目に遭うんだが。

額縁を持ったまま気絶しているバカはそれそのものが証拠になるからそのまま放置して、俺たちは地下室へ行くことにした。

もちろん、行き先は俺が魔法陣を仕掛けたところだ。

「よう、爺さん。そんなに慌ててどうした？」

わたわたと大人の男が取り乱しているのは若干面白いが、それ以上には気持ち悪い。

「う、うむ。おぬしらか。……いや、……この館はどうなっているんじゃない？」

困惑したような魔術ギルドのギルドマスター。

原因は、昨日は光を放っていた床にあるんだらう。

過去形である以上、今は光は放っていない。

むしろ、魔法陣の姿形すらない。

「玄関じゃロープを着たおっさんが立つたまま気絶してるし、『また』勝手になんかやったな？」

その言葉を聞いて爺さんがびくりと身体を強張らせる。

「何じゃとっ！？ ……まったく、どいつもこいつも勝手ばっかしおってからに！」

これが演技でないなら相当な狸だ。いや、狸だと疑ってかかっているんだが。

「それで、どうされたんですか？ 何か落ち着きがないようですが」

「うむ……床に張られていた魔法陣を調査しようとしたところ、魔力を流した瞬間それが消えての。」

随分と年代ものようじゃったから、それで効力を失ってしまっ

たよつでの」

よし。実験は成功したみたいだな。

爺さんの言ったことは半分正解、半分不正解だ。

正しくは、探査系の魔法を使うと魔法陣が消える。

これは『レジエンド』であつた極悪なクエストを元に作つた。

そのクエストは古代の遺産にまつわるもので、最後にあるアイテムを手に入れるため洞窟に入るのだが、最後洞窟の奥に安置されているアイテムは全く見かけが同じものが3つ。

手に入れる機会はそれだけ。しかもキークエストアイテムのため販売、トレードも不可能。

そこで通常であれば『鑑定』を使って真贋を見極めるのだが、鑑定を使った瞬間、アイテムは消え去りクエスト失敗、再受注不可となる。

今回はそれを対魔術ギルド用として用いた。

正直魔法陣自体は解析されようが何をしようが問題じゃないんだが、魔術ギルドの本質を見抜く餌にさせてもらった。

で、見事餌にひっかかり、おまけも現状釣れたというわけだ。

「それで？ 爺さんは人様の家に押し入ってどうしたかつたんだ？」

「押し入るとはまた乱暴な表現じゃな。……とはいっても、現状はそう変わらんか。

ワシらは魔術を研究し、解析するのが仕事じゃ。その仕事をまっとうするだけじゃ」

「研究と解析と、盗人の間違いないのか？」

爺さんの顔が苦々しく染まる。

「おぬしら相手ではそう思われても仕方ないの。……今日は引き上げることにする。この件の迷惑分は後日払わせてもらうことにするよ」

「随分とあっさり引き下がるんだな。もっと構わず荒らしまわるもんとばかり思ってたが」

「ワシらは魔術師であって盗賊団ではないつもりじゃ。今回の件でまた罰するものも出てきたようじゃしの」

とはいえ、ここで黙って帰らせるのもどうかとは思う。ただ引き下がるだけというわけでもなさそうだし、俺もここで生活するのに憂いを残すのは出来る限りしたくない。

「……爺さん、あんたと話がある。2人きりで話せる場所はあるか？」

「まっ昼間から酒盛りでも始めるつもりか？」

父にこれからの行動を促し、魔術ギルドの人間を追い出した後（額縁を盗ったバカに関して庭に放置した）爺さんに連れられ、到着したのは随分と寂しい酒場だ。

昼間だからなのか、2、3人の客とマスターしかいない。両開きのドアを抜けると、特にこちらに視線を投げかけられることもなく、あっさりとマスターの前に着く。

「腰を据えて話すのなら酒が入ったほうがいいからの。マスター、奥を借りるぞ」

返事すら待たず奥へ向かう爺さんの後を仕方なく付いて行く。とはいえ、どうしたもののか。

前の俺は酒が弱かった。……未成年が何故弱かったかどうかわかっているかは気にするな。

どうせもう死んで無効だ。そもそもあれは売った側が悪いというものだしな。

とはいえ、飲酒喫煙は20歳になってからだ。この物語はフィクションであり……いや、分かっているだろう。

それはともかくとして、だ。今の俺はなりはこれでも中身は9歳の子供。

アドバンススキルに『状態異常無効』というスキルがありそれをカンストしているが、それが上手く働いてくれるだろうか。

ちなみに、ベーススキルに『状態異常耐性』というスキルがあり、それをカンストしてようやく『状態異常無効』がアドバンススキルとして使用可能となる。

久し………初めて飲むアルコールは喉や胃を通る時は熱さを感じるが、その後の独特の酩酊感が来ない。さりげなく頬を触れるものの、熱くなっている様子はない。

そんなわけで運ばれてきたエールを半分ほど飲み、改めて爺さんを見る。

爺さんは嬉しそうにエールを口に含み、一気に呷る。

話に来たのか、それを口実に飲みに来たのかはわからないが、話は進むのだろうか。

「……で、話を聞く体制にはなったのかよ」

「くくつ。もう少し飲みたりんがの。それで、おぬしの話とは何じや？」

「分かっててとぼけやがって。で、あんたはどうしたいんだ？」

何を、とは敢えて聞かない。聞く必要もないだろうし。

「それを聞いてどうするのかの？」

にやり、と爺さんは笑う。俺だから平気なものの、小心者ならこれだけでもガタブルものだけ？

「別に。あいつらを巻き込まないなら好きにすりゃいいし、そうだなきゃ」

エールを一気飲みし、ガダン！ とテーブルに思い切りぶつける。

「物騒なやつじゃの。じゃが、そのくらいでなければ冒険者は務まらんか」

どうやら爺さんは俺のことを冒険者だと誤認しているらしい。荒くれ者になるという話だし、まあその方が都合もいい。

「ま、ギルドには所属すらしていない根無し草だがな。それで、答えは？」

「ワシは市井のものと事を構えるつもりはないぞ。

ワシらの研究は、全ての民のためのものじゃからな」

「それはあんた個人の考えだろ？」

考えは高尚だが、言う事と実際が釣り合っていないんじゃないか？」

「若造に説教をされるとはの。じゃが、それもまた事実か。

魔術ギルドそのものの在り方に問題がある、ということかの」

押さえられなかったあんたにも問題はあると思うが。まあ言うま
い。

「で、だ。俺やあいつはあんたらの出方次第では多少協力をすること
とは出来る。

だが、妙なことをすればそれは終わりだ」

今切れるカードは2枚。その後に控えているカードはあるものの、
出す切り札としては多すぎるのも考え物だ。

「……む。ワシ一人相手に交渉しても何も出てこんぞ？」

「あんたがギルドマスターとして、手を出さないとはいえない。

そして手を出させるな、ともな。それくらい難しいことじゃない
だろう？」

「公言は出来んが、それとなく注意する程度じゃつたらな。

ただ、それはいつも言っておる。おぬしらを特別扱いすること
もなければ、の」

「それならそれで構わないさ。俺はあいつらが穏やかに過ぐせればそれでいい」

「あの男に何かあるのかの？」

「恩がある。ただそれだけのことだ」

銀貨を一枚懐から出すとテーブルに置き、立ち上がる。

「エール一杯にしては随分と多いぞ」

「口止め料込みだよ。こういうときは先に恩を売っておくに限る」

苦笑する爺さんは放っておいて、酒場を後にする。

これで魔術ギルドに対しての言質は取った。口頭だけがきつちりとする必要はない。

あの爺さんは相当な狸だろうから後々接近してくる可能性もある。正直な所、この世界の魔術の扱いに関して思うところはありますが家族が損をしなればいい。

町の治安も悪くはなさそうだ。

住むには幾つか不便なところも出てくるだろうが、目を瞑れる範囲であれば当然出てくることだろうから気に病むこともない。

父と合流したのはそれから30分後……くらいか。いい加減時計くらいはあって欲しいがどうなんだろうか。

スキルで作れるものはある。それこそ日時計から柱時計、懐中時計と作れるものは多種にわたる。

日時計なら作ったところで構わないが、それだとそもそも持ち運べないし、正確な時間が分からない。

体感時間としてはおおよそ20時間ちよつと位のはずだ。

子供の身体だからずつと起きてはいられないし、感覚が鈍っている可能性も有るが。

……最悪、ストップウォッチを作つてそのうえで正確な時間を刻む時計を作るか？

いや、それも無理だ。

『レジエンド』で作れる時計は『レジエンド』の時間とリアルの時間を表示するくらいでそれを好きなように弄るスキルは俺自身になり。

そもそも、一日の始まりと終わりをどうやって決める？

日の出の時刻を毎日ストップウォッチを使って測るか？

莫大な時間だけを消費するのだけは确实そうだが、俺1人が時間を知りたいただけにそんな無謀なことはしたくもない。

まあ、学校もあることだ。村には関係がないとしてもどこかで時間を知る方法は確立されているだろう。

そんなことはともかく。

父は俺の希望通り馬車を買ってしてくれた。

馬2頭立ての帆馬車だ。これなら、これ自体を弄るだけでもどうにかなりそう。

まあ、それはあくまで何とかぎりぎり耐えられる程度の話で、安定性や快適性は求められないだろうが。

そして、価格は金貨50枚だそう。

随分と思いい切つて購入したものだと思つたが、父には何か考えがあるらしい。

それは後で聞くことにして、少ないがなくてはならない荷物（いつの間にか食料品や雑貨などもあった。布や革もあったが、他のものも多い。村へのお土産だろうか？）を積み込み、町を出る。

俺も馬車の運転は出来るはずだが、子供がこんな大きい馬車を運転するのはおかしい。父も運転できるそうなので御者を頼んだ。

町を出るときにジールと何やら話していたようだが、たった数十m程度でも揺れで気持ち悪くなっていった俺はただじっと我慢するしかなかったので話は聞いていない。

町を抜け、街道を走り、森に近づいた頃に休憩を取る。

気持ち悪さから必要に駆られてというのもあるが、むしろ理由は別。

馬車を入れ替えるためには流石に人がいないところで行う。

悪いことをしているつもりはないが、父のあの懇々とした説明の前ではトラックなど作れないだろう。

まだ材料が足りないのでそちらの面でも現状は不可能だが。

中世ヨーロッパ調な街道を爆走するデコトラ……やばい、想像しただけでもワクワクしてきた。

雑念は捨て、鍛治を取り掛かろう。何かまずい妄想が頭をよぎった気がしたがきつと気のせいだ。

今回は材料がぎりぎりしかないから万全の態勢で行おう。

あいにくと鍛冶師用のハンマーが露天に並ぶことはなかったため、今回はDEXをあげるしかない。

DEXを上げる支援スキルで俺が覚えているのは2つ。

1つはDEXが+50される『小手先勝負』……名前が酷いのはデフォだ。詠唱も酷い。「これがっ！俺の今の最善だっ！いざ、『小手先勝負』！……非難はこの詠唱を作った人間とそれを使用した担当者に言ってくれ。ちなみに叫ばないと発動しない。

俺も取ったは良いが、恥ずかしくて使えなかったスキルの1つだ。もう1つは『神の祝福』^{ゴッド・ブレス}だ。こちらはMPの消耗が激しいが、DEXを現在値の1.25倍にしてくれる。詠唱は普通だ。特にネタもない。

そんなわけで作った馬車は馬2頭立て、最大6人乗りの、箱馬車と幌馬車の中間のようなものだ。

4輪で片方にドア、両側の窓。そして車輪と軸は金属を使い、車の下部分はサスペンションが用いられこれが衝撃を和らげてくれるようだ。

内装も、シンプルながら席は革張りだし、ついでにつくったクッションもいい仕事をしてくれるだろう。

急に現れた馬車に馬がビビってたが、何とか宥め荷物を移し変える。

で、残った元々の馬車なんだが、アイテムボックスに収容した。……やれば出来るものなんだな。一瞬で消え、アイテムボックスに格納されたのを見ると少し気分が悪くなった。

キャラバン

重量1500 耐久度【997/1000】

最大10人乗り、最大積載量800

父の希望とはいえ……少し大きすぎはしないか？
ちなみに俺が作った馬車は

ワゴン

重量 2000 耐久度【1500 / 1500】

最大6人乗り、最大積載量1200

となつてゐる。使つた素材の重さが2500だつたためまあ、妥当な加工だろう。

そして、いきなり500も重みが増えると馬の負担になるだろうから特殊スキル『軽量化』をかける。

これは装備やアイテムにかけることが可能で、最大4割の重量の軽減と移動速度+5%がかかるという便利なものだ。

消耗品にはかけられないためポーション等のアイテムにはかけられなかったが、こういつた移動用のアイテムや装備している武器には狩りの前につけて、移動時間の短縮につけていた。

さらに支援スキル『強靱化』を馬にもかける。これは一時的にSTRを+10とVIT+30してくれるスキルで、筋力と耐久性をあげれば疲れ辛く、重いものも運べるはずだ。

「……ソラに歩み寄らなければ、色々なことはきつと納得できないんだろうね」

何故か苦笑する父。

どこか微妙に失礼なことを言われている気もするが、人の相互理解を得るためには歩み寄りが必要だ。

間違つたことは言っていない。

ところで、馬車の移動速度というものは何kmだろうか。

聞いた話によると、町を観光用にゆっくりと廻るものはおおよそ

5〜6km。人が歩くより多少早い速度だ。

こういつた村と村、村と町のように街道を往く馬車は15〜20kmらしい。

だが、改良し移動速度を速めた馬車は最初は馬の思うとおりには走らせていたのだが、すぐにゆっくりとした速度に変えた。

特に酷い振動を感じることもなかったし、どうしたんだらうか。体感的には恐らく50kmも出ていないはずなのに。野生の馬でも70kmは出せると聞いたから、まだ安全範囲な気がするんだが。

まあ、そんなちよつとしたことはあつたものの。村の近くに着いたのは出て2時間ほど。

行きの1/3のペースでつけたことになる。やはり支援スキルは偉大だな、と感謝をしていると父に話しかけられる。どうやら購入した馬車を出し、連結して欲しいそうだ。

よく分からないが、言われたとおりアイテムボックスからキャラバンを出し、ちよつと不安定ではあるものの車軸で連結させる。連結に使ったのはキャラバンに残っていたロープだ。しっかりとしたものだし、無理な動きをしない限り外れることはないだろう。

とはいえ、いきなり2倍近くになった重みを馬が楽々動かせるわけもなく。

ずいぶんとのんびりとした速度で村にまで辿り着く。もう既に日は低く、空は赤くなっている。

それだけ出るのが遅くなってしまったのは少し反省したい。

村の入り口に立つグランさん（村に駐在している騎士だ）には驚かれたものの、スムーズに村に入る。

家に着くまでに人に色々父が聞かれていたようだったが、行商以

外で村に馬車がくることはない。
その物珍しさからだろう。

「ただいま、母さん、レニ！」

1日程度しか家を離れていなかったが、やけに懐かしい気がする。きつと、それだけ会いたかったということだろう。

「おかえりなさい、おにいちゃん」

だから、最愛の妹の顔を見て思わず抱き締めたのも不可抗力だろう。

可愛すぎるレニがいけないのだ。いや、レニがいけないことは一切ない。

では何がだめなのだろうか？

「お帰り、ソラ。あら、トニーは一緒じゃなかったの？」

「父さんは用があるとかで村長のところに。ああ、そういえばお土産があるんです。

レニ、お兄ちゃんからプレゼントだよ」

懐にしまっていた包みを取り出し、首飾りを妹に、母にはイヤリングを渡す。

どちらもあの露天で買ったものだ。

「おにいちゃん、だいすきー」

満面の笑みを浮かべるレニを再度抱き締める。ああ、何て愛い妹

だ！

「良かったね、レニ。お兄ちゃんから貰ってさ」

母も嬉しいのか笑みを浮かべている。買ってよかったと思う。

ほぼ2日ぶりに食べるパンはやはり格別だ。

同じ食べ方でもこれをスープに浸すのもうまい。

味の濃さでいえば町で食べたものの方が美味かったが、主食のパンが比べ物にならない時点でどちらを食べたいかは決まっている。

父もすぐ帰ってきており、夫婦で土産話をしているらしいが、俺は食べるのに夢中。

親同士の話に子供が首を突っ込むものでもないしな。
時折こっちを見てはいるが、たいしたことではないだろう。
俺はレニの世話をしながら食事続ける。

「ソラは学校に行きたい？」

そう聞かれたのは俺が食事を終わらせ寛いでいた時だ。

「別に……興味はないけど、何で？」

というか、この前もその話をしてそれで喧嘩をしたような気がするんだが。

「前にも聞いたけど、やっぱりソラはちゃんと学んで欲しい。きつと、ソラにとって必要なこともあるから」

そついう母の目は真剣そのものだ。とはいっても。

「俺、こう見えても6歳から18歳までずっと勉強してきたんだ。いまさら勉強する必要もないと思うんだけど」

小学校から高3まで。12年間は流石に長い。

それでもちゃんとした一般教養を身につけたとは言いがたいから たった5年間で何が出来るのかとも思う。

「……ソラのいたところはそんなに小さな頃から勉強していたの？」

「人によつてはもつと前から色々な習い事をしてたみたいだね。それに、俺なんてまだ途中みたいなものだったよ」

大学に入れば22までは学生だっただろう。となると16年間。それでも社会人になって苦労することは少なくないというから驚きだ。

「でも、それはソラの知ってる前のことでしょ？」

今は今で勉強が出来るならちゃんとしたほうがいいよ」

それはその通りだ。未だに俺はこの世界の時間の流れも歴史も知らない。

王都がどんな名前なのか、今の王様の名前も顔も知らない。法すら俺は知らないのだ。

前では絶対に考えられないことだ。

魔法学校と言ってもそれだけを行うわけではないだろう。

遙か昔に作られた某有名小説の魔法学校ではそれらに特化したものだったが、あれも恐らく年齢的に考えて義務教育は終わらせているはずだ。

とはいえ、幾ら識字率が低いとはいえ、貴族であれば家庭教師を雇っているだろうし、その教師に読み書きはもちろん、必要な勉強は習っているだろう。

そうになると、魔法学校で教えるものは限られてくるだろう。

前読んだ入学案内にはカリキュラムこそかかれていなかったが、魔法のみを対象に勉強するわけではなさそうだった。

「……けど、学校だってただじゃないんだけど？」

入学金、学費、制服代に教科書代、もろもろの消耗品、年間にかかる費用は結構洒落にならない」

そのことで母も諦めたはずだが。むしろ母が一度終わった話を持ち出すとはまた珍しい。

普段は一時どんなに言っているでも終わってしまった後は気にしない人なのに。

この前言った金貨70枚は最低限。実際全てを含めば卒業までに白銀貨1枚以上にはなるだろう。

それも順調に合格し、留年しなければの話だ。そもそも受からなければ意味がない。

「トニーがさっき言ってたんだけど、魔具を売って家と馬車とかを

買ったお金を差し引きしても白銀貨2枚は残ってるんだって。だから、お金のことは心配しなくてもいいよ。

元々、それなりに蓄えはあるしね」

「それでも補修の費用は必要だし、維持費も必要だと思うんだけど。とてもじゃないけど、そんなのしてる余裕ないって」

それで魔法が使えないなら通う必要もありそうだが、そんなことはない。

と考えると高校も何のために行っていたのか分からなくなるが。ボケて突っ込んで張り倒して蹴飛ばして。……友達とバ力をしていた記憶しかないが、まあ高校生なんて特別目的意識を持たない限りそんなものだろう。

それをするには流石に高すぎる授業料だと思う。

俺は高校の時は学費以外は自分で捻出していたが、小遣いを貰ってる時点であまり説得力はないか。

「分かった。そこまで言うなら、応募の締め切りまで考えてみて。それでソラが行きたくないなら言わないからさ」

確かに応募の締め切りはあと2ヶ月ほどはある。それだけあれば引越した後落ち着いて考えられるだろう。

「あまりいい返事は期待しないで欲しいけど」

何故母がこんなに熱心なのかは分からないが、何か理由があるのだろうか。

まあ、滅多にないことだし引越したらじっくりと腰を下ろして

話をしてみるのもいいかもしれない。

ところで、父の言っていた考えがある、とのことだが、それはその次の日に分かった。

村長の家の隣に、急造だが馬小屋が建てられた。建てたのは、ゴーンさんをはじめとする村の人たちだ。

今は父の買った馬が繋がれている。それと、その後数頭馬を買う予定だそうだ。

そして、父からお願いされたのが馬車を村に譲りたいとの事だった。

訳を聞いてみると、村には特産品や狩猟で得たものはあるがそれを好きなタイミングで売りにいけないこと。

売っても、今度は得られたお金で大きなものが買えないこと。

町に出るのは俺と父が町に向かった時のように行商が来た時にそれに便乗すること。

帰りに至っては辻馬車を利用するお金もないため数日かけて歩いて帰るそうだ。

俺はそれに対し条件付で了承する。条件は2つ。

町などで、馬車を父が買ったことを話さないようにすること。

それと俺の作った馬車に村の人以外を極力乗せないこと。

その条件は父も問題だと思っていたのか、快諾しその話は終わった。

俺としても、この村には愛着がある。

ずっと住むには不便だし、俺には不可能ではあるがここが故郷だと思っっているし、ここに住む人のことも好きだ。

なら、その人たちが少しでもいい生活が出来るようこの位のことなら、むしろしたほうがいいと思っっている。

ただ、それだと村に来ている行商と折り合いが悪くならないだろうかと心配したが、そんなことはないらしい。

行商から買うものはいつも決まっており、それは商人でないといけないルートを確保しづらく、また行商も他のところで売った最後の流れとしてこの村に来ているから荷物が増えない分には問題はならないそうだ。

整備程度ならゴーンさんも出来るだろうし、馬の世話も問題ないだろう。

……サスペンションが鋳造なのか鍛造なのか気になるが、まあそれもどうにかしてくれるだろう。

そんなこんなで、気づけば15日も経っており、引越しの日を迎えた。

一昨日は父が獵師団の面々と夜中騒いでいたし、母も何度となく

村のあちらこちらで別れを惜しんでいた。

俺はいつも通り暮らし、別れを惜しんでくれる人に感謝しつつ、荷物の整理を行っていた。

ただ、引越すととなると鉱石の露頭箇所が遠くなるので人目を忍んで採掘に勤しんでいたが。

「お前たち一家がいなくなるとこの村も寂しくなるな！」

と、全然寂しそうに見えない村長。まあ、こういったキャラは熱血か涙もろいかどちらかだ。

きつと、後で1人で酒でも飲みながらひっそりと泣くんだろう。

「トニー。お前がいないと猟師団もきつくなるが、何とかする。どうにもならなかったときはお前だけでも引張るけどな」

そうやって笑うのは父の所属していた猟師団の団長だ。これからは村に馬車があるし、辛いときは父を頼ればいい。

「何言ってるんですか。いつもはお前は邪魔だとばかり言ってるのに」

そうやって笑う父に力はない。恐らく自分が引張りまわされる光景を想像しているんだろう。

「では、そろそろ行きますよ」

御者を買って出てくれたのは自衛団の1人、ロソンさんだ。今回はまあ、色々と問題もあり支援スキルは使っていない。

軽量化も強靱化も一定時間過ぎれば効果は消える。

父に使ってはいけないと念押しをされたので仕方なくだ。

6時間はかからないにせよ、レニに長時間馬車に乗せて何かあったらどうするというのだ。

そんなレニは引越しのことを良く分かっていないのか、「おでかけ、おでかけ」とはしゃいでいる。

ひたすらに和み、ぐりぐりと頭を撫でるとさらに機嫌が良くなり
はしゃぐ。

このまま疲れて眠ってしまったほうがレニのためか？　とも思う
があまり疲れさせるのも可哀相だ。

そんなジレンマに襲われるが、そんな間に挨拶は一通り終わり、
馬車に乗り込む。

乗り込み、ドアを閉めると感極まったのか。笑みと薄らと涙を浮かべる村のみんな。

そんなみんなに手を振り別れを告げる。

機会があれば帰ってこれる。そう悲観することもないとは思っている
だが、余計なことを口にはしない。

ゆっくりと動き出す馬車の景色を見つめ、今まで世話になった『
ユグドラシルの葉先』に別れを告げた。

荷物自体は、少なくともはないが、家具は揃っており、そちらに関しては置いてきたため多くもない荷物とともに馬車の景色を楽しみ、

4時間で町についた。

ゆっくりと走っていたはずだが、それでも商隊のキャラバンよりは荷物も少なく、馬車の振動も少ないため馬に負担がかからなかったからだろう。

商隊では村から町まで休憩を3度ほど挟んでいたが、それが2度で済んだのも早くなった要因だろう。

町に入り、建築ギルドでシエッタとフランクを拾い、新居へ馬車を進める。

比較的広い道があるところに館があつたのは好都合だ。門扉も広いため、そのまま敷地内に馬車を停めることにした。

そうそう。魔法陣は効果は続いている。あくまで魔術ギルドに消させたのは外の防犯用のものだ。

内側に関しては未だに続いている。とはいっても、あの魔法陣が消えた時点で効果自体書き換わるようにしたのだが。あくまで窃盗防止用なのだが、レニは好奇心旺盛だ。

今日は徹夜してでも魔法陣を書き換える必要がありそうだ。

入った館の中は一瞬別の家かと見間違えた。

元々そこまでぼろくはなかったが、長年に渡って積みも積もった埃と様々な汚れが綺麗に無くなっていたからだ。

天井に、有ったことすら気づかせなかったシャンデリアも、壁を飾る真鍮らしい燭台も古めかしいが、この家にはよくあっている。

「……素敵」

と母も言ってしまうほど素晴らしいのだ。……これを毎晩使うかどうかは別としてもだ。

「そつえば、義兄さん。ここは4人だけで住むつもりなんですか？」

「うん。暫くはね。広すぎるけれど、あくまで僕らは平民だから」

3階建て+地下もあるため部屋数は莫大だ。寝室だけでも片手では収まらない。

それに多目的室に図書室、おそらく衣裳部屋すらあるだろう。

つまり、貴族の邸宅にすむ庶民。分相応にも程が有るというものだ。

とはいえ、ここはあくまで住宅街。貴族が住む高級住宅街ではないのだ。

どうせ魔法陣を使って人避けはする。

仮にも俺は魔法使いであり鍛冶師であり錬金術師なのだ。

ならば、この美味しいシチュエーションを逃す手はないのだ！

というわけで、荷物の運び入れに邪魔にならないよう、自分の部屋を確保し、レニをつれてそこに居座る。

レニはまだここが自分の家だということが分かっておらず、「おつきいいだねーおにいちゃん」なんてきよろきよろと視線を飛ば

している。……本当に可愛いやつめ。

だが、いつまでもここでこうしているわけにも行かない。リーゼと約束していた甘いものを作らなければならぬ。

焼き菓子はある程度作られているようだが、どれもクッキーやベイクドチーズケーキもどき。しかもそれもあまり美味しくなく、甘くない。

露天で見つけ、話を聞いたところだとビートが少しは出回っているが、あまりに高くあまり使えないこと。

膨らまず技術がないため焼き固めたものしかないこと。そのためチーズやバターを用いた焼き菓子が主流だそうだが。平民では年に何度かしか口に出来ないそうだが。

まあ、パンがなければ、のような迷科白もあるように、お菓子はまだまだ高級品ということだろう。

そのため焼き型も存在しないためシフォンケーキと食パンの焼き型を作るはめになったが、先行投資ということで構わないだろう。どうせ原材料費はただだったんだし。

とはいえ、流石に生産スキルにシフォンケーキや食パンの型はない。

そのため、特殊スキル『変形』と炎の初級魔法、そして水の魔法でも冷却の系統の魔法を使い、苦労して鋳型を作り金属を溶かし、型にいれ冷却する。

久しぶりに魔法は使ったがスキルに頼らない鍛冶を行ったのだ。

とはいえ、鋳型を作るために使った『変形』により芯取りはほぼ一瞬で終わったし、枠も使わなかったため砂に直接溶かした金属を流し込み冷やして固めるという変則的なものになったが、まあこれくらいは一般的だろう。

そんなわけで厨房にやってきたが、当然ながらかまどに火が入っているはずもなく。

サービスなのか薪は用意されていたため窯を利用したのだが、火の調整が難しい。

火自体は一番初級の火の魔法「爆ぜ、火よ」で火をつけている。

初級魔法なのでワン・スペル（スペルの名前を言うだけ。前衛職のスキルもだいたいそうだ）で済むのもあって多用できる。

仕方がないので、「鑑定」により火の温度を監視、窯の準備が出るまでにそれぞれの生地の準備を行う。

とはいっても元々用意はしていたので後は時間との勝負だ。

ちなみに、レニははしゃぎすぎて俺の部屋で眠っている。レニにまだ厨房は危ないのだ。連れてくるはずもない。

気が向いたのでそのまま夕食を作ることにもした。

ここからシエッタとフランクが住む家は徒歩で10分ほどだ。

リーゼも呼んで夕食会にしてもいいだろう。

かまどに薪を入れ、「爆ぜ、火よ」で火をつける。

家から持ってきていたポウルの中に塩漬けにしてあった魚の切り身、臭み消しのハーブ、風味付けのニンニクを入れ寝かせる。これは後で揚げる予定だ。

あとはスープを作る。スープは野菜を多めだ。

肉は用意していなかったが芋や根菜類を入れる。……味噌汁にしたいが、ないもの強請りはできないのだ。

途中で大人たちが気づき、そろそろと厨房に集まってきたのでフランクにリーゼを呼んで来て貰うよう依頼、母とシエッタが興味深そうに見ているため母にパンとシフォンケーキを焼いてもらおうよう

お願いした。

「姉さん、ソラってすっかりしてるわね？ 随分と手馴れてるみたいだけど、普段からしてるの？」

「あ、はは。そうだね。うん、よく手伝わってくれるよ。ただ、火は危ないから1人で使ったら駄目って言ってるんだけどね」

ちなみにソラとしては料理は初挑戦だ。前の飴は料理にはカウントできない。

ただ、穹としては料理は数少ない趣味の1つだった。料理は裏切らないからな。

そんなわけで料理を作り始めて30分ほど。窯で焼いていたものがちょうど良くなってきたので魚を揚げることにした。

油をそこそこ使う揚げ物料理は危ないが、火の温度にさえ注意していれば揚げ過ぎることもない。

そういった物理作用に関しては変わっていないため、油を過剰に跳ねさせる事も火が炎上することもなく作り終えた。

作り終えた料理を囲むのは、父、母、レニ、俺とフランク、シエツタ、リーゼ。そして御者として手伝わってくれたロソンさん。計8人だが、それでも食卓にはあまりがある。

ここは長すぎるテーブルを排除して小さめの食卓を2台用意するとかしたほうがいいのかもわからない。

フランクがエールやワインを持ち込んだことで場は一部力オスになりそうだったが、俺にレニ、リーゼにはそんなことは関係ない。

何歳から飲酒可能かどうかは知らないが、俺は酔うこともないから飲まないし、レニに飲ませるわけがない。アルコール臭も苦手らしいからレニの前で飲むことすら本来なら許しがたいものだ。

まあ、そんなことはあったものの料理は好評であつたという間に全てなくなった。

特にパンがリーゼの口にあつたらしく、無口ながらも幸せそうに食べる様子に俺まで嬉しくなった。

あまりの美味しさ故か、食べ切れなかったパンとシフォンケーキを丸々渡した時の羞恥と嬉しさが合わさった顔も印象的だった。

飲みすぎたおかげで帰れなくなったフランクと、翌朝けだるそうに馬車で帰っていくロソンさんは自業自得だと思つたが。

日が変わり、白み始めたばかりの頃に目が覚めた俺は、まず風呂に入ることにした。

朝風呂！ 何て贅沢な響きなんだ！

日本人に生まれてよかった！ と既に日本人じゃないのにそう思

うと、特殊スキル『いい湯だな』を発動。

なみなみと張られた湯船に身体を沈める。

便利ならどんなネタスキルであろうとどんな名前であろうと関係ない。

取っていた俺、偉い。

本来なら外のかまどで火をたきお湯を沸かすらしいが、そんな無駄なことはしない。

むしろそれでお湯加減が上手く調節できるとも思えないし、この温度でゆつくりと身体を温める贅沢を今まで何故堪能できなかったのか悔やまれる。

1時間ばかり湯船につきり、身体を洗って一通り風呂を堪能し、のぼせた身体を冷やすため厨房へ。

「おはよう、母」

「なんだか頭から湯気でてるよ？ ソラ」

「朝からお風呂、極上の時間でした」

「この家お風呂あるんだっけ。後で私も入ろうかな」

そうしたほうがいい。是非毎日入る贅沢と必要性を知ってもらわなければ。

「レニも是非一緒に。あ、それで俺は朝食べたら町に出かけるから」

父はどうせまだ寝ている。フランクもだろう。……仕事はいいの

か？

「うん。じゃあ私はトニーが起きたら入ることにするね。

ソラは……大丈夫だとは思うけど、気をつけてね」

「厄介ごとに巻き込まれなければ平気。あー、パンもう焼けてる？」

「もう平気だけど、すぐ食べる？」

「ちょっと作りたいものがあって。そのついでに食べるから平気」

首をかしげ不思議がる母。まあ、これもパン普及のための一歩。

というわけで、作ってみましたサンドイッチ！

これをそれぞれの昼用に配ればパンの道はさらに明るくなるはず。

わざわざ食パンの型まで作ったカイがあつたよ……。

よし、これが出来たら町にでも繰り出しますか！

第5話 引越しと新しい生活 (後書き)

中々話が進みづらいです。。。
脱線と説明が多過ぎるせいでしょうか。

今回で魔術ギルドとの関係もある程度形が見えた…… ようになればいいと思います。

評価や突っ込みがありましたらお願いいたします。

2011/9/13

誤字の修正を行いました。 j p - y様ありがとうございました。

さらに誤字の修正を追加。。。 エイツール様、独言様ありがとうございました。
ざいます。

2011/9/16

加筆修正しました。

2011/9/18

誤字等を修正しました。 h a k i様ありがとうございました。

2011/28

誤字の修正を行いました。 暁闇さまありがとうございました。

幕話。ソラの知らないソラの事。(前書き)

読んで頂きありがとうございます。

今回は別の人物からの視点での話。

短いです。

幕話。ソラの知らないソラの事。

トニーの場合。

突然だが、僕の息子はおかしい。

とはいっても、精神が病んでいるとか生きることと致命的なものがあるわけではない。

おそらくただ唯一の存在。大げさに言ってしまうえば神のような存在なのだ。

……これは少し言い過ぎたかもしれない。

ただ、他の人とは違う。私にとって特別な子だが、他の人にとっても大きな意味を持つ子供だろう。

初めてこの子が他の子供と変わっていると気づいたのは、産まれてすぐのことだった。

黒い髪と黒い瞳。そこまでは僕の母側に何人かそんな変わった特徴を持つ人がいると聞いていたし、実際に僕の祖母も黒交じりの金髪だった。

だが、問題はそうじゃない。まず、滅多なことでは泣かない。

産まれて1ガルン、長くてもつとの時期の子供は頻繁に泣くものだったし、年の離れた弟もそうだった。

それが、お腹が空いたとき、そして下の世話が必要なとき以外は

泣かない。

その時は正直、静かな子だな、と思っていた。内向的な子供に将来ならないかとも心配していた。

けれど、それが間違いだとすぐ気づくことになった。

産まれて5エーク、わずか半ガルンで喋り始めた。それこそ最初は他の子供と同じく簡単な言葉しか話せなかったが、2エークもしたら他の大人とも会話が出来る。そんな子供だった。

その後は破竹の勢いというべきだろうか。

誕生日を迎えるまでには歩くどころか自分で着替えもできたし、歯も磨く。

2セアになった頃には、村長の家に入り浸るようになっていた。

その理由をある日聞いてみたところ、文字を覚えるため、だそう

だ。
何を冗談を、とも思ったが村長に話を聞いたところ、もう既に読みはマスターしており、書きも拙い部分はあるが書けている、と言っていた。

本当に、何の冗談かと思った。

この『ユグドラシルの葉先』の、いや『リンジョア』のどれくらいの人間が文字の読み書きを出来るだろうか。

僕が知っているのは、貴族に上級ギルド員、それと村や町の長など、その必要がある人間だけが読むことが出来るということだけだ。

実際、クリス……僕の妻なのだが、彼女をはじめ僕が知り合ってきた人の中で平民で文字の読み書きが出来る人は居なかった。

僕はクリスに『むりやり』覚えると言われ、何とか簡単な単語の読みと自分の名前を書くことだけは出来るようになった。

それもあくまで必要にかられたことだ。

僕やクリスは元々旅の途中で出会ったパーティーのメンバーだ。

いや、強引な彼女に無理やり加入させられたといってもいい。

文字を読み書きできなくても旅は出来る。それぞれのギルドに寄れば必要な情報は教えてくれたし、有料ながら代筆や依頼の読み聞かせもしてくれたのだから。

だが、彼女はその有料という部分が気に食わなかったらしい。

それならクリスが覚えればいいと反論をしたが、僕には魔術の才能があるから頭がいいはずだ、と根拠もない理由によりあえなく却下され、渋々覚えることとなった。

何かと重宝するからそれ自体はよかつたんだが。

だが、平民が覚えるのはそれくらいで僕だって自分で言うのは何だが教養はあるほうだと思っ。

けれど、息子。ソラは違った。誰に言われるでもなく文字を覚え、その理由も特にならないのだという。

そういうものだから、と困った顔で言うソラは何故そんなことを聞かれているのかという表情だった。本当に言葉を覚えるのに特別な理由は存在しなかつたんだらう。

その後も、世話になっっている農家の手伝いや家の手伝い、それに村長の家で何かをずっとしている日々が続いた。まるで、時間を持って余しているようだったので、途中で不憫に思い、商隊で本を買い、与えたが。楽しそうだったので何も聞かないことにした。

そして、娘が生まれ、2ガルン経ったある日、事件が起きた。

元々、この『ユグドラシルの葉先』は海が近いこともありあまりモンスターは居なかつた。

そのため僕も安心して狩りに出かけられたし、クリスマスも旅の際に利用していた装備を出すこともなかつた。

だが、その日は森が荒れていた。実際に荒らされていたわけじゃない。長年の猟師としての僕の勘が、今日は何か違うということ

告げていた。

他の猟師団の仲間も同じように感じていたらしく、普段は斥候をしている仲間が周囲の偵察をした。

それで恐るべき事が分かった。人狼が森に現れた、というのだ。

人狼は強靱な肢体と頑丈な爪を持って恐るべき力と並々ならぬ速さで獲物を狩る、僕たちとは比較にならないモンスターだ。

そもそも、王都に詰めているであろう騎士団ですら無傷では勝てないほどの強さを持つ者。

そして、その人狼がこの村に向かって進行していること。

誰もが顔を青くし、絶望した。この村に自衛団があり、騎士こそ駐在しているが、決してそれは紛れ込んだ獣やモンスターを追い払う程度でそんなモンスターに抗う術を持っている筈もない。

だが、子供たちが暮らすこの村にそんなものを侵入させるわけには行かない。

そう覚悟を決め、それぞれが自分の暮らす村を守るため、武器を取った。

クリスにも話をし、家のことを頼んだ。何が何でも家にまで到着させるわけには行かない。

無謀かもしれないが、やるしかない。

そう決め込み、村の入り口にまでとうとう人狼が現れたと聞いて暫くした後、クリスが血相を変えて走ってきた。家に何かあったのか、と聞くとソラがここに来ていないかと聞いてくるじゃないか！当然、そんなこともあるはずはなく、理由を聞くと考えもしない言葉が返ってきた。「ソラが、飛んでいった」と。方向からして、この広場があるいは村の入り口にまで行ってしまったのではないか。そんな妻の言葉を聞き、慌てて村の入り口にまで走る。杞憂であればよいのだが、もしそんなところにまで行っていたら！

村の入り口にまで近づくと、濃厚な血の臭いと獣の絶叫、そして男たちの気合の入った叫び。

そして、小さな影。近づかなくとも、それがソラだということが分かった。

随分と顔色が悪いが、もしかしたら怪我でもしたのか。そう考えるとしてもたつても居られず、そこが何処であろうと関係ない。ただ守るためだけに駆け寄り、抱き締めた。

「ソラ！ 何でこんなところに居るんだ！ 危ないじゃないか！」

息子からの返事はない。くたり、と力を失ったところを見ると気を失ったようだ。

「うわっ……。トニーやりすぎだろ」

駐在騎士のグランの言葉ではつとす。確かにソラを抱き締めるのには少し力が入りすぎていたかもしれない。

「何が、あつたんだ？」

その後のことは信じられなかった。

グランも目の前で起こったらしきことが信じられないといった様子だった。

だが、話を聞いてみると確かに信じられなかった。

何とか人狼の右の腕を折り、腹を切り裂いた頃には既に自衛団は壊滅状態。

死者こそまだ出ていなかったが、瀕死の重傷者多数。自分も死を

覚悟し、突撃しようとした矢先。

今まで聞いたこともない詠唱でその重傷者や自分を光が包み、それが消えた頃には倒れこんでいた重傷者も怪我1つない状態であり、グラン自身も腕が折れ、全身傷だらけの筈だったものが痕すら残っていない。

その声を辿ると、居たのはソラ。しかも何故か空に浮き、またも聞いた事のない詠唱により人狼を捕縛、今に至るといふ。

騎士のグランが知らないということはグランが所属している王都の騎士団、それに魔術師団も知らないということだろう。

だが、グランは僕や妻が旅をしていた最中に見つけた何かしらの魔具なのか、と聞いてきた。

確かに旅をしている間は色々なものに触れてきたし、少なくともアイテムを手に入れた。

しかしそんな起動可能な魔具を持っている訳もない。少し困ったが、妻が集めていたものの中にあつたかもしれない、とだけ答えておいた。

自衛団のアントニオもそれに関しては不思議がっていたが、そう言った事ならと納得してくれた。

そして、その場でこのことは他言無用で、とお願いをし息子が風邪を引いたら困るからとその場を後にした。

話しても夢物語か疲れて幻覚でも見たと思われるのが精々だ、と苦笑もしていたし滅多なことでは話さないだろう。

この村の人間は情に厚い。きつと信じれる。

翌朝、疲れている身体を無理やり起こしクリスと話し合った。

今後どうするかを、だ。

ソラをこのままにしてはおけない。何があったかは分からないが、強い力を持つ人間はその力に溺れ、自滅する。

旅をする間でそんな人間には山ほど出会ってきた。聡明な息子ではあるが、どうすればいいか。

クリスは魔法学校に通わせたい、と言う。才能がどうか、ではなく同じような力を持つ同世代の子供と一緒に過ごしたほうがいいだろう、とのことだ。

ただ、僕はそれには懸念点があった。お金が結構かかるが、それは今まで集めてきたアイテムを放出すればどうにかなるだろう。

けど、あの子がそんなことを望むのかということ、僕が知っている魔術師は1人を除きそのほとんどが傲慢で自分勝手に、そして欲深かった。

ソラにはそんな風に育って欲しくない。むしろ優しきで包まれたところで生活をすれば、頭のいいあの子のことだ。きっと優しく立派な大人になってくれるだろう。

話し合いは平行線を辿り、どうしたものかと思ったとき。ソラが現れた。

普段は少し大人びた、ちょっと背伸びをした子供と思っていたが、この時ばかりは違った。

いつもの愛らしい笑顔はどこかに消え、ただ無色な笑みをそこに張り付かせていた。

「というわけなんだけど。……どう？」と最初は良く分からない出だしから始まったが、「……では、改めて説明させてもらいます。

俺、向日 穹のことを。俺がどんな存在なのかを」と急に大人びた表情と声で淡々と説明を始めた。

曰く、これが自分にとっての第2の生であること。曰く、そんな

る前は18歳……おそらく18セアのことだろう。その時に事故により死亡したこと。曰く、それが神によって決められた運命であったこと。曰く、神によってこの世界で産まれる事を許されたこと。そして、僕たちを大切な家族だと思っっていること。

言っていたことは正直半分も分からなかったが、理路整然と纏められた話、そして何より悲しげなその表情。それを疑う気など、何処にもなかった。

ただ、困ったことはソラの使った魔法にあった。ソラが言うには詠唱はするが属性の触媒は一切使っていないということだ。

半信半疑だったものの、目の前で浮かばれてはそれを否定する材料もない。

否定しないこと自体は構わないが、欲に目の眩んだ魔術師や貴族に何をされるか心配でたまらない。

魔具は子供が内緒で手に入れられるような品物ではないから、魔具をこっそりと使っということも無いだろう。

そうなるとやはり、クリスの言ったように魔法学校に入れてこの世界の魔法がどのようなものか知ってもらわなければならないだろう。

ただ、それまではまだ時間がある。それまでは、出来る限りお金をため、最後はソラの意志を尊重しよう。

間違っていれば僕とクリスで叱ればいい。本人が言うには僕たちよりも精神は大人だと言っていたが、息子には変わりがないのだから。

僕たちに内心を話してからというもの、ソラの行動は激変した。

元々どこかへこっそりと出かけていたらしいけれど、その頻度が

高まり長いときだと1日どこかに出かけていることもあった。

ある日は家に帰ってみると見慣れぬものが食卓に並んでいた。白く丸いものと、前に町で口にした事のあるクッキーのようなもの。

どちらもソラが前に食べていたパンの一種らしい。

どうやら今食べているパンがソラにとってはどうしても耐えられなかったものらしく、クリスにお願いをして材料を用意してもらったそうだ。

そして、それを口にした瞬間。ソラの気持ちが理解できた。

食べるまでは子供の我侭でいつているのかと思ったが、よく考えればソラは今までそんな好き嫌いを一回も言ったことがなかった。

だが、このパンが今まで食べていたものと同じものだと信じられなかった。

柔らかく、風味も強い。パンといえばスープに浸し食べるものだったが、そうしなければ硬く食べられないということだった。

今まで当たり前前にそうしていたし、そういうものだと思っていたがそれはそうしかできなかったのだという事実気づかされた。

ただ、これですらソラから言えばその場凌ぎでまだ改善の余地は残されているのだという。

この白さも、味も。僕から言わせればこれまで食べたことがないし、平民はおるか貴族ですらこんなものは口にしたことがないんじゃないだろうか。

そういつと苦笑し、そんなことはないという。

貴族ならもつといいものを食べているだろうし、このくらい誰でも思いつくものだ、と。

ソラは、この世界の住人を多少、いや、かなり買いかぶりしていると思う。

むしろどちらかといえば、自分を低い位置で考えているらしく、魔術……らしきものであつさりと魔具を作つて見せたり、変身をしてみたり、10ガルンもの間誰も辿り着けなかった館を探索してみたり、と。

その後、馬車を買いたいと言いだして自分で馬車まで作つて見せたときには表にこそ出さなかったが、本当に驚いた。

元々、何か村に恩返しをしたくて、……それと同時に息子のために引つ越す僕たちからのせめてもの謝罪と、ソラに対して関心の目をそらすために馬車を村に贈つてもいいかと確認すると、それもあつさりとした承を得られた。

元々買った幌馬車が金貨50枚だったのに対し、ソラの作った……大きな箱馬車、だろうか。

荷物さえ積まなければ10人以上が楽に乗れそうな馬車は揺れもほとんどなく、内装も革が貼り付けてあり柔らかい布の塊が置かれ、もし1ソリアの長旅に出てもきつと疲れず、モンスターさえ現れなければその中で寝泊りが出来るであろう位しつかりしていて、仮に売りに出せば白銀貨何枚になるだろうか。

必要だつたらまた作れるから、と簡単に手放せるソラを、不安に思つた。

それに、このお金が自分のものであるということに頓着をしていないどころか、それが自分のお金であるという認識すら持っていない

いようだった。

お小遣いを渡したときも、こんなに貰っていいのかと驚いていたし。

何よりも、この程度のものであれば誰でも作れる、と本気で信じ込んでいるソラはどんな世界で生きていたんだろうか。

不安の種は尽きないが、この子がこの子であり続けるのなら、きっとこの子は歪んだりはしないだろう。

そうなりそうなら、その時は僕とクリスで支えよう。

僕たちは、ソラの親なんだから。

?
?
?
?
?
?
?
?

今は語られないエピソード。
とある男子高校生の場合。

退屈な毎日、変わらない日常。

うーっと息を吐いて背を伸ばせば、見下ろすのは見慣れた光景。

今年もまた夏が来た。まあ、天変地異でも起こらない限り当然な

んだけどね。

日課のジョギングが終わり、その終着点の高台は相変わらず人気がない。

そういった場所だからこそ、こういったちよつとした日常の贅沢を味わえるんだろうけど。

この、笹花市はそういう町だ。人口は大して多くもなく、10万人程度だし、特色のあるところじゃない。

事実として高校は市内に1つだけだし進学校ですらない公立だ。

そんな、何も無い町に住み続ける理由は1つ。

そんなことはないはずなのに、此処に住み続けて居ればいつかひよっこり帰ってくるんじゃないかって、未だにそう信じているからだ。

3年前に、海難事故で亡くなった兄さんが、何事もなかったかのように俺たちの前に姿を現すんじゃないかって。

俺の兄さんは産まれた時から不幸が標準搭載されていたらしい。

どこかに出かけては迷子になったり、事故に遭うのは日常茶飯事。そのくせ、異常なスペックの高さでどうやっても大怪我に見舞われることもなければ、服こそぼろぼろになるものの何処をどうやったらそうなった、と思わず言いたくなるような事故に巻き込まれても怪我1つ無く生還する。

酷いときは1週間家に帰らないこともあったが、富士の樹海に迷い込んだとかで帰れなかったらしい。その時は集落に迷い込んで、たまたま合宿中だった大学の運動部の方々に送って貰ったらしい。

そして、その余波に巻き込まれるように周囲にトラブルを撒き散らかす。

とはいえど、大抵のことは自分でそれを治めるし、その後のフォローだってする。

以前、中学の文化祭で劇をしたときは思わず笑ってしまった。

兄さんが出るたび照明は切れるし、それまで完璧だった科白は間違っし、何もないところで全員狙ったかのように転ぶし。

そうやって不幸を呼ぶ割には、人が巻き込まれるような場合は笑えるもので済んでいたこと。それと兄さん自身、あまりのボケっぷりに敵を作らない人だった。

だから、旅行から帰ってきて誰も家に居なくてもまたどこかで迷っているのか、と樂觀視していたし、暫く帰ってこなくても心配しようとしなかった。

けど、その次の日。フェリーの事故で海に放り出されて死んだと連絡があった。

その話を思い出すだけでも頭にくる。兄さんが死んだのは、1週間も前だと言ったのだ。

だが、その時投げ出されたことも気づかずにそのままフェリーは目的地に到着。

兄さんの荷物も、乗客の忘れたものだと思われ港の事務所に放置。1週間後、海に浮かんでいる兄さんが発見され、慌てて連絡してきたのだと言った。

それに俺たちは大激怒。今でこそ落ち着いて思い出せはするものの、………当時は担当者全てを血祭りにあげようと本気で思った。

けど、そんなことをして喜ぶ人は居ない。ちゃんと事実を究明し、

発表させることで一応の決着をつけた。

その後もイライラは治まらなかった。

それは、急に色々な転機が訪れたからだ。

たとえば宝くじで高額当選した。たとえば親の会社が急成長した。たとえば俺の成績が上がった。

いや、最初以外はそれぞれの努力の結果だと思う。

ただ、周りはそうは思わなかったらしい。

お荷物が消えたから。貧乏神が去ったから。兄さんが、居なくなっただから。

それには今度は黙ってられなかった。

兄さんの悪友が言うなら許せた。彼らは兄さんのことを悪くは思っていないかったから。

おそらく本人が目の前にも堂々と言っていただろう。からかいの材料として。

彼らだけだ。兄さんが死んだことで本気で泣き、悔しがって、別れを惜しんでくれたのは。

けど、何も知らないやつらが兄さんの悪口を言うな！

ただただ、それが悔しくて、悲しかった。こんな時だって、兄さんが居たら怒らなかつただろうから。

だから俺は怒らない。その矛先を他人に向けない。

何処でだって、兄さんに見咎められる気がする。

同じ名を持った、この空の下では。

だから、そんな時は空を見上げて、大きく吸って。

それで笑ってやるんだ。

幕話。ソラの知らないソラの事。(後書き)

ガルン〓年

エーク〓月

セア〓年齢

一応『ムーンディア』の世界にも色々名前はついています。
料理の名前然り、星の名前然り。

そういつたことを考えないのが主人公くおりに。というか、主人公と周囲のギャップの1つ。

これで多少なりとも主人公の常識のなさが分かってもらえれば幸いです。

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

2011/9/14

誤字等修正しました。独言様ありがとうございます。

2011/9/18

誤字等修正しました。haki様ありがとうございます。

2011/10/4

一部修正しました。まーや様ありがとうございます。

第6話。しんきゅらとじいじょー！(前書き)

読んでいただきましてありがとうございます。

総合評価が4000pt突破！

読んでくださる皆様に感謝です。

第6話 しんきやらとじょう！

館に居たみんなの分のサンドイッチを作った後、町に出た。

一応、持って行くものは昼食用のサンドイッチを入れた肩掛け鞆、それと銀貨を1枚だけ入れた小袋。

小袋は魔術ギルドから貰ったやつじゃない。厚手でしっかりしているが少々色褪せた、父から譲り受けたものだ。町で暮らすならお小遣いも必要だろうし、あの袋を町で使うのは目立つという父の意見もあり、それまで使っていたものを譲ってくれた。

この前貰ったお金も残っているが、それはアイテムボックスの中に突っ込んである。

子供のお小遣いとしても100R^{ルー}程度であれば少し多いかな？程度だろう。

目的は特にない。単なる散歩だ。

家の片付けはまだ残っているが、ほとんどが荷物の片付けや重いものの運搬。

家の中から家具を持ち出さない限り魔法陣は動作しないし、今日はまだ改造はしなくていいだろう。

それにこの身体は重い家具どころか、持ってきた荷物を所定の場所に置くための往復を3〜4回もすれば疲れ果ててしまうだろう。

あまりにもSTRが足りなさ過ぎる。

そういえば、俺はちゃんとレベルアップ出来るのだろうか？

出来るのであれば、その経験値はどうやって上がる？

久しぶりにメニューを起動し、ステータス画面を見てみることにした。

LV . 5
HP 5028
SP 28041
STR 1
VIT 1
INT 1500 (1000+500)
SPD 800
DEX 1000
LUC 50 (10+40)
CHA 90 (10+80)

使用可能ステータスポイント 8

経験値 3510 / 4200

レベルが上がっている、だとっ……!!?

しかも微妙にHPとSPも上がっているし。

何を元に経験値が溜まったんだ？

これまで俺は戦闘はしていない。ワーウルフの時は支援しただけで直接ダメージは与えていない。

今までにしてきたのは錬金と鍛冶と料理だけだ。

しかも、そんなに多くもないし難易度が高いものもしていない。

そうであるならばこつこつと錬金だのをしていたらレベルが上がるのか？

……まあ、今はそれを確かめる術もない。こんな往来で試せることなど何も無いのだ。

今は散策だ。人ごみの中を小さい身体を使って進んでいく。そのせいで何を売っているか物は見えないが、張り上げる声で何を売っているかは分かる。

活気のあることはいいことだ。活気があれば物は動きやすくなるし、新しいものもどんどん流通する。

時折、厄介なものも出回ったりするが、それもまた仕方ないことなんだろう。

ああ、また思考が脱線してしまった。

目的がない以上構わないのだが、あまり良くはない。

あまり場所が分かかっていないところをふらふらと歩き回っていると迷子になってしまう。

これまでは村の中だったのでそんなこともないが、前の俺は酷い方向音痴だった。

いや、方向音痴と言っていいかどうかすら分からない。

コンビニに行こうとしたら全く反対方向にある本屋についてたこともあったし、駅前に行こうとしたら何故か山についてたこともある。

酷かったのは、髪を切りに行こうとバスに乗ったら何故か富士の樹海に居た時だ。

途中からおかしいとは思ったんだ。やけに木が多いし、変なロープはたくさんあるし、時々白い人影すら見えた。

そのまま進んでいったら集落らしきところに辿り着き、送って貰ったのはいい思い出だ。

家族にはしこたま怒られたが。

と、考えていると何時の間にもやらの喧騒は離れ、人こそ通りはするものの閑静な通りにいつの間にか辿り着いていた。

よし、まだ人通りが多いところは見える。最悪『気配探索』を使って家人を目標として帰ればいいだけだ。

と、立ち止まって考えているとすぐ横の扉が開く。

出てきた男は俺を邪魔そうに見たため、慌てて離れる。

一瞬見えた建物の中は薄暗く、店らしいが何の店かは分からない。ふと上を見上げるとそこには看板がぶら下がっており、『魔術工房サンパーニャ』と書かれた文字とビーカーらしきものが描かれている。

中も見えないし、どんなものだろうか。

俺は名前に惹かれ、ふらふらと中に入っていった。

中は、今は客がないのかウサギの獣人らしきお姉さんが1人いるだけだ。

店の中は……正直良く分からない。無造作に置かれた商品らしきものが二棚分、それと怪しげな色をした液体が入ったビーカーの置かれた棚、すり鉢、正体不明の草や動物の素材らしきもの。

それだけを見るのであれば精々錬金術師の工房であるが、それ以外にもカウンターには水晶に宝石らしきものが鍵のかかったケースに納められているし、奥の部屋には小さいながらも炉があるようだ。まるで俺のためにあしらわれた様な空間だが、だがそれなら何故魔術工房を名乗る？ どちらかといえば単なる工房だけでいいような気がする。

「いらっしやい〜……って、お客さんじゃなさそうだけど、どうしたのかな？」

俺に気づき声をかけてくるお姉さん……っと、よく見ればこの前町で見かけたあのお姉様ではないですかっ！

「何のお店かなくて思ったんだけど。邪魔、かな？」

相変わらず人に対しての言葉遣いの加減が難しい。

素で話せば初対面の相手にはきつすぎるだろうし、だからといって敬語もこの年代の子供は使えない可能性もある。

「うっん！ 全然そんなことない！ お客様も今いないし、見て行って」

それはぶっちゃけすぎだが、良い人そうだ。

お言葉に甘え、見させてもらうものはまずは当然だが商品だ。

とはいえ、あまり品質のいいものはない。

まず、魔具がない。まあ、需要と供給を考えるとほとんどの店では扱っていない可能性もある。

それはいい。けれど、たとえばランプ。熱を加えすぎたのかガラスが均一じゃないし、一部歪んでいる。枠もまっすぐではなく歪で軽く振ってみるとガタガタと軋む。

壊れかけたランプ

明かりを灯すための器具。 重量10 耐久【5/100】

あまり軽くない上に壊れかけている。

しかも販売価格150Rでは誰も買わないだろう。

他にも、解けかけのロープや使い古しの蝋燭、折れ曲がったフォークなど廃品回収をしたものをそのまま並べたのか、と思うような

品が無造作に置かれている。

しかも全て銀貨1〜3枚で誰が買うのか、と思うものばかりだ。

「これは、お姉さんのお古？」

「そう思われても仕方ないよね……ロープとか以外は私の手作りなだけで」

小さくため息をつくお姉さん。手作りにしたって、何でも不器用なんだろうか。

むしろ、全て1つずつしかなく、作り慣れた感じが全くしない。

「……趣味？」

「仕事ですっ！」

どうやら金持ちの道楽で出している店でもないらしい。

「なら何でも構わばらばらのものを？ 1つ1つ作りこんでいかないうまく作れないと思う」

これは真理だ。どんなものでも基本をしつかりとこなせばそれなりのものできるが、それを抜かすとそれなりのものすら出来ない。今の此処に並んでいるものはそういった類のものだ。

「それは分かっているんだけど……そんなお金もないし、同じものを並べても売れないし、お腹も空いてよくわかんなくなるし」

どんどん暗くなるお姉さん。やばい、どつばにはまりそうだ。

くー、と小さくなるお腹の音もこの場合はポイントと言えるのか？
赤くなり、涙目になる顔はツボに嵌まるが、今此処で落ちるわけにはいかない。

「無い袖は振れないけれど、袖触れ合うも多生の縁といえますし。お近づきの印にどうぞ」

一瞬躊躇いはしたが、鞆から取り出した包みをお姉さんに差し出す。その中はもちろんサンドイッチだ。

「いの？ と泣き出しそうなお姉さんに頷き、渡す。

別にこれを渡しても一食食べる程度ならどうとでもなる。

それなら今まで食べたことが無いであろう人に食べてもらって味を聞いたほうが有意義だ。

うちの両親はどこが大げさなところもあるし、第三者からの意見を聞いたほうが良いだろう。

「美味しい！ 美味しいよこれ！ 何処で売ってるの？ むしろこれ本当にパンなの？！」

……多少食べる姿は豪快だが、決して無作法でもないだろう。

むしろ一生懸命食べる姿は微笑ましい。ところで、お姉さんはウサギの獣人のようだが、サンドイッチの中には魚や肉を挟んだものもある。それは大丈夫なのだろうか？

俺の心配は杞憂に終わり、サンドイッチは全てお姉さんが完食。よほどお腹が空いていたのか、只管に美味しいと繰り返し食べていた。

「ホント美味しかったよ！　こんな美味しいパン初めて食べたよ！　ねえ、何処で売ってるの？　……でも、きつと高いよね」

「全部手作りなので別に高くは無いですけど、喜んでもらえて何よりです」

お姉さんが固まる。一体どうしたのだろうか？

売っていないことにショックを受けたのだろうか。いや、それは俺も同じなのだ。

「凄いつ！　凄いや君！　ねえ、どうやったら作れるの!?!」

肩をつかまれ前後にガタガタと揺すぶられる。というかお姉さん案外力強すぎ……。

「ちよっ！　お姉さん、強っ、痛っ、手、手離して!」

とりあえず何とか離して貰うと、息をつく。

「ご、ごめんね。久しぶりにお腹一杯になったのと、凄く美味しくてつい興奮しちゃった」

つい、で人を壊そうとしないで欲しい。

「うーん……幾つか道具作らないといけないんだけど、お姉さんご使って平気？」

久しぶりに鍛冶をして作れるかどうかを確認したほうが良いだろう。

それで経験値が上昇するかも確認できるし。

作り方がわからない道具でも、システムに登録されているものであればその補助を受けて作ることが出来る。

最初はそのシステムも結構いい加減で、鍛冶道具に限らず知らないものを、勝手に両手が動かしている姿が不気味だったので基本的な知識は身につけた。

少なくとも補助を使えば日曜大工以上のものは作れるだろう。

「美味しいご飯を貰ったから貸すのは良いけど……危ないよ？ 怪我しちゃうよ？」

それはきつとお姉さんが普段している実体験に基づくものだろう。お姉さん不器用そうだし。

「簡単なものなので大丈夫！ あそこに転がってる大きな石と丸太使っても平気？」

奥の部屋には薪用なのか丸太が何本か転がってるし、何に使うかは分からないが大きめの石もある。

少なくとも鉱石や宝石ではなさそうだが、何に使うんだ？

「うん……道具とかも自由に使って良いけど……平気なの？」

「大丈夫。だからお姉さんは、ええと。材料足りないものありそうだから、買って……来るお金もなさそうだね」

「ぐ……私より小さい子供に言われるなんて……。事実だけに辛いよ……」

お姉さんは子供なのか？ 種族特性なのか分からないが、18歳位には見える。

少なくとも16以下には見えない。

「……子供というのであればお姉さんは何故店を？」

踏み込むべきなのか一瞬迷ったが、お姉さんの表情は暗い。少なくとも騙すようなタイプには見えない。

俺は人を見る目はあるつもりだ。散々騙されそうにもなったし、防衛術は持っている。

「……お父さんとお母さん、もうずっと帰ってきてないんだ」

あっさりと話すお姉さんもお姉さんだが、聞く俺も俺。

まあ、これも何かの縁だ。泣きそうなお姉さんの瞳を見たことで俺に聞かないという選択肢は無かった。

お姉さんの悲しげエピソードは正直俺にとってはまだ笑って話せそうな話でしかなかったが、お姉さんにとっては死活問題だろう。

2ヶ月も家を空け、書置きも無い。普段は両親が出かける場合、どんなに短くても何らかの書置きをして出るはずなのにどれだけ家の中を探し回ってもそんなものは見つからず。

お姉さんもご両親も簡単な言葉はどうかして書けるからそれを忘れるとか、書けなかったということは無いらしい。

それでそれなりの蓄えがあったので今は生活出来ているが、半年

に一回ある納税にはぎりぎり足りる程度しか残っていない。

それを払えなければ家を担保に取られ、その次の納税の際に払えない場合はそのまま国のものになってしまうそうだ。

自宅とこの店、どちらもそれなりの時代の間お姉さんの一家が守り抜いてきたものなので自分のせいで手放したくない。

まあ、親がどうなったにせよ。それはお姉さんのせいじゃないだろ。

少なくともお姉さんは両親が帰ってくるまで店を守るつもりだし、度々自衛団や町を回っては行方を掴むため、色々なところを歩き回っているそうだ。

で、何故ここがこうなっているかというと、本来お姉さんの父親が作っていたものは全て売れ、見よう見まねで自分も作ってみたそうだ。本来ならそこで店を少なくとも休業にした方が良いと思うんだが、お姉さんにはどうしても出来ないらしい。

ただ、このままでは物も売れないしご飯も食べられない。どうしようか困っていたとき、俺がご飯をくれたということで随分感謝しているようだ。

「お姉さんさ。ホントにやる気ある?」

「うん! だってここはお父さんとお母さんの場所でもあるんだよ! 私が頑張らなきゃ!」

そう笑って話すお姉さん。どうも、この世界の人たちは本当に強いらしい。

「なら。俺も手伝うよ」

「ええっ?! で、でも危ないよ? 遊びじゃないんだよ??」

静止をしようとするお姉さんを他所に、道具を見つめ、点検する。良い道具だが、少し手入れが行き届いていないようだ。恐らく、お姉さんは手入れの方法も知らずに使ってしまったんだろう。

砥石はあるが、今回はそれは使わない。ノミとハンマー、後は俺の持っているナイフで十分だ。

ナイフは錆びてしまっているが、ここにある砥石で砥ぐのは少し後ろめたい気がするからだ。

そうして出来上がったのは石臼と脱穀機、それと材料が余っていたから作ったランプだ。

ランプ自体は組み合わせで溶接しただけの簡単なものだが、室内外で使えるよう、取っ手もつけておいた。オイルを使うから室内で使うには換気が必要があるが。

「……実はドワーフじゃないよね?」

「人だよ。お姉さん」

現実逃避を始めるお姉さんにとりあえず釘を刺す。

システムの補助があり、スキルをカスタムしている俺とほぼ素人のお姉さんを比べるのは流石に酷いが、全て売れるだけの物が作れる工房を所有する身としてはこれはきついんじゃないだろうか。

「お姉さんが工房を守りたいというなら俺は協力しなくも無い。まあ、お姉さんの頑張り次第だけど」

「……難しいのと痛いのはやだよ？」

「さて。そろそろ俺は帰ろうかな」

片付けの用意をする。特に持ってきているものは無かったし、鞆だけ掛ければ良いか。

「わ！ わわっ！ じよ、冗談だよ！ できることはちゃんとするよー！」

「なら、そう言って欲しいと思うのは我俣かね？ 俺が協力しないことで俺が被る被害なんて無いわけだしさ」

敢えて言つたら良心の呵責程度か。むしろ協力した時のデメリットのほつが多過ぎる。

「うう……頑張ります」

「よし。ならまた明日な」

「ちよっ！？」「ここまで言っておいて帰っちゃうの？！」

「そりゃ帰るよ。そろそろ帰らないと母に怒られそうだし」

引越してすぐからあまり遅くまで帰らないのは問題だろう。あまり心配させたくもないし。

「そ……そういつことならそうだね。うん……また、明日」

しょんぼり、とお姉さんは俯く。お姉さんにはまだ両親が必要みたいだ。

後ろ髪を引かれる思いはしたが、そこはそこ。人様の事情に深入りして良い理由は無い。

俺も、お姉さんの両親が見つかるか、お姉さんが納得するまでは付き合うつもりだが、それ以上は考えていない。

家族は別だが、他の人との付き合いにはある程度の線は引いたほうが良い。

そこで引き離すか、歩み寄るかは本人の自由だ。まあ、強要するものでもないが。

ついでに、夕食の最中、今日の話をしてるときにお姉さんの名前を聞いていないことによく気づいたのはお姉さんには秘密にしておこう。

その後、風呂に入りながら魔法陣を弄りながらぼんやりと考えたことは、そういえば挨拶回り行ってないじゃん。と割と子供としてはどうでもいいことだった。

寝て起きて、まずすることは料理だ。………何だかおかしくね

? いや、理由はある。

色々な料理が何処まで受け入れられるか、ということだ。だからと言って朝っぱらから料理をすることと繋がらないという意見は受け付けない。

俺が作れる料理は食材の壁があるが少なくはない。知らない食材もあるし、今後作れるものはもっと増えるだろうが、今は特に甘いものや軽い口あたりのものが極端に少ない。

まあ、幸いなことに文化レベルは中世ヨーロッパ調だが、イコールそのままでもないらしい。

つまり、ジャガイモ……らしきものもあればトマト。らしきものもあるのだ。

だからジャガイモを加工すれば片栗粉もできるし、トマトもケチヤップなどが作れる。

何よりジャガイモがあるということは飢えることも滅多になさそうだ。

というわけで、今日はトルティージャもどきを作ってみた。

底の深い鍋でも炒め物や焼き物ができる。平べったいものを作るときは中々難しいが。

だからトルティージャは作れても、トルティーヤは作れない。同じような言葉なのに、残念でならない。

しっかりと焼き固めたトルティージャとパン、それに干し肉。これは大量にあった方がいいがどう料理すれば良いか分からなかったため後で炙ってパンにでも挟んでみよう。

スープにしたり、煮込めば塩分が抜けて程よくなるらしいが、持ち運びには適していないからパス。

それをしっかり2人分、昨日と同じ鞆に入れる。

既に昨日の時点で両親に話している。問題は無いはずだ。

そういえば父は今日もまだ寝ている。仕事はどうするのだろうか？

というわけで、襲撃をかけ父を叩き起こそうとしたが。何やら魔
されている様だったので母に任せ、家を出ることにした。

「やあ、待ってたよ。今日は早いんだね」

昨日よりどこか明るいお姉さん。

入ってきた俺を見つけるなり良い笑顔だが、視線が鞆に寄っている事を俺は見逃さない。

「昨日と違ってあまり寄り道もしなかったからな。それで、お姉さん。先に聞くけど、本当にできることは何でもするんだな？」

にやり、と笑ってみる。特に意味はないが、何となくだ。

「う……。そ、そうだね、で、出来る事であればするよ？ お店も家も無くなるの嫌だから」

何故かお姉さんは引く。まあ下手なことを言われても困る。というか、初めて会った人間を信用しすぎるのも考え物だ。

「なら、お姉さんがするのはまず2つ」

「2つも……？ な、何かな？ お、お姉さん頑張っちゃっござー…

…お？」

妙にテンションが低いのが気になるが。

「1つは冒険者ギルドにでも行つて、ご両親の情報提供を呼びかけること。もう1つは、まずは道具も含め手入れを覚えろ！」

びく、つとお姉さんが身体を震わせる。尻尾が長ければきつと尻尾は伸びきっていただろう。

やばい、触つてみたいかもしれない。

「でも冒険者ギルドに何をお願いすれば良いの？ むしろ、手入れて…しなきや駄目なの？」

「しなきや駄目に決まってるんだろ！」

半泣きになったお姉さんに道具の手入れの重要を説くこと1時間。お姉さんもその重要性をしっかりと理解してくれたようなので町に出ることにする。

まずはお姉さんの父親が懇意にしていたという鍛冶職人の工房に向かうことにする。

そちらのほうが重要だと判断したからだ。

冒険者ギルドに行くのが面倒だということは割りとあるが、今は関係ない。

工房はずっしりとした髭もじゃのおやっさん。なりの小ささから考えるとドワーフだろうな。

そんなおやつさんが火の前でどっしりと構え、座っている。

「よう、ミランダ。1人、じゃねえみたいだがどうした？」

お姉さんの名前はミランダというらしい。先に聞いておいたほうが良かったかもしれない。

「ベディおじさんおはようございます。えっと……今日は道具を手入れして欲しくて来ました」

おずおずとお姉さんは包まれた道具を出す。元々一式をしまっていた道具入れだ。

それから出しっぱなしにしていることも俺が重要性を説かざるを得ない一因だった。

「ジェシイの道具じゃねえか。やつこさん、これを俺に持って来る時は人に触らせやしなかつたんだが、何かあったのか？」

お姉さんが昨日俺にした説明を繰り返す。びくびくしているのはどうしてだろうか。

「成る程な……。俺もあいつを最後に見たのはお前さんが言ったのと同じ、いやちょっと前だな。その時はいつも通りに見えたんだが。すまん、力になれんで」

「ベディおじさんは悪くないですよ……あの、それで道具なんですけど……」

「おう。こいつの手入れは俺に任せとけ！ にしても、こいつはおかしいな。おい、ミランダ。これを持ったのはお前さんだけか？」

「いえ……この子も、昨日一度……」

ああ、そういえば付いて来たは良いが何も話してなかったな。

「昨日、少し触らせてもらいました。それで手入れが出来ていなかったなので修理してもらおうよう話しました」

軽く頭を下げる。

「おう。そりゃ悪いな。……ちと、手を見せてくれんか？」

良く分からないが、まあそれくらいなら構わない。

おやつさんの前にまで行き、両手を差し出す。

おやつさんは俺の両手を取り、手をじっくり観察したり、軽く握ってみたりと良く分からないことをしている。

「……おい、お前今までにどれだけ打ってきた？」

打って、というのはハンマーのことだろう。『レジェンド』では暇つぶし……もとい、精度を上げるため一日中ハンマーを落としていたこともある。その回数は数万回だろう。

「昨日が初めて、です」

あくまでこの身体としては、という意味だが。

今までハンマーが手に入らなかったんだ。当然実際にハンマーを叩いたことは無い。

「にしちやあ、熟練の職人のような手だがな。おい、打つてみる。道具はその間に見てやる」

「何を打てば？ ……あと道具は？」

「そうだな。お前さんが打ちたいもんで良い。道具も材料も、ここに
あるもんは扱えるものなら使つて良い」

随分と気前が良いな。とはいっても、未加工のものも多い。すぐ
に使えるそうなのは、鉄鉾に銅、後は銀と言ったところか。

実際には初めて打つもの。何にするべきか……俺が中盤で愛用し
ていた『アレ』で行くか。

カーン、カーン、カーンと鉄を叩く音が工房に響き渡る。
赤く熱した合金をひたすらに叩く。硬く、しなやかに。
何度も熱し、不純物を取り除き、ただただ叩く。

そして出来上がったのが片刃の直刀、ファルシオンだ。

……鑄作っていないし、そもそもこれが鑄造なのか鍛造なのか。
そんな疑問はさておき、波紋を描く美しい刃は誕生を喜ぶかのよ
うにキラキラと輝いている。

……砥いだおかげだけだね。

「……こいつは、またすげえな。何て名前だ？」

「これは……あ、」

鑑定したところ、まずいことが分かった。……楽しすぎてやりすぎた。

ファルシオン+9

片刃の直刀、その緩やかな流線型を描いた刃は鎧さえも切り裂く力を秘めている。

重さ20。耐久【5000/5000】

ATK+105【+45】

スキル『スイングスラッシュLv.3』使用可能

……よし、プラス補正のことは恐らく分かっても何処までかは分からないだろう。

何故スキルが発動できるようになっているかは分からないが、それもいい。

俺が作った武器とはいえ、このくらいの攻撃力であればこのおやつさんの工房であれば同じ位の武器もザラにあるはずだ。

「ん？ どうかしたのか？」

「……あ、いや。何でも……。これはファルシオン、見た通りの片手武器」

工房は若干ごちゃごちゃしているものの、広い。

俺は借りている厚手の手袋をしたままファルシオンを軽く振ってみる。

上段から下段へ、下段から中段、そして横へ薙ぐ。少し重いな。

だが、重さを利用すれば説明にあるように鎧だって切り裂けそうだ。

「ほお…… 鑄造でならともかく、鍛造でこんな武器を作るやつは見たこと無いな。お前、見た目通りの年齢じゃねえな？」

「……見て通りの9歳、です……」

俺の年を告げると、おやっさんもミランダも固まる。こいつら、俺を何だと思ってるやがる。

「……産まれて9ガルンしか経ってねえってことだよな。いや、どつかの古い言葉で900ガルンってことか？」

ガルンはこの世界での年を表す。つまり、9ガルンは9年、900ガルンは900年だ。

「……9セアなのに」

拗ねたように言ってみる。若干イラついて言葉がぶれそうだが、何とかしよう。

ちなみにセアは年齢な。そこら辺も神がどうだの、精霊がどうだのらしい。

ついでに言えば、俺はこの世界の言葉を一から学んだからよくある自動翻訳ではなく、単語を繋げて音にしている。だから意味は成さないのかもしれない。

「いや、そもそも見た目はもっとガキだろ！ 6セアくらいにしか見えんが、人族だろう？」

どう見ても幼く見られすぎです。本当にあり……は良いとして。

「人で9セアなのに……」

むしろこのナリで900歳なんて何処のバケモノだよ！ そんなイキモノ……ああ、あのロリ神ならそれくらい平気で生きてそうだな。

「……ミランダ、お前あの時何してたよ」

「ええっ？ わ、私ですか？ お友達と遊んでましたけど……」

いきなり振られて慌てるお姉さん。面白いが、あんたのためにここに来た事を忘れていないだろうか。

「普通のガキはそうだろうな。俺みたく修行を送ってたようにも見えんが、手はそれ以上の経験を持ってやがる。で、そいつも相当の業物だ。……俺もそこそこの自信はあったんだがバケモンはいるんだな」

落ち込むおやつさんは哀愁を誘うが、言い分は釈然としない。

「おじさんならもつと良いものを作れると思う……です。……これ、まだ最高のものじゃない……です」

「……それを俺以外の鍛冶師の前で言ってみる。一生恨まれ、追い掛け回されるぞ」

そんなことはないと思うんだけどな。

「私……とんでもない子と出会っちゃった？」

この姉さんは姉さんで随分なことを言ってくれてやがる。

「いや、お前さんにはむしろ良かったかもしれんぞ。若いうちに本物に出会っておけば、得られるものは大きい。だがな、嬢ちゃん。これが俺やミランダだから良かったものの、こんな技巧ほかに見せんじゃねえぞ」

「……女じゃない」

「えっ……？」

おい、お姉さん。その心底意外そうな声は何だ。

「ミランダ、何か事情があるんだろう。そつとしておいてやれ。ただでさえ鍛冶師なんて女を認めようとしない。なら、そう言うこともあるだろう」

「……違うのに。……お姉さんの道具は？」

「ああ。幾つか時間をかけて手入れしなきゃいけない分も出てきたからな。1ソリアはかかるな、ありゃ」

1ソリア……1週間か。随分と長いが、自業自得だろう。

「新しく欲しい場合はどうしたら……いいです、か？」

「そうだなあ。お前もミランダも新しい道具を使って自分の道具にしたほうが良い。こんな良い武器を見せてもらったんだ。今回は俺が安く譲ってやるよ」

「えー……そこまで言うならただじゃないんですか？」

いや、お姉さん。それは無理だろう。

「バカ言うなっ！ こっちだって商売でやってんだよ。それを無料になんて出来るかっ」

お姉さんは不満そうだったが、知り合いとはいえそこまで無理は言えないだろう。

「おじさんも仕事。無料は……困る」

「……ミランダ、お前さん子供に教わってどうする」

「……いつまでも子供扱い……えっと……名前はソラ、この前引っ越して来たばかり……です」

「この前引っ越してきたって……もしかして、あの亡霊屋敷の？」

「10……ガルス人が住んでなかった住宅街の家ならそう、です」

「ほお。あそこは中に入ることはおろか、解体すら出来ない場所だったってのに、よく住むことになったな」

おやっさんもお姉さんも知ってるって事は、やっぱり有名なんだな。……人避けは万全にしたほうが良いか。

「色々、あった……です。……お腹空いて来たので……場所借りても良い、です？」

「おう。酒……はガキにはまずいな。果実の絞り汁がある。出して

やるよ」

お姉さんの目が輝く。……現金だな、おい。

「私の分って……もしかして、あつたりする？」

「これがお姉さんの分」

鍛冶をするときに避けておいた鞆からお姉さんの分の包みを渡す。これで俺の分を用意してなかったら2日連続で食いつぶれるところだった。

今の時期の一食は成長に必要なだって言うのに。

「飲み物ここに置いとくぞ……っってお前ら何食ってんだ？」

おやつさんが木製のコップを2つ両手に持ってやってくる。

ちなみに流石に炉の前では食わないが、テーブルもごちゃごちゃと物が置いてあるから適当に椅子に座っている。

まだ俺は食い始めてないが。お姉さん、意地汚いぞ。

「パンとトルティージャ。あと……干し肉」

しまった、干し肉を炙るにしてもナイフがないから切れないじゃないか。

「随分と美味そうだな。俺にも一口くれ」

いや、おやつさん。事後承諾は承諾にならないんだが。

「代わりに干し肉を炙る火と削ぐナイフ……貸してほしい、です」

「ああ。いいが……本当にこれパンか？　こんな柔らかくて美味しいパンなんて初めて食うぞ」

売り込もうと……思ったがやめた。おやつさん1人になら売っても構わないが、そういうわけにも行かないだろう。

「これは『ユグドラシルの葉先』の名産品……そのうち色々ところに広がる予定」

道具自体は珍しいものじゃないだろう。あれの一番の売りはパンそのものの製造工程だ。

珍しいものは無いが、機械もないんだ。果物や塩を大量生産は出来ないだろう。

あの村であれば各家庭で消費したとしても大した量じゃない。けど、この町ですら相当な人間がいる。それを全て賄えるかは少し不安だ。せめてイーストを安定供給できるようにしなければいいんだが。

……ビールでパンが作れると聞いたこともあるし、この機会に色々試したほうが良いのか？

「そう聞いたなら仕方ないな。だが、それを知ってるって事は『ユグドラシルの葉先』に住んでいて、かつこっちに道具も持ってきているんだらう？」

「……村の資源。あまり広まると、みんな困る」

俺としては広めてしまつて問題ないと思うが。一度商人や貴族お抱えの鍛冶師に方法が広まればそのまま一気に生産される。

そうなるの特許も何もなさそうなの世界では作ったもの勝ちに

なるのは目に見える。

いつそのことイーストや麹など、作るものが大変だが必要な量が多いものを特産にした方が良い気がする。

まあ、俺がその培養技術を持っていないから無駄なことだが。

「まあ、分からんでもない。だが、あの味気ないパンを食うのも癪だな」

「……今しばらくの辛抱」

何かぶちぶち文句を良いながらおやつさんが下がる。まあ、一旦は諦めてくれたのだろう。

「……話は終わったかな？」

「おい、聞いてなかったのかよ」

お姉さんはすっかりと食事に夢中になっていたようだ。

別にそれに関心を持ってとは言わないが、ある程度耳聴くなければ辛いだろうに。

「難しい話はどうも苦手で。お父さんに文字を教わってる時もうつも怒られてたから」

てへ、とお姉さんは笑う。……反則だぞ、それ。

「けど、やんなきゃいけないことは幾らでもあるだろ？　なら、思考を停止してる時間も少なくなしたほうが良い」

「難しいねー。ソラって頭良いんだね？」

「生きるのに精一杯なだけだよ。俺より賢く生きる人間なんて幾らでもいるよ」

これは単なる事実だ。自虐はない。

「ガキがあまり賢いと碌な人生送れねえぞ。ほれ、ナイフにランプだ」

ついてなくても、碌な人生は送れるよ。たとえ死んでも、少なくとも俺は悪い人生だとは思わない。

「……ありがとう、です」

適当に切った肉を炙り、干し肉がちょうど良く炙れたところでパンと一緒に食べる。

パンに塩分と肉汁が染み出して良い具合だ。ハンバーガーも作りたいが、タルタルステーキやハンバーグなど順序を追って行った方が良いのだろうか？

おやつさんもお姉さんも羨ましそうに俺の食べているものを見ているが、お姉さんは食べたよな？

「なら、定期的にどっかの食堂に卸すつてのはどうだ？」

「……そこまで作る量を確保するのは難しい。朝ごはんも作るし、大変……です」

「ご飯つてことはパンだけじゃなくて、卵焼いたやつも君が作ったわけ？」

「ん。トルティージャっていう、芋とかを混ぜて焼いたやつ」

「……こんな料理、どこの王宮で出てるのかな？」

「ミランダ。一気に理解しようとするな。こいつはお前の範疇外だ」

2人とも訳が分からないと言ってるだけにしか聞こえないが、喧嘩を売られているんだろうか？

「今日はもう帰るつもり。お姉さんはどう、します？」

「うーん……冒険者ギルドはどうするの？」

「今日はもう疲れた、帰りたい。お姉さん1人で行くのも危ない」

これでも一本剣を打った後だしな。

「ミランダ、今日はお前も疲れただろう。今日は休んだほうが良い。で、ソラ。この剣、一度俺に預けてくれるか？」

「別におじさんのものにして構わない」

俺も久しぶりに楽しめたからな。やはりこういった鍛冶もしたくなる。

「バカ言え。俺が打ってないものを俺のものとして売れるか。鏢がなきゃすっぱ抜けそうだからな、鏢と鞘を作ってやる。あと握りも布で巻いたほうが良いか。……あの振りを見る限り、お前さん扱うほうもいけるだろう」

「一応は。でも、使う予定ない。売れない？」

呪われてるわけでも装備レベル制限があるわけでもない。
なら冒険者なり騎士なりが使ったほうが役に立つ気がする。

「これだけの業物を扱える人間はそうはいねえ。武器に振り回されるのがオチだ。なら、使いこなせるやつが持っていたほうが剣も役に立つだろうよ」

中盤までは剣一筋だったから別に使えなくはないが、一番馴染んでるのはきつと銃だぞ？

「……分かった、です」

そこまで職人に言われて自分の意見を貫くわけにも行かない。

俺も一応職人であるし、その誇りは分かっているつもりだ。

「おう。明日までには仕上げておく。忘れずに取りに来いよ」

おやっさんに手を振り了解の意を伝えると、帰り路に就く。

「私のこと忘れないでよねー！」

あ、やべ。忘れてた。

「……また明日、お姉さんの店で」

不満そうな顔だが、仕方がないだろう？

俺だつて疲れないわけじゃないんだ。

ちなみに、ステータスを寝る前に確認したときはこうなっていました。

LV	6
HP	5031
SP	28064
STR	1
VIT	1
INT	1500(1000+500)
SPD	800
DEX	1000
LUC	50(10+40)
CHA	90(10+80)

使用可能ステータスポイント 10

経験値 4516 / 5500

ステータスは本格的に何かを始めるときに考えれば良いだろう。

というのも1つ理由がある。

『レジェンド』の時、気づいたことがある。

STRとVITの値を増やすことにより見た目も変わるのだ。つまり、マッチョになる。他の値は上げてもほとんど変わりはないのに、その2つだけは上げれば劇的な変化を迎える。

戦争時に俺も前線に立つことは何度かあったが、その時の壁の暑苦しいこと。まさに生きる肉壁。

マッチョのおっさんの大売出し。それが全身鎧を身につけ、飛び

散る汗。臭いまで再現されていたらきつと酷い事になっていただろう。

イメージ、体育会系の運動後の部室。しかもコンクリ製で換気扇すらない真夏。……イメージ、出来たか？

子供にそんなむきむきな筋肉をつけさせる意味はない。確かに多少は振っても良いんだが、一度振ったステータスは戻せないだろう。成長にも影響を与えそう。下手なことは出来ない。

ともあれ。他のステータスに外見的な影響がないのも不自然だ。どうなっているんだろうか。

貧弱もやしっ子っぽい俺が重いハンマーを休むことなく打ち続けられたのも気になる。

恐らくはベーススキルのおかげだとは思っているのだが。

翌日、おやっさんの所で剣を受け取り、道具を買い取り（2人分、お姉さんの分は後で代金を請求する予定だ）お姉さんと合流し、冒険者ギルドに行き、ひと悶着はあったものの、かねがね予定通りには進んでいるといえる。

冒険者ギルドの出来事はお姉さんがあまりそういった情報を知らなかっただけだ。微笑ましいエピソードだ。気にするな。

まあ、つまり厄介ごとはいつものことだから問題が起こるまでに沈めてしまうという作業の繰り返しということと語るべきことではない。

ついでに、お姉さんに渡した道具に関してはおやっさんには内緒にしてもらうことにした。

まあ、どうせこれに関しては代用の利くものだしどちらかといえば副産物だ。

下手したらパンすら焼けない可能性すらあるんだが。……暫くはお姉さんに昼食を運ぶ日々が続くのだろうか？

……ちなみに、何故か魔術工房サンパーニャへのバイトが決まりました。

あのお姉さんを一人にするのは危険すぎる、というのが理由だ。

第6話。しんきゅらとつじょー！（後書き）

というわけでタイトル通りの新キャラが。

……別にヒロインではないです。

評価やつっこみがありましたらお願いいたします。

思い切り色々なことが問題でした。。。

展開を大きく変えています。今後の展開はまだでしたのでいっそのことばっさり変えました。

日本刀や西洋刀の鍛冶に関して多くの情報をいただきました。ありがとうございます！

2011/9/14

誤字等の修正を行いました。エイトル様ありがとうございます

2011/9/18

誤字等の修正を行いました。haki様ありがとうございます。

第7話 魔術工房サンパーニヤ。(前書き)

読んでいただいております。

お気に入り登録2000件突破しました！

第7話 魔術工房サンパーニャ。

『魔術工房サンパーニャ』のバイトが決まって2日目。

俺は理解した。1日は、本当のところ異常に長いんだってことを。

子供が楽しみなことを「まだかな～まだかな～」とちらちら時計やカレンダーを気にしながら待つ長さじゃない。あれはあれで長い、過ぎてしまえば一瞬だ。

バイトのことを父と母に話したとき、驚かれながらも快諾を貰った。妙に嬉しそうな笑顔が印象的だった。

もっと家族との時間を大切にしろ、とか言われると思って多少の説得の準備はしていたので拍子抜けした部分もあるが。

ともあれ、そうやって急遽決まった俺のバイトなんだが。

朝、最近恒例になっている朝ごはんを作り、それを幾つか昼の分として包み、家を出る。

着いたのち、まず始めたのが店の片付け。

汚いとまでは言わないが、何をどうしたいのかが良く分からない。区分けもされていないし、様々な道具も出っぴばなし。

これがこの店のスタンスなのか、とお姉さんに言うとそんなことはないっ！と断言された。

散らかしたのはお姉さん自身のせいなのに何故片付けているかは。

まあ、職場があまり雑然としてるのも何だしこの環境で物は売り辛いだろう。

正直、物の上げ下げだけでも結構しんどいです。STRやVITをどれだけ上げても不自然じゃないかが気になる。

いきなり筋肉が盛り上がり全身がごっつくなくなったらまずおかしいとはいえ、9歳の頃の俺は何をしていたっけ？

鬼ごっこ、かくれんぼ、山、遭難、熊、鷹、……：一般的ではなさそうな記憶の方が多すぎる。

思わず参考にはなりそうにない記憶ばかりで埋め尽くされそうになるが、何とか通用しそうな記憶を引き出し、分類する。

そういや、一日中友達や弟と遊びまわってたことが多かったっけ。

と、こうやって脈略のないことを考えるのもそろそろ限界だ。

1日が長い理由？ 薄々、というか気づいてるだろう？ 客が、

1人も来ないからだよ！

元々お姉さんに1日どれくらいお客が来ていたか聞いてみた。

お姉さんはご飯を持っていたり、時々遊びに寄るくらいで1日中過ごしていたわけじゃないから正確な人数は分からないそうだが、多いときはひっきりなしに客が訪れ、売り場……販売スペースと言った方が良いか？

その半分程度の客が入ることもあったそうだ。

両親が突如消え、最初の1週間は残った商品を買う客もいてそれなりに客足はあったが、完売するとそれもなくなり。

お姉さんの作った商品を並べると当然だが客足は途絶え、今は遠方からわざわざ来てくれる人と俺のような一見さん。

それと両親が帰ってきてないかを見に来る常連が時々、程度らし

い。

この規模の店にしては結構な客入りだったらしく、客の間でも評判の高い店だったのだろう。

ここでこの店の構造を簡単にだがまとめよう。

レンガ造りの1階建てで、販売スペースが10畳ほど。畳なんて当然ないがおおよそ15〜16平方mくらいか。

カウンターが入り口から見て左側、棚が入り口から見て右側に3棚ほど並んでいる。

その隣には平台が1台置かれており、正面奥にはさらに奥に繋がる入り口と、その両脇を固めるように置かれている平台がある。

なお、採光用だと思われる穴が入り口のドアの上のほうに左右に1つずつ設けられていて、日本家屋で言う虫籠窓のようなもので封じられている。いや、名称は絶対違うんだろうけど。

それと、奥が作業スペースだ。こちらは販売スペースの半分の5畳ほど。材料や道具が所狭しと並んでいたのでお姉さんと協力して出来る限りの整理はした。

重い丸太や石は流石にどうとも出来なかったが。

あとは小さいがしつかりとした造りの炉と作業台、幾つかの椅子に休憩するときにお茶でも入れるんだろうか。かまども、こちらも小さいが置かれていた。流石に窯はないようだ。

そして、これが一番肝心だが片付けながらここが元々何の店だったかを聞いた。

お姉さんが作ったものは恐らく自分が作れそうなものを選んで作ったのだろう。

本来はもつと多方面か特化していたに違いないとあたりをつけたのだ。

お姉さんから聞いてやっと理解した。『魔術工房』の意味を。

魔術工房、それは魔術品と呼ばれる道具を生み出す職人が構える工房のことを指す。

それを聞いて魔具と何が違うのか、と聞くとお姉さんはきよとんとした顔をするが、何故か得意げに説明を始めた。

曰く、魔具は魔術を扱うための道具であり、特定の属性を使える魔術師のためにあしらわれた一品物であり、魔術品は魔力を持った人が作り出せる魔法のアイテム、らしい。

その説明じゃいまいち理解は出来なかったが、唯一残っていた、というかお姉さんが父親から貰った腕輪を見せてもらった。

守護の腕輪

銀で出来た腕輪。安息の願いが籠められている。

重量2。 DEF + 1 MDEF + 2 耐久【46 / 50】
スキル『プロテクトLv.4』使用可能。

鑑定した結果がこれであり、お姉さんにも聞き魔術品の意味がようやく分かった。

これは、耐久の分でなら誰でも魔術の使える品なのだ、と。

ただ、これを持っていても魔術ギルドには加入できないらしい。

それが何故かと言うと、魔力を持たなくても魔術品は使えるが、自分にあつた属性の魔具を持たないと魔術は使えないからだそうだ。

随分と乱暴な理論だと思ったが、世界ではそれが普通らしくお姉さんはそんなこと考えるなんて変わってるね、と笑っていた。

作れる職人も、魔具を作り自分で魔術を使えば魔術ギルドに加えられるが、魔術品を作れるだけでは駄目だそうだ。

その理由は魔力をもつ人間が作れば誰だって魔術品を作れる可能性があるから、だそうだ。

実際この町にも他に何箇所かそういった工房が開かれており、魔術品は安ければ銀貨10枚からで手に入れられるほど一般的に流通しているものだそうだ。

何かすっげえご都合主義だな、と呆れはしたものの世界がそうであるのならそれを否定する理由はない。

ちなみに、魔術品を作る職人のことを魔術職人というらしい。

ならギルド加入させるよ、と言いたいところだが、属性のある魔法を使えるものが魔術師と定義されており、魔術品で使えるものは武器を利用した技のスキルや無属性など、魔術師として認められるもの以外のスキルしか発現しないため住み分けがされてしまっているらしい。

結果、俺は魔術師でありながら知らない間に魔術職人となってしまった。

きつとおやつさんにはバレてるんだろうな。

「では、これからの魔術工房サンパーニヤの基本方針を決めたいと思います!」

「え？ これからってどういうこと？」

本気で分からないのか首を傾げるお姉さんは可愛らしいが、今は気にしないことにする。

「お姉さんは今のままじゃ魔術職人にはなれそうにない。基本が出来てないからな。」

だから、まずはどんな方法で金稼ぎをするかを決めたいと思う。ある程度の資産がないと出来るものも出来ない。

材料すら集められないのはお姉さんにとって死活問題だろ？」

「確かにそれはそうだね。それで、どうするの？」

「まずは、手軽に作れてそれなりに効力のあるポーション作りだ。ガラス瓶はそれなりに価格は必要となりそうだが、ポーションそのものの材料費はほとんどかからない。」

工房に幾つかガラス瓶も置いてあるし、元々作ってたんじゃないのか？」

「うん。お父さんが言うには色々な人が買っていくから常に置いてるって。何度か作ってるのは見たことあるよ。」

「ならまずはそれを作っていこう。家とかに残ってたりしない？」

残ってればそれを元に作っていったほうが良いだろう。

俺のこの前作った初心者向けのものでもいいが、工房を構えている人だ。もつと質の良いものを作っていただろう。

「うん。少しだけならあるよ。疲れて帰ってきたとき家でそれを飲

んで寝てたりもしたから」

「よし、ならお姉さんはそれを取ってきてくれ。俺は精製のための準備をするから」

元氣よく飛び出していったお姉さんだが、こけたりはしないだろうか？ 怪我をしなければ良いんだが。

まあ、俺も準備をしよう。用意するものはすりこぎとすり鉢。そして鍋に漏斗もつとと紙だ。

精製とは言っても成分を滲み出させるものだから料理とほとんど変わらない。

お茶やコーヒーを淹れるのと一緒だ。

水はこの店の近くにある共用井戸を使えば良いし、材料は効果を見た時点で判断すれば良いだろう。

幾つかレシピはある。それに呼応するような材料も何とか見つけれられるだろう。

ついでに、ポーション用のガラス瓶自体は試験管のような形をしていて、コルクのようなもので蓋をする。

試験管立てのようなものが幾つもあるし、販売するときはその立てておくんだらう。

息を弾ませかえってきたお姉さんの抱えた袋の中には同じ種類のポーションが5個。これが家にあった全部らしい。

「お姉さん、これがこの工房で売っていたものと同じもの？」

「うん！ 人気だったんだよ！ 銀貨1枚もするんだけどすぐ売れちゃうの」

なみなみと詰まった赤い液体を持って笑うお姉さんの顔に嘘はない。

けど。この効力は、どうなんだろうか？

赤色ポーション

HPを50回復する。重量1。

いやいやいや。俺は謀られてるのだろうか？ そういえば、父が前俺が作ったポーションが銀貨20枚で売れるとか言っていたような気がするが。

「お姉さん、これ飲んで良い？」

「残り少ないけど、ソラくんなら大丈夫だよ」

ちなみに、バイトをすることに決まってからお姉さんの俺の呼び方はソラくんになった。

まあ、呼ばれ慣れているし綺麗なお姉さんにくん付けされるのは悪い気はしない。

とりあえず、一口飲んでそのまま瓶をカウンターに置いた。

まずい、今何かしようとするかと吐きそうだ。

それだけ味は悪い。それに喉越しも最悪だ。喉に張り付く感じしかない。

恐らく、これは赤いということもあり何処にでも生えているゾーダ草を使っているんだらう。

ゾーダ草は一年中何処にでも生えている草で、鮮やかな赤が特徴だ。

似たような色でソータ草という草もあるのだが、こっちは毒草な

ので注意が必要だ。

どちらも森を散策している時に見つけたもので、鑑定したものだから間違いない。

ちなみに俺が前作ったポーションの原料であるリーンの草と雫花も何処にでも生えている草でリーン草がHPを、雫花がSPをそれぞれ回復してくれる。

アイテムボックスの中にも大量に入れてあるし、ひとまずはそれを使うべきか。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「……苦い」

「そりゃそうだよ。ポーションはみんな苦いの。でも、飲まないと死んじゃう時に苦いから飲めないなんて言えないよ」

そりゃ確かに。けど、こんなのを何十本もがぶ飲みできないだろ？

「みんな、どれくらい買う？」

少し片言になっているのは、あまり口を大きく開けて長く話していると吐きそうだからだ。

「うーん……獵師さんは5本位かな。前に出て直接獲物を仕留める人とか、騎士の人は20本も買うんだって。凄い人はもつと買うって。」

そんな人はうちじゃなくて商人さんの所で買うみたいだね」

値段はともかくとして、高々50しか回復しない回復アイテムを、それだけ少ない量しか買わないのは不自然だ。

「何で、そんなに少ない？」

「少ないって……ポーションは大きな怪我さえしなければ回復してくれるから20本も買う人はすごいんだよ？」

そんなにかさばらないけど、気をつけないと割れちゃうし」

ガラスだからな。そんなに耐久性もないだろう。

だが、俺ですらHPは5000を超えている。どうやって補っているんだ？」

「もつと効果の高いポーションは出回ってる？」

「幾つかあるみたいだけど、高級品だよ？ そんなの一部の騎士さんかすつごく強い旅の人しか買わないんだって。

あ、でも今ここにはないけど青いのが銀貨3枚で売ってるんだって。確か……効果は赤いやつの倍以上だって言ってた」

となると、青色ポーションでHP回復100以上ということか？ 色々仮説は出てくるが、答えにはならない。今は関係ないのでひとまず置いておこう。

「とりあえず、作れるだけ作ってみる。それを露店で売ろうと思うんだけど、露店って何か許可は必要なのか？」

「うん。この町で露店を出すときは商業ギルドでの登録が必要だよ。出す場所は何処でも良いんだけど、許可証がないと売っちゃいけない

いの。

「1エークで銀貨2枚。エークの頭に登録して、途中だったら分割だよ。でも、お店あるのに何でお店で売らないの？」

「店はこの通り客は来ない。売れるものがあるわけじゃないからな。いつ客が来るか分からないなら、人の集まる中央通りで売ったほうが良い。」

それで店の常連は話を聞いてくるだろ？ それで常連同士の横の繋がりもあるだろうからポーションを欲しい常連客は買いに来る。その間に他のものも作れるようになれば店に客足だって戻ってくる。」

「なら、お姉さんが今商売をしなきゃいけないのはここじゃなく、人の集まる場所だ」

善は急げだ。幸いにもポーションは作るの難しくない。

多少時間はかかるが、ポーション作りは店で、ある程度できたら日にちを決めて広場で売れば良い。なら、まずは材料集めか。」

「じゃあ、早速俺は買出しに行きたいんだけど。お姉さん、お姉さんの生活が苦しくならない程度で店の運転資金はどれだけある？」

「税金を払えるだけしか残ってないよ。それを考えないなら金貨2枚と銀貨20枚くらいだけど」

少し考えてお姉さんが出した金額がそれだ。

流石に俺の小遣いから店のものを買うつもりはない。それをすればお姉さんは墮落しかねない。

お姉さんには無理をしない程度で店をどうすればいいか、考えて欲しい。

「じゃあ、銀貨10枚を買い物用に使いたい。もちろん、店のものであつて俺個人じゃないけどさ」

「それくらいなら店におつりとしてあるから大丈夫だよ。すぐ行くよね？」

「あ、お姉さんは留守番して欲しい」

そそくさと準備をしようとするお姉さんを止める。

「うん？ でも、買い物行くんだよね？」

「そうなんだけど、2人ともいないのは拙いだろ？ 俺は店番できないし。俺が品物は用意する。」

あ、ポーション用のガラス瓶つて何処で買えるんだ？」

「そういえばそうだね。何処で売ってるかわかんないけど……ベデイおじさんなら知ってるんじゃないかな？」

「分かった。なら、お姉さんは留守番しててくれ。……」
「飯は置いてくよ」

期待している、という表情は鞆の中だった。せめてそれくらいは俺に向けて欲しかったのに。

「うん！ 気をつけてね。途中で転んでも泣いちゃ駄目だよ？」

「泣くことはないとは思うけどね。けど、良いのか？」

うん？ と首を傾げるお姉さんは本当に分かっているらしい。

「俺に現金渡しでいいのか？ お姉さんを利用して騙し取ろうとしてるかもしれないぞ？」

そんな輩は少くないだろう。ただでさえ美人で能天気なお姉さんだ。悪い男が近づかないとも限らない。

「ソラくんにならお金くらい盗られても平気だよ。それに、ソラくんなら大丈夫。信じてるから」

美人の笑顔はずるい。恥ずかしくて何も言えなくなる。

「……行ってくる」

出来る限り不満そうに言うと、満面の笑みを浮かべたままのお姉さんから銀貨10枚を受け取り、ベデイの工房へ向かうことにした。

「ほお。サンパーニヤで働き始めたのか。で、ポーシヨン用のガラス瓶は何処で売ってるか、か」

「はい。昨日から……です。場所、知ってます？」

ついついため口になりそうな言葉を引っ込めて話すから途切れ途切れで我ながら辛い。

こういった相手にはついつい気を許しがちだが、それは俺の事情。相手は快くは思わないだろう。

「ああ。グルンダの工房で作ってる。場所が分かりづらいからな、俺も一緒に行ってやるう」

「悪い、です。地図、とかあれば1人で」

「会った時から思ってたんだが、もう少し肩の力抜いて喋れんのか？ ミランダと話してたときは自然だったろうに」

「口、悪いので……駄目、です」

やはりあの時の会話は聞こえていたんだらう。まあ、普通に話してたから当然といえば当然だらうが。

「子供がそんなことで気にすることはない。ちつと位口が悪かろうが俺は気にしないぜ。というか、そうしなきゃ案内もせんし場所も教えん」

「このおやつさん、本当に良い性格してんな。」

「分かりました。これで平気ですか？」

「今度は敬語かよ。本当にお前、平民のガキか？」

「ええ。ただ、お姉さんのように接するわけには行きませんよ。それで、工房は遠いんでしょうか？」

「あー。別に俺は気にしやしねえがな。まあいい。昼を食べた後で構わんか？」

「ええ。平気ですよ。俺もどこかで食べる予定でしたから」

「またあのパンあるか？」

俺の食事は全部おやつさんに持っていかれ、俺はおやつさんのおごりでパニーニになった。

……今日のオムレツは自信作だったのに。

そんなトラブルはあったものの、おやつさんに紹介されたのはザンパーニヤで使っているガラス瓶を卸しているという工房だった。

工房主のエイナという女性はミランダのご両親がいなくなったことも聞いていたが忙しくミランダのところにいけないことをしきりに気にしていた。

その旨を伝えることを話すと、ようやく商談というか金額と何時納品するかを聞いて来たため、1つ銅貨20枚という話だったので30個、銀貨6枚を支払いそのまま持って帰る事にした。

ついでに話していて分かったことだが、ポーションはガラス瓶という割れやすいもので出来ている割には使う人間の扱いはぞんざいで、時には丸々割って駄目にしてしまうこともあるらしい。

前衛でそれだと命の危険もあると思うのだが、あまり動かない後衛やバックアップが持ち歩くため必要最低限だけ持っているのとかなっているとの事。

おやつさんはこのまま残ってエイナと何か相談があるとのことなので、礼を言ってそこで別れた。

その後は、ハーブとして売られていた乾燥したリーンの草と雪花を見つけ、購入。

後は面白そうな効果が期待できそうなハーブも買っておく。ノノ草やシヤララ草。

いかにも何かしてくれそうな名前の草だ。

果物も林檎に限らず甘いものを何種類か購入し、両手一杯になったものを持ち帰る。

あと、大き目の革があつたからそれも幾つか購入した。ついでに色々必要そうな道具も揃えておいた。道具類は露店だけではなく幾つかの店も回ったが、

流石にガラス瓶と薬草は鞆に入れておいた。薬草でクッション代わりにするようにしたし、割れていないから問題なかった。

「ただいま、お姉さん」

「おかえりっ！ ソラくん」

俺が戻ってきたことにほっとしたような表情をし、駆け寄ってくるお姉さん。何だかんだ言っても心配だったんだろう。

「随分買ったねー……けど、果物あるよ？」

「まずいポーションなんて作りたくないから。これから作るけど、今は平気？」

「う、うん。大丈夫、だよ？」

何だか妙に心配そうだが、俺の腕を心配しているのだろうか。

まあ、作っているところを見たこともないだろうから仕方ないのだが。

ぎりぎりだが、残ったお金はお姉さんに返した。お駄賃でいいよ、とお姉さんは言ってくれたがそうもいかない。こういうことはきっちりとしなさいといけないのだ。

今回は乾燥したリーンの草だけで作る。ほとんどの人はSPを使うこともないだろうし、雫花は必要ないと判断したからだ。

雫花を使うことにより相乗効果もあるので本当は使ったほうが良いのだが、今回は様子見だ。

リーンの草をスリコギとすり鉢ですり潰し、液体っぽくなってきたら同量の水を沸かし、沸いたところで入れる。

その時点で色は緑から黄色く変化する。

ただ、臭いがきついので置いてあった絞り機で切った果物を絞り、その絞り汁をろ過し、果汁だけを入れる。

お姉さんは信じられないものを見るような目で俺を見るが、今は無視する。

暫く煮詰めた後、きつい臭いがなくなったのを確認して、漏斗に紙を張り、ろ過する。

本来は直接瓶詰めするのだが、今回は試作品だ。ポーシヨンの瓶を再利用することは考えていないので木のコップに注ぐ。俺とお姉さんの分だ。

そして出来上がった液体を鑑定すると、

特製ポーシヨン（黄）

HPを150回復する。重量2。

重くなったのは木のコップに入れたからだろう。瓶に詰めれば重

量は他のものと変わらないはずだ。

それにしても、今回も特製ポーションになってしまった。この世界にないレシピだからだろう。

「では、試飲と行こうか？」

「ごくり、とお姉さんが喉を鳴らす。喉が渴いているからではなく、緊張しているからだろう。」

「一口目は恐る恐る舐めるだけだったが、驚いたように目を見開き、ごくごくと飲み干す。」

「俺も飲んでみよう。口当たりは悪くない。むしろ、ミックスジュースに近い味だ。」

「その割りにジュースにはないポーション独特の身体を癒す力が全身に巡っていくのが分かる。」

「美味しい！ でもちゃんとポーションになってる！ ソラくん天才だよ！」

「天才は言いすぎだと思うが、俺もこれはいけると思う。」

「最初ハーブを潰して煮出した時はどうなるかと思っただけで、何でこんなのが出来るの？」

「薬草を潰してその成分を抽出するのがポーションだろ？ 後は味を調整するために果物を入れただけだよ」

「またもお姉さんが首を傾げる。どうかしたのか、と聞くとお姉さん曰くポーションは生であり、加熱することはないそうだ。」

「だから苦くても何とか我慢して飲むし、どろどろしたものを無理」

やり流し込むからあまり多用はしないそうだ。

だが、一本あればほとんどの傷は回復してくれるし、万全の体調にしてくれる。

だからみんなまずくて臭いポーシオンでも愛用しているそうだ。

ついでに、これが赤色ポーシオンの3倍の効果を持つものだと教えたら驚かれた。

そんなものは超高級品で市場では出回らないものだそうだ。

さて、これを市場に流すかどうかが問題だな。これの半分の効果であれば問題ない。

ちよつとだけ割安感を出せば市場を大きく荒らすこともなく売れるだろう。

販売数を制限すれば儲けも出てサンパーニヤの名前も知れるだろう。

だが、これをこのまま出すのはまずい。

きつと今更なんだろうが俺は少々規格外らしい。

少なくとも一般的な所からは外れているだろう。それが具体的にどうずれているか分からないが、ずれていることは認識しておいて問題ないだろう。

俺にとっては初心者ポーシオンでしかないこれでも、この世界では高級品。

売るにしても、ある程度の実力者に回すしかないだろう。それも、信頼の置きそうな。

ともなると、効果をあえて落とすか素材を変えて作り直すしかない。

とはいえ、何でこれだけの効力があるものが単なるハーブとして出回っているんだろうか？

考えても仕方ない。出来てしまったものは出来てしまったもので仕方ないのだ。

残る草でもどういった効果が出るか、それを確かめた上で判断しても良いだろう。

結果、出来たものは特製ポーシヨン、白、水色、黄緑、緑、赤、桃の6種類だ。

効果はそれぞれ順に、白【HP80回復】水色【HP250回復】黄緑【HP50、毒を回復】緑【HP50、麻痺を回復】赤【SP50回復】桃【SP150回復】と言った具合だ。

お姉さんと相談し、現状市場で出回っているものを考え特製ポーシヨン白、黄緑、緑を流通することに決定した。

ちなみにそれぞれの味は1つの果物を使ったため、白は桃、黄緑はみかん、緑はオレンジ味だ。

似たような果物であって、それそのものではないのでご注意を。

他のポーシヨンは製法だけレシピにして保管することにした。売るわけにはいかないし、破棄するのももったいない。

お姉さんは俺が持っていればいいとは言ってくれたがそういうわけにはいかない。あくまで店のお金を使ったものなのだから。

お姉さんは俺に甘い気がする。どうしてだろうか。

そういった話し合いも終わり、まずは全て銀貨1枚と銅貨70枚で売ってみて様子を見ることにし、3種類のポーシヨンを10個ずつ瓶に詰め、蓋をした。

少し割高なのは飲みやすいからだ。安くしすぎて今までのポーシ

ヨンに戻れないとなるとそれこそ目も当てられない。
人は一度高い水準に上がるとなかなか低いところに戻れないから
だ。

それともう一つ、商品を作ることにした。それはポーシヨン用の
保存ベルトだ。

ガラス瓶で割れやすいのにいい加減な保存をするから割れる。な
ら、多少いい加減でも割れないような保存方法を考えれば良いとい
う理屈だ。

使うのは大小様々な革。ある程度大き目のものは買って来たが、
やはりそこは大きさがバラける。

そこで、まず型を作りそれに対して切り取っていく。型を作るの
は俺の体格では小さすぎたのでお姉さんに協力してもらった。……
お姉さんの香りにほんわかしたのは内緒だ。

そして、切り取った革を縫って強度を高め、上は太く、下は細く
した革を左右5本ずつ縫い合わせていく。

そこに斜めになるようにポーシヨンを差し込めるようにした。
動いても外れず、けれど抜くときは楽に抜けるようにするのは少
し難しかったが俺が作るのは基本的なものだけで良い。

いずれはこれも広がりもつと良いものが量産されるだろう。俺が
作れるのは精々最初の一工程だけ。

改良するのはそれが得意な人がすれば良いと思う。

2セット、お姉さんと協力しながら作り終わったのは日が沈みそ
うな時間だ。

作っている最中は色々なことを喋った。特にたいしたことは話し
てないが、家族以外とこんなに長く話すのは村長以来か。

作業自体は大変だったが、少し楽しかった。

商業ギルドで露店の登録もしたかったが、こんな時間ではもう受け付けていないだろう。

寂しそうなお姉さんを残して帰るのはやはり胸が痛むが、ここはまだ越えてはいけない領域だろう。

というわけで、今日の出来事を帰って父と母に話した。

その中で分かったことだが、母はどうやら俺のことを心配していたらしい。父は信用していたそうだが。

世界は俺が思っているほど万能でも強くもないとのこと。そうは思わないが、ある面ではそういうこともあるのだろう。

やはりまだ実感はわかないが、それで何か悔やむことがあるといけない。心がけはするようにしておこう。

また、商業ギルドには父も付いて行くそうだ。保護者同伴でなくとも良いと思うが、念のためらしい。

俺とお姉さんでは不備があったら困る。お姉さんが了承してくれれば、という条件で父に了解を伝えた。

色々今日はしたはずだがあまり疲れていない。ポーションを試飲で飲みまくったせいだろうか？

ステータスの問題もあるが、暫くはポーションを色々と作ってみるのも良いかもしれない。

配分次第では効果の変化も期待できるだろう。

そういえば、意図せず母に言ったポーション売りになるといことが現実味を帯びてきた。

思わず笑ってしまったが、今日は気持ちよく眠れそうだ。

翌朝、こつちに来てからは珍しく早起きしている父と朝食を取り、一通り準備をしてサンパーニヤに出勤した。

お姉さんは見慣れぬ大人が来た事で客が来たのかと言んだが、俺の父と知ると一転してわたわたとし始めた。

「い、いつもソラクンにはお世話になってます！ あ、わ、私はミランダと言いますっ！」

腰が折れるんじゃないかと思うくらい、一気に背中を曲げて頭を下げるお姉さんに父も苦笑する。

ウサギは骨が弱いのだ。無理をするなどいいたい。

「元気な子だね。僕はトニー、ソラの父親をやっています。これからも息子をよろしくね」

妙な言い回しだが、まあ一応は店主になるのだろうから正しいのだろう。

「お姉さん、父がギルドに付き合ってくれるそうだけど平気？」

「ええっ?! そんな、悪いですよ!」

「一応何かあったとき困るからね。ミランダさんはどこかギルドには所属しているのかな？」

「鍛冶師ギルドにはお父さんの勧めで入っていますけど……その、私あまり上手なくて……」

「鍛冶が出来るなんて凄いいじゃないか。ああ、だからここは魔術工

房なんだね」

うんうんと頷く父。魔術工房がどういったところか知っているよ
うだ。

魔術師の知り合いもいるというし、そういった方面に明るそうだ。

「お姉さんも父にあまり遠慮する必要はない。父はこの数日暇をし
ていると母も言っていた」

「こら、ソラあまりそういうことは言わないように」

父親の尊厳というものだろうか？ 暫くは良いといえど、働いた
方が良いと思うのだが。

そういったやり取りを見てお姉さんも落ち着いたのか、父の同行
に了承し3人で商業ギルドへ向かうことにした。

道中、ギルドのことも少し説明を受けた。

ギルドは前にも説明を受けたが、それぞれの職業ごとの組合だ。

魔術ギルドや狩人ギルド、建築ギルドや向かっている商業ギルド
もそうだ。

ギルドに加入する条件は1つ。それぞれの職業についているかそ
の資格があるか、だ。

たとえば魔術ギルドであれば魔術師であること、父の就いている
狩人ギルドは猟師として実際に活動していれば猟師でなくとも入れ
るし、お姉さんの鍛冶師もそうだ。

ただ、商業ギルドは何かを売っていけば加入できるし、ギルドに加入していなくてもお金を出せば露店は開ける。

加入していれば店を開くときや売るときに融通してもらえるし、実績を残せば特定の商品を安く仕入れることも出来る。

お姉さんの父親が商業ギルドに加入しているそう、今回はお姉さん自身も加入する予定だ。

ついでに、俺が入ろうとすると魔術ギルド、鍛冶ギルド、錬金術師ギルド、商業ギルドと4つのギルドに加入できそうだ。

なお、ファンタジーものとしては有名な冒険者ギルドだが、実はあれには加入条件がない。

つまり誰にでもなれるのだ。その分、他のギルドと違い助成的なものは少ないため加入者は他のギルドに比べ絶対数は少ない。

ただ、旅するものにとってそれは有効だ。

銀行の利用、数は少なく質はあまりよくないが提携している宿の優先的宿泊権、そして提携ギルド同士での情報の共有。

色々なところを回る冒険者が多いため、その町では手に入り辛い道具や素材も入ることも少なくないため需要は多い。

ただ、安全に国や街道を行き来する手段がほとんどないため好き好んでなる人間は少ないとの事。

交易を行う商隊を守るのは基本的には傭兵。その住み分けもある程度だが、出来ているらしい。

そんなことを父から聞きながら商業ギルドに到着する。サンパーニヤから各ギルドが密集した地域とは離れている。

おおよそ、話しながらとはいえ30分ほど着くまでにかかってしまった。

なお、各ギルドは他のギルドに重複して登録できるためか基本的な構造はほとんど変わらない。

入り口を入って左に受付カウンター、素材の売買は2階、3階は裏方のギルド職員の部屋、などだ。

入って右側はそのギルドによって若干変わるがほとんどは待合所だ。生産系ギルドでは作ったものを展示している場合もあるそうだ。

商業ギルドは、流石商人御用達といったところか。受付は一杯だし、待合所もそこそこに人がいる。

お姉さんが言うにはこれでも少ないほうだそうだ。

散々待たされてかかった時間はおよそ20分ほど。

まるで病院にかかったような感じだったが、お役所だったりするような場所ならそんなものだろう。

簡単な説明を受け、お姉さんは登録をし、露店の出店許可の札を貰う。この札は盗難防止の符もかねており、なくさない限り有効なのだそうだ。

ちなみに、複製をしたら罰則対象となるらしく絶対しないよう強く言われた。

父はこの後用事があるから、と商業ギルドを出たところで別れ、俺とお姉さんは露店で適当に食事を買って、サンパーニャへ戻った。

買ったものはサンパーニャで食べることにした。お姉さんが立ち食いはあまり好きじゃないといったからだ。

毎日が祭りのようで俺は楽しいのだが、ここは雇い主に従おう。串物は食べ歩きが一番美味しいのに。

そして、食べ終わった後また幾つかの事を決めることにした。
1人にどれだけ販売するかということとどれくらいの頻度で露店を出すかということだ。

1人につき今回は3本、今後は一度に販売する量を100本にし、1人5本限定にすることにした。
頻度は1週間に2度、最初と3日目。この世界の1週間は6日なのでそれくらいがちょうど良いだろう。

そう決めると、お姉さんと一緒に今度はグルンダの工房へと向かった。
出るときに中央広場で出店中、という書置きをドアに引っ掛けて

おいた。これで問題ないだろう。

目的はお姉さんを工房主に会わせる事と、定期的にガラス瓶を卸してもらおう契約を結ぶためだ。

エイナは工房にお姉さんが来た事に喜び、様子を見にいけなかったことを謝罪した。

お姉さんがそれで使い物にならなくなったので、仕方なく俺が交渉。

一週間に一度250ずつ、1つ銅貨18枚で仕入れる契約を結んだ。

安くなったのは定期的に一定量を仕入れることでグルンダの工房も収入が大きくなるからだそうだ。

もしそれを打ち切る場合は1ヶ月前に連絡をし、最低半年は仕入れることを書面で交わし不備がないことを確認してから今日の日付を書き込み、契約した。

そして中央広場に向かい、場所を確保する。

偶然空いている場所をみつけ、隣に念のため確認を取る。偶然にもその隣の人は俺がこの町でお土産を買ったときのお姉さんだった。とはいえ、あの時の俺は今の俺の姿じゃない。簡単に挨拶だけをして露店の準備を始めた。

地面に広げた布に試験管立てを置いてポーションを挿す。その隣にポーション用のベルトを置き許可証兼防犯の符を置き、準備完了だ。

とはいえ、俺もお姉さんもそういった呼び込みは素人。

適当に声をかけはするものの何と言って良いか分からず、座り込んだままお客が来るのを待った。

「お？ サンパーニヤの嬢ちゃんじゃねえか。どうしたんだ、こんな所で」

「あ、ええっ！？ あ、のその。えっと」

「今日は臨時でポーションを売りに来たんです。サンパーニヤは一時休業中です」

慌てるお姉さんを他所に、サンパーニヤの常連らしき、猫の獣人の兄さんに対応をする。

「ほー。ジェシイがないからって随分と苦労してるみたいだな。で、売り物はこれか？ 随分と見たことのない色してるが」

「お姉さんが頑張って作った特製ポーションです。」

白は赤色ポーションより体力を大きく回復、黄緑は体力回復に解毒、桃は体力回復に麻痺を回復です。1つ銀貨1枚と銅貨70枚ですよ」

「ちよつと高いな。で、こつちの革は何だ？ 腰に巻くものみたいだが、変な飾りをつけてるのか？」

「これはサンパーニヤの新商品で、ポーションを装着できるものですよ。これは飾りではなく、ポーションを挿して使うものですよ」

実際に一本ポーションを挿してみる。

「こりゃ面白いな。ふうん、簡単には動かないみたいだな。こつちは幾らだ？」

抜き差しをしたり、振ってみたり。男は興味を持ったみたいだ。これはいけそうか？

「こちらは銀貨1枚です。お兄さんが最初のお客様なので、ポーションを買っていただけられるようでしたらお安くしますよ」

「嬢ちゃん幼い割には中々商売上手いな。よし、なら俺が最初の客になつてやるよ！」

「お兄さん男前ですね！ ほら、お姉さんもお礼を」

「わっ！ あ、ありがとうございます！」

「なら、この白と黄緑のやつを貰うか。あとこの革もな！」

「では、白色と黄緑とポーシヨンベルト。あわせて今回は銀貨4枚でいかがでしょうか」

「おし。買った！ ほれ、ちようどだ」

「お買い上げありがとうございますつ。もしよければ他の人にも話してくださいねっ」

銀貨4枚を受け取り、頭を下げ見送る。さて、これで最初の一目、と。

「すっごいあっさり売れちゃったね！ でも、ソラくん女の子に間違われてなんで怒らないの？」

「客に怒る必要はないだろ？ それでトラブルになるよりはずっとましだ」

正直、少しぴくつとだけはしたけど。けど、そんなことで俺は怒らない。

前にバイトでやらかしたことがあるからだ。俺が首になるだけならともかく、他人を巻き込んだことがある。

それで、少なくともバイトの最中は少々のことでは怒らないことに決めた。

その後、3時間ほどで完売。3つ以上買おうとする客も中にはいたが、しっかりと話をして納得してもらった。

ポーシヨンベルトに至っては2人目の客で売れた。まあ、2つしか作っていなかったから仕方ないが。

思った以上に需要はありそうだ。少しなら供給量を増やしても良いかもしれない。

今日の売り上げは5270R^{ルドル}銀貨52枚と銅貨70枚分だ。

ポーション売りとしてもそこそこの売り上げだそうでお姉さんは満足そうだ。

元の量が少ないこともあり、非常識な売り上げにはならなかったようだ。少し安心する。

すっかり寂しくなった露店を片付け、しまっ。

まだ日は高いが、売り物がなければ何も出来ない。サンパーニヤに戻ることにした。

「ホント凄いや！ ソラくんすっごい！」

お姉さんはさっきからその調子だ。こんなに順調なのが嬉しくて仕方がないのだろう。

「いいから、お姉さん。手止めないで」

お姉さんには自分でもポーションを作れるようにしてもらっている。簡単なものだが、作れないと困るのだ。

ついでにポーションの各レシピは紙におこしてはいない。

一応盗難防止の意味を持つからだ。俺が覚え、お姉さんに教える。材料の質や気温の変化で若干変化するからだ。そこは料理と一緒にだ。

だから繰り返し作り覚える。その一步手前の状況だが。

お姉さんは不器用だ。お姉さんが作った道具を見れば分かる。

だからこそ、単純なことからはじめ自分の出来ることを増やす必要があるだろう。

出来れば魔術職人として腕を磨いて欲しい。正直、俺のためでもあるんだがそれ以上にお姉さんがこのままなのは忍びない。

お姉さんのご両親が戻ってくればそれでいい。職人としての技を勝手に教えたことで怒られるかもしれないが、そこは甘んじて受け入れよう。

だが、もしそうでない場合。お姉さんは生きる術を自分で磨かなければならない。

他の工房で働くつもりがなく、ここを人手に渡すつもりがないのなら自分でその手段を持たなければならぬからだ。

なら、俺が出来る範囲で協力をしよう。

少し、俺に似たところがあるこのお姉さんを。

と、それで終わっていたなら良い話で済んだのだが。

お姉さんの器用さはないにも等しいらしい。

さすがに薬草を磨り潰すことには何の問題もなかったが、問題はその後だ。

まず、分量を計らない。沸騰してから入れるようにいったものを待たない。

加えるのは果汁だけというのに絞りかすも入れる。

かつ、る過も半分近く一気にぶちまけ、紙が破れる。

出来上がったのがこれだ。

毒薬ポーション

飲んだものに状態異常【猛毒】を付与する。

……どうしてハーブと水と果物だけでそんなものが出来上がる。

別の才能でもあるんじゃないかと、本気で恐れたが恐らくは天性のどじなんだろう。

暫くは俺が作ることを優先し、お姉さんには1つずつの工程をクリアしてもらおうことにするとしよう。

第7話 魔術工房サンパーニヤ。(後書き)

色々物語がこれで動き始め、るといいなと思っています。
とはいえ、今回も説明が多かったです。

ギルドのことやらポーシヨンのことやら。

主人公の世界の見方が少し変わってきていますが、これがどう作用するかはこれからの展開を見ていただければと。

評価やつっこみ等ありましたらお願いいたします。

2011/9/15

誤字等を修正。ぼちよむきん様、独言様、エイツール様ありがとうございます。
ございます。

2011/9/18

誤字等を修正。haki様ありがとうございます。

第8話 魔術工房サンパーニヤ【2】（前書き）

読んでいただきましてありがとうございます。

日間ランキングが何時の間に1位に！
読んでくださる皆様のおかげです

第8話 魔術工房サンパーニャ【2】

初めてのポーシオン売りから2日経った。

その間にお姉さんは何とかポーシオン作りの基礎を覚えることに成功した。

そうは言っても、特製ポーシオン（白色）のみしかまだ作れず、他のものを作ろうとすると工程や分量を間違え失敗するんだが。

その間、俺は何をしていたかと言えばだ。午前中はお姉さんのポーシオン作りを見守りながら店番、昼と一緒に食べた後露店めぐりをしていた。

これはお姉さんからの提案だ。俺はそうだったことには疎い。市場調査も大切だとのことで色々な出店を見回り、幾つかポーシオンを買ってきた。

一応『変化』は使っておいた。市場調査はどの店もしている、との事だったが念を入れておいて問題ないだろう。

ポーシオン代は店からのものを使っている。合計5個買って48^{ルード}3R店によって多少値段は下がったがほぼ銀貨1枚で売られており、種類も1種類しかなさそうだ。

後は自腹で本を一冊買った。古本屋で少々値段は張ったが、暇つぶしに読むにはよさそうだ。

そんなこともあり、夕方には戻りまたお姉さんの調査を見守る。

お姉さんは慌てるとその時点で自分が何をしていたか分からなくなるという悪癖があるらしく、そのたびに俺は止めていた。

これがポーシオンの調査でよかったと思う。もし鍛冶でそれをしていた場合は大変だ。最悪全てが無駄になる。

ポーシオンは前の過程こそ戻れないが、繰り返し同じ事をするごと一旦手を止めることが出来る。慌てることがないように暫くは

ポーション作りに専念してもらおうことにしよう。

ただ、1つ問題がある。ポーションを入れるガラス瓶がないのだ。納品に来てもらうのは明日。元々サンパーニヤにあったストックは10にも満たない。

変則的ではあるが、作ったポーションは大きな木の樽があったのでそれに移し変えた。

熟成ポーション……作ったら売れるのだろうか？ もし醗酵してアルコール分が加わったら。

駄目だ。ピンチの時に飲んだもので酔っ払いでしたら戦いは続行できないだろう。

晩酌用として売るのも面白いかもしれないが、それがちゃんとアルコールになるかどうかも分からないし、ポーションが醗酵するかも分からない。

いや、いつそのことワインと混合してみるか？ ……止めておこう。きりがなくなる。

ちなみに、露店で購入したポーションを飲んでみたところ、全て味は一緒だった。

おそらくポーションはこういうものだ、という固定観念の元改良することもしていないんだろう。

全て一口だけ含んでみて味を確かめた後、適当な容器に移し替えた。これもどうにかすれば他の使い道もあるだろう。

残ったガラス瓶は粉々にした。溶かして再利用する予定だ。

「お姉さん、どう？」

「うん……何とか覚えられたと、思うよ」

お姉さんはくたくたになっただけで、作業台に頭を乗せ倒れこん

でいる。

肉体的な疲労ではなく、慣れないことへの精神的な疲労だろう。作り置きの特製ポーシヨン（赤色）をコップに注ぎお姉さんに渡す。これはSP回復と同時に簡単な頭痛薬にもなる。

まあ、がばがば飲むには適さないが、原価で言うなら8Rくらいだ。濡れ手に粟とはよく言ったものだ。

まあ、抽出する以上、他のポーシヨンに比べ1個あたりの原価が安くなるのもあるが。

「お疲れさま。今日はこれくらいにしておこうか？」

「うん、ありがとう」

それだけ返すのが精一杯なのか、お姉さんは俺からコップを受け取りゆつくりと飲んでいく。

その後はお姉さんが落ち着いたのを見計らい、帰る事にした。

帰ってからはレニが構って欲しいと擦り寄ってきたので遊ぶことにした。

館の中はレニにとって遊び場なのだろう。廊下も広く、危ないものは適当な空き部屋に運んでいるので走り回ってもぶつかる心配もほとんどないし。

とはいえ、転んで怪我でもしたら大変なので多目的室で遊ぶことにした。

小さな女の子の遊び方を良く知らないので、話をして聞かせたり元々持っていた遊び道具と一緒に遊んだりする程度だが。

おもちゃを作るか露店で見繕うのも良いかもしれない。

夕食を食べ、疲れ切ったレニを寝かしつけ向かったのは地下のある一室。

魔法陣を設置しているところはまた別の、何も無い部屋だ。

地下には幾つか部屋があるが、その中でも狭目のこの部屋を俺の工房にすることにした。

両親には話してあり、危なくなるので俺がいないときは近づかないようお願いをしている。

この部屋を選んだ理由は1つ。一番館の外側であり、換気用のダクトが地上と繋がっているからだ。

何でこんなものがあるのかは分からないが、確認したところちゃんと繋がっており、炉を導入しても何とか使用できると判断し、ここに工房を設けることにした。

恐らくそのままでは一酸化中毒になりかねないのでそこは送風機でも作ってどうにかしよう。

今は何もおいていないが、炉を作り、道具を置き、サンパーニャでは作れない魔具や魔術品を作るつもりだ。

ここでなら魔術の研究もできそうだし、隠匿もすれば何とかなるだろう。

今日ここに訪れたのは、そのための前準備。隠匿用の魔法陣の作成のためだ。

『レジエンド』の時はクランハウスの共有倉庫くらいにしか使わなかったそれだが、この世界の魔法の事情を考えると魔術の使用痕やそれに類するものは残さないほうが良いだろう。

作成する魔法陣は二重のもの。魔力を吸収するものと、その魔法陣を隠匿するものだ。

魔力はどうしても周囲に零れる。それが痕となって残る。それ自

体は大したことはないが、それが複数回繰り返されると魔力痕は探查系の魔術を使える人間に判明される。

なら、それを吸い取る魔法陣と、その魔法陣を発動させたことを外界に漏れないようにする魔法陣を使えば理屈上は上手く行くはずだ。

そこまで行くのに何十回も魔術を使わなければならないだろうから暫くは意味を成さないだろうけど。

魔法陣を描写してそれを床に転写する。発動はしているし、今回の余りの魔力も吸収してくれたようだ。

さて、今日はもう休むことにしよう。明日もそこそこに忙しいだろうから。

眠い。このまま何も考えず眠り続けてしまいたい。
布団の中でぬくぬくして惰眠を貪ってしまいたい。

とはいえ、今日もバイト。しかも今日は初めてのガラス瓶の納品日なのだ。

お姉さんに任せるにしてもやり取りくらいは見ていないとまずいだろう。

そういえば。一ヶ月の賃金は決めたものの、1日何時間働くとか何時が休みなどは一切話していなかった。

しかも雇用契約すら結んでいないのだ。労働に対する法はどうなっているんだろうか？

もし違反してお姉さんがつかまるようなことになったら笑えない。今日聞いておくことにしよう。

朝っぱらから重要なことに気づいた俺はさっさと身だしなみを整

え、朝ごはんを作り、一部を包むという日課になってしまったことを行くとサンパーニャへ向かう。

「おはよ、お姉さん。……なんつー格好を」

「ふわっ!? ソ、ソラくん! な、何でもないよ!?!」

まあ、ノックもせず入った俺が悪いんだろうけど、ここ店だよな? 気を緩める瞬間もあるだろうけど、うら若き女性があまり背を思い切り伸ばすのはよくありませんよ?

……真っ白なお腹でした。というか、これに対して何も無いはおかしいだろ。

「朝とはいえ、誰が入ってくる可能性あるだろ? お姉さん、美人だってことをもう少し理解する」

「こんな朝から来る人はソラくんくらいだよ。ソラくんなら子供だし、別に構わないもん」

そりゃ見た目だけで言えばな。そうはいえどお姉さんに話すわけには行かないし。

まあ、俺が気をつけさせれば良いだけか。

「さ、お姉さんはこれから白色の精製をもう一度頭から。ゆっくりで良いから、落ち着いてやること」

「うん! 今なら間違えず出来る自信あるよ!」

今日はまず失敗から始まりそうだな。信じたいところは山々だが、展開は見えている。うん。

グルンダの工房から商品を納品にきたお兄さんに対応し、お姉さんに受け取りのサインをしてもらう。

お金はその場その場でのやり取りだ。銀貨45枚を渡し、見送ると、黙ってそれを見ていたのだが。

「お姉さん、何で荷物の中身の確認しなかったんだ？」

「えっ？ な、何でって……しなきゃ駄目だったの？」

本当に分かっているようないようだ。お人よしなのは良いが、これではこの先困りそうだ。

「お姉さん。ガラスは割れやすい、それはまず分かるな？」

で、お兄さんが歩いてたときもお姉さんに渡したときも、カチャカチャガラス同士が擦れ合う音がしてたんだよ。

あのお兄さんに悪気がなかったとしても、割れてたり欠けてたり。あるいは数量が正しく揃ってるか確認しなきゃ駄目だろ。

いざ使おうと思ったたら全て割れてたなんて洒落にないぞ？」

俺の話しに顔を青くすると、慌てて中身を確認しようとするお姉さん。

「お姉さん、深呼吸して。次回から気をつけてくれればそれで良いから」

慌てて落としたりぶちまけたりしたらそれこそどうにもならない。お姉さんからずっしりと重い荷物を受け取ると、作業台にガラス

瓶の入った袋を置き、開封する。

まずは数量の確認だ。数量に問題はない。次は、取り出して中身の確認を、と。

結果、5本割れてました。まあ、これくらい誤差といえは誤差なのだが。

お姉さんが半泣きで謝っているが、お姉さんの責任ではない。ミスではあるが。

「では、失敗した罰としてグルンダの工房へ行つて、説明してきて交換してもらえらるならそれでよし、そうでないなら無理に食いだがる必要もない。

ただ、それでも追加で購入してきてもらえれば助かる。出来そう？」

「う、うん！ ないと困るからね！ 私、すぐに行つてくる！」

ガラス瓶を大事そうに握り、走っていくお姉さん。……怪我しなきゃいいんだけど。

ただ、あの工房主は優しそうではあるものの交換をしてくれるのだろうか？ 個人としての優しさと商売人の甘さは別次元の話だ。

だから受け渡しのタイミングで中身を一緒に確認するのがベストなんだが。

まあ、交換してくれなければこっちで溶かして他のものにしてしまえば良いだけだ。

お姉さんが戻ってくるまでに準備を進めておこう。

それにしても試験管立てが大量にあつてくれて助かる。

これがあまりにも少なければ作るか買うかしないといけなかったからな。

今あるストックは、木製の物で1つに10本挿せるもの。それが50個あるから、最大500本までは一気に並べられる。とはいえ、店で売るならともかく露店では運ぶのが大変だから駄目だ。

ただ、どうやって運んだものか。

1個なら重量1だ。重みは大して感じられない。

けれどそれが100個だと当然重量は100。

自慢でも何でもないがそれを運ぶ自信はとも無。本当に自慢じゃないが。

俺が中央広場まで運ぶにしても1回20個までが限度だろう。お姉さんを入れても40から50くらいだろう。

もちろんその時は試験管立てに入れて運ぶ。前は少なかつたのとポーシヨンベルトをはさんでいたから問題は無かつた。

台車のようなものがあれば話は別だが、それでも整備されていない道を割れ物が搭載された台車で運ぶのも危ない。

アイテムボックスに収納すればそんな問題は起こらないのだが、そついうわけにも行かないだろう。

某たぬきロボットの四次元のやつが欲しい。どちらにせよ見つかったらまずいが。

俺が何回か往復すれば良い、と結論を出した頃によつやくお姉さんが戻ってくる。

にこにこしながら俺に傷もないガラス瓶を渡してくるって事は交換して貰えたのだろう。

「今回は持ってきたのが新人さんだったから、って交換して貰えたよ。ソラくんと言われなかつたら気づかなかつたよ。ありがとね」

「まあ、お姉さんには色々と学んでもらわないといけないからな。

じゃあ、さつさと準備して露店始めるぞ？」

前回と同じ白、緑、黄緑のポーシヨンとポーシヨンベルト。

数量は白が40の緑と黄緑が30。それにポーシヨンベルトが6枚だ。

ポーシヨンベルトは1日作れて今だと3枚。作るものは難しくは無いがいちいち手縫いをしているので時間がかかる。お姉さんがもう少し器用ならこちらを手伝ってもらうのだが。

ポーシヨンは一回の調合で20ほど。鍋の容量上今はそんなものだ。どちらも大量生産するつもりは今は無いです。

今日の帰りにでもまた材料を仕入れておこう。ノノノ草と桃が切れそう。

他のものも少し購入しておこう。ただ、一気に買うのは市場価値が変動しそうで怖い。

全部野草ではあるから杞憂なのかもしれないが。

ポーシヨンをガラス瓶に移し、試験管立てに挿していく。

規定量を移し終わると、お姉さんが持つ分のポーシヨンを露店で広げる布で巻き、渡す。

それと俺の分のポーシヨンと符を持つと、戸締りをし、書置きをドアに引っ掛けると中央広場に向かう。この前より早い時間なのでまだ人はまばらだ。前回の場所も空いていたのでそこを確保した。

布を広げ、ポーシヨンを並べ、符を置く。俺はまだ何度か往復をするためお姉さんに店番を頼むと鍵を預かり、また店へと戻っていた。

最後のポーシヨンとポーシヨンベルト、そして鞆を肩に提げ中央

広場に戻ってみると、何やら人ごみが出来ていた。どうやらうちの露店を中心に行っているみたいが、さて何があったのやら。

人ごみを抜け、辿り着いた先は仰々しい鎧に身を包んだ若い男とお姉さん。

「だから、金なら払うといっているだろう!」

「で、ですから……お一人様5個までなんですよお」

どうやら騎士が金を払うから規定数以上売れとごねているらしい。というか、何で誰も助けようとしない。うら若き乙女が困っているんだぞ?

「お姉さん、お待たせしました。どうかしましたか?」

「あつ! ソラくん! えっとね、このお客様が10個ずつ欲しいって……」

合計30個。銀貨51枚とは随分と豪快な買い物をするんだな。

「お前も店員か? こっちは金を払う、お前らは商品を売る。それに何の問題がある」

「お兄さん、確かにお兄さんの仰ることは正論ですが。」

こちらは事情がありまして様々な方に買って貰うために販売数の制限をかけているのですよ。

とはいえ、お兄さんの格好を見る限りでは何やら騎士の方と見えるのですけれど。

騎士の方々は商人さんから直接お買いになると聞いていたんですが……何かご事情でも?」

「ああ。フィリップから良いポジション売りが居ると聞いてな。ちよつど見つけたからまとめ買いをしようと思つている。

これは部下の分も含んでいる。問題はないはずだ」

下手に出ている俺に気を良くしたのか、語尾は若干下がった。

まあ、お姉さん相手に上手く意思の疎通を図れて居なかつただけかもしれないが。

「ご指名いただけるのはありがたいのですが、何せあまり量を作れないものです。

騎士さんと言えどまとめ買いはご遠慮いただきたいのですが。

もちろん、部下の方々も一緒にご来店いただけるのであれば問題ないですけど」

まあ、方便でしかないし、ある一定量までであればこちらも困るものでもないのだが。

「あくまで1人に売る量を変えないということか？」

「はい。騎士さんでしたらそういった規則はお守りいただけるか。

他にも求めていただける方はいらっしゃいますので、緊急でない限りそれは変更は致しかねます」

とりあえず騎士の矜持を保つような言葉で持ち上げてみる。とはいえ、騎士は女性に優しくあれというものらしいがこの世界ではどうだろうか。

「分かった。なら5でいい」

渋々、という感じではあるが納得してくれたようだ。

「はい、ありがとうございます。お姉さん、準備を」

効果は説明されているのか、白を3、緑と黄緑を1ずつ取ると銀貨を8枚と銅貨50枚を渡し男は去っていく。

それでようやく周囲を囲んでいた人ごみも散り散りになって行き、治まった。

「ごめんね、ソラくん」

「お姉さん。ああいう人はちゃんと話をすれば分かってくれるんです。」

ああいうことが多発すると良い噂にはならないので気をつけてくださいかね?」

落ち込んでいるところをさらに追い討ちをかけるようで心苦しいが、ちゃんと話さないとだめだろう。

ただでさえ今はサンパーニヤの地位は低いだろう。それでさらに悪い噂が上れば再建どころの話じゃないだろう。

「まあ、出来る限りフォローはします。お姉さんもあまり落ち込まないように。売りが暗い顔をしては売れるものも売れませんよ?」

落ち込んでいるお姉さんの目の前に座り、ぐにーと頬を伸ばす。つねるのではなく、軽く外側へ引っ張るのがポイントだ。

涙目になっているのは破壊力が高すぎるので直視は出来ないが。

「ゆん……わひゃった」

何も頼を伸ばされたまま話さなくてもいいと思うのだが。

お姉さんも固いが何とか笑顔を出してくれているようなので、商品を並べ、お姉さんの隣に座りなおし売る事に徹することにした。

まだ慣れないが声をかけながら時間を過ごし、行儀は悪いが昼をこの場で取る。

食べ物系以外の露店ではよく見かける光景だ。問題はないのだろう。お姉さんも文句は言っていないし。

「…………ソラく、ん…………？」

食べている最中、露店にリーゼとその友達だろうか？ 同世代らしき少年が現れた。

「やあ、リーゼ。デート？」

「…………違う。ノルは、お友達、だから」

デートと言われリーゼは赤くなり俯き否定する。ノルと言われた少年は呆れているようだ。

「またかよ。何でおれがこいつとデートしなきゃいけないんだ？」

少年の表情に羞恥や怒りは見えない。無意識下でどうかはともかく、そういった関係ではなさそうだ。

「年頃の男女が連れ添って歩くなんてそれ以外に考えられないだろう？ どちらかが結婚でもしてるならともかく」

「……ソラくんは……デート？」

うむ。中々いいつつこみだ。リーゼは案外つつこみ体質なのかもしれないな。

「俺はお姉さんの店を手伝ってるだけ。ほら、この通りポーションを売っている」

ただ、何故お姉さんが赤くなっている。どうしてこつちをそんなに直視する。

「ソラくんこつちに引越して来たばかりなのにもう女の子の友達が居るの？」

「彼女は俺のいとこだよ。リーゼ、こちらは俺の雇い主で『魔術工房サンパーニャ』の工房主のミランダさん。で、そつちのお兄さんは？」

「おれはノラ。こいつとは腐れ縁だよ。えーと、ソラでいいのか？ よろしくな」

にい、と笑う少年は中々好青年のようだ。あと数年も経てばきつとイケメンになって女性からちやほやされるに違いない。

「ああ、よろしく」

差し出された手に握手を交わす。

と、ふとリーゼから強い視線を感じる。何かと思つて視線の先を見ると俺の昼飯。

「ほら、持っていくと良い」

苦笑をし、包みをリーゼに渡すと赤い顔をして、それでもしつかりと包みを受け取る。

半分ほどは食べたが、まあ昼を食べたかどうかは別として受け取った以上食べるのだらう。

「あれでリーゼの考えが分かるとはね。ソラもなかなかやるな」

ノラは分かるまで時間がかかったのだろうか？ それとも腐れ縁とは言いながらも一定の感情を持っているのか？ そうなると面白そうだが。

「リーゼは俺の作ったものに興味があるだけだよ。っと、お客様が来たみたいだ。悪いな」

リーゼたちの後ろに立つ大人が現れたことで、リーゼとノラは去っていく。

これから遊びにでも行くんだらう。あの世代はまだまだ遊び盛りのはずだ。羨ましいが俺には仕事がある。割り切らう。

その後、大きなトラブルはなく順調に商品が売れていく。数量がこの前より多いため売り切るにはあともう少し時間が必要だらう。

「よお。朝は大変だったみたいだな」

と、声をかけてきたのは初めてポーションを売った猫の獣人のお兄さんだ。

「噂にでもなっているんですか？」

下手な噂になっていれば大変だ。下手したら火消しのために色々手段を講じなければならぬ。

「いやいや。あいつに話をしたのは俺でな。で、さっき会った時にその話を聞いてな。すまんかった」

そうやって謝るお兄さん。つまり、この人がフィリップさんなんだろう。

「お兄さんのせいではないですよ。お兄さんも宣伝してくれたのでしょう?」

「そうですね。私が上手く出来なかったのが悪いんですから、フィリップさんは悪くないです」

お姉さんは名前を知っていたらしい。知っていたなら教えてくれるもいいのに。

「それにしても、あのポーションはどうやって作ったんだ? あんなの初めてだぞ」

お兄さんが話すには、お兄さんはこの町を拠点にする獵師団の一員らしく、俺からポーションを買ったその日に森に出かけたらしい。

途中まで順調に行っていたが、毒のあるモンスター……名前はドマーというらしいが。

それに襲われ、撃退はしたものの仲間の1人が毒にかかり負傷。ドマーの毒は即効性はないものの一週間以上寝込むような酷い毒らしく、前衛の1人がやられたこともありどうしようか悩んでいたところ。

お兄さんが俺の調査した特製ポーション（黄緑）を飲ませてみれば見る見るうちに回復、狩りに出る前よりも元気になり暴れまわったそうだ。

自分も特製ポーション（白色）を飲んでみたところ、飲みやすく今までにないほどの活力を得られたため知り合いの騎士に話したそうだった。

「作り方は秘密です。効果は十分だったようで安心しました」

まあ、そう簡単に教えるわけにも行かないだろう。暫くの収入源だ。広めては貰うが出し惜しみする場面でもあるだろう。

「ま、当然だな。今回も買わせて貰うよ」

苦笑するお兄さんとやりとりをして、白2個と黄緑を2個、そして緑を1個売った。

この地域では麻痺の状態異常をかけてくるモンスターは専用の狩人しか相手にしないそうだ。

軽い毒を持ったモンスターの方が多いため、そちらを少し増やした方がいいかもしれないとアドバイスを貰った。

売り切ったのはそれから2時間後。今日の稼ぎは17462R。

端数が多いのは値引き交渉が何回かあった結果だ。

こちらに関しては露店の醍醐味とも言えるし、極端なものでなければ問題ない。

むしろ値引き交渉に一切応じないのもまずいだろう。リピーターを確保する点でも必要な行為だと思う。

金貨1枚、銀貨74枚、銅貨62枚に相当するそれは時間も早し、一部を除いてお姉さんの銀行口座に預けることにした。

治安の良い町ではあるが、あまり大金を持っているのはよくないだろう。

預けた後は当初の予定通り材料を買い込みサンパーニヤへ戻った。

「ホントにこんなに儲かつちゃっていいのかなあ……」

お姉さんはやけに弱気だ。今日の稼ぎだけでお姉さんが使えるお金の半分に当たる。少し怖くなっているのだろう。

「今はポーシオンだけしか作っていないので材料費はあまりかかっていないからそう思うだけ。

鉱石なり道具なりは高いんだからもつと稼がないと魔術工房としてはなりたたないよ」

今日の売り上げを、もし一ヶ月毎日維持出来たとしたら白銀貨5枚の売り上げにはなる。

だが、今のところ週に2回と材料費なり何なりがかかるので収益は白銀貨1枚位だろう。

魔術品を扱えるようになっても物によってだが1個あたりの収益は恐らく銀貨6〜7枚くらいだと思う。維持費を考えると収益はもつと下がるだろう。

後は月にどれくらい売れるか次第だが、それはサンパーニヤの知

名度に比例するだろう。

ここはミランダの家で所有する建物のため月々の賃料が発生しないので必要最低限の費用で済むから何とかかなりそうだが。

ともあれ、もう少し稼がないと材料費の捻出が難しい。

お姉さんの指導をするにはポーションはほとんど材料費はかからないし無駄にはなり辛いが、鍛冶はそういうわけには行かない。途中で中断するわけにもなかなか行かないのだ。

最悪火にかけたら最後まで気を抜けないものも少なくない。それを1日中。お姉さんの悪癖がある以上材料も大量に用意しなくてはならないだろう。

そうなると資金は十分に確保する必要がある。自転車操業では成り立つわけではない。

後はどんなものを並べるか、だ。アクセサリーの類なのか、防具なのか、武器なのか。

その付与する効果はどういったものか、どれだけの強さのものにどれだけの値段を付けるのか。

それに他の売り物は何を使うのか。

考えればきりはないが、どういった方向性で店を運営するか決めなければ材料の種類も量も全く違ってくる。無軌道では単に秩序のない店にしかならないだろう。

ただ、いきなりそんなことを次から次へと投げかけられてもお姉さんは困るだけだろう。

今出来ていないことを放置して色々な思考が飛び回り、結果出来るはずのことも出来なくなる可能性もある。なら、その負担は俺が今は負えば良い。ただ、お姉さんには早めにそれに慣れてもらうつもりだが。

弱気になっているお姉さんに作業に戻るよう促し、俺も自分の作業に入る。

お姉さんは白色ポーションの精製、俺は新作ポーションの調整だ。今目指すのは多種の状態異常に対する中和剤。万能薬が出来ればベストだが、複数のバッドステータスに対応できるものを目指した方が早いだろう。

その途中で色々な副産物も出来たし。そうはいつでも、失敗も少なくはないんだが。

今の所分かっているのは2つ。1つは調合次第ではハーブと果物でも劇物は作れるということ。お姉さん限定だが。

もう1つは、同じ原料でも比率を変えれば効果が変わるといことだ。

不思議なことに濃くしたり薄くしたりでHPの回復量が変わるのではなく、効果そのものが変わるのだ。

とはいっても多少の濃度の変化では変わることはないのだが。

それを利用して作ったのが特性ポーション（灰）色的にかなりまずそうだが、味はみかんと桃を混ぜたさわやかなものになっている。その効果は一時的に器用さ+10してくれるもの。何故そうなたかは正直俺にもわからない。

原料はなんと赤色ポーション。原料であるゾーダ草を使って同じように作っても何故か効果は違う。

そっちは特製ポーション（無色）効果はHP回復10。効果は減り少したけになってしまった。

特製ポーション（無色）は他の材料でも出来るため、恐らく薄くしたらこうなるんだろうと踏んではいるが。

本当にこのままポーション売りの店になってしまいそうだが、効

果の高いものだけを置いて、他は俺やお姉さんの疲労回復のためのドリンクにしようと思っっている。

俺としては回復量はいまいちだが、疲労回復程度にはなってくれる。

材料費も無料に近いし、森を探せば幾らでも採ってこれるだろう。あくまでそれは最終手段だが。

まあ、ともあれコップ1杯分の調査が出来る目安はわかったので最初行つた鍋一杯に作り失敗したら廃棄ということはしなくてもすむようになった。

飲む前に鑑定はしているし、危ないものはお姉さんに悟られる前に廃棄している。お姉さんはもちろん、俺も危ないものを飲むわけには行かない。

そのポーション作りをしている間にお姉さんと改めてバイトの条件を話し合った。

というか、お姉さん自体俺の勤務のことにあまり頓着していないようだった。

お姉さんの家でのことだから、ご両親が店を休むという概念はあっても、自分が休むということは考えていなかったようだ。

元々の定休日は週の最終日、あと鍛冶の都合で臨時休暇を入れるくらいで営業時間は朝から夜まで。明確な時間の設定はなかったようだ。

その時によやく俺もこの世界での時計の存在を知った。館にも時計が存在していないからだ。

この世界で時計を使うのはあまり多くないらしい。大きなギルドが内部的に使うのと、学園。後は商人や王族、大貴族など。一般的にはあまり時間の感覚は薄いそうだ。

ある程度太陽の動きを見て決め、朝は太陽が昇る少し前から活動

をはじめ、夜は太陽が沈んだ後思い思いの時間に休みを取るそうだ。何とも大らかな話だが、決まっていけないのならそんなものかもしれない。むしろ時間を気にするのはあまり褒められた話ではないのだとか。

とはいっても、時間は有限だ。あまり決まりきった時間の使い方をするのはよくないかもしれないが、適度に時間を守ることも必要だし効率も上がる。時間を決めて作業をすることは集中力の向上になってメリハリもつけられる。

そんなわけでサンパーニヤへの導入を希望すると少し考えながらもお姉さんは了承、小さいものをすぐにではないが購入してくれると約束してくれた。

この日はお姉さんの集中力が上がらなかったためそのまま終了。ポーションは結局成功はしなかった。抽出の時間に問題がありそうだ。

お姉さんには実際のお茶を淹れてもらうようにした方が良いかもしれない。

あっちの方が温度や抽出時間は繊細だ。

課題は残るものの問題点はある程度見えた。ならそれをゆっくりでも改善するべきだろう。

町に出た俺は露店で何か掘り出し物が無いか適当に冷やかしながら帰ることにした。

と、帰り着いた家には何故かリーゼとノラが居た。

曰く、買い物をしていた母がリーゼとばったりと遭遇。冷やかしながらもうちで夕食を食べることを提案したらしい。

ノラも最初は遠慮していたが、家にまで押しかけられそれを説得されたため顔かざるを得なかったそうだ。……すまない、ノラ。

「話には聞いてただけど、本当に広いな。この家」

「使ってるのは一部の部屋だけだよ。広すぎるとは思ってるし、あまり気にしないでくれ」

「というか掃除も間に合っていないだろう。これだけの広さだ。1日で掃除が終わるとも思わない。」

「手伝おうとしたが、母には「ソラにはソラがしなきゃいけないことがあるから、そっちを優先して」と断られてしまった。」

「掃除機は無理だが、効率の上がりそうな掃除道具を作ろうと思う。」

「それにしても悪いな。急に呼んだみたいで」

「ああ、驚いたよ。急にリーゼに抱きついたと思ったら気づけば俺の家に居るし。ただ、凄い良い人そうだな、ソラのおばさん」

「おばさんって言わないでっ！ 言って良いのはリーゼちゃんだけだよ。遠慮せずクリスマスさんで良いから」

「……母よ。唐突に現れられても困るんだが」

「ソラが引いているのは正しい反応だろう。」

「それで、夕食の準備は済んだ？ まだなら俺も手伝っけど」

「うん！ 後もう少しだよ。だから呼びにきただけ。リーゼちゃんももう食堂だから、早くね」

「そう言って足早に厨房へ向かう母。足取りが軽いのは何か嬉しい」

ことでもあつたんだろう。

「俺は新作を作るから、どっちにしろ行くよ。ノラ、行こうぜ」

「あ、ああ。そういや、あのパンだの揚げてる肉だのはクリスマスさん……が作ったのか？」

「いや、あれは俺。サンドイッチにから揚げな。結構自信作なんだが、どうだった？」

「あんなの作れんのかよ、お前！ いや、今まで食ったことないくらいすげえ美味かったんだけど。特にあのパン、どうやって作ったんだ？」

「どうやらノラにも好評らしい。ただ、から揚げも結構自信があつたんだが。」

「本当ならしょうゆ味のものにしたかつたんだが、なかったから白ワインと塩とハーブで味をつけたものだ。」

「柔らかくて冷めても肉汁たつぷり。冷めたら食えなくなる肉料理よりはよっぽど良いと思つたんだが。まだ改善の余地があるか？」

「あれは『ユグドラシルの葉先』の特産品だよ。とはいっても、まだ市場に出回ってないみたいなんだけどな」

「とはいえ、この進行速度はあまりに遅すぎる。次、村の人たちが来た時に事情を話してこつちに持ってきて貰うか？」

「ふうん。聞いたこともない村だけど、そんな物があるんだな」

声は冷めているが、目は輝いている。どうやらあれの魅力に取り

付かれるのも時間の問題らしい。

「じゃ、ここが食堂だから中で待っていてくれ。恐らくリーゼと父が居るだろうから適当に寛いでてくれ」

「おう。じゃあ、また後でな」

食堂の入り口でノラとわかれると、俺はそのまま隣の厨房へ。そこでは何故か妙に張り切って料理を作っている母の姿が。

「母、何か良いことでも？」

「ソラと仲良くなってくれる子が居るみたいだから嬉しくってさー」

楽しそうに喋る母はまるで自分のことのように嬉しがっている。

「まあ、ノラは良いやつみたいだからね。……ただ、母よ。あまり厨房ではしゃぐのはいただけない」

そこそこに広いとは言え、やはりこんな所で暴れるのは危ないのだ。

「分かってますよー。ソラのけちんぼ」

別に心配しているだけであって、けちではないと思うのだが。

まあ、色々心配もしていてくれるみたいだからこれ以上は言わないが。

黄身を除いた白身を泡立て固くしたものに蜂蜜とアーモンドの粉を混ぜ、焼く。

その間に元々作ったあつたジャムを用意し、生乳を泡立てそちらにも蜂蜜を入れる。

焼きあがった生地を割り、ジャムやクリームをはさめばマカロンの出来上がりだ。

本当なら色とりどりのものにしたかったが、今回はシンプルにした。

気に入ってもらえるようであればこちらも工夫する予定だ。

焼きたてのパン、シチュー。それに川魚の煮物。汁物が多いのが若干気にはなるが、今日の夕食だ。

マカロンは食後だ。今出すときっとリーゼがそればかり気にしてしまうだろう。

「このパン、やっぱり美味しいな！」

そうやってパンを堪能するのはノラだ。とはいえリーゼも無言ながらも味わって食べているが。

「そういえば、ノラくんはソラと何処で知り合ったの？」

「今日俺が露店を開いているときにたまたまりーゼがそれを見つけたんだよ。そこに一緒に居たのがノラ」

そこから始まる色々な話。何故か途中で全員の暴露話になったが、和気藹々としているので問題もないだろう。

全員が食べ終わったのを見計らって出したマカロンをキラキラした目でリーゼが見つめていることによって、ノラのリーゼがいかに

食いしん坊なのかをバラす話になり、リーゼは憤慨しているようだったが。

ただ、ぶんすか！ という言葉が似合うような表情だったので可愛らしいことこの上ない。

「にしても、こんな料理まで作れるお前一体どうなってんだ？

こんなの今まで町のどんな露店でも見たことないし、並べてたポーションだって特別なんだろ？」

「俺はちよつと人とは違う視点を持つてるだけだよ。俺が見つけたって誰かが見つけただろうし。」

それに、あのポーションはお姉さんの特製品だよ」

あくまで俺が作ったということは秘密にしておいたほうが良いだろう。むしろ早くお姉さんに作って貰う様にしないと。

まだどう作ったかは気になっても、お姉さんが作ったことを疑われることはないだろう。

「まあ美味しいものご馳走になってあまり変なことを聞くのも失礼かな。あのパン、売り物じゃないのか？」

「サンパーニヤでってことか？ 魔術工房はパンを焼く店じゃないぞ」

それはそれで売れるとは思うが、もっと本来の目的から逸れる。

売り上げを伸ばすことが目的ではなく、魔術工房としての姿を取り戻すのが役割だ。

「あれ？ ポーション売りの露店じゃなかったんだな。まあ、いいや。俺はそろそろ帰るよ。あまり遅いと親が煩いからな」

「おいおい。確かに今はポーションしか売ってないが、そういう店じゃないっての。」

まあ、必要そうな人には週の初めの日と3日目に中央広場で売っていると宣伝してくれよ。あと、送っていいこうか？ 明かり持ってないだろ？」

既に日は沈んでいる。子供が歩くには少し危ないだろう。

「大丈夫。リーゼの家も近いから、明かりだけ貸してもらえれば帰れるよ。送ってもらうのも悪い。明日にでも返しに行くよ」

なら平気か。ここからリーゼの家はそんなに離れていないし。

家にあつたランタンを貸すと、リーゼとノラを見送る。

いつの間にかリーゼの腕の中には甘い匂いのする包みがあるが、きつとマカロンを母が包み持たせたのだろう。

気に入ってもらえたのなら何よりだ。

翌朝、お姉さんにも感想を聞こうと昼食とは別にマカロンを焼き、サンパーニヤへ向かう。

お姉さんは俺が着いた時には既に調合を始めていた。

今のところ抽出も順調のようだ。黙って見守ることにした。

真剣に調合に取り組み額に汗しながら向き合う姿は立派な職人だ。きちんとその姿勢が出来ているのであれば、お姉さんは有望な職人になれるだろう。

調査を終え、何とか白色のポーションを完成させたお姉さんは俺に振り返り、何時になく真面目な表情で告げた。俺に、道具を作ってみないか、と。

お姉さんが言うには、俺が剣を打てるのは知っているが、きっとそれ以外にも打てるだろうと半ば確信しているらしい。

とはいえ、俺は魔術品の作り方を知らない。というとお姉さんは父親から貰った腕輪を撫でながらこう言った。思いを込めて打てばそれが答えてくれる、と。

とも言えど。お姉さんも魔術品に関しては全くの素人のためどうすればいいかは分からないらしい。

シリアスになった空気を返せ、と言いたくなかったが我慢した自身を褒めてやりたい。

それはともかく。思いを込めて打つということは鍛造なのだろう。お姉さんの父親も魔術品を作るときはいつもハンマーを振るっていったといっている以上間違いないだろう。

……柔らかな銀をハンマーで打って何故割れないかは不思議で仕方ないがそういったものなんだろう。

俺の生産スキルと同じだ。気にはいけないだろう。

というわけで、物は試しと俺は炉に火をいれ、残っていた材料の中から銅とすずを使い青銅の塊を作って腕輪を作ることにした。

とはいえ、すずの量は少なく赤銅色になってしまったが。

初めて使う道具になれる為、気合を込めて一撃を打つ。何十回何百回とこなさなければ俺の手に馴染んでくれないだろうが、そこはシステムの補助がある。

俺が馴染むためではなく、道具が俺に馴染んでくれるよう、丁寧

に打ち、出来上がったのはこれだ。

ブロンズの腕輪 + 3

ブロンズで出来た腕輪。

DEF + 4 【 + 2 】 重量 3。耐久 【 800 / 800 】

スキル『翻訳』を使用可能

はて。翻訳とはどういうことだ？ 俺が思ったのは知りたい、と思うこと。確かに言葉を知るためには翻訳する必要も時にはあるかもしれないが、そんなものを今使う必要はない。

知り合いに国外の人間がいるわけでもなく、今身近に言葉で困っている人間がいるわけでもない。

そして、1つ失敗を悟る。お姉さんが、どんな効果が付与されたか聞いて来たのだ。

お姉さんが言うには、魔術職人が魔力を籠めハンマーを打つと、職人の身体が薄く光るらしい。

ベディの工房でも、今も俺の身体は薄く光っていたらしくお姉さんは俺が魔術職人の資格があることがすぐに分かったらしい。

俺はそんなことは気づかなかつたし、言われることもなかつたので知る由もない。だが、それは常識らしくベディにも俺が魔術職人であることがばれていたらしい。

「それで、どんなスキルが付与されたのかな？」

「翻訳だけど、これ使えるのか？」

俺は出来上がってまだ熱が取れきっていない腕輪を弄ぶ。これで装飾をすればアクセサリーとしては売れそうだが。

「翻訳つて、たまにあるけど他の国の人と話さなきゃいけない人が使うみたいだよ。魔法学校だったら他の国からの留学生さんがいるから結構人気みたいだよ」

他の国からわざわざ留学するということは貴族やら王族で魔術を使える人間ってことか。ボロ儲け出来そうだな、おい。

まあ、細かい装飾を施しておいて置けば良いか。魔術品であれば魔力があれば誰だって作れる可能性はあるそうだからな。

となると、お姉さんにはやはり魔術職人として頑張ってもらったほうが良いな。

鍛冶ギルドであれば鉱石もそこそこ確保出来そうだし、難易度の低い鉱石から始めれば良い。

失敗しても溶かして再利用できる状況であれば何とかなるだろう。

こうして魔術工房サンパーニヤの目指す場所は決まりそうだな。なら、お姉さんをしょくく日々も続きそうだな。

第8話 魔術工房サンパーニヤ【2】（後書き）

この物語は6割のファンタジーと3割の料理、1割のほんわりで構成されています。

というのは冗談ですが。

前回に引き続きサンパーニヤの話です。

魔術職人だと発覚した主人公にポーシヨンしか作れない工房主。

妙なこの関係は何時まで続く?!

と次回予告にもなっていない現状ですが、物語は一応の区切りを迎えそうです。

とはいえ、まだまだ魔術師としての主人公の話は描けていないので話は続くのですが。

評価やつっこみがあればお願いします。

2011/9/16

誤字等を修正しました。ランページ様、瑞樹様ありがとうございます。

シリア：までくるとルを打つのはきつとPCに触れすぎなんです。さらに誤字等を修正。独言様、神楽光様ありがとうございます。

2011/9/18

誤字等の修正。haki様ありがとうございます。

第9話 お姉さんの決意。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第9話 お姉さんの決意。

2度目の露店を終わった次の日は何もしていなかった。

語弊でも何でもなく、本当に何もしていなかった。

変則的な仕入れではあったが、その時のことはお姉さんも反省して次の日はもつと落ち着いてくれると思ったが、そんなこともなくソラくんはただ見てるだけで良いから！とお姉さんが言い放ったのは露店を出したその日の夕方のことだった。

嫌な予感はあるものの、まあ、楽出来るから良いやと思いつ朝ごはんも母に任せて朝食を取った後身支度だけをして昼も持たずサンパニーニヤへ出勤。

やる気の漲るお姉さんに引きはしたものの、いつも通り調整を行おうとしたら何故か怒られ、何もなくて良い！と言われたので黙って本を読む事にした。

失敗しそうな度に声をかけようとすると思われたので渋々本に戻る。失敗する。声をかけようとする、睨まれる。本に戻る。という一連の流れを作ること数回。

お腹が空いたので昼でも買いに行こうとすると、昼は用意してあるというのでお姉さんの用意した包みを貰い、開けてみる。そこは闇が渦巻いていた。いや、黒い塊があった。

思わず震えた声になってしまったが、勇気を出してこれはなんだと聞いてみるとお姉さん曰くパンだと言われた。言われてしまった。お姉さんが言うには、俺が以前作った脱穀機と石臼を使って小麦を挽きパンを焼いてみたそうさ。

とはいえ、お姉さんに酵母は渡していない。製法も教えていない。

つまり、小麦粉で無酵母パンを作ろうとしたのだ。……うん、白くて平べったいなら分かるんだ。

恐らく、お姉さんもある程度資産に余裕が出たと分かったためご飯を食べるようになったんだろう。

だが、だがだ。お姉さんが料理が上手いとは全く思わない。幸せそうに食べるから食べる才能はあるんだと思う。

リーゼもどちらかといえばそちらに分類されるだろう。

ただ、お姉さんに現状工程の分からないものを作る才能は一切ない。

一を聞き十を知る、ということはお姉さんには難しいのだ。

一を聞き一を行う、のを繰り返さなければ今のお姉さんは術を得ることは出来ないだろう。

そして出来上がったこの黒い塊。あれか？ この世界の人間は白い粉を使えば柔らかいふわふわパンが出来ると思っているのか？

だからみんな酵母ではなく石臼や脱穀機といった道具に注目するのか？

そして膨らまないのは熱量や加熱時間が足りないか？ 思っているのか？ むしろ、白いだけなら加熱時間や熱量は下がるはずだろう！

と力説しても俺自身も菌の分解作用だのガスが発生するだの詳しいことは分からない。

とはいえ、この臭いは確実に黒焦げになっているだけだし、お姉さんのことだ。

風味が豊かなのが塩やバターなどによるものだとは思ってもいないだろう。

単に知ってはいるだろう無酵母パンの作り方で小麦粉を使いパンを焼こうとしたところ待てど暮らせど膨らまないパンに業を煮やし、俺に復讐するためこれを焼いてきたんだろう。

キラキラとした目で俺を見るのも俺の生き様を見届けるためだろう。よし、分かった。喰ってやるう！

気づけばそこで一日が終わり、俺は家のベッドで寝ていた。

何を言ってるのかわからねーとかっこりやく。

そんなことをしている場合じゃない。

確かに頭はどうにかなりそうだが、問題は昨日何も出来なかったことだ。

起きた俺に暢気に今日は遅いんだね、と言う父。

外を見ると既に明るくなっているのは分かっていた。分かっていたが、日が変わっていないことをむりやり信じてみたかった。

今回はロリ神様にも会っていないし、時間なんてほぼ経過していないだろうと。やはり猛毒ポーションを作った腕前は伊達じゃないということか！

朝食も取らず身支度も手早く済ませた。

あまり考えている時間はない。というか、そうやっている時間すら惜しい。

冷静になれるのはきつともう少し先だ。

落ち着いたのは、『魔術工房サンパーニャ』へ出勤し、思ったとおり散らかりまくっている店内を片付けてからだ。

どうして1日程度でここまで散らかせるのかが不思議で仕方ない。お姉さんがびくびくと俺と視線を合わせようともしないのは自覚があるからだろうか。

ないのであれば俺は切れてしまいかもしれない。

片づけを終え、散らかってしまったもので使えなくなったものは廃棄し、昨日行えなかったポーションの調整を行うため作業スペースを確保する。

今回はポーション同士の混合も調査対象だ。ポーションを材料としての混合物も存在するし、特製ポーション（灰）の例もある。

ポーションに手を加えることでさらに新しい効果も期待できる。

試験管にいれた液体をかくはんするのは、さながら科学者のようだ。伊達めがねと白衣が欲しいものだ。

錬金術師は科学者としての側面も持っていたそうだから、あなたが間違っていないだろう。

お姉さんはちらちらこちらを窺っているだけだ。今回は俺からは手を差し出さない。

暴走したのはお姉さん。現状をどうにかしようとしたかったのだろうが、少し先走りすぎだ。

とはいえ俺も反省をしなければならぬ。少し勝手をしすぎた。お姉さんには手本を見せるつもりだったが、見方を変えれば俺が上でお姉さんを指示しているだけにすぎない。

ここはお姉さんの店だ。ならお姉さんの指針を聞いた上で俺は意見を述べるくらいがちょうどよかったのだろう。今更遅いが。

乗りかかった船なので今から方針を大きく変えるとか、投げ出すとかするつもりはないがもう少しお姉さんの意思を聞いての店作りをしていったほうが良いだろう。

別に異世界トリップでもないんだ。この世界に何時まで居られるか分からない、なんて心配はする必要すらないんだから。

ぼーっと緊張感もなく作業を続ける。

この程度なら何かを考えなくても色の変化さえ気をつけていれば問題はない。

これが危険物であれば話は別だが、ハーブと果物でそう何度も危険なものが生まれてはたまらない。

今はポーシヨンに注意しなければならぬような反応も見えない。

ならこれは切り上げてポーシヨンベルトでも作ったほうが良いか。あっちの方が時間はかかる。

というか俺しかまだ作れないならこれはいつそのこと他の工房に作成を委託した方が良いかもしれない。

ポーシヨンの需要は高い。他の工房でも恐らく作っているんだろう。だからガラス瓶の卸しをする工房もあるわけだし。

と、ふとお姉さんを見てみると大粒の涙がとめどなく流れ、涙が頬に幾つも筋を作っている。

……何時から泣いていたんだ？ 泣くのならもう少し声を出して欲しい。

いや、そこまで言うつもりはないが。

この辺が限界だろう。俺がこのまま放置しておくのも。

とはいえ、今下手に手を出すとお姉さんが俺に依存しかねない。

言っておくが、俺がお姉さんのような人に甘えられたら耐えられる自信はない。皆無といって良い。

だが、ここで何かしらの理由をつけて席を外すのもいけない。

思いつめた人間は何をしでかすのかわからないからだ。

なので、心苦しいが泣きたいだけ泣いてもらおう。

今の痛みはお姉さんにしか理解できないのだから。

だから手は止めるが話しかけはしない。今仕事をするのは違うだろう。

涙に濡れた表情は色っぽくて思わず抱き締めたかったが。……自重しろ、俺。

泣き終わったのを見計らい、温かいお茶を淹れる。お姉さんにそれを渡すと、黙って隣に座った。

お姉さんが泣いている理由が分からない以上、下手に声をかけるのも良くないだろう。

結局、お姉さんが話し始めたのはお茶を飲み干して暫く経ってからだ。

とつとつと話し、時折また涙ぐみ嗚咽をこぼしながらのため少々分かりづらかったが、一言でまとめると悔しかったそうだ。

自分なりにこの2ヶ月頑張ってはみたものの、どうすればいいか分からずただ日が過ぎていく毎日。

常連は時たま現れて少し話をしてくれるが頼れるわけもなく。

そこでどうしようかと悩んでいた時に俺が現れた。

自分が何度やっても上手く出来なかったものが簡単に作られ、見たことも聞いたこともない製法で商品を作り出し、さらに自分には作れないものまで作ってしまう。

おまけに口下手な自分をフォローしてくれるし、美味しいもので食べさせてくれる。

嬉しいが、あまりに自分が何も出来ず悔しい。どうして自分はこつも無力なのか、と。

それから一念発起し、俺の負担にならないよう一日を過ごしてみ

せて安心させたかったがそれも上手く行かず。

そんな自分が情けなく、あまりに俺に申し訳ない。

そう考えているうちに涙が止まらなくなったのだと。

……すっげえ自己嫌悪がする。やはりもう少しお姉さんの話を聞いておくべきだった。

ただ、状況を利用するようで申し訳ないがここでお姉さんには伝えておくべきだろう。

「お姉さん。俺は自分のためにここでこうやって働いてる。だから俺に感謝する必要はない」

「けど、それで私も助かってる。だから、ありがとうだよ」

無理やり笑みを作っているのは少し胸に来るものがある。

そのため、少し空気を換えよう。

「お姉さん。時にご飯は食べた？」

「えっ……？ う、うん……へ、平気だ、よ？」

と言ってる最中に鳴るのはむしろタイミングを合わせたのかとも思う。

お姉さんはむしろ恥ずかしがっている方がいい。いや、俺の性癖とかではなく。

真っ赤に顔を染めたお姉さんに準備をするように言うと、絞ったタオルを渡し表に出る。

これで少しは気が晴れてくれれば良いんだが。あとはお姉さん次第か。

暫く待っている、目はまだ赤いがそれ以外はいつものようなお姉さんが現れる。

泣き顔を見られて恥ずかしいのか、顔は紅潮していたが。

お姉さんに先行して歩くとは何か手を取られる。まあ、人通りも多いし構わないのだが。

精神的に弱っているときは甘いものが一番なのだが、残念ながらそれはない。

ちよつと頑張つてビートを買って砂糖を精製しようにも小遣いが足りない。

というわけで市場調査をしている最中に見つけた、路地裏の一軒を今回は選んだ。

こつちに来てからというもの、というかこの世界に生まれて、食堂で食べたのは父とこの町にはじめて来たときだけだったし、それ以降は自分で作ったものか屋台のもの。

こつやつて適当な店を選んで飛び込んでみるのは、些細なことだが俺の夢だった。

前だつたら絶対失敗するし。

というわけで適当な店を選んで適当な料理を注文したいところなのだが。

「お姉さん、何か食べたいものある？」

「うー……うん。じゃあ……」

と幾つかお姉さんの希望を聞き、どんな料理かと量を確認して注文する。

あざといのは分かっているが、やはり女性の扱いは苦手だ。反応を見ながら対応するしかないだろう。

とはいえ、腫れ物扱いもお姉さんも嫌だろうからその調整は難しそうだが。

ぎこちないが何とか話せるようになり、食事を終えた。正直味なんて覚えてない。

最初の一口は何となく覚えていたんだが、その後は漂う妙な緊張感に呑まれた。

これは、俺からもう少し歩み寄るべきなのだろうか？

「お姉さん。帰ったら、もう一つ上のもの挑戦してみる？ それとも、基礎をもう少し続ける？」

お姉さんは狭く深く、を目指したほうが良いとは思う。だが、お姉さんが望むことを手伝う準備はある。

なら、それを決めるのはお姉さんだろう。

「……少し考えてることがあるから、工房に戻ってからで良いかな？」

軽く頷くと、それから話もなく歩く。

工房からそこまで離れていなかったためそう時間もかからなかったが。

「ソラくん。私、今まで色々なことに頼りすぎてた。

お父さんにもお母さんにも、常連さんにも、それにソラくんにも。みんな、きつと私のためを思っていてやってくれてたんだと思う。それに甘えてたんだとも思う。

だからね、私はそういう自分を変えたい。変えるために何をすればいいか分からないけど、でも自分で考えることが大切なんだって思うの。

だから、私はソラくんの教えてくれることを全部教わりたい。ソラくんには迷惑をかけるけど、それでもいいのなら私に教えてください」

頭を下げるお姉さん。……とは言ってもなあ。

「お姉さん、それちょっと違うくない？」

今までの自分を知ることが大切だし、それを反省することも大切だ。

だからこそ、自分を変えたいと思ったんだらうけど、今のお姉さんにそれが可能？」

俺で教えられることなら教える。けどさ、それはお姉さんの意思は存在しない。

そしてサンパーニヤも存在しない。

それはお姉さんの店じゃなくなる。

それをしたくてお姉さんは売らなくても済む努力をしてたわけじゃないよな？

ならば、お姉さんは今自分がどんな位置にいて、どんなことが出来るのか。

そしてどんなことをして、どうなりたいのか。

そこでもし理想に届かなくても近づくことは出来る。

近づいたとき、また見えるものは変わってくる。

なら、そこまで自分を持っていくべきだろ？

今のお姉さんは耳通りのいい、模範的な回答をしてるに過ぎない。今お姉さんがどうしなきゃいけないのか。それを教えてくれ」

何が出来て、何てばかけたことは聞かない。それは俺が分かっているつもりだ。

お姉さんに納得させるための話じゃないんだ。お姉さん自身が見つけなきゃいけない問題だから。

「……俺は作業してる。お姉さんはのんびりと考えていてくれ」

お姉さんは悔しそうに俯いたまま話さない。……俺のキャラじゃないのに。損な役割だな、全く。

革をちくちく縫い、ポジションベルトを作る。

これは他のポジションにも使えるから中々評判がいい。口コミで徐々に広まっているそうだ。

とはいえ、購入制限を無くしてしまえば主力商品のポジションとセットで売れていくだろうからまだまだ作れば売れそうだが。

いつかは狩場別や職別のポジションセットを売り出しても面白いかもしれない。

まあ、いつこのポジションの秘密に気づくかによってポジションに割く労力も変わっていくんだろうが。

明日がまた露店を出す日。

今回はベルトを10本は出したいんだが、昨日のロスもある。

今のままでは減ってしまうだろう。レシピを登録したので生産スキルを使えばすぐなのだが。

あとは幾つか革切れ……とでも言えばいいのだろうか。そういった切れ端もある。

それを使って何かを作るのもいいかもしれない。こちらは休みの日にでも露店を巡って考えてみよう。

お姉さんのことは気がかりだが、時間は有限だ。

今立ち止まってしまえばサンパーニャにも影響は出る。

それこそお姉さんの居場所がなくなってしまう。それは避けたい。

2本、3本と作る間にどんどん夜は深まる。父や母は心配しているだろうか？

普段ならもう家に帰っている時間だ。だが、俺はまだベルトを作る。

今日は最悪徹夜だな。

あまり遅くなれば父が迎えに来るだろうが事情を話せば分かってもらえるはずだ。

この幼い体でどこまで無理が出来るかはわからないが何かあったときのためそういったことは事前に限界を測るのもいいだろう。

正直今の時点で眠いが、昨日の疲労が抜けていない証拠だろう。

昼まで寝ていたというのに。子供の身体は扱いが面倒だ。

「ソラくん……まだ、帰らないの？」

「お姉さんこそ。明日は露店だけど、平気？」

疲れたような、困ったようなお姉さんの表情。ずっと今まで悩み続けていたんだろう。

いや、今も悩み続けている最中か。

「うん。私は平気だよ。でも、ソラくんは？」

「俺も。それより、作業が遅れてるから少しでも時間取らないと明日売るものが足りなくなりそうだし」

そこそこの速度ではやっているが、あくまで売り物。手は抜けない。

縫う部分も多いし、場所によっては何回か縫い合わせないと強度を保てない。

そうなるかと1人で作るにはどうしても時間がかかる。

ミシンでも開発するべきか？ いや、これだとまた同じことの繰り返しだな。

そこはちゃんとお姉さんと相談しよう。

「あのね……ソラくん。私も、していいかな？」

両手を顔の前で組み、懇願するようなお姉さんの表情。

先ほどのこともあり、尻ごみしているんだろう。

「お姉さん。……時間、ないから急いでね？」

俺が了承するのが意外だったんだろうか？ 一瞬驚いた後、嬉しそうに俺に駆け寄り革を受け取る。

とはいえ、お姉さんの不器用さには変わりがない。ゆっくりでいいから針に気をつけるようお願いかせ、作業に戻る。

ある意味、こちらの方が単純なためかお姉さんは手順や縫い方を

何度か聞くだけで大きなミスもなく仕上げていく。

たまに縫い目がジグザグになっているが、この程度はご愛嬌だろう。

酷い部分は指摘する前にお姉さん自身で気づいたし、修正もやっている。

これはお姉さんの中で何かが変わった証拠だと思う。

これが一時的なものでないことを祈ろう。お姉さんはただ甘えて
いるばかりではないはずだ。

結局終わったのは11時位だろうか？

普段5時くらいまでは寝ているため、今から寝ても6時間は眠れる。

普段はもう少し早く寝ているから明日の疲労は免れないだろうが、
その時は秘蔵のポーションを出そう。

副産物で出来た、効果の高いものだ。

ただ、効果が高すぎるため一口二口程度にしておかなければまず
そうだが。

結局父は迎えに来ていない。

恐らく何か感じるころがあっただけで俺を忘れているわけでは
ないだろう。

「お姉さん、送るよ。俺はここに泊まっていくから」

前に作ったランプを引っ張り出し、お姉さんに見せる。

「う、うん。あの、ごめんね」

「お姉さん1人で出歩かせるわけには行かないって。で、ここから

「遠い？」

「ううん。すぐだよ」

まあ、昔から商売をしているという話だし、そう離れているわけもないか。

戸締りをした後、外は星があるとはいえ薄暗い。

周囲ももう静まり返り、昼間とは随分と違う形相を見せる。

お姉さん1人では無用心だし、送っていくという選択は正解だな。

案内された家は2階建ての広めの家だった。比較はリーゼの家だ。俺の家は流石に比較対象にふさわしくないだろう。

「ね、良かったら上がっていかない？ このまま帰したら、怒られそうだから」

誰に、とは聞かない。恐らくご両親に、ということだろうから。

「少しだけ。あまり夜遅くに女性の家に上がりこむのも変だから」

お姉さんは子供なのに変わってるね、というがまあ仕方ないだろう。

お姉さんにとって子供でも、俺は実際精神年齢でいえばそれなりだ。

このままだと精神だけ先におっさんになりそうだったので、具体

的にどうというのは気にしないことにしたのだ。

と、お邪魔した家は意外と綺麗だった。仕方ないだろう？ あの工房の惨状を見てしまうと。

ただ、綺麗だけじゃなかった。散らかすようなものが何もなかった。

家具もある、食器もある。生活に必要なものは全て揃っている。けど、生活をしているような跡が見えない。

「お姉さん、いつもちゃんと家に帰っている？」

「帰ってるよ。ここが私の家だからね」

そう答えるお姉さんの表情は暗い。それが答えなんだろう。

「お姉さん、台所借りるよ。お姉さんは座っていて。いい？」

ここで初めて来る家の台所を借りようとする俺も大概だが、お姉さんは俺に見せたかったのかもしれない。自分の弱さを。そして、寂しさを。

こんな深夜に料理なんて近所迷惑だろうが、目を瞑って欲しい。

台所にはほとんど食材はない。あるのは芋が数個と干し肉、それに小麦粉に白い塊。

これは恐らくパンを作ろうとして失敗したものだろう。

ただ、これは成功だ。俺は危ないからとこっちの方法では作らなかったが、これが何かはわかる。

パン種だ。

酵母を使わなくても粉と水を混ぜて温度の関係はあるが数日放つて置けば膨らむ。

つまり、膨らませるためなら酵母は必要ないのだ。

とはいえ、カビや菌の繁殖により駄目になったり、食べて病気になることもある。

だが、これに関しては条件が良かったのか適度に膨らんでいる。

ただこのまま使うと量も少なく、あまり美味しくはないので表面を削り、粉を足し塩と食用のオイルがあつたのでこちらを代用で使う。

本来さらに醗酵もしなければならぬので、お姉さんにはれないようこつそりと特殊スキル「促進」を使い醗酵させる。

その間にかまどと窯に火を入れ、鍋に水を入れたものをかまどに置き、沸騰させる。

その間に芋の皮をむき、適当に切つて水にさらす。水は「湧け、水よ」^{タイ}を使ったかつたが、そんなわけにも行かなかつたため井戸から汲んで来ている。

流石に促進と違い通常の方法が取れるものはそのまま使う。

沸いたら芋と切つた干し肉を入れ、そのまま煮込む。

干し肉から出汁と塩分が出ていいスープになるだろう。

そして、灰汁を何度か取り除きながらパンの醗酵具合と窯の温度を見る。

温度がちょうど良くなると、醗酵が終わつたパン生地を切り、丸く整えるとそれを窯で焼く。

ここまで来ると本当に俺が何の職人なのか分からなくなってくるが、それはそれだ。

出来上がったのは丸いパンとスープ。
出来上がったものは品数も少ないが、出来るものはこれくらいだ
った。

卵などがあればもう少しレパートリーは広がったんだが。

「さ、食べようか」

「……本当に、これを作ったの？」

信じられないというお姉さんの表情。それはそうだろう。
自分が作れなかったんだから。……またしくじったか？

「お姉さんが残していた生地を使ってね。

ある程度の温度で2〜3日置いておくとし生地が膨らむから、固く
なった外側を切り落として中の柔らかい部分をまた粉と混ぜて作る
んだよ。

とはいえ、あまり膨らみすぎると良くない物まで出来るから注意
が必要だけど」

ポイントは柔らかさと臭いだ。すっぱいような臭いがしたらその
時点でアウトだと思っいいい。

その点では醗酵にそれほど時間をかけない酵母を混ぜたほうが
いい。

「ソラくんって、何でも知ってるね」

寂しそうなというか自嘲を含んだような表情のお姉さん。

「お姉さん。俺はまだ知らないことばかりだよ。

この世界のこととはほとんど知らないし、お姉さんのことも知らない

い。
そうやって自分を貶める必要はない。知ってることが増えるだけ、動き辛くもなるんだし」

知るということは恐怖すら知り得るということ。

一度覚えた恐怖は肢体を絡めとり、全身の制御を利かなくさせる。それはただ人を脅かし、臆病にさせるものだ。恐怖を知らないものは長生きも出来なさそうだが。

「でも、私よりも知っている。私はそれが羨ましいよ」

「なら、知ればいい。聞けばいい。見ればいい。世界は広いが狭い。狭いが広い。」

まずはお姉さんが俺を知ればいい。俺もお姉さんを知る。そうすれば、お姉さんは1人じゃない」

お姉さんの恐怖はきつと1人であること。寂しがり屋で、そして臆病だ。

手を伸ばしてもらうことを望んでいても、自分から手を伸ばすことは怖くて仕方がない。

そこに俺が手を出した。なら、その責任は最低限取るべきだろう。

「ほら、冷める前に食べよう?」

お姉さんは頷き、食べる。泣きながら、嗚咽しながらも、しゃくするように泣きながら食べ続ける。

昼のときのような悔しそうな表情じゃない。嬉しそうな、救われたような。そんな顔をしている。

全く、食事は楽しく食べるものなだけだな。

……どうしてこうなった。

俺は食べた後帰ろうとした。

泣きながらも残っていたスープも全て完食したお姉さんに苦笑しながらも、この分なら明日から頑張れそうだなと思いつつも工房へ帰ろうとした。

なのに、何故俺はこうしている。

いや、この温かさが嫌なわけじゃない。この香りはむしろ良すぎる。というかこの柔らかいものからは逃げる術はない。嫌どころか、これは楽園だ。あのロリ神様がいた変な場所じゃない。間違いなく楽園だ。

呼吸は甘く、思わずそれを奪いたくなるほど甘い。時々動くそれはむしろ押し付けてるのかと聞きたくなるほど密着する。泣き疲れてか、普段見る以上に幼い。普段は美人さんというイメージだが、今はただただ可愛い。可愛らしすぎるのだ！

結論、お姉さんは可愛い。いや、待て自分。少し落ち着け。深呼吸だ。

……お姉さんの甘い香りを胸いっぱい吸い込むだけでした。

何をしても逃げ道はないのか？ 抜け出そうと身体を左右に揺さぶっても、お姉さんが力を籠め擦り寄ってくるように抱き締められるだけ。柔らかいものが当たっている以上、これ以上はまずい。

腕を何とか放そうにも、両腕を抱き締められている。下手に動かすと、当たるんだよ！

正直天国ですけどね。前も含めてこんな体験初めてだよ！

けど、駄目だ。これは駄目だ。駄目すぎる。一度これを味わったら抜け出せなくなりそうだ。

むしろ、俺がお姉さんに依存しそうだ。

出来ることは身じろぎもせず、呼吸も出来るだけ控えて、ただお姉さんが起きるのを待つことだ。

ぽかぽかと暖かいこの体温に包まれて眠ってしまったたらさぞ極上の眠りを味わえるか。

だが、それを味わったら何かまずいことになりそうな気がする。レニの添い寝をすることがあるが、それとは比べ物にならない。レニはただただひたすら親愛の情が湧くだけで、守りたくなくなるという感情しか浮かばない。

だが、お姉さんはそれにプラスして色々なものが浮かんでくる。それはまずい。

お姉さんは俺を子供だと信じきっているからこうして俺を抱き枕よろしく寝ているのだろう。

人肌が寂しかっただけだ。それを俺が裏切るわけにも行かない。

俺に出来ることは円周率を数えることだ。下10桁までしかいえないが。

永い夜が、俺を苦しめる。

起こせばいいじゃん、と気づいたのは空が白み始めてから。

どうにかこうにかして何とか起こすと、お姉さんは低血圧なのか、寝不足なのかベッドに座ったままぼーっとしている。……直視は出来ない。

俺が動いたせいか、色々大変なことになっているのだ。

寝る前は部屋の明かりもないし、寝る前はいつもそうしているのか、ボタンやらそのス……げぶんげぶん。とにかく、直視どころかそっちの方向すら俺には向けないのだ！

着替えに戻るから、とお姉さんに伝え返事を聞く前に出て行く。家にダッシュで戻り、風呂にはいり疲れやら何やらを全て吹き飛ばし、着替えをとりに行くのを忘れていたため部屋に戻るまで今まで着ていた服を着て気付く。

……お姉さんの残り香が服に染み込んでいる事に。何というか、未だお姉さんに抱き締められ……とにかく着替えが必要だ！

母に知られたら盛大にからかわれるだろう。

このところ近所の奥様集団と積極的に交流を図っているそうだし、下手したら近所中に知れ渡るかもしれない。それは避けなければならない。

そう決め、こっそりと部屋に戻ることに、

「ソラ、お帰り」

何故、私の部屋に、いらっしやいますか、母上殿。

「どうしたの？ そんなに真っ赤な顔して。……朝帰り？」

声にならない声で叫ぶしかなかった。何を言うか、この母は！

「わあ、本当に朝帰りなんだ……ソラ、相手は誰？ もうちゃんと告白はしたの？」

何故そこまで理論が発展する。というか、気配探索しろよ！ 俺！

「……さっきまでサンパーニヤで露店用の商品を作ってただけ。俺、また戻るから」

回れ右をして、部屋を出……る前に母に首根っこを掴まれる。

「ほらほら、きりきり白状しなさい」

楽しそうな母の声とは裏腹に俺を掴む力は強い。どこにこんな力を隠し持ってたがる。

「だから、サンパーニヤに居ただけだって！」

「こんなに他の人の匂いくっつけて仕事してたのかな、ソラは」

「教わるがあったからそれでだよ！ 細かい仕事も多いし！」

「ソラの場合教えるほうでしょ？ 嘘をつくときはもっと信憑性のあること言わないと」

……母にその言い訳は通用しないんだった。

「ど、どっちにせよ！ 準備しないと間に合わないんだよ！」

これは事実だ。だから早く解放してください、母上よ。

「面白くないの。パン、用意できてるから持って行っていいよ」

「……ありがとう、母」

俺はこの人に勝てる日が来るんだろうか？

その後も追及の手が止むことはなく、俺は徹底的に無視をするという手段をとりパンと即席で作ったおかずをいつもより多めに持ち、家を飛び出た。背後から聞こえる「私に紹介してねー」などという幻聴など聞こえない。

数時間ぶりのサンパーニヤにはすでにお姉さんも来ていた。

まあ、俺は風呂にも入ったし俺の方が時間がかかって当然だろう。

「おはよう、ソラくん」

「おはよ、お姉さん」

お姉さんの憑き物が落ちたような笑みに若干目線をそらす。

「あのね、ソラくん。私、今日頑張るよ」

お姉さんの宣言は何時にもまして力強い。俺は適度に頑張れとしか言いようがないが、いい傾向ではあるだろう。

「あ、ああ。じゃあ、支度するか」

と、奥の作業スペースにはすでに用意されたポジションとポジションベルト。

「ポーションの比率は白が前と一緒に、40個、黄緑が35個で緑が25個だよ。」

「フィリップさんが黄緑が多い方が良かったって言ったからそうしたんだけど、どうかな？」

「この前は最後まで緑が残って通常のポーションの効果もあるからって売ったからもう少し減らしてもいいんじゃないか？」

「この辺りは毒のバッドステータスを与えるモンスターや獣が多いって言うし」

「じゃあ、黄緑も40個で緑を20個、売ってる最中に売れ行き次第では変えていく……で大丈夫かな？」

お姉さんはこれまでの働きが嘘かのように話している。

「ああ。それで多く用意してたんだ。それでいいと思う。」

「けど、昼過ぎ位を目処に5個単位で調整ってことで構わない？」

「うん。出来れば他のポーションも並べたいんだけど、まだ難しいかな」

「他のやつは他の薬草や道具で補えないものが多いし、ポーションも少し効能が高すぎる。何か並べたいやつある？」

「出来れば灰色を並べたいな、って。他の職人さんも使えれば便利だと思うし」

「あれは……あーっと。今更だけど、DEX+10はどれくらい高いんだ？」

器用さがあがるとは言っておいたが、効能は話していなかった。
+10だとなないよりはましだ、程度の認識しか無かったし。

「そんなに高くなるのっ!？」　そ、それだと銀貨20枚は軽く行っ
ちやうよ……」

割かし高級品だったらしい。

「なら、今は出さない方がいいと思う。それにあれは赤色ポーシヨ
ンを原料にするから材料が足りないよ」

どうやら赤色ポーシヨンを熟成か何かしないとあの効果は得られ
ないらしく、俺が作った赤色ポーシヨンをそのまま使っても薄くな
るだけだった。

「う、うん。そうだね……ソラくん、今度から効果は教えてね?」

「そうだな、悪かった。今度からはそうする」

そんな話し合いの結果、露店の準備を進め完了したのが昼の少し
前。

朝も抜いていたため、少し気は早いが昼食にすることにした。

その間も客は来るため、人が近づいてきたらどちらかが食べるの
を止め対応するようにしたが。

4時間後、完売。売り上げは17842R。ポーシヨンの総数が

変わらず、ポーシヨンベルトを若干数増やしただけなので売り上げも大して変わらない。

ただ、今回はほとんどをお姉さんが対応した。

今まではお姉さんはおどおどと俺の対応を見ていたことが多かったが、今回は逆に俺はほとんど傍観していた。

声を出したり、無理な値引きを要求する客に関しては対応したが、それも途中まではお姉さんが対応したし、積極的に話もしていた。

途中、目敏く俺を見つけた母が乱入することもあったが、気にしない。夕飯をうちで取るようしつこく誘ってきたのでお姉さんもそれには応じたが。

売り上げの一部を銀行に預け、足りない材料とお姉さんの家で必要な食材を買い込み俺とお姉さんは一度お姉さんの家に。

お姉さんは店の売り上げで自分の食べるものを買うことをしきりに気にしていたが、普段はパンを一切れとか安い出店のスープのみとか碌なものを食べてないことを白状した。

俺の持つてくる昼食が無ければどうしていたんだろうか。まあ、それだけ必死だったということだろう。

予想していたとはいえ、思った以上の酷さに愕然とするしかなかったが。

今は、お姉さんの給料をどれくらいにするか設定した上で、どれだけの収益を望むかということを決めることにして、まずは今月の収益目標を金貨5枚に設定した。

後2週間ほどはあるし、それくらいなら可能どころだろう。

最初は達成しやすい目標を掲げることで達成したときの自信をつける意図もある。

お姉さんもそれなら、と納得し食材を嬉しそうに収納していった。

後は店に戻り、足りない素材を補充して一息つく。

休んでいなくてくたくただったこともあり、特製ポーション（虹）を取り出し、ほんの少しだけコップに移す。

これはコップ1杯分、ガラス瓶では3本分だけ作っている。

「お姉さん、これ効果が強いから舐めるだけにして」

「強い……赤色ポーションの5倍位？ そんな訳ないよね」

「赤色ポーションの20倍。だから気をつけて」

HPが1000回復するポーションだ。俺でも結構な量を回復する品物だ。お姉さんのHPがどれくらいかは分からないが、ゲームならともかく現実でそこまで強い薬はきついだらう。

「にじゅっ?! そんなもの誰が使うの?! ほ、ほんとに飲んで
も大丈夫なの?」

「俺が効果は試してるから平気。植物に一滴与えただけで萎れてた
ものでも復活するくらいだから飲み過ぎないようにね」

お姉さんは恐る恐る舌をつける。と、びくつと全身の毛が逆立ち、
ぺたりとテーブルに突っ伏す。

「……一滴でも強すぎるか。これは駄目だな」

残っていたものを飲み干す。全身に漲る力は今まで以上だ。眠気
も飛んで、全身を満たす力強さだけが残る。

「……こ、これ本当にポーシオンだよな？ ソラくん、飲んで平気なの？」

「こつこつというのは強い体質だから平気。ただ、強すぎる効果の薬は毒にもなりかねないから」

お姉さんの作った純粹な毒と違い、身体が受け入れられないほどの回復量だ。強すぎる効果は毒にさえなる。だからこれは押さえに押さえたと他で他のポーシオンへ改良しているのだが。

「何時の間にこんなものまで……うっん、私がソラくんに頼られてなかったからだよな。だから文句は言わないけど、信じられるようになったら教えてね？」

お姉さんのいった言葉はお姉さんが思っている以上に重い。俺は誰にも話していない秘密が多すぎる。それこそ、その秘密を知っているのは俺以外ではあのロリ神様だけだ。

恐らく、俺の秘密はそれだけの意味はまだ持っているだろう。

「まあ、その時が来たら。かな？ まずは、お姉さんが独自にポーシオンを開発できるようにしてからだよ」

「ううっ……！ ソラくんがいじめる」

拗ねたようなお姉さんの声に思わず笑ってしまふ。

昨日見せたような泣き顔は今は無い。それが何故か嬉しい。笑ったことでさらにお姉さんは拗ねているが、どうしても堪えられない。

暫く俺の笑い声が止まることは無かった。

次の日、うん？ 食事はどうしたか？ 気にするな。母がからかうといういつものことが行われたただけだ。俺は何も覚えていない。

いつもの日課を済ませ、サンパーニャへ。いつも通りのお姉さんが

「ソ、ソラくん！ おはようございます！」

訂正。何故か顔を真っ赤に染めたお姉さんがいた。

「おはよう。お姉さん。……忘れて方がお互いのためだよ」

だから俺は何も覚えていない。

「う、うん。そうだね。あ、あはは」

空笑いをするお姉さんは……気持ちは分かる。けど、思い出さないほうがいい。

俺も、思い出せばどうなるか分かったものじゃない。

そんな微妙な空気の中、淡々と作業へ向かう。

お姉さんは特製ポーシヨン（白色）は完璧に、とまではいかないが大きな失敗も無く作れるようになった。

今度は売ってはいないが難易度の高い特製ポーシヨン（赤）だ。

これは草ではなく雪花を使うもので、ばらした上で磨り潰すタイ

ミングやその度合い、抽出するお湯の温度が異なる。

他は全部液体が滲むまで磨り潰し、後は沸騰したお湯に入れ、色や臭いでタイミングを計っていくものだ。

ただ、これが身に付けば他のものも簡単にできるようになるだろう。

俺は今日は魔術品の研究だ。

ポーションベルトの作成もしなければならぬが、あれはなければなくて何とかなる。

というか、何処かに卸して貰う予定だ。お姉さんも同意してくれた。あれを2人で作るのは中々大変だ。

そんなわけで魔術品を鑄造で作り、それを魔力を箆め打つたらどうなるか、という実験をしたいと思います。

それが可能であれば魔術品の大量増産……は出来るがしないものの、同じ規格のものを頼まれたとき、或いは必要になったとき便利ではないだろうかというものだ。

それに、そちらであればお姉さんの失敗確率も下がるだろう。

この数日頑張っているのは重々承知しているが、慌てると混乱するという癖は抜けていない。

中々治らないからこそその悪癖だ。

そんなわけで前したような魔術での固定などはしない。

今回はいちいち手間のかかる砂型ではなく、金属で型を作り、それに溶かした金属を入れる。

それだけでは型の全てには入りきらないため型を回転させ行き届かせる。遠心力を利用した鑄造だ。

これであれば細かい装飾を施したのも出来るし、指輪などの小さなものも作成可能だ。

まあ、指輪などは通常のアクセサリとして作り、腕輪や首輪な

どを主に魔術品として作る予定だが。

こちらであれば労力もさほどかからず、同じもので作れば手間もかからないため費用も安く押さえられるだろう。

時間が短縮できるということは、お金も下げられるということに繋がる。

ただ、魔術品に関しては店舗での販売を見込んでいる。

露店で魔術品を売るということにも中々考えは回らないだろう。

それに、魔術品は試用が普段されているそうだ。

効果が出なければ高いお金をかける必要は無い。

そのため、『魔術工房』にはそういったものの使用許可が下りており、効果の減退とダメージ無効化がされる結界が張られているとのこと。

そんなわけで俺は2つの金型を作っている。

1つは指輪で1つは腕輪。

腕輪はそのうち魔具としても使えればと思っているため宝石を入れる穴を作っている。

ついでにそれ自体は作ったのちに『融解防止』のスキルを付与している。

酸や高熱で溶けないための処置だ。

とはいえ、それをまだ説明するわけには行かない。

恋人に贈るためのものとして、あとで2人で石を選んでもらっため、と誤魔化しておいた。

後はお姉さんが妄想で補完しておいてくれた。

お姉さんはそうだった話は好きらしい。自分の恋愛には興味が無い様子だが。

ともあれ、お姉さんの最初の関門は何とかクリアできそうだ。

明日は休みだし、今日は気持ちよく休めそうだ。

第9話 お姉さんの決意。（後書き）

何かと駄目だしのされるお姉さんですが、色々と葛藤があったりします。

人間ですし当然ですよ。

というわけで本格的にだめきやらになるまえにお姉さんに焦点を当ててみました。

感想で読みづらいとのご指摘をいただきまして、改行等にも注意しつつ作ってみました。

今度は縦に長くなりそうですが。

分割してというのはあまり好きではないので、そこはどうかして調整をしてみます。

評価、つつこみなどありましたらお願いします。

2011/9/17

誤字等の修正。ひまじん様、社怪人様ありがとうございます。

さらに追加で誤字等の修正。独言様ありがとうございます。

2011/9/18

誤字等の修正。haki様ありがとうございます。

第10話。詠唱術と魔法学園生徒候補たち。（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

100万PV、10万ユニーク到達しました！

拙い部分はまだまだありますが、今後とも読んでいただければ幸いです。

第10話 詠唱術と魔法学園生徒候補たち。

夢を見ていた。それは多分楽しかった夢なんだろう。

そして悲しい夢でもあったんだろう。どうしてそう思ったかは分からない。けど、そう思う。

ぼーっと、寝起きのまとまらない頭で考える。

せつかくの休みだし、たまにはこういうのもいいだろう。とはいえ、あまりごろごろするのもいただけない。

のそのそと起き出し、身支度を整え、食堂に。そこには母とレニがいて、レニの食事を母が手伝っている。

「おはよう、母、レニ」

「おはよう。今日はゆっくりね？」

いつもはレニが起き出す頃には家を出ている。母の指摘も当然だろう。

「今日は休みだから、ゆっくりしようと思ってさ。レニ、美味しい？」

「ご機嫌そうな表情でこくこく頷き、一生懸命朝食を摂るレニは相変わらず、可愛らしい。

思わず家に連れて帰りたくなりそうだ。

……危険な思考の上、此処が家だったとすぐに気付いたが。

俺はその後、適度に食事を取ると町に出かけることを母に告げ、家を出た。

特に用事などは無いが、何か面白いものが見つかるかもしれない。お金はあまりないが、冷やかしならタダだ。何かアイデアも浮かぶかもしれない。

辿り着いた中央広場は相変わらず賑やかだ。

他の場所でも出店や露店は開かれているが、一番繁盛しているのが此処だろう。

時折、俺の姿を覚えてくれている人が居るため、今日はポーションは売っていないのかと何度か聞かれたのは商品が認知され始めたからだろう。

そんな中、匂いに惹かれ俺は出店でチュロスらしきものを手に入れ、ほくほくで歩いているときいきなり正面衝突した。

もとい、こんな賑やかな場所で人ごみを縫うようにして走ってきた少年に体当たりをされた。

俺より幾分体格の勝る少年から発せられる運動エネルギーは、俺を吹き飛ばすのは簡単だったらしい。

一瞬軽い浮遊感を体感すると、ズシャー、という効果音が聞こえそうなほど俺の身体は地面を滑り、止まった。

これは酷い。俺はチュロスの油と塗ってあった蜂蜜で服はドロと油まみれ。

何とかぎりぎりを受身は取ったものの、とっさだったため左半身はさらに酷い。

特に、手は無理に地面から頭を庇おうとしたため擦り剥いている。職人の手をなんだと思っっているんだ！

抗議をしてやろうと、俺にぶつかった少年をにらみつけると、面白いくらい慌てている。

何だかこれではむしろ俺が悪いようではないか。いや、気をつけていなかった俺も悪いんだが。

「ごー！ ごめん、怪我はっ、ああっ！ 本当にごめんっ！」

俺のズタボロぶりを見て少年はさらに慌てる。見ていて気の毒になりそうだ。

「いい。これくらい慣れてる」

これは本当だ。とはいっても、穹^{ソラ}としての俺だが。

前はこの位の年齢だとこれはまだ軽い方。

酷いときは両腕擦り剥いて血だらけの時もあったし。

これくらいであればポーションに頼らなくても消毒と自然治癒で大丈夫だろう。

消毒液は…俺はヨード、あの茶色い、謎な液体が鉄板だったがそんなものは此処には無い。

というか、消毒液なんてもの自体見たことが無い。アルコールで殺菌か？

流石にある程度範囲が広いのでつばでもつけとけば治るといっても無いだろう。

「慣れてるって……！ そ、そうだとっちに！」

少年は俺に有無を言わせず引つ張る。怪我人を状態も分からず引つ張るな！

少年に引つ張られ連れて来られたのは一軒の屋敷。

それも俺の家よりも大きな豪邸だ。ただ、あまり綺麗ではないが、そこそこに掃除はされているものの、大切にされている感じがしない。住むためではなく、何か他のためにある。そんな感じだ。

そこで案内されたのは応接間だろうか。そこそこに価値のありそうな彫像品が並べられ、壁も名画、かどつかは分からないが風景画が飾られている。それもどこかおざなりだが。

そんな俺の感想を知る由もない少年は慌しく動き、俺の治療をする。

第一印象の慌てふためく姿と違い、中々適切だ。水でぬらした布で傷口の汚れを落とし、軟膏を塗り、包帯を巻く。手当てとしてはそこそこだろう。

「師匠が戻ってたら魔術で回復してあげられるんだけど……ごめんな」

心底情けない顔をして言う少年の顔に思わず笑ってしまう。

一瞬きよとんとした顔をするが、自分がどういった顔をしているか分かったのだろう。

苦笑し、立ち上がった。

「そのままじゃ帰れないよな。合う服があるか見繕ってくるから、少し此処で待っていてくれないか？」

俺としてもこの服のままではいられない。むしろ、髪も汚れているから風呂にもはいりたい。

そこまで少年に要求するのは厚かましいし、見ず知らずの他人の家で風呂を貰うのは落ち着かないだろうが。

にしてもだ。此処は貴族か商人の邸宅なのだろう。いや、師匠と saying 言っていたから恐らく貴族なのだろう。

ただ、この家の不自然さはあまりにおかしいが。まず、人の気配がしない。師匠が戻ってきたら、という少年の発言通り少年の師は今出払っているのだろう。

そこはいい。だが、使用人がいないというのはこの規模の家ではおかしい。

うちも確かに居ないが、うちは所詮平民。あそこに住むようになったのは単なる偶然だ。

ならこの規模の家を維持するには数人の使用人を雇う必要があるだろう。

もしこの邸宅の主と出かけているとしても、それは多くても2〜3人だろう。

屋敷の手入れ、食事の準備、来客の応対などしなければならぬ仕事はある。

それなのに居ないとなると、没落しかけているかあるいは。

「君は誰だね？」

扉が開く音とともに現れたのは、ローブに身を包んだ。…身を包んだ何か。

フードによって口元しかわからないそれは、種族特徴も性別も詳しい体型も分らない。

要は怪しい人物と言うことだ。声のトーンが若干高いため女性かもしれないが。

「誰と言われても。巻き込まれた平民とでも言えばいいですか？」

知らない人に付いて行っちゃ駄目だよ、と母に言われたのは随分と昔。

そんなことを言われなくても村に怪しい人も見知らぬ人も居なか

ったので意味はないが。

ああ、今回は強制連行はされているか。

「巻き込まれた？ 随分とぼろっちい格好をしているが、君は浮浪者の子供かい？」

これは馬鹿にされているのだろうか？ それともただの確認か。どこか嬉しそうに、対面にあるソファに身を沈めるそれは良く分らない。

「浮浪者じゃないです。見知らぬ少年に体当たりをされて、弾き飛ばされた結果こうなっただけで」

それだけ服は汚れまくっている。洗ったところでこれは落ちないだろう。単なる布の服のため構わないが。

「トールか。いや、弟子が迷惑をかけたみたいだね。謝罪をしよう」

「本人に謝られたので、これ以上は」

怪しげだが、悪い人……いや、常識がないわけではなさそうだ。

この屋敷の主ということは最低でも下級貴族だろう。

それが謝罪の言葉を口にするとは思ってもよらなかった。

「これくらいしか見つからなかったけど、我慢してくれ 師匠、お戻りでしたか」

扉が開き、少年が入ってくる。少年にとって師の帰りは意外だったのか、少しだけ驚いたような表情を見せる。

「うん、たった今ね。それよりも、ツール。何故この子に怪我をさせたんだい？」

「師匠のお使いを済ませようと中央広場を走り回っていたらぶつかって……」

少年はばつが悪そうに視線を背ける。あんな人通りの多いところを走り回ればそうなるのは目に見えているはずだが。

「気配の察知位、常に出来るよう言っているのに。いや、本当にすまないことをしたようだ」

気配の察知ということとは武道でも教えているのか？

いや、拳闘ギルドがあるとは聞いていないし、少年の体つきはどちらかと言えば一般的なのだろう。

ある程度鍛えてはいるかもしれないが、武術家特有のしなやかな筋肉が付いているようには見えない。

「反省してますよ。ほら、着替えと食事。俺が駄目にしちゃったから、せめてこれでも食べてくれ」

チュロスのことでも反省しているのだろう。

少年から受け取ったものは麻なのか少しこわついたシャツとズボン、それにパン。

パンは普段町で見慣れているパンではない。少しふすまが残っていたのか若干黒いものは残っているが、俺が食べなれているそれに近いものだ。

ただ、食べてみると製法がおかしいのか、何かが間違っているのかこわごわしてあまり美味しくない。

町で食べるものに比べたら柔らかいためまだましたが、何が足り

ないのか。

風味はそこそこだし、もっちりさもある。けど、何かが足りない。

「どうだ？ そのパン美味いだろ。師匠が何日か前に商人にセツトだけど、金貨20枚も出して買ったものなんだぜ？」

自信ありげに少年が言う意味が分からないが。というか、40倍もの値段が付いてるのかよ。

となればそりゃ広まるはずがないよな。あの工房で大量生産は難しいだろう。

しかも製法そのものも上手く伝わってないようだし。これが不器用や工程を無視したため起こった結果という可能性もあるが。

とはいえ、厚意で貰ったものだ。そうは言えず、曖昧に頷くしか出来ない。

もう少し、村の人にも売り方だとかなんだとかを考えてもらわないと困りそうだな。

父に頼んで村長宛に手紙でも出してもらうか？ 村がその分潤っているなら構わないが、そうでもないのかもしれない。

「ええと。着替える場所借りても？」

流石に見ず知らずの他人の前で着替える度胸は俺にはない。

本来の住人に着替えたいから部屋を出て行け、というのもおかしいだろう。

「なら出て右の部屋を使うといい。すぐ右の部屋だからね？」

それに大人しく従い、出てすぐ右の扉を開く。何も無い部屋だが、着替えをする分には問題ない。

さつと着替え、脱いだ服をたたみ抱える。着れるわけではないが、置いていくわけにも行かない。

後に捨てるにしても、持っていくことにしよう。にしても、参った。転がったせいかな随分とひりひりすると思っていたが、思っていた以上に赤くなっている。

明日にはまた調査したポーションの試飲はするので構わないが。

着替え終わった俺は再び元の部屋に。服まで借りておいてそのまま帰るのは非常識にもほどがある。

軽くノックをして入った部屋ではがっくりと項垂れている少年と、先ほどと変わらない姿勢で座っている邸宅の主。

「よく似合っている。サイズは少し大きいみたいだけど、大丈夫みたいだね」

声は楽しげだが、表情が見えない分笑っているのかどうか分からない。

外ならともかく、室内でフードを被ったままなのはどうかと思うんだが。

「洗って返します。ええと、返すのは多分明日になると思うんですけど、大丈夫ですか？」

「気にしなくていい。昔着ていたもので、サイズも合わないからね。返して貰ってもそのうち棄てるだけだろうから」

そうは言われてもな。確かにサイズは合わないだろうが、貰うのもな。

素材自体はあまりよくないが、そこそこ着心地はいいし、縫い目も綺麗だ。

ほとんど着ていないんじゃないか？

「弟子が迷惑をかけたせめてもの詫びの品だと思ってくれないかな。そうそう、状況を聞けば左半身に怪我を負っている可能性もある。こちらにおいて」

俺の表情を読み取ったのか、彼女……彼の可能性もあるが、声で女性と判断したし、便宜上彼女としておこう。

彼女は断りづらいであろう言葉を重ね、俺に傍によるよう指示する。

怪しげなことこの上ないが、酷いことにはならないだろう。いざとなったらどうにかする自信はある。

「いい子だね。さあ、身体の力を抜いて。光の精霊に願い請う。

かの者に癒しを。たゆたう命の焔に一時の安寧を与えよ。我は、あなたを信ずるもの。』ヒーリング・モリフォニー 治癒の単声曲』

彼女の首の辺りが光り、俺を光が包む。じわじわと身体を温めるようなそれは、ゆっくりと溶けるように、染み込むように俺の中に入っていく。何だ、これ？

「魔術を見たのは初めて？ 大丈夫、これで治るからねえ」

確かに、治りはし始めているが。どうも生命エネルギーの活性化というか、自己治癒の促進というか。俺が使う治癒魔術と何か根本的に違う気がする。

ただ、魔術を扱うとなると、此処は魔術師の家で少年は魔術師の弟子ということか。

「ありがとうございます」

魔術ギルドやそれに加入する魔術師が胡散臭かろうと、感謝を表さない理由にはならないだろう。全ての魔術師が悪いとは断言できないし。

「俺の時は怪我をしても治癒なんてしてくれないのに」

拗ねるような少年の声。とはいえ、魔術師であるのならそれくらい治癒できそうなものだが。

「基礎は教えた。魔具も与えた。もう基礎は使えるようになっただろう？」

「なら、別の属性を持つ君の治癒魔術は、君が使えるようになるしかない。」

前にも教えたはずだよ。自分で出来ることは自分でしなさいとね」

魔具を与えると言うことはそれなりの意味を持つんだろう。ただでさえ高いものなんだろうし。

まあ、俺にはその感覚は分かりそうに分らないんだが。

「ただ、君は体質なのかな。あまり魔術が効きにくい気がする。動き回って怪我が悪化することはないだろうけれど、少し休んでいくといい。」

わたしはまたこれから出かけるけど、よければ弟子と話してやってくれないかな」

それくらいは別に構わない。今日は元々予定はなかったんだ。珍しい出会いに触れるのも構わないだろう。

了承の言葉を返そうにも、魔術師は既に出て行った後だったか。

「帰ってきたと思ったらまた出かけるんだもんなあ。結局怒られたし。いや、君のせいじゃないから気にしないでくれ」

少年は自分の独白がまずいと途中で気付いたが、既に遅い。

と、普通なら此处で気まずくなり沈黙が流れるだろうが、あいにく俺は自分を普通だとは正直思っていない。むしろこれはチャンスなのだろう。

「それよりも驚きました。魔術なんて見るのは初めてなので」

そう。魔術の仕組みを俺は知らない。学ぶつもりはないが、いざとなったときのためにある程度覚えておいても問題ないだろう。

「そうだよな。俺だって師匠に頼み込んでやっと弟子にしてもらって、それでようやく魔術見せて貰ったんだ。

でも使うのって結構大変なんだぜ？ 精霊をまず見ることから初めて、そいつと話せるようになってようやく基本的なものが使えるようになるんだ。

俺だってこの前ようやく風の流れをつかめるようになったくらいなんだしさ」

何て言うか。うん、すげえ不便な気がする。

「精霊と話す……？」

一番気になったのはそれだ。詠唱を聞く限りでは精霊をお願いをするとか、そういった感じで魔術を使っていたようだし。

「そういつても実際に話すわけでもないんだけど。見たりするものもなんとなくぼんやりそこに居るかなって程度だし。師匠が言うには慣れればはつきり見れるらしいんだけど。」

けど、そこからがまた大変でさ。基本的に精霊なんて人と考え方が違うらしいからこっちの話なんて聞かないし。」

気に入ってくれたらその辺に居る精霊が手を貸してくれるんだけど、それも力がまちまちでさ。もうそりゃ大変なんだよ」

興奮したような少年の談だが、きつと自分の魔術の苦勞を知って欲しいのだろう。俺もお姉さんに調合を教えるのは苦勞してるし、誰かにぶちまけたい気も少しだけする。

「魔具は？ あれは高いって聞いたけど、その分の恩恵は？」

「魔具が高いのは属性石がほとんどないからだよ。あっても弱い力しかなくて、強いのは研究用だったり、大貴族や王族への献上品がほとんどらしい。」

俺も詳しくは知らないけど、師匠がそうだって」

その後少年と話している間に幾つかのことが分かった。

まずは属性石、属性の付与された宝石のことだが。

あれは作り出すのが大変で、弱いものなら何とか作れるが高レベルのものは自然にしか出来ないらしい。

火の属性石であれば火山、水の属性石であれば清らかな湖の底など、長い時間をかけてようやくその恩恵を受けた一握りのものだけらしい。

そしてその属性石自体がまた問題だった。

そのグレードにより使える魔術の種別が異なる。

たとえば少年が持っているものは、オーク枝のアームレット【そ

よ風の祈り】というらしい。

これは風の初級魔法を使うことが可能で、それでも市場価格は最低でも金貨50枚以上。

父が言っていた白銀貨2枚以上と言うのは、金属製でかつ良質の属性石のついたもの、らしい。

とはいえ、安いものは高いものとは別の理由で出回らないため、普通の人の感覚としてはそっちがあっているらしい。

で、グレードによって使える魔術の上限があるのは、その属性石を通して人は精霊とのやり取りを行えるため、その属性石に見合った精霊とのやりとり、つまり魔術しか使えないそうだ。

あと、これが一番重要だが詠唱術は魔具を使い、自分のMPを捧げて魔術の行使を請う儀式のようなもの、らしい。

だから一部を除いて特定の詠唱はなく、どういったことをしたいのかを精霊にお願いして確実かどうかわからないものでしかないらしい。

とはいえ、使い慣れればMPの使い方や精霊との交渉も上手く行くので安定化していくとのこと。

道理で俺の詠唱が聞いたこともないと言われるはずだ。何せウィンドの文字をそのまま読み上げ……うん。もう一つまずい事に気付いた。

メニュー画面から利用できるものは全て日本語。メニュー名は当然、アイテム名も説明も、全て日本語だ。日本語なのだ。

あまりに俺にとっては当然だったから気付かなかったが、俺はこちらの言葉と日本語、両方使える。発音や文字こそ違うものの、声帯は大して変わらない。今でも日本語でのやり取りは簡単に出来るだろう。

つまり、俺は知らず知らずのうちに日本語で詠唱をしていた。それはおかしいとも言われるよな。

「どうした？ そんなに頂垂れて……もしかしてまだ痛むのか?!」
「ちょっと気付きたくないことに今更気付いただけだから、気にしないで欲しい」

「今後は気をつけよう。というか出来る限り使わない環境を作り上げよう。」

「基本的なこととして、トラブルを回避することに徹すれば何とかなるだろう。何とかなると思いたい。」

「ふーん。まあ、いつか。そういや、聞きたいことあるんだけど良いか?」

「分かる範囲であれば。だけど」

「正しくは、言える範囲で、だ。」

「ああ。それで構わない。師匠からこの数日珍しいポーションが町に出回ってるから手に入れて来いって言われててさ。何か知らないか?」

「それは間違いなく俺の特製ポーションのことだろう。今日歩き回ってたときポーションを売って欲しいとか、作り方を聞きたい、と声をかけられたことがあっても他で売っているという話は聞いていない。」

「何で魔術師がそんなものを必要に? 必要ないと思うけど」

「いや、興味があるとは言ってたけど。詳しくは」

好奇心だけであればいいんだが。というか、専門家があれを判定した場合どう思うんだろうか。製法は判明するのだろうか？
そういった意味では俺も興味はある。

あくまであれは一時しのぎであり、サンパーニヤの知名度向上のためだ。

目的を果たせば町のポーション売りに製法を販売してもいい。あくまで対象はポーション売りであり商人や研究者に渡すつもりなどはさらさらないが。

さて、話すべきかどうか。知りたい情報をくれたので俺個人としては話してもいい。けど、これはお姉さんに確認しなければならないだろう。俺が勝手に決めていい話ではない。

「考え込んでるみたいだけど、何か知ってるのか？」

「知らないとは言わないけど、少し事情がある。今此処では話せない」

「つまり知ってるってことだろ？ 助けると思って、頼みたいんだけど。……これ以上迷惑かけることも出来ないか」

「明日、朝。中央広場に来れば分かるかも」

客として商品売ることは問題ない。後は自分で服用しようが、研究されようが問題ない。この世界に詳細な成分分析が出来るとも思えない。

なら、売って異常な悪影響が出ない限り責任はないだろう。
無責任だが、売ったものの全てに対し責任を取ることなど不可能

だろう。

と、考えているとゴーン……と低く重い鐘がなる音がする。

「もう来たか。少し待っててもらえるか？」

そういつてまた出て行く少年。俺はいつまで此処に居ればいいのか。だろうか。

まさか魔術師が帰ってくるまでとは言わないよな？

少年は少年と少女を連れ部屋に戻ってきた。

此処で少年も含め自己紹介をされた。

まず、この邸宅の魔術師の弟子である、明るい赤髪を短く刈り込み、人のよさそうな若干目じりの下がった水色の瞳をしているのがトール。俺よりも身長は10cm以上高いだろう。

もう1人の少年はスコット。身長こそトールと同じくらいだが身長割りに痩せており、ぼさぼさな銀色の髪とメガネをかけた神経質そうな三白眼の髪と同じ銀色の瞳が学者のような風貌をしている。最後の少女は、ソフィアといい、えんじ色といえはいいのだろう。深い紅の髪は腰に届くほど長く伸ばしており、鮮やかな青はまるで瑠璃のような宝石を瞳に埋め込んだようだ。

……少女の身長すら俺を上回っているのは正直羨ましいとしか言いようがない。

と、その後に俺の自己紹介をすると俺が男ということと9歳という年齢に驚かれた。心外な。

その俺の表情に気付いたトールが慌てて同い年とは思わなかった

からと弁明をする。

まあ、いい。俺もそんなことで怒るほど子供ではない。侮蔑の表情も浮かんでいない、怒る理由はないだろう。

「あのポーシヨン売りが男でしかも同じ年とはね。いや、そう考えると多少の納得はいくかな」

どうやらスコットはあの時その場に居て騒動を見ていたそうだった。それでトールが何か言いたそうだったが、あえて気付かない振りをして改めて彼らの関係を聞く事にした。

「あたしたちは幼馴染なんだよ。もう1人ホントはいるんだけど、今日はあたしとコットだけ」

嬉しそうに少女は言う。仲がいい証拠なのだろう。コット、というのはスコットの愛称なのだろうか。

「なるほど。……家庭教師のようなもの？」

「そのようなものだな。僕とソフィアは学園に通うための学問を習っている。」

それも元々トールが僕たちをハツフル師に引き合わせたのが原因だが」

ハツフルというのはあの魔術師の名前だそうだった。

それも家名で本名は長く複雑なため、ほとんどの場合家名しか名乗らないそうだった。

ある日遊んでいた、もう1人の幼馴染と一緒に、既に弟子になっていたトールの紹介でハツフル氏と出会い、偶然全員が魔力を持っていたためハツフル氏がまとめて面倒を見るようになったとのこと。

しかも、合格すれば学費などはハツフル氏が持つてくれるため魔法学校への受験の準備をしているそうだ。

普通ならそんなおいしい話は裏がありそうだが、ハツフル氏は楽しそうなことにはお金を惜しまないタイプの人で、幼馴染が全て魔術師というのは面白そうだ、ということだけで決めてしまったそう
だ。

お金は後で出世払いで返してくれば良いから、と受験の手続きももう済ませているらしい。

1人最低でも卒業するまでに学費で金貨70枚もかかるところをよくも4人も。合計、白銀貨2枚と金貨80枚。

どれだけ金持ちなんだよ、と思うがハツフル氏は元々この国でも有名な一家の生まれで、自身もそこそこには知られている魔術師のため、お金に困るような生活は行ったことがないそうだ。

魔術師自体なるためには狭き門で、なってしまうえば生活するに困るようなことにはならないし、上手くすれば一年で白銀貨4枚など、平民の倍は稼げるそうなので先行投資とすれば安いものだ。とハツフル氏は言っていたそうだ。

つまり、面白さと自分の実益を兼ねたもので単なる享樂者ではなさそうだ。

そんなわけで幼馴染4人は揃って魔術師になることを決意。

魔術師自体、子供の人気職業の1つであり、憧れのためなれるものであればなりたいたいものだそうだ。

だから日々教えを請いにこの邸宅に足しげく通う。たまにこうやって留守のときもあるが、その時は自習をしたりせめてのお礼として部屋の掃除をするそうだ。

元々、ハツフル氏は大の面倒がりでおかつ、住み込みの使用人を嫌う。

なら通いのものかというと、給料が安く変人のハツフル氏の奇行に耐えられず逃げ出すこと数回。

その後はツールを使用人代わりにこき使い、幼馴染たちもそんなツールを見ていられず感謝もあつたので手伝うようになったそうだ。

それにつられるように俺の話をしたら何故か引かれたが。

俺のバイトは異常らしい。簡単にしか話さなかったが、朝から夜まで働き休みが週に1日でしかない。

成人して正式にどこかの見習いとなればそれは当然だが、成人する前の見習いとしてはここまで働かされることはないそうだ。

日本でも昔の商人などは丁稚だとかで無銭働きは当たり前だと聞いたが。

むしろ、女性や子供は文化が未発達な状況での人権は確保されていること自体珍しいんじゃないのか？

認められているなら大いにそれは活かさせてもらうが。

いや、今はそれが重要ではない。月金貨1枚は安すぎるらしい。

日本円に換算して10万として、月25日労働として日ごとで4000円が。

ただ働いてる時間給で言えば4000円くらいだ。サンパーニヤの現状を考えると別に安すぎる気はしないのだが。

だが工房であればもっと稼げるし、魔術師ほどではないが高給取りで人気職の1つだからもっと稼げるはずだとスコットに何故か諭された。

確かに俺も稼ごうと思えば稼げるが、今そんなにお金が必要とされていないし、自分で稼ぐ手段も持っている。そこまでは説明しないが、一度話し合った方がいいといわれてしまった。

そうは言われても今は大切な時期だし、意見だけはありがたくいただいておこう。

賃金に関してはもう少し経って考え直せばいい。他の工房の収益は流石に確認できない。お姉さんなら案外気にせず聞いてしまう気もするが、俺には出来ない。

そろそろ遅くなったので、と帰ることにしたのはそれから2時間ほど経った後だ。

その間は勉強で使っているらしい教材を見せてもらったり、俺のバイトの話を少ししたり。働いている人間は少ないもの、どちらかといえれば家の手伝いがほとんどだそうだ。そこは家事手伝いと流石にレベルが違うが。

案外俺のポジション売りをしている時の話は面白いらしい。製法や他に何を作っているかは話せないが、色々と質問をされて時間があっという間に過ぎていった。

「何だか迷惑かけただけっぽかったけど、悪かったな」

「ソラ、もう傷はだいじょぶ？ もう少し休んでかないでへーき？」

「歩ける程度ならもう帰ってしっかりと休んだほうが良いだろう。無理はしないようにな」

それぞれからいたわりの言葉を貰い、大丈夫とだけ伝え屋敷を後にした。

帰って母から心配されたのは想定済みだったから特に問題ない。レニに心配され、涙目で「おにーちゃん、いたくない？」といわ

れたのは心が痛んだが。

結局、その日は早くに寝かされ、町に来てはじめての休暇は幕を引くこととなった。

起きてまだ違和感がするため、食事の準備は出来なかったが母が小遣いを少しくれたためそれで昼を買う事に決め、朝だけ摂って鞆を引つ掛けて出かけることにした。

鞆がなければ色々と運ぶのが不便なのだ。食事を運ぶためだけにあるわけでもない。

「おはよう、お姉さん。もう準備できてたりする？」

「おはよ、ソラクくん！ って、どうしたの?! その手!」

ほぼ大丈夫だったが、念のため包帯だけは巻いていたのだ。まだ微妙に違和感が残っているし。

「転んで怪我をしただけ。荷物を運んだりすることには問題がないから。」

お姉さん、ポーションベルトが4本もあるけどどうしたの？」

この前は1本しか作らなかった。既に卸し元でも見つけたのだからか？

「あ、家で暇だったからつい作っちゃった」

あはは、と笑うお姉さん。いや、休めるときに休まないと休む夕

イミングをなくしてしまうんだが。

「次からは無理にでも休むように。出かけるでもいいし、家で何かをするでもいいし。仕事は出来るだけ考えないように」

でないとお姉さんのことだ。色々考えすぎてパンクしかねない。

「ソラくんがそういうならそうしてみるけど。けど、私にとって、このお店のことは大切だから」

「それで無理してつぶれないようにね。さて、今日の割合はどうする？」

ポーションを並べる比率も決まり、今回は何故かポーション瓶の納品にエイナさんがやってきた。

どうやら前回のことを気にしていたらしく、わざわざ運んできてくれたそうだ。

今回はお姉さんがきちんとその場で確認をし、エイナさんにお礼を言っている。

それから、ポーションの持ち運びに対し、何かいいアイデアはないかと話を持ちかけられた。

持ち運びの際に割れてしまうことが少なくなき、そのたびに交換する、あるいはその分は取引から除くことも多いため取引する量が多いほど効率が落ちるそうだ。

グルンダの工房にもサンパーニヤのポーションベルトのことが知られているらしく、わざわざそれで話を聞きに来たそうだ。

それに関してはこれから露店を出さなければならぬから、とい

うことで話は終わった。

と、受け取りも済み、後は運ぶだけなのだが。

手を怪我してるなら無理をするな、とお姉さんに言われてしまい、鞆にポーシヨン5本とポーシヨンベルト、それに地面に敷く布と符を両手に抱えるだけで店を追い出された。

その後、何度、店と広場を行き来するお姉さんを手伝おうと言おうが頑なに断られてしまい、仕方なく店番をして待つことにした。

その後は評判を聞きつけたのか、朝それほど経っていない時間だというのに人が集まり品物を見る見るうちに売れていく。

中には高くても良いから売ってくれ、という人が居たが値を上げることもなく売る。

「本当にソラが売ってるんだな。これだけしかないのか？」

「千客万来、いつもより速いくらいだけどね」

ツールが来た時点で残っているのは白色が1、緑が5、黄緑が4だけだ。

2時間も経っていないのにこれだから、販売量を増やしたいところだがもう少し様子を見ないと危険だろう。

あるいは他の商品も置くか。指輪はサイズ直しの必要もあるし、調整可能な腕輪の方がいいか。

鋳型は既に出来ている。後は鉱石を確保すればいいだけだ。

「ソラくん、お友達？」

「一言で言うと、被害者と加害者？」

間違つては居ない。包帯をしている左手をぶらぶらと揺らすとお姉さんがツールを睨む。

「間違つてないけどっ！ ほら、お姉さん睨んでるし、ちゃんとした説明をしてくれ！」

ちゃんとした説明も何も。それ以上いうとより印象は悪くなると思っぞ？

「うちのソラくんは何してくれてるのかな？ 職人の腕は黄金より価値があるんだからね？」

静かに怒るお姉さんは正直怖い。俺もそつと視線を外すことくらいしか出来ない。

「ソラ！ 頼むから助けてくれ！」

「お姉さん、そのくらいで。人目もあるから。ツール、それでどれだけ入用で？」

そつと手を握って落ち着かせる。お姉さんは手を握られるのが好きらしいのだ。

ポイントは人が居るところでも見えないようにそつと、らしいのだ。良く分らないが。

「そつだな。じゃあ…それぞれ1個ずつくれ」

「では、合計で金貨1枚です」

にこやかに笑うお姉さん。ただ、口は笑っていないし、声も冷たい。

「そっか。ならこれで、はい」

そうやってトールはバカ正直に金貨を1枚取り出し、渡そうとする。

「トール、それはお姉さんの冗談だ。本当は銀貨5枚と銅貨10枚だよ」

にしても、何故お姉さんは急に20倍近くのぼったくり価格を言い出したんだ？

「そうなのか？ 効果が高いからってそれくらいするものかと思ってただけだ。」

「いいや、ほら。銀貨5枚と銅貨10枚」

トールから改めて正しい金額を受け取り、ポジションを渡す。

お姉さんが何故か不貞腐れているが露店を出している最中はあまり不機嫌になられても困るのだが。

「あー…何かやっぱまずかったか？」

「トールはあまり気にせずに。と、お客様が来たようなので……父？」

トールの後ろに人が立ったので見上げてみると、そこには父と何

度か来ている猫の獣人のフィリップ氏だ。

何故この2人が一緒に？

「やあ、ソラ。こんにちは、ミランダさん」

「は、はいっ！ こんにちはです！」

どうやらお姉さんは父が苦手らしい。2度目なので慣れてもらいたいところなのだが。

「あれ？ 知り合いだったのか。トニー、あんたの娘って2セアだとか言ってたよな？」

「ソラは僕の息子だよ。うん、2人とも知っているみたいだね。」

僕がこっちで所属している獵師団の副団長に言われて、良いポジションがあると聞いてやって来たんだけどね。

サンパーニヤのことだったんだ」

嬉しそうに笑う父。こっちの獵師団に入ったということはこれで仕事をするようになったということか。いい事だ。

「それにしても、今日は随分と少ないな。もう売れたのか？」

「そうなんですよ。もう日ごとに売れるのが速くなって、今日なんて休む暇がないくらいだったんですよ！」

今日は随分とお姉さんも頑張ってくれたし、昼前には売り終えられるだろう。

売り終わったら昼食を摂ってグルンダの工房にでも顔を出せばいいだろう。

何かいいアイデアももらえるかもしれないし。

「そうか。そりゃ良かったな。うし、なら残りの分は買っちゃまうぞ」
父とフリリップ氏の2人であれば残りを売っても問題ない。

お姉さんも異論なく、残りを銀貨11枚と銅貨90枚で販売した。

「本当に売れてるみたいだな。…何か甘いにおいもするし」

トールは父たちが来た時点で少し立ち位置を横にずらしている。
目の前に立たれても商売の邪魔だしな。

「まあ、そこら辺が人気の秘訣だから。父はこれからどうする予定
」？」

「うん。僕は副団長と狩りに行くよ。少し帰るのが遅くなりそうだから、ソラが早めに帰るならクリスマスに伝えておいてくれるかな」

まめな父のことだ。それは既に母に伝えてはいるのだろうけど。

「分かった。父、気をつけて」

手を振って去る父に軽く手を振り返すと、片付けの準備を始める。

「お姉さん、これからどうする？」

「うん、銀行行った後にエイナさんの所かな。ソラくん何か用事あったの？」

「そうでもないけど、トールが何か気にしてるようだったから」

欲しい商品を手にしてすぐ帰らないのはそういうことだろう。探るほどではないが、こちらをちらちらと気にしているようだし。

「あ、いや。何でもない。もし良かったら昼でも一緒にしないかなって思ったただだからさ。それじゃ、また」

返事も聞かずツールは走っていく。急いでまた誰かにぶつからなければ良いけれど。

「なんだ、あれ。まあ、いいか。お姉さん、昼先に行かない？」

「あれ？ ソラくんが用意してくれてるんじゃないかな？」

「俺はお姉さんの専属シェフでもないからね。食べた後、工房に寄ってその後は鍛冶師ギルドにでも寄ろうと思っただけだ」

不思議そうなお姉さんに釘を刺す。というか、お姉さんには料理も教えなければならぬのだろうか？

俺が教える料理だと色々と愉快、もといまずいことにはなりそうだが。

「そ、そうだよ。うん、ごめん。私勘違いしてた」

言わなければそのうち俺は職人は職人でも、パン職人がシェフにされていたに違いない。

やはり対話というものは重要ということか。

その後、宣言通りに食事を摂り、少し余裕を持って手元に資産を残した上で銀行に預金をしてグルンダの工房へ寄った。

そこでそれぞれアイデアを出しているのだが上手く行かない。

エイナさんは元々割れて仕方ないと思っていたし、俺のポーシヨンベルトがなければそのままだっただろう。

お姉さんも同じだ。言われたことは注意するが、何をどうやればいいかという発想はまだあまりない。というか、新しいアイデアなんてそう出るわけもないだろう。

それにより2人の視線は俺に飛ぶ。といっても、ガラスなんてどうやって梱包されてたっけ。精々パッキンに包まれてたくらいで……いや、待てよ。前に引越しのバイトしてたときに食器だのを専用の容器に詰めてたことあるよな。

ただ、それは割れづらいように柔らかいクッション材で覆われてたし、いちいちそれを使うにしても工房によっては保存法のないところだってありうるし、個人だったらなおさらだろう。

とすると、コストが安く収まるようなもので、収納と持ち運びを別々に考えて。

きよろきよろと工房内を見渡すと、目に付いたのは合板に使うのか、木の板が何枚も置いてある。それも、端材なのかえらく短いものが何本も。

木、支える、接点、触れない。これならいけるか？

「エイナさん、この木の板使っていていいですか？」

「構わないよ。それは後は燃料にしちゃうだけだから。でも、それで何をするのかな」

エイナさんは興味津々といった具合で俺を見る。どういったものが出来るか楽しみらしい。

俺が作ったのは板の幅半分くらいまで切り込みを何本も入れたものを幾つか。それを上下にあわせ、切り込み同士を差し込ませ、くつつける。

それを何枚も重ねると、出来上がるのは斜め格子になった板の集合体だ。

板の長さや幅はそれぞれ別だったため、幅だけ合わせ、あとは長さを調整しながら差し込んで行った。

そこにガラス瓶を何本も差し込んでいく。すると、格子の間一つ一つにガラス瓶が納まり、多少振ってもガラス同士は擦れ合わない。間隔を密にせず、強めに振らなければ割れないはずだ。

それと、それを持ち運ぶものにも工夫をする。

金属の箱のようなものがあればよかったが、今回はそれもなかったため同じく木の板でとりあえず代用することにした。

箱を作り、中に段差を作る。これに先ほど作った斜め格子の板を引っ掛ければガラス瓶は宙に浮き、下とも直接当たらない。

本当は稼動式にして板の大きさに合わせ調節したいが、それには金属のレールを作る必要がありそうだったため、今回は今のサイズに合わせ仮で作った。

格子も板を合板にして厚みを増せばもっと密度を高めても触れ合うことはないだろうし、それに取っ手かなにかつければ取り出せるだろう。

ちなみに、これは取り出したあと傷の有無を確認しやすいよう板の長さは瓶の半分もない。持ち上げ、平坦な板の上に置けば上下の傷の有無が分かるだろう。

後は入れ物も今回は分かりやすく木の板で作ったが、こちらも工夫次第ではどんな風にでもなるだろう。

で、その光景を見ていたエイナさんは、俺にこれを鍛冶師ギルドに登録するよう言ってきた。

俺は首を傾げたが、お姉さんは納得いったのか目を輝かせ首を縦に振っている。

ギルドには1つ特徴がある。それは技術の売買だ。新しい技術を登録すると、それに応じまずは報奨金が支払われる。

その後、ギルドを通じ所属しているメンバーに販売される。その売り上げの一部が登録者に支払われるそうだ。

ポーシヨンベルトも含めると、そこそこの売り上げになるはずだ、とエイナさんは言う。

ただ、それだと一度売った情報が他のメンバーに無断で流れていくんじゃないか、と思ったが、後で自分が登録をしたときに損をしたくないためあまり露骨にはされないとのこと。

分かりやすいが、人の考えることはそんなものだろうと納得しておいた。

エイナさんにお礼をいい、その足で鍛冶師ギルドへ。

俺の登録と道具の登録、そして素材の購入のためだ。

俺の登録は、審査があるため後日になってしまったが道具はポーシヨンベルトがそこそこ有名になり始めていたため銀貨10枚と安かったが即登録。

ポーシヨンの持ち運びの道具に関しては発想がユニークだという

ことと、斜め格子、そして書いた設計図のこともあり、何と金貨10枚。

ポーシヨンの持ち運びはグルンダの工房以外でも問題になっており、何度が改善案を依頼されていたため、これならその問題をクリアできる。と、その値段になった。

ちなみに、開発者のことは秘密にされるらしい。公表してその人が開発意欲をそがれたらそれはマイナスでしかない。当然の措置だろう。

これならパンも同じように登録しておけばいいんじゃないかとも思ったが、石臼も脱穀機もすでに存在しているし、食品に関しては登録できないそう。理由は昔トラブルがあり、国が禁止しているとのことだ。

そしてそのお金はそのままお姉さんの銀行口座に。

お姉さんは俺にお金を渡したがっていたが、あくまでもサンパーニヤのためであり素材を買うためだから、と納得してもらった。

だからこそ、当初思っていたよりも多めに鉱石の仕入れはしたが、こちらは後日サンパーニヤへ送ってもらう予定だ。

その後も露店や鉱石商、宝石商を回って必要なものを買っていく。今日だけで金貨7枚飛んでいったが、そこそこ必要なものは手に入れられた。

後は重い荷物を何とか2人で協力して店に戻った。

お姉さんは俺に荷物を持たせなくなかったようだが、お姉さん1人で持てる量じゃない。

そこは2人で協力するべきだ。

戻ってきた俺たちがすることは、鉍石の整理と薬草などのポーシヨンの材料の残確認だ。

特に、果物に関しては日持ちするものも多いが、中には腐りやすいものもある。何故かポーシヨンにすると関係なくなるが。

それらの消耗次第では明日も買出した。

鉍石を扱うには難易が低いものから順に、道具に慣れるためにもお姉さんにもやってもらうが原石を溶かし不純物を除いて塊にするのが第一目標だ。

とはいえ、俺にそこら辺の仕組みはともかく、工程の流れの名前などは詳しく知らないから作っていくのが優先だが。

それがすむと、俺は新しいポーシヨンの調査、お姉さんは特製ポーシヨン（白）と（黄緑）の調査。

緑はまだ余裕があるがその2つに関してはもうストックがあまりない。こちらの調査に関してはお姉さんに任せても問題ないだろう。一応様子は見ているが。

仕事が終わりに、お姉さんに上がることを告げると町に出る。

調査し、試飲したポーシヨンで傷も癒えているし、違和感もなくなったが念のため包帯は巻いている。誰か知っている人に見られたらあまりよくない。

ポーシヨンを飲んだといえはいんだろうが、そこはそこだ。

と、中央広場に足を進めると昨日見たばかりの三白眼が佇んでいた。

どこか元気もなく、あまり生气も感じない。

また面倒に巻き込まれるかな、とは思ったものの。知り合いが困っているようだ。話だけでも聞いておこう。そう決めると、スコットに足を向けた。

第10話 詠唱術と魔法学園生徒候補たち。(後書き)

今回はだいぶ悩みました。

書いては消して書いては消して。

それも醍醐味の1つなのでいいのですが、少し時間がかかった気がします。

物語はまだまだ続きます。速度が遅いということもあるのですが。

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

2011/9/19

誤字等を修正しました。まーや様ありがとうございます。

さらに修正を追加。社怪人様、独言様ありがとうございます。

2011/10/6

誤字等の修正を行いました。FACEさま、パーセニーさま、ご指摘ありがとうございます。

2011/12/9

表記を鍛冶ギルドから鍛冶師ギルドに統一

第11話 奪還作戦！（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

第11話 奪還作戦！

憔悴した様子のスコットを、中央広場から少し離れた路地にまで連れて行く。

夕方、多少人の流れは少ないものの、あんなところで立ち尽くしたままでは危ない。

ただ俺に手を引かれるまま、というのは少し気になるが。

事情を聞かなければ何が起こったかわからない。

スコットの話を書くには（理性派らしきスコットにしては意外だが）混乱していたのか、時間を必要としたが、それでも話を聞き出すことに成功した。

彼曰く、魔具がなくなった、とのこと。

それならばハツフル氏にお金の無心をすればいいのではないかも思うが、彼が使う魔具は特殊なもので、新しいものを手に入れるかどうか不明なのと、それ以上にお金を借りるのは流石に返す見込みもないため出来ないそうだ。

スコットの使う魔具は黒鉄くろがねのネックレス『闇の訪れ』という中級の魔術まで使える高級品らしい。

何でそんな物を無くしたんだ、と呆れはしたが、どうやらチェーン自体脆くなっていたため、普段は上着のポケットにしまっていたが、どこかで落としてしまったそうだ。

他の幼馴染3人はスコットから無くすまでの行動を聞き、それで範囲を分担して調査しているらしいが、気付いたのは今日の昼ごろ

で、今のところ見つかったという情報は入っていない。

ちなみに、落し物として届けられていないかどうかは既に自衛団の詰め所に行きそこで確認はしているが、今のところ届けられては居ないそうだ。

此処で俺には関係ない、と引き下がることも出来るのだが。

不幸なことが起こったという相手を見捨てることは俺には出来ない。

それが度々であれば考えるが、ここまで憔悴しているところを見る限り、そうではなさそうだ。

そもそも、何故憔悴しているかといえば、それがなければ魔術の訓練も出来ず、魔術師の道も閉ざされる。そうなると借金返済どころですらなくなるから、だそうだ。

手伝うことにした俺だが、あまり遅くなって家族に要らぬ心配をかける必要もない。

スコットとは別れ、一度家に戻り、報告だけはしておいた。

その後はすぐ合流、人通りの多い場所を重点的に落し物と、あと不審な人物が居なかったかの聞き込みを始めた。

黒いネックレスなんて珍しいものが人目につく場所に落ちているのであれば誰か見つけているだろうし、善良な人であれば届けてくれるだろう。

ただ、そうでない場合はそのまま自分のものにする可能性なんて十分にあるし、魔具だと気付かずとも売り払う可能性は高い。

その可能性もあり、まずは買取をしている宝石商や装飾品店にも出向いたが、今の所そういったものは見つからない。

それに商人に話を聞く限りでは、そういったものは市民に関して

はほとんどの場合、自衛団に届けるそうさ。

理由としては、盗人は酷い罰を受けるし、町での生活もそれが原因でし辛くなる。

誤魔化そうにも売っている間に持ち主が来て、それを盗品だと言われてしまうと買い取った商人側にもダメージがあるため、ある程度の身分の証明は必要なのだそうさ。

そのため商人も買い取る場合はそれなりの審査が必要らしい。とはいっても万全ではないそうだが。

よく俺が魔具を売った時そうだったことにならなかった。あの受付の男に感謝すべきか？ いや、騙し取るうとした男に感謝するのもおかしな話だ。

ともあれ、今の所売られた形跡も誰かが拾って届けた形跡もないとなると、誰かが拾ってそのまま自分の懐に入れた可能性が高い。可能性としては子供が持ち去ったか、あるいは時たまいるらしい他の町からの流れ者が拾った可能性が高い。

町に入れないのはモンスターが重犯罪者くらいなもので、ゴロツキ程度なら町の外れのほうで、少なくとも人数が巢食っているらしい。

ただ、何か騒ぎが起こればすぐ自衛団や騎士がやってくるため、コソコソと生活するのが精一杯だそうさ。

というわけで、そんなゴロツキが居ないかどうか聞き回る。

子供が黙って持っていった場合に関しては、親が見つけければ自衛団に持っていくだろう。それなら数日もあれば手元に戻ってくるはずだ。

そして、全員と合流したのはもう日も沈み、暗くなつてからだ。そこで俺は彼らの4人目の幼馴染、アンジェと顔合わせをした。彼女は幼馴染の仲でも一番背が低く、緑の髪もツールに縛り上げ、どこか他の面々よりも幼い印象を受ける。同じ色の瞳も焦つてはいるんだろうがぼやんとしていてどこか危なげで守りたくなる印象を受ける。背が低いといつてもそれでも俺より高いんだが。

そこで交わした情報としては、普段見慣れない男が何名か中央広場周辺をこの数日ぶらついている、ということだ。

1人は俺だったのはみんなには黙っておこう。説明もしきれないし。

そして、有力な情報としてはそんな男の中で1人、ずいぶんとぼろぼろの装束を纏つた男が中央広場から外れた、だが2番目に活気のある通りで営んでいるアクセサリ売りに黒いネックレスを売りに来たらしい。

アクセサリ売りは男の素性も分からないし、そんな高価そうなものは買取れない。というところ立しそうに去つて行ったそうだ。

その男が犯人かどうか分からないが、現状では一番有力な情報だ。スコットとトールは今にもその男のねぐらを探そうとしたが、俺が制した。

夜、子供がこれ以上出歩くのは拙い。特にこっちはソフィアにアンジェと女の子を2人も連れてくるのだ。

そういったものが集まる場所は治安もよくないだろうし、夜ともなればさらにだ。

2人をそう言つて説得するとまた明日の朝、中央広場に集まり作戦を練ることにする。

お姉さんには悪いが、こちらはあまりのんびりとはしていられな

いだろう。

普通の宝石商などには売れないだろうが、売るだけなら手段は幾らでもある。

売ってしまったているのであれば取り返すのは難しいが、夜に行動するのはデメリットがありすぎる。

俺が単独で行動するならまだしも、それをするのはよしておこう。彼らは俺をポーション売りの売り子としてしかまだ見ていないだろう。

そんな中、取れる手段があるのにそんな自分の力を見せるのは意味がないだろう。

女の子を無事に送り届けるのが男の仕事だ、とトールとスコットに言っただけで家に帰る。

「そんなわけで、犯人は恐らくその男だと思う。明日、調べついでに出かけるよ」

「危ないことはしちや駄目だからね？ 危なくなったらみんなまとめてソラが連れて帰るんだよ？」

「俺たちだけで行くことはないよ。幾つか当てはあるし、出来る限り安全策を講じる。」

「こんなことで危険な目に遭うのもバカらしいし、回避できることはするよ」

そうやって身を案じてくれる母に出来る限り大丈夫だとは伝える。家に飾っている防具などを持って行こうとも思ったが、あいにくと子供用のものはない。

体格は俺より優れているとはいえ、それでも魔術職希望だ。そこ

まで体力などついてはいないだろう。行動の邪魔になるくらいならまだ私服のほうがいい。

と思っていると母がせめてこれを持っていけ、と何処かから持ってきたかは知らないが幾つかのアクセサリを持ってきた。

それは母が旅をしている時に見つけたもので、防御力の上がるバングルやアンクレットだそうだ。

あまり効果は期待できないが、それでもつけないよりはましだから。と言われ持たされることに。

どれもDEF+1や2程度だが確かにはないよりはましだろう。

俺が作っても良いが、どんな効果が出るか分からない。

『レジエンド』の時に作っていたアクセサリは大体、防御力だけで言えばDEF+20以上のものだ。DEX+10のポジションですら驚かれるのだ。それを作るだけならまだしも、使うのは緊急時以外よしておいた方が無難だろう。

母に感謝をし、その日は眠ることにした。明日はそれなりに忙しくなりそうだ。早く寝ておいたほうがいいだろう。

朝起き、朝食を摂るのもそこそこに、いつもより早い時間にサンパニーヤに到着した。

「おはよう。ソラくん。今日はいつもより早いね？」

こんな時間に来ているお姉さんにはびっくりだが。ちゃんと休憩は取っているんだろうか？

「おはよう、お姉さん。お願いがあるんだけど、いいかな？」

首を傾げるお姉さんに事情を説明する。ツールも関係してお姉さんは不承不承と言った感じではあるが、何とか頷いてくれた。お姉さんもそんな盗人は許せないのだろう。あるいは職人として何か思うこともあったのかもしれない。

あと、お姉さんにポーションを持っていくように勧められた。店の品を持っていくのは抵抗があったが、何かあつてはダメだのとでポーション10個を持たされることに。

それと、お姉さんが独自に作ったらしいベルトにひっかけるタイプのポーション……何と言うべきだろうか。シザーバッグとでも言えればいいのか。

革で作られたそれは、中に革の紐がくくりつけられており、そこにポーションを挿し入れられるそうだ。

昨日の俺が言ったポーションの運搬用の箱と鍛冶道具を納めている布、それと元々のポーションベルトを元に考え出したらしい。

これも強度には若干不安があるが、せっかくお姉さんが作ってくれたものだ。

1つで5個ポーションが入られるので、左右に1つずつ括り付け出ることにし、お姉さんに礼を言つと中央広場へ向かうことにした。

中央広場に向かうと、まだ辺りは日が昇ったばかりだというのに4人はすでに来ていた。何かを話し合っているようで、対策を練っているのかもしれない。

「おはよう。俺が最後だったみたいだな」

「おはよう。いや、巻き込んだのは僕だ。来てくれるだけでもあり

がたい」

そう言って礼を言うスコットは昨日に比べ、冷静さを取り戻していた。

時間の経過によって焦ってはいるのだろうが、表面には出していない。悪くない傾向だろう。

「これからどうするの？　ボクたちが話あった結果だと乗り込んで行くだけだけど」

そういうアンジェは外見には似合わず好戦的なのか。暗い笑みを浮かべ、どう犯人を処刑するのか考えているのだろうか。

「それはまずい。相手が単独犯とも限らないんだ。子供だけで出来ることは高が知れている。ハツフル氏に自衛団、後はそうだな。お金があれば冒険者でも雇うんだが、そんな資金も時間も無い。だが、打てる手は打って、万全の対策は採っておくべきだ」

ハツフル氏自身も知名度のある魔術師だ。どういったことが出来るかはわからないが、戦力になるだろうし、氏の力を借りれば自衛団や騎士にも協力を仰ぎやすくなるだろう。

「師匠、そういうのは自力でどうにかしろって言うタイプだから、協力するかどうか分からないぞ？」

「それならそれでも仕方ない。

だが、最初から突貫するのはまずい。相手の戦力すらわかっていないんだ。

やる前に諦めるくらいならやって後悔した方がまだいい。話を聞いてもらっただけなら可能だろう？

そこで力及ばずとも、現状を知ってもらっただけでも後は違っ。なら、話したほうがいい」

「ソラはちっちゃいのに賢いんだねー。わたし驚いちゃったよ」

俺の頭を撫でてくるソフィア。いや、小ささは関係ないだろ。っていうか、ちっちゃい言うな。

「師匠も話は聞いてくれる、かな。今日は1日屋敷にいる予定のはずだし。うん、そこからまずは攻めよう」

「よし。なら交渉は任せたぞ、ツール」

ソフィアの手から逃げ、面倒なことはツールに振る。というか会ったばかりの俺よりも愛弟子からのお願いの方がいいだろう。

スコットでも良いが、こういったことはツールに任せた方がおもしろい。……上手く行くだろう。

何か腑に落ちなさそうなツールを連れて、一路ハツフル氏の邸宅に。

こんな朝早くに押しかけて迷惑にならなければ良いが。

「自分たちでどうにかするんだね」

とはハツフル氏が説明を始める前に投げた一言だ。うむ、断るのが突っ込みをいれなくなるほど早い。

「師匠、俺まだ何も言ってないんだけど」

トールの表情は硬い。応答間で待っていた人間から開口一番聞く

科白ではないだろうから気持ちには分からなくてもない。

「こんな朝早くから君たちが来ることなんてない。それに、そちらの子に関しては一昨日きただけで君たちの深い友人でもないはずだよねえ。」

となると、何らかに巻き込まれて今此処に居る。ともなれば、此処にきたのも何かの頼みごと。一応話は聞いてあげるけど、ほとんどのことは自分たちでどうにかするっていう約束だったよね」

話を聞いてもらえるだけでも良い方だ。とはいえ、そうになると色々考え直す必要があるだろう。

俺のコネはまだまだないに等しい。

知り合いも工房関連のものしかないし、工房主くらいしか話話していない。

後は常連客だが、そちらを巻き込むわけには行かないだろう。

「無くしたものを取り戻すのは難しい。そんな魔術もないわけだしね。そうなると確かに怪しい相手から調査するのは当然だけど、買い直した方が早いよ。それくらいならお金は出してあげる。返してもらったときはそこそこの利子も貰うけどね」

「これ以上借りても返せそうにないし、僕はあれじゃないと上手く使いこなせる自信もないです。ですから、お願いします!」

「そこはなくしたスコットの責任だよな? どうしても協力して欲しいというのであれば。そうだね、昨日ツールが買ってきたポーションの製法。あれを教えてくれたら考えなくもないけど?」

頭を下げるスコットに、退屈そうに答えたハツフル氏の言葉に全

員が俺のほうに向く。

「あれは今の所『魔術工房サンパーニャ』の秘伝のレシピ。工房主の許可も取らずに教えるわけには行かないし、こっちは生活もかかっている。代用の効くそれと秤にかけてどちらが上か。分かって訊いてるんでしょ」

俺は冷たい口調でそう返す。どちらにせよ、考えなくもないという言葉だけだ。

協力すると確約しているわけではない相手にそうそう教えるわけもない。

周りから来る敵意には苦笑するほかないわけだが。

「うん。君は賢いだろうからそういうのは分かっていたよ。だから、自衛団に手紙だけは書いてあげよう。それ以上は、なしだよ」

だから、というのには引っ掛かるが何か思うことがあるんだろう。というかそれでまた面倒ごとに巻き込まれそうな気がするが。暫く時間を稼げば問題ないだろう。

「分かりました……。ありがとうございます」

納得はいかないという表情を隠さなのままスコットは頷く。他の3人に至っては俺を殴りそうな勢いだ。

手紙を書いてもらった俺たちはその足で今度は自衛団の詰め所へ向かう。

「すまない。あいつらも俺のことを心配してくれているんだ。決し

て悪気があるわけじゃないんだ」

怒って先行する彼らの後をのんびりと追っていると、そうスコットにフォローされる。

「悪気があるかどうかの問題じゃないけど、怒ってないからいいさ。ただ、彼らにはもう少し、それで生活している人が居るといふ事実も知って欲しいところだが。難しいだろうな」

俺が知っているだけでもこの町でポーション売りの露店を開いているのは20人ほど。

それで生計を立てている人間も居るだろう。ハツフル氏がもし、それを商人にでも売ってしまえば、買い手は通常のポーションになんて目もくれなくなるだろう。

そうなってしまうえば彼らの生活は成り立たなくなりかねない。

20人全てに家族が居るかどうかは分からないが、居ないわけではないだろう。そう考えるとそれ以上の人間が飢える可能性すらある。

ポーション売りに先に技法を渡さなければ、大量生産可能なポーションは今までのものを全て排除してしまいかねない。

今は販売数を限定しているからこそ何とかバランスを保っている。出来れば製法が商人によって明かされる前に、サンパーニヤも他のもので売り上げを確保しなければならぬ。やることはまだまだ山積みだ。

まあ、そんなことまで説明する気はない。特にスコットは賢い。俺が説明しなくても気付いてくれるだろう。

詰め所にやってきた俺たちは、てつきり門前払いか取り合ってもくれないと思っただが、きちんと対応され、集めた情報を聞いてもらえた。

ハツフル氏の手紙も有効だったようだが、以外にも俺の存在も大きいらしい。

最初に対応してくれたのがジールというのもあるようだ。父の知り合いである彼は自衛団の中でもそこそこの立場であり、信頼も厚い様だ。

それに、この前露店で騒いでいた騎士も居た。

2人とも俺のことを覚えており、自衛団の中でもあのポジションは中々に人気らしい。

時々客の中に鎧を着込んだものもいて、すっかりと俺は自衛団でも知れた存在になっている様子だ。

あくまで認知されているのがサンパーニヤの店員として、というのも中々俺にとっては都合もいい。

「それで、導師の教え子である彼の魔具を取り返すのを手伝って欲しい、か。

確かに、あの辺りに住み着くやつらのなかでそういったことをしでかしそうなのはいるが。

それは確実な情報なのか？」

「それが分からないからこうやって手助けをしてくれる人を探してるわけです。

もし誤認であれば困りますし、事実でも俺たちが突っ込んで行って勝ち目があるかどうか。証拠さえあれば捕縛も可能ですよね？」

「ああ。そりゃな。俺たちはあそこの連中を一掃したいんだが、証拠もなく追い出すことは出来ない。

だから今回のことは俺たちにとってもチャンスだ。
もし、あいつらがまとまって行動しているならむしろ好都合だし
な。

しかし、トニーのやつににて、しっかりしているというか、何
というか。

まあ、そんなやつからの頼みだ。よし、俺の部下を適当に見繕っ
てやる」

利害関係も一致し、ジールは条件に合いそうな人を集めてくれる。
訝しそうな表情でツールたちは俺を見るが、まあ気にしないで置
こう。

「ソラって、一体何者なの？」

「単なるポーション売りだよ」

ソフィアの質問にもそれで答える。ジールは父の知り合いだし、
自衛団で広まっているのはポーション売りとしての俺だ。そう答え
ても問題ないだろう。

「協力してくれてるんだ。これ以上言うと失礼なだけだぞ」

スコットのフォローもどこか白々しいが、まだ出会って時間もほ
とんど経っていない。信頼関係が生まれるにはまだ時間がかかるだ
ろう。

何処となく重い空気が流れ、言葉もなかったが時間は流れる。

今回のために選ばれたのは護衛に1人、偵察に2人、あと突撃用

に3人。それと何故かあの騎士。本人曰く監督役らしいが。

挨拶もそこそこに、12人という大所帯で動くのは流石に怪しまれる。組を分け、行動することにした。

偵察はそのまま2人で先行。護衛と、2人の突撃要員、それと俺。あとは残りの6名。

人数はバラバラだがバランスをとると、これくらいらしい。俺がポーションを持っていることも大きいようだ。

トールたちに、後で返すことを約束させアクセサリを渡すと、別れて行動する。

流れ者たちが暮らす一角、通称ドロ板通りと言っらしいが、大きな入り口が2箇所ある。

今回はその両方から侵入する。最初は目立って仕方なかった鎧を着けたまま出ようとしたのを慌てて止めたのは間違いではないだろう。

俺は軽装になった男たちに挟まれて行動する。

武器はナイフだけだ。ファルシオンは目立つし、振ってしまえば相手を傷つけてしまう。最悪命まで奪いかねない。

そんな度胸は俺にはないし、その結果、家族を傷つけてしまう。出来る限りそんなことはしたくないし、今回に関してはする必要もない。

護衛の男も突撃要員の2人もシンプルな剣だけだ。これくらいなら町を出歩いていてもそこそこ居るし、不自然ではないだろう。

ちなみに俺が持ってきているポーションは白色、黄緑、緑が3本、いざとなったときの黄色が1本。

これだけあれば恐らくは大丈夫だろう。母の持っていたアクセサリの中には魔術品も幾つかあった。いざとなればそれを使ってもいい。

使える回数が少ないため、使用は控えなければならぬが。

そして、進んでいると、急に小道に先頭の男が入った。付いていってみると、そこには先行していた偵察の男が居る。どうやら男の視線の先にあるボロい家が目的の場所らしい。

その家は1階建ての、半分廃墟と化していて中には男が3人、リビングに当たるであろう場所で魔術品を前に酒を飲み交わしているそうだ。

男たちは盗んだものがどうだとか、売り捌く方法だとかを話していたそう、捕縛は可能なようだ。

そもそも何故場所が分かったのか、どうやって忍び込んだのか疑問は尽きないが今は聞いている暇は無い。

トールたちと合流次第、どうするか決めよう。

というか、俺たちはこのまま戻って自衛団の応援を呼んだほうがいいと思うんだが。

と、上手く行くはずもなく。合流し、話をしても自衛団や騎士の面々は賛成したがトールたちは賛成するはずがない。

此処まで大事になればスコットだけの問題じゃないと説得する俺に対し、魔術が使えるから足手まといにならないと主張するトールたち。

そんなに怖いなら帰っていいんだよ、というアンジエにカチンとは来たものの。俺を帰すために護衛や突撃要員を減らすわけにも行かない。

今控えている偵察に補充人員を頼むと、トールたちに絶対突入したり、危ないことをするなど言いつけ俺も残ることにした。

前では、身体を鍛えるためにこの歳で一通りの運動はしていたし、それなりに喧嘩もした。

合気道の真似事も齧っていたから自衛だけで言えば俺も何とかな

るとは思つ。

いざとなつたら囿となつて逃げればいいだけだ。逃げ足は誰にも負ける気はしない。

魔術が使えるからといって、ツールたちは気楽だが実戦経験はなさそうだ。

この年齢にしては落ち着いてはいるが、使えるということと使いこなせるということの違いは理解していないだろう。

俺が守るなどとは決して言えないが、危ないことに巻き込まないようにはしたい。

此処に居る時点でそれはある意味不可能といえば不可能だが。

「俺の合図でお前たちは回りこめ。突入したら逃げ場の封鎖と身柄確保。」

家の中で確実に行動不能にしる。窓から1人、裏側から1人、俺と正面に1人。

「お前は子供たちに怪我をさせるな」

騎士の指示で役割を決めて行き、指定の場所に移動していく。

俺たちも危ないから少し距離を取る。もし何かあったとき困るだけだ。

相手は3人だが、4人……いや、室内に潜んでいる偵察も含めれば5人か。

それだけでは少し不安だが何とかなるだろう。あとは騎士たちの力を信じるだけだ。

あとで人数も補充される。それを待ってもいいんだが、そうしているうちに他の者たちに気付かれ乱闘騒ぎにでもなつたら収拾が付かなくなる。

「よし、突入！」

その言葉と同時にドアが蹴破られ、窓枠がぶち破られ、騎士たちが家に突入して行く。

少し離れた場所に移動しているため内部の様子は窺えないが、叫び声や何かかひっくり返るような音がする。拙いなこれは。

逃げ出そうとする人間は今はいい。どうせ後で戻ってくるだけだろう。

ただ、それに乗じて俺たちを襲ってくるやつらが居ないとは限らない。

護衛1人だけなのは少し、というかだいぶやばい。

『気配探知』を使い、周囲を警戒し、敵が接近次第対応出来る様にする。

トールは呆気にとられていたが、俺の姿を見て慌てて周囲を観察、警戒を始める。

ソフィアもアンジエも、それに引き摺られるように周囲をきよろきよろとし、不安そうだ。

スコットに至っては魔具がないのが不安なのか、オロオロするばかりで現状戦力のカウントにすら出来そうにない。

今は護衛の人間と俺で4人を挟んでいるような状態だ。

魔術職の俺が護衛とは随分と不適切な役割だが今は仕方ない。

彼らの危険を排除するには現状一番適切ではあるんだろう。

俺が今使えるのは、鑄鉄で出来たアンクレットから発動できる『シールドLv.2』くらいか。

他は逃走用だったり支援のものだったり。此処で派手なものはいづらい。守ることを優先したほうがいいだろう。下手に支援をすると戦い始めかねないし。

と、正面の扉から男が1人飛び出し、こちらへ走ってくる。男の首元には黒いネックレス。それと右手にはショートソード。首のあれがスコットの魔具だろう。

それを見つけたスコットは慌てて飛び出そうとするが、護衛が止める。

何の攻撃手段も持たない子供が相手をして勝てるものでもないだろう。

とはいえ、護衛がスコットを止めてしてしまったため、実質相手を出来るのは俺とツールたちだけ。

とはいえ、男が持つ刃物に怖気づいたのか、誰も魔術の詠唱をする気配はない。

仕方なく俺が対峙すると、男は容赦なく俺に狙いを定めショートソードを逆手に持ち走ってくる。

俺を殺せば逃げられるとも思ったのだろうか？ 全く、舐めてくれる。

「敵を退ける力をつ『シールド』 発動っ！」

こちらの言葉で唱えた力は、魔術品を通して現実となる。

威力と場所を抑えたそれは見えない線となり、男の両足を打つ。

男としては急に太ももの辺りに見えない棒が現れたようなものだ。抵抗する手段はなく、走ってきた加速度も生かし、男は頭から地面に強烈なダイブをする。

ズシャーっという音を立ててすべる男に対し、頭頂部を思い切り蹴り抜く！

幾ら貧弱な俺でも、男の加速度と遠慮なしの力を箆めれば男の頭を思い切り揺らすことは可能だ。

やり過ぎと言われるかもしれないが、剣を持ち出したんだ。それ

くらいは許されるだろう。

念のため、鞆からナイフを取り出し、倒れこんだ男の首元に宛がう。詠唱をされてもその間に喉くらい潰せるだろう。

「ったく。あまり手間をかけさせるなつての」

男が気絶しているのを確認すると、念のため呼気だけ確認し、首元から黒いネックレスを外す。

騎士たちが突入してきて慌ててつけたのだろう。止め具は壊れかけていたが。

「おい！ 大丈夫か?!」

ようやく補充部隊なのか、ジールが走ってくるのを確認し、息を吐く。

小競り合いが始まっているのか、回りは騒々しいため安心は出来ないが。

結局、自衛団や駐在騎士のほとんどを投入して終わったそれは、捕縛者20名を超える大捕物になったそうだ。

正直やりすぎだとは思うが、組織だっていない彼らを捕まえるにはこうやった方法が一番なのだそうです。

立役者として表彰したいと言ってきたが、俺は当然固辞。

俺がしたのは単なる提案に過ぎず、実働は騎士や自衛団だ。

元々はスコットがきっかけだし、表彰したいのなら彼らを表彰してやって欲しい。

魔法学校に行くのであればそこその箔になるだろう。
むしろ大したこともしていないのに目立つのも、噂になるのも勘弁して欲しい。そのため秘密にして欲しいと頼んだほどだ。

終わったのは既に昼を過ぎた時間だ。動き回ったこともあったので昼を摂りに中央広場へやってきた。

ちなみにそれまでの道中で貸したアクセサリは回収している。

俺のであればそのままあげてもいいのだが、今回は母からの借り物だ。

俺は前のリベンジでチユロスとあとはパニーニ、それと適当な生絞りのジューズだ。

それを持って広場の端の方にあるベンチを確保し、座った。

と、付いてきた一行の様子が何かおかしい。いや、事件が終わってからもずっとそんな感じだったが。

まあ、あれだろう。日常的に騒ぐことはあっても、剣を自分たちに向けられることはない。

それで今更だが恐怖心が勝ったのだろうか。俺も、熊やトラに襲われる経験をしなかったら怖かったに違いない。何故日本でトラに襲われたかは今でも不思議で仕方ないが。

そんなわけで飯でも食って落ち着け、と言ったら何故か頭を下げられた。それも全員から。

何か何処かで見たとような光景だな、と思ったが、こんな所で頭を下げられても困る。

いいから飯を食え、と言ったら洪々食べ始めた。

その間に話は聞いたが。

彼らは俺をバカにしていたそう。まあ、態度から考えるとそうだろうが。

ハツフル氏からの提案を断る、作戦には消極的、そもそも態度もよくない。

自分たちなら戦える。相手を圧倒できる。そう考えていたのに、結局何も出来ずに居ただけ。

俺の行動はやりすぎているところはあるとは思ったものの、結局最終的に正しいのは自分たちじゃなかった。

だからごめんなさい、と。

「別に気にしてないよ。俺もツールたちの立場なら同じことを思っただろうし。」

「そもそもちゃんと言ってなかった俺にも原因はあるんだろうからな」

「でも、ボクは怖いなら帰ればなんてことも言っちゃったんだよ？」

「怒るでしょ、ふつうっ」

怒られても俺が困るんだが。

「気にしてない。つーか、俺は俺がしたいことをしただけだよ」

というか、微妙に自分たちを悪く思いたいだけなんじゃないかと思つのは俺の気のせいだろうか。

これを機会に改められる部分を改めてくれればそれでいいんだが。

「そうは言われても、僕はこれの礼もある。そのままでは気がすまないんだ」

スコットは渡したネックレスを大事そうに見つめる。それほど大事にしているんだから今後はなくさないようにする、はずだ。

「気がすまないと言われてもな。じゃあ、あれだ。友達になって欲しい」

4人の頭に疑問符が飛び交うのを見て俺は笑う。予想もしては居なかったんだろう。

だが、あまりの反応過ぎておかしい。

「何でそうなるのー？ だって、迷惑かけたのこっちだよ??」

戸惑っているのか、ソフィアの顔は強張っている。

「俺は今まで大人の中でずっと暮らしてきて、あまり同世代の人間との付き合いが分からなくてさ。

だから、利用すると言ってしまうばそれまでなんだろうけど、付き合ってくれれば助かる。無意味な上下関係なんてばかばかしいし、今回のことで変な意識持たれても困るから。

それなら友達の方がよっぽど有意義だろ?」

友達は対等だろ? と言葉を加えて。

「ソラがいいなら俺は構わないけど、本当にいいのか?」

「ああ。それでいいんだよ」

出来れば本当の友達になりたいが、それは無理になるものではなく自然になるものだと思っている。だが、ある程度きっかけは必要だ。

今回は特殊な状況を利用させてもらっているが。……そうでもない友達すら作れないかと思うと目の端が熱くなりそうだが。

どちらにせよ、機会は作った。後どうなるかは今後の展開次第だ。

「何かちょっと納得できないけど。ソラがそうしたいなら、ボクもそうしたいと思うよっ」

他の2人もどこか納得しない、という表情は浮かべながらも頷いてはくれた。

特にスコットは顕著だ。恩人として俺に感謝してくれている分、友人というのはしっくり来ないのかもしれない。

「じゃ、家族に無事を知らせてこいよ。どうせ碌に話もしてないんだろ？」

声を詰まらせるそれで答えは分かった。普通はそんな危ないところに送り出す親は居ないだろう。

うちの母ですら散々渋っていたのだ。他のところでは尚更だろう。幼馴染を大切に出来るのは美德だが、あまり心配をかけさせるなといたい。

人のことを言えないからこそ俺がそれを声に出すことはないのだが。

存分に怒られて来い、と笑って送り出すと恨めしそうな顔をしてとぼとぼと帰路につく幼馴染4人組。

さて、俺は心配をかけた相手に謝ってくるか。

「ソラくん、大丈夫だった?!」

そうやって俺の姿を確認すると不安そうに駆け寄ってくるお姉さん。

「ああ。この通り。俺はポーションすら使わなかったよ」

とはいえ、自衛団で何人が傷ついた人が居たから大盤振る舞いをしてきたが。

それも販促活動の1つだ。実際の使用による体験と、今回の事件で使われたという事実があればそこそこの集客効果はあるだろう。

後は本格的にサンパーニヤの魔術工房としての活動を始めればいい。

そのためにはお姉さんの努力も必要だが。

「ソラくんのことだから大丈夫だと思っただけだ、もう危ないことはしちゃ駄目だよ?」

心配も俺の言葉で飛んだのか、めっと言いながら指を突き上げる。顔も真剣そのものだが、どこか可愛らしいそれに笑いが込み上げる。

「ソラくん! 人が心配してるのに笑うってどういうこと?!」

憤慨して顔を真っ赤に染めるお姉さんも俺にとっては可愛いとしか言いようがない。

そう思うとさらに笑いが止まらない。そうやって暫く、怒られながらも笑うということは続いた。

「悪かったって。俺もなんか安心しちゃってさ」

「ソラくんのバカ」

すっかりいじけてしまったお姉さんを宥める間にも時間は流れていく。

やりすぎてしまったようだ。少し反省しよう。

「けど、お帰り。ソラくん」

そうやって満面の笑みを浮かべるお姉さんに。

「ただいま」

とだけ俺は返した。

「で。お姉さんは今日何をしてたのかな？」

散らばった布と幾つも割れたガラス瓶。何となく意図は分かるが、まあ。

「わ、私もソラくんみたいに色々作り出せると思って……それで」

尻すばみするお姉さんの言葉。

「別に間違っていないから気にしないでいいよ。問題なのは片付けな

いことだろ？

工夫したり色々考えるには失敗も必要。失敗を繰り返してようやく成功は導き出せるんだから」

これはポーシヨンの収納や運搬に関して、何か出来ないかと研究していたんだらう。

販売している最中もリピーターから色々指摘をされたり注文されたりしたし。

今の2倍の容量を装着できないかとか、完全に割れないようにして欲しいとか、果てにはわざわざ取り出さなくても飲めるようにして欲しいとか無茶振りもあったが。

どうしても外側につけているため、接近戦だと掠って割れることもあるらしい。

ただでさえ障害物が多い森や山をターゲットにしている購入層は多い。そういうったこともあるだろう。

それでも以前に比べたらましだとはいうものの。

あまり強度を高めると重さが増すし、材料費も高くなる。

ポーシヨンの瓶自体を別のものにして欲しいといわれても、そもそも作るのが大変だ。

金属製のものやソフトビニールのような素材のものも考えたが、どうしても原価が高くなるのと再利用のしづらさが問題になった。

ガラスが愛用されているのは、再加工のしやすさが一番だ。

使用後のガラス瓶は露店や工房に持ち込めば買い取ってもらえる。

それを工房などで碎き、再度溶かして瓶にする。

それは重さで買い取るため割れているものも多いし、他のものになんて利用する。

一見割れていないようでも細かなヒビが入っていたりもするの
買い取ったものは一度全て砕いてしまおうそうだ。

洗えばいいとは思ったが、洗剤もないし細長いものを洗って何度
も利用はできないだろう。

ある程度砕いたものを一度水で流し、余計なものを除去してそれ
から再加工するらしい。

そう考えると金属いちいち溶かして再加工するのは費用がかかっ
てダメだし、ビニールは再加工できないからもっとダメだ。

他の職人であれば金属を使って作るのであればそのまま流用しそ
うだが、俺は怖くてそんなことは出来ない。

結局、今の状況ではガラス瓶が一番なのだそうだ。

洗淨の強化か素材の防菌効果が高まればポーシヨンの量り売りな
ども出来そうだが。

だが防菌効果を狙っても使う側としてはどれだけ再利用できるか
なんて判断はつかないだろう。菌の繁殖を完全に防止することなん
て出来ない。

まあ、うちだけの問題でもない。他が考え付けばいいのだが、そ
れまでは規格は合わせた方が何かと便利だ。

と、そういった背景もありポーシヨンベルトの改良も仕事のひと
つだ。

お姉さんの作ったものも中々ありだと思う。後はこれの中に綿で
も詰めれば割れ辛くなるだろう。

その場合の取り出しやすさがどうなるかは実験してみないとダメ
だが。

現状としては、そういう研究をしていた最中に転んだかひっくり
返したか何かでガラスを割ってしまったんだろう。

すぐに片付ければいいものを。

「ガラス割っちゃったの、ソラくんが帰ってくる少し前だったんだよ。だから今から片付けるよ」

と、そのまま片付けようとするお姉さんを制する。

「素手で触れると怪我しかねないから、厚手のグローブするか掃除道具取って来て。俺は革から片付けちゃうから」

「ばいばいと革を片付けていく、んだが。途中で妙な事に気付く。革が全て違う形をしている。元のままであれば、それも当然なのだが明らかに裁断した跡がある。」

その切り方の荒さは今後の課題としても、どうも一定の種類で同じように切られたそれはまるで拡大・縮小コピーをしたもののようなのだ。

今の所見つかったのは3種類。それも大きさが5パターンほどあるようだ。

大きさの違いは最大で8cmほど。これは何をしたいんだ？

「お姉さん、この革どうしたんだ？」

「それはね。人によって手とか体の大きさ違うでしょ？ だから幾つか種類作っておけばそういうのにも対応できるかなって」

確かにそれはそうだ。ベルトのような完全に固定するものであればともかく、今日持っていたある程度自由の利くようなものならそうやったほうがいい。

「なら、大きさと種類ごとにサンプルだけ置いてそれで販売じゃなくて予約にするか？」

いや、だとするとやはり大量に作る必要があるし、その前にもつと可動式にして個人で調整できるようにして、その前にオーダーメイド……は高いにしても、素材だのを調整して他のものとの格差をつければ売れるのか？ いや、そんなことをするなら種類を増やすほうがいいだろうし、種類を増やすくらいならそれを個別の工房にでも売ったほうが早い。けど、そうなると派生したものをこちらでも利用できるように契約を結ぶか？ いやいや。それはうちだけが得をするから相手もそんな契約を結びたくないだろうし、そもそもうちにだけ利権を集中させるのはもっと問題だし、そもそもお姉さんには鍛冶をいい加減覚えてもらわなきゃいけない……」

「ソ、ソラくん！ 何だか一杯考えてるみたいだけど少し落ち着いて！」

俺の考えはお姉さんによって中断され、少し暴走気味だった思考も薄らぐ。

「あ、ああ。えっと、悪い。これに関しては、俺も後で考えてみるよ。」

お姉さんは、ああ。もう片付けてくれたんだ」

「ソラくんはもう今日はあがっていいよ。後は私がしておくからお姉さんにそこまで言われるということは、俺も相当疲れているのだろう。」

それなりには、慣れていない出来事でもあったし。

日常生活程度であれば問題なく過ごせるだろうが、調合や鍛冶は流石に無理か。

「といっても、仕事しなくても出来ることはあるんだけど」

「うん。休むことが、今日のソラくんの仕事だからね」

帰宅することになりました。ええ、それはもう脱兎の如く。いや、最近のお姉さん妙に迫力が、うん。

帰った後、母に随分心配されたが、話をするとそのまま部屋に連行され、ベッドに押し込められる。

無理はしていないはずなのだが、顔色が良くないから！ だそう
だ。

まあ、疲れているのは疲れているからそれも当然か。

アイテムボックスから以前作った特製ポーションを取り出し、飲み干す。

そういえば、これは特製ポーションのままだ。新しくアイテムを作れば最初は特製で、その後は追加されるような仕組みなのか？ 考えるときりがなさそうだ。

今はまず、ゆっくりと身体を休めることにしよう。

第11話 奪還作戦！（後書き）

主人公について同い年の友達？ 出来るの巻き。

本当は派手な戦闘になったり、敵が魔王の使いだったり、そもそも悩んでいる理由が全く違ったりと色々考えたもののこういった形に収まりました。

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

2011/9/20

誤字等の修正を行いました。おっさんA様、kent様、独言様ありがとうございます。

ポーション瓶の扱いに関しても補足を追加。細菌学なんて発達してなさそうですね。。

第12話 作成、作成（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

第12話 作成、作成

「さて、お姉さん。これから商品開発に関して会議を行いたいと思う」

「商品開発？ またポーションの新しいものでも作るの？」

「ここ、魔術工房だよな？」

お姉さんまでポーション売りの店だと思つようになってしまったのか？

ため息を吐いてもこれは仕方ないだろう。

「い、いや、そ、そうだよなっ！ じゃ、じゃあついに魔術品を作るんだね?!」

鬼気迫る形相、もとい熱気が溢れでそんな表情で俺に駆け寄ってくる。

「あ、ああ。というわけで、何を作るのかということと素材、それから販売価格を決めたいと思う。あと、前話したように露店と店用の商品も差別化を図ろうと思ってるんだけど」

「うん。それはいいと思うんだけどね、いつまで露店を続ける予定なのかな？」

それは期限を決める、という意味だろうか？

確かに期限を決めて目標額を設定した方がそれに至るための行動

も分かりやすくはあると思うが。

「お姉さんはどう思ってる?」

色々頭の中では考えるが、全く別の可能性もあるため先に聞いておくことにした。

「うん。やっぱり此処で商売をするのがサンパーニヤだと思うからね。露店で売るのも楽しいけど、また此処でお客様をお迎えして、それで作ったものを売りたい。これがサンパーニヤの商品ですって」

もちろん、現状引ける大きな目標はそこだろう。その後の分岐にもなりえるポイントだ。

「なら、お姉さんはどうすればそこにまでこぎつけられると思う?」

「そうだね。……お、お金をためなきゃいけないんだよね? ソラくん言ってたし」

当然お金は必要だ。幾ら俺が錬金術師でもあるとは言え、金を生み出せ……るということはない。

なら今出来ることで少しでもためて、お姉さんが出来る幅で店を大きくしていくしかない。

「だから、そのためにお姉さんは何をしなきゃいけないと思ってるか聞かせて欲しい」

言われるまま働くのもお姉さんのストレスになりかねないし。

俺はお姉さんからの願いを一度断っている。だからこそ、お姉さんには考えて欲しい。

自分がどうしたいのか。自分がどうありたいのかを。

「ううっ。そ、そうだね。えっと、ポーシオンを作ること自体はもう大丈夫だから。次はいよいよ魔術品だね!」

「うん。なら質問を変えようか。お姉さんは、どの金属がどれくらいの温度で解けて、何と何を冶金すればどうなるかはわかる?」

最初に戻っていることはあえて言うまい。

作る以前の問題だ。強度や質感なども大切だが、そういった基本的な知識があるかどうかがまず疑わしい。

お姉さんの固まったような表情を見ると、大体答えは分かりそう
だ。

ならば、そういった知識を蓄えながらの方がいいだろう。
本来なら俺が教えるべきなんだろうが俺も詳しくはない。

一部のことは分かるが、火の温度や融点までは分からない。

「で、でもっ。それが分からなくても鍛冶はきつと出来るよ!」

「正直俺も同意見なんだが、冶金に関しては知らないとまずいだろう。少なくともそのままじゃ使えない金属なんてザラだぞ?」

特に原石はそのままでは扱えない。脆かったり硬かったり、何よりも不純物が多いため本来の性能を発揮できない。

とはいっても、温度は色々試してみるしかない。温度によって硬度が変わるものなんて幾らでもあるし。

それに今の技術で見た目以外で温度を計る術があるとは思わない。だからそっちはどうにかなるにしても、冶金は知らなければどうしようもないだろう。

この前購入したのは鉄鉱、銀、亜鉛、銅、錫。あとはもろもろ。どうやらそれは昨日運び込まれたようで、元々ある金属も含め、工房が狭くなってしまうている。

すでに加工されているものもあるが原石も多い。これを加工するだけでも一苦勞だろう。

「もしかして、ここにあるのも加工しなきゃダメかな？」

俺の視線に気付いたのか、お姉さんは震えたような声を出す。

「ほとんどは。全部インゴットで仕入れればいいのかもしいけないけど、品質がまちまちっばいし、その分お金かかるだろ？」

ものによつては不純物が多く含まれているものもあるだろう。

売った側の職人の手抜きか、それともそういったものの方が多く流通しやすいのか。

それでも鉱石から加工するよりはましといえましたが、お金がかかるならお姉さんのレベルアップも兼ねて原石から加工していったほうがいい。

今の所ポジションはすぐに出来る分、それを一定量確保した上で冶金をすればいい。

「ううっ、中々簡単にはいかないんだね」

「俺が冶金して、インゴットに変えたものをお姉さんが鑄造で製品を作ること可能だけど。そうする？」

それも方法のひとつだ。作業の分担をして効率を上げる。どちらが楽しいかといえば当然鑄造だ。

物を形にするというのは大切だし、何よりも目に見えて成果が分

かる。

俺は淡々と作業をこなすのも案外好きだし、苦にならない。

だが、俺みたいなのは例外だろう。普通は成果を実感しやすい方が嬉しいだろうし。

「それだとソラくんが悪いよ。それに私、頑張っただけだからソラくんのやり方を教えて欲しい。やっぱり、私が今こうしていられるのもソラくんのおかげだもん」

「俺のやり方を正しいと思わないで欲しい。その点を了承できるなら見てていいけど。少なくとも俺は教師役は無理だよ」

俺が色々なものを作れたり知っているのはあくまで俺が今まで集めてきた情報を使っているに過ぎない。それも正しい、実践を伴ったものとは言い切れない。

それでもどうにかなるものではあるが、限度は決まっているだろう。

刀や槍を打つ自信はあっても、はさみやスプーンを作る自信はない。

魔術工房にはさみやスプーンを作る必要があるかといわれたら首を傾げざるを得ないが、そういうことだけでもないだろう。

「うん！ 私も自分で出来ることはやってみるから、ソラくん手伝ってね」

了解はしたものの。どこまでお姉さんに伝えられるか、そして伝えていいのか。それが問題か。

金属を溶かして型にいれ、冷やす。

文字にすればたったそれだけの工程だが、難しい。

金属を熱しすぎると脆くなるし、だからといって低い温度のままでも加工できない。

その後、型に流し入れるのも慎重にしなきゃいけないし、量は少なすぎても多すぎてもいけない。

そして、型から外すときも案外慎重にしなければ割れてしまう可能性すらある。

と、やってみたいと言うお姉さんがしたミスを上げるとこんなものか。

一番安い鉷石でやってもらったからそこまで損失はないが、どう教えたものか。

何か導入本でもあればいいな、とは思いますが職人がそんな物を作るだろうか？

少しは調べてみることにしよう。本来は師から弟子に教えるか、技術を見て学ぶものだろうし期待は持てないが。

同じ材料で、同じような工程を経て作り上げた2つの腕輪。

真鍮の腕輪

真鍮で出来た腕輪。重量3。

ポロポロの真鍮の腕輪？

真鍮で出来た腕輪らしきもの。装備不可。重量2。耐久【5 / 3
0】

どうしてこうなった。

前者が俺が作ったものでもう片方がお姉さんのものだ。

腕輪だったから大きすぎたのか？ いや、そもそも何故何のスキルも効果も持っていないのに耐久度がある？

お姉さんの何らかのスキルなのか？ これは。

考えは尽きない。むしろ、どうして鑄造で作ったものがこうなる？ 不器用というだけでは説明にならない。工程は見ていた。だめになりそうなきときはちゃんと指摘した。お姉さんもそれを守った。不安は残るものの、しっかりと工程は終わらせた。多少不恰好でも最後の仕上げの段階では何とか見れる形にはなるはずだった。

「もう何個か作ってみるから、お姉さんは近くで見せて」

しゅんと頂垂れるお姉さんに声をかけ、作業を再開させる。

ポーシヨンと違い幾つも作るのは辛い、それでもやれないことはない。

とはいえ、重かったり、熱かったり、色々大変だ。

汗は途中から滝のように溢れ出て来たから慌てて水分だけは確保したが。

出来上がったのは細かな装飾で多少の違いをつけた腕輪が2つ。

金型を使ったものだから、どうしてもこの程度か。

大きな差異を出したいのであればその度に型を作るか、あるいは

鍛造の方がいいだろう。

どちらにせよ、そちらの方が時間と手間はかかってしまうが、
或いは数種類の金型を作るか、だ。

今出来ている商品として使えそうなものは、俺が作った3つの真鍮の腕輪と前に作った青銅の腕輪のみ。

せめて、お姉さんには荒削りでも最初は構わないからどうにか形にして欲しい。

となると、逆接的な発想ではあるが、DEXがあがる魔術品を作ったほうが良いか？

「お姉さん、DEX向上させる腕輪でも作るうか？俺も成功確率を上げるときはそういう補助使ってるし、慣れるまではそういった手段をとってもいいと思う」

「それは嬉しいんだけど……もう少し自分の力でやってみるね。頼ってばかりだと、それが当たり前になっちゃうから」

少し考えた後でお姉さんは断ってくる。お姉さんが自分でやると決めた以上、まあ大丈夫だろう。

もしそれが使えなくなったら時どうなるか正直不安だし。

「まあ、それはそれとしてだ。これで多少はやり方や苦労は分かっただと思う。それで、どれくらいの価格で販売する？」

脱線どころか完全に当初の目的を見失ってしまったが、まあ逸脱はしすぎていると思う。

あくまで商品価値は原価＋手間＋美的価値だと思っている。今回は手間がどれくらいかかるかは分かってもらえたはずだ。

問題は魔術品がどれだけ値段で取引されるか、だが普通のアク

セサリーに関してはそこは気にしない。

そちらも、露店を回ってある程度は相場を確認している。とはいえ、まだ売れて儲けもの程度でしかないだろう。

購入層を男女兼用というか、女性よりにしたためやや細身のそれは、多少の装飾をつけていてもポーションとは違い、そう簡単に売れるものでもないだろう。

というか、作るのに時間がかかる。結局、2個目を作った時点で疲れ果て、暫く休んだ。

体力が持たないというよりも、身体がついて来れないというのが現状か。

一気に体力を奪われ、力尽きるというか。まるで借り物の身体を無理やり動かしているかのように妙なへばり方をする。いや、借り物の身体っていうのも意味が分からないんだが。

「うーん…銀貨1枚くらい、かな？ 銀だったらもう少し高くてもいいと思うけど、真鍮ならそれくらい、かな」

ポーションを基準にすると利益率の差に少しというかだいぶ開きを感じるが仕方ない。

「なら、それで出してみ様子見かな。あと種類はどうする？ これだけだと流石に少なすぎると思う」

「そ、そうだね。ちょっと思ったんだけど、普通のアクセサリーなら曲げたり切ったりだけでも作れないかな？」

……うん。そういやそうだったな。鍛冶という手段しか考えていなかったが、硬すぎない金属を使えば熱を加えるだけで曲げたり捻

つたりは出来るはずだ。何で俺は金型にばかり拘っていたんだ？
むしろコストを抑えるならそっちの方が安上がりだろ。色々変化
もつけられるし。

「お姉さんの言うとおりだよ。となるとデザイン画だけで十分か。
お姉さんは何かアイデアある？」

そうなると型だけなら今までに手に入れてきたアイテムのストッ
クが使える。

後は実際の付け心地と大きさの調整を何処までするか、か。

「つ、作ったときに調整すればいいよね？」

お姉さんの目が異常に素早く虚空を彷徨う。ああ、不器用って言
うのはそういうところでもそうなんだな。

「ああ。暫くは俺が作る、ってことでいいんだな？」

笑って見せるとお姉さんが不機嫌そうに頬を膨らませる。

この人は本当に幾つなんだろうか。似合っているのがまた疑問を
膨らませる。

「どうせソラくんみたいにくまく作れないよ！ いじわる」

「それでも作っては貰うんだけどな。加工用の金属板の作成、は明
日にでもしておくからお姉さんはデザイン考えてくれ」

体力を回復したところで今日はこれ以上加工できる気がしない。

そういった加工をするなら厚さは均一でないといけないし、素材
ごとによって厚さや長さも変えたほうがいいだろう。

そう考えるとあまり複雑な作業は今こなさないほうがいい。……
いつその事休憩用の椅子なりなんなり作るか？

結局、デザイン画を作ることには専念したわけだが、俺の絵心の無さは器用さで何とか補填は出来たものの、これをそのまま販売することは難しそうだ。

そして、意外にもお姉さんのデザインが良かった。

細かなディテールまでは描いていないものの、シンプルだが良さそうなデザインが多く上がった。

このままお姉さんがデザイナーも兼任した方が良さそうだな。既存のものは俺が作れるとしても、新しいものは中々難しい。

特に、既存のものはどうやって作ったのかを想像するのも難しいデザインが少なくない。

そうやって描かれたデザインは今作れそうなもの、まだ難しいものと分けて整理する。

素材や難易度、製法など条件を上げれば数え切れないほどあるが、まあそこは徐々に作れるものを増やしていけばいいだけだ。

デザイン画を整理して、それをお姉さんに預けた頃には既に夕日が沈みかけていた。

随分と熱心に描いたものだと思っても呆れたが、お姉さんは自分が役に立つことがあることを悟ったのか、妙に嬉しそうだ。

「俺は今日はもう帰るけど、お姉さん。夜遅くまで仕事しないように」

「わ、分かってるよ？」

お姉さんはイメージとして自分が出ること、しなきゃいけないことが見つかったら何が何でも続けそうなタイプだ。

そこに省みる、とか一度立ち止まって、というものがあればいいのだが暫く付き合ってみた結果、今はまだそれが出来ていないようにも見える。

なら、俺に出来る範囲ではお姉さんに注意をするが、それは全てではない。

越えてはいけない一線はまだ引かれたままだ。それをわざわざ踏み越えて、その先にある責任を負えるとは言えない。

何となくもやもやはするが、原因を考える体力も今は無く、ただ帰宅の途についた。

「ソラ、最近疲れてるみたいだけど大丈夫？」

「ん？ まあ大丈夫だよ。ちゃんと夜は寝てるし、特に大きな怪我とかもしてないし」

食事中、何となく食欲のわかない俺に母が尋ねてくる。

とはいっても、特に異常も見つからないし本当に何となくもやもやしたものが晴れないだけだ。

気にするものでもないだろう。

「そうやってソラはすぐ無理をするんだから、自覚する前に休むんだよ？」

「ほどほどにはしとくよ。そういや、このパンなんか変な味するんだけど何か混ぜた？」

どこか懐かしい香りなんだよな。パンも黒っぽいから全粒粉にで

もしたかと思っただけだ。

「これはソバの粉を入れてみたんだよ。シエツタにたくさん貰ったからいれてみたんだけど、美味しくなかった？」

なん……だと？

「母よ！ まだ粉は残ってる?!」

「う、うん！ 残ってるけど、嫌いだった？」

「いや、そんなことは無い！ そんなことはないけど、パンには混ぜないでくれ！」

何てこったっ！ そうだよな、ソバはあってもおかしくないんだ。昔はクレープにもソバ粉を使ってるって話だし、何で探さなかったんだ、俺は。

いや、今そんなことで嘆いていても仕方ない。カツオらしき魚は見かけた、大豆もある。

麴に関しては米がないのでどうするかとも思うが、豆や麦で代用は出来るだろう。

麴を作る部屋も必要だ。そんなものを室内に作れるとは思わないから庭の何処かに造るべきか。

これで昆布と米があればひとまずは理想に近づくんだが、今見つからないものは仕方ない。

農業ギルドにでも聞いてみるべきか？

それよりもまず、今は醤油と味噌とあと納豆を作るべきだ。本当に米は無いのか？ なければどうやって作ればいい。少しでも近づけるといのが分かったからこそ辛い。

この歯痒さ、何処にぶつけなければいいっ。

「ソ、ソラ？ 急に元気になっちゃったみたいだけど、どうしたの？」

「長年の夢がこれで1つ果たせそうなんだ！ 少し徹夜してくるけど、気にしないでくれっ！」

母の返事も聞かず、食堂から飛び出す。幸いまだ材木は残っている。ただ、隙間を覆えるようなものはない。これは休みの日にでも何処かで粘土を採取すればいい。作るのはまず隠匿用の魔法陣と小さめの木の建物。それに木の桶は同じく作ってしまえばいい。くっ、何で今までソバにすら出会えなかったんだ。

どちらにせよ今日はもう材料は買いにいけない。明日は露店の日だからそれが終わって、少しだけ材料を買う時間を貰おう。

燻製用に香りのいい木も出来れば欲しいし、それ用のチップは、干し肉や腸詰などが売っているからこれも平気だろう。

となると、何処かでそういった商品を安定供給できる場所がやはり必要になるか。

この前行った食堂にでも声をかけてみるか？ いや、それだと料理を広めることは可能でも作ることは難しいだろう。

ただでさえ醤油や味噌は作るのに時間がかかる。幾ら促進をしても2〜3日で出来るものでもないだろう。

となれば、何処かに協力を取り付ける必要がある。今協力を求められそうなのは『ユグドラシルの葉先』にハツフル氏、あとはギルドだがどうも弱い。

何処までそういった交易が行われているかわからないが、新しいものは基本的に高値で取引され、優先的に王族や貴族に行き渡る流れだろう。

そしてそれが一段落してようやく、ゆるやかに平民に行き、価格

競争と改良により値段が下がっていく。

そこまで辿り着くのに幾らの時間がかかるだろうか。1年、いや2年？ 下手をしたらもつとかかるだろう。

個人的に作るだけならそれで構わない。けど、俺はあくまでこれを広めて欲しい。

でなきゃ俺個人で思いつく料理なんて数少ないし、応用も利かない。

なら、広まり、それで色々なものを口に出来た方が幸せだ。なら、早いことに超したことは無い。

そうなる俺個人だけで済ませられる問題ではないが、同時に俺自身もある程度動かなければならないだろう。

とはいってもコネなんてそう簡単に出来るものでもない。それに關してはじっくりと考えていくしかないか。

と、考えながら気付けば朝方。どうやら作り終わった小屋の中で眠ってしまったようだ。

地面に直で寝ていたため身体も節々が痛いし、若干眠気も残っている。

1日で建てたこの小屋は先に周囲に隠匿の魔法陣を張り巡らせた上で、生産スキルを使って作ったものだ。作ろうと思っても、手作業じゃ数時間程度で作れるものじゃない。

風呂にでも入って身体を解すか、と立ち上がると身体から薄い毛布が外れる。

どうやら俺が寝てしまった後に誰かがかけてくれたようだ。

レニが運んでくれることはさすがにないだろうから、父か母のどちらかだろう。

父はあの場には居なかったので母の可能性のほうが高い。

風呂に入り、食事を済ませ、母にお叱りを受け、出勤する。

母からのお叱りが少し長かったため、急ぎ足だ。俺が悪いとはいえ、少し手加減をして欲しい。

そういえばこういう叱られ方をしたのは初めてかもしれない。と
いうか、何故母は怒りながらも何処か嬉しそうだったのだろうか。

中央広場を過ぎた頃にはいつも通りの速度には戻っていたものの、
全体的に時間を短縮したためサンパーニヤに到着したのは普段とそ
う変わらない時間。

「おはよう、お姉さん。どうかしたのか？」

「うん、おはよう。えっと、今日はちょっと寝坊しちゃってさ」

あはは、と乾いた笑いを浮かべるお姉さん。髪も少し跳ねていた
りして、それはそれで可愛いが。

「珍しいね。まあ、準備は俺がしておくから、お姉さんは髪直して
おいで」

工房を見る限りまだ準備は済んでいないようだ。

今回のポーションの比率だけ決め、お姉さんはそそくさと身支度
をはじめ、俺はポーションをガラス瓶に移し換え、他の販売するも
のを作業台に置く。

「あ、そういえばさ。アクセサリのことなんだけど、今あるのは今
回は止めにして、サンプル品を次回並べて予約制にしようと思うん
だけどう？」

「予約？ あるものを売る、じゃダメなの？」

「それだと色々な種類のものを並べなきゃいけないだろ？ 確かに並べたものをすぐ買えるのもメリットはあると思うんだけど、素材や形、大きさを含めて好みは違う。なら数量限定にして簡易オーダーをとった方がいいと思うんだ」

「面白そうだね。でも、そうすると高くないかな？」

「素材の差と若干の手間賃を取れば大丈夫。そこまで大きな量にはならないし、物によっては数日かかる可能性もあるけどさ」

「少なくともこっちに関しては儲けのためじゃない。儲ける手段を講じる必要があるが、これはどちらかといえばサンパーニヤの今後を計る手段だ。」

「この世界では一部の道楽者を除いてオーダーメイドというものはほとんど取られていないらしい。」

「魔具がそれに当たるが、魔具は主体はあくまで属性石。強力な属性石を人の手で作り出せない以上、属性石に合った装飾品を作るのが一般的だそうだ。」

「アクセサリー売りも、ある程度客からの要望や手直しはするがそれでも自分で作り、自信を持って販売する。」

「だからこそ、幾つもの露店が立ち並び、そこそこに繁盛しているのだそうだ。」

「じゃ、あとはお姉さんの作ったポーションバッグ、これは幾らで売る？」

「それも並べるの？ ソラくんのものに比べたらあまりいいものじゃないよ？」

少し恥ずかしそうに言うお姉さん。自信がないというよりも照れているだけみたいだな。

「そんなことないさ。俺だったら、銀貨1枚は少し高いにしてもそれくらいでも買うぞ?」

自由度が高いのもそれなりにポイントか。

ポーシヨンベルトはポーシヨンしか扱えないが、こちらはそうでもない。

工夫次第では他の用途にも使える。とはいえ、それにしても少し小さいが売りに出せば何らかの発展もあるだろう。

結局、ポーシヨンバッグに関しては銅貨70枚で売る事にして、合計5個を売りに出すことに決めた。

サンパーニヤで売るにしてもやはり何処かに作ってもらわないとそろそろきついな。

そういったコネも広げておくのもやはり必要か。内職でも頼めればいいんだが。

いつも通り何回か往復し、商品を運ぶと露店を始める。

今回も売れ行きがいい。当然といえば当然だが、製法を何時ばら撒くかで今後の展開も変えるべきだろう。

とはいえ、あまり悠長に構えても居られない。いつ製法が漏れるか分かったものじゃないからだ。

製法がお姉さんと俺の頭の中になかないとは言え、いつまでもそのままではいられない。

他のポーシヨン売りを敵に回すつもりもないし、サンパーニヤがポーシヨン売りの店として周知されるのも痛い。それは既に広まっ

ている可能性も十分あるといえばあるのだが。

これもお姉さんと話し合うべき課題だな。

需要は上がる一方、供給は敢えて抑えてある。

そのため、短時間で一気に売切れてしまうのも少し問題といえば問題か。

売れ切ってしまった後で狩人やら戦士やらが来て断りを入れるのも心苦しい。

そうはいつでもむやみやたらと市場の混乱も避けたいわけで。

上手く行かないものだと感じながらも完売したのち、俺は戻る前に買い物に。

買うものは大豆に麦にカツオらしきものに燻製のチップ。これです。大丈夫。

とはいえ、カツオらしき魚は干されているものが多く、生を見つけるのが大変だった。しかも普通のものより高いし。

小遣いももうほぼ底をついているし、失敗が出来なさそうだ。

まあ、人目が見つからない場所でアイテムボックスに入れたから暫くは持つだろうが、今日はちゃんと集中出来るだろうか？

「さて。お姉さんはこれからポーションを作って欲しいんだが、その前に聞きたいことがある」

「うん？ 私何かしたかな？」

首を傾げるお姉さん。いや、何で聞きたいことがあるといっただけなのにそういった反応になるのだろうか。

「お姉さんが悪いとかそういう話じゃないよ。ポーション、何時ごろに製法を広めるべきかなって」

外で話す話題じゃない。此処は工房を兼ねているから他の店に比べて防音設備はしっかりしているし、聞き耳を立てられても声は外には漏れない。

「製法……そうだね。もう少し様子を見ていたほうがいいかなって思うけど。まだ私たち以外で同じようなものを作れる人はいないんだよね？　なら、もう少しだけ稼がせてもらったほうがいいかな？」

お姉さんの方が広めることに関しては積極的になると思ったのだが、意外だな。

とはいえ、工房主がそう思うならそれでもいいんだが。

「なら、どれくらいで広める？　少なくとも、俺はずっと秘匿にしておくつもりは無いんだけど」

「工房としてちゃんとやっていけるようになってから、かな。でもソラくんが頑張って色々なことしてくれてるからそんなに時間もかからないと思うんだ。あとは私の腕次第、かな」

明るく笑って話すお姉さん。なら、そのレベルアップのためにも俺も頑張りますか。

加工をしやすいように幾つかの長さや薄さに加工した金属の板は2桁を越えている。

その分疲れはしたが、これだけあれば暫くは持つだろう。

後はチェーン用の細長い線状の金属だ。こっちは作るのは結構しんどかったが、手持ちである道具で何とか誤魔化した。

これの加工に関しては今日でなくてもいいだろう。むしろ既に夕方だし。

となれば、今日はどうするか。帰って食糧作り、は母にまた怒られそう。休日にすることにしよう。

大人しく帰ることにしよう。露店に寄っても欲しいものがあったお金が足りないときの虚しさは非常に辛いものがある。

バイトを始めても暫くはお金が入らない。食費やなにやらはほとんどかかっていない以上いいとしても、買い食いやちょっと寄ってみた店で衝動買いみたいなのが出来なくなる。

まあ、普段はしないからいいとしても急にお金が必要になったときが困る。

アイテムボックスの中にこそ金塊やらいくつかの道具はあるものの、それをそのまま換金というわけにも行かないだろう。

ヒュウガとして何処かのギルドに登録できれば良いが、それはそれで面倒そう。

帰り着いたらご飯を食べて風呂に入って寝る。娯楽がほとんど無いこの世界ではそればかりだ。

何だかおっさん臭くて少し寂しい気もするが、そもそも明かりすらほとんど確保出来ない。

暗くなったら寝て、明るくなり始めたら活動を始め。原始的だが、今はそれがちょうどいいんだろう。

出来ないこと、不自由なこと、もやもやすること。色々不便はあるが、それもまたこの世界なんだ。

なら、できることをして楽しめばいい。出来ないことだけじゃない。今はまだ出来ていない、そうだったものがまだまだあるだけだ。

本も、製本技術や印刷技術がそこまで普及していないのか、写本の類しかない。

そのためそこその値段はするし、あまり出回っても居ない。

この前買った本もそれで、しかもそこそこボロイ割には結構な金額もしたし、誤字もあった。

さすがに印刷の機械は造りようが無いし、技術面も良く分からない。

自分の手の届く範囲でなら何とかしたいが、出来ないことまで無理にする必要も無いだろう。

まあ、出来ないことを楽しむことも必要と割り切るべきか。

ぐだぐだ考えているうちに眠り込んでいたようで、また朝がやってきた。

身体の疲れはそれでも消えてくれ、起き上がるのにも不自由しない。やはり地面で寝るべきじゃないな。

前はキャンプにすら碌に行けなかったからこういう知識はあまりない。

まあ、1つ経験になったと思えばいいか。

あまりぼんやりと考えているわけにもいかず、身支度を済ませ、朝食を摂り、いつものようにサンパーニヤへ向かう。

お姉さんは今日も元気だ。いや、普段以上に元気かもしれない。理由は明確。アクセ作りにある。ぼつきりと折れない限りやり直しが効く点も良かったのかもしれない。

機嫌良さそうに金属の板を加工していくお姉さんはまるで子供が粘土遊びをしているかのようにだったが、表情は真剣そのものだ。

その割りに鼻歌らしきものが聞こえる分、余裕はありそうだ。

そうやって昼までに試作品が2つほどお姉さんだけで完成させて

いる。

ちなみに、昼ごはんに関してはここ数日は全て外で買ってきている。用意する手間があったのと、何かと忙しくて一度作らなくなったら作るタイミングがなくなったからだ。

それはともかく。お姉さんの作るものは同じ物をイメージして作っている割には似通っている、という感じはするが同じものには思えない。

手作りなのだし、そういったものだとは思いますが俺が作るものはどれも同じようなものになる。

敢えてディティールの変更はしているが、それこそ誤差の範疇だろう。

俺はチェーンネックレスを1本、バングルを2本。

チェーンは思いのほか作るのが楽しくなってしまっただけでまだ余っている。

後は安い宝石でもつけければ立派なものになるだろう。

それこそ属性石を付ければ魔具にもなる。といっても、現状の価値を知った後では属性石の大量生産も出来ないんだが。

そろそろ俺専用の、誤魔化すための魔具を作る必要はありそうだが、どうするべきか。

通常の魔術品であれば幾つか用意は出来る。母に借りていたものもあるし、サンパーニヤで働いている以上扱う機会も増えるだろう。ただ、魔具は別だ。今の所拾ってきた宝石の中に属性石はない。弱いものでさえ、時間をかけて特性の場所になければ出来ないものらしい。

ならそれを取りに行くか、というところも現状では難しいだろう。何せ朝から夜までサンパーニヤで仕事をし、休日も一週間の内1日だ。

学生であれば長期休暇もあるだろうが、今のサンパーニヤにそれ

を求めるのも酷だ。

今は何とかなってるし、どうにもならなくなりそうになったときに考えればいいか。

むしろ、今動いた方が不自然か。魔術工房はあくまでも魔術品を作るのがメインなんだし。

そうすると、魔具を作る工房は一体何になるんだ？

と、疑問に思ったことをお姉さんにぶつけてみると、それは魔術師が入手した人が工房に属性石を預け、土台となるものを作ってもらうのが一般的で、金属を扱う工房であれば特に専門はないそうだとはいっても、やはり実績を積んだ工房に持ち込むことが多い、あるいは魔術師お抱えの職人が作る程度で、作る職人は数が絞られているとのこと。

俺のように魔術師でありながら鍛冶師である人間は恐らく限りなく少ないだろう。

身の振る舞いに関してだいぶ制限があるが、それも仕方ない。

俺は勇者にも英雄にもなるうとは思わない。それはなりたくないやつがなればいい。

だから目立ちすぎず、といったことを念頭において活動しなければならぬだろう。

幾つか既に行動はしているが、それがどう今後に作用されるか分からないが、投げた賽は戻らない。

なら、それを飲み込んででも、することとしないことを分けて考えなければならぬだろう。

というのを今から行うことの言い訳にするのだが。

こういったアクセサリを魔術品に加工できないか、というのが俺の考えていることだ。

魔術品は職人の魔力を持って作る。ならば、魔力を籠めさえすれば魔術品になるのではないか、という理屈だ。

これが出来ればお姉さんも効率よく魔術品が作れるようになるだろう。邪道でしかないならお姉さんに教えるわけにも行かない気がするが。

今の所俺が試したことがあるのはハンマーを通して魔力を道具に籠めることだ。

叩いたことにより、加工している最中に物に魔力が移るんだろう。きつと。

というわけで。どんな道具であれば可能かをまず調べるために、板金、金属の板を加工するためのハンマーを準備する。

鍛冶道具が高い理由はこういった道具の種類が多いからだ。今は関係ない話だが。

そのハンマーで形状を壊さないよう注意しながら叩く、というか魔力を籠めていく。

鏡が近くにならないから俺が光っているかどうか分からないが、自分の身体の内側に意識を向けると、何かが緩やかに流れていく、そんな感じがする。

その先はハンマーであり、またアクセサリだ。今回はチェーンを叩くわけには行かないからバングルだが、何とか上手く行きそうな予感がする。

「あれ？ ソラくん、魔術品にしちゃうの？ 今回のって露店用のアクセサリーなんだよね？」

「お姉さん、もしかしてこれは一般的な方法なのか？」

だとしたら最初からアクセサリとして売る必要も無いんだが。狙って能力を発動させられるかは別としても、ある程度コントロー

ルは出来そうだし。

「ううん？ 初めて見るけど、ソラくんなら出来てもおかしくないなーって思ったただけだよ？」

お姉さんにとって俺は規格外というか常識外れな存在なのだろうか。いや、否定は出来ないが。

「俺だから出来てもおかしくないって……。ペンダントとかそういう形状の魔術品ってないのか？」

「あるにはあるんだけど、お父さんが作ってるのを見てたら、ヘッドの部分だけ打って後は他と一緒にだよ。バングルにしたって前にソラくんがしたみたいに全部打ってだよ」

魔術品のコア、といえいいのか？ 魔力を籠める部分はどうしても鍛造で魔力を籠めなければならぬのか。随分と面倒な話だが、どうするべきか。

「ねえ、今回はどういうスキルをつけたの？」

わくわくしたお姉さんのリクエストに答えてバングルを鑑定する。

ピンクシルバーのバングル

ピンクシルバーでできたバングル。重量2。耐久【400/40

0】

スキル【短距離転移】使用可能

またレアというかコアなスキルが付随したものだ。

これは目に見える範囲であれば移動可能、という便利かどうか分からないスキルだ。

見える範囲、なので中の見えない密室に侵入することは不可能だし、他の重複するため魔法陣が使われている場所に行くことも出来ない。

そもそも町は大きな魔法陣で囲まれているため町の中では使えないし、どちらかといえば崖などで通れない場所を通ったり、戦闘中に離脱、或いは距離を縮める程度か？

とにかく、そのスキルと効果を説明するとお姉さんに微妙な顔をされた。

森とかで猫をするには便利じゃないかな、とは言っていたものを使えないかも、みたいな表情だったのは明白だ。

使い方次第では犯罪にも使われかねない。お蔵入りかな、これは他にも試してみなければ分からないが、スキルの付与は何も考えずに籠めたらランダムになりそうで怖い。

魔術が現れないのであればそこまで酷いことにはならないだろうが、それでも強力なスキルやばいものは少くない。

特に装備しているものに対しバッドステータスを付与するもの自体有り得る。そういうものが出来上がったら呪いの武器に近くなるんだろう。

装備変更不可だったり、装備解除不可でない限りは平気だろうが。

結局、サンプルとしてバングルも並べることにして、それ以外にも幾つか作って並べるで決定した。

この数日何だかんだで疲れていたりしてあまり作業量は多くなかったから、今日は少しだけ頑張ろう。

チェーンネックレスはペンダントヘッドを取り付け、それを魔術品化すればいい。

魔術品として売るものに関して、だが。

今日は幾つかサンプルを仕上げることで終わらせよう。頑張るとはいつても頑張りすぎるのも良くない。

後は無意識に魔力を籠めないようにも気をつけないと。今の所そうだったものは出来ていない以上大丈夫だが。

ドアの鐘が鳴り、閉まる。誰かを呼んだ覚えは無いのだがどうしたのだろうか？

お姉さんの顔を見るが、お姉さんも心当たりは無いようだ。

ドアにはclosedを表す札も下げてある。知っている人以外は入らなさそうなものだが。

「失礼。此処は魔術工房？」

接客スペースに移動してみると、硬い口調の男と小柄な少女が立っていた。

「そうですね、今はお休みをいただいているんです」

あくまで魔術工房としては、だが。売り物があまりない以上開いているのもおかしい話だといえる。

「ですが、鍵が開いていました。私、それで入りました」

何でそう片言なんだ？

「店の扉に札下がつてませんでした？」

お姉さんは不思議そうに首を傾げる。他の店もそうだが、閉店を

示す札は全て一緒。

それが下がっている以上入って来る筈も無いんだが。

「私、この国の者ではない。失礼、した」

男はやはり片言のままそういう。つまり、札のことには気付いていたかもしれないが意味が分からなかったから入ってきたというところか。

「そ、そうなんですか。ええっと、それで何か御用でしたか？」

そう聞くお姉さんは気付いていないようだが、何か嫌な予感がする。

2人とも着ている服が良さ過ぎる。

男は燕尾服といえはいいのだろうか。黒のジャケットに白のシャツ、同色のタイ、黒いスラックスにロングブーツ。どれも一目で高級品と分かる一品だ。

少女の方はドレスだが、それも光沢があり、装飾も細かく、かつふんだんに盛り込まれている。

白で出来たそれは絹辺りか？ 銀髪と銀の瞳がそれに合い過ぎるほど合っている。何にせよ、2人とも平民には見えない。

そうなるとやたら面倒なことになりそうな気がするんだが。

「『翻訳』の効果ある、魔術品探している。時間無い、至急に」

男に隠れるように立っている少女は言葉を発していない。恐らくこちらの言葉を話すことが出来ないんだろう。だから探すのは分かった感じがするが。

だが、そう急ぐ必要があるんだろうか？ 今日明日にでも必要とあった感じではあるが。

「ソラくん、どうする？ この前作ったもの売っちゃおう？」

「お姉さんはどうしたい？ 俺は売っても構わないとは思っけど」

と、売ることにお姉さんも異論はないようで、売る事にしたので。

「調整は、すぐ出来そうだな。ほら、持ってみて」

少女の手を取り、手首の長さを測る。完全なリング状ではなく、この字のようなもののため元々余裕は持たせておいた。

これなら少し調整するだけで大丈夫だろう。

「私の言葉が分かるか？」

「はい。これから調整を行いたいと思うのですが、付け心地は如何でしょう？」

口の動きと言葉が一致している。まずは話す分には問題ないようだ。

「いや、すぐに国に帰らなくてはならない。暫くしたらこの町、いや学校に入学することになるだろうからその時に頼む。シャーランデイ、謝礼を」

とりあえず聞くことも可能と。最後に話したものは口と言葉があっっていない。母国語の切り替えも可能か。

と、シャーランディと呼ばれた男は懐から布袋を取り出し、俺に渡してくる。中身は、どうやって詰め込んだか分からないほど大量の金貨。

「いや、これは多すぎる。金貨1枚ももらえれば十分だよ」

そうやって一枚だけ金貨を抜き取り、他を渡す。

「そういうわけにも行かない。今後何かと頼りにすることもあるだろう。その迷惑代も入っていると思ってくれ」

何かと頼りにって。まあ、客が付くことは悪いことではないんだが。

「なら、その時に都度払ってくれればいい。あと、これも読めるか確認して欲しい」

一瞬受けとつてもいいかなと思ったが、隣で覗き込んでいたお姉さんの顔がみるみる青くなったのでやめておいた。

店の資金は必要だが、あまりぼったくるのもよくは無いか。

「分かった。だが、これだけは受け取ってもらおう。それと、本は。

……そうだな、一部読めないものもあるが大筋は分かりそうだ。これだけの品であるなら全部支払うだけの価値はありそうだ」

少女は俺の手に金貨を一掴み無理やり握らせる。少女の手は指は長いが小さい。それでも金貨20〜30枚はありそうだ。

「でもこんなに貰っても困りますよっ」

お姉さんは狼狽したままだが、どうせ返そうとしたところで受け取らないだろう。

この少女は目の力が強い。それに格好も相まって気品も漂う。何処かの高貴な生まれ、といったやつなんだろう。

なら、今回はありがたく受け取っておこう。

「すまないが、時間がもうない。こちらに来たらすぐ寄ることにする。その時にまた話は聞こう」

てきぱきと行動を起こす少女に俺もお姉さんも唾然とするしかない。

本当に時間が無いのだろう。それは有無を言わず、という感じで去っていくようにする。

「そうそう。この店の名はなんと云う、店主よ」

「えっ？ あ、『魔術工房サンパーニャ』です」

少女は一瞬驚いたような顔をするが、すぐに笑みを浮かべ「また来る」とだけ言い残し去って行った。最後の驚きはきつと、お姉さんが工房主とは思わなかったからだろう。

「な、何か凄かったね？」

「まあ、儲かったと思えばいいんじゃないか？ ……金貨30枚とかだけだ」

この前道具のアイデアを売ったときよりも高い。魔具を売るよりは安いものの、安い魔術品が銀貨50枚から、と考えると破格の値段だろう。

「というか、流石にこれは貰いすぎだ。

「ソ、ソラくん。や、やっぱり返したほうがいいんじゃないかな」

金額を聞くとお姉さんが震えだす。大金過ぎてお姉さんは不安な
んだらう。

「そういうわけにも行かないだろ。どうせ追ってももう此処を離れ
てるよ。引き止めて説得するにも悪い。返すなら次回来た時だな」

あの少女がただただ淡々と何もかもこなすようには見えない。少
なくとも初対面の人間にわざわざ非礼な行動をするようには見えな
い。

なら、本当に時間が無かったんだらう。でなければ腕輪のことや、
工房のことについて何かしら尋ねてくるだらう。

となれば、返すにしたって今は無理だ。向こうは納得して金額を
出している。それにけちをつけるのもどうかと思うし。

「じゃ、じゃあソラくんが受け取って！ 売れたのはソラくんの作
った魔術品だったし、対応したのもほとんどソラくんだったよね！」

そんなにお金が怖いのか、俺の手を包み込むというか開かせない
ように両手で俺の手を握ると、良く分からない主張をし始めた。

「いやいや。あくまで売れたのはサンパーニヤの商品だろ？ なの
に俺が受け取ってどうするのか」

「だ、だってほら。おかしいでしょ！」

お姉さんを宥め聞いた話によると、少し前に久しぶりに友達が家に遊びに来たらしい。

そこでご両親が居なくなつた事に気づいた友達にそれ以降の生活を根掘り葉掘り聞かれ、心配され、言わなかつたことを怒られながらも話を続けていたが、俺がバイトを始めた頃の話になつて徐々に黙り始め、最終的にはこつ酷く叱られたそう。

子供を長時間拘束する割には賃金が安すぎ、休みが少なすぎ、そもそも頼りすぎ、とメタメタに怒られたお姉さんはその友達に色々なことの改善をするよう言われていたそう。

その割りに色々頼られていた気はするが、何処まで自分でやるべきかまだ線引きが出来ていないんだろ。

といったこともあり、今までのポジション関連の売り上げやポジション、運搬のアイデアを売った金額の全てをサンパーニヤのものにするのはおかしい、という主張らしい。

「それは分からなくも無いけど、けどこれを受け取れって言うのも変だと思っただけ」

何せ俺が知っている中でもお姉さんが再開したサンパーニヤとしての売り上げすら越えている。

それを貰うのは気が引ける所の話じゃない。

「返す可能性だつてあるんだし、お姉さんが持つててくれ。俺は銀行の口座もないし、こんなにあつても必要ない」

そういえば俺の鍛冶師の審査は何時になるんだろ。鍛冶師ギルドでは準備が済み次第人が迎えに来るとい話だったが。

忘れられている、ということは流石に無いだろ。一応俺も色々と活動してきているつもりではあるし。

となると、何かしらで不手際があるのか、それとも遅くなっている事情があるのか。

せめて説明くらいはしてもらいたいものだが、後数日待つてみても来ないようであれば、再度出向いてもいいだろう。

渋るお姉さんに、もし返すことになって返せる見込みはある？

と聞いたら首を振ったのでそのままお姉さんの口座に入れる事にした。

「じゃ、今日はもうそろそろ上がるよ」

その後、色々話し合いながらもバングルを1つ作り終えたところで手を止めた。

外は既に暗い。話し込んだ、というのもあるが精力的に作った結果がこれだ。

出来上がったのは『レジェンド』でも最高位にあった装飾品の内の1つ、『熾天使の祝福』セラフ・イム・プレスのレプリカ。

模造品とはいえ、赤銅色に輝くそれは4つの翼が刻まれ、2つの翼で両端が構成されているし、それ以外にも細かな細工が立体的に施されている。

とはいえ、これは魔術品ではない単なる腕輪でしかないのだが結構な手間がかかっている。

軽さとそれなりの耐久性を追及するのは結構大変だ。本来ならこれはオリハルコンで作るから価値は相当なものだが、あくまでレプリカ。他のものより少し値段が張る程度だろう。

本来ならこういったものはアクセ売りと被るのだが、あくまで魔術工房。こういったものも作れるという目安にするにはちょうどいいだろう。

肝心のお姉さんは、まだ練習中といった所だが。

お姉さんと別れを告げると一路家を目指す。どうせ露店に寄っても何も買えないのだ。それならさっさと帰るに限る。

一週間ぶりの休み。どう使うかは明日ゆっくり決めればいいたろう。

そういえば、結局待遇の改善の話はどうなったんだらうか？

第12話 作成、作成（後書き）

久しぶりの更新です。

…絶賛スランプ中。暫く更新速度落ちそうです

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

2011/9/27

誤字等修正しました。エイツール様、独言様、ありがとうございます。

第13話。 雨の日。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

総合評価が15000ptを超えました！
読んでいただいている皆様に感謝です。

第13話 雨の日。

規則正しく窓を叩く音で目が覚めた。

外をふと見ると、そこには弱いが確かに降り続ける雨がかった。

このままごろごろしていたかったが、雨とは言えせつかくの休日だ。

無意味に過ごすのもなんだし、起きてしまおう。

寝起き独特の陶酔感というか、まだ半分寝ているんじゃないかというか。

そんな頭がはつきりしていない状況で歩くのは何となく気持ちがいい。

ぼんやりとしながら歩いていると、ホールで父と母が何やらどたばたとしている。

喧嘩か？　とも一瞬思ったが、万年新婚夫婦のような2人が喧嘩をしているところなんて見たことが無い。

「父、母、おはよう」

2人は俺に同時に「おはよう、ソラ」と挨拶を返したのち、またばたばたと何かを用意している。

聞くところによれば、今日の昼過ぎにでも町に村の人がやってくるそうだ。

いつも通りであれば露店や店、あるいはギルドで物を売り、一泊したのちに幾つかの品物を購入して帰るそうなのだが今回はうちに泊まり、それで帰るとのこと。

大きな馬車が入り、その分行き帰り両方でそこそこの荷物を運べるため、もしかしたら数泊するかもしれない、と父宛てに手紙

が昨日の夜に届いたそうだ。

この世界の手紙は届くのが遅い。手紙の配達はあるにはあるのだが、高いうえに確実に届くとは言えない。

そのため、ほとんどは旅人が商人にそういったものを預けるらしい。

今回はいつも村に行商に来ている商人が届けてくれた。

どうせならそのついでに売れるものも売ってしまえばいいのに、とは思うのだが今回は初めてなので全部自分たちで売買を行い、成果を見るようだ。

そのため、朝早く両親は起き、出迎えるための準備をしているそうだ。

恐らく到着するのは幾つか商品を捌いた後になるだろうから夕方ごろになると思う、と父に言われた。

俺も手伝おうとしたが、せつかくの休みだから、と手伝わせてもらえなかった。

だからということでもないんだが、朝食を取った後はレニと遊ぶことにした。

このところろくに遊べていないし、朝も夜も休みの日以外は食事を一緒にすることも難しい日もある。

何というか、本当に働いてばかりのサラリーマンみたいでどうも悲しい気がする。

サンパーニヤの現状を考えると今はまだまだ頑張り時だし、暫くは仕方ないんだろうが。

「おにいちゃん、レニとあそぶのっ!」

小さい身体を総動員して遊べと要請するレニは本当に可愛い。

将来が楽しみでもあり不安でもある。というか、レニに恋人が出

来た際に俺は我慢できるのだろうか？

今の俺なら低レベルの魔術ですら相手を。まあ、そんなのは今後だ。今は気にしないことにしよう。

家の中の追いかけては準備をしている両親の邪魔にしなければならないので、俺の部屋に戻る。

レニはまだ両親と同じ部屋だ。部屋はあまりまくっているが、こんな小さなレニに夜1人で寝るなんて酷な事はさせられない。

むしろ俺と一緒に寝たいところだが、そういうわけにも行かない。帰ってくる時間はいつも遅いし、絵本の読み聞かせも出来ない。読むことは出来るのだが、何というか棒読みしか出来ない。だからそれは父の役目だ。

日々の出来事を話してもいいのだが、レニに何処まで理解できるか。

いつもにこにこして聞いてくれるのだが、理解にまでは至っていないようだし。

それに夜寝る前に長々話すのはよくない。内容もあまり面白くは無いだろう。

と、結局日々の出来事を話しつつ考えているのが現状なのだが。レニは楽しそうだが眠たそうだ。そろそろ昼寝の時間だろうか？

「レニ、眠いのならお休み」

「う、ん……」

頬を軽く撫で、そういうと眠いのか頷いているのか。上半身ごと振りながら頷く。

抱きかかえると、落とさないように気をつけながらそっと立ち上

がった。

後は両親の寝室に運び、寝かせると静かに部屋を出る。

天使の如き寝顔は何時間でも見ていたかったが、そうも行かない。さて、久しぶりに料理でもするか。

かまどにはぐつぐつと沸くお湯、それと近くに木で作った簡易燻製窯。

木製だが、ダンボールでも燻製窯は作れるらしいし、どうにかなるだろう。肝心の魚自体小ぶりの3匹しか買えなかったが、まあ何とかなるか。

燻製に関しては『促進』を5重にかけている。効果が重複するか分からないが、試して損はないだろう。

流石にカビを安全に作れる可能性は無いため、枯節は今の所諦めている。

チーズがあるから醗酵に関しては技術として認識はされているだろうが、他の発酵食品はほとんど見たことが無い。

今の所ほかに見たことがあるのは紅茶にヨーグルト、酢くらいか。

醬に関しては全くみたことがない。穀物類に関しては生か乾燥しているものかしかない。

納豆に関しては何とか自然発酵だけでどうにかなるだろうが、味噌と醤油に関しては本当にどうしたらいいものか。

むしろあれは本当に長い時間がかかるものだ。作り始めて1年以上は最低待たなければならぬし、成功させるため、安定供給させるため、と考えれば何十年かかってもおかしくない。

そう考えると少しやるせなくなるが、今だけの問題でもない。何とかなるだろう、と楽観視する以外今はどうとも出来ない。

と、出来ないことを長々と考えても仕方ないので出来ることを考
える。

鰹節に関してはこれでどうにかなるだろう。これも食品のため登
録して一気に広めるということは出来ないが、こっちは利権がどう
ということもないだろう。

パンなどと違って趣向品の一種になるだろう。確かに俺は出汁の
しつかり聞いた汁物も好きだがこっちのブイヨンのスープも好きだ。
主食がほぼパンかミルク粥など少ない種類なのに比べ、おかずは種
類はそこそこにある。そういうわけで鰹節は適当に広めても競争は
起こり辛いだろう。

さて、何だかんだでもう昼の時間だ。

母がこっちに来ていないということは昼を作る余裕も無いのかも
しれない。

そうであるのなら俺が昼を用意しよう。

本来なら色々作りたいが、昼までは時間が無い。

パンと簡単なサラダ、後は何かつけあわせを適当に作ろう。

サラダは生節とたまねぎのみとシンプルなものにしてみた。

新鮮なものなら叩きにしてもいいんだが、そこまで新鮮なものは
置いてなかった。

保存技術の問題もあるのだろう。

冷蔵庫の導入も真剣に考えたほうがいいのだろうか？

甘味類が少ないのもそういった問題があるだろうし、夏場は鮮度
どころか腐るのも心配だ。

内部を金属にして、後は樹脂を使って何とかしたらいけるか？

こっちは大量生産が問題になるだろうが。

後は運営方法か。魔術が使えれば問題ないのだが、それ以外だ。

魔法陣を使えばその問題は解決しそうな気がするが、魔術ギルド
にそんなことで儲け話を持っていかせたくないという気持ちもある。
電気を作るというのも無理だ。というか、色々なところから妨害

が入るだろう。

そこまでするつもりはない。まあ、魔術品で代用できるのであれば登録してしまうつもりだが。

また仕事に思考が戻るのを無理やり軌道修正する。

確かに必要なことではあるが、お姉さんにちゃんと休むように言っている以上俺が考えすぎるわけにもいかないだろう。

少し反省して、料理に戻ることにする。

生節は燻製したものとそうでないもの両方を別々にサラダとして作った。

後は少しだけ残して、生節を切ったものを盛った。

刺身醤油で食べればいけそうだが、高望みは出来ない。味わいの確認を行うにとどめよう。

起きてきたレニと両親で昼を摂る。

母とレニは燻製をしたものを、父は茹でただけの生節を使ったサラダが気に入ったようだ。

3人とも味付けしていないものは口に合わなかったようだ。

特にレニは茹でただけのものは、全く口に合わなかったようで少しだけ口にして後は見向きもしなかった。

日本酒……残念ながらそれすらないが、それには合いそうなのに。スープは普段使わない味付けらしく、これは全員満足してくれた。俺も満足だ。味噌汁の出汁にはこれだけでも大丈夫そうだ。

出汁が出来るだけでもバリエーションは大きく広がる。今まで我慢していたものも作れるようになるだろう。

荒節が出来ればさらに広がる。暫くは料理の研究三昧だろう。それだけでもワクワクしてきた。

というわけで、もてなしの料理も俺が作ることに決め、母に伝え

ておいた。

母もまだ手が離せないんだろう。食材を買うお金だけ渡してくるとまた作業に戻っていった。

分厚い革の外套を羽織、雨の町に行く。

雨脚は強くなっており、そこそこ身体を打つ力も強い。

長く外にいたら身体の熱も持っていられるだろう。それに、いつも使う鞆と買い物用の袋を用意したとはいえ、食材もびしょぬれになりそうだ。

流石に中央通りも人通りは普段に比べ少ない。雨の中をあまり行動したくないのだろう。

何本か生えている大きな木の下にひっそりと出店が出ているくらいでそこにもあまり人は居ない。

出店も雨よけの屋根がついているものだけだ。普段見るそれより随分と少ない。

そんなところに食材を扱っている露天が立っているわけが無い。商業区へ足を運び、目に付いた食材を扱う店に入る。

と、そこには見た顔が1つ。アンジェだ。カウンターに暇そうに座っているところを見ると、家の手伝いなのだろうか？

「いらっしゃ〜い……」

気の抜けた科白。完全にやる気はなさそうだ。外は雨だ。この様子だと今日は客もほとんど来ていないんだろう。

こつちを向く様子も無い。幾ら防犯用の魔法陣が発動しているだろうからといって気を抜きすぎじゃないだろうか？

「せっかくの美少女がだれっぴりのせいで台無しだぞ」

「ナンパなら他にして……って、ソラじゃん」

「おう。見事なへだれっぷりだったな」

からかうとアンジエは顔を赤く染める。恥ずかしがるくらいならしなきゃいいものを。

「そ、それはともかく今日はどうしたのよ。ボクは暇じゃないんだからね?!」

「買い物だよ。雨の中油を売るほど暇じゃないつもりさ」

外套を脱ぎ、店の入り口においてあったコート掛けに引っ掛ける。そうしないと店内がびしょぬれになってしまっただろう。

「やっぱり何だか生意気。ボクと同じ年の癖に」

年上なら構わないんだろうか? いや、口にするかしないか程度の差でしかないんだろう。

「まあ、そういうな。自覚はしてるよ」

「じゃあ直せばいいのに」

「直せたら苦労はしないよ。まあ、友達からの忠告だからありがたく受け取るけど」

笑って見せると何故かアンジエは顔を赤くする。笑顔を向けられるのに慣れていないのだろうか?

「良くわかんないやつ」

ふん、とアンジエは顔を背け不機嫌そうだ。だが、そうしながらもちらちらと俺の姿を窺うように視線をこっちに向けてくるのは面白いが。

「何か薦めはあるのか？ 新鮮なものとか、美味しいものとか」

「その葉物野菜、煮たり焼いたりしたら美味しいらしい。あとそっちの黄色いやつ。それも焼いたら美味しいんだって」

野菜の名前が分からないんだろうか？ 綺麗に籠ごちに整頓された野菜には確かに葉物と黄色いものがある。

葉物は白菜に似たもの、黄色いものはカボチャのようだ。クリーム煮かシチュー、あるいは温野菜サラダにしても良さそう
だ。

後はトマトにブロッコリ、それにバジル、あとはヤマイモ。全てもどきだが、味も似ているため（本来の名前は別にあるそうだが）そう呼んで構わないだろう。

「実はソラって料理できる？」

「何を持って実はというかは分からないが、一通りは出来るぞ？」

面倒なコース料理は作るつもりは無いが、家庭料理程度ならごくごく普通にこなせる。

料理は他の趣味と違って裏切られることはほとんど無かったため、俺が長く続けてきたことでもあったし。

「魔術工房で働いてるそうだからもつと職人みたいなものだと思っ
てたけど、意外ね」

「職人でもある、っていうのが正しいよ。まだまだ修行中の身だけ
だよ」

変な噂を立てられても困る。そう言っておいて問題はないだろう。

「ふうん？ いいけどさ。この雨の中出歩くなんて大変ね」

「俺はこついう日も好きだけどな。アンジェにも会えたし」

「ちよっ?! な、何言ってるの!?!」

耳まで赤くしたアンジェが叫ぶ。友人に思わぬところで出会えた
ら嬉しくないだろうか？

「ん？ 別に事実をそのまま話したただけだけど」

首を傾げると、アンジェが今度は憤怒の顔になる。何か気に触る
ようなことを言ってしまっただろうか？

「あんと話していると疲れるからもう帰れっ」

どうやらすっかりと怒らせてしまったらしい。代金だけ渡すとそ
そくさと退却する。

次会った時にでも謝っておこう。怒っている女性と言葉を交わす
ということは相手の怒りを増させるだけだ。

なら落ち着いたときに再度謝ったほうがいい。買い物もまだ残っ
ているし、さっさと終わらせてしまおう。

その後肉屋で良い肉を仕入れると、急ぎ足で家に帰る。焦って転んでしまうわけにもいかない。

ゆっくりと慎重に、だが確実に。

と、家に着くと既に家の前に見覚えのある馬車が止まっている。父の買った馬車だ。

家に入れていないということはまだ入っていないのだろう。

まあ、家には住んでいる人が招かれた人以外入れない結界を組んでいるから当然だが。

「何で村長が此処に？」

「あん？ おお、ソラ坊か。いや、入ろうにも門が開かなくてな。どうしようかと思っていたところだ」

門の前には雨にぬれたおっさんが1人。言うまでもなく『ユグドラシルの葉先』の村長だ。

「随分と早かったんですね。……馬小屋がないんですけど、簡易の幌でも持ってきてます」

俺は門扉を開け、そのまま館に向かう。村長が何か不思議そうな目で見てくるが、説明は後で良い。

家の中に入ると、掃除をしていた父に来訪を告げ、俺はまず厨房に荷物を置くと2階の物置と化している部屋から大きな布と長い木の棒を抱える。少し持ちづらく重いが、まあ何とかなるだろう。

来ていたロソンさんと猟師団団長、ダンさんと協力して馬用の簡

易な幌を張る。

とはいっても雨が流れるようによく学校などでも使われるような真ん中が高いテントだ。

棒は2本を括っているのでそこそこに強度はあるだろう。

それに馬を繋ぐと外にまでは出て行かないはずだ。

馬は雨はあまり好きじゃないだろうし、草も適当に生えている。

それから合計6人の来客とともに家に入る。一度来たことのあるロソンさん以外は驚嘆の声を上げている。

まあ、値段に見合わないほど立派な館だ。気持ちは分かる。

挨拶だけしてあとの案内や接待は父に任せよう。俺は外套を脱ぎ、着替えて厨房に戻る。

今日は豪勢に行きたいと思う。だが、下準備すら出来ていないので急がないとまずいだろう。

とりあえず忙しかった。

作るものはシチューにピッツアに温野菜のサラダと決めたのだが、作るものが多い。

そう考えると少しやる気は失せるが、両親はまだやらなければならぬことは残っている。

なら料理を作れるのは俺くらいだろう。雨でなければ外で食べることも考えに乗せられるが、此処までの雨だと出るのも嫌だ。

おかげで窯もかまども総動員だし、合計10人分の食材で台も一杯になっている。

シチューとサラダに関しては切って茹でて位なのでそう手はかからないのだが、ピッツアはそうもいかない。

焼ける量を考えても2〜3枚は焼かなければならない。それを全て同じ具というわけには行かないので、マルゲリータと、炒めた肉にマヨをかけたもの、あとは干し肉に刻んだ野菜と一緒に炒め、チ

ーズを乗せ、トマトソースとんにくをたっぷりかけたものを半分
に折って焼いたカルツォーネ風だ。

そもそもカルツォーネを他のものと同じ大きさで作るとか窯で焼
くとか色々突っ込みどころはあるかもしれないが気にしない。

美味しければそれでいいのだ。

そもそも三枚のピッツアを同時に焼いていたせいで窯から目が離
せなかったのだが、何とかその間にホワイトソースも作り、煮込み
シチューも作った。

サラダに関しては軽く塩を振り、適当に作ったドレッシングをか
けておいた。

作り終わった頃には雨の影響もあり外は暗い。時間的にも夕食に
は間に合っただろう。

「それで、パンの売れ具合はどうですか？　今回は荷物も結構積ん
であつたみたいですけど」

「ああ。おかげで順調だ。最近は関わる人数も増えてな。一式金貨
3枚で商人に売れるから狩りや布作り以外はほとんど関わってる状
態だ。

村人もちつたあ増えたし、良いこと尽くめだ！」

アルコールが入って上機嫌なのか、赤い顔ではしゃぐ村長。

元々銀貨50枚で売っていたものがそれだけの価格で売れば相
当利益は上がるだろう。

人件費を多少かけてもそれでも10セットも売れば村で稼げる
金額としても結構なものになる。

しかも村長の喜びようを考えるには白銀貨1枚、100万R^{ルード}以上
の稼ぎはでていると見て間違いない。

何時までそれが続くかは分からないが、喜ばしいことだろう。あとはもう少し稼ぎ口を見つければもつと人は増えるだろう。

人が増えれば出来る産業も増え、村の規模も増える。そうなるともた人が増え、とある程度まで成長はしていくだろう。

まあ、それが今では貴族相手に金貨20枚で売れているとのことだ。その事実を村長が知っているかは別だが、もう暫くはその稼ぎも出来るだろう。

そんなに高ければ平民に届くのは何時になるか分からないが。

「それは凄いですね。僕も嬉しい限りです。ただ、団長。あの荷物、まだ売れてないみたいですね」

ちらつと見えた荷物は毛皮などがほとんどだ。肉の類は見当たらなかったが、詰んできたもののうちほとんどがまだ売れていないんだらう。

「この雨の中売れるものも売れるか。この調子なら明日の昼にでも晴れるだらうから、その後に露店にでも売りに行くよ。」

それにしても、料理が美味い。クリスさんもまた上達したな」

そうやって寝めるダンさんに母は苦笑する。今回母は料理に関しては何もしていない。

まあ、言わずに自分の手柄にしたらいいと思う。

「今回はソラが作ってくれたんですよ。私も知らない料理でびっくりしたんですけど、美味しいですよ。これ」

苦笑したまま母が答える。……なぜ素直に答えるか、この母は。

「ソラ坊、お前こんなのを作れるとは大したもんだな。何処で教え

てもらったんだ?」

「えと。適当に、です」

本当のことは言えない。とはいってもこれを提供している店はない。

パニーニが近いとはいえ、パンの生地を薄く延ばし、焼いた後ではなく焼くときに一緒に火を通すというものは無い。

あっても軽くパンに焼き色をつけたり、具材を別々に焼くだけだ。それも火にかけて鉄板の上で、だ。

アレはどっちかといえばサンドイッチだ。こういった料理は今の所お目にかかっていない。

だから何処何処で、ということと言えない。

「ほお。適当で作れるのか、ならパンも他のものが作れるかもしれないな」

どうやってそういった発言に飛ぶかは不明だが、どうやら村長が此処に来たのはそういったことも視野に入れているからだろう。

本来、村長が村を空けることはほとんど無い。村長になる前までは色々狩りをしたり、見聞を広めるというために度々ここ『学術都市バーレル』にも来ていたそうだが、村長になってからは忙しく村から離れることはそう出来ないとぼやいていたことがある。

なら、今回初めて自分たちで量の多い売買を行うということもあるが、うちに意見を聞いたりすることも含まれているんだろう。

対外的には母が作ったことにして貰っているが、実際は俺の持っている知識を出したに過ぎない。

もちろんパンのレシピだけでも数十種類に及ぶ。ただ、作るのが面倒だったり材料費が高くなったりして作れないものが多い。

あとはパイやこのピッツァのように小麦粉を使ったレシピは多い。麺などもパスタに限らずうどんやラーメンもその対象になるだろう。

ラーメンは塩かとんこつのみになるだろうから醤油フリークスの俺としてはもう少し我慢するところだが。

というか、うどんやラーメンのようになするものは受けが悪い気がする。

あれは麺をすすらないというよりも、すすれないため人気が無いらしいがそこはどうかだろうか。

まあ、そんなことはどうでもいい。

というか、此処で簡単に教えると俺の野望の1つであるパン料理のバリエーションの増加が望めない、とも思うが広める時点である程度選択肢がなければさらに増やすという手段は見えない気がする。今も焼いたりすることはあっても揚げる事は選択肢にはなさそうだ。

チユロスがある以上、全粒粉で作った塊を揚げるという選択は出来ても、既存のパンをあげるということまでは思想がいかないのだろうか？

カレーパンはカレーがないため無理だとしても、ピロシキのようなものは受けが良さそうだ。

手軽に食べ歩きも出来るし、何よりも1個で結構お腹にたまるし美味しい。

後はドーナツもそうか。オールドファッションにはちみつでもつければ十分間食になる。

とはいえ、あれは確か砂糖が使われていたはずだ。はちみつでどれだけ代用できるかどうかは不明だが、そこそこ美味しいものが作

れる気がする。

力カオがあればもつといいんだが。むしろビーツを育てるのを薦めた方がいいかもしれない。

あるかどうか分からないものよりも確実にあるもので価値のあるものを作ったほうがいいだろう。

というわけで、幾つかアイデアは出してみた。あくまでどういったものという具体的なものではなく、案だけだ。

町で見かけたものや食べてみたいと思うもの。そういったものをあくまで子供の視点で可能そうなものだけを言葉を選んで薦めてみる。具体的なレシピや調理法が分かるものは幾らでもあるがそれでは意味が無い。

それでどういったものが生まれるか、それが俺の楽しみでもあるんだから。

結局、料理が全く残らずに綺麗に無くなったところで俺は厨房に引っ込んだ。

話から逃れるためと、明日の仕込みのためだ。

昼の分はいいとしても、朝の分に関しては用意しないとまずいだろう。

と、同じ考えであったらもう母も合流し一緒に料理を作る。

「母。何故あの場で俺のことを？ 言わなければ分からなかったはず」

「村長さんが来て、どうやってあの料理を作ったか、って顔してたから。」

私は作り方分からないし、聞かれるなら正直にソラが作ったって言ったほうがいいよね」

そういつて母は得意げな表情をする。時代と場所が合えばドヤ顔すんなつ、と突込みが入ったところだろう。

「母は作り方は分からない？」

「うーん。何となくは分かるんだけどね、あの赤いソースとか、良くわかんなかったよ」

でも美味しかったけどね、と付け加えられた。

「まあ、母にもレシピは考えて欲しいし、俺の作ったもののレシピでよければ教えるよ。時間かかるかもしれないけど、平気？」

頷く母に、レシピを伝える。

洗い物をしたり、明日の朝食の準備をしたりと中々忙しいが、それでも難しいものではなかったからあまり時間はかからず教えられたと思う。

お姉さんだったらこれですら教えるのに時間がかかる気がする。

というか、お姉さんは料理はどうしているのだろうか？ 少し不安も過ぎるが、蓄えはそこそこにあるはずだ。食べれないということとは無いだろう。

それは機会があれば聞くことにして、今日は風呂にでも入って寝ることにしよう。

着替え、食事を摂って体の熱は戻っているが髪は生乾きだし、何となく気持ち悪い。

村長たちにも風呂を勧めたらしく、汚れていたため掃除をして湯を張りなおしたのは余談だ。

起きて、窓の外を見る。弱まっではいるが、まだ無視できる程度じゃない。だが、雲の動きを見る限りではそう長く降らないだろう。念のため昼だけは用意しておくか。それと、露店はどうするか。そっちに関してはお姉さんと相談して決めればいいか。

いつもより人の気配の多い館に少し違和感覚えながらも、朝食を済ませ、昼を準備し、鞆に詰め、念のためそれをさらに防水加工の施された革で包み、外套を羽織。ようやく準備をこなし家をでる、前に式を一部変えておく。

今敷地内にいるものが今日中であれば出入りを自由にしておいた。延長するのであれば期限を延ばせば良いが、それは今日の夜に分かるだろう。

人限定にすると馬が出入りできないので困る。母にそれだけ伝えると、動物を新たに買う場合は帰るときにした方が良いとアドバイスをしてもらおうようにお願いした。

当然のアドバイスではあるから勘ぐられる心配はないだろう。

サンパーニヤに着くと、相変わらずお姉さんは既に来ている。いつもどれくらいの時間に来ているのだろうか？

「おはよう、お姉さん」

「うん。おはよう、ソラくん」

外套をコート掛けに引つ掛けると鞆も作業台の上に置いておく。と、作業台には特に準備されているものは無いようだ。

「今日は露店はなし？」

「どうしようかと思ってたんだけど、ソラくんは出したい？」

「今の天候なら昼前くらいには止みそうだから、それからだったら出してもいいかなって。」

布を広げてもダメだろうから椅子と台くらいは持っていくつもりだけ。」

両方小さいものだ。普段使っていないものが幾つか工房の片隅に寄せられている。

どちらも木製のしつかりしたものだから問題ないだろう。

「うん。それなら平気かな。じゃあ、雨が止んだら出かけるってことで良い？」

頷くと、俺とお姉さんはいつも通り露店の準備を始める。

今回はポーションとアクセだ。アクセはサンプルの腕輪とネックレス。

それと幾つかのサンプル画だ。正直こっちは今回はそこまで役に立たないだろう。

何処まで作れるか分からないアクセ売りにセミオーダーなんて出さないと思うし。

雨が上がった後にお姉さんと昼食を摂る。俺が用意していたものに妙に遠慮していたが今更だ。

早くしないと売れ行きが悪い、と言ったらさっさと食べてしまい準備をし始めた。

低い椅子と台を設置し、その上にいつも敷いている布をかけ、ポーション、アクセ、サンプル画、符を用意し準備は完成。

雨が上がった後すぐ位だったので売れるかどうか不安だったが順調に売れていく。

客も固定が付き始めたらしく、見覚えのある客が今日はしないかと思っただと言っていた。

どうやら露店を出す日も知られているらしく、雨だったから心配した、といった声も何度か聞こえた。

ただ、アクセの予約はあまり取れない。やはり実物が無いのと予約がネットになっていくらしい。

その代わり何度かピンクシルバーのバングルや『熾天使の祝福・模造品』レプリカを売ってくれというのは何回もあり、そちらは何とか予約になったのだが。

あとはお姉さんが作った中でも一番出来のいい、真鍮の指輪が売れた。こちらはお姉さんが自分の作品としては始めての売れたものということであつた。おかげで危うく客に逃げられそうになつたが、予約にしても良かったのだが、せつかくだし売る事にした。予約で落ち着く場合と販売した方が言い場合両方がある。色々パターンを試す必要もあるだろう。

あとはリストにないもので作れるかどうかという問い合わせにも出来る限り答えることにした。

特に宝石の入ったペンダントやリングなど、恋人に送るプレゼントなどが人気みたいだから女性相手の商品を多く作る方がいいようだ。

バレッタやかんざしなんかも売れるか？ これから寒くなるだろうから防寒具や雨具も作りたところだが、それに手を出すと単なる雑貨屋になるか。

まあ、ポーシヨン屋が今度はアクセサリ売りになったのかと言われた時点でこの店の特徴なんてあってないようなものなんだがな！……ふ。俺としたことが同様しすぎていたようだ。

何か誤字があったり口調がおかしかったりするが気にしない。気にしないことに決めたのだ。

商品売り終え、予約が10件に到達したところで今日の露店は終了だ。

途中で村長が現れ余計な茶々を入れてきたが黙殺した。

お姉さんが異常に照れていたし、営業妨害でしかない。

何だかんだでポーシヨンも買っていったし、心配してくれていたのは想像が付くから別に邪険にはしないが。

で、村長たちは売れ行きがあまりよくないそうだから今日も泊まるらしい。

今日の売り上げはポーシヨン100個とアクセサリが8個並べたうちの5個が売れ、計19214R。アクセは素材のばらつきがあったため前後はあったが、そこそこの額で売れた。

一番高かったのは俺が作ったシルバーのペンダントだ。

宝石を嵌められる様にしたため、貴族か豪商の使いだろう。やけに高級そうな燕尾服を着た爺様を買っていった。

そうだったのは、本来もっと良い宝石商でも買うと思ったんだが。意外としか言いようが無かった。

予約分はちゃんと売れば金貨に届きそうだ。その分売り上げは上がったも、利益率は随分と下がるんだが。

暫くはポーシヨンと両方売らなければならぬが一ヶ月でどうに

かしたい。

まあ、そこそこの売り上げ金額なので急いで銀行に預け、そのままサンパーニヤに戻りながら考えたことだが。

「ソラくん、お願いがあるの」

サンパーニヤに戻り、予定の品のリストと現状の材料を確認し、足りないものに関して加工をしている中もじもじとお姉さんが手を動かしながら俺にそう言ってきた。

「うん？ どうかした？」

お姉さんは桜色に頬を染め、目も少し潤んでいる。まさか、あれか。俺を萌え殺そうとしているのか？

「あのね。パンの作り方を教えて欲しいのっ！」

うん。そんな話じゃないかとは思ってた。むしろ予定調和か。

「いいけど急にどうして？ というか、一応あれ製法も売り物なんだけど」

といつてもお姉さんにはそのまま渡すつもりだが。それは止めた方がいいのか？ 一応そこそこの価値は今するらしいし。

「そ、そうなんだ。…ち、ちなみに買えば幾らくらい？」

「一式金貨3枚で卸してるってさ」

それでも7倍近い。暴利といたいところだが、正直ポーションも似たようなものだ。

「き、金貨3枚？ 露店の2回の売り上げだよっ?! 高いよっ!」

お姉さんの感覚で間違いはないだろう。露店も売り上げであって利益ではないのだが。

まあ、あっちもそれなりに原価はかかっているだろう。原価で言えば銀貨2〜3枚と言った所だろうが。

村の人もこれで変に味を占めなければいいんだが。

今のところは身なりも妙に綺麗になっていたりしていないし、必要以上に太っているような気配も見えない。

ただ、あまり利益を上げすぎて本来の彼らの気質を失って欲しくない。その原因の一端に俺がいるのは間違いないんだし。

だからと言って俺に何が出来る？ 懲らしめる？ それとも断罪をする？

どちらも、俺には恐らく出来るだろう。だが、そんなことをしてどうなる？

俺は満足をすると同時に後悔もするだろう。俺自身を守るためにそんなことをしても意味がない。というか、そうなるのであれば、それは俺が村に対し売ったことが一番の原因だ。

商業ギルドに売りつけるなり自分で作って売れば此処までのことにはならなかっただろう。

とはいえ、盗らぬ何とやら、だ。問題はまだ見えていない。今の時点で色々考えても仕方ないだろう。

「ソラくん？ 聞いている？」

「あ、ああ。それで、お姉さんはどうする？ 金貨3枚とまでは行

かないけど、ある程度の資金は必要になると思っただけど」

買うか買わないか。それは製法だけだからそこまで高くならないと思うのが市場だろう。

だが、実際はそれが一番高い。少なくとも俺が思っるのはそうだ。肝心なのは製法であり調理法であり、仕組みなのだ。

それがわかっていなければ前のお姉さんのパンのようにへんてこなものが出来上がる。

だから、製法だけを売るというのも手段としてはある。レシピ本のようなものだ。

パンだけの製法を纏めたものを売れる可能性もあるが、製本技術はともかく印刷技術がさっぱりな現状においては本を大量に作るわけにも行かない。一般的だったwebを使っての配信なんてそもそも土台すらない。

だから少しずつの量をほんのわずかな紙に人の手を使って時間をかけて行うしかない。

イラストも絵心が無ければ描けないだろう。村長にそんな物があるとは思えないから、全て文章で書き写し、必要なところは口頭で説明を行うのだろう。

うん。これで広まるわけがない。

どうしても完成図はそれからは見えない。工程も完成図も見えないものを作ろうとするのは非常に困難だ。

だから見えない。だから作れない。だから道楽のものにしかかなりえない。

もどかしい。非常にもどかしい。なまじ、それをどうにかできると分かっている手段があるのが、ただ苦しい。

「こ、これでもダメ？　じゃ、じゃあ思い切って銀貨10枚でどう？！」

と、何やらお姉さんが肩で息をしながら騒いでいる。

どうやら俺が考え事をしている最中に値段交渉をしていたらしい。

「あー。じゃあ、それでいいや。ただ、お店のお金は使わないで」

別にお金は正直どうでもいい。レシピは確かに高いが、材料そのものは安い。

果物は安いし、小麦粉もあるだろう。買ったところで大した金額にならない。

ようは閃き代、アイデア料が高いだけだ。一式でまだ売れ続けているということは、何らかの改良が加えられているのか、あるいは村の人もしくは商人たちにそういった文句を考えるのが得意な人が居るのだろう。

そう考えると銀貨10枚は高いが安い。むしろ全部あわせてそれくらいでも将来的には可能になるだろう。

そもそも小麦粉も酵母も加工したものを売ればいいんだ。そうすると家で小麦を引く必要すらない。

であればあとは酵母とレシピだけだ。どちらも製法という意味では最初にいくらかお金が発生するだけで後はお金を取る意味もないだろう。

そういったわけで、お姉さんにはお店の金を使わずに、という条件をつけてみた。

その言葉のトリックに気付くかどうかはまた別だが。

「ええっ?!　そ、そんなこと言われても私お店のお金なんて、私のお金?　えっと、お店のじゃなくて私の生活費だよ。銀貨10枚も余裕ないけど、お、お給料入ってからでいいかな?」

というか、俺は今月の収益目標しか決めていない。極端な話、金貨5枚と必要な経費以外はお姉さんの手元に入れてもいいのだ。金貨5枚なんてとくに確保しているし、それを給料としていってお姉さんに支払われるかなんて決めていない。

今週で今月は終わりだが、その分とポーシヨンベルトなどの売り上げも加えると収益は金貨10枚以上は確実だ。

例の少女からの収入も加えると金貨40枚以上といったところか。後はどれだけ次月売り上げを出せるか。それは俺とお姉さんの腕次第といったところか。

あとどれだけ露店から店に客を引っ張れるか。

試験的にそちらも試してみるのもいいかもしれない。

「サンパーニヤって、ツケ利くんだっけ？」

にやり、と笑ってみせる。こうなったらいつそ意地だ。お金がどうという話じゃなく、お姉さんがどう考えているかを引き出してみせる。

「さ、サンパーニヤはつけも分割もダメですっ！でも少しだけ待つてあげるのは応相談だよっ！」

あまり変わらない気がするのには気のせいか。というか銀行がある以上そこそこの値段のものならつけなどせずに買えそうな気がするんだが。

「けど、これに関しては待つも何もないだろ？パンの製法は一度教えて覚えてしまえば簡単なものだし、それ以上に。常連ならともかく、それ以外の相手にお金の支払いを待つって言うのは正直感心できない。帰ってくる見込みのない金にもなりかねないからさ」

恐らくお姉さんのご両親がそういった方針で運営をしていたんだらう。

それはそれでいい。恐らくご両親はそういったデメリットなども踏まえたうえで行っていったんだらうし。ただ、お姉さんは商売気がないというか、良くも悪くも素直というか。

今の状態だと、何処までそれをしているのかという線引きが難しいだらう。

「で、でもそういつたのも大切だと思っただよ？ お客さんだつてわざとそうしてるわけでもないと思っし」

「でも、お金が足りないと分かった時点で諦めるか次回にするかって手段取るだろ？ 別にツケや後払いが悪いとは言わないけど、そもそも何回ぐらいの頻度で、どのお客がどれだけの金額を払っていないか把握してる？」

恐らく大金を踏み倒している人はそういないだらうが、返済をしていない人も居る可能性は十分にある。

まあ、お姉さんが把握しておらず、これからも特にそういつたことがなければ俺は気にしないんだが。そこまで気にする必要は俺には正直ないし。

「わ、分からないけど。でも、昔からしてきたことだつたし」

「そういつならそれでも構わないけど」

とはいつても見極めは必要だらう。というか、俺はお姉さんを虐めたいわけじゃない。

ただ、お姉さんはまだ不安定だ。技術の面でもそうだが、他にも

ならある程度支えることは俺にも可能だろう。やはりそこも見極めの必要があるが。

「う、うん。えっと、ソラくんもしかして怒ってる？」

「別に、って言ったら怒ってるように聞こえるかもしれないけど怒ってないよ。ただ、少し注意して欲しいだけ」

さて、今日引き受けた予約分の生産を始めるか。予約分をまず作って、その後にもたサンプル品も作って。そんなに作る時間はないが、少しは可能だろう。

次回はサンプルを売るべきかどうかな。実物がなければ売れないけど、予約を取るのにもまた実物がないと難しい。

本当は大量に作ってそれを売ったほうがいいんだろうが、そういうわけにも行かない。

商売ということもあるが、実戦でも使えるようなものは本人に合わせなければ長時間つけていられない。

アクセ売りとしては気にする必要も無いことだが、長時間の使用も視野に入れなければならぬ。

だからこそその調整、定期メンテは必要になるだろう。

そういう意味では少しぐらい支払いを待つことにも目を瞑れるんだろうが、どうしたものか。

というか、パンの話は結局流れたのだろうか？ お姉さんはこう

いった話が逸れて流れることも慣れていない。

このままだと時ソバの如く騙されかねないと思うんだが。

後、俺の待遇の改善はどうなったんだろうか。自分で恣意的に誤魔化した結果ではあるが自分の時間を取れないのもまた事実だ。

その間にネットワークスが出来上がったのは置いておこう。チェーン

は先に長いものを作っておいたから後はヘッドを作るだけ。だから慣れてしまえばそこまで時間はかからない。

魔力を籠めないよう気をつけながら成形し、宝石を嵌める。

今回は安いものだが宝石を指定されていたため、それも加えて作ることにした。

出来上がったものは認識札を括りつけておく。これは予約をしたときに客に割符をして渡したものの半分だ。

今はまだ客の顔は覚えているが、これが多くなった場合覚えらるる自信はさすがにない。

そのための手段だ。料金と品物を両方にかけておいて、元々書き込んである印を半分になるように切る。

何人かに感心されたが、そんなに珍しいのだろうか？

予約の入ったものを丁寧に作っていく中、お姉さんは考え事をしているのかずつと紙に何かを書きながらうんうん唸っている。

レシピは紙に残さないよう言っているので恐らくは違うと思うが、何をしているのだろうか。

気にはなるが、今は手が離せない。軽く意識を向けることは出来るが、それ以上は無理だ。

あらかた作り終え、後は研磨するだけという状況でお姉さんが俺に近寄ってきた。

にこにこ嬉しそうに紙を俺に差し出してくる。

「これ、見ておいてね」

何処かつきつきとした表情でそそくさと自分の作業スペースに戻り、作業に取り掛かるお姉さん。

読んでみると、それはどうやらサンパーニヤの今後の改善案、の

ようだ。俺の待遇についても触れられている。

簡単に纏めると、今後3ヶ月の売上目標とそれに対する商品の構成、作業分担、それと俺の仕事の時間の大幅短縮。

休みは週1から追加して隔週で1日増える。それと週の3日目は半日、昼まででいいそうだ。

正直嬉しいのは嬉しいんだが。

これは何か違う気がする。これでまわそうとすると人を増やすか、お姉さんの負担を増やすかだ。

人を増やすことに関しては言及されていないため、単にお姉さんの負担を増やすとっているようなものだ。

というわけで、添削してお姉さんに返しておいた。

売上目標はいいとしても、商品構成が若干甘い気がしたのでそこを要検討にして、あとは俺の待遇に関しては隔週の休み追加のみ。暫くはきついがそれで対応するしかない。

余裕が出れば1人くらい雇いたいところだとは思いますが、家事手伝いならぬ鍛冶手伝いなんて供給はあるのだろうか？

志願する人が居たとしてもそれに対し教える体制は出来ていないし、そんな余裕もないだろう。

それはそれとして。それを求め始めたというのはいいことだろう。

「ソラくん、手を止める」

「うん？ どうかした？」

あくまで惚けてみる。特に効果はないだろうが。

「何でこんなことするかな？」

添削をされたことが気に入らないらしい。ジト目で睨む姿はそこそこに迫力がある。

「これでちゃんと回る保証ある？ 活動目標と実際の稼働、つりあう？」

目一杯一人で頑張れば何とかなる程度、だろう。けどそれを毎日行える保証なんて何処にも無い。

イレギュラーも視野に入れて余裕を持たないと何かあった後じゃ遅い。

お姉さんは現状出来ることと出来そうなことの区別がまだ曖昧みたいだ。

「でも、このままじゃソラくんだって辛いでしょ？」

「でも、それだとお姉さんが辛いだろ？」

ここを譲るつもりはない。そうしてしまえば最初に手を掴んだこと自体無駄になりかねない。

お姉さんと事を構えるつもりはない。構えるつもりは無いんだが、どうするべきか。

まあ、もう少し話をする必要があるというのは確かだが。

「私は、ここを守りたいから。でも、ソラくんは違うんでしょ？」

「守りたくないっていうのは確かにそうだし、俺は俺の目的があつてここにいる。けど、愛着がないかといえればそれも嘘になる。じやなきゃ、こんなことしてないだろ？」

「そうかもしれないけど。でも、これ以上無理させられないよ。」

「お姉さんさ。そもそもどうしてそういう結論に至ったのさ？」

まず不思議なのがここだ。パンのレシピを教えて欲しいとか、仕事に関して熱心になるのはいい。

けど、どうしてこう頑なになるんだ？

急に俯いて黙り込むお姉さんに首を傾げる。

前のように泣いているのか、とも思ったがそうでもない。

何かを我慢するかのようにじっと耐えているようにも見える。

より分らない。途中の式が完全に抜けていて、設問と答えだけが載っている方程式を証明しろと言われていたようなものだ。

読み解いていけば分かるのかもしれないが、どうも過程が良くつかめない。

「お姉さん。ないとは思うけど、俺がいない方がいいのか？」

今までの態度を見る限りはそうは思わないのだが、下策とは思って一応聞いておこう。

「そんなことないっ！　けど、私。私が頑張らなきゃいけないのっ！」

「お姉さん。とりあえず座ろうか？　飲み物淹れるから、ひと休憩入れよう」

叫んだお姉さんの身体は震えて、熱くなっている。熱というよりも興奮しすぎているのだろう。

作業台の椅子に座らせ、お茶を淹れる準備をする。今日は果物を使ったお茶でも淹れよう。

「お姉さんの頑張りは分かってるつもりだよ。お姉さんが納得いつてないのかもしれないけど、まだお姉さんが始めてそんなに時間なんて経っていないんだ。最初に走りすぎると後に続かないぞ?」

温めのお茶を淹れ、作業台に置く。本当なら渋い日本茶を淹れたいのだが、生の茶葉が手に入らないため熟成しきった紅茶しかない。美味しいから別に構わないんだが。

「なら、ソラくんはどうなの? 今までずっと鍛冶をしてきたの?」

藪蛇だったか。そりゃ、まあそうなるな。

「お姉さんだって俺の作ったものを見て、触れただろ? まあ、それはそれとして、だ。どうしてこう自分だけで突っ走ろうとしたんだ?」

とはいえ交わせないものでもないし本筋は聞くべきだ。

「……友達に、おかしいって言われたから」

一通り話を聞いて思わず力が抜けた。

曰く、前に話に出た友人が昨日も家に来たらしく、色々話をしたそうだ。

その中で具体的な案! ということでお姉さんに何やら策を預け、それを実行するようにといわれたそうだ。

そこででてきたのがさっきの紙の内容だ。

その友人は商人の娘で親も同じようなことをしていたから、とい

うことだそうだが。

というわけで説教タイム。

話を聞くのは良いが俺にもちゃんと聞けということと、聞いてもいないことを断言しないこと。

実際の運営をしているのは俺とお姉さんで、幾ら友人であろうと簡単に内情を話さないこと。

主にはそれくらいか。

席を立つと市場調査してくるとだけ言い、外へと出る。今は少し考えてもらったほうが良いと思う。

あまり時間は取れなさそうだが、俺は俺で役に立つことでもしよ
うか。

第13話。 雨の日。(後書き)

そろそろサブタイを考えるのが辛く。

もう少し、もう少し書き進められればきっと物語が動くはず。

評価、つつこみ等ありましたらよろしくお願いします。

2011/10/1

誤字等を修正しました。

第14話。怪しげな噂と生える気持ち。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第14話 怪しげな噂と生える気持ち。

サンパーニヤを出た頃には既に周囲は暗い。

その事実気付いた時点で帰りたくなかったが、それはそれ。

魔術品の相場を調べるために『変化』をし、工房を回ってみることにした。

そういえば当然のように工房で売ることを考えていたが、仲買と
いうか仲介業者などはないのだろうか？

職人が販売を得意とするとは思えない。苦手ではないかもしれ
ないが、本職に比べるとどうしても見劣りするだろう。

得意としなければならぬのはどちらかといえば売り子の方だ。

目的を持って訪れるであろう店舗に比べ、呼び込みをしなければ
ならない露店はある程度口が上手く回らないと販売できないだろう。
そういう意味でも露店を経験したことは良いことだ。思った以上
にその効果は高そうだ。

そんなわけで工房を何箇所か回った結果、ある程度の相場の把握
とおかしな話を聞いた。

この数日、高品質の魔術品が持ち込みされているそうだ。

それは工房に限らず、露店も巡っているらしく、幾つかのアクセ
売りなどからも同じような話を聞くことが出来た。

何故そんな話を聞くことが出来たかといえば、俺が胡散臭かった
から、だそうだ。

非常に失礼な話だが、町でもちよつとした噂になっているらしく
不審な男が町をうろついているから俺もそれに関係しているのかと
疑われていたようだ。

それなら横のつながりでサンパーニヤに回って来ても良いのだが、

実ははぶられているのだろうか？

少しその辺を確かめるため、変化を解きおやっさんの工房へ足を運ぶ事にした。

「怪しげな男が魔術品を売りまわってるって話だろ？　うちにも来たが、追い払っちゃったぞ。」

その内鍛冶師ギルドからも正式に通達が回るだろうが、買い取らん方がいいだろうな」

「高品質だって聞いたんですが、そんなに良いものだったんですか？」

来たというなら男のことはともかく、それがどれだけの物かはわかるだろう。

「ああ。お前さんにこそ及ばんが、あれはそれなりに良い腕を持った職人が作ったもんだろうな。」

だからこそ、ああいうきな臭い男がそれを持っていること自体がおかしい。本人は知り合いの職人に作ってもらったといっていたが、身分を証明するものもないしその職人の銘も刻まれていやしねえ。

出来上がりを盗み取ったのか、刻ませなかったのか、あるいは単に刻まなかったのかは分からんが、腑に落ちんかったからな」

ということは一般的には流通しない程度にはいいもの、ということだろうか？

おやっさんが俺をどのくらいの職人と思っているか未だにはわかりかねない。

交流もまだ少ないので、それはおいおい知っていけば良いとは思

っているのだが。

「ちなみに、その男の人相覚えてますか？ サンパーニヤに来たとき対応しなければならぬので」

「ああ。そうだな、ミランダにも教えてやってくれ」

男の人相は細かいことは分からなかったが、フードを目深に被り、右頬に大きな傷が残り、口周りは髭を生やし、随分とかすれた声で話す小男だそうだ。

ベデイのおやつさんに礼をすると、急いでサンパーニヤに戻ることにした。

それなりに時間がかかったし、お姉さんには話しておかないと不安だ。

「お姉さん、ただいまっ」

「あ、ソラくん。お帰り、なさい」

ばつが悪そうにお姉さんは視線をそらす。

まだ気にしているのだろうか？

「お姉さん。話しておきたいことがあるんだけど、まだ平気？」

「う、うん。大丈夫だよ。どう、したのかな」

妙にお姉さんが緊張している。どうかしたのだろうか？

「この数日、妙な男がこの町で魔術品を売ろうとしてるらしいから、来ても買い取らないようにね。工房の中にいれば安全だから、毅然とした態度で」

「えっ？ あ、うん。分かったよ」

何故かほっとしたように息を吐くお姉さん。一体どうしたのだからか？

「どうかした？ さっきから何か様子、おかしいけど」

「その、ソラくん怒ってもう戻ってこないんじゃないかって、思ってた」

完全に俺から視線を逸らし、ばつの悪そうな表情を隠さないお姉さん。

「呆れたけど別に怒ってないよ。お姉さんがそうしたのも俺にも原因があるんだろ？ なら別に怒るほどのものでもないと思うけど」

怒りたかった気持ちというか、少し寂しくなったというのは事実だが。

とはいえ、散々俺は俺の目的があると言っている以上それを怒る権利は俺にはないと思うし。

「うん、ごめんね」

しゅんとしたままのお姉さん。しゅんとしたままなのは可愛いと思うが、今はおいておこう。

「さて。今日はもう遅い。そろそろ上がるっ?」

「え? あ、うん。もう遅いからね。ソラくん先あがっていいよ」

「今日はお姉さんも。焦るのはよくない。気持ちはわかるけど、今は我慢して」

首をかしげ、良く分からないというお姉さんの表情。

「いつも俺より遅くまで残って、朝も早くから出て。ろくに寝てないんだろ?」

俺の問いかけに途端に汗が流れてくるお姉さん。分かりやすすぎるだろ、幾ら何でも。

正直何をどう焦っているのかは分からないが、急ぎすぎていると思う。

「送ってくから、今日は早く帰ること。あと、お姉さんがどうしてあんなことを言い始めたかは、明日追求させてもらうからそのつもりで。いい?」

たとえどんなにお姉さんがたんじゅ、もとい素直でもあそこまで頑なになるのは別の理由もあるんだろ?。

俺を心配してくれて、という意味はあるんだろ?がどこかそれだけでは弱い。

顔を青くしてるのがその良い証拠だ。

「で、でもね? ソラくんも早く帰らないとご家族が心配してるんじゃないかなって」

「この状況がばれた方が怒られるよ。ほら、準備して」

何故か恐る恐るといった感じで反論する言葉を笑みで封殺する。

俺は鞆と外套を回収する。外套はまだ生乾きだが仕方ない。

お姉さんであろう、引っ掛かっている外套を渡すと、諦めたのか渋々帰り支度を始めた。

準備が終わると、ランプを持ち、店の施錠を確認すると歩き出す。チラチラと店を気にするの感心もできるが、良いこととは思われない。

「お姉さん、普段店から帰るときどうしてる？ 何処か寄ったりしてる？」

「あ、うん。ご飯を買ったりしてるけど、どうして？」

「そうしてると思ったから。中央広場の屋台で？」

「うん。最近は色々と屋台を巡ってるの。だから先に帰って良いよ？ 私、いつも時間かかってるから」

と、ランプを奪うように俺から取って、中央広場に向かって走っていくお姉さん。何か怪しいが、追求はしないでおこう。今言っても恐らくはぐらかされるか、逃げられる気がする。

そこまでするつもりはない。多少暗い道だが俺には関係ない。

にしても、明日はどれだけ作れるだろうか。『熾天使の祝福・模造品』に関しては2本予約が入っている。あれは正直手作りには面倒なのだが、大量増産しなければ良いだけの話だ。

予約に関しては今後日付を区切るか？ まあ、それも相談すれば

いいか。

ちなみに、村長たちは明日も泊まるそうだ。持ってきたものは今日ほとんど売れたそうだが、買物はまだ残っているらしい。

俺が帰ってきた頃には酔っ払いまくって絡んでくるだけだったからさっさと逃げ出した。

「さて。昨日の話の続きと行こうか？」

思ったとおり既にいたお姉さんにそう宣言してみた。

「ま、まあまあ。仕事もあるんだし、ひと段落してからでいいんじゃないかな？」

黙って首を振る。同時に口元だけ笑って見せるのがポイントだ。

「うう……少しだけ時間貰っていいかな」

「分かったよ。じゃ、お茶でも淹れてるから」

俺が思ったよりも複雑な事情があるのか？ 良く分からないが、まあ話してくれるのならそれで構わない。

お茶を淹れ、ゆっくりと飲んでいると少しぼんやりとしてくる。

眠くはないのだが少しまどろむ様な感じといえは良いのだろうか。

少し疲れもあるんだろう。とはいえ、まだ週も中盤。ペースを考えて仕事をしないとまずいか。

そんな俺の姿を見て決心したのだろうか、ぽつぽつとお姉さんが語り始める。

お姉さんの友人、リオナというのだそうだがその友人は魔法学校に通っている商人の娘らしい。

その友人が休みの日になると度々お姉さんの家にやってくるのだが、暫くは試験や何やらでこれなかったそう。

それで話をしている間に自分でも現状を纏め始めたらしく、ふつふつと不安と申し訳なさが沸いてきたらしい。

今更という気もするんだが、同時に余裕が出てきた証なんだろうとも思う。

お姉さんはようやくがむしゃらに走ってきた足を止め、後ろを振り返った。

というか、もっと慎重に歩いて欲しいんだが。

俺もそうだから強く指摘は出来ないんだが。

出来ないんだが、突っ込み所が満載だった。いや、在ったことも無い人を否定するつもりも非難するつもりもないんだが。ないんだが。

「お姉さん。うん、反省してる気持ちとかは分かった。けど、少し視野を広く持つて欲しい」

その友達が何歳か知らないが、同世代らしいその女性にお姉さんはずっと主導権を握られっぱなしなのだそう。

そこは別に良い。お姉さんの友人関係に文句なんて無いわけだし。

ただ、店のことまであれこれ口を出すのは勘弁して欲しい。

お姉さんの口ぶりからその友人が心配をしているのは分かるが、遊びでもない。

どうやっているかというのをアドバイスするのであれば構わないが、ただどうすればいい、こうすればいいというのを実際にしていないことを押し付けられるのは違うだろう。

というのを伝えた。

話を聞く限りではその友人は商売をしたことはないようだ。

確かに他からの意見も大切だし、尊重するべき点もあるだろうがそれはそれ、これはこれ。

「う、うん。頑張ってみるね」

「じゃ、俺は作業してるから再度改善案を提出すること。期限は今日中で」

ハンマーを振るい、形を整え、さらに熱を加え、切り取り、さらに成形をしていく。

『熾天使の祝福・模造品』に関してはそういった手間がかかる。

それならピンクシルバーのバンドルの方が作るのは楽なのだが、楽な分時間もかからないため後回しできる。

大まかな成形をしたものを2本作ると、今度は冷えるのを待つ。

どちらも変更はないが、プレゼント用だと言っていたので調整できるように余裕を持って作る。

本来なら本人に来て貰って最初に必要なデータを取ったうえで作りたい。それでも出来上がった後に微調整は必要なのだが。

色々書いてはぐしゃぐしゃと紙を丸めるお姉さんはまるで締め切りに追われる作家みたいだ。

俺には経験が無いが、うんうん唸っている姿は少し微笑ましい。

とはいえ。お姉さんは今焦っているんだろう。今しなければいけないことと、出来ること。

それがお姉さんの中ではぶつかり合い、優先順位がつけられないのだろう。

何処かで暫く休みを取ったほうが良いのか？ 1週間くらいは休

みを取って色々調べする必要はありそうだ。

何とかそれくらいであれば休んでも問題ないだろう。活動資金としては足りないが、自転車操業にならない程度の運営は出来る。

だが、どうやって促したのか。

というか、情報が集まらない以上どう動いたのか。

冒険者ギルドからの情報も来ていないし、自衛団からも特にない。今町で出ているあの怪しげな小男が怪しいが確証を得ない。お姉さんを危険な目に合わせるつもりは無いのでそっちに近づくつもりは無いんだが。

最悪俺が動けば良いか。問題はご両親の姿を全く知らないところだが。

今日はそれ以上に何かがあるわけでもなく。

お姉さんからの改善案も出たがまだ余裕が足りなさそうなので俺の考えを書いて返す。

しょんぼりしていたが、大人しく見ているし色々考えているようだ。

『熾天使の祝福・模造品』の最終形成も済ませ、こちらは売るまで保管するだけだ。

お姉さんに早く帰るように伝え、夕方にはサンパーニヤを出た。

夕食の手伝いと村長に伝えることがあるからだ。夕食の前に帰りつかないと恐らく昨日のように飲みすぎるだろう。

というか、酒もただではないはずなんだが。自分たちの自費であれば問題ないんだが。

「村長。次来るときには幾つかパン作りの一式を持ってきて欲しい

です」

「おお？ ソラ坊、どうしたんだ、急に」

客間でがやがやと寛いでいた村長に声をかける。要件だけを先に言うのはいつものことだ。

むしろ挨拶をするとは何故か怒る。良く分からないが、そこそこの年数話している相手だ。構わないだろう。

「町では貴族にしか流れていないので、平民が食べられない。村長が商人とだけ取引をするのなら仕方ないけど、幾つかの商店が食堂に卸してくれれば嬉しいですよ」

村に来ていた彼らが貴族御用達であるかどうかは未だに分からないが、それだと『ユグドラシルの葉先』なんて小さな村とやりとりはしないだろう。

村の民芸品や狩猟で得られるものに関してはほとんど平民用の商品だ。

恐らく現状は儲けられるからこそ、パンのセットを貴族など相手に売っているに過ぎないのだろう。

パン、いや小麦粉を使ったレシピを幾つか村に出せばそれだけでもそこそこの商売になるはずだ。

後は口コミを利用すれば恐らくは他の商人なども買い付けに来るはず。

鍛冶師などに持ち込んで作らせる商人も出てくるだろうが、料理は別だ。

登録することも出来ないし、製法は最初は真似できないだろう。それが簡易的になり別物になるか、あるいは幅が広がるかは分からないが、一石を投じることになるだろう。

儲けることすら正直そこまで興味はないし、一度手を離れたもの

だが今の現状に満足することは出来ない。

そんなわけで俺ができることは融通の利く範囲で何処までできるか、村長たちの善意に拠る行動だがそうするしかないだろう。

「ああ。最近若干売れ行きが減っているからな。次回これ以上減るようなら、俺たちも多少個々の金額は落ちても数を増やす方法を考えなきゃならんところだった。その時はお前のコネも借りるだろうよ」

「はい。お願いします」

頭を下げる。言質は取れたし、暫くは動かないがどうにかなるだろう。

あとはそれまでに何処までコネを広げられるか。少なくとも1月は猶予がある。なら、手段は幾らでもあるか。

というわけで、話をして夕食を作る手伝いをする。

料理は、特に新作もなくスープとパンとサラダだけだ。

あとはつまみに魚を蒸したもの。

作るには仕込みの時間が必要だが、休みの日以外はそんなものだ。パンで思い出したが、パン粉を使った料理も良いかもしれない。もしかしたら既にあるのかもしれないが。

とはいえ、型を使って焼いた食パンは何故か受け、作り方を聞いてきた。

パニーニ（らしきもの。ドウガとか言ってたが恐らくはパニーニのことだろう）とは違い、そのままでも食べられるし色々乗せたり塗ったり出来るのが面白いらしい。

切る幅によって食感が若干変わることかもしれない。これだとハンバーガーとかも教えたらうけるかもしれない。

食事もそこそこに終わらせ、地下に降りる。

今回は館の防犯用の魔法陣を仕掛けているところではなく、俺の工房の予定の場所だ。

とりあえず不要なアイテムをその部屋においていく。

鉱石や宝石、あるいは薬草などだ。

残しておくのはファルシオンと魔具用の属性石と緊急用のポーションのみ。

あとは魔術品などあれば嬉しいのだが、それはどうにかしよう。

母にもう使用できないと言ってある魔術品を譲り受けて耐久度の回復でもしてみるか？

それはまた今度でいいか。今はこの部屋をどれだけ改造するか。今は人払いと入室の制限だけ。

部屋の防音、多重の防壁、後は俺以外の各種使用制限等、やれることは多いのだが魔法陣の書き換えは大変だ。

まずは壁の防火対策と通風の調整。それだけでも結構な時間がかかる。

疲れていることもあるが、神経を使う。

こんなことをしている場合でもないんだが、何となく落ち着かない。

疲れ切って、けど何とか部屋にまで戻り眠りにつく。

時間があれば別のことで疲れる。むしろ夜までサンパーニヤにいらより疲れている気がする。

本末転倒な気はするが、やらなきゃいけないことは多い。

使命も野望もないんだが、したいことはいくつがある。

とはいえ、好奇心で突っ走ること多い。何処かで自制も必要だろう。

顔を冷たい井戸水で洗い、眠気を何とか飛ばすと朝ごはんを食べサンパーニヤへ。

この数日ご飯が戦場のような様相を呈しているが、それだけ料理が美味しいという証拠だ。

最初に自分の分は確保しているからそれに巻き込まれることもないし、流石に子供のご飯を奪うような大人はいない。俺はゆっくりとしたものだ。

「おはよう、お姉さん」

「うん。おはよう、ソラくん」

いつも通りの挨拶で始まる1日。お姉さんの挨拶もいつも通りだ。表面上は少なくともいつも通り。少し心配はあるが、俺がかげられる言葉が見つからない。

結局、それも遠慮なのか逃避しているだけなのか分からないが、答えは出ない。

ぐちゃぐちゃした頭のまま、仕事をする。

それでも手は動く。あくまで複雑なものは昨日作り終えた。後は素材の違いのあるペンダントとピンクシルバーのバンブルだけだ。ならできる部分に関してはさっさとしまおう。

出来上がったものはタグをつけどんどん保管していく。

無意識の内に魔力を籠めないようにだけ気をつければ大して作るのは難しくくない。

とはいえ、疲れるため休み休みだが。ポーションの疲労回復はあまり使わないようにしている。

あれは疲労回復もしてくれるが、あまり多用すると中毒になりそう。あと何処まで器用さでカバー出来るかの確認の意味もある。

これは恐らく1ヶ月程度は続けないと効果は分からないだろう。
まあ、鍛造はともかく魔術品やアクセに関しては大して疲れない。
休みを入れながらであれば何とかなるだろう。

結局、出来上がったのは夕方。

出来上がりを確認してその日はすぐに上がることにした。

お姉さんは何かを言いたがっていたが、聞いても答えは濁された。
どうしたいのだろうか？ 言ってくれなければ分からないのに。

その後、露店を開いても買い物をして、また店で何かを作っても、話はするものの、何かを言いたそうな表情をして、黙り込む。
具合が悪いのかとも心配したが、それは否定しちゃんと食べていると言って笑う。

奇妙な違和感というか、妙な焦燥感を味わう中、話が上がったのは週の5日目、休みの前の日だった。

「ねえ、ソラくん。明日、外に出ない？」

「えっ？ あ、ああ。大丈夫だけど、どうかした？」

「ソラくんこっちに引っ越してきて暫く経つけど町の外に出たことある？」

「いや、まだかな。引っ越すときとその前に馬車で往復しただけだよ」

俺の行動範囲は狭い。村にいるときは近くの森と、往復に半日も

かからない森を歩き来するだけ。

こつちに来てからというもの、町から出たことすらない。1日しか休みがないなら野宿もし辛いから出ようと思わなかったし、遭難の経験はあってもモンスタ―や獣が出るような場所でのキャンプなんてしたことがあるはずもない。

だからまだ休みはほとんどないこともあり、町の外に出たことはない。

「そつか。じゃあ、良い場所あるから案内するよ」

「いいけど、お姉さん平気？」

この数日俺といることが辛そうに見える。休みの日まで俺と一緒にいるのは苦痛じゃないのか？

「うん。私から誘ってるんだから。じゃあ、明日の朝、中央広場でいいかな？」

「朝から、つてどれくらいの間出る予定？　あまり時間かかるよ
うなら弁当用意するけど」

「それも私から用意するから平気。だから、ソラくんは心配しないで」

前の悪夢が蘇るが、流石にもう同じことはないだろう。黒かったら食べなければ良いんだし。

「分かった。じゃあ、外に出る用の準備だけしておくから」

「うん。じゃあ、私は準備あるからソラくんはもうあがっていいよ。」

今日はもうすること終わってるでしょ？」

確かにすることはほとんどない。予約分も作り終わったし、ポーションも十分残っている。

「お姉さんが遅くまで残らないなら」

「大丈夫だよっ！ いいから、ソラくんはもう上がって？」

「分かった。じゃあ、お言葉に甘えて先に上がらせて貰うよ」

最後に念のためアクセスの状態だけ確認する。中々の出来になったと思う。

前に渡した分も好評だったし、今のところ調整もその場だったり次の露店時に調整するよう話が決まっている。

これなら露店でのアクセスも上手く行きそうだし、引いては魔術工房ももう少ししたら店舗での運営も再開できるかもしれない。

時間はかかりそうだけど、何とかなれば良いと思う。

次の日、朝といっても具体的な時間の指定が無かったため、いつもサンパーニヤに行く時間に、露店を出す場所に出てみた。

流石にこの時間では露店を出している人はおらず、出勤途中らしき人がぼつぼつ見えるだけだ。

ちなみに、俺は外に出るといことなので大丈夫だとは思うが念のためポーションとファルシオンを装備している。

ポーションはいつも使っているカバンに2本、余った革で作った簡易のポーションバッグに3本。後はアイテムボックスに5本ほど入れているがこちらは使うことはないだろう。

ファルシオンは無理やりベルトに固定していて不自然だがないよりはましだ。何処に行くかは知らないが、お姉さんが危ない場所に行きたがるとも思えない。あくまで念のため、だ。

後は錆びたナイフを腰に括りつけている。

まあ、草を刈る程度にしか役に立たないだろうが、ないよりはましだろう。

時々見覚えのある人が露店を開かないのか、と聞いてくるので今日は休みだと答え、見送る。

それが何度かあり、1時間ほどしてようやくお姉さんがやってくる。

「ごめん、待ったよね？ リオナが時間かかっちゃって。ほら、リオナ！ 急いでよ」

そう言ってお姉さんが呼びかけるのは優雅に、といえは聞こえは良いがゆっくりとやってくる少女、だろうか。その姿がある。

リオナといえは、確かお姉さんの友人で商人の娘だったか。何で一緒にいるんだ？

「お姉さん、今日は出かけるんだよね？ 町の外まで」

「あ、うん。そうだよ、とっておきの場所があるから、そこまで案内してあげる」

となるとピクニックか何かということだろうか。まあ、仕事の話でないとは思ったんだが。

「そっか。じゃあ、今日はリオナさん、だっけ？ あの人と一緒に

出かけるってこと？」

頷くお姉さん。ということならちゃんと言ってくれればよかったのに。

「そう。このあたしと出かけられるんだから、感謝しなさいよ」

びし、と持っている扇子だろうか？ 黒くて長めのものを俺に突き出す少女。

何というか、偉そうだな、おい。

「あ、はあ。ええと、俺はソラって言います、よろしく」

とりあえず頭を下げる。

その少女は俺より身長が高く、俺の周囲ではソフィア位か？ そのくらいの身長はありそうだ。

金髪はゆるくカーブを描き、腰の辺りまで伸ばされており、眼も同様の色で強く猛禽類のような雄雄しさがある。

服は外に出るためか、シンプルなブラウスとスカートだが、これは黒く染められているようで生地もよさそうだ。

服がドレスでもっと装飾過多なら何処かの我侭な姫とも見えそうな少女は鼻屑目に見ても10歳前後にしか見えない。

ただ、学生ということは魔法学校の入学年齢の下限が10歳のため11歳が限度。そのくらいか？

いや、ただお姉さんと同年代ということは最低でも15歳位という事か？ 見えないが、俺も人のことは言えない。そういったこともあるんだろう。

「ええ。素直でよろしい。ミランダ、行くわよ」

堂々とした振る舞いのまま少女は先ほどよりも速い足取りで門へと進んでいく。

お姉さんも慌てたようについていく様は何故か妙にしっくりとくる。2人の立場はきつと、ずっと前に決まっておりそのままなんだろう。

俺は苦笑し、2人の後についていく。

時折俺のほうを見ながらこそそ喋っているのは若干気になったが、女性同士の話し合いに男が口を出すと碌なことにならない。遠くから見守る程度がいいだろう。

「3人だけで出かけるのか？ 最近はモンスターも活性化してきてるし、あまり遠くまで行くなよ？」

「はいっ！ 近くまでなので大丈夫だと思います」

「そうか。まあ、町からだいぶ離れた場所から森でしか今は確認されていらないそうだから大丈夫だとは思うんだが、無理はしないようにな」

出入り口で警備をしていたジルにお姉さんが少しだけ緊張したような表情で答える。

モンスターの活性化はやはり魔王が原因なんだろうか？ 魔王が今どんな状態になっているかは分からないが、そのものの噂は立っていない以上まだ前兆に過ぎないのだろうか？

まあ、現れてもいないものに対して警戒もしようが無いし、誰に言っても信じてもらえないだろう。

といっても、魔王と戦うために俺は転生したわけじゃないし、そ

もそも神が生み出したものだ。俺がどうこうできるような存在じゃないだろう。

お姉さんに連れられてきたのは、草原。それも、高いスキのよ
うな草が生い茂る場所だ。

前の世界では既にビジョンやVRでしか見れないものだったが、
何処か懐かしい。
不思議と安らげる。そんな場所だ。

「お姉さんが言ってたとおきの場所ってこのこと？」

「ええ。あたしのお気に入り場所よ。感謝なさい」

自信気に笑うのはやはりお姉さんではなく少女の方だ。
つまり、ここを元々見つけたのは少女の方でお姉さんは俺にそれ
をおすそ分けしてくれたということか。

「ああ。凄い、こんなところ見れると思わなかった」

日の光に反射され、風が吹けばなびくその姿はまるで黄金のカー
ペットのようなそれは見ていて飽きない。

夕方になればきつとまた違う色を見せてくれるんだろう。
深く呼吸をすると、土や草の匂いでいっぱいになる。土や木の香
りは何度も味わったが、こんな景色に出会えるとは思わなかった。

「でも、何でこんなところ案内してくれたんだ？ 良い場所だけど、
それなら秘密にしておきたいんじゃないのか？」

お姉さんが自分で見つけたならともかく、どうやら少女のほうに

も話をしているみたいだし、何となく腑に落ちない。

「ソラくん、何かこのごろイライラしてたみたいだから。ずっと仕事してくれてたし、町の外にも出たことなさそうだったから良かったらと思つて」

お姉さんは笑つてそういう。俺はそんなにイライラしているように見えただろうか？

何か漠然としたもやもやした気持ちはあつたが、イライラはしていなかつたと思つんだが。

「俺は自分で選んで手伝つてるんだから、いいよ。そりゃありがたいけどさ」

「そ。まあいいわ。それより、少しのんびりしましょう？ 私も朝から準備したから少し疲れたわ」

「うん。リオナ頑張つてくれたもんね。私も久しぶりにここに来たから、少しのんびりしようかな」

そう2人はススキの生えていない、地面に草が生えている場所を選んで座り込む。

俺もそれに習い、近くに座る。そのまま仰向けに寝転がれば、空は青く、雲がのんびりと流れている様子が良く分かる。

青空は何処までも果てしなく続くようで、きっと数百km程度先には漆黒の宇宙が広がっているんだろう。

それが不思議だが何となく面白い。前の世界と違い、環境汚染のほとんど無いようなこの世界ではこの澄んだ空と空気が当然なのかもしれないが、俺にとっては素晴らしいものだと思つ。

最近疲れていたこともあり、ただぼんやりと空を眺める。

穏やかな風に吹かれ、まるで世界とは切り離されたような感覚が俺を包む。

目を閉じれば世界は内側に。流れを感じるまま、ただ揺らめく穂のように。

ただ、今はそれに抱かれてただ、眠ることにしよう。

と、本当に寝るわけにも行かず目を開いてみると何故か日は随分と高くなっている。

移動に時間が多少は取られてはいたが、それでも寝転がった時よりも日は高い。

軽く目を閉じただけだと思っていたのだが、実際は寝てしまったらしい。

上半身を起こし、両腕を大きく伸ばすと思い切り息を吐く。

そういえばお姉さんたちは近くにいたはずだが今は姿が見えない。何処に行ったんだろうか？

立ち上がると、軽く周囲を見回すとスキの中にも動く姿が2つ。どうやら散歩中らしい。

荷物も置いてあるし、暫くしたら戻ってくるだろう。

「おはよ、ソラくん。良く眠ってたね」

「ああ。おはよう、悪い疲れてたみたいだ」

「本当ね。随分と良いご身分で」

ボーっとしながら待っているとようやく2人が戻ってきた。リオナは何をそんなにイラついているのだろうか。というか、俺がそこまでイラつかれる理由はないはずだが。

「リオナ、ソラくん疲れてるみたいだから今日は、ね？」

「そうね。あたしも別にわざわざそんなことに休日を使いたくないもの。いいわ」

俺に投げかけられる視線はやけに冷たい。

初対面のはずだが、どれだけ俺は嫌われているんだ？

「それよりさ、ご飯にしようよ。リオナ、準備しよう？」

「ええ。そうね」

お姉さんとリオナは俺を点として三角になるようにすわり、その中心に布と包みを置く。

後は革の水筒とコップが3つ。包みの中身は、白っぽい何か、だ。パンのように見えなくもないものが3つ、ただ置かれている。いや、それだと何が何やらさっぱりだが。

けれど、本当に白い塊らしきものが3つ分あるだけ。表面は滑らかなのでパンのようにも見えるが、なんと言えば良いのだろうか。角のない直方体？ サイコロのようなものがただ置かれているだけ。しかも大きさが俺の掌サイズという中途半端ぶり。

「ええと。これは？」

せつかく作ってもらったものだから食べようとは思うのだが、もしかしたら俺が知らないだけで食べ物ではないかもしれないし、見た目からするとそのままかぶりつくかちぎって食べるかしか選択肢がなさそうなものだがもしかしたら違う作法があるのかもしれない。

「ゾットラグルのグレーチエだよ。えっと、知らない？」

「ゾットラグルは知ってるけど、グレーチエは知らない」

ゾットラグルは鹿のような動物で父が何度か狩って来たものを食べたことがある。

つまり、肉を使った何かだとは思うのだが。白い塊で包んだものなんだろうけど、この白い塊が謎過ぎる。

「グレーチエはね、紙で包んで蒸したもの、だよ。ほら、これをこつやって解くと、お肉が出てくるの」

お姉さんは適当なところを爪で引っかくと一部がはがれ、それをどんだんはがしていく。

そこの中からは良く焼けたであろうこんがりとした肉が出てくる。何故白い紙に覆われているの中はこんな焼き色がついているんだ？

「そ、そっか。いや、俺あまりこつちの料理知らなくてさ。思わず紙ごと食べるところだったよ」

乾いた笑いしか出ないのは仕方ないだろう。本当に村ではこんな料理出てきたことが無いんだ。

同じ国の中で、しかもそんなに離れていない場所なのに何故こうも知らない料理が多いんだ？

「残念。これは隣国の料理よ。本当に知らないのね」

リオナはつまらなさそうにそういつと、自身も紙の塊を取って、剥いでいく。

「えっと、食事これだけ？」

量としては肉単体と考えると少なくない量だが、これだとバランスが悪すぎるだろう。

ゾットラグルはどちらかといえば硬い肉だから噛み応えはあるにしても、だ。

「用意してもらったものに文句を言つつもりかしら？」

「や、そういうわけじゃないけど。まあ仕方ない。ありがたくいただくよ」

俺も手に取り、紙を剥いで中の肉を噛んでみる。思ったよりも肉汁が多く、火の通り具合もいい。

とはいえ、間違っただけで紙ごと食べそうになるし、途中であふれ出た肉汁で紙どころから手すら油でギトギトになるわ、最終的には油を食べているのか肉を食べているのか分からないほど油が出ている。紙が多少は油を吸ってくれてはいるものの、あまり効果はなさそうだ。

「えと、美味しかったよ。ありがとう」

何とか完食した頃には油で胃が荒れそうな位、油を摂った気がする。

これなら切るか油を取りながら焼いたほうが良さそうだ。このま

まだと紙の意図も分からないし。

「じゃ、感謝の印を出しなさい」

急に何を言い出すのだろうか？

「リ、リオナツ！ 何を言い始めるの？」

焦ったようなお姉さん。まあ、急に感謝の印を差し出せなんていわれても俺も特に持っていないし。

仕方ない。ここは様子を窺ってみるか。

「ええと。何か欲しいものでもある？ まだ給料とか入ってないから金銭は難しいけど」

まあ、不当な要求なら拒否すれば良いだろうし妥当だと思っならそれを用意することはできるだろう。

どうしようもないときは仕方ない。諦めよう。

「聞いてた通り。あんた、最低ね」

嫌悪の表情を隠さず、リオナは俺に向かってそう言葉を吐き棄てた。

何で本当に初対面の人間にここまで言われなきゃならないんだ？

「聞いてた話がどうかは知らないけど、そう思うならそうなんだろ」

だが、それを俺が受け止める必要があるのだろうか。別にリオナに嫌われたところで何のデメリットがある。

無理に好いて貰う必要はない。万人受けするつもりすらないんだ。

ここで俺が嫌われたところでサンパーニヤに影響はない。

街中であればもう少し穏便に済ませるだろうが、此処でどう言われても痛くもない。

というか、俺が此処まで言われる理由なんてない。

「さつきから、何よ！ 自分は関係ない、自分は興味ない、どうでもいい、そんな顔してあんた何様のつもりよ！」

「勝手に横から口出しだけして運営方針すらぶれさせる人にそんな事言われてもね」

といつても、此処まで喧嘩すればお姉さんとの関係もガタガタだろうな。

長年の友人と束の間のバイト、どちらを優先させるかなんて分かりきっているだろう。

「あんたの言う方針って何よ！ あんただけが得する話？ そんなのを方針なんていうわけがない」

「なら、あれでどうやって稼ぐんだ？ お姉さんから見せられたものだと破綻は間違いないぞ。それとも、その分買取でもするのか？」

日々ギリギリのスケジュールなのは正直今も変わらない。だが、具体的な方針さえ打ち出さず机上の理論だけで商売が成り立つと思っているのだろうか。

というか、俺の利益なんてほぼないに等しいんだが。

「あんたがいなくなつて、あたしがどうにでもする！ 関係ないって顔しながら手を出してくるやつなんか任せられないっ」

「だから、どうしたいんだって。どうにでもする、なんてどうにでも出来るやつ以外口にできるはずがない。あんた何が出来る？ 自分の力で、何を準備できるんだ？」

「もう、2人とも止めよ？ 町に戻ればご飯だつてあるんだし、私も足りなかったからさ。ね、リオナ。リオナも本当はまだ食べたいでしょ？」

「ミランダは黙ってて！ こんな、人を見れないやつにあなたを任せられない！」

「といわれてもさ。感情論だけで生きていけるほど世界は甘くないだろ？ 任せられないなら実際どうするのか教えてくれ」

正直面倒になってきた。俺も一応頑張ってるつもりんだけどな。

「あんたは生きようとしていない。あんたの目はミランダすら見ていない。あたしのことなんて見ようともしていないでしょ。そんなやつに、何が出来るって言うのよ」

「生きようとしていない、か」

確かにそうかもしれない。俺は確かに此処で生きているが、此処で生活できているかは分からない。

それが暫く続いている苛立ちの理由かもしれない。世界の形を変えても、記憶と姿は変わらなかった。

それも言い訳か。俺は、死んだあの時から何処かで自分が生きていることの意味を見失っているのかもしれない。

元々あるかどうか分からないが、出来る力は貰っている。なら、それに意味を見出すこともできるかもしれない。

にしても、俺も一度訓練でもした方が良いのか？

「リオナ。魔具、持ってきているか？」

「はあっ？ あんたいきなり何を……」

「囲まれ始めている。持っていないなら邪魔だ、町まで逃げろ」

スキルウィンドが勝手に開き、危険を知らせている。即座に展開した『気配探知』によると、数は8。敵は、ハウンドウルフ。

嗅覚、知覚ともに優れた群れで狩りを行うソロでは中級者向けの相手、と。

1人だと殺さずに相手をするのは無理だが、切り抜けることはできるだろう。

だが、お姉さんも特に武器を持っていないし、リオナが魔具を使えないのであれば戦力に数えられない。

そうなると弱点が増えるだけだ。

「確かに囲まれてるっ！ 銀色の、狼？ あんなの、魔具があっても敵わないわよっ！」

「で。持ってきているのか？ 持ってきてないのか？ 悪い、包囲が終わる前に答えてくれ」

挿してあったファルシオンを抜く。実戦は初めてだが、やらなきゃ負ける。相手も俺を警戒してなのかじりじりと包囲網を固めている。

死なない覚悟程度なら出来る。お姉さんとリオナを引かせるな

ら此処が最後だろう。

「持ってきてないわよっ！　こんなところにまでモンスターなんて出たなんて聞いたことないわ！」

「ソラくん！　急いで逃げよう？　後は自衛団の人に任せようよ」

「こいつらの足にお姉さんがかなうものでもないから、ちょっと難しい。俺が足止めして距離を稼ぐから、先に逃げてくれ」

「こいつらは俺が知るものと同じものであれば足も速い。ハウンド追跡とはよく言ったものだ。

しかも狩猟ターゲットをネチネチと攻撃する嫌らしさも兼ね備えてる面倒なやつだ。

「子供を残して行けるわけじゃないでしょう！　あなたも逃げるのよ！」

「包囲が完了する。一方を突破するから、その方向に逃げてくれ。説教なら後で好きなだけ言えば良い。今は逃げるのが優先だ」

本気で逃げてしまいたいんだが、一人で逃げ出すわけには当然行かない。

さて、損な役回りだな。

「くっ………！　分かったわ。ミランダ、逃げるわよ」

「う、うん！」

敵を警戒するので一杯だからお姉さんの様子は窺えないが、緊張しているみたいだな。

こけなきや良いんだが。
そんな心配をしながらも、剣を正眼に構え、敵を迎え撃つ準備は整う。

ススキに覆われている場所から銀色が音を立てて出てくる。ここ
で飛び出してりゃ、勝負ついたのかもしれないんだがな。

「じゃ、行くぞ。『スイングスラッシュ』！」

剣が一瞬だけ光り輝き、水平になぎ払うとそれは敵をなぎ払う衝
撃波となる。

言葉とともに発動したそれは、正面、町側に続く方向を塞いでい
る2匹の狼の頭半分を切れき、背後のススキすら切断していく。

「い、いくよ！ ミランダ！」

一瞬それに戸惑ったものの、リオナはお姉さんの手を引っ張り、
切断されたススキを目印にするかのように走っていく。

追おうとするウルフは、俺がそいつの前に飛び出し注意を逸らす。

こいつらは元々狩りやすい相手として、複数より単独を好むはず
だ。
逃げたものは後で追える。今の狩りの標的は俺になっている、よ
うには見える。

さて、身体は鈍い。手足は短いからリーチも短い。だが、目では
こいつら程度なら追える。何処までいけるか、試してみるか！

咆哮搏撃ほうこうはくげき、背後からというのに律儀に吼えて襲い掛かってくる狼

に振り向きを利用して刃を振りぬく！

ぐしゃり、と肉と骨を打ち絶つ嫌な感覚を味わいながら、3匹目の狼の首の半分以上を斬る。

と、同時に嫌な予感がし、そのまま狼に体当たりをす……

「いつてえな！ 獣風情が！」

さらに背後から襲い掛かってきた狼の爪が俺の右足に掠り、それですら俺の皮膚を切裂くくらいの力はあるようだ。

急いで剣を戻すと、再度飛びかかろうとする狼の脳天目掛け、剣を突き落とす！

正直、ダメージ自体は全体量に比べ大したことはないはずなんだが、出血がやばい。というか今まともに考えられているだけでもおかしいくらいだ。

表面に溢れ出る血に吐き気を覚えながら、ポーションを取り出し、飲み干す。

といつても、やっぱり単なる特製ポーションだと血を止めるくらいしかないか。いや、止めてくれるだけでもマシ、か。

ちっ。包帯か何か位持つてくるべきだったか。どうせ今は使えないが。

後は効力である追加回復チャージに期待するしかないか。

残りは4匹。半分やられたことで警戒しているらしい。

距離は微妙に離れていて、1匹を集中的に倒そうとすると他が妨害してくる可能性が高い。

となると、一撃必殺か範囲攻撃、か。

「とはいえ、回復するまで足はるくに動きそうにないし、詠唱術は出来る限り使いたくないし、符なんて持ってすらないし。困ったも

のだな」

だが、負ける気はしない。どうせなら、もう少し準備をしておきたかったが、こんなのは想定外だ。

想定外だが、そんな物すら、今は気にならない。

俺を取り囲む狼たちは徐々にその範囲を狭める。一気に襲い掛かるつもりか？

まあ、そっちの方が正直助かる。

「でもな、バカの一つ覚えみたく吼えりゃいいもんじゃねえよ！」

吼え立て四方から飛び掛ってくる敵の動きを読み、回避する。

まずは右半回転、それから左側半身へ飛び掛ってくる狼の顔に合わせ刃を振り下ろし、右へ斬り上げる！

正面から飛び込んでくるものには刃を振り下ろし、背を向け着地した最後の一匹を串刺しにした。

とりあえず、襲い掛かってきた奴等は全部片付けたものの、その分場は凄惨だ。

血の臭いは酷いし、斬ったり突いたりで色々なものがぐちゃぐちゃのめちゃめちゃだ。

最後の動きで足の怪我は開いたし、本気で吐きそうだ。というか、ダメっす。

出せるものは出しきった後、ここに留まっても何の意味もないた

め剣を杖代わりに歩く。ポーションを追加で飲んだが胃は受け付けてくれず、あまり効果はないみたいだ。

後で焼却か埋めるかないと血の匂いで他の獣やモンスターが寄ってきてそうだ。時間はそれなりに経っているし、きつと誰かが応援くらい来てくれるだろう。

というか、傷がすぎすぎと痛む。効果があるか分からないが、やってみるかしかないか。

飲めないなら直接かけて効果を現してやる！ポーションを傷口にぶっかける、とその途端に激しい激痛が襲う。

表面が焼けるような痛み。ざくざくと突き刺さるようなこの痛みはむしろ悪化してるんじゃないかとすら思う。

その痛みでふらつくが、剣を持っているから倒れるのも危ない。地面に剣を刺し、それにすぎるようにして我慢する。

と、何人かの走ってくる姿。どうやら町の自衛団のようだが、来るのが少し遅くないか？

「おい！大丈夫かっ?!」

「何と、かつ。向こうに、モンスターの、死骸があるからっ、後は、頼み……」

目が覚めると、そこは見慣れぬ景色が広がっていた。

薄暗い天井、外は闇が広がり、部屋の中は良く分からない。

恐らく、激痛と気が緩んだことで気絶でもしたんだろう。

我ながら情けない。これでやつらが共鳴咆哮ハウリングでもされたらまずかつただろう。

ハウンドウルフは群れ単位で行動するが、時折他の群れとも行動

を共にする。

その場合、ピンチになると他のグループに咆哮で呼びかけ、それに応じ狩りに参戦する。

つまり、増援を呼ばれることになる。

そうすると単純に戦力は一気に増え、疲労した後だと簡単にやられてしまうこともある。

今回は正直ラッキーだったとしか言えないだろう。流石に迂闊すぎた。

と、痛みが止んでいることに気付く。触ってみても痛くないし、足を曲げてても多少の違和感はあるものの歩くことに支障はなさそうだ。

寝ていたベッドから降りると、改めて自分の姿を確認する。

傷はないみたいだが、服がボロボロだ。流石に掠りもしたし、痕が残らないだけ上出来だろう。

後は、ポーションや鞆、ファルシオンの類が一切ない。部屋にでも置いてあるのかと思っただが、そういうわけでもなさそうだ。

というか、やっちゃまった。スキルはファルシオンのものしか使っていないが、どれも鑑定されるとまずいものばかりだ。

それ以前の問題としてあれを8匹倒せるレベルの人間がどれだけいることか。恐らく5人でも重傷者が出る可能性が高い。10人はいないと安全に倒すことは難しいだろう。この場合の安全、というのは軽傷だけで済むという意味で、無傷という意味ではない。

俺の主な傷は右足のみ。しかもそれも既に治っているわけで、どう考えてもおかしいだろう。

ポーションに関しては幾らでも説明は出来る。けど、ファルシオンと俺の戦闘技能はまずいだろう。

こうやっていても仕方ない。とりあえず状況の確認だけでもしに行くか。

ドアを開けると、仄暗いが蝋燭が灯っており、一瞬その明るさに目が眩む。
が、すぐに慣れるとそこには見慣れた人が数人、椅子に座っている。

「ソラっ！ もう平気なのかい?!」

と駆け寄ってくるのは父だ。

「ん。この通り」

右足を叩いて健在ツぷりをアピールしてみる。

と、強く抱き締められる。前にも同じようなことがあった気がするが、というか以前より痛い気がするのですが、父上?!

「ぎ、ぎぶ！ い、痛いって!」

それでも解放される様子は無く、俺からは抜け出せられないためじたばたもがくしかない。

「トニー、そろそろ解放してやれよ」

苦笑気味に話すのはジールだ。

いや、話すだけじゃなく手を貸して欲しいんだが。

「ソラくんっ！ 何で無茶したの?!」

ぎゅっ、と頬をつねられる。いや、それも痛いんだが。というか

捻りを加えないでくれっ！

「本当よ。何を考えているのかしら、あなたは」

逆の頬をリオナに引っ張られる。こっちは限界を試すと言わんばかりに強く引っ張ってくる。

しかも小刻みに振動さえ加えるとは何事だっ！

どっちも痛いっーの！

「はあえ！」

口を閉じられないから間抜けな発音にしかならない。とはいえ、意味は伝わったのかさらに引っ張る力が強く……って何でだ！

「ソラくんはいつも無理ばかりするから少しは反省しなさい」

「そうね。少しは良い目をするようになったけど、まだミランダを任せるわけには行かないわ。だから、反省なさい」

お姉さんの言葉もリオナの言葉もいまいち意味が分からないが、暫くこの拷問は止むことは無かった。

「頬がちぎれるかと思ったっての。ってか、口の端切れてるし」

妙に痛むと思って口の端に触れてみると指先がほんのり赤く染まる。幾らなんでもやりすぎだ。

「ソラ。もうあんなことはしないように。いいね？」

「出来る限りは。少なくとも1人で対峙はしたくないね」

父からの鯖折りからも解放され、身体を解す。

あの細い身体のどこにあんな力が隠されているのやら。

「当たり前よ！ ハウンドウルフに単独で挑むなんて、何を考えてたの！」

「一番生存確率が高い方法を選んだだけだよ。武器持ってるの俺だけだったし。ま、死ぬつもりもないしな」

笑って見せると、何故かりオナは驚いたような表情をする。

「それでも、手段というものがあるでしょう。すぐ逃げるものかと思っていたら、本当に信じられないわ」

「リオナ、それくらいにしよう？ もう帰らないと怒られちゃうよ」

「そ、そうね。あなた、ミランダを悲しませるようなことをしたら許さないわよ！」

寮の門限だろうか？ 最後に言い捨ててリオナは足早に去っていく。出るとき、一瞬目があつた気がするが気のせいかな？

室内は薄暗く、外は真つ暗だからよく分からないが。

「というか、俺が目覚めるまで待っていてくれたのだろうか？ 律儀なものだ。」

「ま、元からそういつつもりは特には無いんだが。お姉さんも、明日から仕事だぞ。早く帰って寝ないと」

さて、準備は済んでるからいいとして、明日ちゃんと起きられるだろうか。

「ソラくんは明日から暫くお休み！」

「え？ いや、明日も露店あるし、やることまだまだあるだろ？」

「いいから私の言うことを聞きなさい！ 無理した人にはお仕事をさせてあげません！」

何という理不尽な。

「いやいや。アイデア浮かんできたばっかだし、今は困るって」

ポーションのこと、魔術品のこと、魔具のこと。色々あるが、今はやってみたいという気が溢れてる。

何故かと思うが、結局それは単純なことなんだろう。

「ダメ！ 家族を心配させちゃうような子は暫く反省しなさい！」

それをいわれると弱い。帰るのも少し億劫になりそうだ。

「クリスの説得はソラにお願いするよ。僕は、後で帰るから」

まさかの丸投げですかっ！？ 何故嬉しそうなんだ、父は。

あれか、この前の丸投げの仕返しか？ いや、幾らなんでもそれは大人気なさ過ぎるだろう。

「いやいや、そもそも俺荷物を探さなきゃいけないし！」

「それなら私がサンパーニヤに運んだから大丈夫だよ。でも、取りに来ちゃダメだからね」

お姉さんの表情は満面の笑みだ。満面の笑みのはずなのだが、何故否定できないプレッシャーを感じるんだ？

「……いえす、まむ」

当然通じるわけも無く、不思議そうに首を傾げられたがそう答えるしか俺には出来なかった。

それで終わればよかったのだが、当然終わるわけも無く。

家に帰りつくと、母にじーっと何も言われず睨まれた。

視線を逸らそうとすると顔を固定されて、睨まれ続ける。

ひとまずただいま、と言うと叩かれた。次にごめん、という泣かれた。

それもずっと無言のままだ。泣き止んでもずっと無言で、何も言ってくれない。

筆談を試みようとも思ったが母は文字がかけないし、そういうことではないだろう。

で、とりあえずあれこれ移動するとずっと付いて来て、視線をちらちらと2階に移す母の行動を鑑みるに、一緒に寝る、が正解らしい。

正直恥ずかしいのでレニを真ん中に据えてみた。

翌日、1つのベッドに4人も寝ていて寝苦しかったのは当然の結果か。

ベッドを抜け出して、ふと窓の外を覗き込む。

いつもより起きるのが遅くなったからだろうか。既に空は青く輝いている。

足早に館の前を通り過ぎる人、遠くからはわずかにだが聞こえる雑踏の音。

何も変わらないはずなのに、まるで世界が生まれ変わったような気すらする。

いつも通りだが、今日は良い日になりそうだ。

第14話。怪しげな噂と生える気持ち。（後書き）

もう少しこの話は前に持つてくるべきでしたかね。
というか描写がぐたくた過ぎる気が。。。

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

2011/10/2

加筆修正しました。

2011/10/4

誤字の修正をしました。鈴鳴月様ありがとうございます。

第15話 束の間の休日。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第15話 束の間の休日。

ゆっくりと食事を終え、外に出かけようとするとうちから呼び止められた。

「ソラ、何であんな無理をしたのかな？」

「無理、に結果はなつたけど俺1人であれば少なくとも死ぬことは無かった。なら守ることは当然だと思うけど」

もう少し分が悪くなければ片手剣用のスキルを惜しまず使う予定だったし、最悪の場合は魔術だつて使うことを惜しまない。

少なくともそれくらいは覚悟は出来ていた。思っていたよりも剣の性能が敵に対し高く、あっさり終わったが。

「もっとソラならうまく逃げられるだろう？ 怪我をしてまで無理に残る必要が何処にあったのかい？」

「あれは父も知っていると思うけど、狩りをするために本来は森の中に居るような存在。」

あの周囲に森は無かつたし、恐らくはイレギュラーなんだろう。俺をあそこに誘った2人もそんなことは想定していなかつたみたいだったから攻撃手段もない。あそこで逃げていたら確実に俺たちは追われ、途中で追いつかれるか運良く町まで逃げられたとしても町の自衛団たちに犠牲が出る。俺だからあそこまで軽い怪我で済んだ。自衛団でも10人ほど居なきゃ撃退も難しいと思う」

「自衛団もソラと遭遇した先行隊と本隊合計20人は居た。だから、ソラが無理をする必要なんて無かつたんだ」

最初の数人は俺の救援隊ということか？ それにしては遅すぎる気がするが。

「あの時点で俺がそれをどうやって知る術があるのさ。まずは確実な安全の確保。その後に逃げるかどうか決めるよ。結果が殲滅だったんだけど」

父は何か勘違いしているようだが、俺の『気配探知』も戦闘中は精々2〜3km程度しか分からない。

それでは察知した時「見えた時だ。360度視線を持つ程度の役割しかない。」

「でも、気絶するほどのものだったんだらう？」

あー。気絶するほどの怪我か何かをしたと思われていたということか。

「あれは血の臭いでやらただけ。あと、そのせいで戻してポーションも飲めないし、怪我をしている部分に効くはずだからポーションをかけたら焼けるような痛みでくらくらするし、それで気を失っただけだよ。戦いのダメージは精神的なものの方が大きいくらいだよ」

とはいえ、身体能力との不適合が凄まじい。身体は思ったよりも動くものの、どう動かせばいいかが分からない部分もあった。

これに関しては今後の課題か。

「け、けど。あまり無理はして欲しくない」

「しないって。少なくとも1人で戦うのはもううんざりだし、その

必要も今のところないし。

「というか、父よ。そんなに青褪めて何かしでかした？」

俺の説明を聞くたびに父の顔から血の気が引いていく。

これは、何かやらかした人の表情だ。やらかしたというか、何か行き違いで勘違いをしたという表情か。

「話して、くれるよね？」

包み隠さず白状した父を説教タイムに持ち込んでみた。

どうやら父は俺が倒れたという連絡を受け、お姉さんとリオナに遭遇。

事情を聞いた後、怒鳴ったり手を出したりはしなかったが責め、とまではいかないものの叱ったそうさ。

それはまあいい。勘違いでしかないが、お姉さんやリオナも恐らくきちんとは説明していなかっただろうし、そもそも認識できていないはずだ。

だが、その後にお姉さんと話し合い、サンパーニャでの働き方にもまで言及したらしい。

毎日遅くまで働いて日によっては疲れ切って帰ってくる。話によれば俺の方が主体で動いている。

そういつたことで働く時間を制限するよう言ったそうさ。

心配してくれるのは嬉しいし、いずれは必要なことだろう。

けど、今はそれをするには時期が悪すぎる。それにそんな話を当事者抜きに話さないこと。

本なら正座させて反省を促すところだが、正座の方法を説明するのばかばかしいからしないでおいた。

何か言いたそうな表情はしていたが、黙殺した。

「いらぬお世話と言つつもりはない。けど、今は俺の我俣を聞いて欲しい。無理なことはしないし、出来る限りで早めに帰るようにもするから。だから、少しは信用して欲しい」

「信じてるさっ！ けど、心配するっ！ 家族なんだからっ！」

父の大声なんて何時ぶりに聞いただろうか。普段物静かな人なだけあって、珍しい。

「あのさ。心配しないで欲しいとは言つてない。信頼して欲しいだけ。口を出すのもいいけど、勝手に進めないで欲しいだけだよ」

相手のことを信じられないから自分が頑張る。相手に心配されたくないから自分が頑張る。

まあ、今までの俺で信用しろと言われたら難しいのは分かるんだけど。

「ま、今回のことは俺がけりをつける。だから、待って欲しい」
最後にいい、と軽く笑って見せると、父も渋々頷く。

まだ納得できていない部分が多いんだろう。一度で納得させられる術をまだ俺は持っていない。

だから譲歩を引き出すだけだ。まあ、ダメだったときは素直に怒られよう。

「じゃ、俺は出かけるけど夕方ごろまでには戻れると思うよ。父、仕事は？」

「今日は特にないよ。ソラ、本当に無理だけはしないでくれよ？」

「そうそうトラブルなんて起こらないだろうし、それに巻き込まれるようなことは無いはずだよ」

断言は出来ない。可能性が低いだけで、ないわけじゃないんだろ
うし。

その返事にさらに不安そうにする父だが、何とか説き伏せて外に出ることにした。

と、あんな科白吐いたから何かしらに巻き込まれると思ったが今のところ平気だ。

今日は露店を開いているはずだから、中央広場を避けて今まで来た事のないこの町を象徴する場所、学術区に出向くことにした。

流石に授業中なのか学生の姿は見えないが一般解放されているらしく通行人の姿が見える。

この学術区にあるのは魔法学校を始めとした、それに属する機関ばかりだ。

で、色々とあるのだが今日来たのはその中でも結構な大きさを誇る図書館だ。

流石に俺が行ったことのある大きな図書館などに比べたら小さいが、それでも俺の住む家よりはでかい建物の中に入ると、本が大量に置かれている場所独特の匂いがする。

そこで受付のおねえさんに聞いたところ、本を借りるのは貸し出しの許可証を作らなければならぬし、それを作るのは有料だが、本を閲覧する分には誰でも可能だそうだ。

ただ、その場合でも一部の本は閲覧禁止だそうで、階によって分けているがその場所には立て札がかかっているから入らないようにとのこと。

そんなわけで、少し勉強することにした。

それは歴史のこと。相変わらず神がどうか精霊がどうか、痛々しいものを読んでいる気がして中々読む速度は上げられなかったが、適当に斜め読みするだけでもそれなりのことは分かった。

知りたかったのは神のことと精霊のことだ。

そういったものを調べるのは神話や宗教本かと思ったが、導入に関しては歴史書が良いとおねえさんに教えてもらった。

深く知りたいならその道に詳しい人などに聞いた方が早い、と言われたのは思わず苦笑しそうだったが。

まあ、そういったことはひとまずおいて。分かったこととしては、神は複数存在していてそれぞれが今はいない神によって創造されたもの、だそうだ。

とはいっても神も何によって創造されたのか分からないし、それが何だったかを指し示すようなものもないようだ。

さらにその神から創られたものが精霊であり、人だそうだが詳しいことが一切載っていないので恐らく他の可能性もあるためこちらも気にしなくて良いだろう。

人は獣人や知性のある亜人も全て含んでいるそうだ。何故そうなっているかは分からないが、そのためか身分の差などはほとんどないそうだ。

と、結局分からない事尽くしなのだが一番分からなくて困るのが神との接触方法と、『魔王を生み出す可能性のある』神がどれか分からないことだ。

暇つぶし、と考えると娯楽や享樂、或いは荒廃を好むようなものかと思つてはいるがそういった神は文献には記されていない。

神自体人に対してあまり接触せず、というか交流を持たず一方的な神託という形でしかこの数百年は関わっていないそうだ。

現状長く歴史を正確に蓄える手段がないらしいから、こういった

歴史書も平気で改ざんされている可能性がある。

あと、この町の歴史なんか少し分かった。

この町には他の町などと違い、神を崇めるもの、神の傍にいるものとして神傍者かんぼうしやというらしいのだが、そのためのギルドが存在していない。

この町は成立が魔法学園ありきで、その後多くの商人などが集まったが神信仰よりも精霊信仰があついらしい。

そのため自然と魔術師や鍛冶師など精霊と関係の深い職業の人間が集まるような町になってしまったらしい。

鍛冶師が精霊と関係するのは、火や金属は精霊の恩恵を受けているからだそうだ。まあ、何となく意図するところは分からなくも無いが。

そういった町なので神からの神託は受け辛く、ここ20年は誰もそんなものをこの町で受けたものは居らず、さらに神の信仰は薄れているそうだ。

こっちは歴史書ではなく、この町の日々という日記らしきものから読み取ったものだ。

最後の日付が1年前になっているのに寄贈されているのはどうしてだ？

まあ、そんな状況だからそんな蔵書も集まりづらく、研究者が自分用にストックしているだけでこっいつたところに戻って来ず、神に対する知識は得られ辛いという結論になった。

これ以上の知識を持つとするとするなら他の町だのに行くか専門家に聞くしかないか。

まあ、今すぐにするべきことではないから保留で構わないが。

後はスキルのことだ。「すぐに使える！ 3分スキルブック」や「初心者入門、これであなともスキルマスター？」みたいなhow

t。本もなかつたためこれも調べるのに時間がかかったが、出てくるのは面倒な事実だけ。

俺のスキルの多くはクエスト報酬か敵からのドロップ品からのものだったが、こちらではそういったものは一切なく、魔術は精霊への語りかけ、他のスキルは名の如く技術、だそうだ。

特に解析や探索系のものは酷い。たとえば俺が使う気配探知。あれはどの方向、距離にどの敵が居るか、あるいはどのような人物が居るかを知ることが出来るスキルなのだが、こちらではどのくらいの大きさのものがどちらの方向に居るか程度しかわからないものらしい。

スキル扱いできるものは武器を使った攻撃スキルだったり、単純な解析だったり、あるいは誰でも使えるような補助スキルだったり。まあ役に立つだろうが、酷く曖昧なものばかり。

何よりも、それを取得する方法が良く分からない。というか、取得そのものは出来るのが当然なのか特に書かれていない。

そういえば、魔術ギルドのギルドマスター（ごうしゅ）が鑑定したときも正確な数値や効果は見れていないようだった。

スキルの譲渡を行うスキルもないし、やはり俺に直接教えるということは無理なようだ。

それとも案外、クエストやらモンスタードロップによる取得方法は確立しているのか？

未だにギルドに加入出来ていないから確認する術も無いんだが。

ある程度区切りをつけたため、本を元の場所に戻し外へと出る。

と、同じ服を着た少年少女がちらほらと通りにいる。これが学生の制服ということなのだろう。

そんなどうでも良いことを考えながら家路に就きたいんだがどうもそうということにはいかないらしい。

もうお姉さんは店に帰ってるだろうから、と中央広場に向かったのだが、その途中で何人もの人に足止めされる。

その理由も、俺がいなかったけどどうしたんだ、とか今日は買い物か、とかそういう話もあったがその後にとんでもない話を聞かされた。

どうやら、今のサンパーニヤは俺がお姉さんから譲り受ける前で今はその顔見せの段階らしい。

そう聞いてくる相手にはサンパーニヤはお姉さんの店でそういうたことはない、と話してどうにか納得はしてもらった。

けど、常連になるほどお姉さんの不器用さは知れ渡っているらしく、次々と新しいもの、或いは魔術工房として再建していく姿はお姉さんがしているようには思えず、全て俺の手柄なのだそうだ。

完全に否定できることではないが、あくまで俺は手伝いをしているだけだと説明してもそっちは信じられていないようだ。

派手に動いたつもりはないが、お姉さんをフォローしていくうちにお姉さんとの比較をされてしまったみたいだな。

少し前の俺なら此処で潮時だと感じ、サンパーニヤから離れただろう。それでも収入を得ることはできるんだし。

けど、今はそうは思わない。これから、お姉さんを名実ともに鍛える。いや、出来る限り成長をともしたいというのが本音か。

その後お姉さんがどうしたいかはお姉さん次第にはなってしまうが、それは悪いことではないだろう。

といつても、解禁されるまでは俺も動けない。

何人かに今日の露店の状況を確認しただけだ。『隠密』を使って確認してもいいのだが、今日は露店は終了していて、店の中に入るうとするとうちやってもバレるだろう。

次の露店の日まで待つか、解禁されるまで待つしかない。となる

と、今は我慢する方が良いのか？

と、歯痒さを感じながら家に着くと、その前にはリオナがいた。何故家の前に、と思ったがお姉さん経由で知ったんだろう。家の前にいるのは入れなかつたから、という可能性が高い。チャイムなり来訪を知らせる魔法陣なり組まないとダメだな。

「や、どうしたんだ？ こんなところまで」

「あつ！ あ、あの。話があるんだけど、平気？」

リオナは俺の姿を確認すると途端に動揺しだす。何だかこれだと俺が虐めてるみたいじゃないか。

「ああ。家の中で良いか？」

「いえ。来て欲しいところがあるの。その、外じゃないし迷惑ならいいんだけど」

小さな子供が怖い大人に対峙したようにびくびくとするリオナの言動に少し違和感を持つが、話をすれば分かるか。

「ああ。構わないよ。けど、あまり遅くなると怒られるからそれでもいいなら」

「え、ええ。もちろんよ」

安心したのだろうか。軽くため息を吐く姿が昨日と重ならない。

と、手を引っ張るリオナにそのまま引っ張られるようにして家を通り過ぎていく。

ついたのは、住宅街の一角、お姉さんの家の近くだ。

「それで、どうしたんだ？」

「その、ええと」

何かを言おうとしてやめる、それを何度か繰り返し突然勢い良く頭を下げられた。

「ごめんなさいっ。私、あなたに酷いことしてっ。助けてもらったのに何も言えなくて、ごめんなさい」

「や、別に大したことしてないんだけど、というかちゃんと理由を説明してくれ」

しどろもどろ話す説明は以前のお姉さんの説明に比べ分かりやすかったものの、主観や客観が入り混じり少し分かり辛い。

感情的に騒いだりしなかったからいいんだが。

で、リオナの言いたかったことは調子に乗るな、ということではなく俺を窘めたかったのと俺の本意を聞きたかった、らしい。

お姉さんから話を聞き、お姉さんのことも窘めたがそれと同時に危機感を覚えたらしい。

その危機感はお姉さんの話を聞く限りでは単に俺が入ってきて嬉しい程度だったが、リオナの解釈はそれだけでは済まなかった。

あまりに俺が働きすぎているし、あまりに無欲すぎる。それにお姉さんも働きすぎ、流されすぎという面が気になったそうだ。

そんなわけでその日から学校が終わったら友人や知人、あるいは町で色々と情報収集を行うことにしたそうだ。

サンパーニヤやお姉さんのご両親について聞いて回ったところ、町でひっそりと根付いている噂、俺も聞いた、サンパーニヤをお姉さんが俺に譲ろうとしている、ということを知った。

リオナが火消しを行うことも出来ず、それなら俺に話をして認識を改めるよう仕向けたかったが本心すらお姉さんにも分からなかったらしく、それをまず問い質そうと思い、そうするためにはどうすればいいのか。

考えた結果が、自分がむかつくことをすればきつと感情も顕わになるだろうと結論。支離滅裂なことを言われればむかつくからとりあえずそうしてみよう。と行動した結果があれだったそうだ。

議論する際は感情的にならずに行うべきと俺は教えられたが、それが裏目に出たんだろうか？

どちらにせよ、きちんと話し合いを行わなかったのはまずかったか。

「別に謝る必要もない。俺は俺で拙いところがあったわけだし、あの場はああするしかなかっただろ？　むしろ俺が怒られて当然だと思っけど」

「でも、私ともう少し気をつけていたら、あなただけに負担をかけることも無かったわ」

「それはサンパーニヤのこと？　それとも、あの戦闘のこと？　どっちも不可抗力だよ。工房の現状は暫く知らなかったんだろ。それに、あそこにモンスターが現れるなんて考えようも無かったんだ。

なら、そんなことを気にする、のは必要としても今後の対策を考

える必要があると思うんだけど」

「それも、そうね。それはミランダも含めてまた話し合ひましょう」

最後にありがとう、とりオナは礼を言うと言つて足早に去っていく。

学術区とは違う方向だから何処によるんだらう。

俺もいつまでも此処に居るわけには行かない。お姉さんに見つかったら怒られそうだし。

それにしても、あそこまで支離滅裂な思考を考えて作ったとなると手ごわい相手になりそうな気もする。

まだ納得はしていないだろうし、現状に満足もしていないだろう。強制的にどうにかするつもりはないが、暫く疲れそうな日々にはなりそうだし。

さつさと撤退すると、ようやく家に帰りつく。

その後夕食を手伝おうとしたが母に暫く家事を手伝わなくていいと言われ厨房から追い出された。

その前に鰹節だけは確保して、自室に戻る。

結果は、失敗と言うべきか。火を一度入れただけで後は何もしていなかったため薫りはついているが、乾燥していない。これから乾燥させたら大丈夫なのだろうか？

室内だから虫がつく心配はしなくて良いが、満遍なく乾燥させるために窓際にでも置いておくか？

風通りが良いところで日の出来る限り当たる場所、屋根裏辺りにも候補にあげよう。

乾燥といつてもどうやってすればいいかアイデアが浮かばなかった。屋根裏の窓の前に紐で括って置いておいた。

1日に2回くらい見ておけば平気だろう。

さて、今日はほかにすることもない。庭弄りでもするか？

此処で自分の工房を弄るのではなく他をするというのも大概だが、まあ、炉を買うにしろ作るにしろ費用が足りない。

炉が無くても錬金も鍛冶も出来るが、それなら最初からそうしている。

恐らくだが、生産スキルで作った武具に関しては高レベルの物になっってしまうだろう。

ファルシオン1本だけならさして問題はないと思う。反則アイテムを1つ用意したらいいだけだ。

それも低レベルのもの位ならすぐに作れるだろう。

そんなわけで、庭弄り。もとい発酵用に前に作った小屋の中を確認する。

防水性能が特に高いわけではないため、若干室内が湿気ている。

となるとこれの防水性を高めて、それから樽を持ち込んで、という必要があるか。

樽に関してはサンパーニヤでも使うだろうから多めに仕入れて、それから買い取らせてもらおう。

後はせめて味噌だけでも作る方法を考えてみよう。それが上手く行けば醤油もどきも作れると思う。

ダメ元で麴を使わずにやってみるか？ 少量で試して、雑菌が発生しないように温度管理をすれば案外いけるかもしれない。いや、分からないが試してみる価値はあるだろう。

決意を新たにすると、今日はそれで終わりにすることにした。

良く考えてみると給料日すらいつにするか決めていなかった。材料も買えないのだが、お金を貰いに行くのは何かばつが悪い。

いや、原因は分かっているんだが。今会つのは気まずい。リオナもそんなことを意識させるために俺に話したわけじゃないんだろが、気まずい。

それでも何時までもこの状態でいるわけにも行かないから、さっさと話し合っべきなんだろうがどうやったらいいのか。

食事を摂り、ひとまず寝ることに決め、ベッドに潜り込んだ。

起きたのはいつも通りの時間。習慣とは恐ろしいものだ。暫くまとまった休みがあるはずだからもう少し寝ていても良いはずなのに。そうは思っても身体は眠りを必要としていない。井戸水で顔を洗い、体を解すと既に通常営業状態。

戦闘訓練として、身体を軽く動かそうにも獲物が無い。木剣あたりでも作ろうかと思うが木材も小屋を作るために使い切ってしまった。

竹でもあれば切り出して竹刀をスキルで作れるんだが、竹もない。家の木を切り出すのも問題があるだろう。

足の動きなどを合わせるにはトレーニングが一番だ。そろそろステータスを振ることも視野に入れるべきなのも分かっているが、振り加減が分からない。

というか、単なる鍛冶師とはいえ、子供がモンスターに襲われ装備もなしに怪我をしないのもおかしいだろう。

牙を突き立てられ、皮膚が破れもしないのはぞつとする。異常すぎると思えない。

というわけで、肉体そのものの強化よりも魔術品を充実させたほうが良いだろう。

そうなるとやはり問題は資金不足に尽きるんだが。

まあ、軽く身体を動かすか。変に思考がループするのもよくない。何も考えず身体を動かせばその後の良い考えも浮かぶだろう。

そんなわけで朝食を摂って暫く経った後、町に出ることにした。軽く走るついでに、街の散策だ。

今自分が住んでいる住宅区すら俺は良く知らない。全て知りたいということではないが何も知らないのも拙いだろう。

知っているのは叔母夫妻の家とお姉さんの家、それくらいだ。

幼馴染4人組みの家すら知らない。というか、あれ以来会ったのはアンジェだけか。

友達になりたいと言ったのは俺なのに行動すら知らない。少し薄情すぎたかな。

ハツフル氏の屋敷に出向けば会えるのだろうが、俺とハツフル氏を直接結ぶものはない。行くのは躊躇われる。

あとはアンジェだが、買い物もないのに店に行くのも失礼だと思っ

う。

買い物でもあまり長々と居るべきではないだろう。それが喫茶店だったりすれば別だろうが、食料品店でそれはない。スコットとソフィアに関してはどんな家の子供で、普段どうしているのかも知らない。

何だか変な気を回しすぎて純粹に友達になれるかどうかすら、今の俺には分からない。

うん。余計なことを考えないために走り回っているのに何で俺はこうも色々考えているんだ？

暫くは走ることに専念しよう。

と、軽く流すだけでもじんわりと汗をかいて来たのでちょっとした広場を見つけてそこで休憩することにした。

この町にはそういった場所がいくつかある。公園のような少し広めの空き地なのだが、植物が植えてあったり、ベンチや椅子が設置されていたりと有志を募って整備されているようだ。

あるいは此処で屋台や露店を開く人々が少しでも客を集めるため

にしていることかもしれないが。

とにかく、ベンチに座り汗が引くのをぼんやりとしながら待つ。

出店も出ているし、訪れる人を見ているだけでもそこそこ時間を有意義に使えるそうだ。

「やー。ソラ、どうしたの?」

ぼんやりとしているとタイミングよくというか、狙ったかのようにソフィアが現れた。

「少し町を散策してて、休憩中。ソフィアはどうしたんだ? お使いか?」

「そうだよー。ソラもついてくる?」

何故そうなるかは分からないが折角誘ってくれているんだ。頷き、ソフィアについていくことに決めた。

「ふうん。ソラは今お休みなんだ。けど、魔術工房ってそんなに面白いの?」

どうして今日は此処に居るんだ、という当然の質問から始まった会話はほとんど俺の魔術工房でのエピソードになっている。

「面白いかどうかで言われれば、そうだな。面白い、かな。作れるものは多いし、新しい発見は出来るし。お姉さんも楽しい人だからな。」

で、それはそうとソフィアは今日は何の買い物なんだ? 特に荷

物も持っていないようだけど」

「うんー。今日は1つだけだからねー、あ、でもソラにも決めるの手伝って欲しいかなー」

笑って話すソフィア。1つだけで俺にも手伝って欲しいこと？

「食事とかそういうのじゃなさそうだけど、何だ？」

「うんー。あと少してトールの誕生日だからねー。プレゼントをみんなですつ贈ることになってるんだー」

だからこれから合流して話し合うそう。まあ、都合が良いと言えば良いか。

「やー、おまたせー」

合流したのは中央広場の片隅、そこには当然ながらアンジェとスコットが居る。

「遅いつ！ って、ソラまで一緒なんだ。どうしたのよ」

「ああ。偶々な」

「家を探す手間が省けたからいいだろう？」

いきなり食って掛かりそうなアンジェを抑えるスコット。

これだけでも4人組の力関係というか相互関係が見えそう。

「そーそー。アンジエもあまり怒らないの。それで、何にするか決めたい？」

「ボクはいつもと同じでうちから何か適当に持ってくるよ」

ということとは食材そのものを送りつける気か。しかもいつもって

「僕は、今年は本でも贈ろうかと思う。あの人に扱かれてそういったものも興味を持っているだろうから」

むしろそれは嫌がらせの類だと思っただが。本好きならともかく、そうでないなら詰め込まれた上でさらに読めというのか？

「あたしはこれから探すよー。ソラはどうするのー？」

「さっき聞いたばかりでそんなすぐに浮かばないって。トールの好みも知らないし」

この4人に関して本当に知らないことばかりだ。これから知っていけば良いと思うが、あまりのんびり構えていても時間ばかりが過ぎていくだけの気がする。

「トールはあれでも甘いものが大好きなんだよー。本人は恥ずかしがって言わないけどー」

まあ、高くて中々口に出来ないというのものもあるが、この世界でも男が甘い物好きというのは軽く禁忌に触れるものなのかもしれない。ともあれ、甘い物好きか。ならそれも選択の一つに入れておいたほうが良いのかもしれない。

「あとは、この前ソラが使っていたものを見て魔術品にも興味があるみたい。あいつの魔具じゃシールドなんて使えないのに」

やれやれとアンジエはため息を吐く。そういえば、スコット以外の属性も知らないな。

「なら、候補はとりあえず魔術品が甘いもの、か。他にも何かあるか？」

「大まかに言えばそれくらいかな。あいつは趣味があってないようなものだし、今は魔術がそうだとは言えそうだけど。」

魔具なんて僕たちで準備できるものでもないし、必要なものはあの人を用意してくれているから」

だから必要なものではなく欲しいもの、か。
そういった意味では魔術品の方がいいのか？

「うーん、ならあたしは服でも縫ってあげようかな。トールの着てる服、結構ボロイし」

「フィア言い過ぎっ、トールだって好きであんなボロイ服着てるわけじゃないんだから」

アンジエ、何気にきついことを言っているのは変わらない気がするぞ？

「こついった案だけど、ソラの参考になったか？」

「ああ。俺は俺の領域ってことで魔術品かな。完全オーダーメイド

の一品モノだったら誕生日のプレゼントには相応しそうだし」

何故かその発言に3人とも驚いたような表情をする。一体どうしたんだ？

「いやいやいやっ！ 魔術品のオーダーって高いんだよっ？！ 下手したら金貨あたりまでするよ！

ソラどれだけお金持ちなのさっ！」

焦ったようなアンジェの表情。他の2人も同様の意見なのか、こくこくと首を縦に振っている。

「別に俺が作るわけだし、材料費だけだぞ？ 今だってセミオーダーでアクセ作ってるんだし、特に変わらないんだけど」

所詮アクセの応用でしかない。材料を安いもので作れば銀貨1〜2枚といった所か。

「あたしの知ってる限りだと、アクセサリと魔術品って全く違うものなんだけど。ソラってもしかして鍛冶職人だったりするのかな？」

そういえば俺は自分をポーション売りだと言っただけだっけ。

鍛冶さえ出来れば4人とも魔術品くらい作れそうなものなんだが。

「ああ。となるとお姉さんに使用許可貰わないとダメか。後でサンパーニャよらないと」

とはいえ、あまり強い効果は出さないほうが良いか。商品として作るつもりはないが、それをプレゼントしていたらサンパーニャと

しての面目が立たない。

そういつわけであくまで長時間使用に耐える程度で自衛程度の効果を持つ補助スキルにとどめておいたほうが良いか。

「ね、ねえ。もしかして、ボクの誕生日にも贈ってくれたりする？」

「あまり良いものでなきゃな。アンジェはいつ誕生日なんだ？」

ついでに全員の誕生日を聞くことにした。

アンジェは春の2月目の15日、スコットは夏の1月目の5日、ソフィアは夏の1月目の20日だそうだ。

この世界は春夏秋冬が3ヶ月続きの30日単位。そういった意味では元の世界に近い。

ただ、日本とは違いそんなに四季ごとの区別ははっきりとはついておらず、それもやはり神がどうたらで分けられているそうだ。

で、トールは秋の1月目の5日。あと3日しかないんだが、何でまだ用意していないんだろうか。

「そーいえばソラは？ あたしたち、ソラのことあまり知らないよー？」

「俺は、ええと。秋の2月の7日目だっけ、確か」

多分それくらいだったと思う。というか、村に誕生日を祝うような習慣はない。

その日の近くにある収穫祭と一緒にされてたし、こっちでも祝うものだとは思ってもいなかった。

「聞かなきゃきつとソラ言わなかったでしょ！ 何でそういうことをもつと早くに言わないかなっ！」

「住んでた村ではそういつた習慣無かったからな」

というか、それなら毎年レニの誕生日は盛大に祝っていたのに。今年もすでに過ぎてしまってる。来年こそは豪華に盛り上げるべきか。

「ソラが魔術品を僕たちにまで作ってくれるかどうかは別としても、その日はちゃんと空けて置いてくれよ？」

「あ、ああ。まあ、急な用事が入らなかつたらそうする」

というか、良い笑顔をするな、スコット。何故俺が男相手に照れさせられなきゃいけないんだ。

「じゃ、俺は交渉してくるから」

と、行こうとするとアンジエに捕まる。魔術工房は行ったことがないので興味があるらしい。

ソフィアとスコットも止めないよう興味があるみたいだ。

まあ、構わないと判断し連れ立ってサンパーニヤに。2、3日来ていないだけなのに妙に懐かしい気がする。

急に大勢で入っていくものでもないだろうし、そもそも来るなど言われている。

俺だけで入る事にして、3人には待つてもらった。

ドアが開き、ベルが鳴る。相変わらずクローズの札がかかってい

るが鍵はかかっていない。

どうせなら鍵も掛ければ良いのに、とも思うがお姉さんらしい。

と、奥で作業をしているのかハンマーで金属を叩く音が一回だけ聞こえ、その後こっちに近づいてくる。

「ごめんなさい、お休みなんですけど……って、何でソラくんいるのっ!？」

「そりゃ、ドア開いてたし。俺だって此処の店員なんだからさ」

久しぶりに見るお姉さんは服も髪も煤だらけ、そんな姿のまま対応をしようとして、俺を見て慌てふためきだした。

「で、でもソラくんはまだ此処に来ちゃダメなのっ!」

「父との話し合いの結論で?」

目を見開き大きな目がより大きくなるのは少し面白いが、驚きすぎだ。

「な、な、何でソラくんがそれを知ってるの?!」

語るに落ちるとはこのことか。

「そりゃ、次の日父を締めたから。ちなみにリオナにも事情は聞いてる。あとはお姉さんだけだよ」

「リ、リオナ、私にそんな話一言もしてなかったのにつ。え、えつとね。ソラくん。その、ごめんなさい。いつも迷惑ばかりかけてそれと、この前は助けてくれてありがとう。それと、ひどいことし

ちゃって、本当にごめんなさい」

深く頭を下げるお姉さん。いや、そうして欲しいわけじゃないんだが。

というか焦りすぎだと思う。

「俺だってお姉さんとちゃんと話さなかったからお姉さんに辛い思いをさせたんだ。俺だって謝らなきゃいけない。だから、話すのは後はお姉さんとだよ」

謝って欲しいわけじゃない。ただ、ちゃんと向き合いたい。今までそれを避け続けてきた俺が今更だが、これ以上目を逸らし続けられるものでもない。

「う、でも出来なかった私が悪かったし、ソラくんに頼りきりだったし」

「ちゃんと話していない俺も悪い。現状に甘えすぎてたって認識はあるよ」

出来る限り話せるようにしたい。全てとはさすがにいかないものの、ちゃんと俺だけの考えだけを押し付けられないようにしないと。

まあ、そう考えている時点でもまだまだなのは分かっているんだが。

「じゃあ、これからはちゃんと話し合おうね。けど、どうして今日来たの？ ソラくんもう少しは来ないかなって思ってたんだけど」

「あー。呼んで来るから少し待ってて」

店先で待つてもらっていた3人を招き入れる。

「左から順にソフィア、スコット、それにアンジェ。俺の友達で、工房見学したいって」

「よろしくお願いします」

そう言って挨拶をするのはスコットだけだ。ソフィアは何だかおどおどしているし、アンジェは興味があるのかきよるきよるしている。

「あ、そうなんだ。ようこそ、『魔術工房サンパーニャ』へ。私は一応この工房主のミランダだよ。よろしくね」

そんな3人にも動じず笑って対応するお姉さんは大物なのかなんなのか。

「あー、でさ。お姉さん。鍛^うちたいんだけど、平気？」

「え？ うん、それは構わないけど」

大枠の形は先に作ってしまったほうが良い。後は細かな調整が必要だが、それはつけてみたときに調整できるようにすれば良いだろう。

「じゃあ、材料は……どうすりゃいいんだ？」

「あ、ソラくん。ちょっとこっち来て」

お姉さんにちよいちよいと手招きされ、工房の奥の方にまで行く。

いったいどうしたのやら。

「あのね、材料はソラくんが自由に使って良いからね？ それでえつと、必要な分に関しては買い取って貰う、のでいいかな。それと、これ先月のお給料だよ」

お姉さんから金貨3枚渡される。いや、これは多すぎないか？

「買い取るのはそれでいいよ。金額はどうするかはその時に決めよう？ それと、これは多いって。俺の取り分は決まってるだろ？」

売りに上げを考えると多すぎる。先月の収益は恐らく金貨10枚行くかどうか位か。

翻訳のスキルを付与した腕輪を加えると40枚だが、あれは価格が確定したわけじゃない。

返す可能性がある以上、それを収益に加えるわけには行かないだろう。

と、それを思考するだけだと今までと何ら変わらない。そんなわけです話を話してみた。

「もらえるのはありがたいけど、先月の収益考えると店の運転資金にも影響出ると思うんだけど。」

サンパーニヤの軌道が安定するまで俺は貰えない。だから、それまでは一緒に頑張ろう？」

本当なら俺はご両親を探すのを手伝うべきなんだろうが、正直この町に居るとは思えない。

となると土地勘すらない状況でどうやればいいというのか。

地図らしきものは図書館には無かった。小学生の落書きのようなぼんやりとした大陸図ならあったが、作られたのが500年前のもの

のだったし、地形はともかく国や村の場所や名前なんてあてにならないだろう。

「でも、受け取って。じゃないと働かしてあげない」

無理やり俺の手を閉じさせると脅迫を始めるお姉さん。

「今回はとりあえず受け取っておくよ。けど、次からはちゃんと話し合いの結果で両方納得しよう」

それ自体は異論は無いのか、頷いてくれた。

というわけで、鍛冶をすることにした。

モノはアームレットでいいか。色は、属性に合わせたほうが良いか？

「そういえば、ツールって属性は風だっけ？」

「そうだよ。中級をこの前使えるようになったって言ってたよー」

「サンキュ、ソフィア。お姉さん、どうしてそんな怖い顔を？」

ツール、の名前が出た途端にお姉さんの顔が引き攣る。
まだ気にしているのだろうか。

「う、ううん。何でもないよ？ ソラくん、私も作業あるから、ね」
「？」

何とか我慢している、といったところか。ちゃんと説明しておい

たほうが良かったな。

「分かった。ごめん」

お姉さんだけ聞こえるように謝ると、作業を開始する。

それにしても風か。となると、透明か青色と考えると、アボイタカラ青生生魂かジルコニウムかチタン。どれも加工が大変だったり、そもそも精製自体不可だったりするんだがどうすれば良いのか。どれも青っぽいものであつて青じゃないし、透明な金属なんて聞いたこともないが。

カラーゴールドの応用で溶かした金属に粉にした宝石でも混ぜてみるか？

なるわけないとは思うが、表面に塗装処理をするのも問題だ。塗装が剥がれる可能性が高いし、はがれてしまった場合なんともみすばらしい。

青銅が青っぽくなるのは単なる酸化現象だし、どうしたものか。青生生魂の生産レシピは永久氷河の結晶に王金、そして賢者の石が必要とあるんだが、どれも超高レベル金属。そんな物を用意できるわけもない。

ジルコニウムもチタンも現状で精製不可。だから代用品を見繕うしかないんだが。

一瞬ガラス製のもので作ればいい、とも考えたがそっちは最終手段だ。

まあ、砕けやすいしガラスはないとしても、青玉とも呼ばれるサファイア、それも品質のよくないものがある。

これを砕いて粉にし、溶かした鉄に混ぜてみた。で、粘土などに顔料を混ぜるように混ぜ合わせ、板金として固める。

本来なら時間をかけてゆっくりとするのだが、今日はそうも行か

ない。

駄目押しといわんばかりにサファイアを溶かした水で冷やし、固める。

そうして出来た板は、ほんのり水色っぽい気がする。まあ、鉄も白っぽいし、色を混ぜたことによって変化はしている、ようだ。

むしろマーブル模様っぽいというか似非ウーツ鋼のようになってる。

まあ、これで作ったら面白いことになりそうだ。

鉄を打つ音が工房に響く。熱した板金を打ち、折り曲げ、熱し、折り重ねる。

本来の魔術品の作り方を元に、さらに複雑な紋様を描くようにハシマーを打ち下ろす。

最終的にはある程度成形したものをさらに叩き模様を刻むつもりだが、魔力を此处で籠める。

シールドが使えないと言っていたので籠めるものはそれで良いだろう。

全力で打てばきつと+9とかになるので成形を前提としたもので本気は出さない。

それはそれで失礼な気もするが、歪にさえならなければ良いだろう。

成形した金属を冷やし、最終成形を為す。彫金で模様を刻み、ハシマーで形を整える。

とはいってもこれは後もう少しだけ調節する必要がある。以前見た外見からだけでは完全な一致はまず無理だし。

そんなわけで出来上がったのは

青いまだら模様のアームレット。
DEF + 2 【+ 2】 重量 2。耐久【560 / 560】
スキル『シールドLv. 2』を使用可能。

性能も軽めに出来たし、そこそのレベルで抑えられたからこれくらいなら平気かな？

というか、2時間ほど打っていたのだが3人とも帰る様子も見せなかった。気が向いたからってすぐに打ち始めるのは拙かったか？

「何というか。ソラはおかしいね？」

真顔でアンジェに言われるが、失礼な。

「おかしいは言い過ぎだと思うぞ。ポーション売りとは前に言っていたけど、魔術品を打てる鍛冶師は少ないだろう？」

まあ、鍛冶師の絶対数はそんなに多くないとは思いますが。

この町の鍛冶師は大体100〜110名程度といったところだろう。鍛冶屋が20軒ほどはあるし、少ない方ではないだろう。

ポーション売りとしては製法のおかげで上の方だとは思いますが、鍛冶師としては下層に近いだろう。

俺が知識を幾ら溜め込んでいてもそれを放出しなければあまり意味がない。

「でもボク、ポーション売りの鍛冶師なんて聞いたことないよ？」

前提条件が違うんだからそもそも聞くこともないだろうが、会話に加わると泥沼になりそうだ。

「ソラくんは鍛冶師なんだよ。ポーションは副業みたいなものだから

ら。あまりそういうことは言わないで欲しいな」

お姉さんはあくまでにこやかだ。今のところいつもの圧力を感じないのは相手を選んでいるらしい。

「う、ごめんなさい。アンジエ、失礼すぎっ」

俺の話題のはずだが、加われない。

あくまでにこやかなお姉さんに不思議そうなアンジエ、それとオロオロとどうにか仲裁しようとするソフィア。

「スコット、今まで大変だったんだな」

「これからはソラも一緒さ」

いや、仲間意識は嬉しいんだがこれは巻き込まれたくない。

とはいえ、俺が止めなきゃいけないんだろうな。

「お姉さん、あんま困らせないように」

「アンジエ、これ以上言うようだったらお仕置き」

スコットは俺の行動に察したのか、ほぼ同時に諫める。

どちらも不満そうな表情をするが、ソフィアだけは少しだけほっとする。

「ごめんなさい。アンジエにはあたしたちからよく言うておきますからっ！」

「わ、私は別に気にしてないからそんなに頭下げないで、ねっ？」

頭を下げるソフィアに慌てるお姉さん。お姉さんに関してはまだこれで平気だろう。むしろ問題は

「ほら、アンジエ。ちゃんと謝るんだ」

「……ううっ。ごめんな、さい」

謝るアンジエの方だろう。ばつが悪そうに見えるのは謝り所を無くした結果か。

だが、父親同伴で謝りに来た娘みたいで少し居た堪れない。

「うん。私もあまりあなたを怒れないんだけどね、本当は」

苦笑するお姉さんに3人は不思議そうな顔をする。まあ、お姉さんも同じようなことをしたことあるし強くは言えないか。

「アンジエ、コット。もうそろそろ帰ろっか？ あたし買い物しなきゃいけないからさー」

「そうだな。ソラ、今日は良いものを見せてもらった、感謝する」

「ミランダさんも今日はありがとう。ソラ、ごめんね」

3人は自分たちの役割を確立させているのか、ソフィアが流れを作り、スコットがそれを促し、アンジエが纏める。

4人であればアンジエが切り込みでソフィアがバックアップ、スコットが参謀でツールがリーダーと行ったところか？

3人が去っていくのを見送ると、改めてお姉さんと向き合う。

「さて、じゃあ改めて何度目かの作戦会議と行こうか？」

第15話 束の間の休日。（後書き）

金属に宝石の粉を混ぜてもきつと混ざらないと思います。
それはさておき。

スロー進行が止まらないです。。

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

2011/10/4

誤字等修正しました。エリアさま、よさま、東雲さま、あそると
かんさま、ごるばさま、カイウスさま、暁さま、ありがとうございます
ます。

2011/10/6

誤字等修正しました。独言さま、悠烙さま、ありがとうございます。

2011/10/30

トールの属性を水から風に変更しました。

第16話。遭遇。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第16話。遭遇。

「作戦会議って何をするの？」

「俺が今考えてるのは短期的な目標と、長期的なものを何処に置くべきかってことかな。」

特に商品のラインナップとかは考えなくても良いとは思うけど、主軸は何処に置くべきかだと思う。役割や、今後人を入れるかも含めてね」

「うん。それは決めないといけないと思うけど、人を増やすかどうかはもつと後でも良いと思うんだ。今は無理に増やしても困るし、今は私がどれだけ力を伸ばせるか、かな」

「そこが現状の最優先なんだよな。それで、随分と頑張ってたみたいだけど、どう？」

客、スコットたちがやって来たため顔や髪についていた煤は取っ
たみたいだけど、着替えもないみたいだし服は煤塗れ。

掃除をしていたという可能性もあるけど、ハンマーで叩く音も聞
こえたし、幾つかアクセも見えるし仕事をしてたんだと思う。

「うん。材料足りなくなってきたから溶かして再利用しようと思っ
ただけど、ボロボロになっちゃって……」

バツの悪そうに視線を逸らす。そのボロボロになったというもの
を見せてもらうと、表面が気泡が入ったかのようなでこぼこなもの。

厚みも均一じゃないし、一部は向こう側すら見える。

「もう一度作り直そう。お姉さんが使う分を先に確保してたらそれで後の分は俺が加工するから。それでいい？」

全部を俺がしてしまうとお姉さんの成長にも影響がでかねない。それだけやっていても手は足りないんだからアクセ作りも時間をとってもらおう予定だ。

「うん。それでね、ソラくん。予約の分なんだけど」

お姉さんは先日の露店でも種類を限定してだが予約を取ったそう
だ。

今までと同じ状態で予約を取っていれば俺しか作れないものの方が多いし、まあ当然といえば当然か。

それで作れて何とか渡せそうなものが2つ、後は3つだがこれも少し時間をもらえるそうだからお姉さんでも何とか作れそうと考えている。

が、1つは素材が思ったよりも加工が難しいものでどうすれば良
いかと聞かれた。

「これはまだ板金はあるから、あとは成形っていうより彫金かな。
彫金は結構難しいし、成形する前に刻んでみたら？」

それも一気にするんじゃないやなくてまずは全体に下書きして、その時
点で正しく出来てるか確認出来るからさ。

それから浅めに掘ってみて力加減を確かめながらやっていけば良
いんじゃない？」

俺は完成図が頭にあるからそのまま引くが、それはまだお姉さん

には難しいかもしれない。

無骨というかシンプルなものもあるが、プレゼント用も多く華奢なものや繊細なものの方が受けが良い。

実際露店で並んでいるものもそうだったものが大半だし。

とはいえシンプルなものも需要はあるためその見極めは必要だとは思う。

「うん。そうしてみるね。あと、ソラくんの働く時間なんだけど、やっぱり少し減らせないかな？」

「お姉さんも働く時間を減らせればね。俺だけが短く働くのもおかしいでしょ」

極端な話、露店さえしなければそれでも問題ない。けど、まだ知名度低い。現状はサンパーニャとしてのものではなく、『良いポーションを売る露店』程度だ。

店に客足を誘うには『魔術工房』の側面を覚えてもらうための工夫が必要だろう。

「うん。それは分かってるんだけど、何かしてないと不安だよ」

だから働き続ける。それに関しては根本を解決するのが一番なんだが、どうすべきか。

「でも、いざとなったときに疲れ切ってて動けなかったら元も子もない。だから、もっとメリハリつけてさ。休みの日には何処かに気分転換に出歩くとか、遊びに行くとか。」

1人で悩むのも大切だけど、お姉さんは1人じゃないだろ？」

前にも言った言葉。お姉さんの中にはきつとまだ足りないもの。

そして求めているもの。

それが刺さった棘のようにじくじくと傷めているんだろう。けど、それを抜けるのはお姉さんだけだと思う。周りが与えられるのはきつときっかけだけ。

後は信じて行動するしかないんだと思う。

「うん。……ごめんね」

「だから謝らなくて良いって。それで、お姉さんは働く時間削れそう？」

お姉さんは暫く考え込んだ後で小さく頷く。

話し合った結果、決まったのが偶数週の3日目が俺の休み、奇数週の3日目がお姉さんの休み。5週目は2人とも休み。

5週目も俺が休むよう言うてきたが、此処は妥協してもらった。普通に働いても良かったんだが、この際、最初に多めに休みを取っておこう。もしそれで回らないようだったら休みを半休にしたりと変化させれば良い。

「じゃ、今日はそろそろ帰るよ」

「今日は早いんだね。いつもはもう少し居るのに」

「まだ休みなんじゃないの？ 少なくともお姉さんから許してもらってないよ」

「冗談交じりにそう言い笑ってみせる。」

「あつ。そ、そうだね。えっと、ソラくんのご両親が良いって言う」

てくれたら出て欲しいんだけど」

恐らくそれ自体父が出した条件か何かなんだろう。まあ、説得するべきか。

「じゃあ、それが終わったら復帰ってことで。あと、これ」

お姉さんが普段メモしている紙の束から何も書かれていないものを一枚取り、レシピを書き込んで渡す。

「うん？ これ、何かな」

「パンのレシピ。『ユグドラシルの葉先』で作ってるものとは違うから、商品じゃないんだけど作ってみてよ」

あくまで俺が伝えたのはパンズとスコーンのレシピだけ。裏技というか反則だけど露見しないなら問題にはならないはず。

今回は所謂丸パンとコツペパン。お姉さんが不器用でもこれならきつと作れるだろう。

「じゃ、じゃあ。えっと、どのくらいお金必要なのかな？ 新しいものだからきつと高いんだよね」

「お姉さんが成功させたら食べさせてよ。報酬はそれでいいよ。今回ののは俺の挑戦だから」

慌ててお金を取り出そうとするお姉さんを制する。これでもし別ものが出る様だったら考えなきゃいけないし、成功するようだったら外に広げられる可能性が出てくる。

「う、うん。でも、次からはちゃんと受け取ってね？」

「料理はレシピだけだったらお金にはならないよ。誰かに広く売らんじゃ無かったらね。だから、あまり気にしなくて良いと思うけど」

これを幾つも纏めたものを食堂なんか売ったり、作る工程全てを教えるなら多少は取れるんだろうけど。

「そういうのがやなの！ ソラくんはもっと職人であることを自覚しなきゃダメっ！」

怒られてしまった。確かに職業としている以上慈善だけではありません。難しいけど、本業ですらないものでお金を貰うのは良しとしないんだけど。

「うーん。何でもお金を貰ってっていうのはどうも合わなくてさ。

パンそのものなんて毎日食べるものだからバリエーション欲しいと思うんだけど。中にレーズンや胡桃とか混ぜたりさ。

これまで売り始めた俺個人というよりも、またサンパーニヤの商品かって思われたら大変だと思うんだけど」

「そ、それはそうなんだけど。でも、ソラくんっていつもいつもいつもいつも利益なんて考えないでお仕事しちゃうから心配になるの」

職人が利益だけを優先させるようになったらそっちの方が問題だとは思うんだけど。

「市場の適正価格はそれなりに調べてるつもりなんだけど、そんなに利益度外視かな？ 出来れば他の露店との衝突はしたくないし」

時間があるときは露店を見回っている。あまり見回っていると、それはそれで他のアクセ売りからは睨まれるし、ポーション売りからは製法を聞かれるから、この状態のままではあまりしないようにはしているけど。

「他の露店と衝突したくないっていうのは私も一緒なんだけどね。ソラくんのやつてるのはもっと大きな工房がお得意様相手にしてる限定的なものなんだよ？」

「普通はもっと簡単にするみたいだし、魔術品でもそこまで手の込んだことはしないよ」

「長時間身に着けるものだし、魔術品ならよりそういった事に気を使わないと実用的じゃないと思うんだけど。」

「というか、お姉さんそれ誰から聞いたの？」

「なんというか、お姉さんがそういうことを言い出すときは決まって他の誰かからの忠告の場合が多い気がする。もちろんそれはいいんだけど、そういうった時間が何時あったんだろうか。」

「昨日、露店に顔を出してくれたベディおじさんから教えてもらったの。その分凄く怒られちゃった」

「詳しく話を聞くと、おやっさんが顔を出すと俺がいないことに対し聞いたらしい。」

「その内容に思うことがあったらしく、露店を途中で切り上げさせ、改めて事情を聞いた上で自分の工房で魔術品がどういったものか見せ、聞かせたとのこと。」

「まあ、それもそっか。と、そろそろ帰らないと。じゃあ、説得終わったら」

俺は荷物を回収し、工房を後にする。

帰ったら何故か父が母に叱られていたのは秘密だ。俺は何も見えない。

夕食にはまだ時間があつたため、地下にある俺の工房に入る事にした。

目的は剣の手入れ。戦闘後、何もしていなかったため状況すらまともに把握していない。

鞘から引き抜いてみると乾いた血と油でくすんでいる。刃も少し欠けているみたいだし、耐久も【411/500】と減っている。

変形して鞘から抜けなくならないだけましか。いや、若干変形もしているんだが。

流石に重さで断ち切る代物でも骨を切るのは無理があつたか。

それにしても、どうやって修復したものか。

刃こぼれは小さいものだから砥げばいいとして、変形は叩けば修復できるのだろうか？

鍛冶師が修理も出来ないものおかしいだろう。本来なら『耐久度回復』を使つんだが、今回は出来る範囲で修理を試みよう。

色々してみた結果、修復は完了した。

といつても、俺がやった修復だと完全には耐久度が戻らなかつたため、結局最後はスキルを使ってしまったんだが。

今後の改善点としておこつ。

夕食を済ませ、その後は説得というか交渉になるはずだったんだ

が、何故か母から明後日から工房に行つて良いと許可が下りた。

どうやら父は母に話さないまま事態を進めたらしく、それで旅をしている間に父がどれだけ無理を重ねたかを父自らに話させた上で反省を促すというSっぽいりを聞いた時は思わず戦慄を覚えたが、それはともかくとして2人を無事に町に帰還させたことを褒めず、叱っただけなことにご立腹なようだ。

その上で改めて俺も怒られた。戦うならもつと自分の長所を活かせるような場所で戦うべきだ、とか外に出るなら何があっても良いようにもつと回復手段を持つべきだ、とか何故か戦闘時の心得がほとんどだった。

とりあえず、母をあまり怒らせないようにすることは確定した。

あと、休みのことも伝えておいた。さらに生活費というか、貰った給料のうち金貨1枚を渡しておいた。

母も父も受け取らないと言っていたが無理に受け取ってもらった。一月金貨1枚でも多分余りそうだ。残りは銀行システムを使えるようになったら預金するようにして、それまではアイテムボックスにでも放り込んでおけば良いだろう。

その後、母から1つ頼まれごとをされたので、それを果たすために2階の倉庫代わりの部屋を漁る。

その頼まれ事は来客に関してだ。

現状、防犯のため俺が設定した人以外の自由な行き来は出来ない、というか門を開けられないようにしている。

それだと気付かなければずっと門の前で待つ羽目になる。それをどうにかして欲しいとのことだそうだ。

確かに村長も雨の中門を開けようとしていたし、人を余り待たせるのも良い感情は決して持たせないだろう。

そんなわけでチャイムなんて当然付けるわけには行かないし、応用できそうなものがないかを探している。

元々享楽者の主人が持っていた館だし、何かそういったものがある

ってもおかしくない。

実際、魔術品は幾つか見つかっているし、危なさそうなものは一箇所にまとめ普段は入らないようにしている。

そのうちのほんの一部のものは以前見つけた日記によってどういった効果のものかも分かっていたりするが、どうも日記の保管状況がよくなかったのか滲んでいたりして読めない部分も多かった。

鑑定をしても、スイッチだとかパーツだとか何をどうするものか要領を得ないものがほとんど。

そんな中でも単なる置物、らしき小さな水晶が数個見つかったのでそれを利用することにした。

門扉の前に5秒以上立ち止まっていたら水晶の色が変わる、それだけの簡単なもの。

本当は魔力感応式のものにしたかったんだがそれだと母が使えなため魔法陣を転写^{エントラット}し、防犯用の魔法陣とリンクさせるようにした。後は遠見でもできるようにしたかったんだが、それだと他の人が居るときに面倒なことになりそうだったから付けないようにした。

それを父と母が持つようにして、あとは厨房に食堂と居間、両親の部屋に置くことにした。

2人が持つているだけで構わないと思うが念のため。どうせ館の魔法陣を基礎としているから外に出たら効果は為さないんだし幾つか設置しても問題ないだろう。

俺は基本的に客の対応をすることはあまりないし、家族が俺を除いて外出しているのなら居間にでもいれば良い。

というわけでさっさと作ってしまったってそれを説明する。稼働テストも行い、上手くいったから問題はないだろう。

そんなことをしながらその日は終わり、眠った。

朝はやはり起きる時間はいつもと変わらず。今日も休みだからや

ることはない。

暇だから採掘にでも出てみるか。そう父に話すと、父の同行であれば許可を出すとの事。

まあ、無駄な心配をかけるわけにも行かないし、頷き、母から魔法品を借りて『耐久度回復』を施した上で装備したんだがやはり使いづらい。自分用の装備も少しだけ作ることにしよう。

父は服の上から胸当て、籠手、弓に矢筒と何処に出しても恥ずかしくない典型的な弓使いの格好。

俺は普段着に『シールド』が使える腕輪とファルシオン、あとは特製ポーションを合計10個。

家にある防具は俺の身体に合わないから装備できない。町で買うにしても俺のサイズはないから特注になるらしいからすぐには用意できない。

とりあえず今日はシールドもあるから、とそのままで出かけることにする。

で、町を出ようとしたときに騎士に呼び止められた。

先日の平地でモンスターが見つかった件が問題になり、町から出るのに制限が出ているらしい。

といっても、戦闘の可能な人間が2人以上であることとモンスターが出現したら報告すること、それと何があっても責任は取れないということ。

後者の2つは問題がないというか、当然だけれど最初の1つが問題になった。

俺が幾ら戦闘を出来ると言っても信じてもらえない。まあ、戦闘をできるといっても普通はそのレベルを疑われるだろう。

話の流れから言えば俺の剣が戦闘を容易に思っただけだと思われるっばいし。

確かにスキルやら何やらで一撃で敵を葬っているという事実、それを考えればそう思われても仕方が無いのかもしれない。

むしろ本当にそう思われているならそれは僥倖といえる。もしそれ以外を疑われていても、あえて自分から言う意味はない。

そんなわけでどうしようと悩んでいるとハツフル氏が釣れた。いや、釣れたというのは表現としておかしいがふらふらと歩いているのかそれとも実は浮いているのか良く分からないがふわふわしながら近づいてくる怪しげな人物がハツフル氏だった。

父は当然の如く怪しげな人物を見る表情だったが何故か名前を聞くと納得し、同行を依頼した。

ハツフル氏も暇だったらしく、快諾してもらった。てつきりもつとゴネられると思ったのだが今日は屋敷に居たくないから良い暇つぶしになるから構わない、だそうだ。

そんなわけで騎士にも許可を得られ、外に出ることになった。

ハツフル氏は自衛団に紹介状を書けるほどだし、実力もある魔術師なんだろう。

騎士がやけにハツフル氏に低姿勢だったのが若干気になるが、何処かを探るのは躊躇われる。

前に服を貰ったりしたし、怪しいというだけで何かと探るのも失礼な話だろう。

採掘を始めて2時間ほど。鞆だけは持ってきていたもののハツフル氏が居る状況でアイテムボックスに放り込むといういつもの手段は使えない。

幾つかの宝石の原石と鉱石、それと果物。あと父が獲物を狩るということなので俺とハツフル氏で協力することになった。

俺が前衛で囷役、単なる獣相手なのでそれで十分だ。わざわざスキルを使う必要はない。

それに父が主に仕留める役でハツフル氏がバックアップ。ハツフ

ル氏の使う魔術では下手したら獣を蒸発させてしまっほどのエネルギーを持つためだそうだ。

蒸発させるということはレールガンでも放つのだろうか？ あるいはレーザー砲か。

どちらにせよ森で使うようなものじゃないな。

そんなことを考えながら採取を続けていると、イノシシらしき獣を発見。父に誘導を頼まれたため石を投げつけたりして怒らせ、おびき寄せる。

罾を張った方が楽そうだが、罾を張るにはどんなものが出没するかはある程度聞いていて分かってもらってもいつ何が出るかは分からない。

獣狩りの檻やトラバサミでもあればそれでもいいんだが、そういうわけにもいかない。

特にトラバサミなんて間違っって人が引つ掛かると大変だろうし。

というわけでちまちまと石を投げつけおびき寄せ、父が矢で仕留める。

イノシシモドキは毛皮が高く売れるそうだから剣を使って仕留めるには不適切なのだそうだ。

ハツフル氏も興味深く見ているだけで特に加勢はしてこない。危険はないと判断したんだろう。

眉間に刺さった矢がとどめになったのか、そう苦労することも無く仕留めた後、その場で父は解体し、血抜きを始めた。

正直エグいが、直視しないと臭いを嗅がなければ平気だ。つまり全く慣れてない訳だが。

本来イノシシは毛皮は硬く、油も多いため毛皮はあまり価値がないそうだが、このイノシシモドキは毛が長く防水性と保温性能も高いため外套などによく使われるそうだ。

「君は猟師の息子なのに慣れていないのかな？」

「猟には参加したことはないので。ハツフル氏は経験でも？」

飄々としすぎていて俺でも全くこの人は掴めない。むしろ過去にどんなことをしていても、きっと驚かないだろう。

「狩りはさすがにないねえ。それにしても、狩りたての動物は美味しいのかな？」

流石にその発言は引く。前後と全く整合性がないとかそういう問題じゃない。

切り引かれたその状態のものを見ながら言うのは流石に違うと思うんだ。

魚を生き絞めたものとは流石に違うと思う。普通、原型を保っているものに対してあまり美味しいかどうかなんて思わないはずだ。とはいっても煮魚などに関しては原型を保ったままで美味しそうと思うからそれが正しいかどうかは分かりかねるが。

「焼いて食べますか？ 血抜きしたばかりなので少し臭みは残っていますか？」

父も苦笑しながら、何故か頷く。そろそろ昼にしても良い時間なのだが。これに関しては俺の方がおかしいのだろうか。

焼いて食べれるキノコやそのまま食べれる果物を見繕って昼にすることにした。

今日はそんなに時間をかけない予定だったので昼食は持つてきていない。ハツフル氏に関しては何も持つて来ているようには見えな

い。ローブの中に何かを隠し持っている可能性は高いが、わざわざ手伝ってもらっている人に要求するのもおかしいし聞かないことに適当に探してくるといって、鳥を何頭か狩って戻ってきた姿を見てそれもぐらついたが。

急遽鳥も処理をしてハーブを詰め込み丸焼きにしたりで随分と豪華な昼食になったが、半分以上をハツフル氏が食べきったため少し多めの昼食になっただけだった。ハツフル氏の分だけでも軽く見積もっても3人前はあったと思ったんだがどんな胃をしているんだろうか？

「まあまあだったね。味はいいとして、量は」

と食べ終わった後、不満そうに言い放ったのは聞かないことにした。

「今日はありがとうございました」

「私も久しぶりに運動できたから構わないよ。機会があればまた声をかけて欲しいね」

その後、特に必要そうなものも見つからなかったため町に戻り、ハツフル氏に礼を言って別れた。

父は狩った獲物を売りに行くとのこととそこで父とも別れ、適当に町を散策することにした。

いつもなら中央広場をうろつくだけで何かと声をかけられるが、今日に関しては目が合い、近づいて来るのだが途中でそそくさと去っていく。何故かと思えば、腰に引っ掛けてある剣が理由だと顔見

知りの露店の売り子に言われた。

顔とそれがあまりに不一致すぎて何かやだ、だそうだ。

失礼な。都市伝説では帯刀したまま接客を行うところだってある
そうだし、そこまでアンバランスではないはずだ。

とはいえ、町にサンパーニヤの売り子が帯刀して歩いていたとい
うのが変に拗れた噂になっても困る。とりあえず父が猟師で、それ
についていくために持っていたとだけ説明はしておいたが。

そんなわけで一度家に帰り、置いてから広場に戻ることにした。

多少面倒だが親の手伝いをしていたと説明して回れば問題ないだ
ろう。

それで済むのであれば、メリットの方が何とか上回るわけだし。

そんなわけで、説明がてら何か掘り出し物が無いかを見回る。

ポーシオンはやはり変わらず赤色ポーシオンのみ、出店のパンは
固く、そのあたりに変化はない。

ポーシオン売りの露店で時折ポーシオンベルトやその亜種がちら
ほらと見かける位か。

ただ、アクセ売りが一部変化している。今までは作ったものを並
べているだけだったのが一部は素材を変えて作ることが可能と謳っ
ている店が出てきた。

アレは正直、素材ごとの加工の違いの理解が必要で、かつ多くの
種類から選択できないと上手くは行かないと思う。

俺の意図は客層を広げることとともに、お姉さんのスキルアップ
も含まれている。

だからそういった目的を持たない限り何処かで綻びが出かねない
と思うんだけど。

そう言ったところで聞いてくれないだろうし、それで成功してく
れるのであればそれに越したことはないんだけど。

そうやって見ていった中で購入したものは1つ。

フリマのような雑多な商品を並べる露店にあったビスクドールと
言えば良いのか？

磁器製の人形が銅貨30枚で売っていたので買ってみた。

あまりリアル過ぎると怖いのが、愛嬌があるというか可愛らしい人
形のためレニにあげる分には問題ないだろう。

買う前に一応鑑定はしていて呪われていないことは確認している。
これは露店の人に聞く限りでは昔買ったものの飽きたから売ろう
と思ったただけなのだそう。

そんなわけで妹へのプレゼントを手に入れ、帰宅。早速レニにあ
げてみた。

「レニ、これをあげよう」

「やっ！」

何故か拒絶された。心が折れそうになった。

「ほ、ほら可愛い人形だよ？」

「やっ！」

走って逃げられた。完全に心が打ち砕かれる音がした。

良かれと思ってしたことが此処まで拒否されるのがこんなに辛い
なんて。

「ソ、ソラどうしたの？ 人形抱えて塞ぎこんでるなんて。ちょっ
と怖いよっ。」

母に引かれたが俺に返事をする気力はない。
ふらふらと自室に戻るが精一杯だった。

人形は俺の部屋に飾ることにした。きっと俺のセンスが壊滅的にダメなだけで人形に非なんてない。

他の人に買われればきつと可愛がられたんだろうが、レニには少し合わなかっただけだ。

まあ、部屋にまで誰かを招く予定もとりあえずはないし構わない。誰かを家に招いても部屋は幾らでもあるんだし。ただ、部屋は殺風景過ぎるし何か集めるのも良いかもしれない。

と、そうやって自己防衛をしておかないと耐えられる自信がないだけだけれど。

結局、食欲もわかず汗だけ流して寝た。

空腹のためか、起きたのは恐らくいつもより早い時間。

食事は用意されているわけも無く、適当にスープを作ってそれを飲み朝食は終わり。

思いのほかダメージは残っていて、それ以上食べることも出来なかった。

昨日の昼が重かったこともあってそうでなくてもほとんど食べられなかっただろう。

この分だと昼を食べれるかも分からない。

ひとまず食費とだけ考えても十分過ぎるほどの金額は持っているし、問題ない。

「おはよう、お姉さん」

「うん。おはよう、早かったんだね」

いつも通りの挨拶を交わし、作業場へ。

「商品の用意は済んでる？」

「う、うん。一応ね。ソラくん、確認してくれる？」

保管されていたアクセを見ると、合計5つのうち、2つは大丈夫、残りの2つは簡単な手直しが必要、最後1つは作り直しと言った具合。

「こっちは平気。他は俺が手直し入れようか？一度運ぶだけ運んだらお姉さんは店番、俺が手直しして出来次第持っていくか、こっちに取りに来てもらうかって感じでさ」

それでも以前に比べれば全体的に完成度は上がっている。
元々ある程度は作れていたから、それからさらに安定度が上がったということなんだろう。

「ううっ……、ごめんね。こっちはソラくんから見てちゃんと出来てる？」

「アクセとしてはね。魔術品としてはまだまだだけど。俺が作ったよりもそれぞれが違うからこっちの方が良いと思う」

大量製造にはない手作り感が出ている。

それが精密なものであれば問題だろうけど、身につけるものに関してはそういった差が出たほうが良いと思う。

「うん、分かったよ。なら悪いけど、手直しお願いします」

ペコリと頭を下げるお姉さん。さて、どれだけの時間で作れるものか。

さっさと荷物の運搬を終えると工房でアクセの手直しからまず始める。

彫金で模様が上手く出来ていないものや歪み、曲がっているものはさっさと直す。

その後は本格的に作り直しのもの。それは銀のネックレスでペンダントトップが割れている。

チェーンそのものは俺が前に作ったものを使ったみたいだけど、ペンダントトップは純銀な気がする。

銀は他のものと違い銀塊を多く作っておいて合金をそのたび作っていた。

効率は悪いものの、一番出る種類が多いためいちいち加工をしないと幾ら合っても足りない。

お姉さんが合金の割合を把握しきっているかは正直危うい。何対何の配合でどうなるかは作りながら説明はしたものの、基本的に調合と合金のレシピはメモしないようお願いをしている。

基本的なものでもこの世界には厳密に言えはないような合成や調合は少なくない。盗難防止の意味もあるけどお姉さんの身を守る手段の一つだ。

あれは今の技術では他で出回っているものと比較のしようがないため言わなければ分からないレベルでしかないわけだし。

そんなわけで銀と銅を融解し、スターリングシルバーにする。

注文として書かれているタグにはリング型のペンダントトップを

ダブル、装飾は無くても良いのでデザインは拘って欲しいという注意書きがあった。

リング自体は連結する必要はなさそうなので溶かしたものを少し大きめに、男女それぞれの指に合いそうな大きさに加工する。もし違うのであれば手直ししたら良い。

若干肉厚に、しかし不恰好にならないよう注意をしながら作り、形が決まった時点で冷やし固め、固まったら即研磨して光沢と出来合いを確かめる。

あまり使いたくはないが、今回は時間がないから『促進』をほぼずっと使い続けている。異常に使い勝手が良すぎるから多用は本当に控えたいところだ。

それでも1時間ほど費やして完成したそれらを包み、鞆に入れる。

忘れ物がないか確認し、施錠をした上で工房を後にする。

「お姉さんっ。予約のお客さん、来た？」

「う、うん。もっとかかるかと思って夕方ごろ来て下さいって言うちゃったよ」

思ったよりも早く終えたことに驚いているらしい。確かに急ぎすぎた。俺も少し焦っていたのか。

「そっか。ポーシオンはそろそろ終わりか。予約どれくらい取れた？」

今回はポーシオンはいつも通り、アクセはお姉さんが間に合わなかったのか予約分のみ、ポーシオンベルトはなし、といった感じだ。ポーシオンベルトは工房や露店でも出回るようになったから、新

作が出来ない限りうちで独占的に販売する必要もないと思うし。

「うん。予約は3件だよ。ソラくんも居るから今回は人気のあるやつも色々出してみたんだけど、平気だよな？」

「問題ないと思うよ。あとはそれをどれくらいお姉さんが作れるかな」

リングに関しては人気のあるものは鋳型を作ろう。

細かなディテールの差は彫金で出してあとは宝石を嵌めれるようになど工夫をするとして、細かいものでも早く正確に作れるはず。

小声で今後のことを話し合う。客が来るたびに中断はしているが有意義な時間として使えたんじゃないかと思う。

製法や具体的なことは流石に外だから話せないにしても、やっぱり言葉を重ねることは大切なんだと思う。

今までも何度もしてきたけど、その度に今まで分からなかったことも分かった。

例えばお姉さんの誕生日が春の1月の10日目だとか、リオナとの出会いだとか。

と、それだけで済めばよかったんだが。

みすばらしい男が露店を訪れたことによつて、それは叶わないものとなった。

「これを何処で手に入れたんですかっ！」

お姉さんにも男の特徴は伝えていた。最初は諦めて貰おうと言葉を重ねていたのだが、男が魔術品を見せた時点でお姉さんの表情が変わった。

焦り、不安、戸惑い、そんな切羽詰った表情で男に詰め寄る。

「ちょ、お姉さんどうしたのさっ。少し落ち着いてっ」

慌てて後ろから抑える。だが、俺の筋力程度では逆に引き摺られるだけ。

「答えてくださいっ！ それを作った人は何処に居るんですかっ！
無事なんですかっ?!」

絶叫するような言葉で事情は把握できた。男もそれでまずいと思っただのか、走って逃げ出す。

「待って！ ソラくん！ 離してよっ！」

「少し落ち着いて、考えがある。今はそのまま泳がせる。あとは露店の撤退作業を」

予約分を渡せていないが、緊急事態だ。そんなことを言っている場合じゃない。そっちは後で謝れば済むだけだ。

「で、でも！」

「あの男なら俺が場所を察知出来る。だから、一度落ち着いて」

正面に回りこみ、耳元で囁く。男が逃げた時点で『気配探知』を使って現在地は把握済み。何処に逃げたかも割り出せる。

「う、うん。分かった、けど……どうするの？」

「あの男の情報は俺が集める。お姉さんは使えるコネを全て使って人を集めて欲しい。出来れば戦闘を出来るような人を何人か。それと、お金は俺の方でもどうにか工面はするから冒険者ギルドにも依頼かけて。俺も住処を発見したら人を集めるから」

「わ、分かったよ。で、でも、無理しないでね？」

少しは落ち着いてくれたのか。だが、少し震えた声で頷くのを確認すると、男が走り出した方向へ走り出す。

人通りがなくなった時点で『隠密』のスキルを使い気配を消し、『強靱化』と『飛空』を使って空から男を追う。

男はこの町にそれなりに精通しているのか、色々と裏道を抜けているが空を飛んでいる俺には無駄だ。

俺にも気付いていないみたいだし、まずはこのまま泳がせる。

着いた場所は案の定というべきか、流れ者たちが暮らす一角、通称ド口板通り。

以前スコットの魔具を拾って、くすねた流れ者たちが居た場所だ。さすがに前と同じ建物ではないが、少し離れた場所に根城を築いているらしく、コソコソと周りを探り建物の中に入っていくが、無意味だ。

とはいえ、幾ら俺でも中に侵入するという愚行は起こさない。中にどんな罠や魔法陣が張り巡らされているか分かったものじゃない。スキルとしての『隠密』は覚えているが、それが使えない場合、気配を消すことは不可能だ。

『気配探知』で探れるのはどれだけ集中しても中に何人の人間がいるか程度。

中に居るのは2人だけ。不審な男がヒュウガを含めたとしても、2人しか俺は聞いていない。

だから連絡要員だとまず判断する。断言は出来ないがある程度目星を立てた方が行動はしやすいだろう。

残念ながら中の会話を盗聴するスキルはない。これが事前に設置可能であれば手段はあったけど、どうしたものか。

ひとまず1時間ほど様子を見たり、中が見れないか建物の周りをつろついでみたが成果は無く。

『気配探知』だけしてお姉さんと合流することにした。

お姉さんと合流したのはサンパーニャでだった。お姉さんが言うには、ひとまず声をかけられそうな相手には掛け、その上でその人からも他の人に声をかけてもらえるようお願いをしているらしい。お姉さんには出せる道具に関しては用意してもらおうことにして、あとは父と母に報告した上で少し街角を歩くことにした。

話をすると、父は付いて来たそうにしていたが母が反対した。

曰く、争いごとになる可能性があるなら後衛よりも前衛を重視したほうが良いそうだ。

魔術を使つての支援ができるならともかく、父に魔術は使えない。そもそもバックアップの役割では悪いが父は俺に及ばない。広域での気配察知や探査に関しては父は得意ではないそうだし。

そんなわけで父は留守番。母はいつも通り俺に魔術品を貸してくれた。

今回は『シールド』と『加速』の2つだ。使い方次第では大いに役立ってくれるだろう。

父は弓矢を持っていくようにしきりに薦めてきたが遠慮した。俺は弓矢の心得はない。

弓道なら知り合いがしていたのを軽く見たことはあるが、あれとは原理は違うらしいし参考にならないだろう。使い慣れた武器でないとは危なっかしくて仕方がない。

そんなわけで俺はファルシオンとナイフだけ装備して町に出る。

中央広場に戻ると、思った以上に俺に声をかけてきてくれる人が多かった。

お姉さんの行動が常連の中で噂になっていっているらしい。娯楽の乏しい世界ならではの伝達速度ということか。

それでサンパーニヤの本来の工房主、お姉さんの父親は、居なくなってもちよくちよく常連客が確認してきたこともそれを裏付けできるだろう。元々町でも人気の合った鍛冶職人で人望も篤い。

サンパーニヤに駆けつけるつもりだったという人も何人が居て、事情を聞くと慌てたように走っていく人まで居た。

周りに少しだけ聞こえるかどうか程度の声で会話を何人かとして、サンパーニヤに戻る。

その時点で店の中には10数名の人が集まっていた。どれだけ人があつたか分かるというものだろう。

「お姉さん、道具は準備できた？」

「うん。店にあるだけのポジションはあるだけ詰めたよ。あと、これはどうしようか」

お姉さんの手にはピンクシルバーのバングルがある。短距離転移が籠められたもの、か。

「これも持っていこう。お姉さんは守護の腕輪、持ってる？」

シールドと同じ防御呪文であるプロテクトのかかっている腕輪はお姉さんを守る手段としてはうってつけだ。むしろそれがなければ危なくて同行を許可できない。

「うん。お父さんから貰ったものだし、ちゃんと持ってるよ」

大事そうに自分の腕に嵌まっている腕輪を撫で、答える。

「うし。じゃあ、相手も移動を始めたみたいだし、まずは説明から始めようか」

集まった人たちを前に説明をする。

お姉さんのご両親に繋がる情報が見つかったこと、その情報を持っているであろう相手が今、外に向かって移動していること。

その追跡ために力を貸して欲しいこと。ただ、あまり料金は払えず、その代わり今回のポジションは全てうちから出すこと。

最悪力づくで切り開く可能性があるのと、監視役や先行任務が必要になること。

そんな必要な情報を出していくと質問が幾つか上がる。

ポジションはどれだけの数量あるのか、相手が町の外に移動しているのをどうして知っているのか、そもそも今回の情報は正しいのか、など当然のことばかりだ。

ポジションは普段の余剰分と仕入れて未使用の分、合計241本。相手が外に移動していることを知っているのは、俺が気配探知を使えるということを伝えた。

あまりおおっぴらにはしたくないが、隠しておける事でもない。程度の差はあるだろうが同じ年のツールにも使えるようなものだし、今回は隠すことでのメリットがない。

最後はお姉さんが答えた。男が持っていた魔術品を作ったのはお父さんで間違いない。雑で全体的に荒さもあるけど、間違いないと。

話に納得できず、3人ほど辞退してしまったがこれ以上説得する材料を俺もお姉さんも持っていない。危険の可能性だって十分あるんだし、強制できない。

けど、それでも10人を超える人は参加してくれる。その事実にお姉さんは軽く涙を浮かべている。

と、感動するのは終わってからにして欲しいので準備をして、それぞれに持てるだけのポーションを持ってもらい、残りはお姉さんが露店への運搬用に用意していたらしいポーションの運搬箱に詰める。

これはグルンダの工房に依頼して作ってもらったそうで、両側に大きな木の車輪が取り付けられている。

また、前面に取ってを付けてさながら旅行用のキャスター付きバツグのようになっていてその分多少重くても運べるようになってるそうだ。

そこに詰められるだけのポーションを全部詰め、出ることにした。

今回集まってもらったのが軽戦士が2名、重戦士が3名、弓手が2名、槍使い、拳闘士、魔術師と密偵が1人ずつ。

密偵というのが職業として確立しているのが妙だったが、都合が良い。

俺とその彼女、あと拳闘士の男性を先行として、魔術師が俺たちを追うために、彼が追跡できるよう彼が普段身に付けているペンダントを借り、彼を中心に本隊として後を追う。

役割を決めた上でサンパーニヤから出発すると、さすがに町の出
口で止められる。

物々しい武装をした男女が10人以上で出かけるのは尋常じゃな
い。そんなわけで話を手短に済ませ、それと少し前に怪しい2人組
みが出て行かなかつたかを念のため聞いた。

すると、1人は俺が知っている人相の男、そしてもう1人は全身
を真っ黒いローブで隠した怪しげな人物が確かに町を出たらしい。

まるでハツフル氏のようなのだが、ハツフル氏にしては背が高く、ロ
ーブもみすばらしいため恐らく違うとのこと。

そんな情報を仕入れ、一行もある程度俺の情報の信憑性が増した
のか、緊張した表情を見せるが誰も降りようとしない。

軽戦士と槍使い、弓手が1名ずつギルドの依頼を受けた人だそう
だが、それ以外は純粹にサンパーニヤを心配してきてくれた人だ。
お姉さんにとつても心強いだろう。

町を出て、改めて『気配探知』を行う。と、妙なことに気付く。

まだ町を出て30分ほどしか経っていないのに、40kmは進んで
いる。時速に換算すると約80kmだ。この世界で、そんなに早く
走れる人も乗り物もないだろう。

俺がスキルを組み合わせても届くかどうかと言った所だ。それも
身体が持つかどうかを度外視した条件だ。現状であれば精々馬より
早く走れる程度か。飛べばもっと速度は出るんだが、その手の魔術
はない、はず。

となるとどうやって移動しているかが気になるが、今は追いか
けるのが優先だ。

「大地を駆け抜ける恩恵を、我に『加速』」

特殊スキル『加速』は移動速度を+20%してくれるものだ。以前使った『軽量化』にも似ているが、こっちはVITを+5してくれる効果がある。

のはずなんだが、思ったよりも筋肉が変化しているようには見えない。+5程度では肉体を大きく変えないのだろうか？

まあ、そんなわけで俺を中心とした先行部隊の行動を開始する。

目指すは不審な2人組み。ようやく手に入った情報だ。逃すわけにはいかないだろう。

第16話 遭遇。(後書き)

ようやく怪しげな男が目の前に現れ、物語は次の局面を迎えることに？

色々小ネタをはさんでみましたが、レールガンは光というか物質を加速して発射するだと思います。あえて使っていますので突っ込みはご容赦を。

評価やつっこみ等ありましたらお願いします。

第17話 救出大作戦！（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

総合評価が20,000ptを超えました。
本当にありがとうございます！

第17話 救出大作戦！

駆ける、駈ける、翔ける。

まるで地を縫うかのように、大地を泳ぐように、空を舞うように。と出来れば良かったんだけど。実際は出来る限り体力を消耗しないよう、地味に走っていただく。

本気で走るわけにもいかず、他の2人に合わせるように走って行く。

馬を借りるには人数が多すぎたし、何よりもそこまでの資金はサンパーニャにはない。

そんなわけで『気配探知』を続けながら怪しげな人物たちが去っていった方向へただ走り続ける。

途中休み休み進み、大体70kmほど進んだところでようやく男たちが止まっている所へと辿り着く。

といっても2kmほど離れた森の中に、だけれど。

そこは小さな集落のようなところで、3軒家が立ち並んでいるが見える範囲に人の姿はない。

といってもそれは見た目だけで、それぞれの家には何人か潜んでいる。

一番大きな家には10人ほど、他も5人ほど居る。

何人が敵で、何人がそれに捕まっているのか。そもそも拘束されているのか、それとも協力しているのか、怪我の有無はどうなのか。そういったことすら俺では判断は出来ない。

密偵の人に探ってもらおうとしたが、結果は失敗。中を覗けるような場所は限られていて、そこには誰の気配も無いそうだ。中に

侵入しようにも、侵入者を見つける魔法陣がかかっているらしく無理だとのこと。

時折何人か出入りを繰り返すが、警戒をしているのか、うろつろと周りを回るだけで特にそれ以上の行動をしない。

2人一組で見回りをしているため少しずつ人数を削るということも出来ない。

どちらにせよ、それを始めると騒ぎになるだろうから本隊が来るまで動きようがないんだが。

結局合流したのは日が落ちる前。夜襲をかけるには情報が足りなさ過ぎる。

朝日が昇る頃を狙って作戦を開始することに決め、基本的な作戦を練るのと同時に離れた場所で野営を組むことにした。

作戦自体は大したことはない。お姉さんのご両親が一番大きな建物の中に囲われている可能性が高い。

そこを電撃的に襲撃。構成は前衛3名、バックアップ2名、そして魔術師。

前衛は重戦士、軽戦士、拳闘士、バックアップは弓手に密偵。

俺とお姉さんに関しては留守番だそうだが、どうやって崩したのか。

お姉さんはどうしても付いて行きたいと言う。娘だし、それは当然の感情だろう。

だが、俺に関しては会った事もない人だ。そういった意味では子供であるということもあり説得は難しい。

ヒュウガの姿であるのならまだどうにかなったのかもしれないが、正直あつちの姿は動き辛い。

『レジェンド』の時はあの姿で普通に動き回っていたはずだが、どうも違和感が付きまとう。

普通に生活する程度なら問題ないんだが、あれで戦闘は難しいと

思う。変化のためなのか肢体の感覚がおかしいというか、俺の身体に何か取り付けてそれをむりやり動かしているという感じがする。

魔術だけ使うのも難しいだろうし、どうしたものか。

最悪固定砲台になればいいんだろうが、乱戦となった場合を考えるとそれも現実的ではなさそうだ。

少なくとも常連は顔が分かるためその点での説得は出来ないし、保護の面では問題はないだろう。

となると感情論だけしかなくなるわけだが、お姉さんの身の安全が確保できない以上、突入班に混ぜるわけにはいかない。

というわけで、残りは遊撃と防衛。そういえば聞こえは良いが基本的に臨機応変。

精々逃げる敵を倒すのと、突入班が囲まれないようにする程度しか出来ない。

せめて、あともう1人魔術師が居ればだいぶ変わるんだが、1人居ただけでもよしとする。

交代で休憩を取りながら生えていた木の実などで空腹を満たしたのち、夜を向かえ警戒を高くする。

といっても俺は気配探知だけで、基本的には休むよう言われている。

俺もお姉さんもまだ子供だから夜はしっかり寝るように、とこののだがお姉さんはやはりまだ子供にカテゴリーズされるのだろうか？

そんな疑問は今脇にでもどけておいて、不安そうなお姉さんの隣に座り警戒だけはしておく。

今のところ見回りをしているのは全部で5人。交代で30分に1度、10分ほどかけてといったところか。

こちらを窺うような様子は今のところ見えないが、油断は出来ない。

夜が更ける前にさっさと寝ると、朝には多少身体はだるいものの行動するには問題ない程度には済んでいる。

他も同じような感じで、気力は十分といったところか。ただ、お姉さんだけが不安で寝れなかったのか辛そうだが。

作戦開始は日の出すぐ。

この時間にした理由はこちらの体力の回復と向こうの警戒が薄れそうな時間を狙って、だ。

夜襲は基本的にある程度気をつけるだろうし、家の中という閉鎖的な場所で、かつ中が分からない状態で薄暗い中で戦闘を行うのは不利でしかない。

そんなわけで、偵察に回ってきた相手を気絶させ、行動を開始した。

作戦は途中まで上手くいっていたはずだ。

突入班の家への侵入を果たした後もちまちまと出てくる敵を無効化させていたし、突入班もそうだろう。

一度一気に家から何人も飛び出し、襲い掛かったこともあったが数はこつちが多い。

何より遠距離からの攻撃手段が無かったのか、辿り着くまでに傷を負わせられたのも大きい。

そんなわけでこちらに大した損傷を受けることもなく、無事終わると思っていた頃、それは現れた。

黒いフードに身を包んだ背の高い、何か。

それを視界に捉えた直後、ゾワリと何かが背中を走る。

嫌悪？ 不安？ 憎悪？ とにかく負の感情をした、ナニカ。だ。いつの間にか引き抜いていたファルシオンは、ただ”アレ”を斬る為そうしただけ。

お姉さん以外のメンバーもそうだ。ただ、アレの危険性はまだ気付いていないようだが。

「ガキの割には、勘が良い」

妙に抑揚のない喋り方をするそれは、俺に向かって近づいてくる。あれを近づけるのは危険、か。つーか、アレは何だ？

名前を見た結果はサイクリヴォルス、か。ちょっと、いやだいがまずい、か。

下級から中級の悪魔で、接近戦をこなす中ボス。俺の認識ではそれはずだが、レベルが40とそこそこに高い。

そもそも、イベント以外でモンスターが喋るなんて俺は知らない。俺の知識で間に合うかどうかとも怪しいところだ。

「みんな、気をつけて。あれは、強い」

その言葉にお姉さんを守る人、距離を取り弓を番える人、と行動はそれぞれだが自分の役割を自覚し、動いてくれる。

1人くらい突っ込むものと覚悟したが、意外と言えば意外だ。

「そこまで見抜くか。面白い。だが、死ね」

「『スイングスラッシュ』！」

ソレの言葉と同時に起動させたスキルは正確に敵を両断しようと

剣の衝撃波をぶつける。

が、あまり目に見えるダメージを食らったようには見えない。やっぱ現状のステータスのままじゃ難しいか。

「大地を駆け抜ける恩恵を、我に『加速』」

速度を上げ、ほとんど意味はないだろうがV.I.Tの底上げもしておく。

さて。全力戦闘を行えば敵ではないんだろうがどうしたものか。というより、アレが現れた場所が問題だな。アレは突入班が侵入した家、つまりご両親が囚われている可能性のある家から現れた。家の中の人数はあの悪魔以外、人数は今のところ減っていないが、どうなっているか確認が出来ない。

さっさと倒して家の中を確認したいところだがそうするには短期決戦に持ち込むべきか？

と、弓手が矢を撃ち、俺も投石を試みているもののやはり効果は薄い。

この場合はタンクの重戦士2人に出てもらってアタッカーを俺と槍使い、バックアップを弓手にすべきか？

いや、もし他に敵が現れた場合お姉さんがやばい。軽戦士1人だとさすがに守りは慣れていないだろうし、どうすべきか。

「ソラくん、私は自分の身はどうか守るから、平気だよ」

「分かった。危なくなったら、これ使って逃げて」

ピンクシルバーのバングルを渡し、敵を見遣る。

これでお姉さんの最低限の身の安全は取れる。あれさえあれば町にまでは戻れるはずだし。

「う、うん。分かった」

腑に落ちない表情をされるが今迷われても困る。押し付けると、その後は戦闘に集中することにした。

対人戦であれば2〜3倍程度のレベル差であっても物量で押し流すことは出来る。

加えてレベルが総数で大きく上回るなら当然のはず、なんだが。幾ら穿ち、突き、貫こうとしてもまだ倒れる気配はない。

むしろこちらは個々人で対応しようとするなら確実に負ける。そのためアタッカーといえど積極的に攻めきれない。

近距離攻撃しかないとため坦克の役割がちゃんと果たせさえすればバックアップはしっかりと仕事をできるんだが、俺たちはそうもいかない。

お姉さんが大量にポジションを持っているとはいえ、痛みはきちんとあるし運が悪いと行動に支障のする怪我すらしかねない。

そんなわけで坦克の間を縫い、『スイングスラッシュ』を放ち、弓で射抜き、槍で突くのだが決定打にやはり欠ける。

ローブはすでにポロポロでその下の姿は顕わになり、肉体もポロポロになっているのだが、未だに倒れる姿は見れそうにない。

その代わり、こちらは重傷こそ負っていないものの、引っかき傷だのなんなので結構ポロポロだ。

特にポジションを飲むタイミングが難しい坦克は顕著だ。

10分も戦っていないはずなのに疲労困憊なのはどうしても避けるのに余裕を持たないといけないし、かといって離れすぎないよう気をつけなきゃいけないのが大きすぎる。

そろそろ本気出す。と思った途端、森から矢が放たれた。

その後が続くように打ち出される火や岩、それに立ち上るように、いや『降って来る』光の柱。

全く、ある程度密着してるとような場所でよくやるよ。

「一歩間違えると俺たちも全滅するところだったんですけど？」

「そんなへまはしないよ。あとは私に任せてもらえるかな」

問いかけではなく、確定していることだと言わんばかりに森から現れたローブ姿の、ハツフル氏がそう宣言した。

普段飄々とした人の、ナイフのような鋭く尖った声と雰囲気。ここは逆らわないほうが良いだろう。

その後を続けるのは幼馴染4人組。最初の矢はてつきり父でも来たのかと思っただが、どうやらいないようだ。

さて。どうやって此処まで来たのはか知らないが、後は任せて平気だろう。

というか、滲み出る殺気が邪魔するなと強く言ってるし。

その気に当てられたのか、タンクの2人も距離を取り、だが警戒は怠っていない。

「お姉さん、此処で待つように」

一言だけそう告げると一番大きな家に入る。

アレが単なる連絡役でしかないのなら、むしろ中の方がやばい。そうなる俺が動くことが最善だろう。

あまり期待はできないが、『隠密』だけ使い入った室内は思ったよりも綺麗だ。

争いの後もほとんどないし、今は抗争の気配もない。

『気配探知』を使ってみると、1つの部屋に人が集まっているのが分かる。

その部屋に行ってみると、全員が床に倒れていた。

全員で15人。侵入した人たちも、いかにも山賊といった風貌の男たちも、あるいは捕まっていたのかみすばらしい服を着た男女も、全員が、だ。

見る限りでは何かで眠らせられたのか、呼吸はしているが意識はない。

目立つ怪我もしていないようだが何にこんな真似をされたのか。

念のため、部屋においてある縄で男たちを縛る。というか、これをアレがしたとは思えない。

おそらくこれはバッドステータス睡眠か麻痺といったところか。

どちらも一定時間動けなくなるものだし、命に異常はないだろう。

だが、サイクリヴォルスはそういったバッドステータスの付与は出来ないはず。

『レジェンド』内の知識でしかないが、使えるのであれば戦闘中に使つてこない方が不自然だ。

となると、他に何者かがそれをしたとしか思えないんだがこの建物内の気配を察知できる人数はこの部屋にいる人だけだし、寝たふりをしているようにも見えない。

カンストさせた俺の『気配探知』から逃れられる術がある、にはあるんだが。

出来る可能性があるのは『隠密』か『隠匿』のどちらかくらいだ。違いは自分が使うか使つて貰うか位だが、どちらもある程度のレベルでのものではあれば気配探知から逃れられる可能性はある。

「くくつ。ガキが餌にかかったか」

いるんだよなー。こういう風に自分の利点を敢えて棄てるバカが。

「それがどうしたのか？ 隠れてるだけしか能のないやつが、吼えるなよ」

口の端だけ歪め、晒って見せる。こちらから打って出る手もあるんだが、この手の輩は短気なのだ。

「ほざくな！ やつを永遠の眠りにつかせる！ 『昏睡』！」

何も無いように『見える』空間が光ると俺に向かって霧のようなものが飛んでくる。

恐らく水か風あたりの属性を持つ魔術師が他にもしたような魔術を使ったんだらうが。

「眠つとけ、三下」

そもそも『状態異常耐性』をカンストしている俺にそんなものが食らうか。

その霧ごと振り払うように駆け抜け、剣を突き出す。

「『留撃』」

突きでも殺傷能力が低く、しかし威力自体はそこそこ高めのスキルを使い、相手を吹き飛ばす。

相手が見えない状況で突いて、刺殺するのもあまり気分はよくない。殴打に近いこれを使えば運が相当悪くない限り死ぬことはないだろ。多分。

と、上手く命中したことで見えない相手が見えるようになる。同時に、壁に激突する。

「抵抗すれば命の保証はしない。さて、どうする？」

肺から空気の全てを抜いたような声を出しうめく男の首に剣を滑らせ、問う。

と、既に意識はないようだ。男は生粋の魔法職なのかあまり体力はないらしい。

顔も腕も枯れ木のようにかさかさでボロボロだし、死ななかつたのがむしろ奇跡のようだ。

俺もそうだが、『片手剣修練』による剣の扱いの慣れと『加速』によるブーストが明暗を分けたといったところか。

とりあえず魔具らしき装飾品は全て外し、足と腕と口に縄をし、転がしておく。

詠唱できないよう、口の中に布つ切れを含ませて対策もしている。魔具を隠し持たれていても困るし。

あとは回復だが、特に目立った傷なども見えない。戦闘も恐らくほとんどしていないだろう。何故全員を気絶させたのかは不明だが余計な戦闘をしなくていいのだから今は気にしない。

後は昏睡からの回復だがどうしたものか。バッドステータス『昏睡』は単に眠りを深くするもの、なんだがダメージを受け起きるものじゃない。

気付け薬か一定の時間をかけるか、バッドステータス回復を使わないといけない面倒なものだ。

普段であれば時間を待てば良いんだが今はそうもいかない。

部屋に窓もないし、ドアも閉めている。バレる可能性はある程度あるが警沢はいえない。

「儂き水にたゆたえ。白き光に身を委ね、風に心を落ち着かせ。我が友から全ての災厄を退けよ。『無効の法』」

山賊っぽいのを脇にどけ、回復呪文を使う。正確にはデバツフ、状態異常スキルの無効化を行う範囲魔法だけれど。

それとはかくとして、俺が使える回復魔法はほとんどがエフェクトが派手すぎる。

これも薄いけど光るし。まあ、部屋の外からは恐らく見えないだろうから一応は大丈夫だと思う。

で、起きて来た密偵のお姉さんに話を聞くと、建物に入っただけで、敵の場所が分かり、突入と同時に眠らされたようだ。

全員が寝ているし、他にも気配が無いため安心してたそうだ。

俺のようなものでも違和感があったのになんかどうしてとも思うが、それだけ自分の感覚に自負があったんだらう。

とはいえ、それだけでは引つ掛かる。恐らく魔法陣辺りが関係してくるんだらう。

後で魔術師に破壊なり何なりをしてもらおう。

外もハツフル氏が制圧してくれたみたいだし、拳闘士と重戦士の男性が見張りをしてくれるらしいから外に出よう。

ちなみに、捕まっていたのはお姉さんのご両親と近くの村に住んでいた細工職人、それとその職人の妹だそうだ。

外に出るとき、お姉さんの父親が妙に左腕を庇うのが気になったが此処で聞くことでもないと思い、声をかけはしなかった。

「お父さん！ お母さん！」

外に出るとすぐにお姉さんが走ってきて、ご両親に駆け寄った。

何かを話しているようだが、聞くのも野暮だ。俺はハツフル氏に状況を聞くことにした。

「やあ。お疲れだったねえ」

さっきとは違い、普段出しているだろう飄々としたもので戦闘はとっくに終わっていることを確信する。近くに注意する相手も恐らくは居ないだろう。

「暫く運動とかもしたくないですね。ツール、お前ら大丈夫だったか？」

「ああ。むしろ俺たち何もしてねえ。師匠、特訓だーって言って連れ出しておいてこれはどういうことですか」

「遠出は普段しないからねえ。君たちもそろそろ実践に慣れるべきだと思っていたんだけど、まだ早かったかな」

「急に雰囲気が変わったのは驚いたけど、ハツフルさんって強かったんだよー」

どこかずれた反応をするのはアンジェだ。むしろ何故俺に話しかける。

「まあ、人に教えられるだけの技能を持つんだったらそれ位はあるだろ。けど、何でこんなに早くついたんだ？　というか、やけに元気だな」

俺たちが出発したのが昨日の昼過ぎ。それから後発の本隊が到着したのは夜。

時間としてはある程度余裕はあるが、どうしても疲れはあるだろう。ハツフル氏やツールたちがそこまで体力があるようには思えない。

「ボクたちは馬車で来たからね。ハツフルさんも夕方まで寝てて、その後はボクたち馬車でずっと寝てたし」

よく馬車で寝てて疲れないな。ハイにでもなっているのかとも思ったが、アンジエを見る限りでは特にそうは思えない。

「けど、そもそも何で此処が分かったんだ？ 夕方ごろ出発したんだったら結構距離は離れてるはずだけど」

夕方ごろだと、既に俺たちですら到着している頃だ。数10km離れている先にまで探知する術はあまりないと思うんだが。

「向かった方向もわかっているし、何より君の魔力は特殊だ。その残り香を追えば良いだけだよ」

残り香って俺の魔力は何か匂いでもするんだろうか。自分では気付かないが、少し嫌だなそれは。

というか、そんなものを嗅ぎ取れるハツフル氏はやはり何者かが非常に気になるんだが。

「それよりも、彼らを連れて帰るよ。馬車は2台用意したから10人は乗れる」

「それは御者も含めて？」

首を横に振るのを確認すると割り振りを決める。

町に戻るのをご両親、お姉さん、ハツフル氏、護衛の合計5人。

細工職人の兄妹はすぐに自分の家に帰りたいそうだから護衛も含め4人でその村に。

その後4人組を拾い村に戻る。

後は合計5人で見張りをし、残りは徒歩で町へ。

お姉さんたちは俺も馬車で帰ることを勧めてきたが、たまにはゆつくりしたいとそれを固辞。

お姉さんもご両親と色々話すことはあるだろう。むしろ俺1人で帰る方が早いし。

せめてこれを使って、とバングルを渡され、いそいそと馬車に乗り込むお姉さんは嬉しそうだ。

そういえば、ご両親や細工職人の兄妹からも礼を言われたが、今回もやはり俺はあまり何もしていない。

そうだったのだが何故か周りから呆れた表情で見られた。どうしてか聞いてみると色々俺がしたことと評価をしてもらったようだ。嬉しいことは嬉しいんだがあまり目立つのは好ましくない。もう少し自重すべきか。

そんなわけで1日挟んで家に帰りつくと母に怒られた。帰ってくるのが遅い、だそうだ。

否定は出来ないので甘んじてその怒りを身に受けることにした。というか最近そんなのばっかな気がする。

それが終わるとお風呂で汚れを落とし、食事を摂りサンパーニヤに行ったのだが開いていない。

昨日の今日で開いているわけではないのだが、お姉さんの父親の腕が気になったので家に直接行くことにした。

念のため適当に宝石の嵌まったアクセもつけて、だけれど。

「あら、あなたは確か昨日の」

ドアが開き現れたのはお姉さんのお母さんだ。

改めてみると、身長は170cmを超える位だろうか？ やけに大きい気がする。

女性に対して少し失礼な感想なきはするけれど。

「サンパニーヤで働かせてもらっているソラと言います。様子を窺いに来たのですが、大丈夫でしょうか？」

「あなたが、ソラくんね。ミランダからは話を聞いたわ。どうぞ、入って頂戴」

少し疲れたような表情に少し気後れはするが、思っている通りならあまり時間もないだろう。

言葉に甘えて上がらせてもらった。

「ソラくん、ありがとう」

「いいよ。それより、どう？」

お姉さんの顔を見れば分かるが、聞かずに居られない。

「それは私の方から話そう。君がソラくんだね。娘がずっと世話になっっているようだ。改めて礼を言わせて欲しい。

それと、これからも娘と店を支えて貰えればありがたい。これは、私たちの我俣だけだね」

「やはり、腕が？」

「ご両親から聞いた話を纏めるところだ。

攫われた日、その日はたまたま近くに2人で出かけたそうだ。

それもすぐ傍で時間もかからず帰るつもりだったので置手紙もせず、だ。

後で考えるとそれもおかしい話だがその時は特に気にせず家を出、そしていつの間にか見ず知らずの場所に居た。

普通に歩いていただけで何故か分からないが、そのまま山賊に囲まれ脅され、魔術品を作る日々。

その無理が祟り腕を壊してしまった、そうだ。

どうも話を聞く限りでは矛盾点や良く分からない点が多いが、ご両親も分かっているから聞くのもあまり意味はないだろう。

ただ、何故サイクリヴォルスがこの町に居たのか。それが気になるが、倒してしまった以上真相は分からないまま、か？

残った山賊から情報を得られれば良いんだが、それを俺がどうやって知るか、が問題か。

「これから行くことを、全て秘密にしてもらえますか？」

「ど、どうしたの？ ソラくん」

お姉さんはどこか不安そうに、そして期待を籠めた目で俺を見る。

おそらく、俺ならどうにかしてくれと思うているんだろう。

「何を、か聞いても良いかな」

「それも含めて、です。俺が何ができるのか、何をするのか。それをひっきりぬめて全て、です」

これは賭けだ。正直治せるかどうかも危うい。そう考えると少
きついものはあるが話されるデメリットは確かにある。むしろその
デメリットの方が大きすぎる。

けど、出来ないことの辛さは俺は分かる。だから、話さないでい
て貰う。対価にはならないがそういう問題でもない。

「分かった。娘を今まで守ってきてくれた君のすることを信用しよ
う」

「あなた、それでいいの？」

どこか不安そうな目で見られる。まあ、それは当然の反応か。

「メレスはミランダを信じられないのか？」

「それは、……そうね。信じないわけには行かないわね」

呆れたような表情で笑うのは、信頼の証なんだろうか。

「そういうわけで、お願いするよ」

窓がないという理由で居間に移動し、地面に魔法陣を転写し、隠
匿する。エニグマ

あとは腕の具合を確かめ、魔術を選択する。

「彼方より此方へ移り行くものよ！ 果て無き戦禍を進むものにそ
の力を！ かの者に光の祝福をつ！」エル・ブレス 『彼の者からの祝福』！」

魔法陣の中が光で溢れ、覆い尽くされる。

俺が使う中でも特に消費が激しい、が特に効き目の高い魔術だ。これでダメだと、蘇生呪文しかないんだがそっちが効くかどうかは不明。

目に見えて大きな怪我をしているわけではないのだから、これは表面よりも神経がボロボロ担っている可能性が高いし。

光が収まると嘩然とした表情のお姉さんの父親。左腕を回してみたり、曲げてみたり、指を動かしてみたりとしているとところを見るとどつやら上手く行ったようだ。

と、3人から涙目で礼を言われるわ、抱き締められてズタボロになるわでふらふらになったのはその30分後。

「えーと……そんなわけなので秘密にしておいてください……」

それだけやっと言うと倒れこむ。気絶はしませんが、揉みくちやにされて疲れ果てた。

とはいえ、これで一区切りはつけたかな。

後はお姉さんとご両親で決めることだし、俺が口を挟める問題でもない。

「今日は泊まって行って欲しいところだけどソラくんのご両親も心配しているでしょう？」

今度しっかりとお礼をさせて頂戴。そうしないと気がすまないから、ね」

何故か念を押されて見送りされた。帰るのは長居をするのもまずいと思ったからだ。

疲れているだろうからうちで食事でも、と誘ってはみたがお姉さ

んがどうしても手料理を振舞いたいらしく、機会があればと流された。

そんなわけで家に戻ると、眠ることにした。そんなことばかりなんだがまあ仕方ない。

報告等に関してはハツフル氏に一任したし、金銭に関してもお姉さんに任せた。

投げやりだが疲れたものは疲れた。むしろ一度寝てリフレッシュすることにしよう。

と、中途半端な時間に寝ると起きるのは深夜になるのは当然か。

肉体的には朝まで寝るほど疲れても居なかったし、精神的な疲労も慣れたもの。

そんなわけで久しぶりに深夜の散歩に出てみることにした。

コンビニもないし、24時間やっているディスカウント店もない。そもそも深夜にやっている店がほとんどない。

そんなわけで1人、星の灯りだけを頼りに歩く。

夜空は綺麗だし、静まり返った町はまるで俺だけが存在しているかのようなのだ。

酔っ払ったおっさんが時々ふらふらと歩いているわけでもなく、ただただ静かな町を歩くのは何となく悪いことをしているようで少しわくわくする。

もちろん後ろめたさも若干あるが、初めて夜更かしたときのように高揚するものがある。

とはいえ、この世界は全てがそうなんだろうか。

夜店を開けるには色々大変だろうけど、メリットもあるだろう。

とはいえ俺がそうだったことをするつもりはないし、どうこうす

るコネもない。

それらを実現させるのも楽しいだろうけど、そこはそこ。それよりも、気になるのは今回の事件だ。悪魔の町への侵入に、不明点の残る結末。

なるべくそういつた面倒事には巻き込まれないようにしたい。

巻き込まれたら現状の生活の維持なんて不可能だろうし。

そんなことを言っても、現状出来る事は危険の予測と回避だけ。

だから、あくまで大切な誰かが危機に直面でもしない限り俺は手を出さないようにしたい。

変な方向に意志が固まった気がするが、まあそれはそれ。

今はどうするか、まずはそれを決めるべきだろう。

サンパーニヤのことを考えなくても料理のことや他の技術、知識出来る事は山ほどある。

といっても今はサンパーニヤでやりたいことばかりだけど、それはそれ。

そんなことを考えているといつの間にか空が白けていたので慌てて家に戻ったのだが。

若干だるい体を引き摺りながらサンパーニヤに着くと、お姉さんとそのご両親が店に居た。

といっても仕事をしている様子は無く、店の中を見回っているようだ。

流石に色々弄りすぎたか？

「あ、おはよう。ソラくん」

「ん、おはよう。お姉さん」

いつも通りのお姉さんの挨拶なんだが、どうも居心地が悪い。
まあ、理由は分かってはいるんだが。

「随分と手が入っているね。道具も丁寧に扱っているみたいだし、
自分の作業しやすいようにな」

「え、ええ。まあ、一応」

これは怒られるフラグなのだろうか。職人が本来持っていたものを理由はあれど、勝手に変えるというのはやはりまずかったんだろ
うし。

「ミランダ。お使い、頼むよ」

「う、うん。行ってきます」

どこか心配そうな表情でお姉さんは一度だけ俺を見ると、外へ出
て行く。

何か面倒なことに既に巻き込まれていたりするのだろうか？

「では、改めて自己紹介をさせてもらおうか。私はジェシイ、この
『魔術工房サンパーニヤ』の工房主をしている」

「私はメレス。ミランダの母親でジェシイの妻よ」

「俺はソラ。『魔術工房サンパーニヤ』の売り子兼魔術職人やつて
ます」

改めて自己紹介をする。ただそれだけなんだが妙に落ち着かない。

さつきとはまた別の居心地の悪さだ。理由は今度は分からないが、と、自己紹介ついでに改めて2人を見て気付いたことがある。

ジェシイさんは中肉中背で特徴もない人、それに対しメレスさんは大柄。

お姉さんは顔などはメレスさん似と言ったところか。

いや、それは良いんだが2人ともウサギの耳などが無い。

何故かとは思うが、それを聞くのは不躰すぎる。気になったが聞けるわけが無い。

「君の話は娘から聞いている。だからこそ、君の腕を見せて欲しい」

良く分からないうちに鍛冶対決？ になってしまった。

時間は今日の夕方まで。材料は工房にあるもの。作るものは魔術品。

効果や作り方は自由、だとのこと。

何故そういったことになったかは不明だが作り終わればきつとわかるだろう。

メレスさんが途中で帰ったことにより若干居心地の悪さは薄れたが、どうもいつも居る工房とは別の場所のような気がして落ち着かないが。

結局出来たのは夕方になってから。

お姉さんは未だに戻ってこないんだが、何処まで何のお使いをしに行ったんだらうか。

それとはかく。ジェシイさんが作ったのは小さなバレッタ。どうやって作ったのかは見ていないが、ハンマーを振るう音は聞こえ

ていたためおそらく鍛造品なんだろう。

これを鍛造で作るのは凄いことだ。むしろ才能の無駄遣いのような気もするけど。

それに対し俺が作ったのは女神の腕輪。前回の戦闘の反省点を活かし、レプリカではなく、ある材料で作れる最大のものを作ることにした。

前回の反省点は、やはり防御力の欠如、特に状態異常に対しての防御策があまりに少なすぎた。

もしあの場に俺やハツフル氏がいなければ、あの魔術師1人に苦戦されていた可能性も少なくない。

あれがもし単なる状態異常付与術者だとしても、サイクリヴォルストのコンビはかなりまずい。

昏睡で行動不可にされたら一方的にやられるのがオチだろう。

どこまで状態異常に対する防御手段があるか分からないが、簡単に突入班がやられたことを考えると用意できるものは用意しておくことに超したことは無い。

女神の腕輪 + 5

女神の祝福を受けた光が形となったもの。身を守る祝言が刻まれている。

DEF + 7 【 + 5 】 LUC + 5 重量3。耐久【 680 / 680 】

スキル 『拳華^{けんか} Lv2』 使用可能。

備考：状態異常軽減付与

正直やりすぎた感は否めない。

拳華は名の通り拳での攻撃を行えるスキルだ。

これは武器が無い状況でもある程度自衛を行える手段として付けてみた。

状態異常軽減も同じくだ。出来れば『状態異常無効』か『状態異常耐性』を付けたかったが無いは仕方ない。

『状態異常耐性』よりさらに下のスキルである軽減だが無いよりはまし。

といっても、呪いや高レベルの状態異常など回避が難しいものに関してはこちらの方が状態異常耐性にくらべ使いやすかったりするので一概には言えない。

ジェシイさんは俺から腕輪を受け取ると、熱心に見ているだけで何も言わない。

俺としては良い出来栄のものだから不安は無い。

ただ、職人としてどういった評価に繋がるか。それについての興味があるだけだ。

「うん。これなら任せられる」

どこか遠くを見るような目で俺の作った腕輪を見、そう呟いた。

少しそれには気になるものの、どうも聞きづらい。

むしろまだ腕が治っても切り替えが出来ているか分からない。

どんな目にあつたのかは詳しくは分からないが、あれほど腕の状況が悪くなっていたんだ。

お姉さんの持つ守護の腕輪に比べ、今回作っていたバレットは随分とつくりが甘い。

腕そのものというよりも、きつと感覚の問題なんだろう。

少し休んで欲しいが、それこそ本人が一番自身の状況は把握しているだろう。

若干重くなりそうな空気に気付いたのか、メレスさんが今日もうあがっていいと言ってくれたので帰ることにした。

それから1週間、ジェシイさんがお姉さんに基礎を教え、俺が色々仕事をしている中で幾つか決まったことがある。

1つが、露店の日以外はサンパーニヤを開くこと。これはジェシイさんが戻ったことにより常連客が店に戻り始めたことが大きい。やはり口コミの効果は大きい。

それに、お姉さんが正式に『魔術工房サンパーニヤ』の工房主、見習いとなったこと。

今までは工房主を名乗ることは名乗っていたがやはり技術的にはまだまだ拙い。

そのため、ジェシイさんが全てを教え込み魔術職人として育成すると息巻いていた。

それと、ポーシヨンのレシピを開示するタイミングが決まった。

これはジェシイさんからの要望でもある。

曰く、技術は独占すべきものとそうでないものがある、だそうだ。俺もそれに関してはある程度は同意のため頷き、サンパーニヤのオープンも含め、タイミングを月が変わったときに決めた。

暫くは露店も並行して行う予定だし、シミュレーションの結果それで問題ないと判断した。

そもそもサンパーニヤをちゃんとオープンさせるならポーシヨンを秘密裏に作るのも難しいだろうし。

そんなわけで、1カ月ほど忙しくなるのを見越して、少なくとも今は魔法学校の受験をしないことに決めた。

母は少し不貞腐れていたが、事情を話し納得してもらった。

トールたちのような友達やサンパーニヤで何人も常連が居ることですしは安心したようだ。

そんなわけで今日も俺はハンマーを打ち、商品を開発する日々。むしろ、暫くはお姉さんを鍛える日々といった方が正しいだろう

か。

あ、お姉さんに関しては隔世遺伝で何代か前にウサギの人が居た
そうだ。

お姉さんと2人きりになったときに聞いてみたらそう教えてくれ
た。

準備することはまだまだ多い。ひとまず、頑張りますか。

第17話 救出大作戦！（後書き）

前話の投稿から時間が開きました。
ひとまずサンパーニヤの騒動に関しては一区切、れたと思いたいで
す。

評価、つつこみ等ありましたらお願いします。

なお、感想に関しては返信できない場合もありますのでよろしくお
願います。

2011/10/27 誤字等の修正を行いました。ほんわか様、
独言様、fog様、蕾姫様、bibliomania様、ありがと
うございます。

第18話。 変わり行く、（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

この話は前回から3ヶ月後の話になりますのでご注意ください。

第18話 変わり行く、

「ソラ、まだ終わらないの？」

「もうすぐ終わるから少し待ってるって。それより、あのお姫さまのほうは良いのかよ？」

「あ、あはは。マイアは大丈夫だよ。今日はファイアが付いてるし」

苦笑いするアンジエをよそに出来上がった商品を並べる。

ようやくこれで目処が付いたところだし、少し休憩に入るか。

「ソラくん、今平気？」

と、それはどうやら許されなかったらしい。俺の後ろにはお姉さんが立っていた。

「ああ。またジェシイさんか？」

「ううん。そうじゃなくって、鍛冶師ギルドの人が来てるから」

「あー、了解。長くなりそうだからどこかで時間潰してくれ、アンジエ」

「いいよ。ボクも配達員の帰りだったんだから。じゃあ、またね」

どこか不機嫌そうなアンジエを見送ると、そのまま鍛冶師ギルドのギルド員と会う。

俺がギルド入りしたのはあの事件が終わってすぐ、今から3ヶ月

も前の話だ。

ベデイのおやつさんとジェシイさんの推薦と実技、その両方で一発合格。

そもそも新型ポーションや各種の商品によってほぼ合格は決まっていたらしいが。

その後色々あったが、今は共同開発している商品を話し合う機会を何度か作っている。

今回は生活に密着した道具作りができるかどうか、がテーマとなっている。

幾つか中小の工房の見習いや弟子たちが自分たちの開発したものを集い合わせ、現状にテコ入れができるかどうか、という正直あまり意味のないものだが、そういったものですら今まで手が出されていないなかつたらしい。

「それで、今回はどのようなものを作られたんですか？」

「まあ、詳しいことはいつものように会議で。次の会議は何時行っんですか？」

アイデアを出すのは俺ばかりではないのに、俺ばかりにこうやって直接ギルドの連中が来るのは辟易するがそれも仕事か。

いや、それをダシに俺の調査を行っていると言った方が正しいか。ハツフル氏にマイアにオウラが俺の方に付いている以上、俺に対し強硬手段を取る訳にも行かず、こうやって度々工房にまで出向いて話を聞くことくらいしかない。

あの我侂姫たちにはここ暫く迷惑をかけられている以上、それくらいの見返りはあつてしかるべきだろう。

適当に世話を交わしつつ時間が過ぎ、ギルドに戻ると言ったギルド員を見送り、作業に戻る。

こっちは今ギルドに対し提出するものとは別。俺が目指す形の1つの具現化、がキーワードだ。

それには何人もの人の手が必要だし、俺個人ではどうしようもないものだ。

だからこそ、俺は『魔術工房サンパーニャ』の魔術職人であり続ける。

ジェシイさんの腕のリハビリも必要だし、俺を目当てに来る客も少なくない。

とはいってもお姉さんはジェシイさんの指導の下、腕を磨いている。

最初の頃に比べだいぶ成長したし、一通りの仕事は1人でできるだろう。

時折失敗したり、どうしたらこうなるのか不思議に思うことはまだあるわけだが。

だが、少なくとも俺のような我流ではなくしっかりとした魔術職人となってくれるだろう。

この3ヶ月で変わったことは多い。

例えば4人組が揃って魔法学校に合格し、通学をしていること。

例えば露店に新型ポーションが売られていること。

例えば酵母パンが出店や食堂で出回っていること。

あるいはモンスターの活動が活発となり、交易ですら制限が出ていること。

あとは、我俣姫その2号、マイアと、腕輪を買っていった我俣姫その1号、オウラが4人組とともに此処に頻繁に寄るようになったことが主か。

「アンジェちゃんに会いに行かなくて良いの？」

「ん？ アンジェはついでに寄っただけだろ？ 帰るって言ったし、仕事の邪魔しても仕方ないよ」

何故かジト目で睨まれる。別に睨まれるような行動はしていないはずなんだが。

まあ、特に用もないだろうし昼にでも寄れば良いか。

「で、お姉さんは進んでる？ 今日渡す予定の分、昨日の時点で全部は終わってなかったと思っただけだ」

「あ……。え、えっとこれからするから平気だよ？」

つまりまだ完成していないらしい。

「俺も手伝うから、終わってないやつどれくらい残ってる？」

ジェシイさんが戻ってきた直後は色々と依頼が舞い込んで忙しい日々だったが、今はその前に比べると若干忙しいか、といった程度。だからこそ何とか2人で回せているといった所だが、お姉さんの処理能力は正直限界に近い。

だからといってジェシイさんに頼るうにも、ジェシイさんの腕はまだ治りきつては居ない。

あの時、ジェシイさんの腕は神経がやられていたらしく、ろくに動かすことは出来なかった。

俺の魔術により動かせるようにはなったものの、それはあくまで動かせると言っただけの話。

それに酷使されたということを知ることが覚えていたらしく、その影響で鍛冶仕事をしようとすると思うように動かないそうだ。

幾つかのポーシオンやそれを染み込ませた包帯など経緯を見なが

ら治療をしている最中だし、出来る限りリラックスしてストレスを解消してもらっている。

俺はそうだったことへの専門性はないが、やらないよりはきつとましだろう。

そういつた意識を操る魔術もないわけだし、地道に行くしかない。

申し訳なさそうに未完成品を差し出してくるお姉さんから商品を受け取ると、細かい調整が必要なもの、まだほとんど出来ていないものを優先して作ることにする。

今現在はただハンマーの音が響くだけの室内だが、此処もこの3ヶ月である程度変化した。

ポーシヨンの製法を広めたおかげで露店を出す頻度も下がり店を開けているのも大きいけど、それ以上に扱う種類が増え、最初は広がった作業場が今では結構手狭になった。

ちなみに、ポーシヨンは何処でも作れるためほとんどはメレスさんに自宅での作成をお願いしている。

元々赤色ポーシヨンを作っていたそうだから作成自体問題なかったし、今のポーシヨンは食事時にも飲まれているそうだから不要なものでもないだろう。店用は日に30本もあれば十分足りるし。

町の露店で出回っているポーシヨンの約8割はそれぞれの露店毎の特色が出たものに変わっている。

最初は利権を独占できなかつた大商人からサンパーニャへの嫌がらせもあったが、マイアがうちに寄るようになってから表立っての嫌がらせはなくなった。

完全に嫌がらせをなくするのは難しいだろう。妬みで足がつかない程度の嫌がらせや、サンパーニャ以外に手を回すことは防ぎようがないわけだし。

まあ、それはともかくだ。

手狭になった仕事場は定期的に片付けはするものの、完成品を置く場所を確保するにも困る。

その分仕事を依頼される量が多いということだが、手に余るほどの量であるなら制限を加えるか日数を少し多めに取るか。

前も思ったことだけれど、そういった計画的な経営をしていかなければいつか破綻しかなない。

ジェイさんもそういった点でお姉さんを教育はしてくれてはいるものの、今まではあまりなかったほかの工房との共同作業も増えたため、それに費やす時間が増えた。

結果、店を閉じて他の工房に行くことや商店や自衛団に出向くことも増えつつある。

そういった意味では、鍛冶師が一番今この町では変わりつつある、というのが正しいか。

商品を作り終え、外に出る。昼休憩を取るためだ。

ここ一月ほどは自分では作らず、ほとんどを外食に頼っている。

理由は、パンを始めとした小麦粉を使った料理が増えてきているから、だ。

パンの種類は当然として、調理法も徐々にではあるが増えている。中華まんやピロシキモドキはもちろん、酵母を使ったレシピが増えている。

というか、ポーションのこともあり今では果物を使ったものがブームとなり、この近隣の村などでは元々の地場産業よりも果物の収穫に力を入れているところも増えているそう。

それはそれで問題なのだが、手間を少しでも省くような道具の開発も進んでおり、もう少しすればある程度は均衡化はなされるだろう。

俺がレシピを伝え試食させてもらっている店も幾つかあるわけだし。

と、適当に食べ物を入れ、アンジェの店に寄る。普段は学校が始まる前に配達に出かけ、そのまま学校へというコースだが今日は休み。おそらく店番でもしているだろう。

「よ。つて、オウラも一緒か」

ドアを開け、入った先には店番をしているアンジェと話していたのか、カウンターの近くに置いてある椅子に座っているオウラが居る。

「ソラがくると聞いた。ワたし、待ってタ」

今は翻訳のスキルを使っておらず、オウラの使う言葉はたどたどしい。

学校での生活以外では翻訳を使わずに生活をしているらしい。その割に1月に一度はサンパーニャに来ては腕輪の耐久度回復をしているから勉強に相当時間を費やしていそうだ。

「で、ソラは1人分しかご飯用意してないの？」

「アンジェは自分で作れよな。いつも俺の飯強奪しやがって。で、オウラ。俺に何か用か？」

オウラは俺たちに正体を明かして以降、敬語を使われるのを極端に嫌がる。

最初の頃は敬語で話すだけで無視をするほどだったから、他に人が居ないときにはタメで話している。

『ゼットア』の王女の割には妙なところで庶民派だし。

それにしてもアンジェは何故いつも俺の食いかげばかりを狙って

強奪する。

手をつけていないものは何となく取り辛い、と言っていたが手をつけたものこそ取り辛いと思うんだが。

「いイ本があれば、教工て欲しい」

「といつても最近あまり本読んでる時間無いぞ？ スコットやソフイアには聞いたのか？」

「4人とモ、本八教科書ばかり。ソラの本、読みタイ」

最近の本よりも、計画書や仕様書など仕事に関わる書類を見ている時間の方が長い。

他国の姫に見せるものでもないし、それなら勤勉家の2人に頼んだ方がいいだろう、と思ったが勉強に追いつくので精一杯なのだろうか？

オウラがこっちに来たときはまだ今の段階まで全体が進捗していないこともあり、ある程度時間も持てた。だからこそ図書館にオウラやアンジェを引っ張ることも出来たし、勉強がてら本を読み漁ることも出来た。アンジェに至っては基礎の勉強すら危つい所だから何度も足を運ぶことになっている。

その名残か、時折こっやって色々なことを頼まれる。

時間があれば俺も付き合っただが、今日もこの後も仕事だ。というわけで昼食を微妙にずれた時間で取っている訳だが。

「おい、お前ら何で俺の手元を見てやがる」

食べ始めると熱心に俺、正確には俺の持っている食べ物に視線を向けてくる2人。

無視をするとおそらくタイミングを見計らって奪われる。だから

とって牽制をしながら食べるのもどうかとも思う。

まあ、オウラが人のものを奪うとも思っていないけど。

「ソラのご飯、いつも美味しそうだな〜って思ったただだよ。ボクもお腹空いてるわけだし」

わけだし、なんて言われても譲るつもりはない。

といっても普段は奪われても、何故かその分他の食べ物で返してくれる以上損はしていないから構わないと言えば構わないんだけど。

「ソラの料理八興味深い。わたシ、美味しいもの、食べたい」

オウラはオウラで王族の割には出店のメニューを好んだり、俺が作るものを好んで食べようとする。

その時はわざわざ翻訳までして丁寧に感想をくれるから助かっている。のだがその場合はやはり強奪することには変わらない。

そのうち王宮に招いて食事を振舞ってくれると言ってはいるがそれは遠慮した。

ただ、こちらにはない食材もあるそうだからそれに関しては機会があれば持ってきて欲しいと言ったが。

「で、それはともかくだ。オウラ、良い本が見つかったら教えるよ。俺はもう戻るな」

「分かった。本、期待シてる」

「えー。もう行くの？ もう少しゆっくりしていったら良いと思うんだけど。お茶も出すよ？」

素直に頷いたオウラに比べ、アンジエは店によるたび俺に長居をさせようとする。

そのたび何かにつけ商品を薦めてくるのだが、何でも仕事熱心なのだろうか。

前にアンジエのおばさんに聞いたときは普段は余りそうだったことはしないらしいんだが。

「まだ仕事が残ってるんだよ。ギルドに提出しなきゃならない品も幾つか溜まってるし、おやっさんの所にも顔出さなきゃならないし。あんま油売ってるわけにもいかないんだよ」

友達と過ごす時間も大切なんだが、今仕事を投げ出すわけにも行かない。

今回の仕事が成功すれば街道の安全も多少は確保される。俺はそれの主要な部分には携わっていないが、それでも大切な仕事であることには変わらない。

「分かってるよ。少し言ってみただけ。ソラ、帰り早くなりそうなら寄ってね?」

少しだけバツの悪そうにアンジエは首を竦めるとそれでも再びの来訪を依頼した。

「ま、早くなりそうだったらな。じゃ、またな」

見送る二人を背に店を後にする。

どうしてか嬉しそうにはにかむアンジエとやれやれ、といった感じで苦笑をしているオウラが印象的だったがあれはどういうことだったんだらうか。

「何か疲れてるみたいだが、平気か？」

「ええ。まあ、問題ないです。それより、どうです？」

「ああ。お前さんの言ったようにだいぶ性能は上がったな。だが、扱いの難易度はそれ以上だ。これを作れるのはこの町でも片手に収まる程度だろう」

おやっさんや他の中小の工房を巻き込んだ企画も打ち出している。

「というか、おやっさんが主体となって都市の防衛機能を高める手段を講じているというのが正しいか。」

「では、維持は原案の通り魔術師を主体に？ 自然の魔力を循環させられるようにするだけでもだいぶ変わるとは思ってますが」

「そつちに関しては今までの実例がないからな。お偉がたもそういつたのには随分と煩く言いやがる」

おやっさんの言うお偉方、つまり貴族や王宮勤めなどで権力を持つ者は魔術師であることが多い。

特に、この国ではそれが顕著だ。だから、国の重要なことに関しては魔術師が優遇されることがほとんどで、魔力を持っていても魔術が使えないひと、魔術に頼らない事項に関しては後回しにされるか蔑ろにされることが多いそうだ。

だが、ほとんどの人は魔術は使えない。正確には数に限りがあり、高価すぎる魔具がほぼ必須のため使えない環境下にあるといえるべきか。

そのため、魔術に頼らない防衛機能の構築を目指し、研究を進め

ている。

現状、対モンスター用の侵入阻害手段は大きく分けて二つ。城壁などの壁と、魔法陣による障壁。

村では城壁などは当然作る費用はないし、魔法陣も場所によっては脆く時折モンスターの侵入を許す場合すらあるらしい。

元々おやつさんはこの『学術都市バーレル』ではなく小さな村の出身で、その頃からごくまれにだが村の近くにまでモンスターがやってきておりるくに村の外に出ることは出来なかつたらしい。

最近では魔王の復活の予兆なのかそれはさらに顕著になっているそうだ。

だが、その一方で魔術師の絶対数は少ない。

そのうち魔術師が常駐している村や町以外はモンスターに怯え暮らさなければならなくなる可能性すらある。

だからこそ、魔術師に依存しない方法での障壁の構成を作るため様々な手段を模索している。

と、魔術ギルドがそれを面白く思わず表立っては居ないが様々な嫌がらせを鍛冶師ギルドに対し行ってきた。

まあ、それを反対するのが魔術ギルドだけ、というのが図式としてあるのがせめてもの幸いか。

それはともかく。原案は今まで通り魔法陣の維持は魔術師が行い、それを増幅させる装置を鍛冶師ギルドで作って設置する。

それで魔術師の対面はある程度保てるし、効率も向上する。

ただ、やはり難点としては魔術師がある期間までにその設置箇所に出向く必要があると言うこと。

そこで次の案が、一定間隔で装置を設置、それに魔力を籠めることにより魔法陣を構築、障壁を展開するというもの。

それには装置自身に自然に在る精霊の力と魔力を利用することで増幅、還元によりある種の半永久機関を作ると言うものだ。

これであれば時々メンテナンスと足りなくなりそうな時に魔力を持った人が補填することが出来、ほぼ魔術師の力を必要としなくなる。

魔力を持っていながら魔術師でない人は潜在的なものも含めると魔術師の少なくとも10倍以上は居るはず。

魔術は特別なものではない。それが、俺が広めようとしているものの一部でもあるわけだし。

「それで、お前さんはどっちが良いと思うんだ？ 少なくとも、お前さんやジェシイなら作れるだろう？」

「俺個人としては、改定案に乗りたいと思ってます。といっても、その場合はサンパーニヤとは関係のないところで動いた方が良いのかもしれないですけどね」

話したら賛同はしてくれるだろうが、俺の隠れ蓑として利用するようで心苦しい。

にしても、おやつさんもジェシイさんの状況は知っているのにそれでも仕事ができると考えているのはどうしてか。

職人同士、何かわかりあうものでもあるのだろうか？

「それはしっかりと話し合いな。こればかりは俺も口は挟めんからな」

笑い飛ばすおやつさんに背を押され、工房を後にする。

おやつさんも色々と調整や試作品の作成で何かと忙しいそうだな。

俺ひとりに構っている時間も無いだろう。

サンパーニヤに戻ると、また仕事の続き。今日作らなければならぬものも幾つかあるし、何より作るたびに新しい発見がある。

その結果、割高だが日常生活に使えるようなものを幾つか生産することが可能となった。

そういったものもある程度作って『魔術工房』自体を一部の愛好目的や狩りや旅以外でも必要とされるものになればいいと考えている。

まあ、こつちに関してはどうとも言えないし、直接どうこうできるものではないんだが。

できることをこつこつと。正直面倒だがそれを怠っては何も出来ないだろう。

あくまで高いのは現状のシェアを奪わないため。

正直、魔術品は発展次第で現行の商品を多く駆逐する可能性すらある。

今は大規模な装置を作っておらず、また仕事や生活の一部を魔術品で補うと言うことが浸透、というよりも考えとして持っていないらしい。

だからこそその開発には慎重にならざるを得ないんだが、調整が難しいところだ。

割高なのはそのためでもある。一度にそれを全て入れ替えてしまうと既存のものの価値が崩壊しかねない。

夕方過ぎには仕事を終え自宅、ではなくお姉さんの家に。

週に1〜2回はジェシイさんの経過確認を含め寄っているし、相談事も少なくない。

ジェシイさん自身週の半分は店に顔を出しお姉さんを指導はしているが、ゆっくりとした場での意見交換も必要といわれ機会を設けている。

「ソラくんはどうしたいのかな。私は君のことを考えると、そろそろ君自身の評価をされる活動をしたほうがいいと思っっているよ」

ジェシイさんに話してみると思いのほかあっけなくそう返された。ついでに今は俺とジェシイさんの2人だけで話している。メレスさんとお姉さんは夕飯の準備中で台所に立っている。

「いいんですか？ それだと暫く町を離れる可能性もありますし、サンパーニヤの仕事より優先しなきゃいけない可能性もあると思うんですが」

「構わないよ。元々あの店は私が1人で回していたんだからね。ミランダも君のおかげで一通りの仕事はできるようになったし、いつその事君の店を持って見たらどうだい？」

「開店資金を集めるのも今は大変ですし、1人でやっていたら無軌道になるのは分かっていますので今は考えてないですよ。それより、そろそろ腕、診ますね」

俺がもし店を構えるとおそらくとんでもないことになるだろう。

今でさえ俺の工房自体人に見せられない様相を呈しているわけだし。この世界にはほとんど医者というものが居ない。魔術やポーシヨンなど、外傷に対して有効なものが多いのがその一因を担っている。内臓系の疾患にも一部効くという話だし、機械化も進んでいない状況ではそれも仕方ないのかもしれない。

だから俺のにわか知識とスキルだけでも簡単な診断程度は行える。といつてもリハビリを中心にゆっくり治して行くしか方法は今のところないんだが。

スキルにより鎮痛剤の調合もできるんだが、それを使うと全身の感覚が酷く鈍る。普通に生活する程度には問題はないんだが、鍛冶をする場合は全身の感覚を使う。中毒性の有無も分からないし、何よりそれを阻害することはできるだけ避けたい。

まあ、経過は順調と言ったところだ。このままであればあと数ヶ

月もすれば復帰も可能だろう。

その分の遅れを取り戻すのは大変かもしれないが、出来ないことではないだろうし。

「随分と良くなっていますね。日常生活はもう支障はないですか？」

「おかげでね。鍛冶はまだ出来そうにないけど、それ以外はもう問題なくこなせる」

最初の約束のおかげか、色々と聞きたいはずなんだろうけれど、ジェシイさんは俺の力に関しては聞こうとしない。

治療に関わらず、普通の鍛冶に関してもそれはほぼ同様なだけれど。いや、俺の鍛冶の技能がある一定以上のレベルにあるという事実がある以上、店の指針と意見交換以外は求めてこないというのが正しいのだろうか。

「では、俺はこれで。もし何かあれば家にまで来てもらえれば助かります」

夕飯を一緒に、と勧められたが何度か呼ばれていることもあり、仕事の話が長引かないのならそれは断るようになっている。

あまり何度もご馳走になるのもどうかと思うし、家族の時間も大切だ。忙しい時は寝るのと着替えるためだけに帰っていたこともあったし。

そんなわけで帰宅し、夕食を摂る。父よりある意味では働き人のような生活をしているが、まあそれももう暫くは我慢か。

「ソラ、明日空いてる？」

「大丈夫。特に仕事もないし。何かあったっけ？」

食事を摂り、レニを寝かしつかせた後、本を読みながら居間で寛いでいると母に話しかけられた。

「買い物に付き合つてよ。明日はトニーがレニのこと見てくれるらしいし、何よりソラと最近ゆっくりする機会なかったから」

「いいけど、父と出かけた方がいいんじゃない？ 2人で出かけることなんて滅多にないだろうし」

この町は娯楽は少ないが、出かけられる場所はそこそこにある。デートスポットのような場所こそないけれど、ゆっくりと過ごすにはちょうど良さそうな場所には事欠かない。

まあ、俺自身デートの経験自体ないからどういった場所が気に入るかなんて分かりようもないんだが。

「トニーとでかける機会はあるから平気。子供が変な気使わないのじゃあ、昼前には出かけるから忘れないでね」

「りょーかい。じゃ、俺少し地下に居るから」

「遅くまで籠もらないように。いいわね？」

呆れたような母の言葉に首肯で返すと地下の俺の工房へと足を運ぶ。

ランプに魔力を流し込み起動させると、薄暗い工房の中が俺の前に映し出される。

といっても俺しか入れないため中が変わっているわけもないが。

この工房にはサンパーニャでは扱えないものを個人的に幾つか作っている。

部屋の灯り用のランプもそうだが、メインは魔具。

俺が作る魔具は全てが最高級品。どれだけ手を抜こうが今のところ属性石、つまり魔術を発動させるコア部分に関しては天然物を除けばスキルに頼るしか方法がないためレベルが低いものは作れない。それに対し武器であろうと防具であろうとアクセサリーであろうと取り付け、加工したものは全てが一級品になる。

今此処にストックしている魔具は全部で10個。各属性に加え、複数の属性を持つものなど、売れば相当な金額になるものがほとんどだと言える。

その過程で少し困ったことも発覚したんだが、まあそれは今は関係がないから置いておこう。

今必要としているのは符。錬金術師が小遣い稼ぎに作るとも、初心者用とも揶揄される魔法の1つ。

まあ、魔術ギルドは詠唱術と魔法陣以外は魔術として認めていないんだが。

といっても、露店時の防犯や精霊を伴わない魔法に関してはこっちの方が即時性や持続性があり便利だ。

種類を決めて持ち歩けば魔術よりも汎用性は高いわけだし。

そんなわけでトラブルに巻き込まれた時のために最近は符を携帯するようになっている。

仕事時に何だかんだで使うこともあり、それ以外でも物によっては使いどころは多い。

多めに持っておく分には問題はないだろう。

少なくなっている分を補充すると、改良中の炉の前に座る。

炉は、最初使ったとき、命の危険を感じた。

上手く排煙が出来ず、部屋の中は煙だらけで温度も上がる一方。

視界は確保できないわ、煙くて碌に息は出来ないわ、熱いわでかなりしんどかった。

そんなわけで途中で魔術を惜しみなく使い、部屋を水浸しにしたのは笑い話にもならない。

そのため、排煙処理と換気、あと炉自体を熱が過剰に出さないように現在調整中だ。

炉自体も全部手作りだし、なくても作れるからこちらはゆっくりでいいだろう。

この工房で作るものはあまり売れるものは多くはないが、いざとなった時のための備蓄庫にもなる予定だしやりすぎない程度に抑えながら作る予定だ。

最後に工房の整理などをし、寝ることにした。明日は余り早くはないとは言え、出かけるわけだしあまり遅くまでおきていても響くものもあるだろう。

いつも通りの時間におき、朝食を摂り、一応身だしなみを整え、出向いたのは商業区の一画。

「それで、今日は何を買いに？ 食料品でも？」

「それもあるんだけど、ついておいで」

母は俺の手を何度か取るが、恥ずかしいのですぐに外す。

25の女性と手を繋ぐこと、というよりも母親と手を繋いで歩くのは流石に恥ずかしい。

もう少し俺が小さければ恥ずかしさを我慢してでもそうした方が自然だったんだろうけれど。

というか、こんな場面を見て揶揄する知り合いが多すぎる。ただ

でさえ俺はそこそこ注目を浴びてるわけだし、これ以上悪目立するのは本意ではない。

こういつたときに限って誰かしらに会うのはいつものことだし。

「……………こんに、ちわ……………」

「ああ。久しぶり、リーゼ」

そう考えていると目の前には俺の従姉弟のリーゼが居る。

相変わらず気配が察知し辛いんだが、特技か何かなんだろうか？

「ええ。こんにちわ、リーゼちゃん。今日はお使いかしら」

こくこくと首を縦に振るリーゼはやはり可愛らしい。どこか小動物を彷彿とさせるものがあるし、守りたくなるような子だ。

「ならおばさんの買い物に付き合ってくれたら嬉しいんだけど、大丈夫？」

少し迷った後小さくリーゼは頷く。

「いいのか？ 昼の買い物とかだったらシエッタさんも困るだろう？ 母の気まぐれは今に始まったことじゃないし、まずいなら断つても良いんだぞ？」

今度はふるふると首を横に振る。今は特に何も持っていない以上、これから買いに行くのかもしれない。

「私たちは買い物してくるから、ソラは食べ物買ってきて。お金はこれ。残ったらお小遣いにして良いから、買い終わったら此処に戻

ってくるのよ」

母は銀貨1枚、俺に渡すとリーゼを抱えるように連れて行った。余りの展開に言葉を失ったが、時折母はああなる。そうなったときは母が満足するまでそれを容認するしかない。まあ、リーゼも悪いことにはならないだろう。

何を買って来いとも、どれだけ買って来いとも言われなかったため、適当に貰った金額いっぱい買い物をすると別れた場所で待つことになった。

そこそこの量の食品を両腕に抱えているためか、じろじろと見られるが顔を隠すように袋を抱えているためばれる事はない、はずだ。そう何度も知り合いに会うこともないだろう。ない、はずだ。

目の前でじろじろと俺を観察しているのも知り合いのはずがない。むしろ、姫がこんな場所で堂々と観察なんて、あるわけないだろう？

「やはりソラか。どうした、このような場所で」

「そっちこそ。またお忍びか？」

この国の姫ことマイア・フィリウス・リグルイはどうやら随分と奔放らしく、度々こうやって用意されている屋敷を抜け出しては町を出歩いている。

といっても近くに護衛は居るし、本人自体そこそこの戦闘技能を持っているため出歩くこと自体暗黙の了解となっているらしいが。

「自分で見聞きしたものでなければそれが正しいかどうかも分からぬ。私は、その義務があるからの」

そうやってそつと笑う仕草は確かに良い所の出、というのが分かる。

「ま、いいんだけどな。けど、あんま周りに心配かけてやるなって。つか、度々俺も巻き込まれてるのをどうにかしたいんだが」

「お主はそういうものさ。まあ、無理や面倒ごとには巻き込んでも戦場には駆り出さんさ」

いや、そこは最低条件だろう。そもそも魔術職人に従軍義務はない。

あるのは狩人や自衛団に所属している人や騎士など。あるいは税金を納められない農民など、だ。

あとは雇われた傭兵や冒険者が有事の際は対応すると言ったところか。

その代わり鍛冶師や商人に対しては有事に際して、優先的納品の義務がある。

そんなわけで魔術職人として鍛冶ギルドに登録している俺は自分から従軍志願でもない限り戦場に駆り出される事はないはずだ。

「で、それはいいとしてだ。どうしたんだよ、こんな所で」

「質問に対し質問で返すのは感心せんな。お主が答えたら答えよう。相変わらずやりづらい姫だ。」

「人を待つてるところだよ。何処にいるか分からないし、此処で待つてるだけ。で、ひ……マイアはどうしたんだ？」

姫と言おうとしたら睨まれたため名前で呼ぶ。

自国の姫、しかも年上に対しタメ口を利くのは中々スリリングだが、オウラに触発されたのかそうしないとずっと不機嫌だ。

マイア曰く、友人に対しそのような立場など不要らしい。

王女を2人も友人に持つなんてあまり好ましくはないんだが。

個人として考えると2人とともに気の良いところはあるので気に入ってはいるが。

「先ほども言ったように、うるついでにだけだ。それで見慣れた背格好があったから近づいてみただけのこと」

見慣れた背格好ってなんだ。このくらいの身長幾らでも居るだろうよ。

「言っておくが、お主の気配は随分と特殊だぞ？ 捉えられるのは一部のものだけだろうがな」

俺の表情でも読み取ったのか、そう付け加えられた。なら最初から気配と言っておけばよかっただろうに。

そついや、ハツフル氏も同じようなことを言っていたな。

「で、これからどうするんだ？ 俺としてはさっさと帰ったほうが良いと先に言っておくが」

「何か不都合でも？ 私は今日は用事もないし、お主に行動を決められる謂れはない。それとも、今日はお主が私を巻き込んでみるか？」

「いや、正しくは俺も巻き込まれる、だよ」

マイアの後ろに居る、妙にテンションの高そうなうちの母に、な。

母に連れてこられたのは予想したとおり、リーゼの家。

マイアは妙に疲れた表情をしているが仕方ないことだろう。

シエッタは困ったように笑うだけでフォローしてくれないし、此処は俺がどうにかするべきか。

ついでに、リーゼは母に連れられながらも買い物は済んでいたらしくシエッタに何か袋を渡していた。

「母、とりあえず俺は彼女と話があるから」

半分死んだような目で俺を睨むマイアを連れて外に出る。

「だから言っただけ。さっさと帰った方が良かった」

「詳しく説明をしなかったソラが悪い。それで、そんな話をするためにわざわざ私を外に連れ出したのか？」

「それもある。けど、正しい理由としては家の周囲に潜んでるやつらを追い払ってくれ。普通の民家に侵入でもされたら持たない」

俺の家ならともかく、この家は普通の住宅だ。マイアの護衛役はマイアが頻繁に抜け出すこともあり相当の錬度を誇っている。

俺にわざと発見させるほどの周到さも兼ね備えている分、性質が悪い。

「そういつわけだ。私は平気だから、突入はするな」

そう宣言し、姫は中へと戻っていく。これで終わったと思ってい

る分甘いと言うか信頼していると言うべきか。

いや、抜け目がない分、何かしら手段を講じているんだろうけれど。俺も警戒だけしておけば良いか。

「で、ソラ。こちらのお嬢さんはどなたなの？」

食事の準備が終わり、食べ始めたところで母が口を開く。

「俺の友人の一人だよ。名前はマイア」

「ええ、ご息子には良くしていただいております。今後はご家族の皆さまともお付き合いいただければ幸いです」

マイアは軽く口元をゆるめ、軽く頭を下げる。どれも、嫌味にならないような程度に、だ。

生まれが良いというのも問題があるだろうな。

事実、母もシエツタもリーゼも驚いているのか固まってるし。

「マイア、いいから早く食べよ。冷めない方がうまいぞ？」

「ソラ、美味しいって言いなさいって何度言ったら分かるの？ 本当に、この子は」

呆れたように母が息を吐くが長年の言葉遣いはそうそう治るものでもない。特に今は下手に普段と違う言葉を使ってマイアの正体をばらすわけにも行かないだろう。

オウラなら気にせず自分から名乗り出そうなものだが。

「姉さん、男の子ならこんな口調なんじゃない？ ソラくんだって

男の子なんだし、少し乱暴な言葉だって使つと思つわ」

「でも、すっかりとした言葉遣いできないといつか苦労するわよ。シエッタだって覚えあるでしょ？」

「残念ながら私はそんなことはなかったわ。姉さんだって知ってるくせに」

女性2人が話し始めると俺やフランクに口を挟める余地はない。リーゼは我関せず、といった感じで黙々と食べているし。

マイアに至っては食べている間はほとんど話さない。当然テーブルマナーも完璧だし。

というわけでリーゼや俺のことを中心とした母とシエッタの話を聞きながら食事を進める。

正直、味なんてほとんど分からないが。母がついつっかり変なことを話すこともあるわけだし、細心の注意を払いながらの食事がうまいわけがない。

「あー、悪かったな。無理やり連れてきて」

「なに、気にするな。ああいった場での食事は中々機会もない。お主の知らない顔も見れたことだし悪いことではない」

食事が終わり、一息つくともマイアを送るため外に出た。

母はまだ何か話したいことがあるのか妙に不満げだったがあまり長居をさせるのも悪い。

可及的速やかに屋敷に戻さなければ問題にもなりかねないし。

「俺の顔見ても楽しいことなんてないだろ。それよか、あれの使い

心地どうだ？」

「ああ。さすが名高い工房の作品だけあって良いぞ。父上の土産に欲しいくらいだ」

国王への土産品には幾らなんでもならないんじゃないだろうか。俺が試供品の名目で何人かに渡している道具がある。試作品というよりもプロモーション活動の一環といった方が正しいのかもしれないが。

そのの1つをマイアは良く使ってくれているらしい。俺の前で使うことがないので頻度や使い心地に関しては聞くしかないんだが。

「まあ、気に入ってくれて何よりだよ。じゃ、俺は此処までな」

学区区の入り口まで着くと、立ち止まり見送ることにする。

王族や上級貴族に関しては学園に通うためだけの屋敷を学区区の中に設けている。

当然一般解放されている区画とは別の場所であり、俺が立ち入ることも出来ない場所に立てられている。だからこそ送っていても此処までだ。姫と一緒にであろうと近くに立ち寄っただけで追い払われかねないし。

「ああ。今日は食事もいただいたし、改めて礼を言っておいて欲しい」

礼は何度も言っていたような気はするが、随分と腰が低いと言うか律儀だと言うか。

悪い印象を与えない以上、問題はないんだろうけれど。

「分かった。ま、今度はもう少しゆっくりと食事をとれる機会でも

作るよ。またな」

「あ、ああ。うん、待ってる」

ほんの少し表情を緩めた姫を見送ると、俺も帰路につく。そういえば、母の買物物はあれで済んだのだろうか？

それから一週間が過ぎ、町に不穏な噂が流れ始めた。

曰く、モンスター達の王となるものが現れた。

曰く、闇を統べるものが暗闇の底から這い出した。

曰く、世界を滅ぼすものが破滅の鐘の音を鳴り響かせた。

つまり、魔王と呼ばれるものが世界に現れた、と。

これはまだ旅人から聞いた話、という噂程度だ。

だが、確実に魔王は誕生したんだろう。愚かな神の暇つぶしのためだけに。

そして、それに対応するようにマイアとオウラがそれぞれ王都に戻ったらしい。

トールから聞いた話では、神から賜った神託により『勇者』を召喚するため、だそうだ。

全く、折角町も活気付き始めたところだと言つのに。精々俺に出来る事を始めるか。

第18話 変わり行く、（後書き）

時間を多少圧縮して話を進めてみました。
次回は勇者の話に、なる予定です。

装備やスキルに関してネタが尽きたんですけどどうしたらいいでしょうか…。アンケートでもとるべきでしょうか？

評価やつっこみ等ありましたらお願いします。

2011/11/13 誤字等訂正いたしました。

bibliomaniac様、kent様、ごるば様、ありがとうございます。
ごめいす。

第19話。勇者召喚！（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

第19話 勇者召喚！

地下にある俺の工房。そこに並ぶ武具の数々は一般の武器屋に劣らず、いやそれ以上のモノが散乱している。

シャレのつもりで作ったネタ装備も幾つかあるが、ほとんどが実戦用の装備。

そういったもののほとんどは今はまだ眠っているだけだが、いつか日の目を見ることもあるかもしれない。

そう考え手入れは定期的に行っているのだが、中には困ったものもある。

代表的なものが呪われた装備、というやつだ。

何故作ってしまったのかは今でも不明だが、そういった気分だったとしか今でも考えられない。

当然そんなものを軽々しく扱うことは出来ない。中には解呪条件があり、それをクリアすれば呪いを無効化される装備もあるため、そつちに関しては時間をかけて解いてはいるんだけど。

人道的に呪いを生み出すというのもどうかとは思うんだが。

「ま、これの出番がなきゃいいんだけど」

手に持った『とつておき』を馴れた手つきでメンテし、元の収納場所に戻す。

にしても、俺も随分と慣れたものだ。『レジェンド』の時はこんなものを扱うことはあってもメンテナンスなんてゲームではスキルでの耐久度を回復させることしかしなかったのに。

魔王の噂が立った後、すぐにそれは意見が対立した。それは神傍者^{かんぼう}、神の傍にいるもの、そして神を崇拜するものたちが王家に預言

されたものがデタラメだと言い出したからだ。

今回、神託を受けたのは神傍者ではなく、各王宮付きの魔術師だったらしい。そのため、自分たちに預けられていない偽りの言葉だと。

ただ、それでも神傍者の中ですら意見が食い違い、内部で対立しているらしい。

実のところ、神傍者の中でも魔術ギルド寄りの人間がいて、神傍ギルドと魔術ギルドの対立というのが正しいらしい。

そんな無意味な対立は他所に、俺はただ備える。先ほどの武器に加え、食料品に水。

後は揃えられる範囲での防災グッズ。それそのものは流石に無かったものの、魔術品と符、魔法陣を組み合わせることにより堅牢な要塞として家をこつそりと改造している。

やりすぎとも思えなくは無いが、久しぶりに念には念を押ししてという俺の方針を蘇らせ出来る事の全てをやりつくす。

これでもし町が襲撃されてもこの家はそれに耐え切れるだろう。何せまともに費用を出し、他に頼めば白銀貨20〜30枚は飛んでいくほどの改造だ。この町では一番安全かもしれない。

原価としては金貨2枚程度だというのだからどれだけ技術料が高いかが窺い知れる。

本来は魔法陣に使う触媒で相当取られるのはここだけの話だけだ。

武具のメンテナンスが終わると部屋に戻り、準備をする。

今日は遅番で良いから、と言われたため午前中を自分の時間にして、昼を摂ってからサンパーニヤに出勤する。

遅番の理由は前日夜遅くまで働いていたからというだけだ。急な依頼で納期に間に合わせるため行った徹夜の作業の埋め合わせ。受

け渡しはジェシイさんに任せているから問題はないだろう。

最近寝る時間が遅かったから少し寝るだけでも何とかなくてきためそこまで負担でもなかったんだが。

とはいえまだ若干眠い。予約分は一通り終わっているし、今日はゆっくり過ごすことにしよう。

まったり、のんびりと留守番のためカウンターの前に座り、ぼんやりとする。

これでせんべいでも食べながらのんびりと渋い緑茶でも啜ればもつとそれらしくなるんだが、そうはいかないだろう。

そもそも米も醤油もお茶の葉もないわけだし、望むこともかなわない。

ただそれらしく作った湯飲みに紅茶を入れる事が精々か。

ふと。何か近づいてくるのが分かる。「気配探知」すら起動していないが、何か「異物」がこの町に入ってきたことが分かる。

特にモンスターなどでもなさそうだし、用があるのならこちらへ出向くだろうから、というか十中八九ここに来るだろうからそれまでは放っておけばいいだろう。

何故かそれが分かったかは分からないが、確証は持っている。

あえて言うのであれば、また面倒なことに巻き込まれそうだと、言うことくらいか。

1時間しても懸念していたその異物が現れなかったため、店じまいの準備を始める。

ジェシイさんは午前中だけで俺と引継ぎをし帰って行ったし、お姉さんは非番。

俺が1人店を開けることも少くないし慣れっこだ。こういったときに限って客も少なかったから今日は早々と締めてしまっって構わ

ないだろう。

「邪魔するぞ」

と、閉店の準備をしようと立ち上がると、我仮姫、マイアが現れた。

タイミングの悪い。

「どうした、こんな時間に。そもそも王宮に帰ってたんじゃないのか？」

「ああ。その件で少しな」

少し目を伏せ、誰かを外から呼び店内に入ってきた。それに続くのは全身をすっぽりと外套に覆われた何か。

身長はマイアよりだいぶ高く、180cmくらいといったところか。

「何だ？ そのいかにも怪しいですよって風貌は」

「ああ。少し訳あり、でな。悪いが翻訳のスキルを持った魔術品を大急ぎで作ってくれないか？」

外套はきよろきよろと珍しいものを見るかのように店内を見回ったり、商品を手を取ったりしている。

「おい、そこらに手つけんな！」

よりもよって魔術品や薬品を置いてる棚に手を出したのでとっさに叫ぶ。

と言っても俺の言っていることが分からないのか、ただ怒鳴られたことだけは理解したようでびくびくとしながら商品を元の場所に戻す。

身長割には小心者か？

「あまり驚かせてやるな。それで、今日中にできるか？」

「自国の姫の頼みとあればな。いいよ、やってやる。ただし特別料金は貰うからな？」

「分かってるさ。私は少し寄る所がある。進めていてくれ。それと、私の大切な客だからあまり無茶はしないでくれよ？」

薄くマイアは笑うと、そのまま店を後にする。大切な客なら1人きりにさせるなよな。

「ま、いいや。ほれ、椅子に座れ」

採寸をするため、メジャーを取り出し向かい合わせにした椅子の片方に座る。

やはり外套はこわこわとした様子でもう片方に座り、じっと下を向いている。

それでも身長の関係で俺を見下ろしたような感じにはなるんだが。

と、そこに写った顔に戸惑う。そいつは、黒髪黒目、そして彫りの浅い顔立ち。

それに、見慣れたようなその顔。まさか、な。

「な、何か？」

不安そうに零れる声は心底頼りない。まるで帰り道を失った子供のようにだ。

「ん？ お前喋れるのか？ なら、何であの姫わざわざ翻訳の魔術品なんて作らせるんだ？」

「お、俺の言ってること分かるんですかっ?!」

男は興奮気味に俺の両肩を掴み、叫び声をあげる。

「うるっせえなっ。あと、肩いてえよ！」

「わ、悪い。ここに来てから誰の言葉も分からなくて。そ、それはともかく！ ここ一体何処なんだ？ 日本語も英語も通じないし、あんたも日本人なのか？」

一瞬、自分の耳がおかしくなったのかと思った。こいつ、何を言っているんだ？

「お前こそ、何言ってるんだ？ 俺が話してるのはセクト共通語…
…いや、ちょっと待て。今、何年だ？」

そいつが教えてくれた年月は俺が、死んだ3年後。目の前のこいつは、確かに今そういった。
つまり、やはりこいつは俺が死んだあの世界から、やってきたと言うことか？

「落ち着いて聞け。まずここは日本じゃないし、ましてや地球ではない。お前は、全く違う世界にやってきたんだよ」

男は呆気に取られたのか、一瞬固まると笑い出す。

「や、それはうまい冗談だな。お嬢ちゃん。ほんとは何かのプロモーションなんだろう？」

急に気を失ったのはまずいけど、それ以外はうまく出来てるよ」

だめだ。こいつ信じようとしねえ。

「よく聞け。その耳かっぽじってよく聞け！ お前がいる今が現実でこれはバーチャルでも何でもないんだよ。外を歩きやモンスターがはびこる、いつ命を落としてもおかしくないそういう世界なんだよ」

「あ、そういうゲームか何かか。となると、君はチュートリアルを担当？ けどさ、言葉が分からないのってシビア過ぎない？ えっと、君から道具を貰えれば言葉が分かるようになったりするのかな」

このゲーム脳がっ！

「ちげえ！ 何ゲームと現実一緒にしてんだよ！ お前はバカなのか、それとも現実諦めてる可哀相な人なのかっ！」

「か、可哀相ってなんだよ！ あれだろ、『レジェンド』とかつてやつみたいなゲームなんだろうっ?!」

「あれと一緒にすんな！ あんな荒廃した世界で生きていけるかっ！」

「つか、何であれを知ってるんだ？ あれをしていたプレイヤーの1人か？」

「荒廃した世界とかつて知らないよ。兄さんがやってただけだし」

不満そうに、頬を軽く撫でながらぼそつと言いつつ放つ。

「まず、知らないだろうから教えてやる。VRを通してのものは医療など一部を除いて、そのほとんどが肉体に傷が残らないようになっている。それで事故や事件も発生したからな。あくまであるのは五感に対しての擬似的な衝撃のみだ。つまり、刺されるような痛みは、VRでは存在しないんだよ」

俺の鞆からナイフを取り出し、男の頬にそれを添える。

「そ、それが新しい技術つてやつなんだろ？」

「痛みを強くしてどうする。もう少し頭使つて物を言え」

ナイフの切っ先を頬にあて、軽く力を入れる。それだけで皮膚の表面に刺さり、一瞬球のようになると頬を血が伝い落ちる。

「けど、ならここは何なんだよ。何で俺がここに居るんだよっ？」

流れた血を拭うこともなく、男は愕然とした様子で呟く。

「それは俺も知りたいさ。まあ、ある程度の予測はつくんだがな」

おそらく、こいつが勇者としてこの世界に召喚されたんだろう。だが、確かに何故とは思う。何でこいつなんだ、と。

「ま、詳しいことは呼んだやつに聞いてくれ。ほれ、血拭え」

呆然とした表情のそれに鞆から手ぬぐいを出し、渡す。

「何で、なんだ。何で、俺が。何で、こんな場所に」

「知るか。ほれ、採寸するから腕出せ」

俯いたままぶつぶつばやくのを無視し、採寸をし、それに合わせ
てデザインを考えていく。

「俺、どおしたらいいんだよ……。なあ、兄さん……」

「それくらいお前で決めろ。いちいち俺に頼るな、バカナギ」

こいつは昔から俺に頼りすぎだ。3年も経ってるなら高2か3つ
て所だろう。

呟くような言葉は、おそらく独り言だったんだろう。だからとい
つて、死んだ人間に頼るな。この愚弟が。

「な、んで？」

「またそれか。お前はいちいち落ち込むたびにそればっかだな。も
う少し語彙を増やせ、渚」

こいつにとっては3年ぶりの、俺にとっては10年ぶりの。共に
無くした筈の、家族の邂逅と言っべきなんだろうか。

俺の弟、向日渚との。

たっぷり10分は止まったままのバカを放ってデザインを決め、

作り始める。

冶金した金属板はまだある。その中から加工しやすいものを適当に選ぶと適当に切り、曲げ、そこそこ丁寧彫金する。

彫金の時点で翻訳のスキルを付与し、完成。男相手だし別料金といっても性能さえあれば問題ないだろう。

「いい加減復帰しろ」

軽く頭を小突くと、それで再起動がかかったのかようやく若干焦点が合わなくなつてやばくなつた目があう。

「な、何でこんなところに兄さんが?! い、いや本当に兄さんなのか?? そもそも兄さん3年前に死んだし、ここまで小さくなつたよな?? に、偽者?? そうだ、偽者に違いないんだろ!!
兄さんの昔の姿で何がしたいんだ、この偽者!!」

「黙れ。いい加減黙らんとお前の痴態を全て公開するぞ、おい」

混乱し始めたバカを本格的に黙らせるため、迫つてくるところを思いつきり左手で打つべしっ!

「おぐうっ!!」

思いつきりレバーに入れたそれはバカ、もとい渚を黙らせるには十分だ。

何か変な音を空気と共に吐き出し、頂垂れるそれをあまり家族だと思いたくないが。

「とりあえず、落ち着け。詳しい説明はそのうちしてやる。もう少しで姫も帰ってくるし今はしてやらん」

「……その無茶苦茶な言いつぷりと不遜な態度は、兄さんっぽいね」
「お前は変わったな。久しぶりに再開した弟にリバーブローをくれてやるなんて思っても無かったぞ」

苦笑する渚に俺も苦笑で返す。

「穹^{ソラ}兄さん、なんだよね」

「ああ。お前のお兄様だよ」

何故か目元を滲ませるバカ弟に傲岸不遜な態度は崩さず接する。
こつやっとおいた方が少しは信憑性も上がるだろう。

「ま、それはともかくだ。これをつけておけ。あと、俺のことを姫をはじめ他諸々に言うな」

「えっ？ 言うなって何を？」

俺から魔術品を受け取りながら、渚は不思議そうに首を傾げる。

「俺がお前の兄であることだよ。簡単に言えば、今の俺はこの世界の住人だからな」

それであるのなら最初から名乗らなきゃ良いだけの話ではあるんだが。

といつても家族に黙っているのは気が引ける。特にこいつはこつちに知り合いすらいない状況だ。

家族として心配するのは当然だろう。だからといって、バラして

色々面倒が生じるのは避けたいと言つものある。

そんなわけで、まあ基本的には黙ってもらつことにしよう。渚も俺の力なんて知るはず無いんだし。

「相変わらず良く分からないこと言つね、兄さんは。分かった、また何か変なことに巻き込まれてるんでしょ」

「俺が何時までも歩く不幸製造機だと思つなよな。ま、とにかく俺のことは話すな」

物凄く不機嫌そうな表情で睨まれる。気持ちは分からなくは無いが、こればかりはどうしようもないだろ。

「兄さんの単独行動とかいつものことだからね」

「お前な。帰り道で1つ道を曲がっただけで数kmワープすることの何処が独断行動なんだよ。ま、それに関しても話してやるから今はその性能試すぞ」

どうやら俺の言語中枢は俺が思っている以上に優秀らしく、この世界の言葉と向こうの世界の言葉程度なら意識せず切り替えが可能らしい。

「俺の言つてることが分かるか？」

こちら、いや正確にはこの国周辺で使われている言語、セクト共通語というもののだが、それで話しかける。

「うん、大丈夫。分かるよ」

渚から聞こえる言葉と口の動きがあっていない。魔術品は成功、
だろう。

耐久度の調査などはしていないが、暫くは持つだろう。むしろし
っかり言葉を学んでしまえば問題ない。

「じゃ、俺は姫が戻ってくるまで寝てる。姫が戻って来るか、誰か
来たら起こせ」

カウンターにまで戻ると、常備しているブランケットを身体に纏
わせ、目を閉じる。

渚が何か言っているが、仕事をしたせいか異常に眠い。軽く眠る
くらいは許されるだろう。

ゆさゆさと肩を揺さぶられ、目を開くと姫の顔があった。

「随分と良い身分だな。客を待たせたまま眠りこけるとは」

「昨日遅くまで仕事してたんだよ。マイアに頼まれてた仕事も済ん
だし、店番も居たから問題ないだよ」

「私の大切な客と言っただろう。その相手に店番をさせてどうする。
まあいい、品自体は相変わらず出来も良いからな。それで、料金の
ことなんだが」

呆れながらも何処かから布袋を取り出すマイアを制する。

「材料費だけまずくれ。後はそっちに支払わせる。材料費は、銀貨
10枚。技術料だの手間賃だのは金貨20枚でいいよ」

さらっとふっかける。渚はまだ貨幣価値もわからないだろうし、姫もそこに明るいとは思えない。

「いや、依頼をしたのは私だ。私が払おう」

「作ったのは俺で、使うのはあっち。あっちも男なら自分で支払いたいだろ、きつと」

軽く渚を挑発し、自分で払いたくなるように仕向けてみる。

「あ、あの。マイア姫、俺自分で払いますよ。その、にい……彼の言ったとおり俺が使うものですから」

無用心な発言を睨みで打ち消す。全く、こいつは無用心すぎる。

「だが、ナギサ。こちらへ呼んだのは私。あなたの保護をするのは私はず。なら、私がお金も出すべきだ。それに、お金なんて持っていないだろう？」

だが、マイアは一步も引かず正論を掲げる。

「そ、それはその通りなんですけど、あ、これ換金出来ないですか？」

渚はごそごそと外套を脱ぐと、腕に嵌めていた時計を見せる。シンプルな白金色のそれは中々凝っていて高校生が持つもの、としてはそれなりに値が張るのだろう。

「何だ、これは。随分小さいが、時計、か？」

こつちの世界では置時計が主体、というかそれか壁時計しかない。しかも一番小さくても俺の半身はあるであろう巨大なもの。

それに比べ高校生が買えるものなんて正直大した金額ではないだろうが機能は充実しているだろう。

「ええ。しかも最新型のデータ送受信型で、え？ 全部アクセス不能？」

どうやらうちの弟は可哀相なほど頭が悪いらしい。別の世界だという俺の忠告はすっかり忘れ、サーバーにアクセス出来ないところたえている。

「なあ、姫。あれ、一体なんだ？」

可哀相なものを見る目で渚を見ると、少しだけマイアは顔を伏せた。

「あ、ああ。いや、時計ではないだろうか」

「そつちじゃなく、あの右往左往してる図体だけでかいあれだよ」

無駄にでかくなりやがって。ま、ああやってすぐ困り果てるのは変わってないようだが。

「ああ。紹介しよう。彼が今回私たちリンジョア王家が召喚した勇者、ナギサだ」

やはり『召喚された勇者』か。全く、面倒なことに巻き込まれやがって、あのバカ。

「あつそ。つーかあつさりとバラして良かったのか？ 外套まで着せてたつてことは秘密にしたかったんじゃないのか？」

「いや、彼の容貌はあまりに目立つ。正式な発表は行うが、見世物ではない。だからだ」

「それにしては『俺の』ところに来たわけは？ いや、そこまで聞くのもおかしいか」

「彼を初めて見た時、お主の顔を思い出したからだよ。それに、雰囲気良く似ている」

「そりゃ、元々血の繋がった家族だったからな。似るのは自然の流れだ。」

「そーかい。おい、こっちのでかいの！ 落ち着いて座ってる！」

今更自覚が出てきたのか、どうしようとするろろする渚に声をかけ、一度作業場へと向かう。

「茶、淹れる。どうせ暫く居るんだろ？」

「ああ。手間をかけさせるが頼む」

軽く手を振り、作業場の片隅にあるかまどに火をいれ、お湯を沸かす。

さて、困ったことになったな。というか、あのロリ神は何をしているんだ？

渚に手を貸す。それは俺の中で規定事項だ。話を聞く限りでは、あいつは本来この世界には無関係のはず。

ただ静かに決意し、それに対し必要なことを頭の中で考える。ただ、じつと。

と、実はただポーっとしながらお茶を淹れると3人分をトレイに載せ、果物と蜂蜜と一緒にカウンターまで運ぶ。

「で、説明は済んだのか？」

「ある程度のことは済んだ。王宮も学校も、こういった話が出る場所は多くない。場所の提供を感謝する」

工房はその性質上、外に音を漏らさない工夫が多く用いられている。

特に、特殊な機材や材料、技術を扱うことのある『魔術工房』では防音のほかにも様々な外部との遮断手段が備わっていることも多い。サンパーニヤも当然そのうちの1つだ。

本来と違う使い方であるものの、密談などをするのにある種では最適なのかもしれない。

この世界には魔術はあっても科学はほとんどと言って良いほどないんだから。

「今日はこれまでにするからゆっくりしていつてくれ」

閉店を示す札を扉に下げるとかまどと炉の火を落とし、散らかっている作業スペースを片付け始める。

「いや、みなもそろそろ心配するだろうから帰る。あまりお主に迷惑をかけるわけにはいかないからな」

そういった意味では既に多大なる迷惑をかけられてはいるんだが。

「で、そっちはどうするんだ？　マイアの屋敷か？」

「ああ。そうする予定だ。明日からにでも学校にも通ってもらおう」

ん？　学校の入学可能年齢って確か15までだったよな。こいつ、17〜8のはずなんだが。

「勇者を鍛える環境を得るため私はナギサを連れてきた。特例を認めさせるのは手間がかかったが」

そうやって不遜に笑うマイア。ああ、こいつ無茶したな。といっても、魔術師にとっても悪い話ではないだろう。

神から賜った勇者が魔術を使って世界を救う。神話好きなこの世界からしてみたら相当な美談だろう。

どうせ、その神自身が魔王を生んだなんて俺以外知る由も無いんだろうし。

「あ、あの。姫、お願いがあるんですが」

「マイアで構わない。それと、その敬語もどうにかならないのか？」

少し気を損ねたような表情をするが、普通の人間は王族にタメ口なんて聞かないだろ。

特にそいつみたいなの見知りをするようなやつだと。

「い、いえ。ええつと、あの。この人の家に泊まりたいんですけど、だめですか？」

こいつはやはり頭が可哀相なんだろうか。一度脳神経外科にでも診て貰った方が良いのか？

いや、そんな物はないか。

「急にどうしたんだ。何か理由でも？」

「いえ、その。姫様と同じところで暮らすっていうのも気後れしてその分、この人なら大丈夫かなって」

理由にならんだろう、それは。

「そういうわけには行かない。ナギサはこの国、いや世界にとっても大切なんだ。それを、言い方は悪いが庶民のところに預けるわけにはいかない」

「ま、そりゃそうだな。けど、こいつも急にお前と同棲するとなったら不安にもなるだろ。お前んとこ、他には使用人しかないんだろ？」

「よ、一日、うちで面倒みる。後は少しずつでも慣れさせて行ってやれ」

怪しまれない程度のフォローとしてはこの程度が限度だ。これでもバレバレだろう。

す、っと目をマイアは細めると温くなくてもいないお茶を一気飲みすると、席を立つ。

「そうだな。ナギサはこっちに来て、ずっと不安そうだった。言葉が通じないと言つこともあっただろうが、随分とお主には気を許しているようだ。世話をかけるが、頼む」

「ああ。ま、気長にやれよ」

少しだけ遠くを見るような視線で俺を見ると、静かにマイアは出て行った。

「何一国の姫に気遣わせてんだよ。お前は」

「や、だってさっ。俺、初めて会う人苦手なの兄さんだって知ってるだろ？」

「少しは落ち着け。あんなこと言われて傷つかないわけないだろ？」

申し訳なさそうに言う渚に軽くデコピンをしてお茶を啜る。

「そう、なんだけど。ごめん、迷惑かな」

「お前が、んなことを気にする必要は無い。飲んだら出るぞ」

ちょうど良い温度のお茶を流し込む。ナギには少し熱いのかもしれないが。

飲み終わるとさっさと店の片づけをし、鍵をかけ家に戻る。

鍵は俺とジェイさんがそれぞれ持っているから返す必要も無い。と、家に着いた時に根本的な問題があることに気付いた。どう、説明すればいいんだ、と。

いや、薄々気付いていて考えはしたがそれでも間に合わずに帰り着いたというのが正しいか。

「ね、ねえ。何かでかい家についたんだけど、ここが兄さんの家？」

「まず兄さんと言つのを止める。今のナリと環境でお前が弟であると公言は出来ん」

落ち込む渚を放って門扉を開く。どれだけ落ち込もうと俺の後をついてくる。そう躡けたからその行動は変わらないだろう。

思ったとおりついてきた渚を連れ、父と母を呼ぶため客間に案内し、待機させることにした。

「で、こつちが俺の父でトニー。そして母のクリス。んで、こつちが……現在進行形で落ち込んでるバカー一匹。別名勇者」

何故か落ち込んでいる弟を無視して形式ばかりの紹介をする。父も母も困惑が顔に張り付いているのが良く分かる。

「ね、ソラ。この人は、ソラの友達かな？」

探り探り、といった母の言葉は不審者を見るソレだ。確かに外套を羽織ったままの巨体は見るものに対し不審といった印象を与えるだろう。

「友達というか、ええと。弟、だな」

「私こんな大きな子産んだ覚えはないよ？ トニー、まさか違つよね？」

父は慌てて首を振る。もっとうまく紹介するべきだったか。

「母が産んだ子は俺とレニだけだろ。父の隠し子とかそついで」

もないよ。

こいつは向日渚。向日穹の『弟』だよ」

それで少しは状況を掴めたのか。両親は複雑そうな表情で渚を見つめる。

「今日一日こいつを預かることになったから。あー………適当に俺が世話してるから、あんま気にしないでくれ」

正直父も母も渚自身も距離を測りかねるだろう。俺からしたら全員家族で、けれど父と母にとっては見ず知らずの他人で、渚としてもそうだろう。

その状況に対し、何かをしてほしいとはさすがに俺も言えない。

「ま、ちょっとこいつに話したいことあるから、夕食食べたら部屋に引っ込んでるよ」

ああ、とかうん。としか返事がない両親をとりあえず一度置いておく。

あまりの展開に追いつけないだろうし。俺自身が少なくとも、そうなのだから。

「改めて、久しぶりだな。渚」

場所を移して俺の部屋。食事は、まるで通夜か葬式のように静まり返っていた。

渚は黙っているし、両親も何かを聞こうとするものの戸惑いを隠しきれず。

レニはその様子を不思議そうにしながらもしっかりと食事を摂っ

ていたのは素晴らしいというべきか。

「うん、久しぶり。それで、色々聞きたいんだけど」

そんな渚の要望に応え、俺のこれまでを話すことにした。

死んだときのことから、現在に至るまでのことを。

といつても、幾つかぼかした部分はあるが。こいつの性格上、世話になる人間に対して嘘を吐くのも難しいだろう。

なら話して良い部分とそうでない部分をこちらで決める。それだけで何かを隠そうとしていることをこいつは気付けるだろうから。

「そんなわけで俺はこの10年を生きてきたというわけだ。変な顔してどうした？」

「ちょっと突拍子もない話だったけど、理解は出来た、かな。でもさ、兄さん。何で俺と兄さんとで進んでる時間が違うのさ」

それは俺も考えていたことだが、結論は出ていない。

想定出来ることや予想出来ることはいくつかあるが、あくまでそれが想像を超えることは今のところない。

「さあな。それよりも、お前は今は自分のことを優先して考える。身の振る舞いなんかも含めて、な」

冷たいようだがそれを決めるのは渚自身だ。俺はアドバイスを求められるなら応えるつもりだが、最後はこいつに決めてもらいたい。俺の希望もあるし、やけにでもなるうものなら殴つても止めるつもりだが。

「う、うん。わかったよ。けど、本当に兄さんなんだ。もう、2度と逢えないと思ってた」

「逢えないのが正しいんだよ。本来なら、俺はただ死ぬだけだった。それが俺の背負わせられた『何か』だったんだ」

にしても、ずいぶんとあっさり俺を認めたものだ。話の途中途中で渚の恥ずかしエピソードを織り込み続けたのが功を奏したのだろうか。

「それでも、俺はうれしいと思うよ」

「あっそ。で、次はお前の番だよ。まず、どうやってこっちに来たんだ？」

まずこれを聞く必要があるだろう。外套を脱いだ姿は単なる私服だったし。

それでも姫が普段着ている服に比べても素材自体いいものなんだが。

「ええつと。小腹がすいたから夜食をとろうと思ってコンビニ寄つてさ。それで色々買い込んで帰ってる最中に目の前が明るくなったと思ったら気を失ってさ。」

そういや、気を失ってる途中に一瞬あったかい何かに包まれた気がしたんだけど、あれなんだったんだろ」

と、外套のどこに隠していたのかコンビニの袋を取り出す。

中から出てきたのはカップめん、駄菓子、ペットボトル飲料、おにぎりなどありふれた、けど懐かしい品物ばかりだ。

「な、なあ。ナギ……?」

「えっ? な、何兄さん。そんなにぎらついた目して」

「言い値で買い取るからこれをくれ!」

袋ごと掻っ攫う。

「え、いや、うん。それくらいならあげるよ。こっちで色々なもの食べたし」

「サンキユ。やっぱお前は出来た弟だ!」

所有権が移ったのを確認するとおにぎりを開封、かぶりつく。

ああ、これだよ、これ! うまさ、というよりもほっと安堵する。懐かしさとか、いろいろなことがこみ上げ何だか全身の力が抜ける。

「ど、どうしたの? 消費期限切れてたりした?」

「いや、平気だよ。うまいなって思ってただけ」

ペットボトルの緑茶を飲み、しみじみと眺める。おっさんくさい気はするが、それはそれ。

本当に米をどうにかしたくなってきた。まあ、そう都合よく行くものでもないんだろうけど。

「じゃ、寢室に案内する。そろそろお前は寝な」

「兄さんに年下扱いされてこんなに違和感覚えるのは初めてだよ…」

…」

ま、現状で俺のほうで年下だし、そう思うのも無理はないだろう。だが、その科白は前々から俺を年上だと思っていなかったと認識して良いんだな？

渚を寝室に送り届けると居間で父が寛いでいるのを発見したため近寄ってみる。

「明日は休み？」

「そろそろ寝るつもりだよ。ソラこそ、明日も仕事だろう？」

「ん。……ナギ連れてきたの、まずかった？」

父は食事中何度か渚を見て微妙な顔をしていた。理由は分からないが、何か不快なことがあったのだろうか。

「そうじゃないけどね。彼、ナギサだったかな。彼は本当にソラの弟なのかい？」

「ああ。話した限りで間違いなく、ね。父は疑ってる？」

「疑っているというよりも、怖いかな。彼が、ソラをどこかに連れて行ってしまいそうで」

「よく分からないけど、まあ大丈夫。俺の帰る家はここなんだし」

妙に不安そうな父の言葉を笑い飛ばす。いろいろと思うことはあれど、俺が生きてるのはこっちなんだし。

「そう、うん。そうだよね」

少しだけ、疲れたような。救われたような顔で父は笑い、席を立つ。

「ソラ、お休み」

「お休み、父」

早めに起き、朝食を作る。朝食作りは久しぶりだが、何となく気が向いたからだ。

「どうしたの、こんなに作って」

「何となくだよ。母、運ぶの手伝って」

呆れている母に手伝ってもらい料理を運ぶ。正直朝から5種類は作りすぎたと反省している。

「あの弟さんのこと？ ソラの弟って何だか凄く違和感あるけど」

「別にナギは関係ないって。あのバカ叩き起こしてくる」

どうせまだ寝ているんだろう。姫は朝早いイメージはあるが、おそらくあいつはまだ爆睡しているだろうし。

「起きろ、ナギ」

ゆさゆさと揺り動かす。でかくそれなりにしっかりとした身体は俺の腕力では動こうとしない。

「あと30分……」

「いいから、起きやがれ。このやろっ」

毛布を顔まで被り、起きようとしないう。

「そろそろ起きないと俺も強硬手段を取るぞ」

折角の朝飯が冷めるのはいただけない。

「あと1時間……」

完全に今起きることを拒絶したバカのため、ベッドに登り、標的目掛けて飛ぶ。

「食らえ、『ムーンサルトニープレス』！」

バク宙をし、両膝を標的の腹部目掛け、落ちる。

「っ！ な、に、す、るんだ……っ！ に、兄さんっ？ 夢、えっ？」

無防備な腹に思いつきり両膝が命中すると声にならない叫びを上げたあと、まだ寝ぼけているのか困惑の表情を浮かべられる。

「とっくと起きろ。もう朝だ」

「あつ?! そ、そうだね。うん、うん」

何度も頷くその姿に首を傾げるが、起きたのなら構わない。いつまでも弟の腹に乗る趣味はないため、さっさと降りて部屋を後にすることにした。

「着替えたら食堂まで来いよ。あと、おはよ。ナギ」

「おはよう、兄さん!」

妙に朝っぱらからテンションが高いやつだな。まあ、特に気にすることでもないか。

「よ。朝からわざわざ悪いな」

「私が自分の意思で来ただけのこと。ナギサは落ち着けたか?」

食堂に戻ると、そこには何故かマイアが居た。というか、渚を迎えに着ただけか。

で、そのついでに朝食を集りに来たわけだな。

「ま、そこそこには。マイアも食べてくんだろ」

「本当は遠慮しておくつもりだったんだが、食べたことのない料理が多い。味見をさせてもらえるとありがたい」

「毒見役はいないぞ?」

「そんなのは分かっているわ」

軽口の応酬をしていると、渚とレニが何故か手を繋いでやってくる。

「なあ、件の勇者くだんどのは少女愛玩趣味なのか？」

そうでなくともレニに手を出したら沈めるが。

「いや、私はまだろくに会話もしていないが。そうなのか、ナギサ」

「何て言いがかりさっ?! ち、違っつて。この子が俺を連れてきてくれただけで、俺はその……」

「こんな時に言い澱むな。レニ、おいで」

渚の手を離し、素直に駆け寄ってくるレニの頭を撫で、椅子に座らせる。

全員が揃ったところで、食事を始めることになった。

「これはどういう食べ物なんだ? 妙に厚いんだがしっかりと中にまで味が染みている」

「それはハンバーグ。作り方は面倒だから省くけど、挽肉を焼き固めたものだよ」

「といっても挽肉を使った料理自体ほとんどないんだが。ミンサーも出回っていないし。」

「なるほど。それにしても、ナギサは抵抗なく食べているがナギサの世界でも良く食べられていたのか？」

「これは、よくにい……に、似たものがあつたからさ。俺の好物ばかりだし」

また不適切な言葉を出そうとする愚弟に睨みを効かせ、さっさと食事を終わらせる。

「俺はサンパーニヤに行ってくる。マイア、何かあつたら来てくれ」

「もう出るのか？ 分かった、後で材料費を持っていく」

それに首肯で応えると、身支度をして家を出ることにした。

「おはよう、お姉さん」

「うん。おはよう、ソラくん。何か良いことでもあつたの？」

「特にはないけど。それより、昨日は」

昨日の売れ行きと予約、それと姫のことなど簡単に業務の引継ぎを行う。

「そっか。何だか大変なことになってるみたいだね」

渚の、というか勇者の話にまでなると、お姉さんが少ししょんぼりとした声で話す。

魔王による被害はうちの常連にも及んでいる。

幸いにも死傷者は今のところ出ていないが、怪我をしたり仕事がつましく行かなかったりとその影響は無視できるものではない。

「そのための仕事も進んでるんだ。出来る事はやってる。後は実を結ぶためにどうするか探ってくしかないよ」

俺たち魔術職人は裏方の仕事だし、直接戦うことは出来ない。

だからこそその戦いに出向く人々に役に立つものを提供する必要があるんだと思っている。

俺が言ったところであまり説得力はないのかもしれないが。

「私はお昼からお父さんと商工会に出てくるから夕方までいないけど、お母さんがお店に来てくれるみたいだから」

「ん、分かった。じゃ、今日も一日頑張りますか」

と、意気込んでみたはいいものの。仕事自体はギルド関連や他の工房との合同事業が入っていないければそこまでイレギュラーなことはない。

昨日は勇者騒動で俺一人少し慌しかったがそれ以外は普段通り。

そんな立て続けに何かが起こるわけでもなく、予約品も滞ることなく作成している。

「いらっしやいませ、ってオウラ様。どうされたんですか？」

お姉さんが客に対応しに向かうと、どうやらオウラが来ているらしい。お姉さんはオウラやマイアが苦手らしく来る度に緊張している。

お姉さん曰く、緊張しない俺の方が変らしいんだが。

「翻訳の腕輪が欲しい。ソラは居ますか」

「はい。えっと、少しお待ちください……」

「聞こえてるよ。にしても、オウラがここで翻訳使ってるなんて珍しいな」

と、作業場から出るとオウラの他に既視感のある光景があった。全身黒いローブに包まれた、何か。一瞬ハツフル氏かとも思ったが、それにしても独特の空気がない。

渚といい、今はそういったものが流行っているのだろうか。

「ソラ、今回は国のものとして来ました。彼女に、翻訳の魔術品を作って欲しいのです」

一個人、俺の友人としてではなくゼットア国第14王女オウラ・シユヌーケルスとしての依頼ということか。
となると、やはりそういうことなんだろうな。

「ああ、承った。じゃ、そっちの人に幾つか聞きたいから翻訳の腕輪を渡してやってくれ」

「あ、私そろそろ出なきゃいけないから、準備する、ね？」

お姉さんはこそこそと作業場に戻り、自分の作業スペースの片づけを始める。

本当に、何でこんなにもオウラのことを苦手なんだろうか。

「ワかった。ことネ、挨拶して」

オウラはことねと呼んだ女性に腕輪を渡すと、さっさと近くにあった椅子に座る。

「ええと。あたしは三田村ことねです。よろしく、小さな鍛冶屋さん」

「ソラだ。よろしく」

やはり黒目、そして染めているのかアッシュブラウンの髪の方は、微笑みながらそう名乗った。

名前で判断するならこのことねも日本人。さて、どうしたものやら。

「ソラ、材料費を持ってきたぞ」

ドアのベルが鳴る音と共に、マイアと渚が現れる。

さて、本当にどうしたものやら。

ことねと魔術品の種類やサイズを決めている間に、空気が死んでいる場所が出来つつあった。

マイアとオウラは国が同盟国ということもあり、仲は悪くない。

だが、今回はどうしてか向き合って座っているが空気が澱みきっている。

最初こそそれなりに話はしていたものの、渚とことねの話になると急に空気が死に始め、間に挟まれるように座っている渚の冷や汗が止まらなくなっている。

ちなみに途中からメレスさんも来たんだが、あまりの空気に買い物に行くといって逃げた。俺も逃げたいので責められはしないが。

「後は実際に作っていただけだな。で、マイア。営業妨害するなら帰ってくれるか？」

「私は別に営業妨害なんてしていないぞ。お主が仕事だからこつやって待つているだけではないか」

「お前らが来る客を追い返してなきやそれも領いてやるよ。オウラ、お前も来る客全てに睨みつけるな」

この姫たちは人が来るたび不機嫌です、という態度を隠さないまま訪れる客を睨む。

これが営業妨害だと言わず何になるというんだ。

「それは、そうだが。……すまない、少し気が立ってしまった」「ごめんなさい」

「ま。いいさ、そういう時もあるだろ。この売り上げの損失は渚につけておくからもう気にするな」

さらつと弟に責任をかぶせ、場を落ち着かせる。

……何故だか渚が騒いでいるが俺は気にしない。そもそもあいつにはまだ貸した金を返してもらっていないし。

何故かことねが俺を訝しがる表情で見つめるが気にしない。

「じゃ、作り始めるが少し時間かかるぞ。オウラ、どうする？」

「ソラ、出来上がるころ、またくる」

「分かった。夕方ごろには出来てるだろうからその時にまた来てくれ」

頷き、オウラはことねを連れて店を後にする。一瞬ことねが俺を見ていたような気がするが、気のせいだろう。

「で、マイア。何か聞きたいことでもあるのか？」

「あるが、今は良い。邪魔もしてしまっただし、今はあの勇者に作るものを優先してやってくれ。」

それと、別件だが。ナギサに何か武器を用意することは出来るか？」

「出来るけど、それは武器屋に行った方がいいんじゃないか？　うちが魔術工房だぞ？」

正直それは建前でしかない。ないんだが、ここでは材料が足りない。

今ある材料はほとんど魔術品用だし、オウラたちに貸与している道具類を作る余剰は今は無い。

「ソラは良い剣を打ったことがあるとリオナに聞いたことがある。あの『工房アンドグラシオン』ですら感銘を受けたという話も聞いているぞ」

そういえばお姉さんの親友ことリオナはマイアのクラスメートだったな。余計なことを。

俺とリオナの関係は徐々によくなっているが、今回のようにお節介でしばしばトラブルも発生している。

『工房アンドグラシオン』はおやっさんが工房主を勤める工房で、

小規模ながらこの町はおろか王都にすら名を馳せる工房らしい。

「大げさだよ。それに渚、お前何か武器を使えるのか？」

少なくとも俺が知る限りではこいつが何か武術をしていたという話は聞いたことがない。

多少身体に筋肉はついているものの、よくてバスケット部くらいだろう。

「武器とかは使えないけど、魔術？　なら使える気が、なんかする」

「うちじゃ魔具のストックはないぞ。そもそも持ち込みすらないわけだし」

俺の秘蔵ストックを放出するわけにもいかない。それが世に出た瞬間、魔術ギルドが俺を拘束にかかるだろう。

「身を守る術は身に着けるべきだ。戦いになったとき、最後に信じられるのは自分の力なのだからな」

「魔具の調達は間に合っているのか？　属性石が手に入れば調整くらいならするぜ？」

「当然だろう？　今各地に調達を行わせている。何か良いものが出れば融通して欲しいが」

「知り合いに当たってはみる。で、渚。お前も使えそうな武器があれば言え」

「あ、うん。そうする」

「にしても、なんだ。随分と気心知れたというか、その。仲が良いな？」

仲が良いと評されるかどうかは分からないが、少し気を緩めすぎたか。

俺も、どうやら渚と会えて嬉しく思っているらしい。

「ま、少しあってな。それよりも、勇者は1人じゃないのか？」

「分からない。今調べている最中だが。そもそも勇者という存在自体、極秘事項に値するからな」

なら、やはり本来俺に話すこと自体だめだったんじゃないだろうか。

「詳しいことは聞くなということか。ま、魔具にしる武器にしる話し合って決めな。俺は何もいえないわけだし」

協力相手を求めてはいるんだろうが、難しいところだ。現状や世界の情勢を考えると『勇者』というものの自体魔王への切り札であると同時に外交の手段ともなりかねないだろう。

そうなる前にせめて渚だけでも元の世界に帰してやりたいんだが。

「そつだな。無理を言うこともあるだろうが、よろしく頼む」

代金だ、と布袋を渡され見送る。

さて、これから忙しくなりそうだな。

だがその前に。布袋に入っている白銀貨10枚を返さないと。

第19話 勇者召喚！（後書き）

前回のあとがきで書いたスキルや武具なのですが、スキルで言えば詠唱、武具で言えばその名称と説明等オリジナルから作らないと色々面倒なものが幾つかあるんですよね。。。特にネタ装備・スキル関連で。

あ、t w i t t e rを始めましたのでそちらに寄せてもらったりするとありがたいです。アドレスは <http://twitter.com/#!saymagicalcem> 更新状況などもそちらに載せられればと思います。

評価、つつこみ等ありましたらよろしく願います。

2011/11/27 誤字等修正いたしました。fog様ご指摘ありがとうございます。

第20話。フォン。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第20話 フォン。

お姉さんが戻ってくるまで店番やらことねの魔術品を作りながら時間を過ごす。

メレスさんが一度戻ってきたが、今度は別件で納品をお願いしたため工房は俺一人。

こついつとき少し寂しいとか実は思ったりもするんだが。

「お前授業中のはずじゃないのか？」

「いや、使いを頼まれてさ」

良いのか悪いのか、大抵忙しくなり始めると誰かが訪れる。せめて暇なときに来てくれれば良いものを、とも思うがそんなのを察知する術もない。

その来訪者にほれ、と包みを渡される。それはずっしりと重く、若干温かい。

「で、中身なんだ？ 嫌な予感しかしないんだが」

「半分は大丈夫なはずだ。半分は……じゃ、俺はもう戻るな」

「待てよ。おいで何かわかった。お前も一緒に犠牲になろうじゃないか、ツール」

逃げようとする来訪者、ツールの首筋をしつかりと捕まえる。

脳が理解するのを阻害しているが、おそらくこれは何かしらの料理だ。

……プラスとマイナスって例えそれが同じだけの力を持っていても時にはマイナスが凌駕するんだろっな。

「いや、俺は戻ってスコットを面倒看なきゃいけないんだよ。俺まで倒れたら誰がスコット見るんだよ」

「俺は仕事だよっ！ しかも俺一人だし、お前はスコットと一緒に倒れてろ！」

おそらく、マイナスの方向に働いているものはソフィアのケツサク、だろっ。傑作ではなく血祭りの決炸だのいうおぞましい物質だ。もちろん劇物指定されている。

そんな物を食う勇氣は俺にはない。たとえ『状態異常無効』があろうとそういったものすら関係なくおぞましいものはあるんだ。

「……それはソラの方だ。俺のも、あるんだ」

重々しい一言だった。死を覚悟した、だが全てを容認した、そんな声だ。

「そこまでなっているなら、あえて俺は決断しよう。……俺は喰わない」

前それで酷い目に遭ったことは忘れてはいない。むしろ喰わなきゃいけない理由はほぼない。

というよりもスコットが倒れた時点で諦めるよ、ソフィア。

「いやいや、俺だって倒れるのは嫌だぞ？ けど、食べないとどうなるかお前も分かるだろ」

「俺は仕事が忙しいって言ってんだろ？ 今日中に仕上げなきゃいけない仕事だつてあるんだ。無理言うな」

何もないのであれば付き合わなくもないかもしれないがどうだろう、いや無理か。

冗談半分で付き合えるレベルでないのは間違いない。

「ソフィアにはそう説明しておく。で、置いては行くぞ。処分はソラに任せた」

疲れたような表情でツールが去っていく。理不尽な、とも思うがこれもある種ではソフィアのため。

ソフィアは味音痴だ。味が分からないわけじゃない。何を食べても美味しく感じる。

それはそれで羨ましい体質なのかもしれないが、作る分には別。味見をしても自分にとっては美味しいのだが、それが周りにとって美味しいのかそうでないのかが分からない。

だからそれを理解するために料理をする。自分の美味しいと思ったものを共感してもらうため。

だから俺たちがそれを食べ、理解する。ああ、これはだめだ、と。

これ以上考えてむやみに心をすり減らすのは得策じゃない。

ただそれを追い払うように仕事に集中する。物体Xは隔離しておいた。あの臭いが近くにあるだけでも気が滅入るからだ。

ことねに渡す分の魔術品は既に出てきている。オウラに渡したものは無骨なものだったがこっちは華奢、というか繊細なデザインに仕上がっている。

デザインを決める最中で長く身に着けるならある程度凝ったものが良いと言っていたため、その上で負担を軽くするような工夫もいくつか取り入れた。

こういつたことを普段からしているから俺の評価というのが良く分からないことになっているのかもしれない。

客足も一端途絶え、ようやく食事にありつけた。昼の時間は過ぎているが客商売である以上致し方ない。

包みに入っていた半分をありがたくいただき、半分を一口含んだだけで後は焼却処分した。

もちろん炉やかまどの火なんて使えない。魔法で灰にした。酷いとは思うが味はもつと酷かった。案外、ソフィアはこういつたものを食べ続けた結果、おかしな舌になったのかもしれない。

だからといってそれを食べるほど俺は優しくはなれない。それはスコットに譲ろう。

メレスさんが戻ってくる前に処分できたのは良いことだろう。これは耐性がない人には危険すぎる。

「ソラくん、ただいま」

「思ったよりも早かったね。お疲れ、お姉さん」

と、何故かメレスさんではなくお姉さんが戻ってきた。

「うん。何だか途中で話が変な方向に行っちゃってね。お父さんがもうここは良いから戻りなさいって言うてくれたから」

「そっか。メレスさん見なかった？ 他の工房に納品する商品あったから届けてもらったんだけどまだ戻ってないんだよな」

「お母さん？ ううん、見てないけど……何時の話？」

お姉さんは不安そうな表情を浮かべ俺に聞いてくる。先に俺が今

居る場所を確認するべきだったな。まだ誘拐されたときのことを忘れられるわけもないのに。

「少し前だよ。もしかしたら話し込んでるのかもしれないし、ちょっと行ってくる。お姉さんは店番お願い」

「う、うん。……ちゃんと帰ってきてね？」

「ああ。そんな顔しなくてもちゃんと戻ってくるよ。じゃ、行つてきます」

本当ならお姉さんと一緒に行くべきなのだろうけれど、店のこともある。

お姉さんのことは気になるが、『気配探索』を起動させると店を後にした。

メレスさんの気配を辿り、着いたのは納品先の工房。
それはいいとして、何故店の片づけを手伝っているんだ？

「メレスさん、どうしたんですか？」

「あ、ソラクくん。ちょうど良いところに来てくれたわ。手伝ってくれるかしら？」

「すみません。状況がうまくつかめないんですが、どういうことでしょうか？」

「他の工房からの納品がちょうど重なったみたいで、片付けないと支障があるみたいなの。」

今日は他の人もいないみたいだから、私が手伝っていたんだけど
少し量が多いのよね」

奥で黙々と工房主が片づけをしているが、他の工房の人間に手伝
わせるなよ。

「エキヤロツトさん、俺も手伝います」

といつても既に手伝ってしまっている。これならさっさと終わら
せた方が建設的だろう。

「す、すまないねえ。後もう少して終わるから、申し訳ないんだけ
ど」

「困ったときはお互い様と言いますから。じゃ、どこをどうしたら
いいですか？」

「そ、そうだね。じゃ、じゃああっちの箱を少しだけ奥にずらして
もらえるかな」

この工房は取り扱う商品が端材が多く箱は多いが一つ一つはそれ
ほど重くない。

とはいえ、その分量を扱うためサンパーニヤより広はずなんだ
が足の踏み場もないほど荷物で溢れている。

それでも最大10人同時で動くこともあるというんだから驚きだ。
そういった面ではサンパーニヤは恵まれているほうなんだろうか？

片付けも最低限が済み、受け渡しが終わるとメレスさんと共に
工房を後にする。

「ごめんなさい。もう少し早く戻るつもりだったんだけど、エキヤロットさんも忙しそうだったから」

「いえ、謝られることはないですよ。ただ、少し遅かったので様子を見に来ただけですから」

帰り道、メレスさんに話を聞きながら歩く。

といっても先ほどのことから特に進展はないんだが。

進展はないが、メレスさんの話は続く。雑談だったり仕事の話だったり家族の話だったり脈絡はないが次々と話が出てきてはかわる。俺はただ聞いて頷くしか出来ないがそれでもメレスさんは満足なのかにこやかに話を続ける。

そういえば俺の母親、この場合は前世でのといえはいいか。もとかく話が、というか話すのが好きな人だったような気がする。

相手が聞いているかどうかよりも自分が話したいことを話し、頷いていれば満足していた人だったから内容自体はあまり覚えていないんだが。

親のことを思い出すのも久しぶりだ。今まではそう意識することもなかったのに。

特にこの数年は顔も声も曖昧で、思い出すのも苦勞する。だから渚のことも最初ははつきりとは分からなかったのか？

少し、寒気がする。

「ソラくん、どうしたの。もう着いたわよ？」

「えっ……？ あ、いえ。少し考え事をしていただけです」

考え込んでいる間にサンパーニヤに戻っていたらしい。

考え込むのはよそう。気になるところではあるが、今は変に焦らないほうが良いだろう。

「もう、お母さん遅いよっ！」

「ごめんなさい。思ったよりも時間がかかったの。ソラくんも、改めてごめんなさいね」

困ったような表情で謝罪するメレスさんと不貞腐ったようなお姉さん。

いや、不貞腐ったというかどこか機嫌が悪そうというか。

「ミランダ、何かあったの？」

「ソラくん、お客さん」

客がいるならせめてもう少し機嫌よくして欲しいと思うが、今それを言うのは危険だろう。客相手でそんなにお姉さんが不機嫌になるというのは引っ掛かるがツールでも来たのだろうか？ 何故か未だにお姉さんはツール相手であれば不機嫌になる。特に何かを買うわけでもないため客とは言い辛いが。けれど、ならなおさら客相手に不機嫌になることはないだろうに。

「了解。……ん？ オウラだけで来たのか？」

「荷物あったから、途中マデ。コトね、フキゲン」

来ている客はオウラ。魔術品を取りに来ると言う約束だったためそれには問題はないんだが、何故お姉さんはあんなに不機嫌なんだ？ それに、ことねも不機嫌というのは一体何があったんだろうか。

「微調整できてないし、一度は来て付け心地試してもらわないといけないんだが。下手なもの渡して信用落とすわけにもいかないし」

サンパーニヤの掲げる理念はいつの間にか『個別対応』が加わっていた。既製品の販売だけではなくセミオーダーから完全オーダーメイドまでこなす独自路線を開拓する魔術工房。今ではそんな扱いがされている。

元々魔術品自体ある程度安価ではあるが、作れる人間が限られている。安価にするため既製品の販売がどうしても主になる。

最初からセミオーダーか既存品の販売であれば構わないんだが、今回はことねに合わせた完全オーダーメイドの一品だ。

そのために最終の調整が欠かせないと説明もしていたんだが。

「また来ル。そう、イツてた」

「いや、それじゃだめだ。そうやって渡して何かトラブルに遭った後じゃ遅いだろ。ことねにそう伝えてくれ。あるいは来なければ俺が出向く」

金銭を貰う以上半端なことは出来ない。必要であれば出向いてその場での調整だって行う。今はもうそんな立場にいるわけなんだし。

「ワかった。伝える。ソラ、コレ。ヤクそくのモノ」

と足元においてあった麻らしきもので作られた布袋を渡された。約束というと、前に言っていた珍しい食品のことか？

「ありがとな。で、これは一体、何……だ？」

袋いっぱい詰められていたのは見覚えのある淡褐色の粒。俺の

記憶が正しければこれに該当するのは一つしかないんだが。

「おコめ、食感あまりヨクない、珍しい」

「いや、精米しない米は糠臭いし口当たりもきついだろ。で、これはどれだけ作られてるんだ？」

問題はそこだ。このままでも栽培は出来るだろうが土壌の改良や水田の開墾、水辺の整理などしなきゃいけないことは山ほどある。精米自体はどうとでもなる。むしろどうとでもする。精米機を作つてやる。それよりも米を安定供給できれば俺の長年の夢がようやくかなう。

米を食べるということはナギに貰ったおにぎりによって完成したが、食べたいものは山ほどある。力を入れる場所が違う気もするが、まあそれはそれだろう。

「量、いっぱい。伝統、イロいろ、場所。料理、少ない」

「それなりに必要な説明に関してはちゃんとしたほうが良いと俺は思うぞ？」

「難しい、ケドベンキョウひつヨウ」

勤勉なのは良いことだ。本当に必要な場面では翻訳の魔術品を使っているそうだから問題は無いと判断したんだろう。

俺も最初はいろいろ試行錯誤しながらオウラと話したため、言葉足らずでも何とか理解が可能になった。

「ま、俺も試してみるよ。けど、ちゃんとことねを連れて来るか俺が行くか決めてくれ。必要だから急がせたんだろ？」

ことねのことより正直米を調理したくて仕方ないがそれはそれ。むしろ料理にかまけて本業をおざなりにするのは問題でしかない。そんなわけで俺としては必要なものに関しては何とんと済ませたい。俺に見えないところで何か相談をしているお姉さんとメレスさんのことも気になるし。

「わかった。ことねを連れてきてみる」

何故か拳を握り意気込むオウラ。そこまですなければことねを連れ出すのは大変なのだろうか？

がんばれ、と言葉を投げかけると勢い良く走っていった。元気なのは良いんだが、あれでも王女だよな？

「で、お姉さんはさっきまで何に不機嫌だったんだよ」

「う、うん。ちょっとね。わ、私予約入ってる分作らなきゃいけないから」

ばつの悪そうな表情をしてお姉さんが作業場から顔を出すとまた引っ込め仕事を始める。

一体何があったというのだろうか。

「ソラくんもそろそろお仕事しないといけないんじゃないかしら？ 私が店番しておくから、ね」

仕事は元々するつもりだったが、苦笑混じりに言うメレスさんに急かされる様に作業場へ促される。

これはお姉さんと話せということだろうか？

しなければいけないさそうなことがあるときに限って仕事が捗る。普段も別に遅延などはしていないけれど。

テスト前の部屋の掃除みたいなものだろうか？ いや、仕事がメインだからこの場合は逆になるのか？

「それで、付け心地は？ 負担がないよう作ってはみたんだが」

「ええ。重くもないし痛くもないわ。それに綺麗だし、気に入ったわ」

そういつてことねはぎこちなく笑う。

「少しそのまま待つていてくれ。オウラが戻ってきていないし、暫く付けてみなきゃ本当に合うかどうか分からないからな」

オウラはさっきことねを連れて来てそのままどこかに行ってしまった。礼儀正しいオウラにしては珍しいことだが、不満げな表情をしているお姉さんと何か関係でもあるんだろうか。

「えっ？ あ、そうね。なら少し店の中を見ても良いかしら」

「ああ。ドアの向こう以外ならな。あつちは作業場だから少し危ない。あと、薬品類にも気をつけてくれ」

それ以外はお姉さんが一人でやっていた頃と違い魔術品が主だ。持ったりするだけで怪我をするようなものは基本的にはない。

渚は迷わず薬品類に近づいたから注意したが、ことねは流石に大丈夫だろう。見ていれば危険も察知は出来るだろうし。

「そう、ありがとう」

そう俺の視線から逃げるようにことねは席を立ち、店内を見回るといふか、ことねは何か妙だ。俺の視線を避けているかと思えばちらちらとこちらを窺う。

今接客スペースに居るのは俺とミレスさんとことねだけ。そのためその視線は露骨過ぎる。本人はあくまで盗み見をしているつもりなんだろうが。

別に俺を監視したところで何かがあるわけでもない。それとなくオウラにでも伝えておけば良いだろうから放置する。

それにしても。ことねは何か武術でもしていたのだろうか？ 背筋はまっすぐだし歩き方も癖がない。隙こそあるが一般人のそれとは少し違うようにも思える。

俺が何かをしていたというわけではなく、元克蘭メンバーの自称『忍者』の立ち振る舞いに似ているだけなんだが。

何故あの克蘭に入ったかすら不明なニンジャマスターはともかくとしても、20そこらの女が出せるものではない独特の空気を持ったそれ。多少警戒すべきなのだろうか？

もしものときがあれば面倒なだけなのでそれはしないことを願うだけだけだ。

勇者の力がどれだけか不明だ。……渚を相手にしてみるか？ あいつ相手だったなら多少無理をしても構わないだろうし。

「鍛冶屋さん、これは一体何？」

ことねが陳列している符を一つ手に取り、そう俺に問いかける。あまり興味があるようには見えないが。

「それは簡易の防御陣を張る符だよ。3回は使えるが、緊急用だな。……使ったら購入したものとみなすからな」

符は詠唱術や魔法陣と違い魔具のような特殊なものを必要とせず、魔力すら必要ない。

その分発動やオンオフの機能すら簡易で条件さえ合えば意思に関係なく発動する。

ことねが発動条件を知っているかどうかは不明だが、先に釘を刺しておくことはすべきだろう。

「そう。これは私にも使えるのかしら？」

「ああ、使えるよ。ただ、それだけでも銀貨2枚。安くはないぞ？」

本来ならもつと安いはずなんだが、これに関しては機能を追加しすぎたため符の中でも高価なものになっている。

他の取り扱っているところで買えば精々銅貨40〜50枚といったところだろう。

ポーションなどの値下げには成功したものの他の商品は若干安いが高いかどちらかの二極化が進みつつある。全てを安くするつもりはないんだが、『魔術工房』の一般化を目指している俺としては気にかかるところではある。

「……オウラ姫におねだりしたら買ってもらえるかしら？ それで鍛冶屋さん、これはもういいの？」

「それだけ動き回れば大丈夫だろ。後はもつと長い時間つけるか激しい運動をするかはここじゃ試せないけど、現状緩くもきつくもなきや大丈夫だよ。もしきついようだったらその時はまた来てくれ」

「ええ。初めて着けるのにまるですつと使ってきたものみたいね」

そういつてことねは笑う。特に不要な余分もなさそうだし壊れるようなことでもない限り暫くは平気だろう。

どの道使っていけばメンテが必要になる可能性が高いんだし。

「それは何より。にしてもオウラのやつどうしたんだ？ やけに戻ってくるのが遅いな」

「そうね。姫が戻ってくるまでどうしようかな」

何故そう楽しそうなんだ。というか順応しすぎている気がするんだが。

不思議なやつだと思う。だからこそ一歩引いて接する必要があるしそつだ。信用は出来ても信頼は出来ないといったところか。

「町をぶらつく、わけにも行かないだろう？ 寮に戻るなら送るぞ」

オウラはマイアと違い学校の寮に住んでいて、ことねとは今一緒の部屋で生活しているそつだ。

といっても他の生徒とは流石に扱いが違つらしいが。それも当然といえは当然か。

寮にはオウラやリオナを訪ねるため何度か出向いたことがある。寮の入り口までは出入りは自由だ。その先は入ったことはないけれど。

「いえ、気持ちだけいただいでおくわ。勝手に戻るわけにも行かないし、姫もきつとすぐ戻ってくるでしょう」

色々と気になるが首を突っ込むと泥沼に陥りそつだ。だからといってここに何時までも置いておくのも問題だろう。

「外ならそれでも構わないんだが。まあ、邪魔だけはしないでくれ」

「可愛い顔して言うことはきついよね、本当に」

うんざりするような表情で俺を見るな。というかほっとけ。

ことねが暇そうに椅子に座っている最中、幸いにも他の客は来なかった。

客が来ないこと自体は決してよくないんだが、相変わらず黒いロブを身に纏ったその姿は怪しいことこの上ない。

オウラに言い含められているのか、何か思うところがあるのか、それともこの状況を楽しんでいるのかは分からないがことねはフードだけ外しぼんやりと店内を眺めている。ロブの下がどういった服装なのかは分からない。安っぽい生地フードが見え隠れしているからパーカーでも着ているのか？

服を調達するにしてももう暫くかかるんだろう。渚もことねも他の人たちに比べ背は大きい。いや、同じくらいの背の人はいるが仮にも勇者に変な格好はさせられないだろう。

「ソラくん。ちょっといいかな？」

「ん。じゃ、奥で？」

半分ほど暇を持って余し欠けているタイミングでお姉さんに呼ばれる。接客スペースではメレスさんが本を読みながらカウンターに座っているし問題はないだろう。

ことねも暇そうにはしているが、俺が構わないといけないほど子供でもないだろうし。

「で、今日はどうしたのさ」

「オウラ様やあの人が悪いってわけじゃないんだけど。あの人を見てると何だかもやもやするんだよ」

お姉さんはやはりどこか不機嫌そうにそういう。ただ、悪くないという言い方自体何かひっかかる。

お姉さん自身に特に変化はないはずなんだが、まるでそうであることが正しいかのようにことねを嫌悪しているように見える。

お姉さんの言うもやもやが一体何かが分からない以上どうとも出来ないんだが、どうするべきか。

単なる個々人の主義主張や生理的な問題でもないだろうし、そうであるようには見えない。

つまり良く分からない状態というべきか。それが酷くなるようであれば理由を探る必要があるそうだ。

「だからといって顔に出して良い理由にはならないよ。工房の職人って言ったって客商売には違いないんだからさ」

おやっさんのようなキャラ付けというとおかしいが、ああいうカテゴリーに収まれるならそれで構わないと思うがそうでない場合は少しは愛想くらい振りまくべきだろう。

「分かっているつもりなんだけどね。でも、あの人少し時間がかかりそうかも」

普段は明るく人によって態度を変えることのないお姉さんのことだ。何か思わぬところであるのかもしれない。

オウラやマイアに関してはあくまで立場による苦手意識だけだろうし。

最初は勇者ということでも常連のことを思い出し気にしていたのかとも思ったが、そもそもことねが勇者だということには伝えていない。渚でも同じようになるのかも知れない。確認したほうが良いのだろうか？

「お姉さんはカリカリしないように気を付ければ良いよ。俺もサポート出来る部分はするからさ。」

俺はそろそろ戻るから。何かあったら呼んで」

「うん。あ、これからお茶淹れるから後で持っていくね」

それに頷くと接客スペースに戻る。と、暇を持て余したのかメレスさんとことねが何やら話をしている。

というか話し合えるのであればさっきの時点でそうして欲しかったんだが。

ちなみに話の内容は俺には過激だったため全てシャットアウトしている。スルースキルは絶賛上昇中だ。……これで入ってきた客が引いて逃げなきゃ良いんだが。

そんなわけで逃避の意味も兼ねて2人とは少し離れた場所で符の作成を行うことにする。

こっちは家で作っているのはまた別のサンパーニヤ用のものがあり、ことねが手にしたものとは別のもっと廉価なものだ。

符の作り方は簡単といえば簡単で、意味の通る言葉を書いた紙を特殊な溶液の中に浸すだけ。

紙に溶液が染み込み、文字に吸収される。それを条件を揃え発動することにより自然の中にある魔力を呼び水として符の力が発動する。少し前までよく行っていた露店用の防犯符もそれを応用したものが使われている。

つまり溶液の用意と文章さえ書ければ誰でも作れるお手軽魔術だ。

それを魔術ギルドが魔術として存在しながら魔術として認めていないことの一端でもあるらしい。

「といつてもいくつか制限があるらしく鍛冶師が作ることはあまりない、そうだ。」

「俺も量を作るわけではないためサンパーニヤにおいてある符はおまけ程度だし、お姉さんやジェイシさんはそもそも符を作れない。そのため必然と優先順位は低くなる。」

「そのためこうやって時間が開いたときちまちまと文字を書き、ある程度まとまったら溶液に浸すようにしている。」

「端からみたら書き取りをしているようにしか見えないのが最大の弱点だというのが問題としてあるんだが。」

「書き取りをしているとまるで児童にでも戻ったみたいだ。年齢的にはそうなんだけれど、渚のこともあり少しクるものがある。」

音を完全にシャットダウンし、黙々と符を作っていると目の前に人の気配を感じ、顔を上げる。

「ん。ようやく戻ってきたか。遅かったな？」

「少し、忙しい。ソラ、これ」

視線の先に居たオウラは少しだけ疲れているらしくいつも以上に言葉すくなく俺に小袋を押し付けてくる。

「分かったから押し付けるな。で、こんなには受け取らないっつもの」

「この姫の金銭感覚はどうなっているんだろうか。前の金貨30枚も多いが今回はもつとだ。」

「ソラ、つド払エ、言ツタ」

「いや、そりゃそうだが。あのな、オウラ。ここは取れる相手から際限なく取るような商売してないんだよ。儲けを出すのは当然だけれどそれを追求することを求めているわけじゃない。そう工房主からも言われてるんでね」

と他国の王族に話してもあまり効果はないんだろうが、それはそれ。

渋るオウラに一度全て返却した上で正規料金＋ を貰って終わらせる。急ぎの仕事だとしてもこれくらいだろう。

「じゃ、また何かあったら来てくれ」

「こトね、早クイク」

オウラは来たときと同様慌しく去っていく。やはり何かあったんだろう。

ことねに関するこの可能性が高いがそれなら何故ここにおいていったんだ？

……いつまでも考えても仕方ない。さっさと割り切るか。

頭を振り、一度思考を切り替える。何で俺が悩む必要があるのだからうか。

今は仕事をするべきだ。余計なことに振り回されてる場合じゃない、はず。

結局集中できないままその日は終わり、次の日を迎えることになった。

で、気付いたことが1つある。『状態異常耐久』をもってしても

風邪を引くことがあるんだということ。

具体的な風邪の症状が現れ始めたのは家に帰り一息ついたとき。ここ暫くそんなものにかかったこともなく、油断していたからだろうか。

母曰く、普段通りだったのに急に倒れたから何が起こったのかと思った。だそうだ。

むしろ俺自身全く前兆すらなかったため少し焦った。というかやばいと思ったときには倒れたんだが。

そんなわけで今日は休み。風邪を移しても悪いし、この状況で鍛冶仕事をさせるわけにはいかないと反対された。

ポーションを飲めば治るとも思って飲んでみたが効果は期待できず。

元々こういつた病気に関してはポーションなどは栄養剤程度にしただけだ。

回復の魔術も使ってみたが効果は出ない。風邪以外の何かかとも思ってステータスを見てみたが特にバッドステータスは風邪以外見当たらない。

というか風邪もバッドステータス扱いならスキルで消えるよと思う。

思考回路が今のところは正常っぽいのがまだ救いといったところか。

いや、意識がはっきりしている分何も出来ないのは暇を持て余すだけだ。

部屋においてある本は全て読んだし、だからといって符を作ったりする気分にもならない。

仕事を休んだからといって家で何かをしようとすること自体間違っているだろうし。

ぼんやりと天井を眺めるのも飽き、外を眺めるのにも飽き、そろそろ脱出の準備でも始めようと考えているとドアのノック音が部屋

に響いた。

「どうぞ、開いてるよ」

がちゃ、と音が鳴り開いたドアの先には何故かマイア。

「倒れたと聞いたが、大丈夫か？」

「ま、この通り。単なる風邪だよ。で、その話誰から聞いた？」

幾らなんでも伝達速度が速すぎないか？ 今はまだ昼前。昨日の夜からと考えても半日程度しか経っていないのに。

「ああ。ナギサの魔術品を依頼しようとサンパーニヤに向かったら教えてもらった。風邪にしては顔色一つ変わっていないが、熱はあるのか？」

さつき部屋においてある姿見を見たときには顔色の変化はなかった。熱はどうだろうか。体温計などあるわけもないし自分の身体をあちこち触ってみても熱があるようにも思えない。

ちなみに、少し前に母がやってきて嬉々として俺の世話をしようとしていたが、妙に怪しげな目をしていたので追い出した。

「熱は、高いな。少し汗も掻いている。拭いたほうが良いぞ」

何故かマイアに額に額をつけられ判断された。こういった場合、額同士ではなく手で額か首筋を触るんじゃないだろうか。

「それは分かったから離れてくれ。移すわけにはいかないだろ」

俺ですらかかった風邪が面倒な病気を引き起こすとも限らないし、
そうでなくともマイアに移すわけにはいかない。

「私なら構わないぞ？」

「俺が構うつての。つーか、学校行けよ」

「今は昼休みを利用して出て来ているだけでそろそろ戻るさ。本当
に、ソラになら移されても構わないんだがね？」

「どこか悪戯っぽい笑顔を浮かべようやくマイアの顔が離れる。と
いうか、自分から外そうとしろよ、俺。」

熱で判断能力の一部が落ちているんだろうか？

決して触れた場所がひんやりしていたからとかいいにお……どう
やら判断が上手く出来ていないようだ。

「冗談言っていないで戻れつての。仕事に関しては俺に任せたいなら
出来る限り早めにする。で、いいんだろ？」

「結構。私は帰るが無理はするなよ」

最後に俺の頬を撫でマイアは退室した。妙に優しいのがやけに気
にかかるが、これは気にするべきなのだろうか？

いや、今は体調を治すことに専念するべきか。

何となく脱走する気もなくなり、部屋においてあるもので暇つぶ
しをしようと物色する。

この部屋は元々あったものから変更はほとんどしておらず、いく
つか物を入れただけ。

暇になった時のために敢えて手付かずのままにしていたからこれ

も良い機会だろう。

といつても汗を掻いて身体を冷やしすぎるのもよくないだろうから、小さなものをいくつかのみだけねど。

そんなわけで用意したのは謎の小箱が3つほど。例の如く鍵がかかっており、その場所は不明だ。

ただ、同じ種類ではあるが一つは細工箱、鍵穴がないものでおそらく弄っていたら開くようなものだろう。

ただ、この手のものは一度間違うと面倒なことになったり、最悪中がだめになってしまうものすらある。持ち主であったオーデ氏の性格を考えるとそれはないと思うけれど。

とまあ、適当に弄る。上にスライドさせたり出っ張りを押し込んだり、逆に引っ張ったり捻ったりと小さな箱とは思えない動きを見せる。そうして出来上がったのが……何故か鍵状の物体だ。

おそらくだが、これは他の小箱を開けるためのからくり錠なのだろう。紛らわしい。

728

酷いオチを見せ付けられそうな気がして鍵を放置して不貞寝する。食欲も余りないし、寝てしまうのが一番だ。その割に暇を持て余して色々と画策していたのは一体なんだったんだろう。

「いい加減寝てくれないとこちらも困るんだけど」

「いきなり現れたな、つーか何で現れた」

目の前に居るのはロリ神様。寝て、ということとはここは夢の中と
いうことだろうか。

それ以前に勝手に人の夢に登場するな。

「そんな硬いこと、というかどうかでも良いことは置いておこう。今

は再開を言ふべきだと思わないかな」

「全く思わないな。で、何であいつがこっちに居るんだ？」

「つれないね、久しぶりだというのに。まあその方が君らしいけどね。さて、では本題だよ。君の言うとおり向日渚ひゅうがと三田村ことねについて当然ながらこちらの世界に来るべきではなかった。一言で言ってしまうえば誘拐だね。こちらの神が行った、ね」

神相手に営利誘拐罪は適応できないだろ。つーか本当に妙なところで俗っぽいな、このロリ神は。

「それで？ あんたは俺に接触してどうしようっていうんだ？」

その返答はない。代わりに分かっているだろうと言わんばかりににやにやと笑うだけ。このやろつ。

「渚は帰れるんだろうな？」

ことねには悪いが優先はあくまで渚。

「今のままでは難しいね。細かいことは省くけど、この召喚は魂と存在を縛るものでその元凶をどうにかしないことには私も干渉できない。

だからキミが眠るまでこうやって会話すら出来なかったわけだし」

苦笑交じりで話すロリ神様に緊張感はない。どうでも良いと思っ
ている訳ではないだろうが、どういっつもりだ？

「それ以前に、渚とことねには話したのか？」

「やろうとはしたんだけどね。召喚の制約によって無理だったんだよね。だからといってこの世界の人間に干渉することは出来ない。だから、魂自体は元々私の世界から発生したキミに話すしか手段がないんだよ」

理屈は分かった。だが、結局何をしに来たんだ。

「2人が帰るための協力。直接表立った行動をする必要はないしそこまで求めない。してくれるのならそれで構わないんだけどね。むしろ積極的に帰る手助けをして欲しいんだけど、どうかな」

「出来る限りはするさ。けど、どうやってことねに説明したのか。むしろそれくらいどうにかしろよ」

渚にも、どうするべきか。ある程度話すことは構わない。だがあいつの性格上それを受け流すことは出来ないだろうし変な方向に暴走する可能性もある。

俺自身や周りの保身も考えるとあまり無茶は出来ないし。随時情報を出しにしていこうということでもいいか。

「そこは、どうにかしてみるよ。だめだったらキミの身体を少々拝借するだけだから」

いや、ちょっと待てそれはおかしい。

「神託という手段が使えればいいんだけど、そっちも向こうに乗っ取られてるからね。身体を拝借するときの行動はちゃんと考えてあるから安心して良いよ」

どうやってもロリ神は引くつもりはないらしい。気持ち、というか立場的なものがあるんだろうがどうも理由を語っていない分何をしたいのかが分からない。

「こつちにもこつちの思惑があるんだよ。それにキミを一枚噛ませたいわけなんだよ。こちらもね」

そうロリ神は薄く笑う。むしろそういつて協力すると思っているんだらうか？

「せざるを得なくなる。とだけ言っておくよ。といっても確定した未来ではないんだけどね」

半分脅しに聞こえるのは気のせいじゃないだろう。だがそれに乗るかどうかはその時次第、といったところか。

何よりも状況がわからなすぎてさっぱりだ。もう少し説明を要求する！

「言えることはただ一つ。私は、いや私たちは現状を好ましく思っていない。それだけだよ」

「それで協力しろというのが乱暴だと言っててるんだよ。……まあいい。他に帰れる手段があれば教えてくれ」

「何かわかったらその時はね。じゃあ、期待しているよ」

その言葉を最後にロリ神の姿が掻き消える。

にしても本当に何をしに現れたんだ？ 今回のことが意図していないこと、ということくらいしか伝わってこなかったんだが。

まあ、それはもう済んだことだ。今後明らかになることもあるだ

ろっし、事態が進行していけば見えてくることもあるだろう。

そうなるよう、ロリ神もこっちの神も仕向けてくるはずだろうし。

それはいいんだが、何で俺の隣に渚が寝てやがるんだ？

第20話。フオン。(後書き)

期間が開きましたが20話です。

そろそろあとがきもネタがないのでこの辺で。

評価、つつこみ等ありましたらよろしくお願いします。

第21話。差異・Aパート。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第21話 差異・Aパート。

何故か俺のベッドに忍び込んでいた渚を蹴飛ばし追い出すと、ベッドの傍に置いてあった時計を手取る。

時刻は日付が変わったばかり。ずっと寝ていたためか身体が少し痛い。体調は随分とましになった。

これなら明日から仕事もこなすことができるだろう。

体調が戻ったのは良いとして、なかつた食欲まで戻るのはどうにかして欲しい。

今の時間であればみんな寝ているだろうし、夕食も残っていないだろう。もし残っていてもかまどに火を入れなければ食べれないものが大半だ。

こういったときにレトルト品やレンジのようなものがあれば便利なんだが開発するにも一苦労だろう。このまま寝てしまうのが一番なんだろうが、折角起きたんだし有意義に時間を使うべきか。

一瞬精米機を作ろうと思ったが作ったが最後朝まで調整と精米を行う自信がある。有意義だがそれはするべきではないだろう。

そうなれば、することは1つ。まだ今の時間なら屋台も出ているだろうから中央広場で買い食いでもするか。

「おい、起きろ。ナギ」

俺のベッドで寝かせるつもりはないが、だからといってこのまま放置しておくわけにも行かない。

「ううん……あと」

「あと5分だかそれに類似するようなことを言った場合、水をぶっ

かけてやる。いいから起きろ」

その言葉が届いたのか、渚はぼんやりと目を開き周りを見渡す。

「あれ？ 何で、俺床で寝てるんだ……？」

「……送ってく、出るぞ」

渚の疑問には答えず、机にかけられていた外套を投げ渡す。

部屋に余裕はあるが、少し聞きたいこともある。外の方が何かと都合も良い。

屋敷の防犯、防諜はしているが、雰囲気の問題だ。

「で、この数日どうだった？」

ランプの薄暗い光と星の淡い光だけを頼りに町を歩きながら渚に問う。

時間もそんなに経っていないわけだしどうも無いとは思うんだが。

「そう、だね。うん。何だか、実感が未だにないけど。何ていうかさ、凄い所だね」

抽象的過ぎて分からないな。何となく意味は伝わってくるが。

「まだ正直、何も分からないんだけどね」

「こっちに来てまだ1週間も経ってないんだろ？ ならそんなもんだろ。つーか、この町に来たってことは学校に行くんだろ？」

ここに来た理由はおそらく1つだけだ。この町の最大の特徴である魔法学校。

それに通うためにわざわざこいつもこねもそれぞれの姫に連れられてきたんだろう。

にしても渚も、あるいはこねもどうやって入学するつもりなんだ？

「うん。何かさ、魔王だっけ？ それを倒すことができるのはこの世界以外の人が使う魔術だけ、らしくてさ。それであと何日か後に学校に入る事になってるんだけど」

「……念のためお前は翻訳の効果外しとけ。今のところ誰もいないが、聞かれるとまずい」

「そんなこともないと思うんだけど、相変わらず変なところで慎重だよな」

渚が魔術品を外すのを確認すると改めて話を進めることにする。

ちなみにこれは装着を外すと強制的に効果はオフになる。魔具や一部の魔術品は持っているだけでも効果を現す。条件の違いだのなんだの微妙な差があるためだ。

「日本語を理解できるのはおそらくお前にこね、それと俺くらいだ。こつちとは発音も大きく違うし文法も違う。暫く気付かれることもないだろうさ」

この世界は魔術があるためか、様々なことが俺がもともと生きていた世界に比べ発達が遅い。

それは文明レベルでもそうだし、技術レベルに至っては言わずもがなだ。

だからか翻訳という一分野に関しては絶望的に相性が悪い。

ここ数百年言葉は大きくは変化していないそうだし、もっと昔の言葉に関しては説明されていない部分が多いそうだ。

それ以前に隣の大陸や島々の言葉を理解し翻訳出来る人間すら稀有らしく、多くが魔術品を用いてそれらに充てているらしい。

本などは辛うじてそれで翻訳し、書き写しているため翻訳版が出るそうだが活版印刷ですらごく一部を除き利用されていないらしい。

そもそも活版印刷自体合理的ではなさそうだし、意味はそこまでのないのかもしれないが。

「でも、そんなに重要な話でもないと思うんだけどなあ。マジユツって特別なものじゃないでしょ」

「お前にどう説明したら分かりやすいかは分からないが、そこそこには貴重な。問題はそっちじゃない。お前が勇者で、魔王を『倒せる可能性』があるっていうところが重要なんだよ」

こいつはVIPだ。重要度で言えばこいつを召喚した姫よりも高い。何せ世界でおそらく2人しかいない勇者だ。

いや、むしろ2人居るということが災いしているような気もするんだが。

「倒せる可能性？」

「ああ。勇者が存在するだけで魔王に対して絶対的優位に立てるならそもそも魔王なんて『必要ない』からな。ゲームだってそうだろう？ 成長なく絶対に勝てるゲームなんて面白みもない」

不確定要素を残さなければそもそも成り立ちはしない。問題は、

それが仮想でも何でもないというのが最大の問題だが。

「面白いかどうかって問題じゃないでしょ？」

いや、それが目的だろう。面白いかどうか、楽しめるかどうか。これは単なる茶番劇の1つなんだろう。これを仕組んだやつにとっては。

「それよりも、魔術は使ってみたのか？」

「いや、魔具が見つからないらしくてまだ。学園で保管しているものに関しては使わせてもらったんだけど、何だか相性が合わないらしいんだ」

属性の話か？ いや、それなら属性というはず。となると、スコットのようになにか特殊なことなんだろうか？

「そうか。……魔具なしに魔術を使うことは出来ないんだよな？」

「え？ うん。触媒なしに魔術なんて使えるわけないでしょ？ 何言ってるのさ」

お前こそ何を言っている。というか、こいつは何処まで魔術に関して理解しているんだ？

「俺も良く分からないんだけど、どうやってたら魔術が使えるか分かるんだ。知らないはずなのによく知ってる。何でかは分からないけど」

俺の表情でも読み取ったのか。少し思案する表情を作り、渚が言

葉を続ける。

「腕、いや手の先にさ。今までなかった何かが出来たみたいにそれを読み取る何かが出来て、それが勝手に教えてくれるんだ。それは俺の器官じゃないけど、まるで俺の一部みたいで。」

少し気味が悪いけど、決して俺に害があるものじゃないっていうのだけは分かるんだ」

中二病がぶり返してもしたのか？　だがそうでもなさそうだと感じる。

むしろ支離滅裂な説明を読み解くのは非常に困難だが、魔術を使えるかもしれない、という渚の自己申告はおそらくそれから出来ているんだろう。」

「使える属性は分かるのか？　使ってみた魔具の属性も」

「属性は、光と風。どっちも何個か使ってみただけど、だめだった」

風、風ねえ。

「今何処にあるかはわからんが、【風の守護】を探してみる」

俺の作った魔具の1つで、唯一流したもの。既にそれなりの時間も経過しているし売れている可能性は高いが、他のものと違い上級の属性石をはめ込んだものだ。

魔法学校にどれだけのものが貯蔵されているかは分からないが、生徒に貸与できるような汎用的なものに上級のものはないだろうし、持っただけでも貴族や王族やらで他人に貸したりはしないだろう。

この世界のスキルでそこまで正確に見抜けるかどうかは不明だが、ある程度のレアリティを見抜く手段はあるらしい。

いつその事、この世界の魔術を学んでみるかとも思うが、恐らく齟齬が生じ正確な情報は掴めないだろう。

俺が自分の能力を白状してしまえば話は変わるんだろうが、それは避けたい。

その点で言えばこの世界のルールはわかっても、常識はまだ分からないであろう渚に協力させたほうが良いだろう。

何よりも、例えや比較がしやすいだろうし。

「【風の守護】？ それは魔具なの？」

「ああ。数ヶ月前にこの町の魔術ギルドに持ち込んだ魔具だ。あれならいけるかもしれん」

渚は事情がつかめず首をかしげているが詳しく説明するつもりはない。

王家とそれぞれのギルドが何処まで関係性があるのかは分からないが、詳しいことを調べられると少し面倒なことに発展しかねない。そう考えるとやはり適度にヒントだけ与えつつ委細はぼかしたほうが良いだろう。

「わかった。姫様に聞いてみる」

「ああ、そうしろ。で、そろそろ中央通りだし、魔術品を使って良いぞ。俺は腹ごしらえをするつもりだ、お前もどうだ？」

まだぎりぎり屋台もやっているだろう。この時間では怪しまれかねないが知ってる人の店がやっていれば何か食べさせてもらえるだろう。

この数ヶ月で俺もそれなりに顔も知られていると思う。

「あ、うん。じゃあ少しだけ」

そう渚が頷くのを確認すると、中央通りに向かって足を進めることにした。

「この時間だとあまり人もいないですね」

歩いてまもなく、目的の場所に着くと顔見知りの人がやっている店を見つけ、そこに腰を落ち着けた。

「この辺もそろそろ閉める頃だからな。材料も残りが少ないから出来るものは少ないが、いいいな？」

猫の獣人らしい店主はそういうと勝手に調理を始める。

昼も時たま良いものが入れば露店を出し振舞っているが、その時もやたらと自由に料理をする。

まあ格安で美味しいものを提供するためそれでも問題はないんだが。量だけは何故かいつもちょうど良い量を出してくれるし。

「今まだ日が変わる前なのに、早いんだね」

「夜は寝るもんだろ？」

連れ出した俺が言うのもなんだが、店主の目もある。あまり迂闊なことはいえない。

というか、よくよく考えてみれば何故こいつに警備がついていないんだ？

俺の使う『気配探知』は、結界によって遮られていなければほとんど見通すことができる。

それで周囲を視ているがそれらしき対象はない。

姫は護衛を良く撒くが、それでも何人かは遠巻きについている。

だがこいつにそれはないとすると、護衛をつける必要がないと考
えられているのか？

いつの間にか目の前に運ばれていた料理と店主を不思議そうに眺
めている渚を覗き見るが何かに警戒しているような素振りは見えな
い。

気は進まないが、少し調べて見る必要がありそうだ。

「そ、そうだけども。……いただきます」

食事を済ませ、店を後にしたのはそれから小一時間ほど経った後。
やはり暗い道を心もとない灯りだけを頼りに学区を歩く。

流石にあるのが学園関連の施設と一部の貴族の豪邸のみで出歩く
人は居ない。

こちらを警戒するような視線をいくつか感じるが無視だ。察して
いるということ気付いた方が面倒なことになるだけだろうし。

「本当にお金払わなくて平気だったの？」

「だから俺の奢りだって言ってるんだろ？ お前は良いから自分の魔
術品だの装備だのの心配しろって」

そんなことに気付きもせず渚はさっきの食事代が俺持ちだったこ
とばかり気にしている。

早くて安くて美味い。そんな店だったから料金自体大したことな
いし、最近は懐の余裕もある。

サンパーニャでの俺が作った売り上げが既に前年の3倍以上ある
から、らしい。

販売した魔術品やギルドに登録した技術等が思ったよりも好評で一番の稼ぎ頭になっている。

まあ、その分ジェシィさんやお姉さんの生活も潤っているから問題ないんだが。

「それはそうなんだけどさ。でもそれとはまた別の話っていうか」

「なら先に俺が貸した3万返せつての。勿論日本円でな」

「ごめん、それは手持ちないよ」

肩を落とす渚を引き連れていくわけにも行かない。

姫も迎えに来たようだから立ち止まり、渚を押し出す。

「俺はこっから先に行っても良い顔はされなからな。早く寝ろよ？」

「う、うん。また、店の方に行くから」

屋敷に近づいた時点で渚の表情が硬くなっている。戻りたくない理由でもあるのか？ いや、そもそもマイアが渚1人置いていくのがまず不自然だが、深くは考えないようにしよう。

相談されれば応じはするが、自分から突っ込むのはまだ先でも構わないだろう。

人は暗闇を恐れる。それが世界の死と捉え、自己の死に繋げるためだという。

夜眠るのは自己を死に近づけ、死そのものにならないよう回避するためだと聞いたことがある。

まあ、どこその民俗学に近くこの世界に当てはまるものではないのかもしれないが。

そしてもう一つ。夜は闇であり、魔であり、モンスターの支配する時間なのだとされている。

それはこの世界の常識、だ。濃い闇が魔物を活性化させ人を襲う。「百鬼夜行」のように夜は妖怪が出るみたいな言葉もあるように、その感覚も案外変わらないのかもしれないが。

そんなわけで、こんな時間に人と出くわすこともほとんどない。ほとんどないんだが、全くではないため遭遇もするし、あまりにそれな格好であれば思い違うこともあるわけだ。

「やあ、いい夜だねえ」

「何処に同意すればいいかは分かりませんが、どうも」

真っ黒な外套を身に纏った人間が居れば、知り合いだとしても警戒するのはやむをえないだろう？

「そうだね、君にとってはあまりそうではないかもしれない。私も昔はそうだったからね。けれど、いずれ君にも良さが分かるかもしれない」

不躰な態度だとは思ったが、ハッフル氏は気分を害した様子もなくどこか穏やかな雰囲気を纏い俺との会話を続ける。

陶醉しているようにも思えるし、何かを純粹に楽しんでいるようにも思える。

あくまで見た目からは窺い知れないためその雰囲気を讀むしかないというのがハッフル氏との付き合い方だとスコットが言っていた。

「それで君はどうしたのかな。こんな時間に。子供はもう寝る時間

だよ？」

「知り合いを送って行っただけですよ。最近この町にやってきて町の構造に慣れていないそうなので。」

あなたこそ、こんなところでどうしたんです？」

ハツフル氏が住むのは当然高級住宅区の一部。住宅区と学区を分断するように走るこの通りはハツフル氏の住居からは随分とはなれている。

「良い夜だったから散策していたら君の匂いに惹かれたみたいだね。この前より濃厚になっているけど、何かあったのかな？」

そんなことを言われてもその匂い自体が何がわからないからどうとも言えない。

そもそも濃厚といわれても魔力が変動するようなことは最近はないが、そう膨大に変化したようには思えない。

となると別の要因だと思うが、渚……だろうか？

「特に心当たりはないですよ。それよりも、戻るのなら送りますよ？」

「送るは私の役目だと思うねえ。君はこの町でも今となっては有名な鍛冶師の1人。誘拐でもされたら大変だ」

そう言って笑うハツフル氏に微妙に違和感を覚える。何故だ？ いや、誘拐という言葉に引っ掛かっているのか。

「俺は単独であればそう厄介なことにはならないかと思えますので。それとも、何か心当たりでも？」

「うづん。『何も無いよ』」

ぞくり、と寒気を感じる。勿論原因は目の前のハツフル氏、だろ
う。

殺気とは違う、それでも俺を萎縮させられるような何か。

「そう、ですか。では、あまり遅くならないよう気をつけてくださ
い」

ハツフル氏の返事を待たずに歩き始める。このまま此処に留まっ
ておくのは危険だ。

俺を無意識に本気の警戒、いや迎撃態勢に移させるような、今の
あの人の傍に居るのは。

第21話。差異 - Aパート。(後書き)

Bパートに続きます。

第21話。差異・Bパート。(前書き)

読んでいただきありがとうございます。

第21話 差異・Bパート。

家に帰り、寝付けたのはそれから2時間ほどあと。

結局3時間しか寝れなくて微妙に体に疲れが残ったため寝なかつた方がましかもしれないレベルだが、体調はほぼ完治した。

母には心配されたが今日は他の工房に出向く用もある。他に迷惑をかけるわけにも行かないし、と説明した上で出てきたわけなんだが。

「ソラくん、大丈夫なの？ 辛かったら今日早めにあがって良いんだよ？」

やけにお姉さんに心配され、事あるたびに同じことを言われている。

心配されているのはありがたいんだが、流石に何度も同じように言われると少しげんなりとしなくもない。

善意からくるものであると分かっているからこそ尚更なんだが、少し放っておいて欲しいと思うのは俺が弱っている証拠なんだろうか？

「そろそろ出るから、店番お願い」

「う、うん。本当にお父さんが代わりに行っても良いんだよ？ ソラくんがいなきゃいけないわけじゃないでしょ」

「細かいところの詰め合わせは俺がやったほうが良いよ。残りのポーションも貰ったし、問題ないって」

特製ポーション（虹）が詰まったポーション瓶を軽く振る。これまでサンパーニヤで作ったポーションの中でも最大級の回復量を誇るそれは俺以外まともに飲むことも出来ないだろう。

HPの回復量が1000。これは一般的な重戦士2〜3人分に相当する回復量というのが今のところの見立てだ。

現状露店売りで出ているのは赤色、黄色、黄緑、白の4色にいくつかの露店が独自に配合したポーション。これに関しては色々問題もあったんだがいつか触れるときがあるのかもしれない。

それはともかく。

キヤップを外し一気に飲み干すと準備をする。魔術品を含め現状の予約分はまず作り終えた。

後はセミ・完全オーダーのものに最終調整を加えるだけの状態にしている。

もう少しバリエーションを増やしても良いかとは思いますが今はまだお姉さんやジェシイさんの判断に任せている。俺はあくまで雇われだし現状の運営に問題があるとは思っていない。段階的に増やしていけば良いだろう。

「それでは安定供給の事ですが、現状ヴェイロードの森にモンスターが巣を作ったと報告が上がっており

狩人ギルド及び冒険者ギルドに討伐依頼がかかっていますが、材料の確保が難しくなっています」

「情けねえな。おい、ゴグ。お前んとこの武器でどうにかならんのか？」

「いえ。私どもの所でも材料が一定以上来ていないのでこればかりはどうにも……」

「それをどうにかするのが俺たちの仕事だろうに。ソラ、お前さんならどうだ？」

「材料に多少の余剰はありますが、サンパーニャでは武器は扱ってないですよ？」

今日の議題は王都までの街道整備の話だったはずだが鍛冶師ギルドからの最後の材料の供給で話が止まった。

材料がなければ整備が進められない。けれどその材料を集める最も効率の良い森にはモンスターのみ。

今回集まったのはベディのおやつさんに武器鍛冶師のゴグ、それに俺を始めとした若手鍛冶師が何人か。

おやつさんの所も武器を扱うが、どちらかといえば魔術品が主だ。そもそも、俺のようなスキルを付与した実用に耐えられるだけの武器を鍛^うてる職人は多くない。

現状、武器は潤沢ではなく粗悪なものや弓矢のような補充が利きやすく交換が現時点ではまだ可能なものがほとんどだ。

うちは常連筋から直接仕入れていたりするからまだ材料に余剰はあるが武器を作るとするとまた別だ。

金属部分が他に比べて減らせる槍や斧の類でもアクセサリに比べ多くの材料を使うし、手間もかかる。

何より俺が作るとそれだけで他と区別をするために値段を上げざるを得ない。

一度他の工房に値段をある程度合わせようと提案したら営業妨害だと怒られた。

俺がまだ保有しているファルシオン以外に2本剣を打ってそれぞれ別の常連の剣士に使って貰っているが、どうやら噂になり所謂プレミア品になっているそうだ。

その次の日に様々な職業の人間が押し寄せたので、特別なことが

ない限り打たないことに決めた。
そんな背景もあり安請負は出来ない。

「なら、いつその事俺たちでモンスターの巣を潰すか？」

くく、とおやつさんが笑う。いや、それは難しいだろう。

規模も分らないし、何よりもハンマーを振るう力はあってもモンスターを倒すための様々なものが足りないだろう。

おやつさんと俺は可能だとしても、その発言だけで顔を青くしている若手連中は特に、だ。

「それは私たちに任せてもらおうか」

音を立ててドアが開くと共にそう宣言する声。

聞き覚えのある声だし、誰かは分かったが何故此処に居る？

「おいおい。どこの嬢ちゃんかは知らんが、勝手に入ってこられちゃたまらんぞ」

「それは失礼したな。だが、私としても看過出来る問題ではない。ここは騙されたと思って任せてもらえないか？」

その不遜な態度におやつさんも少し困惑しているようだ。まあ、おやつさんを知らなくても中々そういうった態度は取れないだろうが、というか、マイアは町民には知られていないのか？

「マイア。自分の立場も説明せず言っただって説得力がないだろ。つか、実際に動くのは渚だろ？ どうせ」

「むっ。確かにそうだが、ナギサー1人だけで行かせるわけではない。

それに、あやつにも少しは経験を積んで貰わなければならない」

だがそれでも言おうとしないのは言うつ必要を感じないのか、あるいは言わないつもりなのか。

俺に目配せをするところを考えると恐らく後者なんだろうが。

「ソラ、この嬢ちゃんはお前さんの知り合いか？ 悪いが、一度引き取ってもらえんか？ ここは子供の遊び場じゃない」

「それも承知している。私は国のために必要なことだと思っている。いや、大きくみるとこの世界のためでもある。武具の類であれば集めるのも難しくない。なら有志を集め、私が主体で動いた方がいいのではないか？」

俺の提案を無視したままマイアは話を進める。さて、どういっつもりなんだ？

「嬢ちゃんがどこの貴族の令嬢かは知らんが、この町にはこの町のやり方ってモンがあるんだ。あまりそれを無視するような事をされても困る」

「この町のやり方よりも優先しなければならないこともある。ここは私に任せて欲しい」

「随分なことを言うな。そんなに言うのならよっぽどのものがあるんだろうな？」

おやつさんの目が鋭くマイアを突き刺すように睨む。マイアはマイアでそういったものに慣れていいのか涼しい表情のまま受け流している。

「……そういう態度なら俺は協力しないからな？」

「それは困る。ナギサはお主を随分とあてにしているようだ。私個人としてもお主の腕を評価している」

「なら少しは歩み寄ってくれ、頼むから。えっと、俺は少し話があるので外しますね」

おやつさん以外は呆気に取られ反応していないし、おやつさんも不機嫌そうにはなを鳴らすだけだ。

とりあえずマイアを部屋の外に出す。

何で居るのかもそうだが、何を焦っているんだ。この姫君は。

「で？ 何でわざわざケンカ売りに来たんだ？」

「ケンカなどすると思うか？ ナギサの経験を積むには良い機会だと思っただけのこと。情報は私のほうにも入っているし、十分な対応策もある。それなら悪戯に被害を出す必要もないだろう」

「そこに関しては同意するけど、対応が杜撰過ぎだろうに。あれだとおやつさんじゃなくても不満しか覚えないと思うぞ？」

「あの方は恐らく情報の詳細を掴んでいないだろう。もし掴んでいてああまで言うのなら、なおさら私は早急に対応してモンスターの巢を潰さなければならぬ。そのためには多少でも強引に行っただけが良いこともあるんだ」

「俺も知らないよ。けど、そんなところに渚を連れて行って平気な

のか？ 碌な実戦すら経験してないんだろ？」

「それはいつかつまなければならぬ。それが今というだけの話。心配する気持ちは分からなくもないが、此処は私に任せてくれないか？」

マイアはそう自信ありげに言う。何か根拠でもあるのか？

「分かった。俺は一度戻っておやつさんたちに説明してくる。マイアはサンパーニャにでも行っていてくれ」

それにしてもこいつは学校はどうしているんだ。渚だけならいざ知らず、学生として学校にいかなければならぬはずだろうに。

「分かった。頼りにしているよ、ソラ」

マイアはそう宣言するとさっさと退散していく。場を掻き乱すだけ掻き乱して後は俺に丸投げかよ。

俺も時折するからあまり非難は出来ないが、されて気分の良いものでもない。俺も自重するようにならう。

「で、あの嬢ちゃんはとうすると？」

「宣言通り自分たちでとうにかするそうです。俺も協力しますよ。効力を試したい魔術品もいくつかありますからね」

おやつさんの眉が何だかやばい事になっている。こんなことで気を損ねたくはないんだが。

「まあいい。俺も解決してくれるんなら文句はねえ。お前さんが付くのであれば多少の障害もどうにかなるだろう。」

その代わり、材料の件はちゃんと解決させてくれよ」

「ええ。そう伝えておきます。では、待たせているので俺は一足先に戻らせてもらいます。もし何かあればサンパーニヤにいますので」

話し合いは元々終わっている。後は何か質問があれば答える時間があるだけでそれもほとんどがおやつさん相手だから俺が戻っても問題ないはずだ。

俺に及ぶ質問は若手よりも中堅や工房主からの場合が多い。それも一度販売している技術に関してが多いため若手ではほとんど質問できないという話を聞いた。

同時期に鍛冶師になった人にとっては近寄りがたい存在になっているらしく他の工房に寄ったとき避けられたり緊張されたりするのが地味に傷つくが、それも仕方のないことなのかもしれない。

集まっていた全員に一応挨拶だけすると身支度を済ませサンパーニヤに戻る。

早く戻らないとまたお姉さんが萎縮している可能性が高い。もしかしたら渚も来ているかもしれない。あいつは人見知りでよく知っている相手以外には全く話しかけようともしない。

むだにでかくなった分、威圧感はそれなりにあるし急ごう。

これは一体どういうことだ？

予想通りマイアも渚もサンパーニヤに来ていた。そこまでは予想通りだ。

それはいい。お姉さんがマイアをちらちらと窺いながら緊張しているのはいつも通りだし。

だが、予想外な点がある。

何故か、お姉さんが渚に寄り添うようにというか壁にするようにマイアの視線を避けようとしている。

お姉さん自身も結構人見知りをする。少なくとも初対面の相手にくつつくような積極性はなかったはず。

そのためマイアは親の敵を見るような目でお姉さんを見ているし、それでより怯えるようにお姉さんが渚の後ろに隠れていて、渚はそれに挟まれて困惑しているようだ。

本当に、一体何があつたんだ？

「お姉さん、一度作業場に来て」

お姉さんの手を引き、奥へ入る。お姉さんらしくないというものもあるが、一度渚から遠ざけたほうが良いような気がする。

大人しく俺の手に手を引かれ付いてくるお姉さんを椅子に座らせる。

「ただいま。どうしたのさ、あれの影になんて隠れて」

「うん。お帰りなさい、ソラくん。えっとね、あの人懐かしいって言うか、安心するっていうか、何だかああしていたかったの」

ぼんやりとした表情で、いつも以上に幼くお姉さんはそういう。

「お姉さん。俺の目を見て」

首をかしげながらも言われたとおり俺の目を見るお姉さん。普段ならそれすら恥ずかしがってしなさそうなものなんだが。

お姉さんの目には特に異常は見えない。異常といっても眼球に障害があるといったことではなく、バッドステータス魅了などによる

精神汚染などの確認だが、特有の前後不覚になっ
ているような様子も見えない。

「この場に在りし力よ。我はそれを否定するもの。強き力よ、沈まれ。過ぎ行く力に、永遠の沈黙を。魔法解除デイスベル」

以前、屋敷にかかっていた魔法陣を消去した魔術をお姉さんに向かって使う。

これは精神に作用するようなものにも効くはず。それで変化がないのであれば何か別の要因だろう。

「あ、れ？ ソラくん、もう終わったの？」

魔術の発動が終わるとぼんやりとした表情から一気に醒めた、というか普段通りのお姉さんの表情に変わる。

俺の存在にも今気付いたのが演技でないのなら魔術かそれに類するような何かによって操作されていた可能性が高いということになる。

だが、渚がそんなことをする必要があるのか？ もししたのであれば一発ぶん殴ろう。

「ま、ね。客が来てるからお茶の用意してくれないかな？ 俺は対応しておくから、よろしく」

不思議そうに首を傾げているお姉さんを放っておくのも怖いが今は渚にも話を聞く必要がある。

扉を閉めなければ何かあっても対応出来るだろう。

「マイア、渚。何かあったんだ？」

「いや、私はわからない。私と顔をあわせた時点ではいつも通りだったからな。ナギサは何か心当たりがあるか？」

「俺もないよ。初めて会った人だし。ただ、話してたら何だか様子が少し変わって来たんだけど」

こいつがお姉さんと話した？ 話すこと自体おかしいとも思うが、今はそれを気にするのではなくどうしてあんなったか、か。

こいつの話術でお姉さんを籠絡したというのはまず考えられない。何か特殊なフェロモンでも出しているんだろうか？

「ソラ、考えるのは悪いが後にしてくれないか？ 今は少しでも早く準備を整えて出発したい」

「ああ。だが、本当に渚を出すのか？ というか何のモンスターが巣を作ったのかすら俺はまだ聞いていないんだが」

「ああ。パートルの集団だ。現状確認されているだけでも成体で20羽を超えるらしい」

パートルというのは子供の背ほどある大きな鷹のような鳥だ。

性格は普段は臆病で繁殖期には集団を作り巣に近づくものに関しでは襲い掛かる。

とはいえ、パートルであれば子育ての時期を過ぎればそのまま他の地域に移住する大人しい種だった気がするんだが。

「精々1月程度だろ？ それくらいなら他の場所で採取してそれが終わったらそこで採取を始めれば良いんじゃないのか？」

「ソラ、知らないのか？ パートルは子育ての時期になると周囲にある植物や動物を満足するまで狩る。成体が20羽もいるんだ、雛が平均5羽生まれてしまつたらそれだけで成体も含めて70羽、この周辺は資源が一気に消費されるんだぞ？」

俺の知っている情報とだいぶ違う。

確かに一部の討伐クエストの中にはパートルの退治や卵の回収・駆除などはあつたがどれも人里のすぐ近くで危険だからという理由だけだつたはず。

俺の記憶が間違つているのか？ それとも。

「ソラ。考えは後にして欲しいといつたばかりだつたと思うが？ すまないが、本当に時間がないんだ。仕事を頼みたい」

「あ、ああ。分かった。渚の武器でいいんだな？ おい、渚。何を使うんだ？」

「へっ？ え、あ。そうだね……」

「私たちも依頼して構わないかしら？」

その声のしたほうに向くと、いつの間にかオウラが居る。何時の間に、というよりも俺がきつと呆けていたせいだろう。

「オウラ姫？ 何故貴女が此処に？」

「私もあなたほどではありませんが、情報を集めています。ことねにも実戦を積む機会が必要。問題ないでしょう？」

にこやかに、とは言い難いが笑うオウラ。その後ろには当然の如

くことねも居る。

何というか、また面倒なことに巻き込まれそうな予感しかないんだが。

第21話 差異・Bパート。(後書き)

以前より文字数が多いという指摘を何度か受けていたため試験的に
ファイルを分割し1話の文字数を減らしてみました。

どちらがいいでしょうか？

もしこちらがいいということであれば分割の作業を行う予定です。

他評価、つつこみ等ありましたらお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5316w/>

魔法使い時々錬金術師のち鍛冶師（仮）

2011年12月12日01時11分発行